顧問
井上通泰先生
山田孝雄先生
新村出先生

正宗敦夫　編纂
校訂

古名録

自十二巻
至廿三巻

合資會社
日本古典全集刊行會壽梓

本文八
春菊

古名錄草部卷第十二目錄

花草類上

通計二十六種

古名録草部巻第十二

倭名類聚鈔ニ曰、因幡ノ國法美ノ郡大草、於保加也。榮花物語ニ曰こまくらべ　あやしきくさ木をほりうへ〇蜻蛉日記ニ曰、いとつれ〴〵にてあり、ながめになりぬれば、草どもをゐたりてあるを、おこなひのひまにほりあかたせなどする。又曰、天下のきくさをとりあつめて、めづらかなるくすだませんなどいひて〇明月記ニ曰、寛喜元年八月廿六日、伊勢ノ前司清定朝臣來談ス、本性好テ栽ニ草樹ヲ云云多ク問ニ其ノ事ヲ。

紀藩　源　伴存撰

花草類

名寄物名曰、花の色はいつもちくさにみゆれどもちればひとつも殘らざりけり〇南方紀傳ニ曰、永和四年春三月、將軍花の亭にわたまし室町殿と号す。其舘に色〳〵花の數をつくし植られける故に、時の人花の御所と申也〇吾妻鏡第二十一ニ曰、建保元年九月廿二日、將軍家令ニ逍ニ遙火取澤ノ邊ニ給フ、是依レ覽ニ草花ノ秋興ニ也。同第二十七日、安貞二年七月廿日、駿河前司義村輕服日數已過訖、於テハ今日ニ可レ有ニ入ニ御田村山庄ニ之由申ス案內ヲ。日來彼家加フ修理ヲ、令ニ新ニ造ニ御所一字ヲ、自ニ其ノ砌ニ至ニ門田ニ造ニ渡廊ヲ、草花盡シ員、殖ニ東南ノ兩庭ニ

校云。心々。所々トセル本モアリ

路海トセル本アリ是ナラム

萬葉集ノ例ハ「奈天之古」トハ書ケラズ

云云。榮花物語御賀曰、はるあきのはなのにほひぞさかりならねど、心〻のせんざいのしもがれ、山のもみぢいろをつくしたるも云云。續日本紀卷第二十八日、神護景雲元年三月己巳、
花苑司正五位上淡路眞人三船爲二兵部大輔一○寓問曰、凡草木華實莖葉一發之後歸於枯朽皆不能復生惟其子之在核者乃能生顆粒至微而天地生成之性具焉

奈泥之故（ナデシコ） 萬葉集

漢名 瞿麥 本草

今名 ナデシコ

本草綱目曰、瞿麥。釋名石竹。時珍曰、田野生スル者、花大サ如シ錢ノ、紅紫色。人家ニ栽ル者、花稍小ニシテ而嫵媚。有リ細白粉紅紫赤斑爛數色一。俗ニ呼テ爲スト洛陽花ト一

一名 奈天之古

本草和名曰、瞿麥。和名奈天之古。萬葉集卷第十七曰、宇良故非之、和賀勢能伎美波、奈泥之故我、波奈爾毛我母奈 安佐奈佐奈見牟。同卷第十八曰、比登母等能、奈泥之故宇惠之、曾能許己呂云云。奈泥之故我、花見流其等爾云云。同卷第十九曰、奈泥之故波、秋咲物乎云云雪島、巖(イハニ)爾殖有(オフル)。奈泥之故波云云

一名 那泥之古 萬葉集卷第十八曰、那泥之古我、曾乃波奈豆末爾云云

一名 奈豆之故 萬葉集卷第二十曰、比佐可多乃、安米波布里之久、奈豆之故我、伊夜波都波奈爾、故非之伎和我勢。和我夜度爾、佐家流奈豆之故、麻比波勢牟、由米波奈知流奈、伊也乎知爾左家

一名 牛麥 萬葉集卷第十八曰、詠庭中牛麥花一首、比登母等能、奈泥之故宇惠之、曾能許己呂 多禮爾見世牟等、於母比曾米家牟

一名 止古奈豆 倭名類聚鈔曰、瞿麥。和名奈天之古。一云、止古奈豆。世繼物語曰、四条大

扶桑略記延長元年十月廿三日

納言前栽つくろはせ給けるに、心もなき物、なでしこをひきすてたるを見給て「すき物を花のあたりによせざらば此常夏にねたえましやは　公任卿集にもいでたり

都古奈豆　天文写本和名鈔

奈天之己　本草類編

止己奈川　同上

奈氏之古　新撰字鏡曰、瞿麥ニ奈氏之古

瞿麥子ナデシコ　本朝鬪諍集曰、籬内瞿麥ナデシ子コ見ユル蜀江錦付ケテモ立モ

惜晩ツ、**傾ク**

常夏　紫式部集曰、秋のはじめつかた、常夏につけてたうき僧都の母、常夏の花をのみみてけふまでに秋をもしらで過にける哉。かへし。花はさはとこ夏にのみ匂ひけん人の心に秋をしらせし、八雲御抄曰、なでしこをば、とこなつといひ云云。源氏物語詩曰、常夏。瞿麥淺深籬下開

撫子　清輔奥義抄曰、鐘愛抽衆草之故撫子とはいふ。本朝麗藻曰、唐高宗之得鐘愛云云。太平記曰、連枝の鐘愛（アイシ）は多けれども。扶桑略記第廿四曰、其母沉ㇾ病殆ト及ㇷ終焉ニ、歎言我多子中、陽勝仙人尤當ニ鐘愛ニ云云。又曰、文曆二年十二月十三日太相禪門寂愛姫君十二、自廿日危急之間、又盡心力、殊鐘愛之故被悲歎。明月記曰、只一人鐘愛由被ㇾ示。又曰、鐘愛孫廣博物志曰、漢景帝爲太子時帝鐘愛　榮花物語殿上の花見曰、齋院はまたなつかしうおかしげに、らうたげににほひやかに、なでしこのはなを見るこゝちぞせさせ給へる。仙覺萬葉集註釋曰、なでしこをおとめによそへてよめる也。わがしめし野の花とは、をとめなり。よめる心は、なでしここそさきてちるとも、わがしめさしておもふをとめは、われこそぬしにてはあれ、心にまかせてちりもうせじ、といへる也。西行物語曰、年比いとをしく思ふむすめの、四になるが、ふりわけがみもかたすぎぬほどにて、よにらうたげなる有樣にて、なに心なくえんにはしりいでゝ、父のおはしますうれしさよ、などやをそく御かへりありける、君の御ゆるしなかりけるにやなどいひて、よにいとけなきなでしこのすがたにて、かりぎぬのたもとにすがりけるを。蜻蛉

瞿麥混入か

日記曰、なでしこのたねとらんとしはべりしかど、ねふなくなりにけり云云なでしこはなでおほしたる

おもひくさ 仙覺萬葉集註釋巻第十曰、おもひぐさとは瞿麥をいふと云説あり。詞林采葉抄曰、思草ノ事或云、瞿麥ヲ甲トヘ言塵集曰、瞿麥、おもひ草とも云云

石竹（トコナシコ） 萬葉集巻第十曰、詠花。見渡者、向ヒ野邊乃、石竹之、落チ巻惜毛、雨莫零行年。野邊見者、瞿麥之花、咲家里、吾待秋者、近就ラ良思母。本朝無題詩曰、源時綱。石竹、金錢、雖ニモ信美ニナリト。藤原敦光。石竹謝粧幾作レ猜。藻塩草曰、石竹。から國にありけることはいざしらず、あづまのおくにおふるいしたけ、これ俊頼歌也。あるひは石の竹との文字ありてもいへり。多はの文字あり。そもそも此歌の心は、むかしある國に、鳥田の時主と云ようしあり。わが家のうしろの山に、一の石あり。かの石せきれいありて人をなやます、仍時主くだんのいしをいる。すたはち矢たち畢。矢ぬけずして花さき畢。此花なでしこ也。花かさなりてさくと云云蔵玉にあり。明月記曰、屛風之題、儒替石竹宜歟。散木集曰、大貳長實公の白川のとのゐ所にて、歌合せられけるに、なでしこにいはひの心をよせてよめる。君が代のためしにひかんかすが野のいしのたけにも花さきにけり。江陰縣志ニ曰、石竹ハ草花也。莖如レ竹ノ

形見草 言塵集曰、形見草とは撫子也。九州ゆきの嶋に、撫子の名所なり

日暮しくさ 藻塩草曰、日暮しくさ、なでしこの異名と云云但ふしんと云云

瞿麥 出雲國風土記曰、仁多郡所在草木、瞿麥

床夏 堀河次郎百首

【集註】 本草類編曰、瞿麥。和名奈天之己。又止古奈川。立秋採實陰干。延喜式巻第三十七曰、典藥寮、毎年十二月晦日供御藥様廿五種云云瞿麥云云各四兩。諸

國進年料雜藥。伊賀國云云瞿麥各六斤。上總國瞿麥云云各三斤。下總國瞿麥六斤。出雲國瞿麥一斤六兩。備前國云云瞿麥各八斤。吉部秘訓抄曰、建久二三廿八、今日相國禪門密談花山院根元事元是彼法皇ノ御所爲ニ板棟門ニ四角植レ萩、築垣土棟、上殖ニ瞿麥ヲ云云。明月記曰、寛喜元年四月廿日、瞿麥初開。文暦二年五月廿二日、瞿麥十五日始開、仲夏如四月。榮花物語もとのしづく曰、大なごむのおまへに、なでしこいとおほくうへさせ給へり云云。同衣の珠曰、しろがねのふたの上にませゆひて、なでしこをうへさせ給へり。狹衣曰、山がつのかきほのなでしこには、をのづからめとまらぬにしもあらぬほどに野をなつかしみ、たびねし給ふわたりもあるにや。歌林四季物語曰、時日はさだめねども、くすりのかみやくゐんしなど、御さゐんのなでしこ、つちのかめにもりて、内竪してたてまつれば、いとなき宮ごたちはそこにまうでゝみたまひ、あなたこなた、あさ露にそぼちわけまよひためるも、ゆうにさながらにほひあることゝちして、つゆもやすらかにやはこぼるゝ、と見るめもおかし。東山殿御香合曰、撫子もさきたるなど、はしりいでゝぬれ〳〵おりまどふ

【形狀】大鏡曰、此花山院は風流者にこそおはしましけれ云々又なでしこのたねを、ついぢのうへにまかせ給へりければ、おもひかけず、御方にいろ〳〵に、からにしきをひきかけたるようにさきたりしなどを見給ひしは、いかにめでたく侍りしかは云々。仙覺萬葉集註釋曰、なでしこの花は、しなやかにうつくしければ。又曰、このなでしこもいろどりひらける花也。枕草紙曰、ゐにかきておとる物、なでしこ。又曰、うつくしきもの、なでしこのはな。紫式部集曰、とつなつ、庭の面に唐の錦をおる物に猶常夏の花にぞ有ける。本朝無題詩曰、賦ニ瞿麥ヲ勒。藤原通憲。瞿麥數叢色不レ同。移ニ栽此處ニ感情通。織非ニ人力ニ掛

レ織錦。染是天爲盈レ砌紅。千片赤珠應レ琢レ露。一條文繡被レ裁レ風。更無ニ殘粉ニ夜嵐底。纔有ニ啼粧ニ暮雨中。唯喜夏來花早綻。兼愁秋後艶還空。汝稱ニ撫子ニ齒猶少。宗瑕白頭公作レ翁　○しろなて　雅補装束抄　白花瞿麥也　［集註］　雅輔装束抄曰、なでしこ。おもてはすはうにほひて三。しろおもて二。うらすはう。くれなゐ。こうばい。あをきこきうすきーこき。くれなゐひとへなり。しろなて。おもてみなしろくて、うらすはう、くれなゐ、こうばい、あをきこきうすき、しろきくれなゐひとへ心ぐなり

やまとなでしこ　狹衣　［今名］　カハラナデシコ

［一名］　倭瞿麥　新撰萬葉集曰、吾而已哉、憐砥思、蛬、鳴暮景之倭瞿麥　和瞿麥　尺素往來　山となでしこ　堀河次郎百首曰、瞿麥。床夏のこれにしくはなかりけりまがきにさける山となでしこ。けさも又いざみにゆかんさゆりはに枝さしかはす山となでしこ　大和ナデシコ　塵添壒囊鈔曰、彼金源三ガ歌ニ、唐シノカラ紅ニサキニケリ我ガ日本ノ大和ナデシコ。藻塩草曰、霜さゆる朝のはらの冬枯に一はなさけるやまとなでしこ。按ニ山家集曰、かき分て折ば露こそこぼれけれあさちにまじる撫子のはなト觀ユ。即ナデシコノ野生スル證トスベシ　河原なでしこ　仙傳抄　［集註］　曾根好忠集曰、のどかにもおもはゆる哉とこ夏の久しくにほふやまとなでしこ　［形狀］

枕草紙曰、草の花はなでしこ、からのはさら也。やまとのもいとめでたし。狹衣曰、いとあつかはしげなりつるせんさいどもの、雨に心ちよげに思へる中に、やまとなでしこのしほれたるけしき、中にもらふたげなるを一枝おらせたまふて、さがのいんにまいらせたまふ云云。更級日記曰、夏はやまとなでしこのこくうすく、にしきをひけるやうになん咲たる。これは秋の末なれば見えぬ、といふに、なを所〳〵は打こぼれつゝあはれげに咲渡れり。もろこしがはらにやまとなでしこも咲けんこそなど、人〳〵おかしがる。古今榮雅抄曰　唐撫子は色〻なり、大和なでしこは皆紅梅色也

からなてしこ　榮花物語

漢名　石竹　群芳譜　今ノ世ニ花園ニ植ル　セキチク也

花史左編曰、石竹有リ二種、單瓣ノ者ヲ名ク石竹ト、千瓣ノ者ヲ名ク洛陽花ト、二種倶ニ有リ雅趣。群芳譜ニ曰ク、石竹、草品、纖細而靑翠、花有リ五色、單葉千葉又有リ剪絨、嬌艷奪レ目嫂娟動レ人。一ニ云ク千瓣ノ者ヲ名ク洛陽花ト、花中佳品也（按農圃六書曰、石竹、洛陽花二種相類、開ク亦同時、千瓣ノ者、名ニ石竹、單葉ノ者ヲ名ニ洛陽、蓋與ニ花史左編所レ説相ヒ反ス

一名　唐瞿麥　尺素往來　から撫子　公任卿集。榮花物語御裳曰、又の日大みやの御かたの女ばう、からなでしこのきぬ

集註　榮花物語たまのうてな曰、るりのつぼにからなでしこ、きちかうなどをさゝせたまへり。

枕草紙曰、草の花はなでしこ、からのはさら云云。公任卿集曰、から撫子。色ことに匂へる宿の撫子はいにしへからの種にぞあるらし。又曰、からなでしこを人〳〵よむに。しきしまや大和にあらぬ撫子の花は

むべこそよににざりけれ。歌林四季物語曰、すべてなでしこ、からめきたるもさらなり

形状 榮花物語玉の臺曰、みなみのかたには、からなでしこをさながらうへさせ給ひて、ませをゆはせ給り。こくうすく、うつろひたるほどめでたし

左岐奈（サキナ）新撰字鏡　【漢名】菊 本草　【今名】キク

五雜組曰、菊有黄華、桃華於仲春、桐華於季春、皆不言、有、而菊獨言有者、殞霜肅殺、萬木黄落、而菊獨有華也。菊色不一、而專言黄者、秋令屬金、金以黄爲正色也。又曰、黄者天地之正色也。凡香皆不以色名、而獨菊以黄花名、亦以其當搖落之候、而獨得造化之正也。然世人好奇、每以緋者墨者白者紫者爲貴、至於黄則尋常視之矣

本朝無題詩曰、何物送秋感寸腸、蕨殘菊滿砂場、餘所半變迎玄律、云蒙々霧底更含光、遲開遂作叢花弟、獨擅□稱百草王云云

【一名】百草王

加波良與毛岐 天文寫本和名鈔

加波良與毛木 倭名類聚鈔曰、菊。和名、加波良與毛木。一云、可波良於波岐。俗云、本音之重

可波良於波岐 見上注〇字鏡曰、蘜菊二上字左支奈

岐久 醫心方曰、菊。和名岐久

木久 倭名抄國郡部曰、陸奥國菊多、木久多。扶桑略記曰澄和尚傳曰、於灰中得金花器一合子大如菊花

からよもき

藻塩草曰、十二種若菜若な芽草あざみちしやしらすけ芹水蓼河藻かなつるわらび葵からよもぎ水雲芝菘小大根已上。按ニ枕草紙曰、七日のわかなを、人の六日にもてさはぎ、とりちらしなどするに、又おかしげなる菊の生たるをもてきたれば、つめどなをみゝな草こそつれなけれあまたしあれは菊もまじれり

おきな草

和歌深秘抄曰、きくをおきな草といふ人あり。八雲御抄には、おきな草は白頭草といづれも別と見えたり。八雲御抄のごとくたるべし。但彼御抄にも相違ともありて、相傳の子細有之

眞菊（マナ）

尺素往來曰、秋花は云ゝ眞菊、野菊。群芳譜曰、味甘者爲二眞菊一、苦ニ多種其ノ類有二甘菊一、一名眞菊、一名家菊、一名茶菊花正黃云云

まさり草

藻塩草曰、菊まさり草、異名也。すべらぎの万代迄にまさり草たまひく種を植し菊也。菊といはね共　言塵集曰、菊をまさり草と云一名也。菊は稍の莖より生初たると云り。本說也。又曰、菊まさり草

百夜草

藻塩草曰、名にしをふ翁が庭の百夜草花咲てこそしろたへになれ。大和國みわのさとに老翁あり、かの庭に一本きくをうへて、此おきなもてあそびけり。此きく秋冬過て、春夏までも花も葉もかはらず。所の者ふしんして、くはしくたづね聞に、曰、七月每夜菊の下露をうつわ物にうくる事百夜也。每月此花をならべ依之四季にかくれず、仍百夜草とがうすと云ゝ藏玉にあり

契菊

藻塩草曰、契菊是も異名之。昔陸奧に兄弟あるもの、世にあらわびて、弟はつくしへ行けり。たがひに名殘をおしみける時、あに庭前の菊を、一本を二にわけて、戀しからんおりは、たがひに此草を見てなぐさむべしと云けり。弟筑紫へもちて下向して、此菊をうへけり。此きく二に分しまゝに、いつもかたえばかりに花咲けるとなん、藏玉にあり

星見草 藻塩草曰、秋菊也。庭滿にさくてふ色やほしみ草まがはぬいろをまがきにぞみる。清輔が歌なり。そとして異名ならでも、ほしによせてよむ也。雲のうへにて見るきくはあまつほしとぞよめり。

藏玉 **よはひ草** 藏玉 **のこり草** 同 **秋の花** 藻塩草曰、これきくの事也と、ふるき物に有。いかゞふしん、歌のていによるべきか **金草** 藻塩草曰、東ののべ、河内國にあり。名にしおふ東のゝべのこがね草これもみつぎの數につきゝし。ふるき物にあり **をとめ花** 藻塩草曰、秋菊なり **山れ草**

同上 **長月花** 同上 **いなで草** 藻塩草曰、長月の九日にさくいなで草花はやへにて万代ぞへん **秋しくの花** 藻塩草曰、あさちふもまじる草ばも枯まで野にのこりけり秋しくの花。これふるき物にあり。ある說菊の字を秋しくとよむ。塵添壒囊抄曰、菊トヨムハ訓歟、音ナラバ訓ハイカニ。キクハ音也、訓ヲ用ヌ字也。又菊ノ訓ヲバ、アキクサノハナトヨム。サレバ東福開山聖一國師、重陽ノ佛事ノ時、名匠ノ事ナレバ大衆不ㇾ及ㇾ申、太宗侯人以下群ヲ成テ耳ヲ傾クル所ニ、アキ草ノ花ヲ北ノマガキニウヘテ、ノンド〳〵トシテ南山ヲ見ルゾトヨ、トセラレケリ。當座ノ感嘆ナヽメナラズ、後ニ想ヘバ、菊ヲ北籬ニ植ヘ優然見ニ南山一ト云古詩也ケリ。藻塩草曰、菊多關、能因歌枕ニ云、菊多とかきて、くきたとよむ。俗にはきくと云こ。倭名鈔國郡部曰、陸奥國、菊多、木久多

今案 日本書紀ニ菊理媛ノ神亦有リ白ス事一ト觀ユ。古ヨリ菊ヲ久々ト云。倭名鈔國郡部ニ、肥後國菊池久々ト云。續日本紀曰、文武天皇二年五月甲申、令下ム太宰府ニ繕ニ治大野基肄鞠智三城一。和名鈔、鞠音知。菊字亦作ㇾ匊、和名鞠利。正字通曰、鞠毬古謂之鞠。初學記鞠即毬字。今蹴鞠曰蹴毬古用

毛料結爲之今用皮。又曰、禮月令、鞠有黃華與菊同鞠常作蘜 爾雅蘜注曰、今之秋華菊、群芳譜曰、埤雅云菊本作蘜、從鞠窮也。花事至此而窮盡也。品字箋曰、鞠本與レ菊通。字鏡曰、鞠毬万利毛牟須夫。品字箋曰、毛兩手承物曰匊、鞠戲毬也。柔革爲圓囊、實以毛髮、蹴之爲戲、始實毛髮、後世以氣。延喜式第十七曰、內匠寮、凡五月六日毬子卅丸盛楊筥。駿河國風土記曰、益河郡鞠込、或丸子、或圓子トミユ。此レ菊花ハ圓ニシテ毬ニ似ル 萬葉集第十三曰、八十一隣之宮。同第八曰、許乃間立八十一。同第四曰、情八十一所念可聞、春霞證也云云ト觀ユ。此久々ハ數多ヲ云ル證也。ク、リハ此花瓣數多クメ括リタルガ如シ。萬葉集第十三曰、玉社者、緒之絕薄、八十一里喚雞、又物逢登曰云云。同第十一曰、玉ノ緒之久栗緣乍、末終、去者。不別同緒將有、片絲用、貫有玉之緒乎弱、亂哉爲南、人ノ之可知。烏玉、間開乍、貫緒、縛依、後相物。ト云、此菊ヲク、リト云ル證也。埤雅曰、龍八十一鱗具九九之數九陽也、ト觀ユ。菊花モ花葩多クメ八十一瓣ニ近ケレバ久々ト云フ明也。園太暦曰、後德大寺左府記、文治三年十一月四日、今日加茂社行幸、右大將近衞賴久爲書副相具也。平禮出衣九々利上着蘂沓如常。袖中抄曰、筭術にも九々八十一とて、八十をおほかる數のはじめにもする也。又曰、やつは陰數のきわまれば、よろづものゝ數をいふにはやへとよめり。藻塩草曰、かしは木のゆはたそむてふむらさきのと云は云云纈字をくゝるともよめば、小手革こそは必くゝるかわにてあればゝ、それをゆふといはんたよりあり 平家物語曰、こゝに三位入道の、年ごろのさぶらひに、わたなべの源三競たきくちといふ者有、ひやうもんのかりぎぬのきくとぢ大きらかにしたるに、ぢう代のきせなかひをどしのよろひきて。曾我物語曰、ちやうけんのひたゝれに、まつにふぢをぬふて、もへぎの糸にてきくとぢして。平治物語曰、纐纈源太盛安許ゾ耳ニサ、ヤキ申ケル云云。又曰、髮ハ纐纈源五ニツガレタリ。類聚雜要抄曰、四尺几帳云云又臨時ニ美麗ニ調ル時ハ、白唐綾ニ纐纈之文ヲ以テ紫糸ヲ繡。新猿樂記曰、本朝物云云纐纈紺ノ布。延喜式第一曰、齋服料。物忌一人、夾纈帛三丈五尺。同第五

料物忌二人別夾纈帛、淺綵帛各三丈トアリ

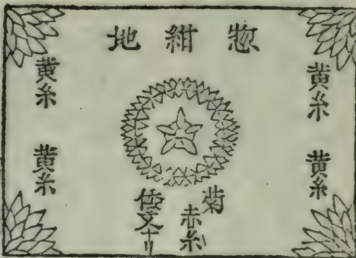
明月記建久二年五月廿四日ハ流布本ニハナシ

東宮切韻纈氏曰トアリ

曰、齋宮造備雜物。紫纈帛七尺小纈帛三丈、同第六日、齋院司、淺紫地夾纈料絹十疋云云。同第十四、纏殿祭、二ヶ月ノ纈帛一疋、一月帛減半。同第十五日、內藏寮。牧岡社夾纈帛三丈五尺、扶桑略記曰、儲ニ御輿一帷汚立三間長屋彩張纐纈。字典曰、纈說文結也。正字通纈字註曰、蘇軾詩、半面何因散纈文。明月記曰、建久二年五月廿四日、行列。笠上張紫結染。寬喜元年三月廿二日、供奉裝束、左少將資次朝臣、隨身二人。紫結染。寬喜二年七月一日、其夜裝束事、雜仕青結染。八月廿一日、供奉云云、次結染舍人。天福元年八月六日、供奉、左馬助知資、青結染狩衣、紅結染衣。革究聞考ニ、纈章目結章宗ガ入道記に、丹波目結引目結と見えし目結是也。是等みな括り染にて、其文大きなるも小さきも純色なるも雜はるもあん也。山槐記曰、治承四年四月十五日、今日賀茂祭也。撿非違使左府生大江經貞云云、下部褐返以黃絹平下縣伏輪菊閇。鎌倉年中行事曰、弓袋白練黃練菊トヂハ黑皮ヲ可用。富樫記曰、爰ニ山川參河守其日ノ裝束ハ、菊閇ノ大荒目ノ洗革ノ腹卷。明月記曰、建曆三年七月廿五日、前駈ナ云云源左衞門太夫家邦、虫襖打隔衣、手本白糸菊閇。按ニ菊閇ハ菊花閇也。人車記曰、仁平四年二月春日詣裝束、美作守家長朝臣、纈麴塵唐綾狩襖以黃糸菊花閇トミエタリ。このむらさきの大纈とあるも、むらさき色にくゝりの紋にてあらんすればたがふべからずトミユ。袖中抄曰、纈字をば字書にくゝるともよめり。又曰、纈字にゆはだくゝると云。三代實錄第十三曰、貞觀八年秋七月六日、告文曰云云、國乃麗色止有留纐纈并白綾乎捧副天奉給事乎。倭名鈔曰、夾纈。東宮切韻曰、纈。結帛爲文綵也。孫愐曰、繒之有夾花也。廣博物志曰、物原秦始皇作夾纈。字鏡曰、纈結帛以染得色也。由波太。秋齋隨筆曰、菊をくゝり花と云なり。くゝりたる花に似たり。神代卷上一の書菊理媛の神とあり。くゝり花の說備之。天子は日本を總括くゝりしめ心にて菊を用ひ給ふと云說、芝山故右衞門督廣豐卿の仰られしなり。行餘隨筆曰、菊の字元來は花の象形に預

元ノ下「帝」字アル本多シ
酣、酢ニ作ル本アリ
親王ノ

ゐものゝ。くゝりたる如くにて、菊理姫　菊田、菊多、菊問、みなくゝと訓む。宮川日記曰、外宮御衣ノキレヲ所望セシカバ云々神主ヨリ惠マル、依圖ス茲　儀式帳曰、倭文御裳一腰、須芳長二丈五尺、廣一尺五寸、腰長一丈七尺云々予謹テ按ニ、倭文ハ是吾國ノモノナリ。神宮御裝束古例ノマヽ、菊ノ文ナリ。朝家ニ菊ノ紋ヲ用ヒ玉フハ是ニヨルベシ。餘ハ倭文ニアラズ。壺井翁裝束文錦推談ニ、寛平ノ帝菊ノ詩アレバ、是ヨリ御紋ト成タルナラントノ說ハ、甚イブカシ。重テ按ニ、桐ノ御紋ハ呉錦ヨリ、菊ノ御紋ハ倭文ヨリ取玉フナルベシ。此ヲ觀レバ、菊ハ日本大古ヨリアルヿ明ッ矣



【集註】類聚國史曰、大同二年九月癸巳、幸ニ神泉苑ニ觀レ射。詔曰、九月九日者、菊花豐樂聞食日ナ在止忌避所在ニ依テ比年之間停メ止ム聞行須ク然時節止云物者、不レ可ニ虛擲一止自レ昔云來ル事モ在ル依モ此乃豐樂聞食之始賜フ。續日本後紀卷第四曰　承和二年九月辛亥、天皇御ニ紫宸殿ニ賜ニ菊酣ノ宴於侍從已上ニ。但召　非侍從、及　諸司綵衫　官人ノ堪ヘ詞藻ニ者、并ニ文章生等ヲ如レ常。同ク賦セシム秋氣搖落ストイフ云コト効ス潘元琳　之體ニ。宴訖　賜　祿ヲ。同卷第六曰、承和四年九月己巳、天皇御ニ紫宸殿ニ宴ス重陽　節ニ。命シテ文人ニ同ク賦セシム　露重ク　菊花鮮ナリト云之題ヲ。宴了賜ニ祿有レ差。同卷第七曰　承和五年九月甲子、是重陽之日也。天皇不豫ノ玉フ。停　廢ス節會ヲ。但賜ニ菊酣見參ノ親王侍從已上ニ於ニ廊下ニ賜レ祿有レ差。大和物語曰、亭子のみかど、いしやまにつねにまうで賜ひけり云々うちいでのはまに、よのつねならずめでたきかりやどもをつくりて、きくのはなのいとおもしろきをうへて、御まうけつかふまつれりけり。

下、以下脫カ　前ノ「柱下北辺內藏寮」分ハ刊本ハ「去柱貫一尺余許」トアリ　寛平八年九月　華ノ下、諸本「來」アリ

延喜式卷第三十八曰、掃部寮。九月九日菊花宴。神泉苑 殿上供二御座一、及設二參議以上座一。又幄下二侍從文人等座。北山抄曰、九月九日節會事。但當御帳之母屋左右柱、以二絳囊一盛二茱萸一、向外着之。柱下北辺、內藏寮 以金瓶插菊花 置黑漆臺机 以組結着、各置茱萸柱下北辺、內藏寮立文臺云云。又殘菊宴无茱萸。又曰、花宴事。承平五年十月十七日、有菊花曲宴、撤晝御座、立大床子、簀子鋪王卿座、召侍臣堪屬文之者、賜座於殿庭花下、以不獻詩者、令獻和歌云云。康富記曰、寶德三年九月廿九日甲子、於二祇園横大路北頰大佛之堂一有レ菊一覽了。吾妻鏡第六曰、文治二年九月九日、迎二重陽節一。藤判官代邦通獻二菊花一。則移二南縣之流一、被レ栽二北面之壺一。芬芳得レ境、艷色滿レ籬。每レ秋必可レ進二此花一之由、被レ仰二邦通一之。又結二付一紙於花枝一、御披覽之處、載二絕句詩一云云。同第十七曰、建仁元年九月九日、廣元朝臣始相二具行景一參二御所一。適迎二重陽日一、始遂二對面一。故猶前庭籬菊浮レ盃、永可レ契二萬年一者云云。同卷第三十八曰、寶治元年九月九日、依レ仰諸人獻菊、各所レ副二一首和歌一也。悉被レ植二幕府北面小庭一。江談抄曰、菅家觀二九日群臣賜二菊花一御作云云云。扶桑略記廿二曰、於レ是、女兒一人以レ書着二菊華一云、公主有下愛二念主人一之情上。故奉レ書云云。同廿三曰、延喜十三年十月十三日、殿上侍臣、各分二左右一、獻二菊和歌一、各十首。裨書曰、延喜十三年九月九日、菊花宴停止、依二諸國中一不レ堪二并風水損一也。同廿五日、天曆七年九月、初發二殘菊廣宴一。同廿九日、永承六年九月、有二重陽宴一、題、菊開二水岸一香。宇津保物語曰、俊蔭曰、うつろひたるきくにさしたり。明月記曰、嘉祿元年十月廿九日、木葉落黃 菊花悉枯。寬喜元年九月卅日、菊蘂初綻、萩花尤盛 閑庭只望之、不圖六十八年之秋、又如夢過。十月三日、菊花盛開、紅葉鮮色。十一日、只對菊蘂、短晷空暮。寬喜二年八月二日、菊花已含。九

へ本く　群

月一日、菊已開。七日、櫻葉半紅、菊蘂盛開、閑庭叢眼。九日、重陽日、菊蘂盛開 未見如此之事。廿一日、見
南庭菊花・短晷容暮花已移。寛喜三年九月廿三日、菊始開。廿五日、遙漢清明、菊花已開。辨内侍日記曰、月
あかきよ、おなじ御つぼねの菊いとおもしろきを、左衛門督實藤おりてまいらせられたる枝の、殘りまたお
りてまいらせよと、おほせごとありしかば云々おなじ比大宮大納言・万里小路の大納言・左衛門督なべてな
らずうつくしう見ゆるきくどもをまいらせて、御つぼにうへられたるを、いづれにてもことに見えむ一枝
おりてまいれとおほせごとあれば。歌林四季物語曰、てんやくのかみつかさよりの仰とて、おさめどのよ
りいろあるきぬたうべて、それにしな〴〵のくすりとゝのへ、菊をつゝみて、けふより御酒にいれておく。
大かた醍醐の御酒に似かよひたるなるべし。又曰、とのもかもんのつかさ人、みすにきくかけなどし、五月
のくす玉、あふひなどのかれのこりたるをとりかへて、すゝにしみたるをもとりすてゝ、菊にかゆるもおか
しく、から〴〵しくおほひたり云々當社もくらのつかひありて、菊たてまつりかはせらる。大かたは御あ
れ山のをたてまつる事なり。山家集曰、京極太政大臣、中納言と申けるをり、菊をおびたゞしきほどにした
てゝ、鳥羽院にまいらせ給たりける。鳥羽の南殿のひがしおもてのつぼに、所なきほどにうへさせ賜ひけ
り。榮花物語はつはな曰、なが月の九日もきのふくれて、ちよをこめたるまがきのきくも、ゆくすへはるか
にたのもしきけしきなるに。同玉村菊曰、命婦のめのと、さとよりきくにさしてまいらせたる云云。同殿
上花見曰、によふばう。きくもみぢをとりつくしたり。同晩待星曰、中宮には、ぜんさいあはせ、きくあは
せなどせさせ給て、おかしきことおほかり。桐火桶曰、紅葉ちりまがふみはしのもとに、紅顔にほひあざや

かなる雲のうへ人の、うつろひかゝれる菊をかざして、青海波まひたるとや申べき。枕草紙曰、九月九日は、あかつきがたより雨すこしふりて、菊の露もこちたくそぼち、おほひたるわたなどもいたくぬれ、うつしのかもてはやされたる。つとめてはやみにたれど、猶くもりて、やゝもすればふりおちぬべく見へたるもおかし。又曰、せちは、九月九日の菊を、あやしきすゞしのきぬにつゝみてまいらせたる、おなじはしらにゆひつけて、月比ある、くすだまとりかへてすつめる。又くすだまは、菊のおりまであるべきにやあらん云々。俊頼髄腦抄曰、まがきのきく、はつしもにおきまどはされうつろふ色。仙傳抄曰、九月菊みのたるくさ二つ、花ある草ひとつ。園太暦曰、貞和四年十一月廿四日、先院二七日なり。今日女院有御落飾事云々次御着座云々菊葉入土器居折敷。赤染右衞門集曰、きくをうへてはなさくべきほどにとをくいにしへ人を思ひいでゝ云々餘畧之紫式部日記曰、九日きくのわたを兵衞のおもとのもてきて云々。源平盛衰記卷第三十四曰、枯タル薄衰タル菊ヲ詠タリ。つれ〴〵曰、あか棚に菊もみぢなど折ちらしたる、さすがにすむ人のあればなるべし。又曰、御帳にかゝれるくす玉も、九月九日菊にとりかへらるゝといへば、さうぶは菊のおりまであるべきにこそ

〔形状〕

類聚國史曰、延暦十六年冬十月癸亥、曲宴、酒酣皇帝歌曰、已乃己呂乃、志具礼乃阿米爾、菊乃波奈、知利曾之奴倍岐、阿多良蘇乃香乎。枕草紙曰、草の花は、菊のところ〴〵うつろひたる。又曰、はしたなきもの、九月ばかり夜一よふりあかしたる雨の、けさはやみて、あさ日の花やかにさしたるに、せんざいの菊の露こぼるばかりぬれかゝりたるもいとおかし。又曰、七日のわかなを、人の六日にもてきたるを云々。又おかしげなる菊の生たるをもてきたれば云々。本朝無題詩曰、

賦ニ殘菊一。大江匡房云云。老菊尚殘抽ニ衆芳一。經國集曰、九日翫ニ菊花一篇。太上天皇云云。菊之爲ノ草兮、寒花露更芳。平家物語曰、まがきの菊のかれがれに、うつろふ色を御らんじても云々。紫式部日記曰、世におもしろき菊のねをたづねつゝ、ほりてまいる。いろ〳〵うつろひたるも、きなるが見どころあるも、さま〴〵にうへたてたるも、あさぎりのたえまに見わたしたるは、げにおいもしぞきぬべきこゝちするに。榮花物語もとのしづく曰、にようばうとく〳〵まいるべし、との給はせければ、みやつかさのくるまども四五めして、五の御かたをはじめたてまつりて、卅人のにようばう、のりこぼれて御だうへまいる。かゝりけるはれのことに、さるべきよふいあるべかりけるものをとおもへど。ありのまゝのすがたどもにてまいる。このごろのきくを、色々いみじうしたりつるなりどもなれば、ことさらにかうこそはとみえて、みだれのりてまいりぬ。同ぬのびきのたき曰、十月廿よ日云々くもりなきにはに、もみぢきくのいろ〳〵、きなるひかりもあかきひかりも、そひたらんとみへて、ところがらにほひをまし云々。頓医抄曰、菊花ノ万花ヨリモ遲クサキテ久ク榮ガコトシ

【附錄】ひともときく。むらぎく

【集註】榮花物語曰、ところ〴〵のくさせんざいうらしもがれて、いかにぞやあるに、ひともとぎくならぎくなどの、あるはさかりに、あるはうつろひたる。又はなのなきほどなればにや、けふはいとゞあひしさまさりぬべし。無名抄曰、そかきくと云は、承和のみかど一本菊をこのみてけうぜさせ給けり。たかくおほきにひろごりたる菊をまいらせん人を賞せん、と宣旨を下させ給たりければ、世中の人こぞりて、我も〳〵といどみて、家ごとに一もと菊をつくりて、まいらせけるとぞ人申

し、さて一本菊の名を承和菊と云なり。しかみさえだと云は、をのれといへる也。みさえだとは、下枝といふなり。しづえなどいふやふにしたえだと云也。これに美濃國の詞とぞ承る。そかきくとは、黄なる菊と申人もあるにや。さては、みさ枝といはん事はいかゞときこゆ。一もと菊は、木の様にたかければ、しかみさえだなどかなからむ。むら菊の、しかみさえだは心えず。其も下枝はあれど、うへのえにうづもれて見えし。又つちにつきて、うへにあらぬ枝にはおとりなむものを、たゞ黄菊といひ侍らん、きなる一もとぎくとぞいふべきを、さはいはざめり。袖中抄曰、たまのむらぎく。うつろはで庭おもしろきはつ霜におなじ色なる玉のむらぎく。顯昭云、此歌は、大嘗會主基方玉村といふ所を、義忠朝臣詠る也。されば玉村といふ所の菊を、たまのむらぎくとは讀るなり。うちまかせては、玉むらの菊とぞよむべき。この大嘗會の歌ども書たる世継の第十二巻を、玉のむら菊のまきと名付たり。是をかくは心得ずして、玉はほむる詞なり。むら菊に、むらすゝきなどのよふに心得て、近來の人よみあはれたり。ひが事と申つべし。故小松平内府重盛家の菊合にも、もゝしきの庭によせてよまれたる人侍き。又ちかく公景結構にて、小野會と申事に殘菊の題にも或人詠られたりき。共無謂事也。彼義忠は玉村といふ所をよめばこそ庭おもしろき霜に同色なるともそへ侍れ。ほむる詞にて、玉の村菊とは詠侍らじ。榮花物語曰、たまのむらぎくと云ところを。これも御びやうぶ。のりたゞ

うちはへてにはおもしろきはつしもに
おなじいろなるたまのむらぎく

くはう 黄ハクワウノ音

黄菊 延喜式　〇和漢通名也

【今名】キヾク

花鏡曰、菊以黄爲貴。群芳譜曰、大要以黄爲ルヲ上ト白次レ之。定品云、菊之黄ナル者未タ必ス皆ナ勝ニ、而遁ク于前ニ者頭ス其色ニ也。正字通曰 黄庭堅曰、菊ハ以テ黄ヲ爲ス正ト、餘皆可シ鄙ナ、漁隱叢話亦出ス此說ヲ

【一名】

きなる菊 公任卿集曰 云ときなる菊にさし給て、くちなしの色にならひて人ごとを聞共何か見えんと思ふ。仙傳抄曰、九月九日中そんに黄成菊の花を立べし。何れの花にても下草は此上にこいつ有。延喜式卷第卅七曰、典藥寮。毎年十二月晦日進藥樣云云黄菊云云各四兩

くはう菊 平家物語曰、くはう菊、しらんの野邊とぞなりにける。本朝無題詩曰 黄菊紫蘭三兩叢

そか菊 言塵集曰、そか菊。一說黄菊と云云。又曰、そか菊とは黄菊と云り。承和菊と云も黄菊同前。俊成卿說には、それ菊也。追すがひざまに見へたる菊と云云。奧儀抄曰、そか菊は黄菊也。承和の帝、萬の物きなるをめで給ひて、菊も黄なるを愛し給ひける也。されば承和菊とは、黄なるを云也。袖中抄曰、顯昭云、そかきくとは黄菊也。そかとは承和をいひなしたるなり。承和のみかど、黄なる色を好み給ひければ、黄なる色をば承和色と云。されば黄菊をばそかきくと云、やがてうるはしくそれ菊とかける本もあり。季綱往來ニ云、非レ緋ニ非レ紫ニ、猷多ニ可レ云ニ承和色トモ歟云云。又黄色は吉慶の色也。尤可レ賞レ之。見ニ黄色ニ者令ニ目ヲ明ニ者也。又醫書には不レ見之由、醫家には申せど、黄菊は良藥と申傳たり。深草帝黄菊を賞翫し給ふにても、又只惣して黄菊を好給にても承和色は無疑歟。私云、黄菊、一本菊は、もとより兩說な

り。されど、承和色といふ事あれば、黄菊といふ儀をすぐれたりとす。下枝といふ事につきて、黄菊の一本菊と云、又花の色をすて、葉の色を詠ずる儀等不レ被ニ甘心一事なり

【集註】延喜式巻第二十七日、典藥寮。諸國進年料雜藥。甲斐國、黄菊花十兩。近江國、黄菊花一斤二兩。下野國、黄菊花五兩。若狹國、黄菊花二兩。阿波國、黄菊花云云各一斤。讃岐國、黄菊花三兩。紫式部日記曰、行幸ちかくなりぬとて、とのゝうちをいよ〳〵つくりみがゝせ給ふ。世におもしろき菊のねをたづねつゝ、ほりてまいる。いろ〳〵うつろひたるも、きなるが見どころあるも、さま〴〵にうへたてたるもあさぎりのたえまに見わたしたるは、げにおいも退ぞきぬべきこゝちするに。吾妻鏡巻第三十五曰、寛元元年九月五日、將軍家入ニ御佐渡前司基綱大倉家一。云云此所素暹山庄。閑寂幽棲也。加之紅葉松交レ枝之麓。黄菊青苔帶レ露之粧、感荷非レ一。本朝無題詩曰、昨陪天闕黄菊露。注、去十二日適應勅喚詩花菊宴故云 同國雜記曰、庭に殘菊は黄なるを見てよめる。 誰がにほりうつしけん金澤の黄なる花さく菊の一もと

【附方】明月記曰、寛喜元年十月二日、面熱沃菊湯。五日、未時許面寂漸來。今日面熱、拌黄菊葉可冷由示之。十一月廿一日、朝菊湯沃面。寛喜二年正月十六日、適屬和暖、頭沃菊湯。九月廿七日、天晴陰、此間頭熱眼昏、仍沃菊湯。十二月十九日、午吹許頭沃菊湯。寛喜三年二月十九日、今日風不吹、頭沃菊湯。貞永二年正月四日、頭沃菊湯乾了。五月二日、頭沃菊湯。天福元年九月三日、頭懸菊湯。范成大菊譜曰、甘菊一名家菊、凡菊葉皆深緑而厚、惟此淡緑柔瑩、微甘、作羹泛茶、皆可也。○四條流庖丁書曰、菊ノ汁シタヽムル様、若キ菊ヲ摘テ能ス、ギ下地ヲカヘラカシテ、扨菊ノ葉ヲ入テ、シホサカシホ味ヒテ參スル時、クルミヲスリテ上ニ置テ參

スル也。春ヨリ冬ニ至迄參スル也。夏ヨリ秋冬マデハ菊花ヲ取、湯ヲ點ニテ苦味ヲ取如ク右料理ニ參スルナリ

【漢名】紅菊　藝菊志

【今名】アカキク

○すはうきく　榮花物語

藝菊志曰、陳藏器ガ云、花紫者白之變紅者紫之變也。紫所ニ以白之次ニ而紅ハ所ニ以爲ニ紫之次ニ。廣群芳譜曰、何景明汝寧宅紅菊。紅菊開ク時暮ニ云。天工開物曰、木紅色用ニ蘇木ヲ煎ジ水ニ入ル明礬棓子ヲ。雜字智燈曰、木紅用蘇木染紅者

【集註】榮花物語紫曰、きくはすはうきく、たゞをしはかるべし。本朝無題詩曰、賦殘菊大江匡房云十月在今紅玉房云云

○紫菊　本朝無題詩　和漢通名也

【集註】本朝無題詩曰、紫菊籬邊何記使ニ殿上詩合曰、携処漸期籬菊紫。玉葉集曰　延長六年十月女房常寧殿の御まへに菊うへける時よみ侍ける。まちしりの子。おく霜に色はみえねど菊の花こむらさきにもなりにける哉

白菊　續日本後紀　和漢通名也

【今名】シラキク

【一名】しらきく　榮花物語

【集註】續日本後紀卷第十八曰、嘉祥元年九月乙丑、重陽節也。天皇御ニ紫宸殿ニ宴ス于公卿及ニ文人ニ如ν常ノ。是日、同ク賦ニ雨洗ニフ白菊ヲ以テ應ν製。宴訖賜ν祿ツ。歌林四季物語曰、をきまどはせる菊のまがきの霜の、それかあ

群芳譜曰、凡黃白ノ二色ハ皆可入。藥定品云、黃者中色也。其次ハ莫ν若ニ白ニ。正字通曰、白菊花ハ稍大味不ニ甚ダ甘ツ

ちぬかど、よし野の里もこゝろにゆきあさりぬべし。榮花物語くものふるまひ曰、いろ〳〵にうつろひたるきくの中を、おしわけて、おきまどはせるしらぎくのそでのみえたるもおかし。源平盛衰記卷第十一曰、庭ノ白菊色ソヘテ（史正志菊譜曰、盛開之後黄者轉白而白色者漸轉紅。）吾妻鏡卷第七曰、文治二年九月九日、比企尼家南庭。白菊開數。於外、未有此事、仍今日迎重陽、二品并御臺所渡御云云。明衡往來曰、白菊戴霜憔悴。明月記曰、嘉祿三年九月十七日、短晷徒暮、菊花白漸鬨

○八重の白菊 山家集 【漢名】倭菊 花史左編 【今名】吹上ノ白菊 同名アリ。花史左編曰、新羅一名玉梅、一名倭菊、出海外國中、開以九月末、千葉純白長短相次、而花葉尖薄鮮明瑩徹若瓊瑤然、花始開時、中有青黃細葉、如花蕊之狀、盛開之後細葉舒展遁始見其蕊焉 枝正紫色、葉青支股甚小 【集註】山家集曰、いく秋に我あひぬらん長月のこゝぬかにつむ八重の白菊。公任卿集曰、中務の宮にやへぎく植給ふてふみつくりあそびし給ひける。後拾遺、おしなべてひらくるきくはやへ〳〵の花のしもにぞ見え渡りける

野菊 尺素往來 【今名】リウノウギク

【集註】尺素往來曰、秋花者云野菊。同國雜記曰、九月九日、野を分つくして、山にいたりけるに、菊いとおもしろく咲て感緒きわまりなし

寒菊

漢塩草　和漢通名也

群芳譜曰、至若菊之名、雖有春菊、夏菊、秋菊、寒菊之異、當以開于秋冬者爲貴、開于夏者爲次。廣群芳譜曰、次頭李子長、寒菊、四尺霜莖一寸葩。幽香何只暗浮了。借令歲晚無人見云云。證類本草漏蘆註、圖經曰、秦州者花似單葉寒菊紫色

【一名】初見草　漢塩草曰、初見草、冬菊也。時雨ふる庭にけふはつ見草に說々有、或は寒菊、又は雪とも云り。夜の程に萩の立枝や初見草もとみし秋の色ものこらず。是は寒菊と聞えたり。頼政歌也。藏玉にあり。大和本草曰、又冬菊ハ寒菊ト云

霜匊　尺素往來曰、冬花者霜匊。廣群芳譜曰激金吳憶看霜菊艷

霜見草　漢塩草曰、霜見草これも冬菊也。いく代へし松の木かげの霜見草うへける時をたれもしらねば。藏玉

秋無草　漢塩草曰、秋無草、ふゆぎくなり。花ちりてその名ばかりに秋無草かたみにおける今朝の露たま。藏玉

かた見草　漢塩草曰、めかれせずいつも見まくのかた見草なれしも秋とおもふなごりに。此きくは奧州に新妻里にあり。因緣無常なり。新妻といふ物がたりにあり。なりひら作也。藏玉の秋の部にいる也。しかるに云、是はきくと云につきて、秋の部に被入歟。かの物語には、十月中五日比とあり。然れば多のきくかと云々

○夏匊　尺素往來

【漢名】五月菊　范成大菊譜

【今名】ナツギク　范成大菊譜曰、五月

菊。花心極大ニノ鬚皆中空シ攢テ成ス匾毬子ヲ紅白單葉繞承之每枝只一花徑二寸夏中開 集註 尺素往來曰、夏花者云々夏菊

○春菊 尺素往來 和漢通名也。即本草所ノ載茼蒿リ 今名 シユンキク 花史左編曰、春菊蒿菜是也三月末開花頭大及二寸金彩鮮明不減于菊東嶽社會人取以粧花擔花籃即此物也。蘂菊志曰、蒿菊即春時蒿菜花也。色黄ニノ有レ心大亦ノ如レ菊 集註 尺素往來曰、春花者云々春菊

加良阿布比 本草和名 漢名 蜀葵 本草 今名 ハナアフヒ

花鏡曰、蜀葵ハ陽艸也、一名戎葵、一名衛足葵。言ハ其傾ケ葉ヲ向ヒ日不ルヲ令レ照サ其根ヲ也。來ル自リ西蜀ハ今皆有レ之、葉似テ桐ニ大ニノ而尖ル、花似テ木槿ニ而大ナリ。從ツ根至テ頂ニ次第開出、單瓣者ハ多シ、若千葉五心重臺剪絨鋸口者ノ雖モ有而難レ得

一名 からあふひ 枕草紙 加良安於伊 本草類編 からほひ 藻塩草曰、からほひといへり。からあふひ也 唐葵 本草類編曰、補骨脂似タリ唐葵形ニ 加良保比 新撰字鏡曰、蔄古賢反莪葵。加良保比ノ爾雅曰、蔄戎葵、註今ノ蜀葵也。似テ葵ニ如シ木槿華ノ、疏蔄、一名戎葵

今案 都記ニ承曆四年七月廿八日云　云次左相撲十五人出列退入了、次右相撲出列十七人如左、次上卿隨御氣色仰云、某進畫一番二番云々三番四番五番云々 左右出來付蘂花葵花ト云。江家次第ニ靑葵華着瓠華

トアレバ、蘠花ハ葵花ノ誤也。正字通蘠字注云、又賄韻音髓草華轉貌通作蘠。然則蘠花ハ只花ヲ着ルト云ル也

集註　江家次第曰、相撲召仰云云次一番、左先出ツ、着ニ葵華ヲ取ニ劒衣ヲ置ニ北闈座ニ、進立ニ櫻樹下ニ、次右出着ニ瓠華ニ云云テ勝方葵瓠笙華並劒衣等、稱ニ旨物ニ令レ具ニ於次番ニ、葵瓠華落ル時ハ雖ニ勝方ニ風吹入ニ於階下ニ者不レ取レ之、不ニ吹入ニ時、相撲長一人進テ取レ之、最手不レ依ニ前番勝負ニ付レ華、並執ニ劒衣ニ出。裏書云、葵瓠造華也。宣胤卿記曰、長享二年二月廿八日、唐葵種可堀進之由從內裏被仰下、則進上了

正誤　童蒙抄曰、からあふひは向日葵とて、日の影にかたぶく也。此向フテレ日ニ傾ルレ葉ヲ葵ヲ以テ丈菊ノ向日葵ト一物トス誤也。本草和名曰　蜀葵、一名戎葵、一名荋、音堅、花紅紫色、葉如葵云云和名加良阿布比トミユレバ、加良阿布比ハ蜀葵ナルコ明也。本朝麗藻曰、仲妹釋奠、賦ニ万國咸寧ヲ。掛解相公云云葵遙向レ日左言心云云仲妹釋奠、聽レ講ニ古文孝經ヲ。同賦ニ天下和平ヲ。源爲憲云云葵藿斜抽向レ日心。枕草紙に、からあふひは、日かげにしたがひてかたぶくらん。蓮集良材云、葵ハ日ヲオソル、花也。葉ヲ日ノメグル方ニカタブケテ、本ヲカクスト也。百詠ノ詩ニ、葵ノ日カゲニカタブクガ如ク、我モ君ニ頭ヲカウヘ傾カタブケテ朝夕アリユフ仕ヘントヌ云詩アリ。俊成哥ニ、葵草日かげになびく心あれば天照アミテル神も哀かくらん。葵ノ日ニ傾ク如ク、我モ神ト君トニ心ヲ傾クルヲ、天照大神モアハレミ給ラント云也。左傳云　鮑莊之智不レ如レ葵シカ、葵ハ猶能衞マモルニ其足ニ云云心ハ其比鮑莊罪ツミヲナスコアリテ足ヲ刖キラル、然レバ葵ニハオトレリ、葵ハ以レ葉ヲ其モトヲカクシテ用心スル故ニ无ソ難云云。群芳譜曰、葵從癸能自衞其足、又名衞足。選詩補注曰、葵菜名常傾葉向日。太平御覽曰、葵葉向日以蔽其根。韻典折疑曰、葵能衞足。左傳仲尼曰、鮑莊子之知不レ如レ葵、葵能衞其足。杜元凱註、

葵傾葉向日以蔽其根云ニ 小草偏多智。應看向日葵。傾心原自愛。衛足幾曾虧。枝帶丹華動。葉隨碧影移トミユレバ、向日葵ハ花赤クシテ蜀葵タル明證、黄花ノ向日葵丈菊ヲ以テからあふひトスルハ誤也」

【形狀】 枕草紙曰、からあふひはとりわきて見えねど、日のかげにしたがひてかたぶくらんぞ、なべての草木の心とも覺えでおかしき。本草類編曰、蜀葵。和加良安於伊、花有五白毛之朋干

【今案】 萬葉集第十六曰、成棗、寸三二粟嗣、延田葛乃、後毛將相跡。葵花咲。蜀葵ハ入梅ノ頃本ヨリ花開テ、稍ニ咲登リ、再ビ本ニ戻リ花開テ、又末ニ咲登レバ出梅也。後毛將相葵花咲ト云此也。和漢香之記曰、夏にあふひ草、下ゑより花咲のぼりて、末に花をのこし侍るは、香のけぶりのたつにひとし。萬葉集第十七曰、阿里佐利底、能知毛相牟等、於母比許曾、都由能伊乃知母、都藝都追和多禮。同第十二曰、戀々而、後裳將相常、名草漏云云。

在リ有リ而、後毛將相登、言耳乎

衣也美久佐 本草和名

【漢名】 龍膽 本草

【今名】 リンタウ

證類本草ニ曰、圖經曰 龍膽。苗高尺餘 四月生レス葉ヲ、而細莖如ニシ小竹ノ、枝ハ七月開レ花ヲ、如ニク牽牛花ノ作ニシ鈴鐸形ヲ青碧色

【一名】 衣夜美久佐 倭名類聚鈔曰、龍膽。和名 衣夜美久佐、一云迩加奈

迩加奈 見上

尒加奈 天文寫本和名抄、本草和名曰、龍膽、和名衣也美久佐、一曰尒加奈

太豆乃伊久佐 新撰字鏡曰、

大系本ハ諸本ニヨリテ「う」ニ改ム

龍膽。太豆乃伊久佐、又云山比古奈　山比古奈 見上　恵也美久佐 本草類編　りんたう 源氏物語　りうたん 榮花物語ぬのびてのたき曰、りうたんのからぎぬ。古今集物名曰、りうたんのはな 友則 わがやどの花ふみしだくとりうたむのはなければやここにしもくる。言塵集曰、りうたんの花。塵添壒嚢抄曰、和語ニ字ノ音ヲ用ル草ノ名龍膽（リウタン）。現存和歌六帖曰、りうたん　りんたん 榮花物語根合曰、一日は紅梅にりうだんのうちたる、りんたんにこうばいのうちたるなどなり　利ンタウ 本草類編

くたに 拾遺集　思草 詞林良材集曰、小花がもとのおもひぐさ事、小花にまじりさく花は、定家卿は、龍膽の花の霜がれにのこれるをいふといへり。詞林采葉抄曰、家ニハリンタウヲ思草ト被仰之上者可信用之不可餘義。藻塩草曰、龍膽、おもひぐさ。たゞし一説に、なでしこをもいふとも。言塵集曰、思草とは説々有、一には紫宗云々一には尾花と云々又は月草と云々通具卿説也。但尾花が本の思草と云は、りんだう也。師説如此。りんだうをば和字にりうたんと書也。和歌深秘抄曰、おもひ草の事、八雲御抄には月草といへり。但爲家卿千首の題に寄月草戀、寄思草戀とある時は更に別と見ゆ。先年褒貶の時も種々沙汰あり。おもひ草は茅草也。尾花がもとの思ひ草とよめるも此事なり。花咲べからず。釈尊獅子の座に書も此草なり。何事も諸願成就の草といへり。後成恩寺殿歌林良材といふ物に、千草とあそばしたりもし相違歟。いかにも〳〵秘せらるべき事第一の相傳也。思草葉末に結ぶ白露のたま〳〵きては手にもたまらず。俊頼の歌也。これも此茅草と心得べし　多都の伊久

渤使ハ雲州本渤海使ニ作ル

佐 藻塩草曰、龍膽、和名に多都の伊久佐

集註 本草類編曰、龍膽。和惠也美久佐。又利ンダウ。又美加奈。二八十一十二月採根陰干。延喜式卷第三十七曰、典藥寮。臘月御藥、龍膽一兩。遣諸蕃使。渤使云々龍膽各一斤。諸國進年料雜藥。山城國、龍膽云々各五斤。大和國、龍膽三斤。伊勢國、龍膽二斤四兩。尾張國、龍膽八斤。常陸國、龍膽五斤十四兩。近江國 龍膽四斤二兩 美濃國 龍膽云々各十斤。若狹國、龍膽云々各一斤。丹波國 龍膽云々各七斤。丹後國 龍膽一斗三升。出雲國 龍膽一斤。播磨國、龍膽云々各八斤。美作國、龍膽云々各三斤。備前國 龍膽云々各二斤。出雲國風土記曰、神門郡所在草木龍膽。源氏物語野分曰、とりわきうへ給ふりんだう、あさがほのはひまじれるませにみなちりみだれたるを、とかうたきいでたづぬるなるべし。榮花物語鷹の後曰、にようばうりんたう、きく、もみぢなり。ひごとにかへつゝれいのわかき人はをとらじと、いどみさゝぞきたれど、おなじことのやうなればとゞめつ。散木集曰、りんだうといふ花のかれのにのこりたるに云々。狹衣曰、あるにもあらぬ中にも、おばなのもとの思ひぐさは、なをよすがとおぼさるゝを

形狀 枕草紙曰、りんだうは、枝さしなどとむつかしげなれど、こと花みな霜がれはてたるに、いと花やかなる色あひにてさし出たる、いとおかし。源氏物語あふひ曰、かれたる下草の中に、りんだう、なでしこのさきいでたるをおらせ給ふて。同夕霧曰、かれたるくさの下より、りんだうの我ひとりのみ心ながらはひいでゝ、露けく見ゆるなど皆れるのこの比の事なれど、おりから所からにや、いとたへがたきほとの物がなしき也。狹衣曰、いろ〳〵のもみぢかさねのうへに、くれないのうちたるが色もつやもなべてならずこぼる計なるに、りんだうのをり

ものゝ御さしぬきの、枝さし花のにほひ、たゞいまおりて見るよふに、をりうかされたる、めもかゞやくばかり見ゆるは

附方　頓醫抄曰、寸白治方、リンダウノ根ヲ細ニ切テ、三兩ヲ水二升ニ入テ煎ノ、半分ニナシテ空腹ニ可服

かにひ　枕草紙　漢名　剪夏羅　群芳譜　今名　ガンピ。

草花譜曰、花有五種、春夏秋冬以時名也。春夏二羅色黃紅不佳、獨秋冬紅深色美也

一名　鵝尾花　尺素往來曰、春花渚鵝尾花　厂皮　明月記曰、寬喜二年三月鵝躑厂皮等開

形狀　枕草紙曰、草の花は、かにひの花、色はこからねど、藤の花にいとよく似て、はると秋とさく、おかし

今案　東雅曰、藤ノフチ。トハ、フシト云語ノ轉ナリ。大和本草曰、フシ剪春羅剪秋羅ノ別種ナリ。葉剪秋羅ニ似タリ。葉ハ缺刻ナシ。每節ヨリ小枝出テ花サク。剪春羅ニマサレリ。赤フシ、白フシアリ。葉ハ同シ。花壇綱目曰、黑附子花赤色也。咲比六月末ヨリ七月中マデ、白附子花白色也。咲比まへに同。薄色附花赤薄色也。咲比まへに同。秡白附花白色也。咲比七月。按附子ト書ハ誤也。地錦抄曰、がんひのるひ、黑節花くれたい花形より草の節くろきゆへくろふしといふ。櫻節花さくら色なる故櫻ふしといふ。是を世間にて白ふしといふ。拔節花雪白にて、らく\／＼といふほど白し、しかもくろふしよりはやく咲。紫節うす紫、枕草紙にかにひの花、藤の花に似るト云此也。

花史左編曰、秋羅與春羅相似、而葉且尖、深紅色、瓣分數岐、爲剪刀狀、其色勝於春羅、觀此則枕草紙ニ、春と秋とにさくト云ハ、一類別種ニシテ剪夏羅ト剪秋羅トヲ云ル也。更級日記、もろこしなどにも、むかしより春秌のさだめはえし侍らざなるを。明月記曰、寒暑之迴轉於末代只有夏冬無春秋。壒囊抄巻第十五曰、夫一年ヲ四季ニ分ツト云ヘドモ、誠ハ春秋ノ二季也。夏ハ春ノ餘リ、冬ハ秋ノ餘也。サレバ晝夜ノ長短ヲ云モ、極長ハ夏ニアレ共、春ノ日長シト云。極長ハ冬ニアレ共、秋夜長シト云也。左傳ニモ二季ニ分カ故ニ、春秋ノ名アリト云云。延喜式内膳司。漬年料雜菜云云。右漬春菜料云云 右漬秋菜料トミエタリ。古ハガンピマツモトノ分チナク、夏開花モノヲ通テカニビト云リ。源氏物語薄雲曰、夕日花やかにさして、山ぎはの木ずへあらはなるに、雲のうすくわたれる、かにひ色なるを、なにとも御めとゞまらぬところなれど、いと物あはれにおぼさる。萬葉集第十四曰、由布佐禮婆、美夜麻乎左良奴、爾努具母能 高倉院嚴嶋御幸記曰、いる日のそらにくれないをあらひて、むかひなるしまがくれなる山のこだちども、ゑにかきたる心地するに。海道記曰、千雲夕陽をあらひて紅藍にそむ。ト觀ユレバ、カニビ色ハ紅ナルコト明白也。拾遺集曰、物名。かにびの花。わたつ海のおきなかにひのはなれでゝ、もゆと見ゆるはあまのいさりか。トミエタリ

仙翁花 文明寫本下學集

漢名 剪秋羅 群芳譜　今名 センノウ

群芳譜曰、剪秋羅。色深紅、花瓣分數岐、尖峭可愛、八月間開

一名 せんをうけ 仙傳抄○下學集曰、仙翁花。嵯峨ノ仙翁寺始テ出ス此花ヲ、故ニ云仙翁花ト 仙翁

紅梅草　五鳳集

藻塩草曰、仙翁花。あきの野の紅梅草の花みれば春の心をまかせつるかな。仙翁花の異名

集註　殿中申次記曰、七月六日、仙翁花一荷云々七日仙翁花一箇云々。仙傳抄曰、七月七日のしんに仙翁花。きゝやう、これは事によりきらふなり。七月仙翁花草。つつみなきくさ二つ、是はしんに不立ときなり。たゞしせんおうけをば、三具足の第一にもちゆる也。二しんといふ事あり、花びんの筒ふとくして、くちひろきに、菊、かきつばた、仙翁花などのよふなるもの、一本たつればよわく見へけるとき、しん二本ならべてたつるなり。尺素往來曰、秋花者仙翁花。世諺問答曰、七夕ニ仙翁花ヲ人ニヲクル事ハ何ノイワレゾヤ。答、七月七日ヲ乞巧奠ト云テ、二星ヲマツリ香花ヲソナフルヨシ、イニシヘヨリ甲侍タリ。シカレバケフ花ヲ人ニモヲクルニヤ。仙翁花ハ嵯峨ノ仙翁寺ヨリハジメテ出シユヘニ名トセリト云リ。マコトニ唐ノ書ニハミヘザルニヤ

形狀　五鳳集曰、吾邦有一種奇花、毎歳以六七月着紅、謂之仙翁。傳自嵯峨仙翁寺所出也。大唐諸文之中論花甚夥、未聞有此名異哉一簇、仙翁寺裡霞炎天最宜、吐奇葩大唐四百餘州濶未識秋風有此花

波疑(バギ)　萬葉集　**漢名**　胡枝子　救荒本草　**今名**　ハギ

救荒本草曰、胡枝子。俗名隨軍茶、生平澤中、有二種、葉形有大小、大葉者類黒豆、小葉者莖類蓍草、葉似苜蓿葉而長大、花色有紫白、結實如粟粒大、氣味與槐相類、性溫

校云。卷廿ノ例以下ハ「波疑」ノ例ナリ

一名 芳宜 續日本後紀 鹿鳴草 江家次第卷第八曰、相撲召仰云、常世與時弘決時、常世負時弘、不堪居於鹿鳴草下、是其證也云云經世與時弘決之時、先於府取持、後、度經世負時弘、不堪決之、作負咲居於鹿鳴草中云云。本朝無題詩曰、甑鹿鳴草。大江佐國。云云鹿鳴草是足憐看云云

波義 萬葉集卷第十九曰、吾屋戸能。波義。同卷第二十曰、可里曾奈久奈流、多加麻刀能、波疑乃之多婆波。毛美知安倍牟可聞。安伎能野爾、都由於弊流波疑乎、多乎良受。云云安伎野波疑波良。和我世故我、夜度奈流波疑乃、波奈佐可牟、安伎能由布弊波、和禮乎之努波世。秋風乃、須惠布伎奈婢久 波疑能花、登毛爾加射左受 安比加和可禮牟。同卷第十五曰、秋野乎、爾保波須波疑波、佐家禮杼母云云

芽子 萬葉集卷第七曰、咲有芽子者。同卷第八曰、一村芽乎云云。芽子乃下葉者、黄變可毛云云。吾屋前乃、芽子花咲有云云。秋之芽子開、夕影爾云云。殖之芽子爾也云云。同卷第十曰、芽子花散云云。此芽子原爾云云。妻問芽子之散久惜裳云云。荒爭芽子之云云。芽子花見爾云云。咲野之芽子爾云云。芽子花落卷惜三云云。芽子之若末長云云。芽子乎秋、云云。屋前之早芽子云云。咲芽子云云。芽子、花咲云云。芽子花今哉散濫云云。芽子之花曾毛云云。芽子落、者云云。殖之芽子云云。鴈來芽子者散跡云云。秋野之芽子也云云。芽子之遊將爲云云。芽子之花、令散白露云云。芽子乃下葉者云云。芽子之下葉者色付來云云。秋之芽子原云云。插頭之芽子爾云云。芽子之花開乃乎再入緒云云。芽子花咲有野邊云云。芽子見公者云云。芽子花咲有乎見者云云。同卷第十三曰、艷芽子乎云云。同卷第十七曰、芽子花爾保弊流屋戸乎。同卷第十九曰、秋附婆、芽子開爾保布云云。吾屋戸之芽

子開爾家理云云。君之家爾、殖有芽子之始花乎。餘睿之　按ニ芽子ハ狼牙ニノミツモト也。證類本草曰、牙子、一名狼牙。圖經曰、牙子即チ狼牙子苗似蛇苺ニ而厚大深綠色、根黑若獸之齒牙故以名之

秋芽子　萬葉集卷第二曰、高圓之野邊秋芽子。同卷第七曰、秋芽子者云云。屋前之秋芽子。同卷第八曰、娘部思秋芽子交リ云云。秋芽子折禮云云。秋芽子者云云。白露乃、置有秋芽子云云。棹牡鹿之來立鳴野之秋芽子渚云云。秋芽子乃枝毛十尾二云云。秋野爾開流秋芽子云云。棹牡鹿之朝立野邊乃秋芽子爾云云。秋芽子乃散過鷄類云云。妻戀爾鹿鳴山邊之秋芽子者云云。高圓之野邊乃秋芽子比日ノ云云。秋芽子之上爾置有白露乃云云。秋芽子師弩藝鳴鹿毛云云。秋芽子爾置キ有ル露乃云云。同卷第九曰、三垣乃山爾、秋芽子之云云。秋芽子見都津云云。秋芽子乎妻問鹿許曾云云。同卷第十曰、秋芽子咲リ云云。野邊乃秋芽子、時シ有者云云。此秋芽子者云云。殖生有秋芽子乎云云。宿之秋芽子花咲爾家里。秋芽子ニ戀不盡跡云云。野邊之秋芽子、散卷惜裳云云。秋芽子者枝毛思美三荷花開二家里。秋芽子者、於爲不相常云云。秋芽子凌キ云云。秋芽子之戀裳不盡者云云。秋芽子之、散去見レハ云云。秋芽子之散過去者云云。秋芽子之咲ケ有ル野邊者云云。秋芽子之開有野邊ニ云云。秋芽子之枝毛十尾丹云云。秋芽子之下葉乃黃葉云云。秋芽子之、太葉之黃葉云云。秋芽子乃下葉赤云云。秋芽子之開散野邊之云云。餘睿之○按ニ秋芽子ハ左和良妣、左由理ノ例

秋芽　萬葉集卷第二曰、秋芽之云云。同卷第八曰、秋芽者可咲有良之云云。秋芽之落乃亂爾云云。吾岳之秋芽花云云。同卷第十曰、率爾、今毛欲見、秋芽之、四遂二將有、妹カ之光儀乎。餘睿之

冷芽子　萬葉集卷第十曰、冷芽子丹、置ル白露、朝朝、珠斗曾見流、置ル白露

白芽

子 萬葉集卷第十曰、吾等待之、白芽子開奴、今谷毛、爾賓比爾往奈、越方人邇() 按ニ白芽子ハ下ニ出ルしらはぎニ非ズ

安伎波疑 萬葉集卷第二十曰、乎美奈弊之 安伎波疑之努藝 左乎之可能云々。同卷第十五曰、安伎波疑須須伎、知里爾家武可聞云々。安伎波疑能、知真敝流野邊乃云々。安伎波疑爾、爾保敝流和我母云々

芽 萬葉集卷第六曰、芽乃枝乎 同卷第八曰、百濟野乃芽古枝爾云々。芽開 禮也云々。芽之花云々。餘琴之

波木 倭名類聚鈔曰、鹿鳴草。爾雅註云、萩、名蕭。和名波木。今案牧名用萩字萩倉是也。辨色立成、新撰萬葉集等用芽字。唐韻萃音胡誤反草名也。國史用萱宜草三字。楊氏漢語抄又用鹿鳴草三字。並本文未詳。按蕭ハカハラボウコ也

しかのつま 藻塩草曰、しかのつま、はぎ也。しかなく草といへり。花嫡とも云々

しかなく草 見上

玉見草 藻塩草曰、萩。玉見草異名也。藏玉にあり

月見草 藻塩草曰、萩。月見草、これも異名也

野守草 同上

庭見草 同上。かきねにはあさがほかゝる庭見草おりに立よる人のうとさよ。藏玉

秋遲草 同上。秋ち草はや花さける此野にはともしの鹿をからぬばかりぞ。人丸。藏玉

古枝草 同上。みやぎのゝ露も色あるふるえ草ことしの秋も花は咲けり。西行。仍このはぎみやぎのにありと云々藏玉

マ萩 塵添壒囊抄曰。凢ソ、マ文字有物多シ。マ萩 萩。字典ニ萩、說文蕭也。爾雅、蕭萩ト云ハ河原ホウコグサ也。字典ニ、左傳伐ニ雍門之萩、又通楸木名。管子註、萩木鬱臭以辟毒氣ト云ハ即楸ニメヒサキ也。清 周煌ガ琉球國志略ニ、萩、枝條纖弱ニシテ如レ柳、小葉如レ榆ノ、亦作二品ニ、

單刊本「草」ニ作ル

九月開ㇾ花、花間遍滿、紫艶ニシテ如ニ匾豆花ノ形一ト云ハ、日本ノ誤ヲ受傳エタルモノ也

集註

續日本後紀卷第三曰、承和元年八月庚寅、上內ニ宴ス清涼殿ニ、号曰ニ芳宜華讌ニ、賜ニ近習以下至ニ近衞將監ニ祿ニ有ㇾ差。同卷第十四曰、承和十一年八月辛巳朔　天皇御ニ紫宸殿ニ、覽ニ芳宜花宴ニ、老臣皆有ニ復古之歎ニ。日暮賜ニ五位已上衣被ニ有ㇾ差。本朝無題詩曰、苑裡移栽蘭與萩。和泉國風土記曰、日根郡所在草木萩薄。明月記曰、正治二年七月廿七日、未時許出京、入嵯峨、萩花盛之由、木守丸告之、仍來臨。嘉祿三年七月廿八日、晝暑熱猶過午、日來萩花開後、未遇如此事。八月廿一日、適屬秋氣之后、單花已凋零、萩薄之盛也。寛喜元年八月六日、嵯峨邊萩皆盛開云云、此邊僅開始。十七日、此三四日萩花盛開。寛喜二年七月七日、自朔比萩花已綻、昨今漸盛。七月上旬未見事也。十五日、昨今萩花盛開。寛喜三年七月廿五日、萩花漸開、暑氣猶盛。寛喜三年九月一日、萩花盛出。源氏物語ハ木々曰、おらばおちぬべき萩の露。同末摘花曰、萩のはもさりぬべき風のたよりある時はおどろかし給ふ。同野分曰、もとあらのこ萩、はしたなくまちえたる風のけしきなり。同若菜曰、いとしろくかれたる萩の云と。同横笛曰、かの宮の萩のえんせられける日。同にほふみや曰、さをしかのつまにすめる萩の露にも云と。袋草紙曰、先年或女房許ニ、小貝卅一ニ歌ヲ一文字宛カキテ或人送之、女房予ニ可ニ讀解ニ之由ヲ示ス、凡不ㇾ及ㇾ力、仍折ニ萩枝ニ、其葉ニ無ニ其事ニ字ヲ卅一葉毎書テ遣ㇾ之。件所ニ又不ㇾ得ㇾ讀ヲ、經ニ兩三日ニ之間、萩葉カレテ字不ㇾ見、爲ニ遺恨ニ之云云一說也。年中行事和歌曰、はぎの戸と申は、はぎをうへられたればかように名付られたるにゃ。せいりようでんの北のかた、二まのまへのほどにて侍る也。禁秘抄曰、萩戶不ㇾ限ㇾ萩色々秋　華皆被ㇾ栽ㇾ之。後醍醐天皇年中行事曰、試樂云

〻萩の戸の東の程に陪從ともなひてたつ云〻。太平記卷第二十一曰、或八月モウツロフト本アラノ小萩。桐火桶曰、はぎいとさかりなる庭のおもに、露のひかりもことはりしるくおきわたして。枕草紙曰、出ぬる人もいつののほとにか見えて萩の露ながらあるにつけて云〻。催馬樂曰、ころもがへせんや、さきんだちや、わがきぬは野原しのはらはぎの花ずりや云〻。愚案抄曰、一說はぎの葉のすりとあり。春夏は葉のすりとうたひ、秋冬は花すりとうたふといへり。狹衣曰、びわをかきよせて、衣がへをひとわたりおとして、はきが花ずりとうたひすさびて。又曰、中將の扇に、秋の野をかきて、風いたうふかせたるに、もとあらの小はぎの露おもげなるを、しがらみふするさをしかのけしきもおかしうかきなしたるを見給ひて云〻。又曰、野べの小はぎも扨いかゞたのみ聞えて。平家物語卷第十曰、はぎの下露もいよ〳〵しげく。河越記曰、もとあらの小萩は鹿の音をこめ。歌林四季物語曰、えだたをやかに咲たる萩のまゝ、野邊のけしき、朝露にぬれて、なよ〳〵とひとりごちふしたる、わけまとふも、御かさ申せと、たれになどおかしくおほひたり。俊頼髓腦抄曰、はぎの花露にすがゝれて、にはもせにおれふし。赤染衛門集曰、秋雨のいみじくふる日、はぎの花につけて人にやりし。つれ〴〵曰、萩の下葉色づく程。回國雜記曰、野外の萩やう〳〵ちりがたに見えければ。東路のつと曰、むさし野の萩薄の中を過行がてに。弁內侍日記曰、日ごろ御所のきたむきにて、かれたる萩の枝などおり。又曰、院の御所の弁內侍こうたうの內侍のもとへ、はぎのとの萩はさきたりやとたづねられたるに、一枝おりてつかはすとて

形狀

枕草紙曰、萩はいといろふかく、えだたをやかにさきたるが、朝づゆにぬれて、なよ〳〵とひろごりふしたる、さをしかのわきてたちなら

すらんも、心ことなり。四季物語曰、錦色どる野邊の萩原も、つゞりぎぬの名殘つれなきまでむらがれゆく云々

○宮城野萩 本朝闘諍集

【集註】無名抄曰、このためなか任はてゝのぼりけるとき、みやぎのゝはぎをほりて、長櫃十二合に入てもちてのぼりければ、人あまねくきゝて、京へいりける日は、二条大路にこれを見ものにして、人おほくあつまりて、くるまなどもあまたたてたりけりとぞ。同國雑記曰、宮城野の萩とて人のみせければ

【形状】源氏物語あづまや曰、兵部卿の宮のはぎの、なをことにおもしろくもあるかな。いかでさるたね有けん。おなじえださしなどの、いとえんなるこそ、一日まいりていで給ほどなりしかば、えおらずなりにき云々。宮木のゝこはぎがもとゝしらませば露も心をわかずもあらまし。地錦抄曰、宮城野、白紫、うす紫・とび入あり。花長くさがりて、ひめ藤のごとし。みだれ萩、白むらさき有。花も木もすぐれてしだるゝ。大和本草曰、宮城野ハギアリ。其花最ヨシ。絲ハギアリ。絲ハギハ花紅ニ盛久シ。按ニミダレハギモ、宮城野ノ内ニテ、糸ノ如クナル、卽糸ハギ也。花壇綱目曰、みだれ萩 花紫白飛入なり。宮城野とも云。咲比五月比より少しづゝ咲、七月中さくなり

○しらはき 藻塩草

○白花ノハギ也。白花ニ宮城野アリ、山ハギアリ。萬葉集註釋曰、白萩 白菊と云がごとし。みな花の色白きによりていふ也

【一名】白萩 明月記曰、寛喜元年九月八日、心寂房送草樹等、令栽之云云白萩、高宗薄、例躑躅等也

【集註】藻塩草曰、しらはぎ。わが待ししら萩咲(さき)ぬ今だにもにほひにゆかなをちかた人に

【形状】袖中抄曰、しらはぎ。顯昭云、しらはぎとは、しろく花さく

萩のあれば、それをよめるといわんもあしからねど云々。地錦抄曰、萩ハ花、白紫うすいろあり。大和本草曰、又白ハギアリ

○木萩 袖中抄

○山野ノハギ年々不レ截ハ蕉太クシテ木ハギトナル、都ノツトノ說ノゴトキハ、燒野ニ殘リタルハギノ本枝也

【集註】 袖中抄曰、私云、まのならぬ野にも、木萩とて古枝花さく萩あり。もとあらのこはぎとはそれなり。その木ばかりもしやきもしたれど、あたらしくえだはへてさけり。たゞのはぎはふるえにさくことなし。都のつと曰、宮城野の木のしたづゆも、まことにかさもとりあへぬほどなり。花の色々錦をしけるとみゆ。中にももとあらの里といふ所に、色などもほかにはことなるはぎのありしを、一枝おりて云々この所は、むかしは入すみけるを、今はさながらのら山になりて、草堂一字より外はみえず。この花をも、いにしへはちるをや人のおしみけむと、あはれにおもひやられ侍りき。そもそももとあらの萩とは、春やきのこしたる去年のふる枝にさきたるをいふ也、ときゝをき侍り。それをこ萩とも申なり。これは枝さしなども、なべての萩よりもこはくしく、あばらなるにや。牡丹集 もとあらの櫻などもよみて侍ればとおもひ給ひしに、いまきゝ侍れば、もしこのさとの名によりてもやよみけむ、とはじめておもひあはせられ侍り

布加美久佐（フカミグサ） 本草和名 【漢名】 牡丹 本草 今通名

何氏類鎔ニ曰、牡丹ヲ說ノ者謂ク、唐之前未レ有ニ牡丹有ルコト之、自唐始ニ而及レ聞ニ謝康樂集內ニ言、此所ニ有ニ牡丹ト云者ニ、每盛ニ開ク水竹之間ニ、隋ノ開皇苑中ニ有ニ易州所ノ進ス牡丹ト云者ニ、皆高第紅黃之種則知牡丹自レ唐而

前已ニ有之、特ニ未有人ノ賞翫而咏歌之如キ唐ノ世ノ者ニ也。甌騰ニ曰、歐陽公牡丹ノ譜ニ云、牡丹ハ出ヅ洛陽ニ者、天下第一也、唐ノ則天以後始メテ盛也、然モ不進セ御ニ、自李迪爲ニ[ ]守ト歲コトニ遣抜乘テ驛ニ一日夜至京師ニ所ロ進スル、不過姚黃魏花數朶ニ。又賣咏花譜云ク、牡丹唐人謂之ヲ木芍藥ト、天寶中得テ紅紫淺紅通白四本ヲ移シ植ウ於興慶池東沈香亭ニ、會ス花開ニ明皇引テ大眞ニ翫賞ス、李白進ス清平調ノ章ヲ、而牡丹ノ之名於是乎著ハル。然ニ考ルニ之ヲ雜誌ニ煬帝闢西苑易州進牡丹二十種有飛來紅袁家紅一拂黃軟條黃延安黃等名則花之得ルコト名ヲ不始マラ自天寶ノ年ヨリ也

一名　也末多知波奈

本草和名曰、牡丹。和名布加美久佐。一名也末多知波奈。藻塩草曰、山たち花、是一說也。いしのうへなどにある物にはあらず。ほたんと云り。又曰、山橘、又云、牡丹也。和歌深秘抄曰、山たちばなの事、八雲御抄のごとく牡丹の事にては哉。然は古今集の山たちばなの歌も同前也。尤此說にても按ニ證類本草曰、唐本ノ注ニ云、牡丹ハ生ス漢中ノ劍南ニ所ノ出ル者、苗似テ羊桃ニ、夏生ス白花ヲ、秋實圓綠、冬實赤色、凌冬ヲ不凋、根似芍藥ニ肉白、皮丹出ヅ漢劍南ニ、土人謂フ之ヲ牡丹ト、亦名ク百兩金ト。此說全ク百兩金ヲ說ク。爾雅郭璞云、羊桃、葉似桃ト云、カラタチノ葉ニ合ス。實圓冬赤色ト云ハ即カラタチノ實也。又凌冬不凋ト云、牡丹葉は冬凋落セリ。根似芍藥肉白皮丹ト云、即カラタチノ根也。百兩金ノ根、牡丹ニ甚似タレハ誤レルコト明也。證類本草曰、百兩金、葉似ニ荔枝ニ初生背面俱ニ靑シ、結ブ花實ヲ後チ背紫ニ面靑ノ、苗高一二三尺、有幹如木、凌冬不凋、秋初開花、靑碧色結ブ實ヲ如豆ノ大ノ、生ハ靑、熟ハ赤シ、根入藥トミヘタリ。本草和名ニ也末多知波奈ト云ルモ此等ノ誤ニ據レリ。萬葉集ニ載ル夜麻多知波奈、延喜式ニ所載山橘子ハ平地木ニメ、ヤブカウジ也

不加

美久佐 本草類編、倭名類聚鈔曰、牡丹。和名布加美久佐

ふかみくさ 藻塩草曰、牡丹ふか見くさ。異名也。なばかりはさきても色のふか見ぐさ花のころとはいかで見てまし。藏玉に有。言塵集曰、ふかみくさとは牡丹也。廿日草

ほうたん 枕草紙曰 名おそろしき物、ほうたん。雅輔装束抄曰、ほうたん。おもてみならすきすはう、うらみなしろし。又曰、春はぼうたん、もちつゝじ云々

ほたん 平家物語巻第十曰、先年この人々を花にたとへてよひしに、此三位の中將殿をば、ぼたんにたとへてよひしとて

照發草 藻塩草曰、牡丹。照發草。

なとり草 八雲御抄曰、牡丹。不賀美くさ。廿日をかぎりてさくはななり。一說に、やまたち花といへるは牡丹也。石上などに有物にはあらず。又なとり草これも異名といへり。藻塩草曰 牡丹。名とりぐさ。ある人の心なしとやなとりくさ花見る時はとがおすくなし。むかしある女、此花をあひして、おほくうへをきて、ひるはひねもすにながめ、夜はよもすがら風に可損事をなげきけるによりて、おとこ他の心ありとて、離別しけり。とがなきよし聞ひらきて、もとのごとくすみけるとなん。仍かくいへり云々これも藏玉にあり。言塵集曰、名取草。牡丹一名也

廿日草 藻塩草曰、牡丹。廿日草。このはなさく日數、廿日をかぎりてさく也。仍号廿日草と也。藏玉に有。言塵集曰、牡丹。廿日草、ふかみ草、山橘、此等皆同名なり。太平記第三十九曰、華開花落ル事二十日、一城ノ人皆狂セルガ如シ。牡丹妖艶ノ色ヲ風セシモゲニサコソ有ツラメト思知ル、許也。按ニ白居易牡丹芳詩曰、花開花落二十日、一城之人皆若狂、牡丹諸色花開始テヨリ、諸色ノ花散ニ至ル迄ヲ云ル也。詞花集曰、

新院位におはしまし丶時、牡丹をよませ給けるによみ侍りける。關白太政大臣。咲しよりちりはつるまで見しほどに花のもとにてはつかへにけり。只一花の開落八五七日ニ限レリ

となりくさ　藻塩草曰、牡丹。となりくさ、これも異名

夜白いろくさ　藻塩草曰、牡丹。夜白いろくさ、これも異名

夜白草　藻塩草曰、ある說にはこれをぼたんと云り

さひたつま　言塵集曰、さひたつま。一說ふかみ草の一名なり

［集註］本草類編曰、牡丹。和不加美久佐、二月八月採陰干。延喜式卷第三十七曰、典藥寮。中宮臘月御藥。牡丹一兩。雜給料。牡丹六兩。諸司年料。齋宮寮。牡丹四兩一分。內匠寮。牡丹云云各三兩。左右近衛府。牡丹云云各八兩。諸國進年料雜藥。伊勢國、牡丹七斤十兩。備前國、牡丹云云各一斤。阿波國云云牡丹各三斤。出雲國風土記曰、意宇郡所在草木牡丹、秋鹿郡所在草木牡丹。明月記曰、寬喜元年五月五日、牡丹花盛開、此花逢端午日、年來不見。貞永二年三月廿八日、牡丹盛開。卅日、風雨之景氣无春盡之色、損枝綠樹之中牡丹獨盛開。曾我物語卷第七曰、なをくさむらにわけ入ければ、ふかみぐさのさかりとさきたるを見て、うのはなはつぼみてだにもちるに、このはなの思ふ事なげにさかりなるや。いかにさく共、廿日ぐさ、さかりも日かずあるなれば、はなのいのちもかぎりあり。あはれ身にしる心かな、となみだぐみければ、五郎きゝて、此くさの事は、はなひらきおちて千にちおなじく、一しやうの人たゞふらかすかごとし、と見へたり。これはかぶのことばなり、又うたにも、名ばかりはさかでもいろのふかみぐさはなさくならばいかでみてまし。とくちずさみければ、十郎きゝて、此うたはいまださかざるときも、い

ろふかきくさとこそよみたれ、さかりのはなには心やたがふべからむ、とたはぶれけるにも云々。本朝無題詩曰、閏二月盡日卽事藤原敦光云々終朝悵望倚軒檻、閑翫牡丹一兩叢。太平記曰、見ルニ思ノ牡丹(フカミクサ)ヲ始トメ。高倉院升遐記曰、つねよりも袖の露けき時しも、ふかみ草こゝちよげに咲そむるを見て、ふかみ草思ひそめてしきみなれば露もこゝろにかけぬまぞなき。仙傳抄曰、卯月。ぼたん。青草三つ、ひとつは葉おほく、二つは葉すくなく。尺素往來曰、春花者云々牡丹。南禪寺記曰、今院、々北砌右有二牡丹花一、御愛也。其軒曰二花王一

形状

本朝無題詩曰、賦二牡丹花一大江匡房。對レ花日夜倚二欄干一、再三沈吟憐二牡丹一、紅艶遶レ軒霞更暖、粉粧當レ臘雪猶寒、自レ逢二春暮一將レ傘買、爲レ怕二曉風一乘レ燭看、老去愁交冠蓋客、莫レ嘲引レ興瀉方闌。藤原通憲。造物迎時尤足レ賞、牡丹栽得立二沙場一、衞公舊宅遠無レ至、白氏古篇讀有レ香 千朶露薰階砌下、一條霞聳籬傍、若非三消士投二龍腦一、定是美人忘二麝囊一、唯惜蜀綿風底色、不レ堪二十日間粧一、隨勻未レ去褰レ簾客、耽艶遲歸擁レ篲郎、闇盡二微忠一花裏傑、菊嫌二爭号一草中王、窓間曉訝吳綾彩、庭上夜疑齊燎光、庾嶺春梅還謝レ粉、洞庭秋葉更慙レ黃、豈如入二夏期一蘂綻、折翫終朝獨斷腸。塵添壒囊鈔卷第九曰、芍藥ニ二アリ。芍藥ト木芍藥ト也。此邊ニ常ニ牡丹ト云物ハ芍藥也。木芍藥ニ云ハ、木牡丹トテ色深紅ニシテ一重ナルウ黄ナル色アル物ニ事敷。白芍藥(シャク)ト云ハ、白花咲ナルベシ。ウルハシキ牡丹ハ此土ニ未レ渡。宋人コトニ秘藏スル也。牡丹ハ草ニ非ス木ニ如クニメ何(イツ)モ蒸枯失(ウスル)事ナシ。古ニ枝ヨリメクミ出也。其花葉生ス芍藥ノ如ク年ゴトニ土ヨリ若バヘ出事ハナシ。翰林五鳳集曰、龍興賞牡丹。寺是龍興地洛涯、始知姚魏在君家、一叢織作千堆錦、除二却此花一花ニ不レ花、城西尋紅千葉(マヽ) 春雨城西小路斜、牡丹開處是君家、夜深千葉紅於午、一宿龍興古寺花

【今案】榮花物語玉の臺曰、この御たうの御まへのかたには、またいけのかたにかうらんたかうして、そのもとにさうび、ぼうたん、からなでしこ、らん、れんぐゑのはなどもうつさせ給へり。トミユ。此レ八月ナレバ此牡丹花ハ造花トミユ。然レバ此頃專ラ牡丹花ヲ賞シヿヲ知ベシ。此時既ニ治安三年ナリ。源氏物語若菜曰、花などいはゞ、さくらにたとへても、なを物よりすぐれたるけはひ、ことにものし給ふ。洛陽名園記曰、洛陽 花甚多種 而獨牡丹曰、花凡園皆植牡丹、而獨名此曰花。枕草紙曰、なを世にめでたき物。あはれげなる所のさまかな、ろだいのまへにうへられたりけるぼうたんの、からめきおかしき事などの給ふ。蜻蛉日記曰、まへにませゆひわたして、またなにともしらぬ草どもしげきなかに、ぼうたん草どもいとなさけなげにて、花ちりはてゝたてるを見るにもトミユレバ治安天祿ノ頃牡丹花ヲ賞翫セシ明證也。蜻蛉日記ハ天曆ヨリ天延迄ノヿヲ書リ。天曆ハ村上帝ノ年號也。又大江匡房牡丹花ノ詩アリ。大和本草ニ、崇德院ノ頃ヨリ始テ牡丹ヲ賞スト云非也

【製法】頓医抄曰、牡丹皮、湯ニ浸シテ土ヲ洗テ、上ノ黑皮ヲコソケ弃テ、又押破テ、中ノ心ノ木ノ樣ナルヲ取弃テ、ヨキ酒ニ浸シテ一夜ヲキテ、取出シテ炒テスリ振ベシ

衣比須久須里（エビスクスリ）　倭名類聚鈔

【漢名】芍藥　本草　　今通名

【一名】沼美久須里　倭名鈔曰、芍藥。新抄本草云、和名衣比須久須里。又沼美久須里　奴美久須利　本草和名曰、芍藥、和名衣比須久須利、一名奴美久

須利沼美久須利天文寫本和名抄衣比須久須利同上夕藥新撰字鏡曰、夕藥。衣比須草、又山佐介衣比須草

見上山佐介見上江比須久佐本草類編比止久佐同上衣比須久佐字鏡曰、茯。衣比須久佐。字典曰、茯。唐韻

房六切、音伏、茯苓。塵添壒囊鈔卷第九曰、芍ノ一字ヲハチヤクト讀ヤウアリ。調美ノ詞芍藥醬(ヒシホ)ト云リ。是ハ芍藥ヲヒシホニツクルニハ非ズ。芍藥根ニハ五味具スト云事醫抄中ニ見ヘタリ。此ノ故ニ氣味ヲ調ヘタル心ヲ云ハントテ、芍藥ノ和ト云ヒ習ハセリ。芍藥醬ト云フモ、其醬(ヒシホ)氣味ヲ能調フル心ヲ表スルナルベシ。調味ノ方ニハ芍トヨム、又都歷反、芍ノ字ヲ、テキト讀事アリ。カク談ズレハ、芍藥ニアラズ、蓮子名ナリ云云

集註

本草類編曰、芍藥。和江比須久佐。又比止久佐。二八月採根暴干。延喜式卷第三十七曰、典藥寮。臘月御藥。芍藥九兩三分。中宮臘月御藥。芍藥六兩三分。雜給料。芍藥一斤十三兩二分。諸司年料雜藥。齋宮寮。芍藥六兩。左右近衞府。芍藥云云各八兩。左右衞門府。芍藥云云各四兩。左右兵衞府。芍藥云云各四兩。遣諸蕃使。唐使。芍藥云云各八斤。渤使。芍藥云云各一斤。諸國進年料雜藥。山城國、芍藥四兩。相摸國、芍藥云云各一斤。武藏國、芍藥三斤。下總國、芍藥十兩。近江國、芍藥一斤。美濃國、芍藥云云各二斤。飛驒國、芍藥廿斤。上野國、芍藥云云各廿斤。若狹國云云、芍藥各二斤。丹波國、芍藥云云各八斤。播磨國、芍藥云云各廿斤。美作國云云、芍藥各十斤。備前國、芍藥云云各三斤。備中國云云、芍藥各三斤。備後國、芍藥二斤。長門國、芍藥云云各三斤。阿波國、芍藥云云各三斤。讃岐國、芍藥云云各廿斤。伊豫國、芍

藥八斤。出雲國風土記曰、嶋根郡所在草木芍藥。秋鹿郡所在草木芍藥。武藏國風土記曰、荏原郡貢芍藥。駿河國風土記曰、伊穂原郡古國府出芍藥。本朝無題詩曰、閏三月盡日即事。藤原敦基云云。芳塘移レ榻釆斟レ酒、醉對ニ數莖芍藥叢一。文華秀麗集曰、芍藥花蘼蕪菜隨。仙傳抄曰、三月のしんに、つゝじ、しやくやくなどを用ゆ。ことに木のうつりによし。尺素往來曰、夏花者云云芍藥

土安（ツチアケビ）　參寄集馬書也

漢名　野芍藥　塞程別記

今名　ヤマ芍藥

集註　參寄集馬書曰、血屎ト云者、常ニ丸糞ヲ見

塞程別記曰、百花洲山多野芍藥可採而食藥蘂紅綻而未開餘無所見。群芳譜曰、牡丹芍藥皆爲ニス藥中ニ所レ用、今二花生ニスハ山野、類ニス皆、單葉小ノ花一

ルニ血交テ出ル也。此時ハ土安（ツチアケビ）ヲ煎ノ其汁ニテ本藥ヲ可飼。本草辨疑曰、芍藥諸方ヨリ出ル、獨以ニ信州一上トス。餘國ノ產ハ色潔白ナリトイヘドモ、水ニ浸ストキハ反ヌ赤クナリ、信州ノ產ハ色不反皆白也。故ニ重ニ貴之一。或云、信州ニ二種アリ、一種根莖葉花共ニ芍藥ニ似タリトイヘドモ別草ニメ、ツチアケビト云草也。此根眞ノ芍藥ヨリ所見能故ニ藥店求之ト云。脩治纂要曰、芍藥、山中ニ自然ニ生タル花ヒトヘナルヲ用ユ。本草啓蒙曰、宇陀芍藥、信濃芍藥ト云アリ。和ニテ古來上品ト云傳フレドモ、是ハ草芍藥、山芍藥ニシテ、山ノ自然生ナリ。眞ノ芍藥ニアラズ。葉ノ形ハ同シテ花ニ紅白ノ二種アリ。皆單葉ニシテ、形小ク觀ルニタラズ。ソノ實ハ殼赤色ニシテ黑子アリ。美ナルコト花ニマサレリ。深山ニ多シ。俗ニクサボタント云、信州ニテ、ヤマシヤクジヤウト云、備後ニテノシヤクヤクト云。和州宇陀ニテ此根ヲ栽ヘ培養シタル

ヲ宇陀芍藥ト云。粗皮ヲ去リ、曝乾シタルモノナリ。外白色、切レバ内ニ黒キ輪アリ。味酸シ。又信州ニテ培養シテ出スヲ、信濃芍藥ト云フ。又丹波伊勢ヨリ山生ヲ取、直ニ乾シタルヲ出ス。コレヲ田舍芍藥ト云

最下

品也

古名錄卷第十二　終

古名錄草部卷第十三目錄

花草類下

花あやめ　紫花菘
けし　罌粟
韓藍(カラアヰ)　雞冠
雪中花　水仙
一夏草　兎葵
寶珠花　白蕚
夜一夜草(ヨヒトヨクサ)　紫茉莉

通計三十五種

法せん花　鳳仙
花鬘花　荷包牡丹
かまつかの花　雁來紅
岩藤　柳穿魚
ハウクロ　白芨
秋法師　紫蕚
ヱヒノ根

古名錄草部卷第十三

紀藩　源　伴存撰

花草類　下

夜麻夫伎 萬葉集　［漢名］金盌　［今名］ヒトヘヤマブキ

群芳譜曰ク、棣棠花有リ單葉ノ者、名ク金盌ト。花史左編ニ曰ク、棣棠花又有リ單葉者、名ク金碗ト、喜ブ水ヲ。按ニ物品目錄名ク金碗ト喜ブ水ヲト云ヲ、一名トシ金碗喜水ト云非也。廣群芳譜曰、棣棠花有リ單葉者、名ク金盌ト、性喜ブ水ヲ。即ナ可シ證ト。

［一名］**山振** 萬葉集卷第二曰、山振之、立儀足山、清水、酌爾雖行、道之白鳴。同卷第八曰、山振之咲有野邊乃云云。同卷第八曰、今哉開良武、山振乃花。同卷第十曰、花咲而、實者不成登茂、長氣所念鴨、山振之花。是知ン有ル者、何如殖兼、山振乃、止時喪哭ク、戀良苦念者。同卷第十一曰、山振之、爾保敝流妹之云云。同卷第十九曰、谿敝爾生流、山振乎、屋戶爾引殖而、朝露爾、仁保敝流花乎、每見云云

夜麻扶枳 萬葉集卷第十七曰、夜麻扶枳能、之氣美登眦久久、鶯能云云

夜麻夫枳 萬葉集卷第十七曰、夜麻夫枳波、比爾比彌佐伎奴、宇流波

左ノ下作字アル本アリ

之等云云

夜萬夫吉 萬葉集卷第十七曰、佐家浬等母、之良受之安良婆、母太毛安良牟、己能夜萬夫吉乎、美勢追都母等奈

也麻夫伎 萬葉集卷第二十曰、和我勢故我、夜度乃也麻夫伎、佐吉弖安良婆、也麻受可欲波牟、伊夜登之能波爾。右一首長谷攀レ花提壺到來、因是大伴宿禰家持作此歌和之。夜麻夫伎波 奈埿都都於保佐牟云云。夜麻夫伎乃花能左香利爾云云

山吹 萬葉集卷第十九曰、山吹乃、花執持而云云。山吹乎、屋戸爾殖氐波、見其等爾云云。野邊之山吹、誰可手乎里之。扶桑略記廿六曰、天德四年三月卅日、於二清涼殿一有二女房和歌合一云云洲濱左金山吹花枝、其楚書レ歌

山不支 新撰字鏡木部曰、椛、山不支

おもかけ草 藻塩草曰、やまぶき。おもかけ草、異名也。ふるさとのおもかげ草のゆふばへやとめしかゞみのなごりならまし

鏡草 藻塩草曰、やまぶき。鏡草、同異名之。おも影をたがひにとめしかゞみ草わすれごろものなごりならまし。此因緣、わすれぎぬの物がたりと云物にあり。むかしやまとの國ならはらと云所に、あるおとこ、やましろ井手のさとにすむ女にかよひけり。たがひの心ざしあさからざりしに、たがひのおやしかりて、はじめのちおとこ女にいひけるは、心ざししんせつといへども、今よりはあふ事かなふべからずと云て、かゞみをほり出すべしと云て、まがきのしたにうづむ。のちのとしの春、此所より山ぶきおひたり。おとこあはれにおもひて、不斷此ところにひとりすみてなげきける云云 藏玉にあり。壓添墟囊抄曰、亦或記ニ蘼蕪是ヤマブキトヨム、暮春ニ有レ花、今本朝ニ山吹ト云、是也ト云云。按蘼蕪ハ、トキンイバラ也

〔集註〕 和歌色葉抄曰、ゐでの山吹とは、或書云、昔橘大臣諸兄、井堤の寺を造りて、

金堂の四面の廻廊のめぐりに欵冬を殖て、廊の內に水を湛て、花さかせて水にうつして見るべきやうをかまへたりけるに、寺供養の日、おもはざるに讒言をおひて、身まかりにければ、山吹の花を水にうつしてみる事もなくてやみけるをよめる之云々。或人云、輕の大臣、玉の井の光明寺つくりて、山吹をうへたりけるに、その堂を丙寅の日、供養したりける云々諸兄とはきゝをよばずと。古今集曰、山吹はあやなゝ咲そ花みんとうへけん君がこよひこなくに。延五抄云、此哥は諸兄の大臣の哥之。山城の井手の寺、光明寺、此寺を建立して、山水に山吹をうへたり。其時高向の迦留の大臣、此欵冬を來てみんと約束して、不來時によめり。今の井堤の玉水、其旧跡也。惟清抄曰、井堤左大臣諸兄公、境地面白によつて、井手に新造ありて、山吹を植などして、此水を愛せり。散木集曰、古源中納言國信の坊城の堂に、中宮亮仲實がはんべりけるころ、人々まかりてあそび侍りけるに、池の汀の山吹さかりにておもしろかりければ云云。古今爲家抄曰、橘の大公といふ人、宇治橋小嶋といふ所に寺を建て、山庄として、山吹をうへて愛す。蜻蛉日記曰、またふるめかしき人も、れいのゆるされぬことにて、山ふきのなかにあるを。明月記曰、嘉祿三年閏三月十日、欵冬盛開。貞永二年三月十一日、欵冬未落、養閑庭眼。寬喜二年三月廿一日、昨今欵冬落盡。言塵集曰、山吹 實ならぬものとよめり。北山殿行幸記曰、けふの御わりごは、だいばんに花の枝、すゞりのふたにちる花、はなにふみをつく、山吹の枝などうつくしかりけるとぞ。平家物語曰、きしの山吹さきみだれ。俊頼髄腦抄曰、さらばひとへ山ぶきとこそいはめと云々。高倉院升遐記曰、山吹のはな一ふさ折たるに

形狀　源氏物語こてふ曰、まして池の水にかげをうつしたる山ぶき、きしよりこぼれていみじきさか

りなり云云。又曰、こがねのかめに山ぶきを、おなじき花のふさもいかめしう、上になきにほひをちらさせ給へり。又曰、やまぶきのませのもとにさきこぼれたるはなのかげに。同賢木柱曰、三月になりて、六条どのゝ御まへの、藤山ぶきのおもしろき夕ばへ云云こなたにわたり御らんずれば、くれ竹のませに、わざとなうさきかゝりたる匂ひ、いとおもしろし。色に衣をなどの給て「おもはずにゐでのなか道へだつともいはでぞこふる山ぶきの花。同まぼろし曰、やまぶきなどの、心ちよげにさきみだれたるも、うちつけに露けくのみみなされ給ふ。又曰、たいのまへの山吹こそ、猶よに見えぬ花のさまなれ。ふさのおほきさなどよ。しなたかうなどはをきてざりけるはなにやあらん。はなやかににぎはゝしきかたは、いとおもしろきものになんありける。枕草紙曰。かみにはものもかゝせ給はず、山吹の花びらを只一つ包ませ給へり。堀河院百首曰、くちなしの色に咲ばや山ぶきのえもいひしらぬ匂ひ成らむ。歌林四季物語曰、あすのわざとて、卯の二日の夕ぐれには、かもん、とのもりのみやつこども、御庭御殿をはらひきよめ、ちりのこりたる櫻山吹など、こゝろもなくはきやり。

つれ／＼曰、山吹のきよげ

やへ山吹　枕草紙 古写本　［漢名］棣棠花　花鏡

廣群芳譜曰、棣棠花、若二金黄一、一葉一蘂生、甚延蔓。春深與二薔薇一同開、可レ助二一色一。花鏡曰、棣棠花藤本叢生、葉如二荼蘼一多、尖而小也、邊如二鋸歯一、三月開レ花、金黄色圓若二小毬一、一葉一蘂、但繁而不

香ノ其枝比ヘレハ薔薇ニ更ニ弱ソ、必延‐蔓ソ屏樹間ニ與ニ薔薇ニ同ク架ヲ

【集註】源氏物語野分曰、やへ山ぶきのみだれたるさかりに、露かゝれる夕ばへぞ、ふと思ひいでらるゝ云々。狹衣曰、池の汀の八重山吹は、井手のわたりにことならず。高倉院升遐記曰、六はらのいけのみぎはに、山ぶきの咲るを見て、山ノ井の水もことはりにおぼえて、山吹のやえ〳〵迄に花さきてあだに散ぬることぞはかなき。實方朝臣集曰、ほり川の院にて、御屏風のうしろに。こまの命婦がゐたるに、かみよりやまぶきのはなをなげこさせ給へるを、うへのせさせ給へるとこゝろへて「やへながら色もかはらぬやまぶきの九重になどさかずなりにし下略、相如集曰、かずならぬ人のひとへにやまぶきの八重九へといかでしるらん。赤染衞門集曰、五月ばかり草のしげきなかに、やまぶきのさきたりしを。わがやどはやへむぐらかとみしほどにやへ山ぶきのはなぞにほへる。後拾遺集曰、小倉の家に住侍ける比、雨のふりける日、蓑かる人の侍ければ、山吹の枝々折てとらせ侍りけり。心もえでまかり過て、又の日山ぶきの心もえざりしよしいひをこせて侍ける返事に。兼明親王、七重八重花はさけども山吹のみのひとつだになきぞかなしき。蜻蛉日記曰、とのより、やへ山ぶきをたてまつらせ給へりけるに

【今案】仙覺萬葉集註釋巻第六曰、たとへば八重櫻とも、八重山吹ともいへるは、かならずしも八重かさならねども、かさなりてさきぬれば、やえといふがごとし

【形狀】無名抄曰、井提の山吹とて、名にながれたるを、いと見え侍らぬは、いづくにあるぞと尋しかば、さる事侍り、彼井堤の大臣の堂は、ひとゝせ燒侍にき。其前に、おびたゞしく大きなる山吹、むら〳〵みえ侍き。その花のりんは、こ土器（ガハラケ）のおほきさにて、いくへともなくかさなりてなん

それを 刊本「所も」ニ作ル

侍し。それをさやうに申をきて侍るにや。又彼井堤河のみぎはにつきて、隙もたく侍しかば、花のさかりには、こがねの堤などをつきわたしたらんやうにて、他所(よそ)にはすぐれてなん侍し。さればいづれを申けるにか、いまわきがたく侍り。但下﨟のいふかひなく侍る事は、かく名高き草とて、それをもをき侍らず、田作るには草をいれたるがよくいでくると申て、何ともなく刈とり侍しほどに、今は跡もなく成て侍る

【正誤】明月記曰、嘉祿二年三月廿二日、朝霜如嚴冬、欵冬盛開之比、如雪之霜未見事歟トミユ。此欵冬ヲ以テ棣冬トスル證也。江談抄第四曰、點着雌黄天有意、欵冬誤綻暮春風。大隅守源爲信云、故親父典藥頭眞人祖語云、昔中書大王爲大納言之時、詣彼大王第。地富風流、天縱煙霞。常青陽之時、暮見黄花之盛開。于時大王憑欄干吟詠此句者、其人於朱雀院所作也。見其氣色稱譽作者也。爰父眞人從容言、欵冬和名、山不々支、見於本艸。其花冬開。今以欵冬爲山吹名誤也。於是中書大王感悟云、若於學者不可言詩矣。下學集曰 日本俗呼欵冬謂山吹者誤也。今昔物語六曰、紺の襖に棣棠花色の衣を着。又曰、紺の襖に棣棠花色の衣着たる者云々。丹鉛總錄曰、欵冬花十二月雪中出花。述征記曰、洛水至冬凝厲則欵冬茂悅曾冰之中傳咸欵冬賦序曰余曾逐禽登于此山于時仲冬冰凌盈谷積雪被崖顧見欵冬煒然始敷佛經云朱炎爍石不靡蕭立之木凝冬慘慄不凋欵冬之花乃知唐詩僧房逢著欵冬花正十二月街頭春雪時也萃子曰欵冬花於嚴寒

乎美奈敝之(ヲミナヘシ) 萬葉集

【漢名】敗醬 本草

【今名】ヲミナヘシ

乎美奈弊之。敝ノ例ト弊ノ例ト混同セリ

栗ノ下

證類本草曰、蜀經曰、敗醤。葉似テ水莨及ヒ薇銜ニ叢生ス、花黃根紫色ニシテ似ニ柴胡ニ、作スニ陳敗豆醤氣ヲ、故ニ以名。新撰字鏡曰、孃、女良反、婦人美也、美女也、良女也、乎美奈。娘、於弥奈。孃ハ字典ニ同シ娘ニ

一名

姫押 萬葉集卷第七曰、姫押生ル澤邊之、眞田葛原云云

娘部思 萬葉集卷第八曰、娘部思秋芽子交ツ、蘆城野ハ今日乎始而、萬代爾將見

娘部志 萬葉集卷第八曰、娘部志、秋芽子折禮云云

姫部志 萬葉集卷第八曰、山上臣憶良詠秋野花云云、姫部志云云

姫部思 萬葉集卷第十曰、姫部思、咲野爾生ル云云

佳人部爲 萬葉集卷第十曰、佳人部爲咲野之芽子爾云云

乎美奈弊之 萬葉集卷第十七曰、和我勢古我、布佐多乎里家流、乎美奈敝之香物。乎美奈敝之左伎多流野邊乎、由伎米具利云云。乎美奈弊之、佐伎多流野邊乎、遊吉追都見倍之。同卷第二十曰、乎美奈弊之、安伎波疑之努藝云云。伊麻左家流良武、乎美奈弊之波母

女郎花 萬葉集卷第十曰、吾郷爾今咲花乃、女郎花、不堪情ニ尚戀二家里。新撰萬葉集曰、秋嶺有花號女郎、野遊得所汝独発追名遊各猶専到、本自慇懃子尚強、壓添。壒嚢鈔卷第九曰、女郎花ト云ハ、ヲミナヘシト云物カ、他花歟。源順俗呼爲ニ女郎ニ云ヘルハ、儘ノ說ナキ心歟。菊ヲ女郎花云事ハ大概分明ナル歟。靈鬼志曰、何文淒人也、有ニ一女子ニ容良美卒死、葬日明日見ニ其塚ニ盡ク成ニ菊花ニ、故名ニ菊花女ニ、亦名ニ女郎花ニ云ヘリ。順ノ花色如ニ蒸粟ニ云ヘルハ、常ノ女郎花ヲ云ヘルニヤ。付レ之又有レ說、如ニ蒸栗ニ云ベキヲ、栗ノ字誤テ粟ト書ケリ。蒸栗トハムセル栗ニハ非ス。蒸栗ト云木名也ト江帥云ヘリ。魏文帝鐘大理ニ與ル書云、赤ニ擬ニ雞冠ニ、黃ニ侔ニ蒸栗ニ、白如ニ猪肪ニ、黑如ニ純漆ニト云ヘリ。江談抄曰、花色

二刊本、二ハ、「ト云、一リ、ヘ玉ノ是ヲ云色。玉也、正逸云、論、如赤冠ニ雑如ニ黄ニ蒸栗ニ七アリ明月記六月十九日ナリ

如ニ蒸栗ニ俗呼爲ニ女郎ト、或云、近日以レ栗爲レ粟可レ怪之、撿ニ文選注ニ水名也云〻。明月記曰、寛喜元年六月、今年草樹華實皆遲、但萩女郎之中有纔開花、是只自然事歟。天福二年七月十四日、女郎花已盛、萩一兩枝僅開。粧樓記曰、女郎花。詩曰、木蘭開過女郎花。群芳譜木蘭註曰、詩七言。裴隱裕。紫房日照臙脂折、素艶風吹膩粉開。怪得獨饒脂粉態、木蘭曾作女郎來。賦ハ如ニ玉指ニ塗ニ朱粉ヲ光ハ似ニ金刀ノ剪ニ紫霞ニ從此時時春夢裡。應レ添ニ一對ノ女郎花ヲ觀此則女郎花ハ爲ニ木蘭ニ明ッ矣

美人部師　萬葉集卷第十曰、手取者、袖并丹還、美人部師、此白露爾、散卷惜

女倍芝　倭名類聚鈔曰、女郎花。新撰萬葉集云、女郎花、倭歌云、女倍芝之、乎美那閉之

乎美那閉之　見上

乎美奈倍之　天文写本和名抄曰、和歌云、乎美奈倍之

於保都知　本草和名曰、敗醤。和名於保都知、一名知女久佐

知女久佐　倭名鈔曰、敗醤。和名知女久佐

久知女久佐　醫心方

加末久佐　同上

於保川知　本草類編曰、敗醤。和於保川知。行餘隨筆曰、字書に川の字つの音なし、詳按扁海に通也とあり。字義をとりて訓としたるなり

おもひ草　藻塩草曰、女郎花を、おもひくさといふ事に、さいゐんさいの草づくしに見えたり。天智天皇草花異名には、すゝきと云り。又しをんとも分明せず。たゞし女郎花を思ひ草と云事は前載合(ママ)にさだめらるゝ条勿論なり。さくらをも能回法師は詠ぜりと云〻藏玉にあり

おほとち　藻塩草曰、敗醤、おほとち。按おほとちは白花黄花通名也

【集註】本草類編曰、敗醤。和於保川知　又知女久佐、八月採根

曝干。榮花物語哥合曰、八月つごもりに、でんじやうの人〳〵さがのにはな見にいきたるに、中ぐうの大ばんどころに、をみなべしのちいさきえだを、あふぎのつまをひきやりて云〻。源氏物語寄生曰、をみなべしをばみすぎてぞいで給ひぬる。同手ならひ曰、まへちかきをみなべしをおりて、にほふらんとくちずさみて、ひとりごちたてり。狹衣曰、さがのはな、やう〳〵さかり過て、をみなべし色かはり。又曰、御前の花さかりにさきみだれて、夕露をもたげにて、ひもときわたしたる色〻、いづれ共なく見をきがたき中にも、をみなべしの、人の見る事やくるしからん、霧のたえまわりなげなる氣色にて、立かくれたるは、猶いと過がたくおぼしめさる云云。住吉物語曰、をみなべしの露おもげにて、まがきの程にたをれ出たる心ちして。枕草紙曰、野分の又の日こそ、いみじう哀におぼゆれ云云おほきなる木どもたふれ、枝など吹おられたるだにおしきに、萩、女郎花などのうへに、よろぼひはひふせる、いとおもはず也。河越記曰、なまめきたてる女郎花は、つねよりも猶むつまじく、おほかる野べの虫の音に、一ときをくねるもうしろめたし。太神宮參詣記曰、嵯峩野の原の女郎花、あだなる露にしほれしかば。公任卿集曰、女郎花ほりていく所の有けるを、とはせ給ふければ、あきのぶが家にといひければ云〻。俊頼髄腦抄曰、をみなべし、なにめでられて、ゆきかふ人におられ。淸輔家集曰、妹の比人の許へ行たりけるに、あるじはなかりければ、せむざいのおもしろかりける中に、女郎花のおほかりけるを、一村をりとりて歌をよみて、殘の花にむすびつけゝる云〻。女郎花物語曰、和泉式部家の前を、法師のをみなべしをもちてとをりける云〻。西行物語曰、萩女郎花いろ〳〵の秋の草にてめぐりをかこひ。紫式部日記曰、はしのみなみなるをみなべしの、いみじうさかりなるを一枝

おらふ給へ。むさし野の紀行曰、それよりむさし野をかりゆくに、まことに行どもはてのあらばこそ、はぎ、すゝき、女郎花の露にやどれるむしのこゑ〳〵、あはれをもよほすばかりなり

形状

倭名類聚鈔曰、乎美那閉之。今案花如蒸粟也

芹花ノ下刊本一蛇牀子花一アリ脱カ畧カ

於保都知（オホツチ） 倭名類聚鈔

漢名　敗醬。本草ニ時珍ノ所ロノ説ノ者也

今名　ヲトコメシ

本草綱目、敗醬。集解、時珍曰、處處原野有レ之、俗ニ名ニ苦菜一、野人食レ之、江東ノ人毎ニ采リ收メ儲フ焉。春初ニ生ス苗ヲ、深冬始テ凋ム。初時葉布テ地ニ生ス、似ニ菘菜ノ葉ニ而狹長有リ鋸齒一、綠色面深ク背淺シ、夏秋莖ノ高二三尺、而柔弱數寸、一節間ニ生レ葉、四散如レ繖ノ、顛頂開ニ白花一成、簇ヲ如ニ芹花ノ狀一、結ニ小實ヲ成レ簇。其根白紫、頗似ニ紫胡一。按ニ紀州日高郡龍神ノ土人、其苗ヲ煠（ユヒキ）食フ、即呼ブ於保都知（オホツチ）ト、蓋シ古語之殘レル也

一名

於保度知 新撰字鏡曰、蕵、思渾反、香草。於保度知。字典曰、蕵、唐韻思渾切　韻會ニ溪孫極テ似ニ石菖蒲ニ而葉無脊、即カキツバタ也

於保止知 字鏡曰、蒤荼同宅加反、平緣也。於保止知。茶、爾雅曰、茶苦菜、即ノゲシ也

大とち 歌林良材集

乎等古平美奈 萬葉集卷第二十曰、秋野爾波、伊麻己曾由可米、母能乃布能、乎等古平美奈能、波奈爾保比見爾。藻塩草曰、おとこをみなの花、大とちの事也

コノ手柏 詞林采葉抄

おほとち 藻塩草曰、おほとちをやまとの國にはこのてかしはと云

之。いかゞかくはいふぞなれば、葉のちごどもの手に似たればかく云と也。又云、このてがしはを女郎花共いひ、おほとち共云、同事也。むさしのゝまはぎが本のたはやかにこのて柏の花のうは露。是は女郎花歟。袖中抄曰、私云、このてがしはを女郎花ともいひ、おほとち共いふは同事也。おほとちはをみなべしにゝて、はなのしろきなり

おここてし　袖中抄曰、おとこはおとこてしといふは、おほとちとてをみなべしの様にて、花のしろきなり

【集註】山家集曰、いはれのゝ萩が絶まのひま〳〵にこのてがしはの花咲にけり。假名文字遣曰、おほとち、茶。オホトチ、女郎花色ノ白之

【形狀】詞林良材集曰、このてかしは、一說大とちと云草を云。此草女郎花に似て花の白さくと云り。藻塩草曰、おほとちは、をみなべしに似て、花のしろき也。詞林采葉抄曰、藤永朝臣大和守ニテ下ケルニ、奈良坂ノ辺ニテ、白花ノイミジク咲タルヲモテ行合タリケルヲ、國ノ民ノ中ニ伴シタリケルガ是ヲミテ、ユヽシク咲タルコノ手柏哉ト云ケルヲキヽテ馬ヲ止テイカニ云ゾト聞ケレバ、此咲タル花ハ大トチトモ申候物也。ソレヲ此國ニハ、コノ手柏ト申之ト云ケレバ、藤永朝臣メデ、其男ニ物トラセテ、故ヲキヽケレバ、カノ花ノ葉兒ノ手ノ様ナレバ申也ト云リ云之。コノ手柏ノホヽマレドトヨメル哥モ、花ノツボメル心ト見タリ。茶(オホトチ)ノ說可ニ許容一歟

阿利乃比布岐(アリノヒフキ)　本草和名

【漢名】桔梗　本草

【今名】キヽヤウ

一名 乎加止ゝ岐 本草和名曰、桔梗。和名阿利乃比布岐、一名乎加止ゝ岐 阿里乃比布木 倭名類聚鈔曰、桔梗。結梗二音、和名阿里乃比布木。袖中抄曰、桔梗。ありのひふき 乎加土々木 倭名鈔野菜類曰、䓫蘆〻和名乎加土々木。本草綱目曰、桔梗。呉普。本草、一名符扈。字典曰、蘆〻音扈。淮南子俶眞訓䓫蘆、炫煌 乎加度々岐 天文写本和名抄 安利乃比不支久佐 本草類編 乎加止々支 同上 阿佐加保 新撰字鏡曰、桔梗。阿佐加保、又云岡止ゝ支。按ニ字鏡序曰、寛平四年夏中草案已竟。唐昭宗景福二年也ヨリ遥カ後世ノ書、宋蘇頌圖經曰、桔梗夏開ク小花ヲ紫碧色頗ル似ニタリ牽牛子花ニ 岡止ゝ支 見上註 きゝやう 枕草紙 きちかう 榮花物語をんがく曰、くちば、をみなべし、きちかう、はぎなどのおり物。同根合曰、きちかうのうはぎ。古今集物名曰、あきちかう野はなりにけり白露のおける草葉もいろかはりゆく。藻塩草曰、秋ちかふ云ゝ桔梗の花也。きちかふを、かくしてよめる之。壁添壒囊鈔曰、和語ニ字音ヲ用ル草ノ名桔梗キキヨウ きちきやう 元良親王御集曰、こと女に物のたまふとて、きちきやうにつけて「たのみとはおなじからまし言のはをかへりにけりなきちきやうの花 於加止々支 異本本草類編 一重草 藻塩草曰、桔梗。一重草、異名也。七月の花之。このはをもうらにうたばや一重草はくうすやうの露はをけ共。江家次第巻第八曰、相撲召仰云云次左右各舞云云左揷ニ桔梗ノ華ヲ、右揷ニ女郎華ヲ。文明写本下學集草木門曰、

桔槔、槔梗也。玉篇曰、槔。古刀切、桔槔也。字彙曰、桔。吉屑切、音結。桔梗藥名。又古黠切、音戛。桔槔。正字通曰、桔槔汲水具、莊子天運篇、師金謂顏淵曰、子獨不見夫桔槔者乎、引之則俯、舍之則仰。彼人之所引、非引人也。故俯仰而不得罪于人。字典曰、說文、桔槔井上轆轤也。史記信陵君傳、北境傳擧烽、文穎註作高木櫓、櫓上作桔槔、以薪置其中、有寇則燃之、謂之烽。

集註　本草類編曰、桔梗。和安利乃比不支久佐。又云、乎加止々支。二月採根暴干。延喜式卷第三十七曰、典藥寮。元日御藥所須桔梗三兩一分。臘月御藥。桔梗二兩。中宮臘月御藥。桔梗三分。東宮所須桔梗四兩三分。雜給料。桔梗九兩三分。諸司年料雜藥。齋宮寮。桔梗九斤五兩二分。木工寮。桔梗十斤。左右近衛府、桔梗云云各五兩。左右衛門府。桔梗云云各三兩二分。左右兵衛府。桔梗三分。遣諸番使。唐使云云桔梗各八斤。渤使。桔梗云云各二斤。諸國進年料雜藥。山城國、桔梗三十斤。大和國、桔梗廿一斤。攝津國、桔梗廿三斤。伊賀國、桔梗卅斤。伊勢國、桔梗九斤四兩。尾張國桔梗六十六斤。參河國、桔梗卅八斤。遠江國桔梗廿二斤。駿河國、桔梗廿斤。武藏國桔梗四斤十二兩。下總國桔梗云云各五斤。近江國桔梗卅五斤。美濃國桔梗云云各卅斤。若狹國桔梗云云各二斤。越前國、桔梗六斤。播磨國、桔梗卅斤。美作國、桔梗八斤。備前國、桔梗五十斤。備中國桔梗廿八斤。備後國桔梗卅五斤。安藝國、桔梗廿一斤。讚岐國云云桔梗各十二斤。伊豫國桔梗十斤。出雲國風土記曰、神門郡所在草木桔梗、飯石郡所在草木桔梗、大原郡所在草木桔梗。和泉國風土記曰、大鳥郡三箇原出桔梗、日根郡山野所在草木桔梗。武藏國風土記曰、荏原郡貢桔梗。駿河國風土記曰、安弁郡建保產桔梗。

明月記曰、寛喜二年五月十九日、桔梗花初開、今年甚速。天福元年五月廿九日、桔梗花初開、萱草自中旬開。源氏物語手ならひ曰、をみなへし、きゝやうなどさきはじめたるに。散木集曰、きゝやう。あやまたぬ花の
都をゝのれからうき京
なりと思ひけるかな

【形状】類聚抄曰、桔梗。味ノ苦ヲ吉トス。苦ヲステキザミテ、アフリテ粉ニセヨ。和漢香之記曰、桔梗は、秋の花のきはまりなくさける中にも、ききやう、かるかや、女郎花は、いづれをわきがたけれども、花の色きはめてそれとは見え侍らねども、むらさきのゆかりしたはれて、すがたやさしく咲によりて、香炉の内にうつして、ながめしはことはりに侍る

乃之 本草和名 【漢名】紫菀 本草 【今名】シヲン

【一名】加乃志太 新撰字鏡曰、紫菀。加乃志太 能之 倭名類聚鈔曰、紫菀。證類本草曰、紫菀。陶隠居云、近道處處有生布レ地、花亦紫本ニ有リ白毛一根甚柔細 和名能之。俗云、之乎迩 之乎迩 見上ニ 本草和名曰、紫菀。和名乃之。藻塩草曰、かんは櫻とかゝんとて、むの字をにとかける、しをんを、しをにと云がごとし 紫園 尺素往來、塵添壒囊鈔曰、和語ニ字ノ音ヲ用ル草ノ名是ニ不レ限、紫苑 鬼乃志許草 萬葉集巻第四曰、萱草、吾下紐爾、著有跡鬼乃志許草、事二思安利家理。仙覺萬葉集註釋曰、鬼のしこ草とは、おにとは、おそろしきと云なり。しことは凶と云詞也。言塵集曰、鬼とは凶也と云心之。鬼のしこ草と云も凶草之と云儀之。しことは醜之。みにくきとよませたり。又曰、鬼のしこ草と云ふ紫菀云と。藻塩草曰、

俊頼髓腦抄ハ刊本トハ少シ異多

鬼と云ふも凶の心之。鬼のしこ草と云ふも凶の草也と云ふしこは醜之、鬼なりと云ふ（字典曰、詩小雅傳醜惡也、左傳文十八年醜類惡物註、醜亦惡也）奥儀抄曰、おにのしこぐさは紫苑なり。これを見れば物忘れをせずといへり。同國雜記曰、おなじ野を分過けるに、しをにといへる花を見て「たゞねみんあだちが原のしるべかな此野にあへる鬼のしこ草。萬葉集卷第八曰、宇禮多伎也、志（醜）許霍公鳥。同卷第十七曰、之許（醜）都於吉奈乃、許等太爾母。同卷第十曰、概哉（ウレタキヤ）、四去（シコ）霍公鳥、今社者。詞林采葉抄曰、鬼ノシコ草ト云凶ノ草之。シコハ醜也。鬼之。日本書紀曰、醜女此ヲ云ニ志許賣（シコメ）ニ。古事記曰、即遣ニ豫母都（モツ）志許賣（メ）ヲ令レ追ハ。倭名類聚抄曰、醜女。和名志古女。或說云、黃泉之鬼也。世人爲レ恐ニ小兒ニ稱ニ許許女ニ者此語之訛。明德記曰、山名ガ一家ノ其中ニ、鬼コト、メトヲヂラレシ、上總助ト小林トナレバ。古今著聞集曰、鬼こゝめをも物ならず思へる武士は、おそろしき物ぞ、おもふとも叶ふべからず、いひさたせで有なんと人々いふを

しおに

雅輔裝束抄曰、とうほく院のねん仏の比より、うすいろのふゆさしぬきをしおに（紫苑）色とてきる、さてもありなん。たゞし、しをんいろはひがごとなり

鬼醜女草

詞林良材集曰、おにのしこ草の事云々鬼のしこぐさは紫苑の名也。物忘せぬ草也。歌は歎ことあらん人はうえてみるべからざる草といへり。俊頼髓腦抄曰、おにのしこぐさといふは、むかし人のおや子をふたりもちたりけり。おやうせにけるのち、こひかなしむ事、としをふれどもわするゝ事なし、むかしはうせたる人をば、つかにおさめければ、こひしきたびに、あにおとゝうちぐしつゝ、かのつかにゆきむかひて、なみだをながして、わが身に有うれへをも、なげきをも、いきたるおやなどにむかひていはんやうにいひつゝかへりけり。あにおとゝ、やう〳〵とし月つもりて、お

に刊　本やう　も　はか刊　本　本ノマ　ヽもと　よりあ　り刊本　は一こ　の人」　に作る　こそか　ゝり　刊本　一この　つか　に」

ほやけにつかへ、わたくしをかへりみるに、たへがたきことゝもありて、おもひけるやう、たゞにてはおもひなぐさなべきになし、萱艸といふ草こそ、人のおもひをわすらはすなれとて、萱艸をそのつかのほとりにうへて、そのゝちつねにきて、れゐのみはかへやまいるとて、さそひけれど、さはりがちになりて、ぐせずのみなりにけり。このおとゝの男、いとふうしとおもひて、（本ノマヽ）ひの日とをこひまうすにこそかゝりて日をくらし、夜をあかしつれ、われはわすれまうさじとて、紫菀といふ草をこそ、心におぼゆる事はわすれさすなれとて、紫菀をつかのほとりにうへてみければ、いよ〳〵わするゝ事なくて、日をへてしあるきけるをみて、つかのうちにこゑ有て、我はそこのおやのかばねをまぼる鬼之。ねがはくはおそるゝ事なかれ、君をまもらんと思ふといひければ、おそりながらきゝをりければ、君はおやに孝ある事、年月をくれどかはる事なし。あにのぬしは、おなじくこひかなしみてみえしかど、おもひわすれぐさをうへて、そのしるしをえたり。そこは紫菀をうへて、またそのしるしをえたり。心ざしねんごろにして、あはれぶところすくなからず。われ鬼のかたちをえたれども、ものをあはれぶこゝろあり。又日のうちのことをさとる、みえんところあらば夢をもちてしるしつけん、といひて聲やみぬ。そのゝちまたの日、あるべきことを夢にみる事、日としてやむことなし。是をきけば、紫菀はうれしきことあらん人はうへて見、たけくことあらん人は、うふべからざる草なり。されば志許草とは、心ざしのもとのくさとは書なり。塵添壒囊抄曰、鬼醜女草事。鬼ノシコ草トハ、何ナル草ゾ。非レ草、只悪（アシキ）草ト云詞ト云云。ワロシト云事ヲ、鬼共、シコ共云ヲ、餘リニワロシト云ントテ、鬼 シコト重テ云詞也。又凶ノ字ヲモ、シコトヨミ、鬼ヲ重テシコト云、サレバ鬼醜女（ヲニシコモ）只ワロ

シト云詞也

思草 詞林采葉抄曰、九条關白殿ハ、紫苑ヲ思草ト云ヱト被仰ケルト云〻

わすれぐさ 曾我物語卷第七曰、くさをわければ、うのはなのつぼみたるが一ふさおちたりけり云〻此はなをうへて、わすれぐさとなづけ給ひけるゝ。うたにも「もみぢてははなさくいろをわすれぐさひとあきながらふたまちのころ。そのわすれぐさは、しをんとこそきゝてさふらへとて云〻

集註 本草類編曰、紫菀。和乃之。二月三月採根陰干。仙傳抄曰、しをんなど、しうげんにはたてざる也。延喜式卷第三十七曰、典藥寮。臘月御藥。紫苑二兩。中宮臘月御藥。紫苑三分。東宮所須 紫菀一兩二分。每年十二月晦日 供殖藥樣云〻、紫菀云〻各四兩。諸司年料雜藥。齋宮寮。紫菀二兩二分。內匠寮。紫菀云〻各四兩。木工寮。紫菀云〻各一斤。左右近衛府。紫菀云〻各五兩。左右衛門府。云〻紫菀各三兩二分。左右兵衛府、紫菀云〻各三分。遣ニ諸番使一。唐使。紫菀云〻各四斤。渤使。紫菀云〻各二斤。諸國進年料雜藥。山城國、紫菀三斤。大和國、紫菀六斤。相摸國、紫菀八兩。近江國、紫菀十一斤。美濃國、紫菀云〻各廿斤。伯耆國、云〻紫菀各二斤。美作國、云〻紫菀各二斤十兩。備中國、紫菀云〻各六斤。備後國、紫菀十三斤。明月記曰、寬喜二年八月十九日、云〻前栽紫菀不似老翁之舊骨

近江國紫菀八、雲州校本ニ引ク京本貞享本ニハ紫參ニ作ル

さうび 源氏物語　**漢名** 薔薇 群芳譜　**今名** シヤウビ

群芳譜曰、薔薇、一名刺紅、一名買笑、藤身叢生莖青シテ多シ刺。花鏡曰、薔薇。藤本青莖多レ刺、宜シ結レ屏ヲ種一花有リ五色一、達レ春ニ接キ夏ニ而開、葉小ニシテ而繁シ、經レ冬ヲ不ニ大ニ落一、一枝開クコト五六朶ヲ。本草綱目曰、薔薇。人家ニ

栽ヘ玩者莖粗葉大也、延長スル數丈、花亦厚大、有ニ白黄紅紫數色一

一名 さうび 枕草紙。源氏物語 乙女曰、さうび しやうひ 仙傳抄。藻塩草曰、荊棘。むばらの花。又曰、古今さうびをかくしてよめり。我はけさうひにぞみつる。言塵集曰、うばらこきと讀り。春之。うばらの若枝之。撰集抄曰、うばら足にかゝり、おどろみをまとふ。常陸國風土記曰、茨城郡。古老曰、昔有ニ國巣一云云。濡緊ニ茨蕀一、痛害刺傷、終疾死散。故取ニ茨蕀一以着ニ縣名一。倭名鈔國郡部曰、常陸國茨城、牟波良岐。倭名鈔國郡部曰、河内國茨田萬牟多。日本紀略曰、延暦二十三年春正月戊寅、改テ茨田親王ヲ爲ニ萬多一ト。字典、茨字註曰、茨ハ說文ニ以レ茅蓋レ屋、又詩鄘風 牆ニ有レ茨、註蒺藜也。爾雅釋草ニ茨ハ蒺藜 註布レ地 蔓生ス細葉子ニ有テ三角一刺レス人ヲ。蒺藜ハ、ハマビシ也。延喜式卷第十五曰、内藏寮。御服料。小許春羅二疋、白綾十四疋、薔薇文三疋。明月記曰、治承四年四月廿六日。石淸水臨時祭。右少將公守朝臣云云、雜色萠木付薔薇。建仁三年四月廿三日、右番長近春、近衛久淸、童六人。着打山吹衣 墻薇付。元久二年四月廿二日、今宮祭後聞云云、雜色二藍共付墻薇丸、車、冑額、車物見并下ニ付薔薇。建暦三年四月十四日、云云雜色萠木 皆拔布 薄色衣、同單衣付薔薇 其色不優。寛喜二年二月廿三日、弁殿御裝束 右少將親季、隨身萠木袴付墻薇。四月廿四日云云次使車 童 赤色紅打黄單衣、墻薇袖大蝶交、冑ニ薔薇袖 大蝶

集註 本朝無題詩曰、薔薇含露爭前砌云云。榮花物語つぼみはな曰、はしのもとのさうびもなつをまちがほにたどして云云。尺素往來曰、夏花者云云薔薇。源平盛衰記卷第十一曰、階ハシノ本ノ薔薇モ折知ガホニ開ケタリ

形狀 枕草紙曰、さうびは、ちかくて、枝のさまなどはむつか

しけれどおかし。雨などはれ行たる水のつら、くろぎのはしなどのつらにみだれさきたる夕ばへ。源氏物語さかき曰、はしのもとのさうびけしきばかりさきて、春秋の花さかりよりもしめやかにおかしきほどなるに云々。本朝無題詩曰、賦薔薇。源時綱。薔薇一種當階綻、不只色濃香也薫、紅蘂風輕搖錦傘、翠條露重媚羅裙云々。藤原敦光。一種薔薇階底栽、門繞異彩立徘徊、山榴爭艶空慙妬、石竹謝粧幾作猜、蘂綴紅珠含露重、香薫紫麝帶風來云々。釋蓮禪。薔薇屬夏開階底、感緒紛紜昇又降、或白或紅粧不一、謂蘭謂菊色雖雙錦云々。文華秀麗集曰、逐春薔薇珊瑚色

○宇波良 本草和名

漢名 野薔薇 群芳譜　今名 ノイバラ

群芳譜曰、別有野薔薇、號野客、雪白粉紅、香更郁烈、法於花卸時摘去其蒂、如鳳仙法、花發無已。本草綱目曰、薔薇野生林塹間、春抽嫩蕻、小兒掐去皮刺食之、既長則成叢似蔓、而莖硬多刺、小葉尖薄有細齒、四五月開花、四出黃心、有白色粉紅二者、結子成簇、生青熟紅、其核有白毛、如金櫻子核、八月採之、根采無時

集註 延喜式卷第三十七曰、典藥寮。諸國進年料雜藥。攝津國、薔薇根云云各四斤。按ニ野薔薇根也

○宇波良乃美 本草和名

漢名 營實 本草　今名 ノイバラノミ

本草經疏曰、營實華於春而實於夏

集註 本草類編曰、營實。和宇波良乃美。九月採陰干。又薔薇子也。砂石集曰、遠州ニモツバクラメノ雌死セリ、雄別ノ妻ヲ具テ來ル、サキノ子巣ニ有ケルヲ、今ノ雌ウバラノミヲクハセテ皆殺シツ

長春花 明月記 即通名 【漢名】月季花 本草 【今名】チヤウシユン

花史左編曰、俗名月月紅、又名月季花、又名長春花、又名勝春花、又名鬪雪花、一本叢生、枝幹多レ刺而不二甚ダ長一カラ、花有二深紅淺紅之異一。群芳譜曰、月季花ハ灌生ス處處、有リ二人家多ク栽插一之、青莖長蔓葉小ナリ二於薔薇一ハ、莖與レ葉倶有レ刺、花有二紅白及淡紅三色一、白者須下植二不レ見レ日處一ニ見レ日則變而紅シ、逐レ月一ヒ開ク、四時不レ絶、花千葉厚瓣亦薔薇之類也

【形狀】明月記曰、建暦三年十二月十六日、籬下長春花猶有紅藥、早晩不以例、此間鶯舌頻歌、早速先春歟、又白梅開云云

【今案】華夷草木考曰、長春樹、燕昭王種二長春樹一ヲ、葉如二蓮花一ニ、樹身似リ二桂樹一ニ、花隨フ二四時之色一ニ、春ハ生ス二碧花一ヲ、春盡則落、夏ハ生ス二紅花一ヲ、夏末則凋ム、秋ハ生ス二白花一ヲ、秋殘則萎ム、冬ハ生ス二紫花一ヲ、遇ヘハレ雪ニ則謝ス。○此レ薔薇ト迥ニ別物也、○長春花與二金盞草一同名

己加女川留 本草類編 【漢名】金櫻子 本草 【今名】ナニハイバラ

本草綱目曰、頌曰、叢ニ生ス郊野中一ニ、大ニ類ス二薔薇一ニ有レ刺、四月開二白花一ヲ、夏秋結レ實、亦タ有レ刺、黃赤色形似二小石榴一ニ

【形狀】本草類編曰、金櫻子、和己加女川留、如野薔薇有刺、四月開白花、夏秋結實、亦有刺 黃赤色形似小石榴、十一十二月採。大和本草曰、金櫻子、和俗難波イバラ、又大イバラト云、枝葉ツチノイバラヨリ大ナリ、刺多シ、枝垂テ長シ、單白花ヲ開ク、花モ大ナリ、有レ香、其實大ナリ、罌ノ形ニ似タリ、

挾メバ能活ク

【正誤】大和本草ニ、金盞子、本邦ニ昔ヨリナクメ近年中華ヨリ來レリト云、臆断也。本草類編既ニ金盞子ヲ載レバ、從レ昔産ニ於日本一明シ矣

しもつけ　枕草紙　【漢名】繡線菊　花史左編　【今名】シモツケ　【一名】下野花　尺素往來　下津

羣芳譜曰、史鑄菊譜、繡線菊、厭草花是也。花頭碎紫成レ簇ヲ、而生ス心中ニ吐ニ出素縷一ヲ如ニ線之大一、自レ夏至レ秋有レ之、俗呼爲ニ厭草花一

花　一本尺素往來。藻塩草曰、下野。しもつけやまがきにまじるあぢさゐのよひらに見ればやへこそはさけ　【集註】散木集曰、しもつけ「うらみてもなにゝかはせん花みるとけさしもつけぬ心せばさは。枕草紙曰、草の花は、しもつけのはな　【形狀】大和本草曰、草下毛（シモツケ）、木ニモ下ツ毛アリ。花ハ相似タリ。初夏發ニ細紅花一ヲ、一朶群開ク如ニ敗醬一

古無軟（コムセム）　倭名類聚鈔　【漢名】金盞草　本草　【今名】キムセムクハ

花鏡曰、長春花ハ一名金盞草、江浙頗ル多シ。蔓生シ籬落ノ間ニ、葉似テ柳ニ而厚ク、抱レ莖ヲ對生ス。莖上開レ花ヲ、金黄色、狀如シ盞子ノ、有テ色無シ香。但喜ニ其ノ四時ニ不レ絕ヘ結ブ、實ヲ如シ雞豆子ノ、其ノ中細子旋レ粒如ニ尺蠖蟠曲形ノ、子落レ地ニ隨テ出ツ　【一名】キンセン　塵添壒囊抄曰、和語ニ字ノ音ヲ用ル草ノ名金錢　【集註】倭名鈔曰、金錢。俗云、古無軟。本朝無題詩曰、源時綱。石竹金

錢雖信美

今案 金錢花ハ午時花ノ名也。花史曰、金錢花。此花午開子落又名子午花。草花譜曰、金錢花出自外國、梁ノ時外國進花朵如錢亭々トシテ可愛。學圃六書曰金錢一名子午花、午開子落、吳人呼為夜落金錢、花深紅色。花鏡曰、吳人呼紅者為金錢。日本古書ニ金錢ト出ルハ金盞草也。尺素往來ニ、春花者金錢ト云、金盞草ハ春月開花、午時花ハ春種子ヲ下シ生シ夏發花レバ、金錢ト云ハ皆金盞草ヲ云モノ也

安治佐爲（アヂサヰ） 萬葉集第二十

漢名 八仙花 花鏡　今名 アヂサヰ

物理小識曰、八仙花體似繡毬ニ白花八朵為叢結子、瓣薄而不香。花鏡曰、八仙花ハ即繡球之類也。因其一蒂八蕋簇成一朵故名八仙花ト。其花白瓣薄而不香シ　一名 安豆

佐爲

倭名類聚抄。白氏文集ノ紫陽花ハ即紫花ノ木犀、古說ニ為ハ安治佐為ト非ナリ。乃チ先人之說也。詞語陽秋曰、有山花一色紫氣香潤麗可愛人莫知其名ヲ、白樂天標其名曰紫陽ト紀スルニ之以詩ヲ

味狹藍

萬葉集第二十。萬葉集卷第四曰、珠衣乃、狹藍（サヰサヰ）左謂沉、家妹爾（イヘイモニ）云云。仙覺萬葉集註釋第四曰、あぢさゐとは、あぢは ふる也　阿知佐井 藻塩草　止毛

久佐

新撰字鏡曰、蕢 止毛久佐、又安知左井。字典曰、蕢ハ類篇、蕢縷草ノ名。按爾雅無蕢字。正字通以為蔞字之譌ト。玉篇曰、蔞 素老切。菽、蔞蔆也。爾雅曰、菽、蔞藧也。註今蔞藧也。即ハコベ也。正字通ニ藧結藧草ト云ハシバ也　安知左井 見上　安川佐伊 本草類編　またぶり草 言塵集曰、またぶり草、あぢさいえ　四平

那　耶ニ作ル本アリ
眞丹　丹眞ニ作ル

草　言塵集曰、またぶり草とは、あぢさいの一名也。和名云、名四平草

〔集註〕萬葉集卷第四曰、事不問ヘ、木尚味狹藍（スラアヂサヰ）諸茅等之（モロチヨガ）練乃村戸二、所詐來（アザムカレケリ）。東山殿御香合曰、おりから五月雨のころは云々またひとりのわらは、こゝにあぢさひのものせりと云かゝるところに

〔形狀〕散木集曰、あぢさゐの花のよひらはをとづれてなぞいなのめのなさけばかりぞ。萬葉集曰、安治佐爲能、夜敞佐久其等久、夜都與爾乎、伊麻世和我勢故、美都都思努波牟。右一首左大臣寄味狹藍花詠也。新古今新抄曰、あぢさいの下葉にすだく螢をばよひらの花をとふにぞ有ける。藻塩草曰、あぢさゐのやえさくとよめり。本草類編曰、安川佐伊、似桐花薄紫也。花譜曰、あぢさい、ひらく時白くして後に靑し、夏至の後花さく

布智波賀麻（フチバカマ）　類聚國史

〔漢名〕蘭草　本草

〔今名〕フチバカマ

花壇綱目曰、南椰藤袴とも云。本草綱目時珍曰、蘭草ハ生二水旁下濕之處一、二月宿根生シテ苗ヲ成レ叢ヲ、紫莖素枝赤節綠葉對節生ス、有二細齒一。但以テ莖圓節長而葉尖有レ岐者ヲ爲二蘭草一ト。八九月後漸ク老テ高キ者三四尺、開キレ花ヲ成レ穗ヲ如シ二雞蘇花一ノ紅白色中ニ有二細子一、

〔一名〕**布知波加末**　本草和名曰、蘭。和名布知波加末。類聚國史曰、大同二年九月乙巳幸二神泉苑一、琴歌閑奏。四位以上共挿二菊花一。于レ時皇太弟頌歌云、美那比度乃、曾能可邇米豆留、布智波賀麻、波美能於保母能、多乎利太流祁布。上和レ之曰、袁理比度能、己己呂乃麻眞丹、布智波賀麻、宇倍伊呂布賀久、爾保比多理介利。羣臣倶稱二萬

歳ニ 藤袴 萬葉集巻第八曰、山上臣憶良詠秋野花云云又藤袴、朝貌之花 布知波賀萬 倭名類聚鈔曰、蘭。和名本草云、布知波賀萬。新撰萬葉集別用藤袴二字 布知波賀麻 天文写本和名抄 阿良々支 新撰字鏡曰、蕬。阿良々支 家阿良々支 字鏡曰、蕬。家阿良々支 不知波加末 本草類編 阿良々木 倭名鈔葷菜類曰、蘭萃。和名阿良々木 阿良々岐 天文写本和名抄。本草和名曰、蘭高草。和名阿良々岐。壒嚢抄曰、此國ノ蘭ヲモ蘭ト云フ、無ニ相違一歟 ふぢはかま 仙傳抄 らに 源氏物語ふぢはかま曰、らにの花のいとおもしろきをも給へりけるを、みすのつまよりさしいれて、これも御らんずべきゆへはありけり、とて、とみにもゆるさでも給へれば、うつたへに、思ひもよらでとり給ふ御袖を、引うごかしたり。「おなじ野の露にやつるゝ藤ばかまあはれはかけよかごとばかりも。云々「尋ぬるにはるけきのべの露ならばうすむらさきやかごとならまし

【集註】 本草類編曰 蘭草。和不知波加末。四月五月採之。延喜式巻第三十二曰、大膳上。園韓神祭雑給料。蘭十把。春日祭雑給料。云云蘭十把 已上九種内膳司所レ進 海南日抄ニ曰、荊州記ニ都梁縣有リ山生ス蘭草ヲ、名ヅク都梁香ト、可シ殺シ蟲毒ヲ除ク不祥ヲ、故ニ鄭人于溱洧ニ秉テ蘭ヲ祓除ス、其ノ云ク殺シ蟲毒ヲ除クハ不祥ヲ 同巻第三十三曰、大膳下 七寺盂蘭盆供養料。云云蘭各二把。仁王經齋會供養料。干蘭云云、海菜料、各以テ一把ヲ充ツ四口ニ。同巻第三十九曰 内膳司。供奉雑菜。蘭二把、准ニ一升ヲ、自リ正月一迄ル十二月ニ。漬年料雑菜。蘭葅三斗、料塩二升四合、稔一升二合。日本書紀曰、允恭天皇二年春二月丙申朔己酉ノ、立忍坂ノ大中ッ姫ヲ為ス皇

后云云、初皇后隨母在家、獨遊苑中、時鬪雞國造從傍徑行之、乘馬而莅籬、謂皇后嘲之曰、能作園乎、汝者也。且曰、厭乞、戸母、其蘭一莖焉。皇后則採一根蘭、與於乘馬者、因以問曰、何用求蘭耶。乘馬者對曰、行山撥蠛也。時皇后結之意裏乘馬者之辭无禮、卽謂曰、首也、余不忘矣。是後、皇后登祚之年、覓乘馬乞蘭者、而數昔日之罪、以欲殺。爰乞蘭者顙搶地叩頭曰、臣之罪實當萬死、然當其日不知貴者、於是皇后赦死刑、貶其姓謂稻置。續日本後紀卷第十五曰、承和十二年九月癸丑、是日重陽節也。天皇御紫宸殿賜宴。令賦九日洗蘭之題。宴了賜祿有差　扶桑略記廿四曰、蘭菜雖凋餘香猶播。明月記曰、寬喜二年七月七日蘭叉開。鬪詩略記曰、蘭氣入輕風、文時。滿園蘭氣亂紛紜云云直幹　香蘭叢草種相分云云。源氏物語にほふみや曰、秋の野に、ぬしなき藤ばかまも、もとのかほりはかくれて、なつかしきをひ風ことに、おりなしがらなむまさりける云云おとろへゆくふぢばかま云云。倭穎髓抄曰、主さだまらぬふぢばかまを、さゝがにの糸にかけ

由里　倭名類聚鈔　[漢名] 百合　本草　[今名] サユリ　[一名] 由利　天文写本和名抄。倭名鈔曰、百合、和名

本草綱目時珍曰、百合一莖直上シ四向ニ生ス葉ヲ、葉似短竹葉ニ、五六月莖端開ク大白花ヲ長サ五寸、六出紅蕊、四垂向レ下、色亦不レ紅

葉ノ下刊本「不」

似柳葉ニアリ略セルカ

由利、本草和名曰、百合。和名由利。新撰字鏡曰、百合。由利。萬葉集卷第七曰、道邊之、草深由利乃 花咲爾、咲之柄二、妻常可云也

佐由里 萬葉集卷第八曰、吾妹兒之、家乃垣內乃 佐由理花、由利登云者、不謂云二似

佐由利 萬葉集卷第十八曰、五月九日諸僚會少目秦伊美吉石竹之館飲宴、於時主人造百合花縵三枚疊置豆器捧贈賓客、各賦此縵作歌三首。安夫良火能 比可里爾見由流 和我可豆良、佐由利能波奈能 惠麻波之伎香母。等毛之火能、比可里爾見由流、佐由利婆奈、由利毛安波牟等、於母比曾米豆伎。左由理波奈、由利毛安波牟等、於毛倍許曾、伊末能麻左可母、宇流波之美須禮

左由理 見上

早百合 尺素往來

佐由流 萬葉集卷第二十曰、都久波禰乃、佐由流能波奈能、由等許爾母、可奈之家伊母曾、比留毛可奈之祁

さゆり 藻塩草、しほみてば野しまがさきのさゆり葉に波こす風のふかぬ日ぞなき

佐韋 古事記曰、其河謂佐韋河由者、於其河邊山由理草多在、故取其由理草之名、號佐韋河也。山由理草之本名云佐韋也

山由理草 見上

狹井 古事記曰、其伊須氣余理比賣命之家在狹井河之上、云云歌曰、佐韋賀波用、久毛多知和多理 宇泥備夜麻

集註

本草類編曰、百合。和由利。二月八月採根暴干。出雲國風土記曰、神門郡所在草木百合。仁多郡所在草木百合。和泉國風土記曰、日根郡山野所在草木百合。日本書紀曰、皇極天皇三年夏六月癸卯朔、大伴馬飼連獻百合華、其莖長八尺、其本異而末連。延喜式卷第三十七曰、典藥寮。每年十二月晦日供殖藥様云云百合云云各四兩。諸國進年料雜藥、伯耆國百合一斗一升。萬葉集卷第十八曰、庭中花作歌。情奈具左爾、奈泥

之故乎、辰戸須末枳於保之、夏能能之、佐由利比佐宇萬天　開花乎、移低見流其等須、那泥之古我、曾乃波奈豆末須、左由理花。源氏物語さかき曰、あはまし物をさゆり葉のとうたふ。催馬樂曰、心もまたいけん、ゆり花の、さゆり花の、けさゝいたるはつ花に、あはまし物を、さゆり花の。愚案抄云、ゆり花は百合花之。さゆりは早くさくゆり之。八雲御抄曰、百合こゆりばな、さゆり花ともいへり。さゆりのはなとも。東山殿御香合曰、そこの垣のとに、しられざりけるさゆりの花、はがくれにみゆ

【形狀】仙覺万葉集注釋第十七曰、さゆりばな、ゆりもあはむとつゞくることは、ゆりといふ名につけてつゞけぬべきうへに、かの花はこと花よりもおほゐらかに、おもきによりて、風などいさゝかも吹時は、わきてゆられたちたれば、ゆりもあはんとよそへよめる也

【附方】乳癰　頓医抄曰、百合根擣テ可塗

姫由理（ヒメユリ）　萬葉集

【漢名】山丹　本草　【今名】ヒメユリ

花史左編曰、山丹。花如シ朱紅ノ、外ニ有リ黄色ノ、有リ白色ノ者ニ二種稱ス奇。本草綱目曰、山丹ハ根似テ百合ニ小、而瓣小葉亦タ短小、其ノ葉狹長ニシテ而尖リ、頗ル似タリ柳葉ニ、與百合ニ迥カニ別ナリ、四月開ク紅花ヲ、大瓣不四垂ハ、亦タ結ブ小子ヲ

【集註】

【一名】光草　藻塩草曰、光草。ひめゆりの異名也。これをほたるの異名といへるはいはれず。これはひかり草之。かながきのものにてまぎれたりと云こ

堀河院次郎百首曰、くだら野のちはやがしたのひめゆりのね所人にしられぬぞうき。散木集曰、きのふまできびわにみえしひめゆりのいつたち馴て人しみぬらん

堅香子（カタカゴ）萬葉集 ［漢名］山慈姑 本草 ［今名］ハツユリ

證類本草曰、山茲菰生山中濕地、葉似車前、根如慈菰。［一名］井のしり 仙覺萬葉集注釋 かたかこ 同上 ［今案］古今六帖ニ、カタカシト訓非也。堅香子ハ、カタカゴト訓ベシ。續日本紀巻第二十曰、孝謙天皇天平寶字元年三月乙亥、勅、自今以後云云君子部爲吉美候部。トミユレバ子ヲ候ト訓ル徴也。百練抄第四曰、小右記云、出雲權守云云檪師逃隱愛太子山。三代實錄第二十二曰、阿當護 ［集証］萬葉集巻第十九曰、攀折堅香子草花歌一首。物部能、八十乃嬬嬬等之、挹亂、寺井之於乃、堅香子之花 ［形狀］仙覺萬葉集註釋巻第十九曰、此哥の落句古點にはかたかしのはなと點ぜり。是をかたかごの花と點ずべし。かしと点榰の木にまがひぬべし。端作の詞に、堅香子草花とかけり。草と聞えたり。かたかごをば、又は井のしりといふ。春花さく草也。その花の色はむらさきなり。地錦抄曰、初ゆり、花紫にて、ひめゆりほどあり。下へむきて花さく。葉は行者にんにくといふ草のごとく、花一りんづゝ莖立て咲ク。高サ四五寸。ふんたいゆりともいふ也 ［正誤］太和本草曰、カタコ。萬葉集攀折堅香子草花哥云云古抄云、香子ハ猪舌トモ云、此説杜撰也。筑前國風土記曰、仙覺が萬葉の注を見るに、いにしへ從を

傳へてまことに信從すべき事多し、頗好書といふべし。去れ共附會牽合の說、杜撰臆度の意も又すくなからず。逐一に信じがたしト觀ユ。筑前後風土記ハ篤信ガ作ナリ。萬葉古抄ト云ハ、仙覺萬葉集註釋ナル了明也。然ニ仙覺抄ニ香子、猪舌ノ字ナク、かたかこ、井のしりト出セリ。猪舌ハ井のしりノりの字ヲさの字ト見誤タル也。本草啓蒙此誤ヲ受タリ

加木豆波太（カキツバタ） 倭名類聚鈔　【漢名】紫花蓀 遵生八牋ニ載ル紫花蓀ニタ、平泉草木記ノ蘭蓀也　【今名】カキツバタ

【一名】加岐豆波太 天文写本和名抄　加岐都波太 本草和名　垣津幡 萬葉集第七曰、常不、人國山乃、秋津野乃、垣津幡鴛、夢見鴨。墨吉之、淺澤小野之垣津幡衣爾摺着、將衣日不知毛　垣津旗 萬葉集第十一曰、垣津旗、開沼之菅乎、笠爾縫云々。同第十曰、吾耳哉、如是戀爲良武、垣津旗、丹頰令媛者、如何將有

垣幡 萬葉集卷第十一曰、垣幡、丹頰經君叫率爾思出乍、嘆鶴鴨　加吉都幡多 萬葉集卷第十七曰、加吉都幡多、衣爾須里都氣、麻須良雄乃、服曾比獵須流、月者倍爾家里

かいつばた 雅輔裝束抄曰、りんだう、かいつばたにおなじ　貞吉草 藻塩草曰、杜若。貞吉草、かほよばなとも云。これつねの事也。藏玉にあり。言塵集曰、かほよ草、かきつばたの一名なり。衣の色に、かいつはた、かきつばた衣え。按ニ字鏡曰、妓美婦也。加保與支女　かほ花 岷江入楚曰、常陸國に杜若を、かほ花と云　貌花 萬葉集卷第十

原本頭注 紫燕ハ灌園草木志ニ出ヅ、鳶尾ノ事也

日、石走、間間生有、貌花乃、花西有來、在リ筒見レ者。仙覺萬葉集註釋第十曰、かほばなとはかきつばた也。かほとりのなくときにさけば、かほばなといふ。藻塩草曰、可保夜沼、上野。あつまぢのかほやがぬまのか
きつばた春をこめて
もさきにけるかな

容花 萬葉集卷第八曰、高圓之、野邊乃容花、面影爾、所見乍妹者、忘レ不勝裳

可保婆奈 萬葉集卷第十四曰 宇知比佐都、美夜能瀬河泊能、可保婆奈能、孤悲天香眠良武、伎曾母許余比毛

可保我波奈 萬葉集卷第十四曰、美夜自呂乃、緒可敝爾多氏流、可保我波奈、莫佐吉伊低曾禰、許米氏思努波武 [正誤]

倭名鈔曰、本草注云、劇草。一名馬藺。和名加木豆波太。言塵集曰、かきつばたとは劇草と書、又馬藺と書。壒嚢抄亦劇草カキツハタト點ズ。按ニ宋板證類本草云、蠡實一名劇草。唐本注云、此即馬藺子也。即今云子チアヤメ也○言塵集曰、垣津旗ハ杜若之。按ニ杜若、和産未詳。本草一家言ニ、ヤブメウガニ充非也。ヤブメウガハ根苗絶テ香氣ナシ。正字通曰、杜若、本草圖經云、苗似ニ山薑ニ根似ニ旋覆ニ、花黄赤、子赤色大サ如ニ棘子ニト云ヘバ杜若ハ子赤色ナルコ明也。ヤブメウガハ子碧色ニメ不レ充。○證類本草云、杜若。味辛微温、陶隱居云、根似高良薑而細辛香。字彙曰、杜若 香草 苗似タレ薑、然則杜若ハ味辛ノ證明ッ也。ヤブメウガハ辛味ナク、瘴氣ヲ除クベキモノニ非ズ。廣東新語曰、鮮草果人多ク種テ以爲ス香料ニ、蓋即杜若非ニ藥中之艸果ニ、其苗似ニ縮砂ニ、三月開レ花作レ穗ヲ、色白微紅、五六月結レ子ヲ、其根勝レリ於葉ニ、味辛以濕能除ク瘴氣ヲ、久ク服、益ス精ヲ明目ヲ令ム人不ラ忘。楚辭云ク、山中ノ人兮芳杜若其レ亦以ニ服食ニ邪、觀レ此ヤブメウガハ可レ明ニス益非ニ杜若ニ也。南鎭子云、漢土の事を我大日本へうつすは甚ちかし。それにさへ取ちがへて、杜若をか

きつばたと訓し、欵冬をやまぶきとおもふ類、あげてかぞへがたし。大和本草ニ燕子花ヲカキツバタトス、不穩。東雅ニ漳州府志等ニヨリテ溪蠻叢笑ニミヘシ燕子花ハ、此ニ云カキツバタナリト云也。紫花全似燕子ナド云処ニ似タルコハ似タレドモ、叢笑生於藤也ドモミヘズト云リ。物品目錄曰、燕子花藤生ニメ不合垣燕立草、或說ニ漳州府志、海澄縣志ノ二書燕子花條ニ引テ叢笑ハ刪生於藤三字爲誤明矣、ト云ハ甚强說也。

漳州府志、海澄縣志二書非刪去省略於本文者也。總テ府志通志省略於本書ノ文ヲ、江陰縣志西番蓮葉如菊花ノ如智相色淡青與諸花異貴州志西洋蓮蔓細如絲ノ朱色繚繞籬間花初開如黃白蓮ノ久之瓣落其蘂復變爲菊又名西洋菊觀此則漳州海澄二志生於放藤三字爲略文甚明矣蓋西番蓮白花千葉鐵線也花鏡ニ曰西番菊葉如菊ノ細而尖花色茶褐雅淡似菊之月下西施自春至秋蘤不絕亦佳品也春間將藤壓地自生根隔年絕斷分栽即活、群芳譜曰西番蓮ハ花淡雅似菊之月下西施自春至秋相繼不絕亦花中ノ佳品春間將藤壓地自生根隔年鑿斷分栽志類ニ叢笑ノ文ヲ不引カメ、新ニ改出スモノハ誤ヲ正メ出セシ也。既ニ本書ノ文ヲ引書名ヲ出スレバ、生於藤ノ三字脫文タルコ明シ。且叢笑ニ一枝數葩ト云ヘバ蔓生シテ蔓ニ枝出デ、枝如ニ數花ヲ發クコ明也。カキツバタハ一莖地ヨリ直立シテ、梢ニ包ヲナシ内ヨリ只二三花ヲ開。然レバ燕子花ハ全クカキツバタニ非ザル證詳明也。溪蠻叢笑曰、燕子花、紫花全類燕子生於藤、一枝數葩、倘湖樵書、古今說海其他諸書引溪蠻叢笑文出之、皆同文也 大和本草曰、燕子花福州府志ニ出タリト云誤也。福州府志、花之屬、草之屬俱燕子花ノ名無之鮮之屬ニ鎗魚似鯿尾如燕子ト見エタリ尤カキツハタニ充ベキ事ナラズ

今案　萬葉集卷第八曰、吾妹兒之、家之垣内乃、佐由理花。同第十八曰、一、答屬目發思兼テ詠ニ云還仕舊宅西北隅櫻ノ樹。和我勢故我、布流伎可吉都能、佐具良波奈。同卷

第十九日、鶯能鳴之可伎都爾、爾保敝理之梅此雪爾、宇都呂布良牟可。トミユレバ可吉都ハ垣内ニメ、紫微垣内ヲ云也。鰲海集曰、紫間色而、天垣稱紫微、豈非寓意之精乎、夫紫之爲色赤與黑相合而成也。水火相交陰陽相感而後萬物以之而爲生、萬物以之而爲生是ノ故ニ爲萬物之主宰矣。又曰紫色乃水火陜陜相交既濟流通之義也。故天垣曰紫宮、又曰紫微者、紫宮微妙之所也。是以天子之居亦曰紫震、面南拱北之情合矣續日本紀ニモ紫微中臺制官位、又紫微內相紫微大弼アリ。萬葉集第二十ニ紫微大弼ト出。閲大暦ニ紫微內相ノコトミユ。五雜組曰、紫微ハ原爲帝星、以其政事之所從出、故中書省亦謂之紫微、而舍人爲紫微郎。本朝文粹曰、洛城有一ノ形勢、世謂之東二條ト云云今准紫禁二年移朝儀於此地。續文粹曰夫堀河院者洛城ノ甲第也准紫庭而一代忝移万乘之皇后ト云云。丹鉛總錄曰、紫者赤黑之雜。正字通曰、紫黑赤間色」漁隱叢話曰、按天文志紫微大帝之坐也、天子之帝居也。府詩鼓吹曰、天有紫微垣、人主之宮象之、宮曰紫宮、又曰紫禁、殿曰紫宸。選詩補註曰、紫宮星垣名、一曰紫微、喩皇都也。春秋合誠圖曰、天皇大帝北辰星也含元秉陽舒精吐光、居紫宮中制御四方、冠有五采文。韓文注、天有紫微、人王之宮象之、故曰紫宮。可吉都ハ即紫微垣內ノ色ヲ云。眞俗交談記曰、王城ノ異名非一、其ノ內號九重之意。如何。資實云、北辰所居宮名紫微、此ノ宮有九位、九位者九極也。極則九重也。是故帝譬北辰城名九重。トミエタリ。續日本紀第二曰、一位者皆黑紫。諸王二位以下、諸臣三位以上者皆赤紫。直冠。延喜式卷第四十一曰、彈正臺。凡大臣帶二位者、朝服著深紫、諸王二位已下五位已上、諸臣二位三位並著中紫。衣服令曰、諸王礼服、一位深紫衣、二位以下五位以上並淺紫衣、諸臣礼服、一位深紫衣、三位以上淺紫衣。藤波家礼曰、三位以上ヲ內階ト云　常陸國風土記曰。久慈郡。東山石鏡、所有土色如青紺、用畫麗之。俗云阿乎尓、或云加支川尓。トミルハ、即今ノ紺青即扁ニ寄ス　加支川ハ

垣津幡ノ色ヲ云ル明證也。正字通曰、紺深青赤色。釋名紺含也。謂青而含赤色也。倭名鈔國郡部ニ、碧海。阿乎美。令義解曰、碧亦青色也。字典碧字注曰、增韻碧深青色。格古要論曰、畫碧今深青色　萬葉集ニ、垣幡、垣津幡、垣津旗ノ字ヲ用ユ。此花開テ旗幡ニ似タレバ也。釋日本紀ニ、幡荻（ハフスキ）幷方案之幡荻者欲レ謂ニ穗出ニ之發語也　倭名鈔伽藍具曰、幡。和名波太。征戰具曰、旌。考工記云、旛音翻、和名波太　旌旗之物名也。出雲國風土記曰、青幡佐草咕命。字典旛字注曰、詩小雅旛旛瓠葉。傳、旛旛瓠葉貌。新撰字鏡曰、旟旗也。旗之屬也。楊也。波太。字典旗字注曰、班固西都賦、建華旗。湧幢小品曰、載旄於竿頭者曰旌。月淸集曰、後京極。むらさきの庭のはる風のどかにて花に霞めるくものうへかな。夫木集曰、俊成。こゝのへや玉しく庭のむらさきの袖をつらぬる千代の初春。續日本紀第十四曰、天平十三年十一月庚午、始以ニ赤幡ニ班ニ給大藏、內藏、大膳、大炊、造酒、主醬等司ニ、供御物前ニ建テ以テ爲レ標（シルシト）。同第二十六曰、儀衛卷ニ其旗幟ヲ。同第三十五曰、唐使之行左右不レ建レ旗行宮立ニ旗前後ニ。三代實錄第六曰、幡十八旒、各長一丈五尺、施ニ入國分寺ニ。延喜式第十三曰、圖書寮。幡五十二旒云云。幡四流、縣ニ幡桙四枚。同第四十五曰、左近衛府　大儀。中將率ニ將監以下ニ隊ニ於大極（コク）殿南階下ニ、大少將率テ將監以下ヲ隊ニ於中務陣以（ヨリ）北ニ龍像纛（タウ）ノ幡一流加レ戟云云　鷹像隊幡四旒、小幡四十二旒。緋黃各廿一旒、並ニ著タリレ戟ニ。同第四十六曰、左衛門府。大儀。督率ニ尉以下ニ隊ニ於會昌門外ノ左ニ。鷹像纛幡一旒、鷹像隊幡二旒、小幡四十九旒。同第四十九曰、兵庫寮。凡大射ニ建ニ羅幡ニ云云阿禮幡十二旒　各著レ柄。左第一紫色、次深綠、次緋、次綠、次黃、次淺綠云云。幡廿旒、々別著レ柄。袖中抄曰　幡は佛前のはたなり。旗は儀式戰（いくさ）の陣等のはた也（〇校云袖中抄曰以下也マデノ文此所ニ重出セリ今トル）萬葉集第二曰、青旗（アヲハタノ）乃、木旗（コハタノ）能上乎（ウヘヲ）、賀欲布跡（カヨフト）羽トミユ。カキツバタハ即紫ノ旗ト云ル也。

北山抄曰、射禮儀云々次執幡者四人二人執紫幡、在四位以上前、二人執紺幡、在五位前、執紫幡者、不及行立位一許丈、佇立舉幡云々。觀ルニ此ニ則紫幡ハ四位已上ノシルシタルコト明也。群書拾唾云、九旗幟也、所以結衆卑貴賤之表識也。

萬葉集第十四曰、古非思家婆、伎縣世和我勢古、可伎都楊奨、宇禮都美可良思、和禮多知縣多牟。即カキツバタハ紫微垣內紫色ト云ルコト明也



此圖和漢諸書ニ多シ此ハ元ト天文成象ノ圖也

東關紀行ハ群本トハコトナレリ

[集註] 東關紀行曰、みかはの國八はしといふところをみれば、これも昔にはあらずなりぬるにや、はしもたゞひとつぞみゆる。かきつばたおほかる所と聞しかどもあたりの草もみなかれたるころなればにや、それかとみゆる草木もなし云々。清少なごん松嶋日記曰、三河國と名のみ聞しをなん聞えまがふもうしろめたきに、八橋のくもでもくらにたるに、青柳の俤たえて、かれたる落葉こゝら水に〔○う脱カ〕かひておかしきに、おもひつゞくるもむねいたしかし。ものおもふくもでの水にちりうかぶかれ枝のやなぎ俤もなし。源平盛衰記卷第十一曰、汀ニ生ル杜若。つれ〴〵曰、草は、山吹、藤、かきつばた、なでしこ。富士歷覽記曰、十九日、八はしを見に、人〴〵さそひまかりて、み侍れば、きゝをよびしよりかたちもなくあれはてゝ、かきつばたなども心うつくしくみえ侍らず。あはれなるこゝちして [形狀] 千首和歌曰、紫のゆかりの色に今咲て夏もへだてぬかきつばたかな。枕草紙曰、すべて紫なるは、なにも〳〵めでたくこそあれ、花も、いとも、かみも、むらさきの花の中に、かきつばたぞすこしにくき。いろはめでたし。和漢香之記曰、かきつばたは、色ことにむらさきといひ、日本にて花の君子といへば、何れの花をか紫のうへにはおき侍らん

古也須久佐 本草和名　[漢名] 鳶尾 本草　[今名] イチハツ

證類本草曰、鳶尾、布レテ地ニ而生ス、葉扁ニシテ闊ニ於射干ヨリ、蘇云、花紫碧色、根如ニシ高良薑ノ者是也。本草綱目、鳶尾。集解。恭曰、此草所在有リ之、人家亦タ種ユ、葉似テ射干ニ而濶短、不レ抽ツ長莖ヲ、花紫碧色根似タリ高良薑ニ、皮

黄肉白、嚼ニ之ヲ戟ニ入咽喉ニ

一名 **古夜須久佐** 倭名類聚鈔曰、鳶尾。和名古夜須久佐。本草和名曰、鳶尾。和名古也須久佐

己也須久佐 本草類編曰、鳶尾。和己也須久佐、五月採之

加岐都波奈 本草和名曰、由跋。和名加岐都波奈

加木豆波奈 倭名類聚鈔曰、由跋。和名加木豆波奈

加岐豆波奈 天文写本和名鈔。按ニ加岐都ハ紫微垣内ノ紫色ヲ云。由跋。本草、時珍曰、此即天南星之小者。藻塩草ニ由跋かきつはたと云誤也

加川波奈 本草類編曰、由跋。和加川波奈。又云、加和太乃仁

加和太乃仁 見上

今案 本草和名。倭名類聚鈔ニ由跋ヲ加木豆波奈ニ充ルハ、本草ニ、陶隠居云、由跋。今都下亦種之狀如ニ烏翣ニ而布レ地、花紫色根似ニ附子ニト云說ニ據リ、加木豆波奈ヲ以テ誤テ由跋トス。本草綱目、由跋ノ正誤ニ、恭曰、陶氏所レ說乃チ鳶尾根即チ鳶頭也。トミエタリ。倭名鈔、本草和名、本草類編、倶ニ鳶尾ヲ古也須久佐ト云、其、花紫色ナレバ加岐都波奈ト云ハ、敗醤ヲ知女久佐倭名鈔ト云、其花ヲ女倍芝倭名鈔ト云ト同例也

形狀 大和本草曰、イチハツハ莖短ク、葉ヒロク、花紫ニカキツバタニ似タリ。

花譜曰、鳶尾、是かきつばたの類なり。關東にはこれを屋の棟にうふ。大風に萱屋の棟を吹あらされじとなり。花壇綱目曰、一八草花紫同貳重白もあり、咲比三月の時分

はなしやうふ 仙傳抄

漢名 未詳

【集註】仙傳抄曰、五月五日のしんに、はなしやうぶ。下草には、しやうぶ。をのれとしんの葉にさしあげて可レ用。五月五日、中ぞんに花しやうぶをたつる。下ぐさには竹をそゆる也 【形狀】大和本草曰、花菖蒲(ハナシヤウブ)、花モ葉モアヤメニ似テ大ナリ。カキツバタヨリ葉小ナリ。花相似タリ。四月ニ開レ花。水ニモ陸ニモヨシ。カキツバタヨリヲソシ。紫アリ、白アリ。子ヲ種レバ翌年開レ花。花壇綱目曰、花菖蒲(はなしやうぶ)、花紫白淺黃薄色しぼり飛入あり。咲比五月

花あやめ　謠曲 杜若　【漢名】未詳 カキツバタノ類也　【今名】アヤメ

【今案】本草啓蒙ニ、溪蓀、蘭蓀ニ充非也。溪蓀ハ茅山志ニ花紫色、生ニ淺水中ト云。廣群芳譜、平泉草木記ニ蘭蓀、葉抽ニ淸淺水ー。花照暄妍節ー。紫艷映レ渠鮮ト云ハ、カキツバタ也。カキツバタハ水中ニ産〆陸ニ不レ生。ハナアヤメハ陸地濕處ニ生〆水中ニ不レ生也。水ニ殖レバ根腐リ枯ル。〇大ハナアヤメニ、アヤメト云俗稱アルニ泥(ナヅ)ミテ、泥菖蒲ノアヤメト混〆溪蓀トスル誤也 【形狀】和本草曰、ハナアヤメ、花葉カキツバタニ似テ小ナリ。今ハ只アヤメト云。四月ニ花ヲ開ク。カキツバタノ花ヨリ少早シ。紫白褐色三種アリ。重葉單葉アリ。陸地ニエ可也。花譜曰、はなあやめ、其色むらさきにして、みどりなり。又白色、うす紫色、さきわけあり()按大和本草ニ水中ニ宜ト云非也。水中ニ殖レバ根腐テ不レ生也

法せん花 仙傳抄　漢名　鳳仙 花史左編　今通名也

群芳譜曰、鳳仙人家多種之、極易生。二月下子、隨時可種。即冬嚴寒種之火坑亦生。苗高二三尺、莖有紅白二色、肥者大如拇指、中空而脆。葉長而尖似桃柳葉、有鋸齒、故又有夾竹桃之名。開花頭翅羽足俱翹然如鳳狀、故又有金鳳之名。色紅紫黃白碧及雜色、善變易、有灑金者、白瓣上紅色數點、又變之異者自夏初至秋盡、開卸相續結實、纍纍、大如櫻桃、形微長、有尖、色如毛桃、生青熟黃、觸之即裂皮卷如拳、故又有急性之名。子似蘿蔔子小褐色

集註　尺素往來曰秋花者鳳仙花

けし 仙傳抄　漢名　罌粟 花史左編　今名　ケシ

群芳譜曰、罌粟青莖高一二尺、葉如茼蒿、花有大紅、桃紅、紅紫、純紫、純白。一種而具數色。又有千葉單葉、一花而具二類、艶麗可翫賞、實如蓮房。其子囊數千粒、大小如葶藶子。花史左編曰、罌粟絕類麗春虞美人瓣短而嬌也、滿園春夾瓣剪絨花蕊狹長剪裘花蕊闊大。俱以子種。本草綱目曰、藏器曰、嵩陽子云、罌粟花有四葉、紅白色上有淺紅暈子。時珍曰、罌粟秋種冬生、葉如白苣三四月抽薹結青苞、花開則苞脫。花凡四瓣、大如仰盞、罌在花中、鬚蕊裹之。花開三日即謝而罌在莖頭、長一二寸、大如馬兜鈴、上有蓋下有蒂、宛然如酒罌、中有白米極細也。本草經疏曰、罌粟

其ノ花至ル有ニ千葉者紅白紫黑色有ニルヿ數種一。花鏡曰、罌粟、一名錦被花種具ニ數色一、有ニ深紅粉紅紅白紫者一、有下白質ニシテ而絳唇ノ者、丹衣ニシテ而素純者、殷ノ如ニ染茜一者、紫ノ如ニ茄色一者上 集註 仙傳抄曰、禁花の事云ミけし。事によりてたつる也。曾我物語曰、ねんぐ、しよたうにおきては、けしほどものこらず、わうりやうする 形狀 〇花譜曰、米囊（けし）花ひとへなる紅白、むらさき千葉の紅白紫あり。千葉なるは花うるはし。三月のすゑひらく

花鬘花　尺素往來　漢名　荷包牡丹　花鏡　今名　ケマンサウ

花鏡曰、荷包牡丹、一名魚兒牡丹、以ニ其葉類ニシ牡丹ニ花似ニルヲ荷包ニ一。亦以ニ二月ヲ開ク、因テ是ニ得ノリ名ヲ。一幹十餘朶、纍纍トメ相比ス、枝不レ能レ勝ヘ、壓ノ而下垂、若ノ俛レカ首ヲ、然ノ以テ次而開、色最モ嬌艷、根可ニシ分栽一。若肥多則花更茂ノ而鮮也。黃梅雨時亦タ可シ扦ス活ス 集註 尺素往來曰、春花者云ミ花鬘花 形狀 〇花壇綱目曰、けまん花。薄の小輪、二月比花咲也。地錦抄曰、花鬘（けまん）花。形かざりのけまんのごとく桃色なり。葉は芍藥のごとし。大和本草曰、荷包（ケマン）牡丹、葉似ニ牡丹ニ二月發レ花、淡紫色連ニ開ノ于朶ニ畏レ寒ヲ。宿土ヲ毎年カヘテ可改植。花譜曰、花鬘花ハうすむらさきにして、秋海棠のごとし。一枝に花つらなりて多し。三月に花をひらく

花卉百種ニ所レ圖スル
荷包牡丹

花卉百種
線穿牡丹



線穿牡丹ノ名ハ六研齋二筆ニ出タリ。帝京景物略曰、近コロ有リ藤花ニテ而牡丹葉ノ者一曰ニ高麗牡丹ト

移ハ諸本「影」

韓藍（カラアヰ） 萬葉集　【漢名】 **雞冠** 本草　【今名】 **ケイトウ**

本草綱目、時珍曰、雞冠ハ處處ニ有リ之レ、三月生レ苗ヲ、入テ夏ニ高キ者五六尺、短キ者纔ニ數寸。其葉青柔頗ル似テ白莧菜ニ。而窄ク艄ニ有リ赤脉、其莖赤色、或ハ圓或ハ扁、有ニ筋起ニ。六七月梢間ニ開ク花ヲ、有リ紅白黃三色。其穗圓長ニシテ而尖ナル者、儼ニ如シ青葙之穗ノ、平ナル者儼ニ如ニ雄雞之冠ノ。花ノ大サ有リ圍一二尺ノ者、層層トシテ卷出ス可シ愛ス。子有ニ穗中ニ、黑細光滑與ニ莧實一樣ナリ。其穗如シ秕麥狀ノ、花最モ耐ヘ久、霜後始焦

【一名】 **幹**

藍　萬葉集卷第三曰、吾屋戶爾、韓藍種生、雖干、不懲而亦毛、將時登曾念。同卷第七曰、秋去者、移毛將爲跡、吾蒔之、韓藍之花乎、誰レカ採家牟。花史左編ニ、紅雞冠ノ名アリ。物理小識曰、凡ソ紅色ノ花皆ナ可ニ取レテ汁ヲ作ニ臙脂ト。但有リ深淺ニ如ニ鳳仙染メ甲之類ノ

辛藍　萬葉集卷第十曰、戀日之、氣長有レ者、三苑圃能、辛藍花之色出爾來

鷄冠草　萬葉集卷第十一曰、隱庭、戀而死鞆、三苑原之、鷄冠草花乃色ニ出目八方

雞頭草　人車記曰、保元二年八月在任大臣事云云次居汁物鵠卷鷄頭草副差隱

【集註】 尺素往來曰、秋花者云云鷄頭花

【形狀】 〔大和本草曰、鷄冠花花紅白黃三色アリ六七月ニ花開ク、鮮紅ニシテ大ニ重ナル者上品ナリ。錦雞頭ト云、南京ノ種尤ヨシ

かまつかの花 枕草紙　【漢名】 **雁來紅** 花鏡　【今名】 **ハゲイトウ**

堯山堂外紀曰、周子羽有題雁來紅ニ絶ニ云、翔鴈南ニ來リ塞草ノ秋、未レ霜紅葉已ニ先愁、綠珠宴罷テ歸ニ金谷ニ、七尺珊瑚夜不レ收。鴈來紅ハ草ノ名ナリ

【一名】 **鴈來草** 藻塩草曰、かまつかの花、又ハかきつか花ともいふ也。此花さく比鴈來と云ヽ

かきつか花 見上

【集註】 枕草紙曰、わざととりたてゝ、人めかすべきにもあらぬさまなれど、かまつかの花らうたげ也。名ぞうたてげなる。かりのくるはなと、もじにはかきたる

言塵集曰、かまつかの花とは、鴈來花と書り。春の末夏之。秋初に花の咲と云ヽ 葉も花もゑんどうに似たり。

【形狀】 按ニ言塵集ニかまつかの花、春の末夏之と云ハ、ハマヱンドウ也。大和本草曰、又一種濱豌豆、葉ハ與ニ豌豆一相似テ、四月開ニ紫花ヲ、花與ニ豌豆一相似タリ。結レテ實ヲ亦與ニ豌豆一相似テ不レ同 翹揺モ豌豆ニ似タレドモ、春花アリ。大和本草曰、野豌豆、綱目ニ翹揺ト云 實アリ。國俗名ヲイラ、ト云。三月紫白花ヲ開キ、四月ニ角子ヲ結ブ。實ハ熟スレバ黑シ。青熟共ニ食ベシ。豌豆ニ似テ小ナリ。大小共ニ葉ハ豌豆ニ似タリ。麥田ニ生ズ。言塵集ニ、かまつかの花秋初に花の咲と云ヽ 葉も花もゑんどうに似たりト云ハツルフヂバカマ也。大和本草曰、蔓藤袴、莖葉如ニ豌豆一花長ク垂ル、專如ニ藤花一、色モ紫ニテ美ハシ。蔓長ク方ニシテ稜アリ。葉ノ付タル小枝ト、花付タル小枝ト、一處ニ相對シ莖節ニ生ズ。小枝ノ末ニ各鬚二條アリ、鬚ノ長二寸、括蔞ノヒゲノ如クマガレリ。多ハ莖、葉枯ル。按ニ、ツルフヂハカマハ宿根春苗ヲ生ズ。莖綠色ニシテ線楞アリ。秋蔓丈許ニ及ブ。葉ハ翹揺ニ似テ大也。七月葉間二三寸ノ穗ヲナシ、紫花ヲ開ク、翹揺ノ花ノ如シ。莢ヲ結テ亦翹揺ニ似テ微大也

【今案】 枕草紙ニかまつかの花云 云かりのくるはなと、もじにはかきたるト云ハ雁來紅也。花鏡曰、老少年、一名雁來紅。初出似レ莧、其莖葉穗子與ニ雞冠一無レ異ナルヿ、至テ深秋ニ本高サ六七

尺、則脚葉深紫色、而頂葉大紅鮮麗可レ愛ス、愈久ノ愈妍ハシ如レ花ノ、秋色之最佳者。本草綱目曰、鴈來紅、莖葉穗子並與ニ雞冠一同シ。其葉九月鮮紅望レ之如シ花ノ故名。藻塩草曰、花ぞめ、紅の初花染、くれなゐの初の花にてそむる也。何物も初はいろのこき也。されば色こきとよめり。昔語曰。あらぬのは、くれなゐのはなおろしそめつけて、こきくれなゐにしゐ。源氏物語野分曰、このごろつみいだしたる花して、はかなうそめいで給へる　中右記曰、紅花色大口七腰　萬葉集第十曰、紅乃、末採花、色不出友。源氏物語末摘花曰、いろこき花とみしかど云ゝくれなゐのひとはな衣うすくとも云ゝかのすゑつむ花の、いと匂ひやかにさしいでたり云ゝかみいとながき女をかき給て、はなにべにをつけてみ給に。藻塩草曰。すゑつむ花、是はくれなゐの事なれ共、たとへたる也。源氏よもぎふの宮、鼻のあかゝりしかば、すゑつむといふも、たとへたる也。最明寺狂哥曰、世界の人をそしりて何かせん柳はみどりはなはくれなゐ。此等ノ説紅ヲ花ト云ル證也。言塵集曰、八月初來とは鴈初來月と云ゝ雁來紅ハ雁來ル頃梢ニ紅葉ヲ出セリ。救荒本草曰、後庭花、一名雁來紅、人家園圃ニ多ク種レ之、葉似ニ人莧葉一、其葉中心紅色、其ノ葉聚簇攢聚ノ狀如ニ花朶一ノ、其色嬌紅可レ愛ス、故ニ以テ名レ之ヲ。廣東新語ニ雁來紅、亦名ニ紅素馨一ト云ハ、即今ノヒマサウ也

雪中花　文明写本　下學集

漢名　水仙　和漢通名也

學圃餘疏曰、凡ッ花重瓣者爲レ貴ト、水仙ハ以ニ單瓣者一爲レ貴ト出ッ嘉定ニ、短葉高花最モ佳種也。宜レク下置ニテ瓶中ニ一其ノ物得レ水則不レ枯レ故ニ曰ニフ水仙ト一稱スル其名ニ矣。花史左編曰、水僊單瓣者名ニク水仙ト一、千瓣ノ者名ニク玉玲瓏ト一。又タ以テ

單瓣者ヲ名ク金盞銀臺ト、因テ花ノ性好ムニ水ヲ故ニ名ク水仙ト。單者ハ葉短ノ而香可シ愛ス、用ニ精盆ニ種テ可シ供ス雅玩ニ。群芳譜曰、水仙ハ叢生宜シ下濕ノ地ニ、根似テ蒜頭ニ外ニ有リ薄赤皮ノ、冬生ス葉ヲ如クニ萱草ノ色綠ニシテ而厚シ。多間於テ葉中ニ抽キ一莖ヲ、莖頭ニ開ク花數朶、大サ如シ簪頭ノ色白圓如シ酒杯ノ、上ニ有リ五尖ノ、中心黃蕊頗大也、故ニ有リ金盞銀臺之名ノ。其花瑩韻、其香淸幽、一種千葉者、花片捲皺上ハ淡白而下ハ輕黃不レ作サ杯狀ヲ也、人重レシテ之ヲ以テ爲ス眞ノ水仙ト。一云、單者名ク水仙ト、千葉者名ク玉玲瓏ト、此ノ花不レ可レ缺ク水ヲ、故ニ名ク水仙ト。物理小識曰、愚按ニ水仙秦椒仙茅花亦六出

【集註】下學集曰、水德花。日本曰ニ雪中花ト也。尺素往來曰、春花者云々水仙花

岩藤 尺素往來　【漢名】柳穿魚 致富全書　【今名】コフヂ

【今案】尺素往來曰、春花者云々紫藤云々、夏花者云々岩藤、卯花。岩藤同名アリ。大和本草ニ載ルモノハ與レ此別種也。熊野ニテ藤ラント呼者也。大和本草曰、岩フジ、藤ノ葉ニ似テ花モ紅ニシテ藤花ニ似タリ。ミルニ堪タリ。花モ葉モ小也。莖ヒキシ。大和本草記聞曰、岩フヂ、岩ニソヒ生ズ、葉ハ藤ノ如クニシテ黑ミアリ。夏花穗ヲナシ下垂ス、長サ六寸許、紅紫色。又白花アリ、漢名胡豆豌豆ト同名也。尺素往來ニ、夏花者岩藤、卯花ト云ヘバ、岩藤ハ人家花園ニ種テ、世上ニ多キ花草ナルコ明シ。大和本草ニ載ル岩藤ハ、世ニ稀ナル草ニシテ、ナベテ人家ニ多ク種ル草ニ非ズ。尺素往來ニ載ル岩藤ハ、世上花壇ニ多キ小フヂ也。

花卉百種圖

花紅色 コフヂノ 花ニ同ジ

柳



穿魚



大和本草曰、小藤蔓草也。非蔓草莖弱也葉モ花モ藤ニ似テ小ナリ。花白シ。又紅モアリ。花譜曰、小藤、蔓生ず其花葉藤に似て小也。紅白二種あり。庭間にうへて雅趣をたすくべし。四季賞花集曰、小ふぢ、姫ふじ、岩藤、花葉ともに藤にして小なり。木蔓横に出て長サ二尺餘に至ル、莖長サ四寸程も有。花壇大全曰、ひめふぢ白と紫の二種あり、木ハ四五寸ほどにても花さくなり、花も葉もちいさし。コフヂハ今人家ニ多ク植テ花ヲ賞ス。老莖冬不枯、高サ二三尺、莖柔弱ニメ地ニ延ビ至テ細シ。葉互生ジテ藤フヂノ葉ニ似テ小ク、綠色夏葉間ニ三四寸ノ穗ヲナシ紅紫花ヲ開ク、ハギノ花ノ如クニメ瓣尖リテ細ク相分レリ。花井百種ニ、此花ヲ圖メ柳穿魚ト銘ス。花鏡曰、柳穿魚、一名二至花。莖甚細而色微紺、謂之柳穿魚者、以其枝柔。葉細似柳而花似魚也。其花發於夏斂於冬、故名二至花。又名如意花。性喜陰燥而惡肥糞、吳門花市多結成禽臺鳥獸形以售。農圃六書ニ二至花、枝柔、葉細、花耐久、開於夏至斂于冬至、故ニ名クト云。コフヂハ夏許開テ秋冬不花開耐久ト云ニ異也。然レモ致富全書花部ニ、柳穿魚ト二至花ヲ二物トセリ。致富全書ニ二至花枝柔ニメ葉細、花耐久ニ、開于夏至斂于冬至、故名。浣花雜志ニ云、性易栽、好潔惡糞、熟豆麪之則茂ト云ル、花鏡ニ出ル柳穿魚也。致富全書ニ柳穿魚莖甚細ニメ色微紅、謂之柳穿魚者、以其枝似柳而花似魚也、喜陰燥ト云ル、花井百種ニ載ル柳穿魚ニメ即コフヂ此也

一夏草 尺素往來　【漢名】 **菟葵** 本草　【今名】 **節分サウ**

證類本草曰、菟葵。唐本注云、苗如ニシテ石龍芮ノ一葉光澤ニシテ花白ク似タリレ梅ニ莖紫色

【形狀】 大和本草曰、一花草。葉ハツタニ似テ莖ノ長二寸バカリ、冬小寒ニ始テ葉ヲ生ジ、立春ノ朝花忽ヒラク。一莖ニ一花ヒラク。花形白梅ニ似タリ。夏ハ枯ル

ハウクロ 頓医抄　【漢名】 **白及** 本草　【今名】 **シラン**

本草綱目曰、白及。保昇曰、葉似タリ初生ノ椶苗葉及藜蘆ニ、三四月抽ヌキ出シ一薹ヲ開ク紫花ヲ、七月ニ實熟ス、黃黑色冬凋、根似レ菱ニ有ニ三角一白色角頭ニ生レ芽ヲ。時珍曰、韓保昇ガ所レ說形狀正ニ是ナリ。但シ一科止ダ抽ニ一莖ヲ開レク花ヲ長サ寸許、紅紫色中心如レシ舌ノ、其ノ根如ニシ菱米ノ、有レリ臍、如ニシ鳧茈之臍ノ、又如ニシ扁螺ノ旋紋アリ、性難レシ乾キ

【集註】 出雲國風土記曰、飯石郡所在草木、白芨。頓医抄曰、白及。ハウクロトイフ草也。按ニ、ホウクロ與ニ春蘭根ニ同名

寶珠花 尺素往來　【漢名】 **白蔞** 群芳譜　【今名】 **タウキボウシ**

群芳譜曰、玉簪花。一名白萼、一名白鶴仙、一名季女。處處有之、有宿根二月生苗成叢、高尺餘如白菜、葉大如掌、團而有尖面青背白、葉上紋如車前葉頗嬌瑩、七月初叢中抽一莖、莖上有細葉十餘、毎葉出花、一朶長二三寸・本小末大也、未開時正如白玉搔頭形、開時微綻四出中吐黄蕊、七鬚環列、一鬚長、甚香而清、朝開暮卷、間有結子者、圓如豌豆、生青熟黒、根連生如鬼臼射干之類、有鬚毛、死則根有一臼、新根生則舊根腐

今案 尺素往來ニ、夏花者云ゝ寶珠花ト云、卽今ノ、タウギホウシ、タウキホウシ也。本草啓蒙曰、タウギホウシ、葉圓ニシテ大サ六七寸、一根ニ數十葉叢生ス、葉ニ竪スヂ多シ、夏圓莖ヲ抽ヅルコト高サ四五尺、上ニ花多ク穗ヲナス、一花ノ長サ一寸五分、白色六瓣ナリ

秋法師　尺素往來

漢名　紫萼　農圃六書

今名　ギボウシ

農圃六書曰、又一種、花葉俱小色淺紫名紫萼

一名　ギホウシ　塵添壒嚢抄曰、ギボウシト云字モアル歟。憒ナル支證ヲ不知ラ。玄惠法印書タル物ノ中ニ垂露、ギボウシトヨメリ

今案 尺素往來ニ、秋花者秋法師ト云、卽紫萼也。大和本草曰、紫萼、玉簪ヨリ花葉トモニ小ニ、花ウス紫ナルヲ京都ニテ、キホウシト云。筑紫ニテ、サギ草ト云是紫萼也

夜一夜草　詞林采葉抄

漢名　紫茉莉　花卉百種

今名　オシロイハナ

農圃六書曰、紫茉莉。一名狀元紅、春間ニ下レ子ヲ花紫葉繁シ、早ニ開キ午ニ收ム、三日後結レ子フ。草花譜曰、紫茉莉。草本、春間下レ子ヲ、早ニ開キ午ニ收ム。一名臙脂花、可ニ以テ點レ唇ニ、子有ニ白粉一可レ傅レ面ニ。亦有ニ黄白二色者一。花鏡曰、紫茉莉、本不ニ甚タ高カラ一、但婆娑トシテ而蔓衍易レ生、葉似ニ蔓菁一秋深開レ花ヲ、似ニ茉莉一而色紅紫、清晨放レ花午後即斂ム、其艷不レ久而香亦不レ及ニ茉莉一、故ニ不レ爲ニ世重一ヲ、結テレ實ヲ頗ル繁シ、春間下レ子即チ生ス

【一名】夕影草　藻塩草曰、夕影草、一夜草と同草也。暮陰草ともかけり。これも同事也　暮陰草 見上　一夜草　言塵集曰、夜一与草、一夜草共、同名也。朝に生て夕にしほる草云々

【集註】采葉抄曰、道信。庭ニ生ルユフカゲ草ノ下露ヤ暮ヲ待間ノ涙ナルラン云云　爰夜一夜草ト云草アリ、此草ハ暮陰ニ花開キ、夜明レバシボム物之

【今案】大和本草曰、白粉花（ヲシロイバナ）。葉ハ雞冠花ニ似テ枝節多ク繁茂ス、花ハ丁子ノ形ノ如ク少長シ。深紅色又黄花アリ。朝ニ開キ夕（ユフベ）ニ萎ム。實黒ク大サ胡椒ノ如シ、內ニ白粉アリ。根ハ黒クメ大根ノ如ク大ナリ。糞肥ヲ好ム、肥レバ花シゲシ。宿根ヨリ生ズ。又正二月種子ヲウヘテ、其年花ヲ開ク。宿根ヨリ生ジタルハ六七月ヨリ花開ケ、九月ノ末ニ終ル、盛久シ。草花譜。農圃六書ニ早ニ開キ午ニ收ムト云　大和本草ニ朝ニ開キ夕ニ萎ムト云、俱ニ非也。紫茉莉ハ申ノ時ノ半ニ開ク、通夜花盛ニメ日出テ萎ム。野山草曰、夕錦草（ゆふこき）葉番椒（とうがらし）に似たり、葉に大小有、はなは山ざくらに似たり。又花の莖（くきだち）長くしてはるかに下に萼（うてな）あり、花のいろ黄あり、又紅有、半黄半紅あり、とびいりあり、一本のうちにいろ〳〵有・又黄ばかり、べにばかりあり。葉むかひあひ出て、えだも兩方へはびこる、七八月にさくなり。地錦抄曰、金化粧（きんけしやう）。花も葉もおしろい草に

て、花うこん地にくれなひのさらさ、かの
こいろ〳〵とび入、うつくしき花なり

花卉百種紫茉莉圖

紫茉莉



花紅色

雲南通志曰
水丁香一名
紫茉莉

エビノ根 頓醫抄 [漢名] 未詳 [今名] エヒネ

[一名] えひね 假名文字遣 [集註] 武家調味故實曰、くわい入の間にいまゐせ給べき物ゑひね [附方] 眩ヲ治ス 頓医抄曰、眩ヲ治ス、咳フスフルヤウニ雌黄檳榔子エビノ根ヲ影干ニス。右各末シテ等分ニ合テ、ソクイヲユルく〵ト子ヤシテ、此ノ三種ヲ入テ子ヤシ合テ、厚紙ヲ二寸バカリノ廣キリテ、藥ヲ塗テ、口ヲ合テ竹ノ筒ノヤウニシテ、口ニハ生竹ヲヒチリキノ舌ノヤウニヲシヒラメテ、片方ニ火ヲツケテ、煙ノ中ヨリ上ヲ一口ク、ミテ、口鼻ヨリ息セズシテトリ湯ニテ飲入ベシ、昏一タケヲ五朝ニアテガウベシ [形狀] 花壇綱目曰、ゑびね花白薄色柿色、ゑびす草、又から蘭とも云。咲比三月の時分也。 地錦抄曰、ゑびねさう、花形鈴のごとくさがる、故ニ鈴ふり草共いふ。色うす黄、葉は白らんのごとし。 近ごろ相州の在郷へまかりしに、農家に此草植てあり、名を問侍れば、かまがみさうと申き。 花黄色成ば、たんきんゑびねともいふ。 大和本草曰、エビ子花黄白褐色數種アリ、モトハ山ニ生ズ、三月花ヒラク、陰地ヲ好ム

古名錄草部卷第十三 終

古名錄草部卷第十四目錄

野草類

波波古（ハヽコ）　鼠麴草
ちゝこくさ　天青地白
宇波疑（ウハギ）　雞腸草
須美禮（スミレ）　紫花地丁　〇都保須美禮（ツボスミレ）
萬太布里久佐（マタフリグサ）　馬館
惠沼能古久佐（ヱヌノコグサ）　狗尾草
和須禮久佐（ワスレグサ）　萱草
仁波也奈支（ニハヤナギ）　萹蓄
介加奈（ニガナ）　苦菜
於保比（オホヒ）　苜蓿
阿加佐（アカザ）　藜
於岐奈久佐（オキナグサ）　白頭翁
奈都奈（ナヅナ）　薺
都波比良久佐（ツバヒラグサ）　菥蓂
阿之奈都奈（アシナヅナ）　葶藶
布知奈（フヂナ）　蒲公英
宇萬比由（ウマヒユ）　馬齒莧
加多波美（カタバミ）　酢漿
爲乃久都知（ヰノクツチ）　牛膝
久良ゝ（クラヽ）　苦參

余母疑　艾　○與毛岐乃和多　熟艾
比岐與毛岐　茵蔯
波末多加奈　天名精
奈毛美　蒼耳
之　羊蹄
須々无支　燕麥
波久倍良　蘩蔞
智　白茅　○茅花　茅針
阿布比　冬葵　○阿布比乃美　冬葵子
太知末知久佐　牻牛兒苗
宇末都奈岐　馬蕀
通計四十六種

之呂與毛岐　白蒿
介波久佐　地膚
加佐毛知　野胡蘿蔔
女奈毛美　豨薟
久末都々良　馬鞭草
みゝな草　卷耳
佛の座　元寶草
女波之岐　茺蔚　○土針
伊良々久佐　蕁麻
志婆草　結縷草

古名錄草部卷第十四

紀藩　源　伴存撰

野草類

萬葉集卷第十四曰、於毛思路伎、野乎婆奈夜吉曾、布流久左爾古草、仁比久佐麻自利新草、於非波於布流我爾

波波古 延喜式　漢名　**鼠麴草** 本草　今名　**ハヽコグサ**

證類本草ニ曰、鼠麴草。雜ヘテ米粉ニ作リ糗ト食レ之ヲ甜美ナリ。生ニ平岡熟地ニ、高尺餘、葉有リ白毛、黄花荊芥。歲時記ニ云、三月三日取テ鼠麴汁ヲ蜜ニ和シ爲ル粉ト謂フ之ヲ龍舌料ト、以テ厭フ時氣ヲ。本草綱目、時珍曰、鼠麴。原野ノ間ニ甚多シ、二月生ス苗ヲ、莖葉柔軟、葉ノ長寸許、白茸如ニシ鼠耳之毛ノ、開キ小黄花ヲ成レ穗結ニ細子ヲ　一名　**母子草** 文德實錄。藻塩草曰、母子草。花のさく心もしらず春の野にはらくつめるはゝこもちゐぞ。又曰、馬先草、母子草　**波波己** 本草類編　**波々古久佐** 同上　**比岐與**

◎按ニ馬先蒿ハ、シホカマギク也。草ハ蒿ノ誤

毛岐 本草和名曰、菴蘆子。和名比岐与毛岐、一名波々古。按ニ倭名鈔ニ菴蘆子、和名波々古。馬先蒿、和名比木與毛木。トアリ分ツレド、本草和名、本草類編ニモ菴蘆子、和比支与毛支、又波波己ト

云ヲ以テ、比木与毛支、波々古一物タルヿ明也。新撰字鏡ニ、菴蘆子、又大蓬、比支与毛支、菴蘆ハイヌヨモギ也

集註 文徳實錄ニ曰、嘉祥三年五月壬午葬ル大皇太后ヲ于深谷山ニ遺令ニ宜シ薄葬ス不レ營ニ山陵ヲ、先ニ是ヨリ民間ニ訛言ニ云ヘラク、今茲三日不レ可レ造レ餅ヲ、以テナリト無ニ母子一也。識者聞而惡レ之ヲ、至ニ于三月ニ宮車晏駕ス。是月亦有ニ大后山陵之事ニ、其レ無ニ母子ニ、遂ニ如シ訛言ノ。此ノ間田野ニ有レ草、俗ニ名ヅク母子草ト。二月始メテ生ズ、莖葉白ク脆シ、毎レ屬ニ三月三日ニ、婦女採リ之ヲ、蒸擣テ以テ爲レ餻ト、傳ヘテ爲ニ歳事ト、今年此ノ草非レ不ニ繁生ニ、民之訛言、天假ニ其口ヲ。延喜式卷第三十七曰、典藥寮。毎年十二月晦日供御藥様云々云奏聞云々各四兩。諸國進年料雜藥。相摸國、菴蘆子二斤。飛彈國、菴閭子四斤八兩。同卷第三十九日、内膳司。供奉雜菜。波波古五升、一二三月。其東宮。波波古五升各二升。後拾遺集曰、三条太政大臣のもとに侍りける人のむすめを忍びてかたらひ侍りけり。女のおやはらだちて、むすめをいとあさましうつみけるなどいひ侍りけるに、三月三日、かの北のかたの三日のよのもちひくへとていだしけるによめる。藤原實方朝臣。みかのよのもちひはくはじわづらはしきけばよどのにはゝこつむなり。曾根好忠家集曰、はゝこ摘やよひの月に成ぬればひらけぬらしなわがやどのもゝ。後頼髄腦抄曰、みかのよのもちゐはくはじわづらはしきけばよどのにはゝこつむ之。はゝこといふは、もちゐにする草の名なり。人の娘の始て人にみせるはみへず、後三日といふにもちいるをくはする之

ちゝこくさ 躬恒集

漢名 天青地白 質問本草

按ニ酒飯論云、其後もちゐ色々に、やよひもはじめのわか草は、ちゝこ、はゝこのくちもちゐ、手づくりからにいたゐけやトミユ。然レバ、チ、コ草ヲモモチトナセシ也。チ、コ草ハ、ハ、コグサニ同メ捜タリ。鼠麴草ノ類也。

【集註】躬恒集曰、ちゝこぐさ。花の色はちゝこぐさにてみゆめれどひとつな枝にあるべきはなし

質問本草ノ圖　チ、コグサ

天脣地白



宇波疑 萬葉集　|漢名| **雞兒腸** 救荒本草　|今名| **ヨメナ**　|一名| **於八木** 倭名

救荒本草曰、雞兒腸。生二中牟田野中一、苗ノ高サ一二尺、莖黒紫色、葉似二薄荷葉一微小邊ニ有二稀鋸齒一、又似タリ二六月菊ニ一、梢葉間ニ開ク二細瓣淡粉紫花一、黃心味微辣

類聚鈔曰、薺蒿。和名於八木。按薺蒿即本草所レ載薺頭蒿・ヲトコヨモギ也。仙覺抄、うはぎとは莪之。莪ハ莪蒿。本草廩蒿キツネアザミ也。萬葉集卷第二曰、妻毛有者、採而多宜麻之、佐美乃山、野上乃宇波疑、過去計良受也

薺蒿 出雲國風土記曰、嶋根郡美佐嶋、有薺蒿

於波岐 一本和名抄、本草和名曰、薺蒿菜。和名於波岐。藻塩草曰、莪蒿おはき。正字通曰、莪蒿即青蒿、カハラニンジン也

をはき 散木集曰、君をこそあさはのはらにをはぎつむ賤のいしみのしみふかくおもへ

菟芽子 萬葉集卷第十曰、春日野爾、煙立所見、娘嬬等四、春野之菟芽子、採而煮良思文。按ニ菟ハ菟名負處女萬葉集菟原壯士同ノ例也卷第九上

おはき 言塵集曰、おはぎとは、うはぎと云草の事之

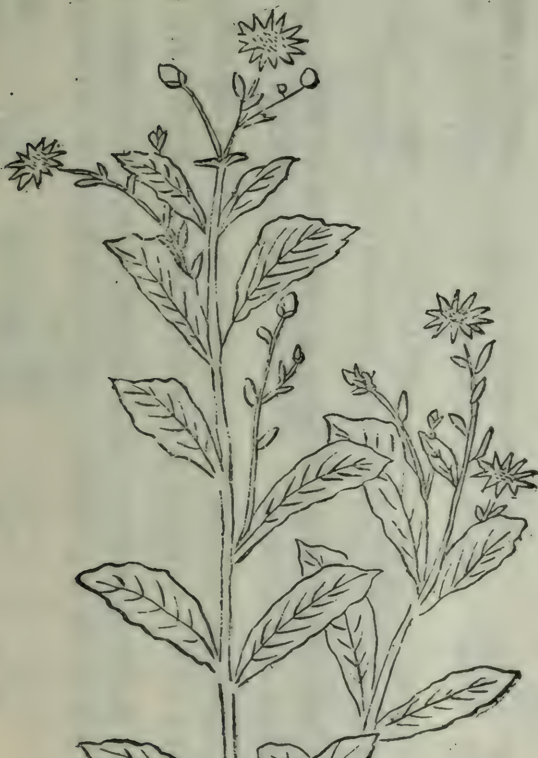
|集註| 出雲國風土記曰、意宇郡砥神嶋、有薺頭蒿。羽嶋、有薺頭蒿。嶋根郡和多二嶋、有薺頭蒿。結嶋、有松薺頭蒿。久宇嶋、有薺頭蒿。屋嶋、有薺頭蒿。小嶋、有薺頭蒿。延喜式卷第三十九曰、內膳司、漬年料雜菜。薺蒿一石五斗、料塩六升。右漬春菜料。仙覺万葉集註釋卷第二下曰、うはぎとは莪也。おはぎともいふ。人のくふものなり

|形狀| 出雲國風土記曰、嶋根郡附嶋、有二椿松薺頭蒿莘茅都波一、其薺頭蒿者、正月元日生長六寸○大和本草曰、ヨメガハギハ野圃家園ニ不

レ用ニ入力ヲ而叢生ス、有ニ香氣一、秋花ヲ開ク、似ニ野菊ニ

農政全書ニ所レノ載ル救荒本草ノ圖

雞兒腸



須美禮（スミレ）　萬葉集第八　【漢名】紫花地丁 本草　【今名】スミレ　【一名】須美禮 倭名類聚鈔曰菫菜。和名須美礼。

本草綱目、時珍曰、紫花地丁。處處ニ有レ之、其ノ葉似レ柳而微細、夏開ク紫花ヲ結レ角ヲ、平地ニ生スルノ者起レ莖ヲ、溝壑邊ニ生スルノ者起レ蔓ヲ。爾雅曰、齧ハ苦菫、註今堇葵也。葉似ノ柳ニ子如レ米ノ、汋食ハレ之滑也、疏可レ食之菜也。本草唐本ノ註ニ云、此ノ菜野生非ニ人所ニ種ル、俗之ヲ謂ニ菫菜ト、葉似レ蕺ニ花紫色ナル者。內則云、菫荁粉楡是也（）正字通、苦堇。本草一名旱芹トイフハ、ハタケゼリ也。與レ此同名異物。萬葉集卷第八曰、春ノ野爾、須美禮採爾等、來師吾曾、野乎奈都可之美、一夜宿二來（）按ニ須美禮ハ楡ニ對シテ稱ル也。此荁滑汁アリテ楡皮ノ如クネバル、故ニ本草和名ニ菫汁和名須美礼ト云、古エハスミレノ滑汁ヲ食物ニ用ユ。和名鈔野菜類ニ、菫菜。和名須美礼ト云此也。禮記內則曰、菫荁枌楡免薧滫瀡以テ滑レ之。選詩補註曰、蓼蘇避ク葵菫ヲ。注云、菫有リ二種、此ハ即內則所謂ル菫荁音丸之ノ菫根如レ薺ノ、葉細レ柳ヨリ、味ニ甘ク可シ蒸テ食ス。群芳譜曰、滑有ニ菫楡ニ、爾雅郭註、今ノ菫葵食レ之ヲ滑也。萬葉集ニ毛武爾禮乎ト云ルモ、楡ノ滑汁ヲ云。延喜式、供奉雜菜ニ、冬葵ヲ用ヒ玉ヒシモ、其滑汁アルヲ以テ也。物理小識曰、野菜云云梨頭艸又檢註曰、喫レ之最モ滑如シ梨頭艸ニ、即此也

一夜草

藻塩草曰、一夜草すみれ異名之。一よぐさ夢さましつゝいにしへの花とおもへば今もつむらん。野への、のむかしの物語云、むかしある人みちをゆくにまよひてひろ野に日をくらして、くさの中にて鳥のかひこをひろひぬ。これを袖に入つゝくさの枕をひきむすびて、その夜は野にふし畢。ゆめにみるやう、ひろひつるかひこは、前

生の子也。この野にうづむべきよしみてゆめさめぬ。ゆめのごとくやがてうづむ。其後ゐしたみるに、葉一あるくさ、むらさきのはなさきぬ。いまのすみれこれ之と云〻藏玉にあり

一葉草

濱塩草曰、いのちをやかけておしまん一はぐさ月にや花のさかむよなく〲。野にまよひておとこ、又かのゆめ見るやう、我おとゝの野邊のくさかげにありけるよしかへりてみて、くだんの野をゆく故にまよひもとめけるに、又鳥のかひこあり。これをとりて、かへりて後すみれのもとにうづむ。このすみれを人こひけれども、いなみてかくしをきて、よなく〲ひとり見ると云〻此二のえんいづれも同儀也。これもすみれの異名、藏玉に有

【集註】萬葉集卷第十七曰、春野爾、須美禮乎都牟等、之路多倍乃　蘇泥乎利可敝之云云。高倉院升遐記曰、すみれの花のいはがきにさきたるを見て云〻。山家集曰、菫、あとたへてあさぢしげれる庭の面に誰分入て菫つみけん。誰ならんあらたのくろに菫つむ人は心のわりなかりけり

【形狀】千首和歌曰、賤がすむ垣ねのすみれ春にあひて　うら紫の色に出らん。すみれ摘む野べは霞の袖にへて薄むらさきの色ぞ匂へる。永正四年二月御月次集曰、すみれつむゆかりの野べかむらさきにこれも色こきふぢばかま哉。本草類編曰、菫。和須美礼、葉似韮花紫色。撰集抄卷第四曰、春日野のけしき、若紫のゆかりあれば、すみれつむなるをさゞ原

○都保須美禮 萬葉集 花ノ色薄キスミレ也

【一名】つほすミれ

枕草紙曰、哥の題は、つぼすみれ。萬葉集卷第八曰、山振之、咲有野邊乃、都保須美禮、此春之雨爾、盛奈里鷄利。同卷第八曰、茅花拔　淺茅之原乃、都保須美禮、今盛有、吾戀苦波

【今案】殿村

正親司トアルハ誤ナリ内膳司トアルベシ

常久ヲ說ニ、倭名鈔工匠具ニ、墨斗。須美都保ト云ヲ以テ、此花形、墨斗ニ似タリト。伴存云、壒囊鈔曰、墨斗。萬葉集卷第十六曰、佐男鹿乃、來立來嘆久、頓爾、吾可死云 云吾角者、御笠乃波夜詩、吾耳者、御墨ノ坩。倭名鈔瓦器類曰、坩。古甘反、和名都保。今按ニ木謂ニ之壺ニ、瓦謂ニ之坩ト。延喜式卷第二十九曰、正親司、年料壺八口 納ニ醬漬并淳漬物ー料。 雅輔裝束抄曰、からぎぬをきるもをつほとる。和名鈔雜藝類曰、投壺。內典云、豆保宇知、一云都保奈介。日本書紀曰、壷此ヲ云ニ都符ー。又按ニ倭名鈔管絃類曰、釋名云、笙、竹之母曰ㇾ匏ト。薄交反、俗云ニ以ㇾ瓢ヲ爲ㇾ之、豆保ー。天文写ゝ和名抄曰、匏都保 トミユンバ、須美禮ノ花、狀袋ナル處匏ニ似タルニヨリ豆保須美禮ト云トミエタリ。君臺觀左右帳記曰

笙



須美禮ノ花

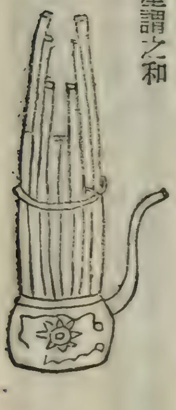


宋鈔
爾雅繪圖曰

大笙謂之巢



小笙謂之和



おかしけなりハ慶安本ハおなじなどうしトアリ

明月記曰、承元二年八月八日、立后節會云云關白殿起給ノ之間、右府依ニ家礼ニ起ツ座ヲ、參議不ル得ニ其心ヲ之間、光親平伏ス、長房、長兼動レ座。長兼引テ光親袍ヲ云、やれこちこやれ、各咲壷云云。建暦三年四月廿二日云云上下聞ク者同音咲壷解レ頤ヲ、嘉祿三年四月廿三日云云頭中將縚ヲ懸テ膝、如レ犬ノ突ニ左右ノ手ヲ。滿座大臣以下先咲壷被レ申サ由。太平記曰、滿座皆エツボニ入テゾ笑ケルト觀ユ。咲壷ハ花咲ク貌壷ニ似タルヲ云、然レバ都保須美禮ハ須美禮同物トミユ。枕草子ニつぼすみれ、すみれ、おなじやうの物ぞかし。おいていけばおかしげなり。ト云リ。伊勢紀行曰、野せの町やと申わたり、すみれ咲たるをみて。春深き野せの町屋ノつぼ菫色に染てふ人やつむらん。トミユ。此レ、スミレ、ツボスミレ一物トセリ。裝束拾要抄云、菫菜衣、面紫裏薄紫。ツボ菫、面紫裏薄青。桃華蘂葉云、すみれ衣、面むらさき裏うす紫。つぼ菫、面紫裏うす青。ト觀ユレバ、スミレハ花ノ面裏共ニ紫色ニシテ、ツボスミレハ、花ノ面紫ニウラ青キヲ云ルヿ明也。堀川院百首云、はこね山うす紫のつぼすみれ二しほみしほ誰か染けむ。トミユ。卽ツボスミレハ、スミレノ花ヨリ色薄キノ證トスベシ。藻塩草曰、つぼせんさい。にはのつぼに草花うへたるを云。山槐記曰、亮爲御使參內、被ル召ニ入朝餉壷ニ。都記曰、殿御隨身來日ゲ予ニ云、可參宮御方者卽參殿下御座藤壷南戸。倭名鈔曰、飛香舍、布知豆保。襲芳舍、加美奈利乃豆保。以ニ霹靂ニ俗ニ謂ニ之雷鳴之壷ト。禁秘抄曰、藤壷、梅壷云云清涼殿東庭并同西庭藤壷也。延喜元年左右ノ衛門栽ニ草架ヲ。爾雅曰、宮中ノ衖謂フ之ヲ壷ト。註ニ巷閤ノ間道。疏ニ宮中ノ衖閤間道名ト壷。孫炎ノ曰ク、巷ハ舍間ノ道也。觀レバ此則ツボスミレハ、人家壷中ニ生ズルスミレニシテ、花色淺クシテ、野生ノ如ク濃紫色ナラザルヲ云。本草啓蒙ニ、圓葉ノ者アリ、コマノツメト云、古歌ニツボスミレト云ハ據

餹、刊本ハ唐ニ作ル

ナキ臆說ニノ不レ足レ采ルニ也

【集註】歌林四季物語秋部曰、きちかう、あさがほ、つぼすみれのうつろひたる、いづれも〱かなしくまたおかし。堀河院百首曰、春の野の茅花が下のつぼすみれしめさす計成にける哉餘略之。稱名院吉野詣記曰、いはたのおのなどいふ所を過て、天神の森にいたり、たきゞなどいふところみやり云々。顯季雉子なくいはたの小野のつぼ菫しめさすばかり成にける哉

【形狀】天文十一年千首和歌曰、紫のゆかりの色やつぼすみれ露深くとも摘て歸らむ。後鳥羽院御集春百首、つみにこんをのゝ芝生のつぼすみれわかならさきの露にぬれつゝ

萬太布利久左(マタフリグサ) 倭名類聚鈔

【漢名】馬餹 本草 【今名】ヒシハ スモトリグサ

本草綱目、蕕。釋名、藏器曰、馬食レ之如レ餹ノ如レ飯ノ、故ニ名ニク馬餹馬飯ト。正字通、蕕。字ノ註ニ曰、生ニ澇稻田中ニ、節節有レ根著レ土ニ、如ニ結縷草ノ而葉長シ、一名馬唐、一名馬飯

【一名】末太布利久左 一本和名抄、與ニ八仙花(アヂサヰ)同名也。倭名鈔曰、白慈草。萬太布里久佐。藻塩草曰、白慈草。けふにあふ雲井の庭のすまひ草とりてもあだにうつる物かな

すまひぐさ 仙覺萬葉集註釋第一下曰、第三の句或ハたむけくさと點じ、或はすまひぐさと點ぜり。後の點は手向草とは、手をむかふとかきたれば、すまひこそ兩人は手むかひてまづ手をあはするものなれば、すまひぐさといへるはこれ推點歟

相撲印草 尾張國風土記曰、中島郡安部島山出相撲印草

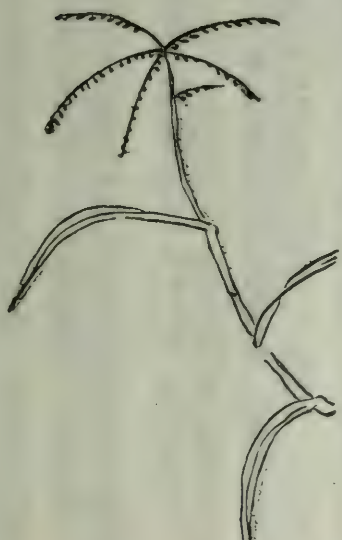
【集註】實方朝臣集曰、すまひ草あはする人のなければや。赤染衛門集曰、物へまう

づるみちに、すまひ草のはなのいとおほかるを、ほとけにたてまつらむといへば、わがおほうおらんとあらそふを見て。ゆくみちのひだりみぎなるすまひぐさかたわけてこそとるべかりけれ

今案　砂石集卷第七曰、又大文字ヲシラデ、マタフリノヤウナル文字ハナニゾト問ル僧アリケリ。トミユレバ、萬太布里久佐ハ、ヒジハナルヿノ證也

ヒシハノ花

大文字ト云
此也



惠沼能古久佐（エスノコグサ）倭名鈔

漢名　狗尾草　本草

今名　エノコログサ

本草綱目、時珍曰、狗尾草。原野垣墻多生ス之、苗葉似レ粟ニ而小、其穗亦似レ粟黃白色ニ而無レ實

一名 惠沼乃古久佐 一本和名抄ノ倭名鈔曰、狗尾草。惠沼能古久佐

ゑのこくさ 倭類餹腦抄曰、いぬたでのなかにをひたるゑのこぐさこゝとみをきてのちにひかせん

犬子草 藻塩草曰、犬子草。えのこ草をのがころ〳〵ほに出て秋をく露のたまやどるらん

集註 室町殿日記曰、えのこ草を讀て扇にかけりける。ゑのこ草吼かゝるこそ道理なれあたりに近き狐らんきく

形狀 言塵集曰、ゑのこ草穗はをのれと有物を粟のなるとは誰かいひけん

和須禮久佐 倭名類聚鈔　**漢名** 萱草 本草　今通名

花鏡曰、萱花通ノ作レ萲ニ、一名ハ宜男、一名ハ忘憂種ニ宜シ下濕ノ地ニ、長苞叢生ノ莖ニ無ニ附枝、繁蕚攢連葉弱ノ四垂ス、花初發テ如ニ黃鵠嘴ノ、開ケハ則六出色黃ニシテ帶フ紅暈ヲ、朝ニ放テ暮蔫ム

一名 くはんさう 源氏物語椎本。假名文字遣曰、くはんさう、萱草。倭名鈔曰、萱草。漢語抄云、和須禮久佐、俗云如環藻二音

萱草 二水記曰、女房素服不見之、衣之様大方見之、生平絹一重薄墨色之。袴ハ萱草色ノ如シ。深窓秘抄曰、萱草袴、尼ノ袴也。源氏和秘抄曰、くわむさう色のはかま、きなる色之。かうじ色之

わすれ草 言塵集曰、わすれ草、一には萱草之。住吉の岸のわ

すれ草は是ゝ。古今切紙次第曰、わすれ草の事、四にはくわんざうの花をいふゝ。伊勢物語に、忘草を忍ぶくさとやいふと、二条后の業平に分（マヽ）尋有しも是也。和歌深秘抄曰、忘草の事、慈照院殿すみよしの神主津守に御尋の時、まげたる桶に入て、はりて封じて進上あり、神秘のよし申上、公方樣御目ひとつにて御覽ありて、もとのごとく上封して、返しつかはされける

【集註】明月記曰、天福元年五月廿九日、萱草自中旬開。源氏物語浮舟曰、わすれ草つみてん、有ながらもてそこなひ人、わらべなるさまにて。すみよし物語曰。うらめしくもかきたえ給ふ物かな、わすれ草のしるべとかや云ゝ。又曰、忘草もなのみしてかた時もわすれ奉る事はなけれど。本朝無題詩曰、瓊林萱草啻期夏。公任卿集曰、かまくらといふ所におはしたるになかりければ、忘れぐさをとり給ふとて、寺にかくいへとての給ふける。忘草かりつむ程に成にけり跡もとゞめぬかまくらのやま。土左日記曰、こゝにむかしべびとのはゝ、ひとひかたときもわすれねばよめる。すみの江にふねさしよせよわすれぐさしるしありやとつみてゆくべく。となん。いたくすみの江、わすれぐさ、きしの姫まつなどいふかみにはあらずかし。狹衣曰、わすれ草もやう〳〵しげさまさりけん云云

【形狀】枕草紙曰、ぜんざいには、くはんざうといふ草を、ませゆひて、いとおほくうへたりける。花きはやかにかさなりて咲たる、むべ〳〵しき所のぜんざいにはよし

仁波也奈支（ニハヤナギ）本草類編

【漢名】萹蓄 本草

【今名】ニハヤナギ

證類本草曰、圖經曰、萹畜ハ名ニク萹竹ト、今在處有リ之。春中布テレ地ニ生ズ道ノ傍ニ、苗似ニ瞿麥ニ葉細綠如レ竹、赤莖如ニシ釵股ノ、節間ニ花出甚タ細微。青黃色根如ニシ蒿根一

一名 多知末知 本草類編

久佐 本草和名曰、萹蓄。和名多知末知久佐、一名宇之久佐○多知末知久佐、與鬪牛兒苗同名也

宇之久佐 倭名類聚鈔曰、萹蓄。和名宇之久佐

曰、萹蓄、和太知末知久佐。又云、仁波也奈支。又扁竹是也。五月採陰干、似瞿麥莖○萹蓄ハ莖瞿麥ニ似テ葉互生シ、綠莖ニ附亦瞿麥葉ニ似テ短柔ニ末不尖ノ圓也。夏葉間小紅花ヲ開、又青白花アリ

苦菜 本草

漢名

今名 ノゲシ

尒ニ加ガ奈ナ 本草和名

本草綱目ニ、時珍曰、苦菜。春初生レス苗ヲ、有ニリ赤莖白莖ノ二種一、其ノ莖中空ニシテ而脆シ、折レハ之ヲ有ニリ白汁一、莖葉似ニテ花蘿蔔菜葉一而色綠ニシテ帶フレ碧ヲ、上葉抱レ莖ヲ梢葉似ニタク鶴嘴一、每レニ葉分チレ叉撺挺如シ二穿ツレ葉狀ノ一、開ニク黃花ヲ一如シ二初綻野菊ノ一、一花結子一叢如シ二茼蒿子及鶴虱子ノ一、花罷ムレハ則收ニ斂ス子上一、有ニテ白毛一茸茸トシテ隨テレ風ニ飄揚ス、落ル處卽チ生ス

一名 都波比良久々佐 本草和名曰、苦菜。和名尒加奈。一名都波比良久々佐

宋抄爾雅圖

荼苦菜



於保比（オホヒ） 倭名類聚鈔

漢名 苜蓿 本草

今名 ムマコヤシ

本草綱目、時珍曰、苜蓿。今處處田野ニ有レ之、二月生レ苗、一科數十莖、莖頗似ニ灰藋ニ、一枝三葉、葉似ニ決明葉ニ而小ニシテ如ニシ指頂ノ、綠色碧艶入ニテ夏及ヒ秋ニ開ク細黄花ヲ、結ブ小莢ヲ、圓扁旋轉有レ刺、數莢累累タリ老レハ則黒色ノ内ニ有レ米如ニシ穄米ノ

一名 於保乃美 本草類編曰、苜蓿。和於保乃美。倭名鈔曰、苜蓿。和名於保比

於保比乃美 本草和名曰、苜蓿。和名於保比乃美

阿加佐（アカザ） 倭名類聚鈔

漢名 藜 本草

今名 アカザ

本草綱目、時珍曰。藜ハ處處ニ有レ之、即灰藋之紅心ノ者ナリ、莖葉稍大ナリ

一名 阿加佐 天文写本和名抄○倭名鈔曰、藜。和名阿加佐

阿加坐 新撰字鏡曰、藜。阿加坐

集註 散木集曰、恨躬耻運雑歌百首。沙弥能貢。いかでかは此よのやみもてらさましひかりあかざのつえなかりせば。扶桑略記廿四日、留ニ跡雪嶺ニ何拋ニ藜杖ニ 四川名勝志曰、削野藜而爲杖巻竹葉而爲巾

附方 口舌ノ爛タル治方 頓医抄曰、アカザヲ灰ニ焼テ、甘草ヲ粉ニシテ合テ付ベシ

二斤京本等三斤ニ

於岐奈久佐（オキナグサ）本草和名　**漢名**　**白頭翁**　本草　**今名**　**ゼガイサウ**

本朝無題詩曰、汝稱ス撫子ト齒ハ猶少シ、定テ恥ツ白頭公ノ作ルコトヲ翁、注草中有リ白頭公一故ニ云〇證類本草曰、白頭翁。唐本注ニ云ク、其ノ葉似テ芍藥ニ而大ナリ。抽キ一莖ヲ莖頭ニ一花、紫色ニシテ似リ木菫花ニ、實大サ者如シ雞子ノ、白毛寸餘皆披下似リ纛頭ニ、正ニ似リ白頭翁ニ故ニ名ツク焉

一名　**奈加久佐**　本草和名曰、白頭公。和名於岐奈久佐、一名奈加久佐　**於木奈久佐**　倭名類聚鈔曰、白頭公。和名於木奈久佐、一云奈加久佐　**於支奈久佐**　本草類編　**ねこ草**　藻塩草曰、ねつこ草云と又ねこ草ともいふなり。つの字をりやくして也　**しろみ草**　言塵集曰、しろみ草とは夏草と、和名云、翁草ノ吏也　**翁草**　見上　**にほ草**　言塵集曰、ねつこ草、ねこま草、にほ草、此等皆同物之　**ねこま草**　見上　**白頭花**　八雲御抄、藻塩草曰、白頭花。おきな草、老人によせてよむ。假名文字遣曰、おきなくさ、白頭公花

集註　延喜式卷第五曰、齋宮。所須藥種、白頭公三兩一分。同卷第三十七曰、典藥寮。中宮臘月御藥。白頭公一兩二分。雜給料、白頭公四兩二分。諸司年料藥。齋宮寮、白頭公三兩一分。遣諸蕃使、渤使。白頭公云云各一斤。諸國進年料雜藥。相摸國、白頭公一斤。安房國、白頭公三斤。上總國、白頭公二斤。°下總國、白頭公九斤。常陸國、白頭公一斤。美濃國、白頭公四斤。出雲國、白頭公二斤三兩。備前國、云云白頭公各二斤。備中國、白頭公三斤。備後國、白頭公五斤。安藝國、白

作ル

爾雅註疏本ハ「江東呼レ之曰ニ落帚ニ」トアリ

頭公云云各三斤。讃岐國、云云白頭公各六斤。出雲國風土記曰、仁多郡所在草木、白頭公。飯石郡所在草木、白頭翁

形狀 本草類編曰、白頭翁。和於支奈久佐。三四月開花紫、五六月結實、七月八月採根陰干

奈都奈 本草和名

漢名 薺 本草 **今名** ナヅナ

春秋繁露曰、薺以ニ美冬水氣一ヲ也、薺ハ甘味也、乘ニ于水氣ニ故ニ美者甘勝レ寒也。薺之言ッルヤ濟所ニ以テ濟ニ大小一也

一名 奈都那 倭名類聚鈔曰、薺。和名奈都那。本草和名曰、薺。和名奈都奈。藻塩草曰、葶藶。なつなのみ○按、葶藶ハアシナヅナ也

奈川奈 本草類編 奈豆奈 新撰字鏡曰、葪ハ子隣反ハ山莓、奈豆奈。爾雅云、葪。山莓、註今之木莓也。本草綱目ニ、葪ハ懸鉤子、即キイチゴ也。字典曰、爾雅ニ葪ハ王蔧、江東呼ニ爲ニ落帚ト。即地膚ニメ、ホウキヾ也○字鏡曰、葶藶蓖、三字、奈豆奈。字典曰 葶ハ爾雅、拜蔏藋未詳。鄭註ニ拜ハ商陸ト云○蓖。字典曰、玉篇、蓖鰤草イチヤクサウ也○薺ハ字典曰、唐韻、酢何切、音醝。爾雅、薺薺實。急就篇註、薺甘菜也、其實名薺ハ即ナヅナノミ也

唐なつな 九代抄曰、雪をうすみ垣ねにつめる唐なづななづさはまくのほしき君哉。清輔家集曰、我獨からなづなこそかなしけれ身をつみてだにとふ人もなし。催馬樂秘傳抄曰、からなづなは薺をいふ之。山家集曰、ふるきいもがそのにうへたるからなづな誰なづさへとおほし立らん

支波井　字鏡曰、薺。祖礼反、菜　甘奈豆奈、又支波井

集註　延喜式卷第三十九曰、內膳司。供奉雜菜。薺ナヅナ、四升、正二十一十二月。本草類編曰、薺。和奈川奈、四月八日收實良。

枕草紙曰、なづな。曾根好忠集曰三月終　みそのふのなづなのくきも立にけり今朝の朝なに何をつまゝし　十春　庭の面に薺の花の散ぼへば春まできえぬ雪かとぞみる

今案　催馬樂曰、にはにおふるからなづなはよきなりはれ、みやびとむのさぐるふくろををのれかけたり。愚案抄曰、からなづなは、たゞ薺之〇にはにおふるからなづなは、みやびとむのさぐるふくろを、をのれかけたりと云は、恐らくは燧袋の事なるべし。なづなの實の形、燧袋に似たり



このごとし。催馬樂秘傳抄曰、見やひとんは、宮人之。さぐるふくろは袋なり

都波比良久佐（ツバヒラグサ）　本草和名

漢名　菥蓂　本草

今名　オホナヅナ

本草綱目、時珍曰、薺。與菥蓂一物也。但分大小二種耳。小者爲薺、大者爲菥蓂、菥蓂有毛。但菥蓂味甘花白

一名　川波比良久佐　本草類編

本草和名曰、菥冥子、和名都波比良久佐

集註　本草類編曰、菥蓂子、和川波比良久佐、四月五月採暴干

阿之奈都奈（アシナヅナ）　本草和名

漢名　葶藶　本草

今名　イヌナヅナ

證類本草曰、圖經云、葶藶。生二藁城平澤田野一、初春生二苗葉一、高サ六七寸、有レ似ルレ薺、根白ク枝莖俱ニ青シ。三月開花微黄結ニ角子一、扁小ニシテ如二黍粒一微長黄色。立夏ノ後ニ採レ實

一名 波末多加奈 本草和名曰、葶藶、和名波末多加奈、一名阿之奈都奈、一名波末世利 波末世利 見上 波末大加奈 倭名類聚鈔曰、葶藶子。和名波末太加奈、一云阿之奈豆奈、又云波末世里 阿之奈豆奈 見上 波末世里 見上 波萬多加奈 天文写本和名抄 波万太加奈 新撰字鏡 安之奈川奈 本草類編 アシナ 塵添壒嚢鈔

集註

新撰字鏡曰、葶藶、波万太加奈、在海濱。本草類編曰、葶藶、和波末太加奈、安之奈川奈、又云波末世利。立夏後採實陰干。延喜式卷第五曰、齋宮。所須雜種。葶藶子二兩一分。同卷第三十七曰、典藥寮。臘月御藥。葶藶子九兩。中宮臘月御藥。葶藶子二兩。雜給料。葶藶子一斤四兩。齋宮寮五十三種云云葶藶子二兩一分。左右近衛府各四十七種。云云葶藶子各四兩。左右衛門府各三十四種。云云葶藶子各四兩。左右兵衛府各三十種。云云葶藶子各二兩。遣諸蕃使。唐使云云草藥五十九種。云云葶藶子各四斤。渤使。草藥八十種。云云葶藶子各二升。諸國進年料雜藥。攝津國、云云葶藶子各三升。尾張國、葶藶子二升半。駿河國、葶藶子二升。甲斐國 葶藶子五升。相模國、葶藶子五合。武藏國、云云葶藶子各三斗。美濃國、葶藶子五升。丹後國、葶藶子二升三合。出雲國 葶藶子、云云各一升。備前國 葶藶子云云各六升。備後國、葶藶子一斗六合。安藝國 葶藶子四合。長門國、葶藶子云云各二升五合。紀伊國、

葶藶子一升。讃岐國、葶藶子四升八合。半夏一斗三升

形狀　〇大和本草曰、葶藶。葉似レ薺三四月黄花ヲ開ク、其實ハヒラクシテ圓シ。脩治纂要曰、一說ニヲトコナヅナト云テ、黄ナル花サク

今案　古ハ遣唐使モアリテ、本朝藥ヲ採用コト不レ誤ト見エタリ。後世ニ至誤ニアシナヅナヲ葶藶トゾメ、味微辛ト啓蒙ニ强說ヲナス。アシナヅナハ辛味ナシ。即甜葶藶也。延喜式ニ葶藶ヲハマガラシト傍訓シ、本草和名ニ波末多加奈ト云者ハ、今俗云ル、クヂラグサ也。此草海濱ニ多ク生ズ、故ニ鯨草ノ名アリ。字鏡ニ彼万太加奈、在海濱ト云此也。秋後ヨリ苗ヲ生ジ、春ニ至リテ葉薺葉ノ如クニシテ、岐細ニメ靑蒿葉ノ如ク、白ヲ帶テ軟也。春高サ二三尺ニ至リ、莖圓ク葉互生シ、梢ニ小黄花ヲ開ク、薺花ニ似タリ。花後莢ヲ結テ油菜莢ニ似テ細ク小也。內ニ黄赤褐色ノ子アリ、アシナヅナノ子ニ三倍ス。味苦辛ニメ芥子ノ如シ、即苦葶藶此也

布知奈 本草和名

漢名　蒲公英 本草　今名　タンポヽ

本草綱目、保升曰 蒲公英草生ニ平澤田園ノ中ニ、莖葉似ニ苦苣ニ、斷ツニレ之ヲ有リ白汁、花如ニ單菊ノ而大

一名　多奈　本草和名曰、蒲公草。和名布知奈、一名多奈　不知奈　倭名類聚鈔曰、蒲公草。和名不知奈、一云太奈

太奈 見上　田菜　萬葉集卷第九曰、金門爾之、人乃來立者、夜中爾母、身者田菜不知、出而相來。同卷第一曰、身毛多奈不知、鴨自物。同

一作尓比由」本ノマヽ

巻第十六日、天雲蘘行田菜引。以上註據ノ同名ニ載ス于此ニ非ニ訌正ニ指ニ其ノ草名ヲ也　形狀　本草類編曰、蒲公草、和布知奈。花色黄如金錢。四月五月採之

宇萬比由（ウマヒユ）

倭名類聚鈔

漢名　馬齒莧 本草　今名　スベリヒユ

本草綱目、時珍曰、馬齒莧ハ處處園野ニ生レ之、柔莖布レ地細葉對生ス、六七月開キ細花ヲ結ブ小尖實ヲ、實中ニ細子似タリ葶藶子ニ　一名　牟尓比由　異本本草類編（倭名鈔曰、馬莧。楊氏漢語抄云、馬齒草、宇萬比由

馬比由 新撰字鏡　むまひゆ 假名文字遣曰、むまひゆ、馬莧　集註　散木集曰、とねりこのしたにいばゆる馬ひゆを引すてたらばぬしやのるべき

加多波美（カタバミ）

本草和名

漢名　酢漿 本草　今名　スイモノグサ

本草綱目曰、酢漿草。時珍曰、苗ノ高サ一二寸、叢生ノ布レテ地ニ、極易ン繁衍ニ、一枚三葉、一葉兩片、至レ晩ニ自ラ合帖、整整如シ一ノ、四月開ニ小黄花ヲ、結ニノ小角ヲ、長サ一二分、内ニ有ニ細子ヲ、冬亦タ不レ凋　一名

加太波美　本草類編（本草和名曰、酢漿草。和名加太波美。倭名類聚鈔曰、酢漿。和名加太波美

鳩酸草（カタハミ） 下學集曰、鳩酸草（カタハミ）

かため　言塵集曰、かゝみ草、

一はあさがほ共、かたばみ共。世俗にはかためといふくさなり

かたはみ

藻塩草曰、酢漿草。かたはみ。壓添墻嚢鈔曰、幕紋事。酢漿（カタバミ）。諸道歌合曰、鏡磨。露深きかたばみ草をたもとにてしほりかくれば面影もみず

【集註】本草類編曰、酢漿草。和加太波美、夏月採葉、四月五月採陰干

爲乃久都知（イノクツチ）　本草和名

【漢名】牛膝　本草　【今名】イノコヅチ

證類本草曰、圖經曰、牛膝春生レ苗ヲ、高サ二三尺、青紫色有レテ節如ニシ鶴膝ノ一、又如ニシ牛膝狀ノ一、以レ此名レ之。葉尖圓如レ匙、兩兩相ニ對於節上ニ、花作レ穗秋結レ實甚細

【一名】都奈岐久佐　本草和名曰、牛膝。和名爲乃久都知、一名都奈岐久佐

爲乃久豆知　倭名類聚鈔曰、牛膝。和名爲乃久豆知。藻塩草曰、牛膝。爲能久都知。假名文字遣曰、ゐのこつち、牛膝

伊乃古豆知　天文写本和名抄曰、牛膝。和名伊乃古豆知、又云伊乃久豆知

伊乃久豆知　見上

以奈岐久佐　醫心方。本草類編

伊乃己川知　本草類編。武家調味故實曰、くわいい人の間いませ給べき物、いのこづち、あゆ、さけ、かに、うなぎ

己未乃比佐　本草類編

爲乃伊比　新撰字鏡曰、牛膝。爲乃久豆知、又爲乃伊比。壓添墻嚢抄曰、牛膝（イノコヅチ）

【集註】本草類編曰、牛膝。和伊乃己川知、亦己末乃比左。八月採根陰乾。延喜式卷第三十七曰、典藥寮。木工寮四

十種。云云牛膝各五斤。左右近衛府各四十七種。云云牛膝各八兩。遣諸蕃使。唐使、牛膝云云各六斤。渤使牛膝云云各二斤。諸國進年料雜藥。山城國、牛膝云云各廿五斤。大和國、云云牛膝各七斤。伊勢國、牛膝八斤。尾張國、牛膝云云各十斤。美濃國、牛膝云云各廿斤。越前國、牛膝十七斤。因幡國、牛膝二斤四兩。伯耆國、牛膝五斤。出雲國、牛膝四斤。石見國、牛膝云云各三斤。安藝國、云云牛膝各十八斤。周防國、牛膝七斤。長門國、牛膝云云各三斤。紀伊國、牛膝云云各九斤。讃岐國、牛膝云云各十斤。伊豫國、牛膝云云各六斤。土佐國、牛膝二斤

形狀 新猿樂記曰、唐物牛膝。頓医抄曰、牛膝カブヲステ、キザミ、酒ニヒタシテ一宿、トリ出シテアブリカワカセ〇本草辨疑曰、牛膝。唐アリ、和アリ、唐ハ太ク長二三尺許アリテ梔モナシ、味先甜シテ後ニ微シ苦シ。和ハ先苦シテ後微シ甘シ。和ハ澡テ唐ハ潤實ナリ。物理小識曰、其根直下スルコト一尺餘、有ルコト力如キ牛ノ也。淮膝細、川膝及ビ各地根粗。又曰、淮牛膝、細長色黄白治シ女ヲ、川牛膝ハ大ニシテ而帶ブ黒色ニ治ス男ヲ

附方 寒風ニ鼻塞苦痛ヲ治ス 頓医抄曰、牛膝葉ヲ塩ヲカケテモミテ、鼻ノウチニサシ入ヨ。後ニ竹刀ヲ火ニヌルメテ鼻ハシラヲコソケヨ。又云、木通ヲ煎シテ額ヨリカケクタスベシ。又云、シヤウヒヲ煎テ

アラエ白クサ治方 頓医抄曰、イノコツチノ根ヲツキ、シボリテツケヨ

小兒夜尿ヲセサル治方 頓医抄曰、牛膝ヲ煎テノマセヨ

胎衣不レ下ラ治 頓医抄曰、牛膝ノ根ヲ擣シボリテ汁ヲ可レ飲

久良ゝ（クラヽ）本草和名　［漢名］**苦參**本草　［今名］**クラヽ**

證類本草曰、圖經曰、苦參生二汝南山谷及田野一、今近道處處皆有之、其根黃色長五七寸許、兩指麁細三五莖並生、苗高三二尺已來葉碎青色極似二槐葉一、春生冬凋、其花黃白、七月結子、如二小豆子一

［一名］**末比利久佐**　本草和名曰、苦參。和名久良ゝ、一名末比利久佐。新撰字鏡曰、苦參。久良ゝ

末比里久佐　倭名類聚鈔曰、苦參。和名久良ゝ、一云末比里久佐

萬比利久左　天文写本和名抄

加川禰久佐　本草類編

末止利久佐　同上

苦辛　壓添壒囊抄曰、日本ニモ馬醫師（クスシ）ヲ伯樂ト云也。五臟藥分苦辛（クシン）一皿云云一藏三味ニ可飼、藥方苦辛（クシン）八杓（スクヒ）云云内火藥苦辛ヲカフ也

苦莘　藻塩草曰、苦莘。あれにけるわさ田のあぜにくらゝおひて秋まつべくもなきわたるかな。按此哥山家集に出、わさ田を沢田に作る

まこりくさ　藻塩草曰、苦參。くらゝ、又まとりくさ〇袖中抄曰、さくらあさとは、もしくらゝ（苦參）と云物にや。サクラアサノヿハ痲ノ下ニ詳也。

本草類編曰、苦參。和加川祢久佐、久良ゝ。又末止利久佐、二月八月十月採根曝。尤非ニ苦參ニ

［集註］延喜式卷第十三曰、圖書寮。凡造紙云云長功日擣苦參一斤五兩云云。同卷第三十七日、典藥寮。臘月御藥、苦參一兩。遣諸蕃使。唐使云云苦參云云各四斤。渤使云云苦參云云各二斤。諸國進年料雜藥。山城國、云云苦參各廿五斤。伊賀國、云云苦參各廿斤。伊勢國、苦參卅三斤。近江

本貞享本ハ卌ニ作ル

國、苦參卅九斤。越中國、苦參云云各十斤。丹後國、苦參云云各十斤。出雲國、云云苦參各十一斤。播磨國、苦參七十一斤。安藝國、苦參云云各十斤。周防國、苦參十斤。紀伊國、苦參廿六斤。伊豫國、苦參十斤。土佐國、苦參九斤。出雲國風土記曰、意宇郡所在草木、苦參。嶋根郡所在草木、苦參。秋鹿郡所在草木、苦參。大原郡所在草木、苦參

余母疑（ヨモギ）萬葉集　【漢名】艾 本草　【今名】ヨモギ

本草綱目、艾 集解ニ、時珍曰、此ノ草多ク生ス山原ニ、二月ニ宿根生シ苗ヲ成ス叢、其莖直生ノ白色、高サ四五尺、其ノ葉四布ス狀如シ蒿 分ニ爲ニ五尖ノ椏ヲ上ニ復タ有リ小尖ハ面テ青ク背白ク有テ茸而柔厚ナリ、七八月葉間出ス穗ヲ如シ車前穗ノ細花ノリ結テ實ヲ累累盈ツ枝ニ、中ニ有リ細子ハ霜後始 枯

【一名】與毛木 倭名類聚鈔○天文寫本和名抄曰、艾。和名與毛岐。萬葉集卷第十八曰、夜須久之安良禰波、保止止支須、支奈久五月能、安夜女具佐、余母疑可豆良伎、左加美都伎云云

与毛岐 本草和名曰、艾葉。和名与毛岐　与毛支 本草類編　也支久佐 同上　よもき草 藻塩草。塵添壒囊鈔曰 蓬ヨモキ。十訓抄曰、蓬は枝さし直からぬ草なり。江家次第第五日、春日祭使途中次第。酉日、朝官人等戲ニ設ク傍馬ハ、馱爲レ馬、以テ蓬爲ニ雲珠ハ、以ニ土器ヲ爲ニ杏葉ハ、戴下無ニ楽望ニ下部一人ニ朝ニ呼ヽ之ヲ○按ニ古エ蓬ヲヨモギトス、蓬ハムカシヨモギナリ。東雅云、蓬ト艾ト一物ニハアラズ。蓬ハ詩ノ集傳ニ、其美ノ栩梁ノ如ニタ聚テ飛如レ髮ト云モノ即此ニテ、苗葉瞿麥ノ如ニタ、花形

菊花ノ未レ開カ如ニシテ、已ニ盡ヌレバ柳絮ノ如ク飛ナリ。艾ハ即今俗モグサト云モノコレナリ。此說確タリ。蓬葉ハ瞿麥ヨリ柔軟也

ゑもき 最明寺狂哥曰、よき人にむすびてあしきことあらじあさの中なるゑもぎみるにも

よもきふ 假名文字遣曰、よもぎふ蓬生

さしも草 言塵集曰、蓬。さしも草、伊吹の山に詠、しめじが原に詠り。藻塩草曰、いぶきのさしも草と云、しめぢがはらのさしもぐさ共云、同事也。又さしま草共云、同事也。又させも草共云、同事也。袖中抄曰、えやはいぶきのさしも草。かくとだにえやはいぶきのさしもしらじなもゆるおもひを。顯昭云、えやはいぶきとは、いぶきの山によせて、えやはいふと讀る也。此いぶきの山、美濃と近江のさかひなる山にはあらず。下野國のいぶきの山也。能因坤元義に出也。考六帖云、あぢきなやいぶきの山のさしも草をのがおもひに身をこがしつゝ。契りけんこゝろからこそさしま草さしもおもはぬことにやはあらぬ。下野やしめつのはらのさしま草をのがおもひに身をややくらん。今案に、後拾遺、實方哥は、六帖のいぶきの山のさしま草と云哥に付て詠歟。彼哥に、をのが思ひに身をこがしつゝとあれば、此哥にはもゆると讀るなるべし。又しもつけやしめつのはらのさしま草と有に、さしも草かよひて詠たれば、いぶきの山も、しめつのはらも、下野もきこえたり。猶たのめしめぢがはらのさせもぐさ我世の中にあらんかぎりは。此哥は淸水觀音の示現し給へる御哥とこそは世に申ならはしたるに、上下句かけあひても覺えねど、佛の御哥なれば、樣こそは侍らめ。若下野やしめつの原のさしま草と云哥の下句に、をのがおもひに身をややくらんとあれば、身をやきて思ふとも、唯我をたのめとあそばしたるに、しめぢが原、しめつのはら、しめ

しの原は同事也。ちとつと同五音也。又さしも草と、さしま草と、させも草と又同事也。しとせと同五音也。もとまと同五音也。奥義抄云、いぶきのたけは常に火のもゆればかくよむ也　追考ニ只草は春はもゆる物なればそへ讀るにや。彼山常に火もゆる事不審之。或る人云、件山に火燃事實也云々。和語抄云、なをざりにいぶきの山のさしも草さしもおもはぬことにやはあらぬ。六帖にあり。いぶきの山は下總國私云下野國也にあり。此山にさしも草おほく生たり。さしも草と莕蒿私云蒿をかはらよもぎとよめり童蒙抄云、なをたのめしめじの原のさしも草。末は同じ。しめじの原とはそことさしたる所なし。只しめたる野と云なるべし。又或說云、しめぢの原、しめぢとは下總國私云下野之に、しめつの原と云所有、其原にさしも草おほくおひたり。さればしめつをしめぢと云が同事也。又云、さしも草とは、よもぎを云、又よもぎに似たる草とも、又云しめじとは夏の一名也。能因哥枕云、さしも草とは屋の軒におふる草なり。又云、かきのうへの草を云、又秋の野に生神のかきに生たるをば、さしま草と云。綺語抄云、さしも草は萱をいふ。今案、さしも草とはとかく申たれ共慥ニ無ニ所見一。和名には黃連を、かくま草と讀たるに、綺語抄には、よもぎをかくも草と云り。能因哥枕に、あめのふりたるをかくも草といふといへり。大に心えぬことなり

本草類編曰、艾葉。和也支久佐、又与毛支。三月三日採暴干。延喜式卷第十五曰、內藏寮。凡典藥寮所ノ献菖蒲并艾、奏進之後、寮允已下參入撤レ之云々。同卷第四十五曰、左近衛府、凡五月五日藥玉料、菖蒲艾。惣盛一輿云々。三日平旦申ニシテ內侍司一列ニ設ケ南殿前ニ。令義解曰、凡放ニ烟ヲ貯へ備ニ者ハ、須下收艾藁生柴等ヲ上。謂艾者蓬也。藁者草物名也。相ヒ和放ち烟ヲ。源氏物語桐壺曰、よもぎふの露わけいり給につけても。同よもぎふ曰、しげき草よ

【集註】

もぎをだにかきはらはん物とも思ひより給はず云云いかにぞむかしのあとも見えぬよもぎのしげさかなと云云人どもなどつかはして、よもぎはらはせ云云かくあやしきよもぎのもとには。同松風曰、まづしき家のよもぎむぐら、もとのありさまあらたむることもなき物から。同横笛曰、かゝるよもぎふにうづもるもあはれに見給ふるを。駿河國風土記曰、安辨郡大河內產艾萊等。蜻蛉日記曰、このあれたるやどのよもぎよりもしげきなりとおもひたがむるに。枕草紙曰、よもぎいとおかし。又曰、庭なども糸よもぎしげりなどこそせねども。古今著聞集卷第五曰、庭はあれてよもぎのみ徒にしげし。平家物語卷第五曰、よもぎがそま、あさぢが原、鳥のふし戶とあれはてゝ云云たそやよもぎふのつゆうちはらふ人もなき所にとゞむれば云云。桐火桶曰、庭のよもぎふ色づくころならんかしと、露霜かつぐさむきに云云。曾我物語卷第十二曰、庭にはよもぎおひしげり、しかのふしどかとぞみえし。年中定例記曰、五月三日曉、御殿の軒に昌蒲に蓬をそへてふき申也。檜皮師の役也。榛葉記曰、よもぎのやどにむぐらの露をはらはせ給。今物語曰、のきばのよもぎしげれども、杉村ならねばかひなくて。狹衣曰、よもぎがもとはいづれぞと。又曰、このよもぎが門とありし哥も。歌林四季物語曰、とのもは御いらかのはしぐに、あやめよもぎふきかざり、かんは御殿の御簾のたゝれ、御はしら哥屋のあたりにさせば。西行物語曰、あさぢふやよもぎがもとにとゞめをき。源平盛衰記卷第廿六曰、八條殿モ燒ヌ。此所ヲバ八條殿ノ蓬壺トゾ申ケル。蓬壺トハ、ヨモギガツボト書ケリ。入道蓬ヲ愛メ、坪ノ內ヲ一シツラヒテ、蓬ヲ植、朝夕是ヲ見給ヘ共、猶不ニ飽足ニゾオボシケル。サレバ不レ斜造リ瑩レテ、殊ニ執シ思ヒ給ケレバ、常ハ此蓬壺ニゾ御座ケル。本朝無題詩曰、蓬壺秋宴路空隔　撰集抄

曰、高野の大師の御ことばにいはく、曲る蓬も麻にまじはれば、ためざるに自然になをるといへり。山密往來曰、端午之節、辰之興、珍重幸甚、旨酒一樽加菖蒲嘉肴一合數艾葉推進之

形状 源氏物語よもぎふ曰、よもぎは軒をあらそひて、おひのぼり。同かしは木曰、庭もやう〳〵あをみいづるわか草みえわたり、こゝかしこのすなごうすきもの〻かくれのかたに、よもぎ〻所えがほなりけん。言塵集曰、よもぎが杣云ゝ蓬生は杣木ににたるゆへにたとへたりと一說也

○與毛岐乃和多（ヨモギノワタ） 本草和名

漢名 熟艾 本草　**今名** モグサ

本草綱目曰、時珍曰、凡用ニ艾葉ヲ須ク用ニ陳久ノ者ヲ治メテ令ニ細軟ナラ謂フ之ヲ熟艾ト○下學集曰、熟艾灸草、壒囊鈔曰、灸ヤイト。本草綱目曰、醫家ニ用テ灸ス百病ニ故曰フ灸草ト、一灼謂フ之ヲ一壯ト以テ壯人ヲ爲ス法ト也○頓医抄曰、熟艾ヨモギヲモクサニコシラヘタル也

集註 延喜式卷第三十七曰、典藥寮。中宮臘月御藥。熟艾四兩。雜給料。熟艾一斤四兩。左右近衞府各四十七連。熟艾云云各一斤八兩。遣ニ諸蕃使ニ唐使、熟艾云云各二斤。渤使、熟艾二斤。軍防令曰、凡兵士每レ火云云熟艾一斤

形状 本草和名曰、蒿虡。是蒿茎間白毛虡也。和名与毛岐乃和多

製法 福田方曰、艾葉杵テ茸トナシテ、糯米ノ粥ノ漿ニ拌勻焙干テ末セヨ。又曰、白茯苓ヲ少シ入テ碾レバ安シ。正字通曰、容齋隨筆曰、艾ハ難レ著レ力、入ニ白茯苓三五片ヲ同ク碾、即時可レ作ニ細末ー

之呂与毛岐（シロヨモギ） 本草和名

漢名 白蒿 本草　**今名** シロヨモギ

證類本草曰、今按、別本注ニ云ク、葉似ニ艾葉ニ上ッ有ニ白毛ニ麁澁。按即シロヨモギ也。圖經ニ白蒿春ノ初先ニ諸草ニ而生ス、似ニ靑蒿ニ而葉麁上ニ有ニ白毛ニ錯澁從リ初生ニ至テ枯ニ白シ於衆蒿ニヨリ、頗ハ似タリ細艾ニ、今又階州以テ白蒿ヲ爲ニ茵蔯ト、二苗葉亦ッ相似タリト云モノハアサギリ也。アサギリハ莖葉花實茵蔯ニ同シ、但其葉花實白色ニメ至レ秋𠔃白シ

今案　本草和名ニ、白蒿一名蘩䔢蒿。和名之呂与毛岐。一名加波良与毛岐。茵陳蒿。和名比岐与毛岐。倭名類聚鈔ニ茵陳蒿　和名比岐與毛木。白蒿。本草云、白蒿。一名蘩䔢蒿。和名之路與毛木、一云加波良與毛岐トミユレバ茵蔯、比岐與毛木ハ今ノ河原ヨモキ。白蒿　之呂与毛岐ハ古ヨリ佐渡ノ白ヨモギトスルヿ明也。新撰字鏡ニ蘩䔢一同、輔園反、白蒿也。加夏与毛支トミエタリ

一名　加波良与毛岐　本草和名

之路與毛木

倭名類聚鈔曰、白蒿。和名之路與毛木、一云加波良與毛岐。今按、蒿又有ニ此和名ニ云云

からよもき

藻塩草曰、白蒿、からよもぎ。又しらよもぎ

しらよむき

見上

形狀　○白蒿（シロヨモギ）ハ艾ニ似テ葉ニ岐少ク而背俱ニ白色也。花實艾ニ同ノ大ニメ白色

比岐与毛岐（ヒキヨモギ）

本草和名

漢名　茵蔯　本草

今名　カハラヨモギ

本草綱目、茵蔯。集解、時珍曰、二月生レ苗、其莖如レク艾、其葉如ニ淡色靑蒿ノ、而背白シ、葉岐緊細而扁整。九月ニ開ニク細花ヲ黄色、結テ實大如ニ芥子ノ

一名　比岐與毛木　倭名

類聚鈔曰、茵蔯蒿。和名比岐與毛木。本草和名曰、茵蔯、和名比岐與毛岐

加良宇波木 新撰字鏡曰、茵蔯蒿。加良宇波木　**比支与毛支** 本草類編

加良与毛支 同上

【集註】 本草類編曰、茵蔯蒿。和比支与毛支、又加良与毛支、五月及立秋採陰干。延喜式巻第三十七曰、典薬寮。諸國進年料雑薬。尾張國茵蔯蒿各六斤。相摸國、茵蔯蒿云云各一斤。近江國、茵蔯蒿六斤。讃岐國、茵蔯云云各十斤

【形狀】 ○本草辨疑曰、茵蔯ハ葉小茴ニ類ノ繁茂シ背微白シ、京賀茂ノ邊ニ多シ

尓波久佐 本草和名　【漢名】 **地膚** 本草　【今名】 **ハウキヾ**

證類本草曰、圖經曰、地膚子初生薄地ニ五六寸、根ノ形如レ蒿、莖赤葉青、大似ニ荊芥ニ三月開ニ黄白花ヲ八月九月採レ實、密州所レ上者其說益明云根作レ叢生ス、每ニ窠有ニ二三十莖ニ、莖有レ赤有レ黄、七月開ニ黄花ヲ其ノ實地膚也

【一名】 **末岐久佐** 本草和名曰、地膚。和名尓波久佐、一名末岐久佐。新撰字鏡曰、地膚。尓波久佐　**迩波久佐** 倭名類聚鈔曰、地膚。和名迩波久佐、一云末木久佐

末木久佐 同上　**波々支** 新撰字鏡曰、蔧。波々支　**万支久佐** 新撰字鏡曰、蒁、万支久佐　**仁波久佐** 本草類編　**阿加久佐** 新撰字鏡曰、地膚子。阿加久佐　**にはろこくさ** 藻塩草曰、地膚子。にはろこくさ

【集註】 本草類編曰、地膚子。和仁波久佐、又末支久佐。八月

長ノ下刊本ニハ「佐」字アリ而シテ醫心方ニハ「ハマフラサ」トセリ。和名抄「ハマフクラ」ナルハ

十月採實陰干。延喜式卷第三十七曰、典藥寮。諸國進年料雜藥。武藏國、地膚子一斗五合。下總國、地膚子一升

波末多加奈（ハマタカナ） 本草和名　【漢名】天名精 本草　【今名】ヤブタバコ

本草綱目、時珍曰、天名精ハ嫩苗綠色似テ皺葉菘芥ニ微ニ有リ狐氣、長レハ則起レ莖ヲ開ク小黄花ヲ如シ小野菊花ニ結レ實ヲ如シ同蒿子ニ亦タ相似タリ最粘ス人衣ニ狐氣尤モ甚シ

【一名】波末布久良 本草和名曰、天名精。和名波末多加奈、一名波末布久良。

波末太加奈 倭名類聚鈔曰 天名精。和名波末太加奈、一云波萬不久良

波萬不久良 見上

波萬太加奈 天文写本和名鈔

伊奴乃之利 本草類編曰、地松。和伊奴乃之利。唐註云、南人天名精爲地菘、但天名精有高花、地菘无短花

ほちし 藻塩草曰、天名精。ほちし

犬ノシリ 頓醫抄

犬尻草 頓医抄曰、女人陰ノ中瘡ヲ生スル治方、犬尻草ヲ煎テ洗也。又曰、犬ノ尻ヲ豨薟（キレン）ト云說アレドモ其ハ不可然見ヘタリ

【集註】本草類編曰、天名精。和波末太加奈、又云伊奴乃之利、又波末布久良。五月採之

【形狀】本草類編曰、鶴蝨莖高二尺許、七月生黄白花似レ菊、八月結實極臭

【附方】諸ノクサ目ニ出タル治方 頓医抄曰、草ノ物瘡イヌノシリノ子ヲ、ウス〱ト切テ、アフリテ、細末シテ、ナマヌルニテイダシテ脊、音ノカル

太書ニ出セル如シ

、ニモヨシ。

最上ノ秘藥之

加佐毛知（ケリモチ） 本草和名 [漢名] 野胡蘿蔔 救荒本草 [今名] ヤブニンジン

救荒本草曰、野胡蘿蔔。生ニ荒野中ニ、苗葉似ニ家胡蘿蔔ニ俱ニ細小 葉間攛生ス莖叉ヲ梢頭開ク小白花ヲ、衆花攢開ノ如ニシ傘蓋狀ノ、比スレハ蛇床子花ニ頭ニ又大ナリ、結レ子ヲ比スレハ蛇床子ニ亦大、其根比スレハ家胡蘿蔔ニ尤細小味甘

[一名] 佐波曾良之 本草和名曰、藁本。和名加佐毛知、一名佐波曾良之 佐々波曾良之 倭名類聚鈔曰、藁本。和名佐々波曾良之、一云曾良之。按天文写本、曾良之ノ名ナシ。此曾良之、佐々波曾良之ニ一物タルコト明シ。延喜式ニモ藁本入藥ニ蘇維白入藥ニ自ラ別也。本草類編艸部ニ藁本佐波曾良之。菜類ニ蘸渠、曾良之ト出。本草和名草部ニ藁本、佐波曾良之。菜部ニ薰藥、和名曾良之ト云ヲ以テ佐波曾良之、曾良之ニ一物タルノ證トスベシ

乃曾良自 新撰字鏡曰 蒿葬。乃曾良自 高本 出雲國風土記曰、仁多郡所在草木、高本 [集註]

本草類編曰、藁本。和加佐毛知、又佐波曾良之。正二月採根暴干三十日。延喜式卷第三十七曰、典藥寮。遣ニ諸蕃使ニ唐使 藁本。渤使、藁本云 云各一斤。諸國進年料雜藥。山城國、云 云藁本各五斤。大和國、藁本云 云各八斤。近江國、藁本五斤八兩。丹波國、藁本云 云九斤。但馬國 云 云藁本各二斤十兩。因幡國、藁本二斤一兩。出雲國、藁本云 云各一斤。備中國、藁本三斤。安藝國 藁本云 云各三斤。讃岐國、藁本云 云各十斤。伊

濃國、藁本二斤四兩。出雲國風土記曰、意宇郡所在草木藁本、嶋根郡所在草木、藁本

[今案] 和產藁本ハ勢州度會郡ニ自生多シ、延喜式ニ諸國ヨリ出スモノハ皆野胡蘿蔔根也。然レドモ其中ニ眞物モ出シナルベシ。野胡蘿蔔ハ竹林樹陰叢草ノ内ニ生ス。葉、胡蘿蔔ニ似テ痩セ、葉ノ幅濶ク薄ク柔ニ〆緑色微毛光アリ。春一二尺莖ヲ起シ、白花ヲ開ク。ニンジンノ花ニ似テ小也。其根ヲ藁本ニ僞リ賣ル

[形狀] ○本草辨疑曰、藁本、藥舖ニ二種アリ、共ニ漢ヨリ來者也。一種川芎手ト云、川芎ニ似タルモノナリ。是僞ナリ。一種赤熊手トイフ、細根アリテ形赤熊ニ似タリ。是眞ナリ。今ノ川芎手ハ川芎ヲ其マヽ乾シタル者也。不可用、輕虛ニ〆川芎ノ氣アリテ、毛モナク其マヽ、川芎也。赤熊手ハ莖ニ細根アリ。按ニ頓醫抄曰 藁本 或說ニハ川芎鬚、觀此則中古ヨリ誤テ川芎鬚ヲ藁本トシ用ヒシ也

奈毛美 本草和名

[漢名] 蒼耳 本草　[今名] ヲナモミ

救荒本草曰、蒼耳、本艸ニ名ク葈耳ハ今處處有レ之、葉青白類ス粘糊菜葉ニ、莖葉梢間結レ實ヲ、比スレハ桑椹ニ短小ニ〆而多レ刺、其實味甘

[一名] 奈毛彌 新撰字鏡曰、葈䓇蔕、三字奈毛弥、又曰、葈、奈毛弥。倭名類聚抄曰 葈耳。和名奈毛美。本草和名曰、葈耳、和名奈毛美。壓添壒囊抄曰、葈耳

[集註] 本草類編曰 葈耳。味苦甘溫質也。葉苦辛寒、有小毒。和奈毛美。三月已後七月已前刈日乾。滇塩草曰 羊負來と云は、草むらにてなもみと云草のみを、ひつじの身に付てくるを云之。羊負來はなもみの異名之共云 本草綱目、蒼耳注曰、博物志云、洛中ニ有レ人驅レ羊ヲ入ルレ蜀ニ、胡葈子多レ刺粘ニ綴羊毛ニ遂至ルニ中國ニ故名羊負來

[形狀]

○ヲナモミハ其葉莖ニ互生ス、茄葉ノ如ニシテ青白色、味不苦、其實梔子ノ如ク長ク刺アリテ人衣ニ着ク、生ハ緑乾淡茶褐色

附方

風疹ノカユカリネマルヲ治ス 頓医抄曰、蒼耳ノ花ト葉ト根ト各等分、右細末シテ黒豆ヲイリテアツキ時、酒ニ入テ、温ナル時、其酒ニテ可服

痢病治方 頓医抄曰、ナモミヲツキシボリ、汁ヲ日ニ三四度可服。本草綱目曰 醫方摘方、赤白下痢。蒼耳草不レ拘ニ多少ニ洗ヒ淨シ用レ水煮爛去レ滓入レ蜜用ニ武火ニ熬成レ膏、毎服一二匙白湯下。肘后方、產後諸痢。蒼耳葉搗絞レ汁、温ニ服半中盞ニ日三四服

女奈毛美（メナモミ） 本草類編

漢名 豨薟 本草 **今名** メナモミ

本草綱目、豨薟。集解ニ、時珍曰、豬膏草素莖有ニ直稜一、兼有ニ斑點一、葉似ニ蒼耳一而微長ク、似ニ地菘ニ而稍ク薄シ、對レ節ニ而生ス、莖葉皆有ニ細毛一、肥壤一株分レ枝數十、八九月開ニ小花一、深黄色、中ニ有ニ長子一如ニ同蒿子一、有ニ細刺一粘レ人ニ、沈氏謂ノ豨薟即チ豬膏母ニ者、其說無レ疑ニ矣

一名 モチキナモミ 頓醫抄曰、豨薟、餅ナモミ、一説ニ犬ノシリト云、コレハシカラズ。イマハモチキナモミナリ

餅ナモミ 見上

氣連草 山城國風土記曰、久世郡字治野出柴胡氣連草川實等

正誤 本草類編草部、下品ニ豨薟ヲ伊奴乃之利ト云 鶴蝨ヲ女奈毛美ト云、同書草部下品ニ天名精和波末太加奈、又云伊奴乃之利、又波末布久良ト云エバ豨薟ハ女奈毛美、鶴蝨ハ伊奴乃之利ナルヿ自ラ明也

集註 徒然草曰、めなもみといふ草あり、くちばみ

にさゝれたる人、かの草をもみてつけぬれば則いゆとなん、見しりてをくべし。

本草類編曰　豨薟。五月五日、六月六日、九月九日採、其葉去根莖葉淨洗陰干

【形狀】○メナモミハ葉對生シ、蘇及荏葉ニ似テ大ニシテ綠色ニシテ柔カ也。味苦シ。黃花ヲ開キ、細キ細刺アル實アリ

之 倭名類聚鈔　【漢名】羊蹄 本草　【今名】ギシギシ

萬葉集卷第十曰、世ノ八君羊蹄　同卷第十六曰、無耳之、池羊蹄、恨之、吾妹兒之。日本書紀 齊明天皇 曰、後方羊蹄○本草綱目ニ時珍曰、羊蹄。近水及溼地ニ極テ多シ。葉長サ尺餘、似タリ牛舌之形ニ。入レ夏ニ起シ薹ヲ開キ花ヲ結フ子ヲ、花葉一色　夏至則枯ル、秋深卽生、凌レ冬ヲ不レ死。根長サ近シ尺ニ赤黃色如シ大黃、胡蘿蔔形ノ。

【一名】志乃禰　新撰字鏡曰、羊蹄。志乃袮。藻塩草曰、羊蹄。しのね

之乃禰　本草和名曰、羊蹄、之乃袮

之布久佐　倭名類聚鈔曰、羊蹄菜。和名之布久佐、一云之

志夫久佐　新撰字鏡曰、稿蓄。同菜也。志夫久佐。按、本草、羊蹄。釋名曰、蓄

山草　藻塩草曰、山草。しと云くさ也。しのねの事也

山し　言塵集曰、山しとは、山に有、しの葉と云草也云々

【集註】延喜式卷第七曰、踐祚大嘗祭。阿波國所レ獻、乾羊蹄云ニ各十五籠。同卷第三十九曰、內膳司。新嘗祭供御料。干羊蹄一籠。右解齋料。干羊蹄一籠。供奉雜菜。羊蹄四把、准二升。四五八九十月

【形狀】本草類編曰、羊蹄。和之

乃沵、莖節間紫赤花青白成穗子相似牛蒡黃。福田方曰、又云、日本大黃ト云物不可用之。是ハ本艸ニ羊蹄、大黃ト名ケル者之。眞實アルニアラズ不レ香、又シノチノ香也〇本草辨疑曰、羊蹄ハ河原、田野所々ニ多シ。葉莖花青ク、實蕎麥ノ如ニシテ輕シ。和俗、名ツケテ、シノチ、又ギシ〳〵トモ、ウシノシタトモ、野大黃トモ云

久末都々良（クマツヅラ） 本草和名

漢名　馬鞭草 本草

今名　ウシギク

本草綱目、時珍曰、馬鞭草。下地甚多シ、春月生レス苗、方莖葉似ニ益母ニ對生、夏秋開ニ細紫花ヲ作ノ穗如ニ車前穗ノ其子如ニ蓬蒿子ニ而細

一名　久末豆豆良 倭名類聚鈔曰、馬鞭草。和名久末豆豆良　本草和名曰、馬鞭草。和名久末都々良

久萬豆豆良 天文写本和名抄

久末川々良 本草類編

之於天 同上、按ニ馬鞭草ニ久末豆豆良（クマツヅラ）ノ名アルヲ以テ、本草類編ニシホデヲ充シナルベシ、シホデハ山中ニ多シ。大和本草ニ、シホデ葉蘡薁ニ似テタテ筋多シ食スベシト云、葉蘡薁ノ葉ニ似テ細ク柔軟藤蔓ヲナス

集註　本草類編曰、馬鞭草。和久末川々良、又云之於天。七八月苗葉日干

形狀　〇大和本草曰、馬鞭草。此草野ニ多シ、葉蘇ニ似タリ。其莖馬ノムチニ似タリ。馬鞭草ハ時珍所レ說ノゴトシ。其葉菊葉ニ似テ節ニ兩對シ、薄クタ缺刻。益母草ニ似タリ

須々无支（スヾムギ）本草類編　［漢名］燕麥本草　［今名］チヤヒキグサ

［一名］加良須无支本草類編　加良須牟支醫心方曰、雀麥。和名加良須牟支

證類本草曰、雀麥。一名籥、一名蘥麥。生故墟野林下。葉似麥

［形狀］本草類編曰、雀麥。和須々无支、又云加良須无支、一名蘥、一名蘥麥　似形麥

［今案］須々无支ハ鈴麥（スヾムギ）也。此實下垂ノ鈴鐸（スヾ）ノ如シ。今遠州ニテ燕麥ヲ呼テスヾムギト云。盛京通志曰、穱麥狀厚而粗卽燕麥也其實下垂如鈴又名鈴鐺麥卜魁人曰移鎭之初此爲常飧而鈴鐺麥從黑爾根來僅以飼牛馬間取作粥斗得粒三升頗香滑多食作氣遠遜、里貴之以其易飽也穱麥與大アヲムキ同名也

燕麥　チヤヒキグサ



盛京通志ニ其ノ實下垂メ如トレハ鈴ノ此也

みゝな草 枕草紙 [漢名] 卷耳 詩經 [今名] ミヽナ

爾雅曰、菤耳、苓耳。疏ニ或曰、苓耳、形似鼠耳ニ叢生如盤。詩周南云、采采卷耳。陸璣疏云、葉靑白色似胡荽、白華細莖蔓生ス。可煑爲茹、滑而少味。四月中ニ生子。如婦人耳璫。

[一名]

宇禰波比 新撰字鏡曰、菤葹同、九卷反。卷耳。宇祢波比

須々彌牟志呂 字鏡曰、菤葹二字、須々弥牟志呂

ミヽナシ 塵添壒囊鈔

[集註] 枕草紙曰、七日のわかなを、人の六日にもてさはぎとりちらしなどするに、見もしらぬ草を、子どものもてきたるを、何とかこれをばいふ、といへど、とみにもいはず、いざなど、これかれ見あはせて、みゝな草となんいふ、といふものゝあれば、むべなりけり、きかぬかほなるは、など笑ふに、又おかしげなる菊の生たるをもてきたれば、つめどなをみゝな草こそつれなけれあまたしあれば菊もまじれり。といはまほしけれど、聞いるべくもあらず

[形狀] ○大和本草曰、耳菜葉ハ如佛耳草ノ、莖長クメ如蔓 就テ地ニ延生ス。冬春繁茂ス。開ニ白花ヲ。俚民爲レ蔬而食レ之。ミヽナハ秋後苗ヲ出ス、原野ニ多シ、蘩蔞ノ形狀ニ似テ、莖紫色ヲ帶、糙澁アリ。葉佛耳草ヲ半ニナシタルヨリ小也。尤糙澁ニシテカタク、深綠色、春蘩蔞ニ似タル白花ヲ開、夏ニ入テ枯ル

波久倍良 本草和名 [漢名] 繁縷 本草 [今名] ハコベ

邊。天治本ハ戸ニ作

本草綱目、時珍曰、繁縷ハ下濕地極多、正月生レス苗、葉大如シ指頭ノ、細莖引レ蔓斷レ之中空、有ニ一縷ノ如レ絲、三月以後漸老テ開ク細瓣白花ヲ、結フ小實ヲ、大サ如ニ稗粒ノ中有ニ細子ニ

【一名】 八久倍良 倭名類聚鈔曰 蘩蔞。和名波久倍良。本草和名曰、鷄腸草、一名蘩蔞。和名波久倍良

波己扁良 本草類編曰、蘩蔞。和波己扁良。蘩蔞、鷄腸草一物也。本草綱目、時珍カ繁縷、釋名ノ註曰、俗呼ニ鵞兒腸菜ニ象レ形也。本草ノ鷄腸草ハ、タビラコ也。雞兒腸ハ救荒本草ニ出ヨメナ也

波久邊良 新撰字鏡曰、蘩蔞。波久邊良

波不邊良 字鏡曰、蘩。波不邊良

波久邊良 字鏡曰、蔎。五勞反、繁縷細草、波久邊良〇廣添壒嚢抄曰、蘩蔞（はこべ）

はこべ 撰集抄曰、いちごと、はこべとの葉をもみ合て後云々。公事根元曰、若菜を十二種供事あり。其くさ〴〵は、若な、はこべら、芹、せり、蕨、なづな、あふひ、芝、蓬、水蓼、水雲松、とみえたり

【形狀】 本草類編曰、蘩蔞。和波己扁良、夏秋間生小白黃花

佛の座 公事根元

【漢名】 元寶草 本草從新

【今名】 ホトケノザ

【一名】 佛座 壒嚢鈔 ほとけのつゝり

本草從新曰 元寶草。生ニ江浙田塍ノ間ニ、一莖直上シ葉對節ニ生ス、如ニ元寶ノ向レ上ニ、或ハ三四層、或ハ五六層

經信卿母集曰、ほとけのつゞりといふはなよめといふ。百和香あつむる人。花の咲のべをぞけふもたづねつるこれやほとけのつゞり成らん

【集註】 公事根元曰、尋常は若菜は七種の物也。

薺はこべら芹菁御形すゞしろ佛の座などなり。歌林四季物語曰、またなゝくさのみくさあつむること、人日さいかうを和すれば、一とせの病患をのがるゝと申ためし、ふるきふみに侍とかや。此事三十あまり四はしらにあたらせ給ふとよみけかしきやひめの五とせにことをこりて、みやこの外の七つ野とて、七所の野にて、一くさづゝをわかちとらせ給ふ。せり、なづな、おきやう、すゞしろ、佛のざ、川な、くゝだちとかや申なるべし。塵添壒囊抄曰、正月七日ノ七草ノアツモノト云ハ、七種何々ゾ。七種ト云ハ、異説アル歟。不ニ一准ナラ、或歌ニハ、セリ、ナヅナ、五行、タビラク、佛ノ座、アシナ、ミ、ナシ、是レヤ七種ト。芹、五行。ナヅナ、ハコベラ、佛ノ座、スヾナ、ミ、ナシ、是レヤ七クサ。又或日記ニハ、薺、蘩蔞、五行、スヾシロ、佛座 田ヒラコ、是レ等也ト云云正月七日七草ヲ獻ズト云事更ニナシ。康富記曰、文安五年正月六日、自山城國大住隼人司領公事物七種菜十二把上ル、三把末進

形狀

〇大和本草曰、佛ノ座莖小ナリ、節々ニ座ノ如ナル處カサナリ、臘月ヨリ生ズ、食フベシ。正月人日、七種ノ一ナリ。佛ノ座ハ、八月後苗ヲ生ジ、春莖ヲ抽、莖方ニメ高サ四五寸、葉節ニ對生ス、大サ錢ノ如クニメ、葉ノ莖ナク、鋸齒紋脈初生ノ益母草ノ如シ、斷ハ氣亦益母草ニ同、三月梢葉間ニ叢リ生、穗亦益母穗ニ似テ小也、花モ益母ニ似テ微紅紫色、花莖長シテ細シ、夏ニ入テ苗枯ル、此莃薟ノ一種也。本草從新曰、元寶草 辛寒補陰治吐血衂血

元寳草

佛ノ座ノ圖



花紅紫二月開

智チ　倭名類聚鈔　漢名　白茅　本草綱目　今名　チガヤ　一名　おもひくさ　仙覺萬葉集註

新猿樂記曰、一佩ノ小太刀ニ云 云様ハ似タリ茅葉ニ。富樫記曰、將ニ政親ノ得手具足、藤右馬尉ガ打タル白柄ノ長刀、柄モ六尺、身モ六尺有リ、茅葉ノ如ク曾利推立、弓手ノ方ニ搆ツ〇證類本草曰、圖經曰、茅根生ニ楚地山谷田野ニ、今處處有リ之、春生レ苗ヲ、布レ地ニ如シ針ノ、俗ニ謂フ之ヲ茅針ト、亦可レ噉、夏生ス白花ヲ茸茸然タリ、至レ秋ニ而枯ル、其ノ根至潔白、亦甚甘味

釈巻第十曰、おもひぐさとは瞿麥(なでしこ)をいふと云説あり。又茅(ちがや)を云ともいへり。茅(ちがや)の葉はえだなどもなくて、たゞ一筋々々おひたる也。何事も物を誠しくおもふには、只ひとつ事にのみ心をかけて、餘念なきためし

淺茅乃野良爾。茅ハ葉ノ誤ナレ、

也。詞林采葉抄曰、三草ハ思リト見タリ、尾花ハ茅花ノヿヲ云ルニヤ、尤有其據歟。但淺茅ヲ申ヘキ也。茅ノ葉ハ枝モナクテ一スヂ〳〵生タルハ、餘念ナキヿニヨセタルニヤ

はまち 枕草紙曰、はまちの葉はましておかし

知乃禰 本草和名曰、茅根。和名知乃祢。倭名抄曰、茅和名智

之乃禰 本草類編、按羊蹄ト同名也

茅草 萬葉集卷第十六曰、沃爾有哉、神樂良能小野爾、茅草苅リ、草刈婆可爾、鶉乎立ツ毛

ちかや 藻塩草曰、叉同床にちかやの葉を敷、瓜を手向るに、七夕うけ給には、この瓜の上が蛛のあみをはると云と

阿草 日本書紀顯宗天皇曰、天皇遙聞二鐸聲一ヲ賦曰、阿佐賦皺驪嗚贈祢嗚須擬

阿佐遲 古事記曰、阿佐遲波良

安佐治 萬葉集卷第十五曰、到二對馬島淺茅浦一船泊之時云云作歌云云。毛母布禰乃、波都流對馬能、安佐治山云云

淺茅 萬葉集卷第三曰、淺茅原、曲曲二、物念者、故鄉之所念可聞。同卷第七曰、野山之淺茅、人莫苅根。同第八曰、今朝乃旦開、鴈之鳴寒久、聞之奈倍、野邊能淺茅曾、色付丹來。又曰、此野乃淺茅、色付爾家類。又曰、松影乃、淺茅之上乃、白雪乎。同卷第十曰、春日野之、淺茅之上爾、念共云云。又曰、秋風之、寒吹ノ奈倍、吾屋前之、淺茅之本ニ、蟋蟀鳴毛。又曰、淺茅何浦葉、色付爾家里。又曰、吾屋戸之、淺茅色付云云。又曰、八田乃野之、淺茅色付云云。同卷第十一曰、淺茅原刈標刺而、空事文云云。又曰、紅之、淺茅乃野良爾、苅草乃。同卷第十二曰、春日野爾、淺茅標結云云。又曰、淺茅原、茅生丹足踏、云云。又曰、淺茅原、小野爾標結フ云云。又曰、春日野之、淺茅之原爾

朝茅 萬葉集卷第十一曰、朝茅原、小野印、空事、何在云、公待。同國雜記曰、ある野徑を分行け

バ此例除クベシ

るに、淺茅いとふ
かゝりければ

集註 本草類編曰、茅根。和之乃祢。六月採根干。延喜式卷第十六曰、陰陽寮。三元祭。茅二束。爲レ薦料。出雲國風土記曰、意宇郡、神名樋山、三方並有レ茅。嶋根郡、小嶋。有ニ松茅一。秋鹿郡 都勢野山、蘿蔴萩笋茅等物叢生。江家次第卷第十七曰、御元服云々茅蓍薦一枚。弘二尺餘、長五尺許、形如ニ車簾一。又曰、采女於ニ御座前一鋪 茅ノ蓍薦ニ、立ニ小机一設ニ御肴一。又曰、茅ノ蓍薦一枚。廣二尺餘、長五尺許 形如ニ車簾一、不レ付レ裏。今案、大饗蓍薦レ付裏云々。北山抄曰、御元服儀、采女於御前鋪茅蓍薦。筑紫道記曰、木の下は茅原なり、夜の時雨の名殘にや、むら〳〵をける露のすゑ葉うちしめりて色こき中に、しら洲は初霜のまがひたらむやうにて。枕草紙曰、あさぢ。又曰、あはれなる物、秋ふかき庭のあさぢに露のいろ〳〵玉のやうにてひかりたる。平家物語卷第五曰、ふるきみやこをきて見れば、あさぢが原とぞあれにける。榮花物語月のえん曰、にはもあさぢがはらになりて、あはれにこゝろぼそし。六代勝事記曰、淺茅がもとのしげかりし云々。太神宮參詣記曰、をきかさねたる霜の下に、枯葉のあさ地のわづかに殘るばかりにて。狹衣曰、このあきは、むしの音しげきあさぢがはらにことならず。又曰、されどあさぢがはらもことに尋ぬる人もなかりけると見えて、心のまゝに色をつくして、みだれあひたる草、ぜんざいどもに露の白玉と心えて、歌林四季物語曰、茅の輪をきりそれをくゞることなるべし。高倉院升遐記曰、しげりあひたるあさぢもそことも見わかれず。撰集抄卷第一曰、朝に行て別れし野邊をみれば、あさぢがはらの秋かぜのみ身にしみて

○茅花（ツバナ） 萬葉集　漢名 茅針 本草　今名 ツバナ

一名 つはな 枕草紙曰、つはな、いとおかし。萬葉集卷第八曰、茅花拔（スク）、淺茅之原乃、都保須美禮云云。方丈記曰、或はつばなをぬき。又曰、野邊のつばな　豆菩奈 新撰字鏡曰、蓓豆菩奈○字鏡曰、通志茅類甚多、惟白茅擅レ名苗出レ地曰レ茅、鍼茅花曰レ秀　尾花 詞林采葉抄曰、淺茅ノ花ヲ尤尾花トモ申上ハ、尾花ガ下ノ思草トヨメル、尤有據者歟。按ニ、本草類編ニ茅香花 和於波奈、五月開花、二月採根ト云ハ茅針（ツバナ）ナリ。吾妻鏡ニ秋尾華ト云ハ芒（スヽキ）ノ穗ヲ云ル也。茅香ハカウボウニメ別物也　於波奈 本草類編

集註 萬葉集卷第八曰、紀女郎贈ニ大伴宿禰家持一歌。戲奴（ワケガ）之爲（タメ）、吾手母須麻爾、春ノ野爾、拔流（ヌケ）茅花曾（ツ）、御食而肥座（メシテコエマセ）。云云右折ニ攀テ云云幷茅花ヲ贈也。大伴家持贈リ和（シヌル）歌。吾君爾、戲奴（ワケ）者（ハ）戀良思（我身也）、給有（クマヒクル）、茅花乎雖喫（クヘド）、彌痩爾夜須（イヤセニヤス）。本草類編曰、於波奈、二月採根、八月採苗莖葉。藻塩草曰、わか君にけぬはこふらしたまいけるつはなをくへどいやゝせにやす。つばなをくへばこゆるといへり。されどもつばなをくへども、たゞやするとよめり。山家集曰、菫さくよこのゝつばな生ぬれば思ひ〳〵に人かよふなり。つばなぬくきたのゝちばらあせ行ば心すみれぞ生かはりける

女波之岐（メハジキ） 本草和名　漢名 茺蔚 本草　今名 メハジキ

脐　刊本ハ脚
直　刊本基
雖ノ下丹遊アリ脱カ畧カ

本草綱目、時珍曰　茺蔚、近ニ水濕一處甚繁シ、春初生スレ苗ヲ如ニシ嫩蒿一、入レ夏ニ長三四尺、莖方ニシテ如ニシ黄麻莖一ノ、其ノ葉如ニシ艾葉一而背青シ、一梗ニ三葉有ニ尖岐一寸許、一節節節生レ穗ヲ、叢簇抱レ莖ヲ、四五月間穗内開ニク小花一ヲ、紅紫色、毎萼内有ニ細子四粒一、粒ノ大サ如ニ同蒿子一ニ有ニ三稜一褐色、其ノ草生ナル時ハ有ニ臭氣一、夏至後チ即枯ル

〔一名〕　女波之木　倭名類聚鈔曰、茺蔚。和名女波之木。本草和名曰、茺蔚子。和名女波之岐

女波自支　新撰字鏡曰、茺蔚。女波自支

女波之支　本草類編

目波志木　倣抄

女は之き　藻塩草曰、茺蔚。女は之き

〔集註〕　延喜式巻第三十七曰、典薬寮、諸国進年料雑薬。大和国、茺蔚子、六升。本草類編曰　茺蔚子。和女波之支。五月中採之日乾

〔附方〕　明月記曰、建久七年五月十四日、今朝脐有小瘡、雖不可驚、喚直能令見之處、頗似六借物、无僻意可付薬之由示之。目ハシキ也。乍驚付之。按、本草曰　茺蔚莖消ニス悪毒丁腫乳癰等ノ毒一ヲ、并ニ傅レク之ヲ

産后ニ身腫治方　頓医抄曰、目ハジキノ汁ヲ服ス

白クサ治方　頓医抄曰、益母草ヲツキ、シボリテツケヨ

○土針（ツチバリ）　萬葉集　益母草苗也

〔今名〕　メハジキノワカナエ

〔一名〕　沼波利久佐　倭名類聚鈔曰、王孫。和名沼波利久佐。此間云、豆知波利

豆知波利　見上

都知波利　天文写本和名抄

奴波

六年一月癸丑ナリ府ノ下二奏。入唐副使従位上吉備朝臣貢アリ署セルナラメド備船ハ通セザラム脱アルペシ

利久佐 本草和名曰、王孫。和名奴波利久佐、一名乃波利

乃波利 見上○萬葉集卷第十五曰、安麻乎等女良我、毛能須素奴禮奴。一云、安麻乃乎等賣我、毛能須蘇奴禮濃。同二十日、努由伎夜（山）麻由伎。按、此奴濃通用例也

ぬはり 藻塩草曰、王孫ぬはり、又のはり

豆知有利 字鏡

［集註］ 駿河國風土記曰、伊穂原郡美髪野産烟膏海塩土針茸薯蕷等之貢

［今案］ 豆知波利ハ、今ノ益母草、苗ナリ。新撰字鏡曰、蘈。以灼反、豆知波利。蘈ハ呉音益ト同キヲ以テ、益ノ字ニ代テ蘈ノ字ヲ用。字典曰、益。唐韻、集韻竝伊昔切。釋名益阨也。蘈唐韻以灼反 大同類聚方二十三、久呂久須利ノ方中ニ也久母久差ト出。續日本紀卷第十九曰、太宰府、備船、以ニ去年十二月七日一來ニ著益久嶋一、自レ是之後、自ニ益久嶋一進發。日本書紀ニ掖玖人、夜句人。倭名鈔ニ西海有夜久島ト云、此益ヲ也久ト云ル徵也。倭名抄國郡部曰、周防國吉敷郡、益必也介比止。字鏡曰、夕藥。衣比須草、此芍ヲ夕ニ代タリ。萬葉集第十一、延喜典藥式ニ射干ノ射ヲ夜干ニ作ル。本草ニモ射夜音通ノヨシミエタリ。日本靈異記ニ熊口万ト云、倭名抄ニ熊久萬ト出、此久ヲ口ニ代、詹糖ニ出本草ヲ類聚雜要ニ占唐ニ作レリ。餝抄曰、摺様蕨鴒蝶小鳥等也。形木文、小草梅柳水續飯ヲ裹レ布ニテ形木ノ上ヲ叩テ、布ノ面ヲ上ニ天押付テ、覆物踏之、其後形ノ上ニ山藍ヲ葉許取集天摺レ之、末干ヲ以墨硯ヲ摺様ニ摺也。朽墨吉云云無山藍時用麥葉、目波志木云云。字鏡曰 茺蔚。女波白支、又云益母 益母草ハ八九月苗生ス、多春圓葉叢生ス。文華秀麗集曰、汀辺草、春日江辺何所好。青々唯見王孫草。風光就暖芳氣新。如此年々觀者老。此益母草ノ春ノ新苗ヲ賦スル也。本草綱目曰、益母 其草生時有臭氣。倭名抄曰、王孫。和名沼波利久佐、此間云、豆知波利。古書ニ誤テ豆知波利ヲ王孫トス。王孫ハ別草ニシテ、今ツクハ子サウト云 蓋豆知波利ハ益母草ニシテ、其葉ヲ以テ衣ニ摺ル正證也。

萬葉集第七ニ、吾カ屋前爾、生土針、從心毛、不想人之、衣爾須良由奈ト云此也。萬葉集第十四ニ波里波良赤楊也。赤楊ハ榿也。日本靈異記曰、榛波里、古書誤テ榛ヲハリトス、榛ハ、ハシバミ也　益母草ハ草ナレバ豆知波利ト云、此榿木ヲ太良和名抄　杜當歸ヲ豆知多良和名抄杜當歸ト榿木トハ其葉相似テ草木アルノミト云ル例也。赤楊ヲ衣ニ摺コハ、延喜式第十四、榛摺衣乃盛過去トモ云其外波里ニテ衣帛ト云、萬葉集卷第七ニ眞榛以須禮流衣ヲ摺コ粱塵愚抄ニモミエタリ　萬葉集第七曰、不時、班衣ノ、服欲香、衣針原、時二不有鞆。此赤楊ヲ針ト云ル證ニメ益母草ヲ土針ト云ルコ知ベシ。萬葉集卷第十八曰、尋ヲ誦ニ針袋ヲ詠ニ云云。波里曾多禰敏流、奴波牟物能毛賀云云。芳理夫久路、等利安宜麻敝爾於吉云云。波利夫久路應婢都都氣奈我良云云。波里夫久路己禮波多婆利奴云云ト觀ユ、此レ波里萬葉集、赤楊靈異記、波利釋日本紀針相ヒ通ル徵也。經信卿母集曰、百和香あつめて歌よまするに、殿つちはりの花をくはへよといふ。いかでかはゆきてをるべきいろ〳〵にむらごににほふつちはりの花。此益母草花ノコヲ詠、益母草ハ六月ニ方莖ヲ抽、三四尺枝ヲ分、葉兩對節々ニ聚リ、紅紫花ヲ開、淺深ノ色ヲマジユ。ムラゴニ匂フト云此也。本草綱目、蒐蔚注ニ、節節開ニ紅紫花ト云リ〇榮花物語本のしづく曰、むらごのひもして。同とりのまひ曰、むらごのひもしたり。同わかえだ曰、むらごのいとしてかけためるみすは、むらごのいとしてあみたり。同煙後曰、七月七日中ぐうの御まへに、せんざいにむらごのいとをひきて、いろ〳〵のたまをつらぬきたり。平家物語曰、こむらごのかたびら。類聚雜要鈔曰、可儲本所物、本結五筋。一筋紫糸、舞姫料。四筋村濃、下仕料。曾根好忠集曰、はやま木は夕日にみればむらご

斤雲州本升ニ作ル

也たが織そむるにしきなるらん。山槐記曰、賀茂祭事雜色八人、村濃括。永亨行幸記曰、女房達の御引出物云〻むらご一かさね。雅輔裝束抄曰、むらさきむらご。むらさきにほひて三。あをきこきうすき二。くれなゐのにほひとへ。又曰、さけひつらの事云〻むらさきむらごのいとの三つくりにこおよりのほどによりたるが云〻。駿牛繪詞曰、こくうすくむらごの布をおびにして云〻〇益母草ハ莖葉ノ味甚苦シ、故ニ用藥須知ニニガヨモギト云、神遺方ニ都智波里尓加之ト云即此也

阿布比（アフヒ） 倭名類聚鈔　【漢名】冬葵 本草　【今名】フユアフヒ

諸經類考曰、天有十日葵與之終始故葵從癸。本草綱目、時珍曰、葵菜ハ古人種テ爲ニ常食ト

【一名】安於伊 本草類編〇倭名鈔曰、葵。和名阿布比

阿保比 新撰字鏡曰、葵菾。阿保比

ひかけ草 仙覺萬葉集註釋曰、葵は日の影のさせるかたにしたがひてなびきかたぶく、故にひかけ草といふ。左傳曰、鮑莊子之知不如葵、葵猶能衛其足

【集註】延喜式卷第三十二曰、大膳上。園韓神祭雜給料。云云葵二斗。已上十種内膳司所レ進。春日祭雜給料。葵三斗。釋奠祭料。葵菹九斤。同卷第三十三曰、大膳下。仁王經齋會供養料。葵半把。生菜料。同卷第三十九曰、内膳司。供奉雜菜。日別葵四把。准ニ二升、五八九十月

【種殖】延喜式卷第三十九曰、内膳司。耕種園圃。營葵（アフヒ）一段、種子二升、惣單功三十一人半、耕地一遍把犂一人、馭

牛一人、牛一頭、料理平和二人、畦上作二人、糞百三十二擔、運功二十二人、下子半人、八月芸一遍三人

○阿布比乃美（アフヒノミ） 本草和名

漢名 冬葵子 本草

形状 ○大和本草曰、冬葵。冬ミノル、葉有ニ小岐一五ニワカル、花甚小不レ足レ觀

一名 葵子 延喜式。本草和名曰、冬葵子。和名阿布比乃美

集註 本草類編曰、冬葵。和安於伊乃美、十二月採之。延喜式卷第三十七曰、典藥寮。諸國進年料雜藥。攝津國、葵子大五升。近江國、葵子四升。美濃國、葵子各一斗五升。阿波國、葵子五升

伊良々久佐（イラゝグサ） 本草類編

漢名 蕁麻 本草

今名 イラクサ

本草綱目、時珍曰、蕁麻。川黔諸處甚多、其莖有レ刺、高二三尺、葉似二花桑一、或青或紫、上有二毛芒一可レ畏、觸レ之螫レ人如二蜂蠆螫一レ、以レ人溺一濯レ之即解。有レ花無レ實。物理小識曰、蕁麻、滇雲謂言、蕁麻、如二蠚麻一、葉ニ而長碎有レ刺、高サ三尺

一名 いらゝくさ 藻塩草曰、羊桃。いらゝくさ。本草類編曰、羊桃。和伊良々久佐。倭名類聚鈔曰、羊桃。和名伊良々久佐

以良ゝ久佐 本草類編曰、羊桃。和名以良々久佐

形状 ○凡テ苧麻ニ似テ小ク、柔ニメ刺多シ。觸レ之如ニシ蜂蠆ニ

太知末知久佐（タチマチグサ）　本草和名　［漢名］　犛牛兒苗　救荒本草　［今名］　ウメガヱサウ

［一名］　たちまち草

藻塩草曰、牛扁。たちまち草。本草和名曰、牛扁。和名太知末知久佐。倭名類聚鈔曰、牛扁。和名太知末知久佐。牛扁ハ伶人草也　［集註］　本草類編曰、牛扁草。和太知末知久佐。二八月採、以日干

［今案］　大和本草曰、俗ニ、ゲンノセウコ、トモ云。葉ハ毛莨及キジン草ニ似テ、花ノ形ハ如ニ梅花ノ、六七月ニ紅紫花ヲ開ク、葉莖花トモニ陰干ニシテ爲レ末、湯ニテ服ス。能痢ヲ治ス。赤痢ニ尤可也。又爲ニ煎湯ト、或細末シテ丸ス、皆驗アリ。本草啓蒙ニ是犛牛兒苗ノ一種ナリト云。救荒本草曰、犛牛兒苗音麗又名ニ鬪牛兒苗ト、生ニ田野ノ中ニ就レ地拖イテ秧而生ス、莖蔓細弱其ノ莖紅紫色、葉似ニテ蒝荽葉ニ瘦細而稀疎　開ニク五瓣小紫花ヲ、結ニフ青骨葖兒ヲ、上有ニ一嘴、尖鋭如ニシ細錐子狀ノ

志婆草（シバクサ）　萬葉集　［漢名］　結縷草　爾雅　［今名］　シバ

爾雅曰、傳ハ橫目。註、一名結縷草俗ニ謂ニフ之ヲ鼓箏草ト。疏ニ一名ハ橫目草、蔓延ノ生ス。正字通ニ曰、蘊 結縷草、師古曰、結レ縷蔓生シ著レノ地ニ處ニ生ニス細根ヲ、楚辭、索胡繩之纚纚胡繩ハ卽結縷也

［一名］　**之波**　倭名類聚鈔曰、萊草。和名之波。選詩補註曰、萊草名葉香可食。詩云、北山有萊〇按詩ノ萊ハアカザ也　**志波**　新撰字鏡曰　茦。志波。葪。之絲反、志波。字典曰、茦。楚革反。說文莿

也。爾雅、莢刺。註草刺針也。集韻同レ莿、草芒

道芝草

言塵集曰、芝。芝生、芝原、きり芝とは大内に有と云〻舞にも切芝と云事有興。ふるき都となりぬれば、道芝草ながく生るなど詠り。萬葉集卷第六曰、立易り、古ノ京跡、成レ者、道之志婆草、長ク生爾異梨。枕草紙曰、哥の題はあさち、しば

芝

百練抄曰、北野早畈社後自ニ芝上ニ火出來登ニ楊梢ニ

集註 宣胤卿記曰、永正八年二月廿七日戊申、今日春日祭也云々廿八日、歸レ京ニ遲々ノ間典侍已前行云々於ニ宇治ノ賣芝ニ追付。後小松天皇昇霞記曰、霜がれの芝の砌を出したてまつりて。鎌倉年中行事曰、御胞ヲ納申云々山ニノボリ地ヲ七尺ニ堀テ納申。芝ヲタ丶ミテ其上ニ根松ヲ一本可植。康富記曰、嘉吉三年五月十九日、淸外史又被語云、去八日所語申、主水本司御社堺内可開畠之由事、先可開之由存候處、兼日談合之百姓、早少々開之請料既致沙汰之間、然者可開也、仍芝築池四壁令築廻、於祭場者可殘其分之由申付之云々

宇末都奈岐 本草和名

漢名 馬棘 救荒本草

今名 コマツナギ

救荒本草曰、馬棘生榮陽崗野間科條高四五尺葉似夜合樹葉而小又似蒺莉葉而硬又似新生皂莢科葉亦小稍間開粉紫花形狀似錦雞兒花微小

一名 己末川奈支 本草類編曰、牙子。和宇末川奈支、又云己末川奈支

宇末川奈支 見上。本草和名曰、牙子、一名狼牙。和名宇末都奈岐

古末豆奈木 倭名類聚鈔曰、狼牙。

和名古末豆奈木　**古末豆奈岐** 天文写本 和名抄　**宇万豆奈支** 新撰字鏡○按、牙子ハ狼牙ニメミツモト也　**かはらふち** 言塵集曰、かはらふちとは、世俗に駒つなぎ草の事也と云　**駒つなき草** 見上　**駒繋** 藻塩草曰、駒繋。女郎花おほかるのべのこまつなぎおちけん人ゞ引とゞめてし

こまつなき 藻塩草曰、牙子。こまつなぎ　**コマツナキ** 延喜式 倭訓

【集註】延喜式卷第三十七曰、典薬寮。諸國進年料雜薬。常陸國、狼牙（コマツナギ）一斤。近江國、狼牙十四斤。備中國、狼牙云云各五斤。阿波國、狼牙云云各二斤。出雲國風土記曰、仁多郡所在草木、狼牙

【形狀】（救荒本草、蘭山口授曰、馬棘コマツナギ、小木ニメ草ノ如シ。高サ尺餘リアリ。古幹ハ三尺許モアリ。枝多ク出、葉ハ小藤ノ如ク、又水茸角（クサネム）ノ葉ニ似テ微ニ圓ク、色モ黒緑ヲ帶フ。夏葉間ニ寸餘ノ穗ヲナシ、小紫花多ク着、下ノ方ヨリ漸々開花、後六分許ノ細莢ヲ生ス。中ニ細キ豆ノ如キ子アリ。偶ニ白花アリ。冬ハ葉枯ル。此莖ハ至テ強シ、故ニコマツナギト云

古名錄草部卷第十四　終

古名錄草部卷第十五目錄

隰草類

以乎須岐　商陸

宇末佐久　靑葙

阿佐美　薊

布保保天久佐　飛廉

比由　莧

保保都岐　酸醤

扁比伊知古　蛇苺

伊岐久佐　景天

乎木　荻　○濱荻

波末比之　蒺藜

通計四十四種

都岐久佐　鴨跖草

濱木綿　文殊蘭

夜萬阿佐美　大薊

加末奈　苦芺

阿加比由　赤莧

之布岐　蕺

宇川末女久佐　虵含

波末世利　虵牀

はまふて　蒒草

ちしはり草　翠雲草

古名錄草部卷第十五

紀藩　源　伴存撰

隰草類

於譜磨故（オホヘコ） 日本書紀　［漢名］車前 本草　［今名］オホバコ　［一名］大葉子（オホヘコ）

證類本草曰、車前子。圖經曰、今江湖淮甸近京北地處處ニ有リ之、春初メ生ス苗ヲ、葉布テ地ニ如シ匙面ノ、累年者長及ニ尺餘ニ如シ鼠尾ノ、花甚細青色微赤、結テ實ヲ如ク葶藶ノ赤黒色

日本書紀曰、欽明天皇二十三年七月云云其妻大葉子亦並見レ禽。愴然而歌曰、柯羅俱爾能、基能倍爾陀致底、於譜磨故幡、比例甫囉須母、耶魔等陛武岐底。或有レ和曰、柯羅俱尓能、基能陪儞陀々志、於譜磨故幡、比禮甫羅須弥喩、那儞婆陛武岐底。釋日本紀曰、於譜磨故幡、大葉子也

小筥（ヲハコ） 續日本後紀　**於保波古**（オホヘコ） 倭名類聚鈔曰、車前子。和名於保波古。本草和名曰、車前子。和名於保波古

於保波己 本草類編　**おほはこ** 藻塩草曰、車前。おほはこ。塵添壒囊抄曰、茶苡（ヲホハコ）茶誤米　蜻蛉日記曰、山ごもりののちは、あまがへるといふなをつけられたりければかくも

子刊本草ニ作ル 刊本ハ車前車ヲ傍書ス

のしけり云云おほばこの神のたすけやなかりけんちぎりしことをおもひかへるは

カヱル草

頓医抄曰、婦人陰ノ肥事ヲ治スル方。カヱル草ヲ煎シテ可洗。塩ニテ可洗

【集註】續日本後紀卷第十二曰、承和九年八月甲戌、遣參議正躬王、送廢太子於淳和院。備前守從四位上紀朝臣長江自院逢迎。其儀、駕小車出禁中、到神泉良角、駕牛車。先是童謠曰、天波琵琶乎打都留。王兒牽枯坊、牛車波善氣夜。辛苦乃小笥之甦、有識咸言、童謠不虛、于今驗之矣

○於保波古乃彌

新撰字鏡

【漢名】車前子　本草

【今名】オホバコノミ

【集註】延喜式卷第三十七曰、典藥寮。諸國進年料雜藥。大和國、車前子二斗八升。攝津國、車前子云云各三升。伊賀國、車前子七升。近江國、車前子八升。若狹國、車前子云云各一斗。丹波國、車前子二斗五升五合。丹後國車前子一斗六升。出雲國云云車前子各四升。美作國、車前子三升。備前國、車前子云云各六升。備中國、車前子一升。備後國、車前子二斗三升。紀伊國、車前子云云各五升。讚岐國、車前子五升。伊豫國、車前子云云各三升。土佐國、車前子四升。本草類編曰、車前子。和於保波已、五月五日採之陰乾

【附方】明月記曰、建久七年五月十四日、脐有小瘡云云。十六日甚能夜見云、无別事、於今者可押付車前子、仍用其儀。十七日、押付草葉如昨日。十八日念誦、依无別事止車前子了。嘉祿三年正月廿一日、巳時許侍醫貞基來、加齒針、面腫塩可宛由示之、申時許心寂房來、煎菊桑蓮車前草塩可洗由示、於針者不可然云云、彼是不同危思。同年四月十七日、招寄心寂房令探腹病、無指事

みち源本もり

由答之、右足指此四五日有如水袋物、令見。又非別恐、雖同物之體有赤筋、有痛氣也。可怖擁而出者不可怖、以針刀刺之出汁。偏水也。付車前草葉〇喫茶養生記曰、癒病。近年以來此病發於水氣等雜熱也。非疔非癰、然人不識而多悞矣。但自冷氣水氣發故、大小瘡皆不負火、依此人皆疑爲惡瘡、尤愚也。灸則得火毒、即腫增。火毒無能治者、大黃寒水石寒爲厄、依灸弥腫、依寒弥增、可怖可斟酌。若瘡出則不問强軟、不知善惡、牛膝根擣絞、以汁傅瘡、乾復傅則傍不腫、熟破無事、濃汁出、付柳葉、惡毒之汁皆出。世人用車前草尤非也。永忌之。服桑粥、桑湯、五香煎、若强須灸、依方可灸之。謂初見瘡時、蒜厚如錢付瘡上、艾堅押、如小豆大、灸蒜上、蒜焦可替、不破皮肉、爲秘方、及一百壯即萎。火氣不答、必有驗。灸後付牛膝汁、幷可付柳葉、尚不可付車前草。付則傍腫依不出惡汁故、日本多用車前草、不識藥性故也。可忌。云云又有芭蕉根、神效矣。皆瘡妙藥也

すぎな 藻塩草　［漢名］問荊 本草　［今名］スギナ

證類本草曰、問荊、生伊洛、間洲渚、苗似木賊、節節相接、又名接續草　［集註］藻塩草曰、かた山のしづがこみちに生にけりすぎなまじりのつくづくしかな

○つくづくし 源氏物語　［漢名］筆頭菜 瀋陽府志　［今名］ツクシ　［一名］ツク 海人藻芥曰、ツ

クぐシハ、ツク、如此異名ヲ被付。

伊勢守貞陸記曰、つくぐし、つく

土筆 殿中申次記曰、正月八日土筆一折云々錄外書曰、大井庄司入道御書云 云ク、ダチ土筆給候畢

筆つ花 管見

集註 藻塩草曰、土筆。筆つ花、異名也。春のやけ野にと云と云々つくぐ〔〇〕し睨か、但藻塩草、木活本モナシ〕ともよめり。さほひめのふでかとぞみるつくぐし雪かき分る春のけしきは

記曰、嘉吉三年二月廿七日、爲メニレ消ンカ二永日ヲ一乘リレ馬ニ出ニ法金剛院南野ニ一摘ニ土筆ヲ一、終日逍ニ遙山村ヲ一。源氏物語

さわらび曰、わらび、つくぐし、おかしきこにいれて、これはわらはべのくやうし侍るはつをなり、とて奉

れ

り

形狀 ()大和本草曰、土筆ハ國俗所レ名也。春初ヨリ其花先ッ生ズ、莖立テ苗ノ生ズルガ如シ。苗ニ

非ズ、其鋒如ニ筆形ノ一、是其花ナリ。節々有レ皮而包レム之。俗ニハカマト云。花莖ヲ煮食ス、味美ヨシ、

無レ毒。花ハ莖トモニ早ク枯レ、苗ハ後ニ

生ズ、杉菜ト云。葉如レ杉、馬好ンデ食フ

布々木 倭名類聚鈔　漢名 **欵冬** 本草　今名 **フキ**

花史左編曰、欵冬花、蓋シ欵凍ハ葉似レ葵ニ而大ニ、

叢生ス、花出ヅニ根下ニ一。十一十二月雪中ニ出スレ花ヲ

一名 **不々支** 新撰字鏡曰、蕗。不々支。倭名鈔曰、蕗。和名布々木。出雲國風土

記曰、嶋根郡、和多ニ嶋有レ蕗。頓醫抄曰、蕗。正字通曰、蕗。魯故切、音路。甘艸ノ

別名。楚辭七諫ニ、菎蕗雜ニ于黀一蒸、舊註ニ汎云、香草誤。通雅曰、甘艸一ニ名ク蕗艸ト

也末布々岐 本草和名

日、欵多。和名也末布ゝ岐、一名於保波

於保波 見上

也末不支 本草類編

山保ゝ支 新撰字鏡曰、蕗。不ゝ木。東花山保ゝ支

【集註】延喜式巻第三十七日、典薬寮。諸國進年料雜藥。相摸國、疑多花九斤。武藏國、欵冬花十兩。同巻第三十九日、内膳司。供奉雜菜。蕗二把。准三升、五六七八月。漬年料雜菜。蕗二石五斗。料塩一斗、米六升。二水記曰、大永七年二月廿八日、晩食於中院亭有相伴、欵冬之露汁賞翫也。三月一日早旦詣北野社師小路田向少將同道也。朝飯於正親町亭有之、欵冬賞翫也。大永八年三月廿日、向柳原亭、當年初度也。有晩喰哦、欵冬花傾盃歸家了

【種殖】延喜式巻第三十九日、内膳司。耕種園圃。營蕗一段、種子二石、惣單功三十四人、耕地二遍把犂一人、馭牛一人、牛一頭、料理平和二人、糞百二十擔、運功二十人、殖功二人、九月芸二遍第一遍二人、三月第二遍二人、六月刈功四人、三年一殖

【形狀】本草類編曰、欵冬花。和也末不支、十一月採花陰干、根紫色、莖青紫、葉似萆薢、花黃色如菊花

田手(タデ) 日本靈異記

【漢名】**蓼** 本草

【今名】**タデ**

【一名】

太氏 新撰字鏡曰、蓼。太氏。字彙曰、蓼。辛艸。正字通曰、蓼。辛艸。日本靈異記曰、蓼、田手

多天 倭名類聚鈔曰、蓼。和名多天。本草和名曰、蓼實。和名多天

太天 天文写本和名鈔。倭名鈔。國郡部曰、山城ノ國愛宕ノ郡蓼倉(タデクラ)、多天久良。古事記曰、号ケテ其ノ地ヲ謂ニ蓼津(タデツ)ト、於ニ今者云フ日下(カ)ノ之蓼津ト也〇本草類編、蘵菌 註、和太天(タデ)。日本ノ非レ蓼、蘵菌ハヲギタケ也

蓼 廚事類記曰、供寒汁時汁實与利實山葵蓼

【集註】延喜式卷第三十三曰、大膳下。七寺盂蘭盆供養料。蓼云云各二把。仁王經齋會供養料。干蓼、海菜料、各以二一把一充二四口一。同卷第三十七曰、典藥寮。諸國進年料雜藥。攝津國、蓼子云云各三升。同卷第三十九曰、內膳司。供奉雜菜。蓼十把。准二一升一、自二四月一迄二九月一。漬年料雜菜。蓼葅四斗、料塩四升、楡一升六合。萬葉集卷第十一曰、吾屋戶之、穗蓼古幹、採生之、實成左右二、君乎志得待。同卷第十六曰、小兒等、草者勿刈、八穗蓼乎、穗積乃阿曾我、腋草乎可禮。仙覺萬葉集註釋卷第十六曰、やほたでとは、蓼の穗は八すぢたつがある也。女郎花物語曰、賴光朝臣、但馬の守にて有ける時、たちの前にげだつと云川のかみより、舟の下たりけるをしとみあぐる侍にとわせければ、たでと申ものをつみてまかるなりといふを聞て、口ずさみに賴光朝臣。たでかるふねのすぐるなりけり。これを連歌に聞なして、相摸母。あさまだきからろのおとのきこゆるは云云。塵添壒囊抄曰、四種事云云又味曾モ蓼モカナラズ酢ヲ入ト云云

【形狀】山家集曰、紅の色なりながらたでのほのからしや人のめにもたてぬは

青蓼 藻塩草　和漢通名也

【今名】アヲタデ

證類本草曰、靑蓼ハ人家常ニ有リ其ノ葉ハ有二圓者尖者一、以テ二圓者一ヲ爲スレ勝ト、靑蓼葉圓尖ノ二種アリ

美都多天 本草和名　**漢名** 水蓼 本草　**今名** ミツタデ

證類本草曰、水蓼多ク生ス水澤中ニ

一名 加波太天 本草類編（）本草和名曰、水蓼。和名美都多天

集註 萬葉集巻第十三曰、吊吲楢從出而、水蓼、穗積至云云。仙覺萬葉集注釋巻第十三曰、ほづみといはんとて、みづたでとをけり。本朝無題詩曰、花紅水蓼騎蜻蜓。又曰、經雨蓼花十片紅。又曰、紅蓼綠蒲皆寂寞。又曰、蓼花岸舊水聲微。又曰、池塘經雨蓼花開。又曰、紅蓼花殘水岸高。尺素往來曰、秋花者云々水蓼

形狀 本草類編曰、水蓼。和加波太天、似蓼莖赤〇水中ニ生ズル蓼也。葉細長味辛。紀州熊野船津村ニテ冬月ヨリ溝水中ニ苗ヲ生ズ、流水ニ隨ヒテ柳モノ如シ、正月ニ氏神天王社ニ獻ズ、苗長メ水蓼也、味最辛

伊沼多天 倭名類聚鈔　**漢名** 葒草 本草　**今名** オホケタデ〇今イヌタデト云ハ馬蓼也

帝王編年記曰、光明峯寺入道攝政道家之息ヲ号ス狗僧正ト。沙石集曰、先年南都ニ侍シニ、或人ノ物語ニ、故明惠上人ノ我等ハ犬時者ナリトテ、非時ニ菓子ナド召ケルト申候ヲ、ナニトモ思ヨラズ侍シ程ニ、信濃國ノ山里ノ事ノ緣アリテ越侍シ時　犬辛夷ノ花ヲ見テ、此事心得テ侍リキ。悟道得法モカクヤト覺ヘ侍シカバ、南都ニアソビナレテハンベリシ同法ノモトヘ、畳ヲ立テ一首送リタル事侍キ。思出テハンベルマヽニ徒事

ナレ共書侍給ヘリ。我是犬時者宗形似非賢故因猶如犬辛夷喩猿似ナル木律僧ヲバ、ナレツ、犬時者ニモヤナリニケル哉○證類本草曰、圖經曰、葒草、水紅也。今所在下濕ノ地ニ皆有レ之、似レ蓼ニ而葉大赤白色、高丈餘。花史左編曰、水紅花、花開蓓蕾而細長、長二寸枝枝下垂、色粉紅可レ觀

一名　以奴多天　本草和名曰、葒草。和名以奴多天。倭名鈔曰、葒草。和名伊沼多天。壓添壒囊抄曰、葒草遊龍同

伊奴太天　本草類編

犬たて　言塵集曰、犬たてとは葒草也。又云游龍と書

集註　本草類編曰、葒草。和名伊奴太天、五月採實、似蓼。仙傳抄曰、平生はたつといへども、しうげんにいむものゝこといぬたで

形狀　オホケタデハ、葉大ニメ桐葉ノ如ク圓ク、末尖レリ。草丈許ニモ至ル○馬蓼ハ蓼ニ似テ辛味ナシ

度久散　倭名類聚鈔

漢名　木賊　本草

今名　トクサ

一名　度久佐　一本和名抄。倭名抄曰、木賊。度久散

砥草　下學集曰、砥草。異名ハ木賊

こくさ　枕草紙○雅蘭裝束抄曰、とくさ云云

止久佐　本草類編。藻塩草曰、木賊。とくさかるそのはら山。新猿樂記曰、信濃梨子又木賊

證類本草曰、木賊。出秦隴華成諸郡近水地、苗長尺許、叢生、每根一藂無レ花、草寸寸有レ節、色青凌レ冬不レ凋

集註　賦役令曰、其調副物正丁一人、木賊六兩。本草類編曰、木賊。和止久佐、四月採用之。延喜式卷第五曰、齋宮。造備雜物。木賊一斤。同卷第十三曰、大舍人寮。凡正月上卯日供進御杖ニ云云　中宮

木賊十五兩。十二月五日中、省ゝ同卷第十五日、內藏寮。年中所造御梳ニ云木賊大三兩。年料木賊十斤。同卷第十七日、內匠寮。木賊小八兩。同卷第二十三日、民部下。年料別貢雜物ゝ信濃國、木賊二圍。同卷第三十四日、木工寮。年料。木賊大二斤。磨ニ床案等ニ料。同卷第四十九日、兵庫寮。木賊少一兩三分。錯ニ弓料。散木集曰、とくさ、むくのは。ほどもなくとくさむく野は成にけりむしの聲こよはり行まで。尺素往來曰、雜草木者云ゝ木賊

形狀 枕草紙曰、とくさといふ物は、風にふかれたらん音こそいかならんとおもひやられて、おかしけれ

惠具(エグ) 萬葉集

漢名 紫雲英 芥子園畫傳　**今名** ゲンゲ

一名 佪具(エグ) 袖中抄　ヱコ 塵添壒囊抄。萬葉集卷第十一曰、爲君、山田澤、惠具採跡、雪消之水爾、裳裾所沾(ヌレヌ)　回具 萬葉集卷第十一曰、足檜之、山澤回具(ヱグ)乎、採將去、日谷ニ毛相將、母者責十方(トムトモ)。蜻蛉日記曰、二月十日かもへまうづ云ゝ北野にものすればさはべにものつむ女わらはべなどもあり、うちつけにゑぐつむかとおもへば、もすそおもひやられてけり。堀河院百首曰、小山田のゑぐのわかなを打かへし苗代水を引かくるかな

集註 仙覺萬葉集註釋卷第十曰、ゑぐとは芹(セリ)をいふ。雪げのみづとはゆきのきえたる水也。せりつむをば、こゝろざしふかきことにいひならはしたれば、かくよめるにや。散木集曰、しづのめがゑぐつむ澤の薄氷いつ迄ふべき我身なるらん。後鳥羽院御集春百首、君がためをのゝあれたをふみ分てえぐつむ袖やかつこほりけん。承久元年仁和寺道

院御集春百首。春はまだあさゝは水の袖ぬらし摘やね芹のなをこほりつゝ。此うたえぐより三行前ニ書エグト芹ト二物ノ證〔〇原本ノ頭書〕

助法親王會忠度百首、若菜。ゆき分てゑぐの若なも生にけりけふの爲とはいかでしりけん。曾根好忠家集曰、雪きえばゑぐのわかなも摘べきを春さへ晴ぬみやまべの里。新葉和歌集曰、春歌上、百首哥よませ給ふける中に、村上院御製。此里は山さはゑぐを〻みそめて野べの雪ぎへ待ぬなりけり。堀河院百首曰、けぬが上に庭さへ雪の猶ふればまだもへ出ずゑぐの若葉は。袖中抄曰、ゑぐとは女萎と書て、ゑごとよめり。くとこと同音なり。花すはうにさく草の水邊にある也。或はゑぐとは芹を云と云義あれど、六帖には、芹のほかに別にゑぐをあげたり。但ふるき文は、くはしくあきらめずして、物の異名をもたゞさず、名のかはりたれば別にかける事もあれば一定にあらず。俊頼朝臣は、わかなを、仲實朝臣がもとへつかはすとてよめる哥。をがみ川うきつにはゆるゑごのうれをつみしなべてもそこのみためぞ。かへし。心ざしふかきみたにゝつみためていし見ゆすりてあらふねぜりか。今云、此哥はゑぐをゑごとよめり。かへしは、せりとよめり。ゑぐと同物とおもへるか。童蒙抄云、ゑぐとは人のくふ草之。又ゑぐとかける万葉にせりとよめり。されば、ゑぐと、せりとはひとつものゝ名と見えたり。山家集曰、野に人あまた侍けるを、なにする人ぞと聞ければ、なつむものなりとこたへけるに。としのうちに立かはる春の、しるしの若なかはとおもひて。としははや月なみかけて越にけりむべつみけらしゑぐのわか立

〔今案〕壓添壒囊抄卷第九曰、惠具事、エグトハ何ゾ。エグトハ女萎ト書、眞ニハエゴトヨム也。クコハ同音ナレバ通ヒ侍ルニヤ。花蘓枋色ニ開草也。水邊ニアリト云云。藻塩草曰、ゑく云云又云袖中抄相同如萎とかきてゑごとよめり。同事。花すはうにさく草の水邊にある也。又云、人のくふ草也といへり。觀此則惠具ハ紫雲英ナル

コ明也。袖中抄曰、朱櫻と書てかば櫻とよめり。色はすわう色之大和本草曰、京畿ノ小兒コレヲレンゲバナト云、筑紫ニテホウザウバナト云、三月花サク、赤白色、高三四寸、其葉ワカキ時食ス、紫雲英ハ種子秋彼岸ノ後ヨク生ズ、多地ニ附テ苗ヲ生ズ、葉長サ二三寸、胡枝子ノ葉ニ似テ小ク、柔ニメ茎ニ兩對シ、梢ニ一葉アリ。春茎ヲ抽、高サ四五寸、茎地ニ蔓ス。葉互生シ、梢頭ニ紅紫花ヲ開、胡枝子ノ花ニ似テ小也。數十一房ヲ成、錢ノ大サノ如シ。四五月小莢ヲ結、四五分、生青熟黒色、内ニ小キ豆アリ、五月後苗枯

芥子園畫傳曰紫雲英一名荷花紫草

倣吳梅溪畫曹石菴詩

莫是雲英潛化
滿地碎瓊狼籍
惹收童驚問蜀
錦甚時鋪得

芥子園画傳

紫雲英圖

レンゲバナ



波世乎波（ハセヲハ） 本草和名

漢名 芭蕉 本草

今名 バセヲ

槐西雜志曰、余謂ク閩ニ廣ノ芭蕉葉ニ可シ容ニ一二人ヲ臥ス、再ヒ得テ一片ヲ作ス席ト亦奇觀アリ。證類本草曰、圖經云、俗爲ニ芭蕉ト、多ク生ス江南ニ、葉ハ長サ丈許リ濶サ二尺餘。本草綱目、宗奭曰、芭蕉三年已上即有リ花、自リ心中一抽出シ一莖ヲ止ニ一花ハ全ク如ニ蓮花ノ、瓣亦相ヒ似タリ。但シ色微ニ黄緑中心無シ蕋、悉ク是レ花葉、花頭（ハナヒラ）常ニ下垂毎ニ一朶、自リ中夏ニ開キ直ニ至ニ中秋ノ後ニ方ニ盡ル、凡ソ三葉開クトキハ則三葉脫落ス也

一名 發勢乎波 倭名類聚鈔曰、芭蕉ハ巴焦二音、和名波勢乎波。本草和名曰、甘蕉根（ハセヲノヒラ）。和名波世乎波。壓添壒囊抄曰、和語字音ヲ用ル草ノ名是ニ不レ限云云芭蕉甘蕉等也

波施乎波 天文写本



和名抄 **波世乎波乃美** 醫心方曰、甘蕉。和名波世乎波乃美 **波世宇** 本草類編 **庭忌草** 藻塩草曰、芭蕉。庭忌草、秋風にあふばせを葉のくだけつゝあるにもあらぬ世とはしらずや。ふく風の夢やゝぶらん庭見草本や軒ばのともしびのかげ。藏玉。

【集註】本朝無題詩曰、蕉葉敗嵐誰賞翫。又曰、芭蕉露滴殘寒雨。又曰、芭蕉衣破晩風跡。文華秀麗集曰、院靜芭蕉色。平家物語卷第七曰、秋の風のはせををやぶるにことならず。公任卿集曰、このみはばせを葉のごとし。後拾風ふけばまづやぶれぬる草のはによそふるからに袖ぞ露けき。仙傳抄曰、ばせを葉、土ぎはよりきりて、もとをぬのをぬらしてまき、さかさまにもちて、きり口をこがして水に一夜つけべし。平生はたつといへども、しうげんにいむものゝことと云ゝ。ばせを赤染衞門集曰、ばせをばのごとし。あきかぜにくだくる草の葉をみてぞ身のかたからぬことはしらるゝ。源平盛衰記卷第四十八曰、芭蕉ノ風ニ破ルヽガ如ク。撰集抄曰、芭蕉の破易。又曰、芭蕉の上かける蜉蝣の、風になびけるは、芭蕉やさきだちて破れんとする。扶桑略記廿五日、世間不定同ニ芭蕉之待ニ秋風ー

【形狀】本草類編曰、甘蕉根。和波世宇乃祢、三年已上即有花、自心中出、一莖生一花、全如蓮花々葉

【正誤】諸後世ノ書東鏡ニ芭蕉ヲ優曇花ト云ト注スルハ非也。吾妻鏡卷第二十六日、貞應二年七月九日、藥師堂谷邊、有ニ獨住僧ー、號ニ淨密ー。於ニ件坊前庭ー、優曇花開散之由風聞、鎌倉中男女爲レ觀レ之成レ群。自ニ二品ー遣ニ遠藤左近將監ー、爲メニ後、被レ見レ之處、芭蕉花之由申レ之云云トミユレバ、芭蕉花ハ優曇花ニ非ル事明シ。僧尼令曰、凡僧尼、語ニ及國家ー、妖ニ惑百姓ー、并習ニ讀兵書ー、殺レ人奸盜、及詐稱レ得ニ聖道ー、並依ニ法律ー、付ニ官司ー科（トガセヨ）レ罪ト

ミエタリ。滄舟筆談曰、賜レ宅隅ス於小院ニ種ニス蕉數本ヲ、不レシテ閲レ月ヲ發ニス一花ヲ、纔カ倒垂甘露盈ニ萼ニ、予招ニ同人ニ賞レス之、相ニ與ニ賦レシ詩ヲ傳レス樂ト、論ス甘同ヲ以花ヲ爲レス瑞、非也。優曇華ハ三千年ニ一度開花ヨシ佛書ニミエタリ。壒嚢抄曰、物希ナル事ヲ優曇華ノ如ト云ハ何謂ゾ。此華尤希ニ開、故ニ尓云也。然レバ無ニ左右ニ可レ開花非ズ、是ニ和名ハ无キニヤトミユ。此芭蕉花ヲ優曇花ト古ヨリ云ハザル正證也。曾我物語曰、きやうだいの人々は、すけつねを中におきて、をのくめとめを見あはせ、うちうなづきて、よろこびけるぞあはれなる。三千ねんに一どはなさきみなる、せいわうぼがそのゝもゝ、うどんげよりもめづらしや。うどんげをばおがみてたをるといふなれば、それにたとふるかたきなれば、おがみてきれやきれとて、二人かたちを、さゑもんのぜうにあてゝはひき、ひきてはあて、七八どこそあてにけれ。一条兼良公ノ源氏和秘抄曰、うどんげ三千年に一たび咲花也トミユレバ、優曇花ハ芭蕉花ニ非ルコト甚明白也

美曾波木（ミソハギ） 倭名類聚鈔　[漢名] 千屈菜 救荒本草　[今名] ミゾハギ

救荒本草曰、千屈菜。生ニス田野ノ中ニ、苗高サ二尺許、莖方ニシテ四楞葉、似テ山梗菜葉ニ而不レ尖、又似ニ柳葉菜葉ニ亦短小、葉頭頗ル齊シ、葉皆相レ對生ス、梢間ニ開ク紅紫花ヲ、葉味甜

[一名] 美曾波岐 本草和名曰、鼠尾草。和名美曾波岐。倭名抄曰、鼠尾草。和名美曾波木

美曾波支 本草類編

水かけ草 藻塩草曰、水かけ草。たれもたゞけふやおるらむ

年ごとに水かけ草の露のまに〳〵。これは見そはぎの異名也。**見そはき** 見上注 **溝萩** 言塵集曰、みそ萩とは
七月十五日の忌水の儀也。藏玉にあり。仍水かけ草と云
溝萩也。和名には
鼠尾草といへり **みそ萩** 言塵集曰、みそ萩は鼠尾草と云り **美曾波幾** 藻塩草曰、鼠尾草（ソハキ）美曾波幾。塵添壒嚢抄曰、鼠尾草ヽ鼠尾草ハタムラサウ也

集註　本草類編曰、鼠尾草。和美曾波支、四月採葉、七月採花陰干、田埜多。延喜式巻第三十七曰、典藥寮。諸國進年料雜藥。山城國、鼠尾草三斤。尺素往來曰、秋花者云〻鼠尾草（ミソハキ）

形状

〇大和本草曰、ミゾハギ茎高シ、葉ハハギニ似タリ、秋開紅花、世俗コレヲ以中元ニ人鬼ニ水ヲ祭ル故ニ、ミゾカケ草ト云、ミゾハギ也

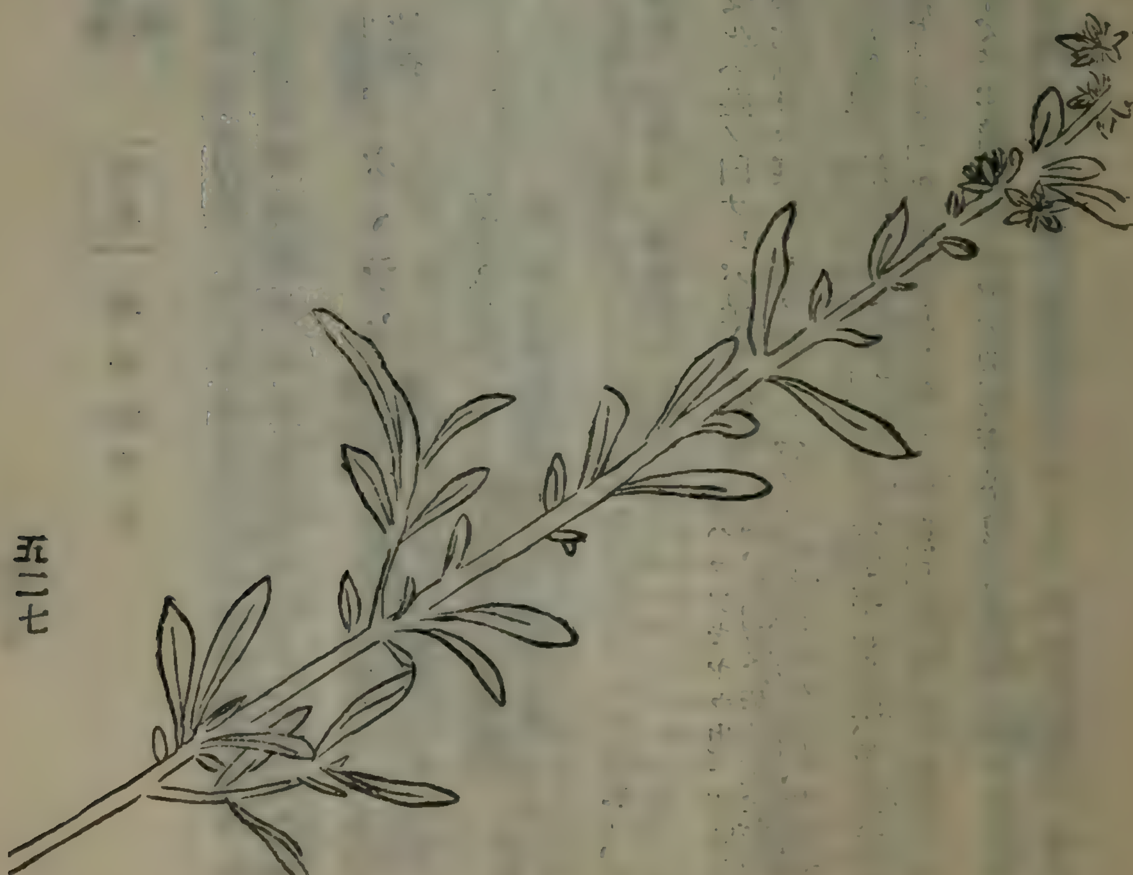
花卉百種ニ紫線ト出ルハ即ミゾハギ也



花卉百種圖

紫線

ミソハギ



多多良比賣 延喜式　漢名 毛茛 本草　今名 キムホウケ

本草綱目、時珍曰、毛茛。下濕處即多、春生苗、高者尺餘、一枝三葉、葉有三尖及細缺、與石龍芮莖葉一様、但有細毛爲別、四五月開小黄花、五出甚光艶、結實狀如欲綻青桑椹、而有尖峭、與石龍芮子不同。葉及子、氣味辛温

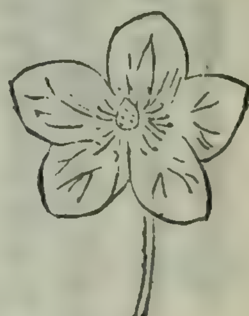
一名 たゝらへ 雅輔装束抄　タ、ラヒ 塵添壒囊抄　金態 尺素往來曰、春花者、紫藤、金錢、金態、玉態〇正字通曰、作姿曰態。由此考之レハ金態ハ即金鳳花也。玉態ハ即銀鳳花也

集註 延喜式巻第三十九曰、内膳司。漬年料雜菜。多多良比賣花搗三斗。料塩三升

今案 多々良女ニ同名アリ。雅輔装束抄曰、きなるは姝よし、春はなかくふたつはかりにひとへかさねて、たゝらへいろとてぞきる。トミユ。多々良女ハ黄色ノ正證也。壒囊鈔曰、薤曰トハ、タ、ラヒノウス也。又ハニラキ共ヨム也。薤ヒトハ辛キ物也。辛ヲ受ルハ薤ノ臼ナレバ是辭ノ字也 韲同。齏一曰擣辛物爲之辛物、薑蒜之類又石崇作韭擣韭根雜以麥苗爲之 薤ハラッキヤウ也。紹興名勝志曰、韲臼受辛。正字通曰、觀此則多々良女ノ花ノ味辛ニ合ス。倭名鈔國郡部曰、播磨國餝磨郡辛室、加良牟呂。文明写本下學集曰、辣菜漬物也。唐ニテ辣菜ト云ハ芥也。群芳譜ニ出延喜式漬年料雜菜、多多良比賣。花搗ト云ニ合セリ。古ハ毛茛ノ花ヲ摘テ、漬物トセシコト明也〇新撰字鏡ニ、萃ハ所巾反、染也。純也。太々良女ト云ハ、只赤色ヲ云テ、草木ノ花ニ據ニ非ズ。字彙曰、萃ハ疏臻切、音森、染也。又赤貌。後称念院殿装束抄曰、火色搔練 下襲ノ事、岡御命ニ云、二色無指差別事歟。應保元年二月十日、中山内府記曰、加伊練

ハ稱ニ火色ヲ、其體面ハ紅打裏ハ如ニ紅ノ單一、中倍ハ紅色ヲバイスル也。正嘉二年二月十六日、經光卿記曰、向ニ三條入道右府第（實親公）ニ被レ語云、祖父左府入道（實房公）ハ被レ作ニ裝束記一文ヲ、是人々衣裳ノ色目以下抄物也。隨分家之重寶也。搔練下重火色下重ハ各別物也。共ニ爲ニ赤色一之間人存ニ同物之由一歟、不レ可レ然、搔練ハ張下重也。火色ハ頗色薄、搔練ハ赤色殊深也。助無智秘抄曰、火ノ色ノ下重、カイネリトカハリタルモノナリ。火ノ色トハ、ウラオモテトモニ打物ニテ、中倍ヲ入タルナリ。カイネリトハ、タマウラクレナヰノハリタルニテ中ヘモナキナリ。ノリユミノ日ハ、カイチリヲキルコトナリ。火ノイロハ、宿德ノ大臣、モヤノ大饗日、尊者シテキルコト、ゾキ、ツタヘタル。三條内大臣殿コノヒイロヲト、ノヘテ、カイチリトコ、ロエテ、ノリユミノソウノ日キセタマハントテ、アルヒトニミセ給ケレバ、ミテメデタク候。但カイチリニハ候ハズトマウシケレバ、大臣殿イトモ心得ズシテキサセ給ニケリ ○多多良女如レ花ト云ハ、紅ナル花ノ如シト云ル也。桃華蘂葉曰、搔練（カイネリ）表裏紅打。或裏張。又云、火色。又衣服篇曰、火色下重皆練同色也、往昔モ彼兩色織有迷歟 明月記曰、建曆二年四月廿六日云云内大臣殿カイチリガサチ裏濃。據レ此則政事要略衛門府風俗哥ニ多々良女乃花乃如加以祢利好牟ト云ノハ赤色ノ搔練タルヿ甚明也。古事記曰、勢夜陀多良賣其容姿麗美云云、即娶ニ其ノ美人ヲ生レ子ヲ名ヲ謂ニ富登多多良伊須岐比賣命ノ、亦ノ名ヲ謂ニ比賣多多良伊須氣比賣ト ○莘、按ニ廣群芳譜栗注ニ曰、唐本草、桂陽有ニ莘栗一、又有ニ奥栗一、或云、即莘也。又榛注曰、古作レ亲、本草云、辛從レ辛從ヒレ俗ニ作ル莘者誤ノ。本草ニ莘草、生ニ山澤一、如ニ蒲黃一、葉如レ芥ト云モノ未レ詳ヘ。字典曰、莘。集韻斯人切、音辛、細莘

延喜式ニ載ル　黄色ニシテ光リアリ
多多良比賣ノ花　雅輔裝束抄ノ説ニ合ス。



大和本草曰、毛莨(キンホウケ)、石龍芮ニ似テ葉ニ毛アリ、花黄ニシテカハホ子ノ花ニ似タリ。毛莨ハ原野下濕ノ地ニ極テ多シ、一種ハ石龍芮ノ如クニシテ毛アリ、一種葉ニ岐ヲナシ、芹葉ノ如クニシテ大也、糙澁アリテ葉厚シ、俱ニ春一二尺ノ莖出五瓣、梅花ノ如キ花ヲ開、金黄色光澤アリテ美也

○玉態 尺素往來　○毛莨ノ一種也　今名　ギンホウケ

毛莨(キンホウケ)ノ白花ヲ開クモノ也○花壇綱目曰、金銀風花花金は黄の八重、一重銀は白色なり。咲比三月の時分也

○之々乃比多比久佐 本草和名○按字鏡、石龍芮注ニ、一云牛乃比太比ト云。本草和名、藜蘆、之々乃久比乃岐ト云。本草弘景、藜蘆注、葉似鬱金秦艽蘘荷等ハ、根若ニ龍膽ニ莖下有ノ毛ト云ヰハ之々乃久比乃岐ハ即日光蘭 蘆頭ニ毛アルヲ以テ也。然則牛乃比太比、之々乃久比乃岐ハ毛莨(キンホウケ)ノ一名ニシテ、其葉ニ毛アルヲ云ル者也。證類(○本脱カ)草ニ其ノ毛莨ハ似ニ石龍芮ニ而有レ毛ト云リ

一名　牛乃比太比 新撰字鏡　之々

探ノ傍ニ「改」字ヲ書ケレド不明

乃比太比 本草類編 宇志乃比太比 同上

布加都美(フカツミ) 本草和名、按ニ倭名鈔ニ石龍芮、和名布加豆三ト云ニ従テ、布加都美ヲ石龍芮トシ、之ミ乃比多比久佐ヲ毛茛(キンホウケ)トス

漢名 石龍芮 本草

今名 タゼリ

本草綱目、時珍曰、石龍芮、處々有レ之、多ク生ニス近水下濕地ニ、高者尺許、其ノ根如レ薺、二月生レ苗叢生ス、圓莖分レ枝、一枝三葉、葉青而光滑有ニ三尖一、多ニ細缺一、四五月開ニク細黄花一、結ニブ小實ヲ一、大サ如レ豆ノ、狀如ニシ初生桑椹一ノ、靑綠色、搓散則子甚細ニシテ如ニ葶藶子一ノ、即石龍芮也

一名 布加豆三 倭名鈔 不加豆彌 字鏡曰、石龍芮、不加豆弥 不加川奈 本草類編

集註 本草類編曰、石龍芮。味苦辛無毒。和不加川奈。五月五日採子、二月八月採陰干

形狀 ○大和本草曰、石龍芮。京都ノ方言ニタゼリト云、筑紫ニテウシゼリ、ウバゼリト云、葉ニヒカリアリテ、花不好。按石龍芮ハ水田中ニ生ズ、秋ノ後苗ヲ出シ、葉ノ形狀鳥頭(トリカブト)ノ葉ニ似テ、岐少ク薄ク、軟ニシテ光澤アリ。春太キ莖ヲ起シ、二三尺ニ至ル。葉莖ニ互生シ、梢ニ枝ヲ分、黃花ヲ開、毛茛ヨリ至テ小ニシテ五出光リアリ、輙實ヲ結テ、小キ桑椹ノ如ク綠色也。夏ニ至リ苗枯ル

加多之呂久佐 本草和名 【漢名】三白草 本草 【今名】ハゲシヤウ 普救類方

證類本草曰、三白草、按此草初生無白、入夏葉端半白如粉、農人候之蒔田。本草綱目、時珍曰、三白草、生田澤畔、八月生苗、高二三尺、莖如蓼、葉如商陸及青葙、四月其顚三葉面上三次變作白色、餘葉仍青不變、俗云、一葉白食小麥、二葉白食梅杏、三葉白食黍子、五月開花成穗如蓼花狀、而色白微香、結細實、根長白虛軟有節鬚、狀如泥菖蒲根。邵武府志曰、土人候其初一葉白挿秧、至三葉俱白則爲後時矣

【一名】加太之呂久佐 天文写本和名抄○倭名抄曰、三白草。和名加多之呂久佐。本草和名曰、三白草。和名加多之呂久佐

加太乃久佐 本草類編　加川之留久佐 同上

【集註】本草類編曰、三白草　和加太乃久佐、又云、加川之留久佐。二月八月採根用之

【形狀】○大和本草曰、三白草 國俗半夏生草トモ云 五月ノ半夏生ノ時、此草ノ葉面ヲ白クナル背ハ青シ、故カタジロト云。莖ノ梢三葉白ケレバ苗秀ツ、故ニ三白ト云。梢ニ三葉ノ外ハ白クナラズ。農人是ヲ以テ蒔田ヲ時ノタメシトス、水草也。陸ニモ生ズ。高一二尺、葉ハ柿ノ葉ノ大ノ如シ、每葉タテスヂ五アリ、五月ニ白花開ク、穗ノ如ク長シ、ヨキ香アリ

曾久止久 本草和名 【漢名】蒴藋 本草 【今名】ソクヅ

二斤、京本貞草本一斤ニ作ル

本草綱目、宗奭曰、蒴藋。花白、子初青ノ如ニ緑豆顆一、毎レ朶如ニ盞面ノ大一、又平生有ニ一二百子一、十月方ニ熟紅。正字通曰、續骨木名ニ木蒴藋一、樹ノ高一二丈、花葉似ニ蒴藋一故名

一名 曾久

曾久

川 本草類編

仁波止之 上同

仁波止久 異本本草類編〇本草和名曰、蒴藋。和名曾久止久。倭名類聚鈔曰、蒴藋。朔濁二音。此間音曾久止久

度久 新撰字鏡曰、蒴藋。上所角反 下直角反、曾久度久

ソクトツ 壒嚢抄曰、蒴藋(ソクトツ)

集註 本草類編曰、蒴藋。和曾久川。春夏採葉、秋冬採茎根葉村中多唯陸英一物也。陸英。和曾久川。立秋採之、春夏採葉・秋冬採之。一名蒴藋。唐本註云、无蒴藋惟言陸英日本是、和仁波止之。延喜式巻第五曰、齋宮所須藥種。蒴藋一斤一分。同巻第三十七曰、典藥寮。臘月御藥。蒴藋八兩。中宮臘月御藥。蒴藋二兩。雜給料。蒴藋一斤二兩。齋宮寮。云云蒴藋二斤一分

形状 〇蒴藋ハ原野ニ多ク叢生ス。宿根春苗ヲ生ズ、茎太ク高五尺葉互生ス。接骨木ノ葉ノ如ニメ大也。夏秋間梢ニ白花傘ヲナシ開五出也。花後實ヲ結テ赤小豆ヲ半ニスル如シ、初青、熟テ赤、秋深クメ苗枯

宇流木(ウルキ) 倭名類聚鈔

漢名 滁州夏枯草 證類本草

今名 ウツボグサ

一名 宇留比 本草和名曰、夏枯草、和名宇留比。倭名鈔曰、夏枯草。和名宇流木

宇留以 天文写本和名鈔

うつほ草 仙傳抄

集註

仙傳抄曰、平生はたつといへども、しうげんにいむものゝこと云云うつぼ草

【形狀】本草類編曰、夏枯草。和宇留比。四月採之、三月末開花作穗○大和本草曰、ウツボ草。葉ハ薄荷ニ似タリ、三四月紫花ヲ開ク、穗ノ形ウツボニ似タリ、夏ハ枯ル

加良与毛支（カラヨモギ）　本草類編

【漢名】青蒿　本草

【今名】カハラニンジン

本草綱目、時珍曰、青蒿。二月ニ生レ苗、莖粗ニシテ如レ指ニ、而肥軟莖葉色並深青、其ノ葉微似ニテ茵蔯ニ、而面背俱ニ青シ、其ノ根白硬七八月間開ニク細黃花ヲ頗ル香シ、結テ實ヲ大サ如ニシ麻子ノ中ニ有リ細子

【一名】

於波岐　本草和名曰、草蒿。一名青蒿、和名於波岐

【形狀】本草類編曰、草高。和加夏与毛支。八九月採子陰干、結子如粟米大一名青高○本草辨疑曰、青蒿ハ胡蘿蔔（ニンジン）ニ類メ小ク、葉面背共ニ青ク繁茂ス、京東川原之下（シモ）ニ多シ

加末都保（カマツボ）　本草和名

【漢名】旋覆　本草

【今名】ヲグルマ

本草綱目、旋覆花。集解、時珍曰、花狀如ニシ金錢菊ノ、水澤邊ニ生スル者、花小瓣單、人家栽ル者花大蕊簇ル

【一名】

加末保　本草和名曰、旋復華。和名加末都保、一名加末保

波

本云、天治本ハ一本云ニ作ル○群本ハ本草云ニ作ル

夜比止久佐

倭名類聚鈔曰、旋花。和名波夜比止久佐

早人草 新撰字鏡曰、旋復花。須万比久佐、本云早人草

須万比久佐 見上

加末乃川保 本草類編

波也比止久佐 本草和名曰、旋花。和名波也比止久佐、一名加末○本草綱目、旋花。釋名、恭曰、旋花即平澤旋葍也。其根似レ筋、故一名筋根、即ヒルガホ也

加末 見上

【集証】 延喜式巻第三十七曰、典藥寮。諸國進年料雜藥。安房國、云云旋覆花各一斤。上總國、云云旋覆花各二斤。安房國風土記曰、平群郡貢旋復花、石井貢旋復花

【形狀】 本草類編曰、旋覆花。和名加末乃川保、五月採花、日干廿日成、六月開花似菊花

宇末岐多之

本草和名

【漢名】 **鱧腸草** 本草

【今名】 **タヽラビ**

證類本草曰、圖經曰、鱧腸、葉似レ柳而光澤、莖似ニ馬歯莧ニ高一二尺許、花細而白シ、其實若ニ小蓮房一

【一名】 **宇末木太之** 倭名類聚鈔曰、鱧腸草。和名宇末木太之。本草和名曰、鱧腸。和名宇末岐多之

宇末久太之 天文写本和名抄

【形狀】 ○大和本草曰、旱蓮草、又鱧腸草トモ云、和名タヽラヒ、又俗ニ、タカサフラウト云、川チシヤノ葉ニ似テ長シ。又柳葉ノ如シ。叢立テ高一二尺アリ、夏ノ末ニ至リ、葉間小白花サク。實ハ蓮房ノ如シ、小ナリ。金盞ノ葉ヨリ小ニシテサキ尖ル、折レ之則黒汁出ツ、葉兩々相對ス

丹後國續斷ハ衍トシテ雲州本削ル

十　貞享本ナシ

波美（ハミ）　本草和名　漢名　續斷　本草　今名　ヲドリサウ

證類本草曰、圖經曰、續斷。三月已後生レ苗、莖四稜似ニ苧麻一葉ニ亦類レ之、兩兩相對而生、四月開レ花、紅白色似ニ益母花一根如ニ大薊一赤黃色

一名　於尓乃也加良　本草和名曰、續斷。和名波美、一名於尓乃也加良。倭名類聚鈔曰、續斷。和名波美、一云於仁乃夜加良

於仁乃也加良　本草類編　波美久佐　同上　阿佐美　同上　羊加多　新撰字鏡曰、續斷。羊加多、一云於尓乃也加良

集註　本草類編曰、續斷。和於仁乃也加良、又波美久佐、又阿佐美。七八月採陰干。延喜式卷第二十七曰、諸國進年料雜藥。下總國、續斷四兩。美濃國、云云續斷各五斤。若狹國、續斷四兩。丹後國、云云續斷各十斤。因幡國、續斷、云云各二斤。出雲國、續斷一斤。備中國、續斷云云各五斤。安藝國、云云續斷各二斤。伊豫國、續斷一斤十四兩。出雲國風土記曰、神門郡所在草木、續斷。仁多郡所在草木、續斷女委蕤李

形狀　○原野ニ多シ、冬月ヨリ叢生ス、春高サ二三尺、莖方ニシテ葉兩對ス、形狀蘇葉ニ似テ綠色、二三月葉根ニ聚リ花ヲ開、益母花ニ似テ長大也、其色淡紅　或ハ白色モアリ

以乎須岐（イヲスキ）　本草和名　漢名　商陸　本草　今名　ヤマゴボウ

【一名】伊乎須木 倭名類聚鈔曰、商陸。和名伊乎須木。本草和名曰、商陸。和名以乎須岐 伊於須支 和名傳抄 也末己波宇 本草類編 伊乎須支 同上 山牛房 頓医抄曰、商陸。山牛房。異説ナリトイヘドモ以レ之爲レ正ト

【集註】本草類編曰、商陸。和也末己波宇、又云、伊乎須支。八月九月採根陰干。延喜式巻第三十七曰、典藥寮。中宮臘月御藥。商陸二兩。毎年十二月晦日供殖藥樣云云商陸各四兩。雜給料。商陸六兩。諸司年料雜藥。齋宮寮。商陸四兩一分。內匠料。商陸云云各二兩。木工寮。商陸云云各二斤。遣諸蕃使、唐使。商陸云云各六斤。渤海。商陸云云各一斤。諸國進年料雜藥。山城國商陸八兩。伊豆國、商陸云云各五斤。近江國、商陸云云各二斤八兩。美濃國商陸云云各十斤。丹波國、云云商陸各七斤。出雲國、商陸一斤五兩。播磨國、商陸云云各七斤。美作國、云云商陸各五斤。備前國、商陸四斗。安藝國、云云商陸各六斤。出雲國風土記曰、意宇郡所在草木、商陸。出雲郡所在草木、商陸。神門郡所在草木、商陸

都岐久佐(ツキクサ) 倭名類聚鈔 【漢名】鴨跖草 本草 【今名】ツユクサ

本草綱目、鴨跖草註、時珍曰、處處平地ニ有レ之、三四月生レスレ苗ヲ、紫莖竹葉、嫩時可レ食、四五月開レクレ花ヲ、如ニ蛾形ノ、兩葉如レ翅、碧色ニシテ可レシ愛、結角尖曲如ニ鳥喙ノ、實在ニリ角中ニ、大如ニ小豆ノ、豆中有ニ細子ノ、灰黑ニシテ而皺、狀チ如ニ蠶屎ノ

一名 露草 源氏物語曰、露草。枕草紙曰、見るにことなることなき物の、もじにかきてことゞしきもの、露草。下學集曰、露草、又云二月草一、又云二鴨頭草一ト 月草 萬葉集卷第四曰、月草之、徙安久、念可母、我念人之、事毛告不來。同卷第七曰、月草爾、衣者將摺、朝露爾、所沾而後者、徙去友。同卷第十一曰、月草之、借有命、在人乎、何知而鹿、後毛將相云。同卷第十二曰、百爾千爾、人者雖言、月草之、移情、吾將持八方。 いきくさ 仙覺萬葉集注釋卷第二曰、假令鴨頭草、これをいきくさといふ、もし人これをかもくさといはゞ、才人なんぞくちびるをかへさゞらん

鴨頭草 萬葉集卷第七曰、鴨頭草丹、服色取、摺目伴、移變色登、偁之苦沙。同卷第十二曰、內日刺、宮庭有跡、鴨頭草乃、移情、吾思名國。仙覺萬葉集注釋卷第十曰、月くさとは露草也。よろづのはなは、朝日影にあたりてこそさくに、この花は月影にあたりてさけば、つきぐさと云といへり。

倭名鈔曰、鴨頭草。漢語抄云、鴨頭草。都岐久佐。辨色立成云、押赤草。壒囊抄曰、鴨跖草 押赤草 見上註

豆支久佐 新撰字鏡曰、𦾔。豆支久佐 百夜草 詞林采葉抄曰、百夜草ト八月草也。此草百夜花サクユヘニ此名アリト申。月草卽正字也。此花俗語ニモ露草ト申也 續草 言塵集曰、百夜草。露草也。續草共一說なり 思草 言塵集曰、思草。露草也。一しほん共、りんだう共。尾花がもとの思草は、りんたう也。師說也。藻塩草曰、露草おもひぐさ

つき草 藻塩草曰、つき草。うつろふ物に云り つみ草 藻塩草曰、露草。つみ草、是一說也と云云 移花 吾妻鏡卷第十二曰、相摸國吉田庄御年貢送文

事移花十五枚云云。山家集曰、うつり行色をばしらずことのはの名さへあだなる露草の花

青花

頓醫抄曰、胎衣不下治、青花ヲ湯ニトキテ可服

【集註】延喜式巻第十五曰、内藏寮。奉諸陵幣。云云鴨頭草木綿二十枚。別二枚。云云。已上陵十所料。鴨頭草木綿十四枚。別二枚。已上墓七所料。江家次第巻第五曰、圓宗寺最勝會事。永宣旨國國。鴨頭草移(ツキクサノウツシ)二帖、上野。法華會鴨頭草二帖、下野。公任卿集曰、かけまさが露草のうつし聞えたりけるやり給ふとて。朝夕に常ならぬよを歎くまにうつし心もなく成にけり。返し。は末より深くそめてし色なればよはうけれ共かへりやはする。又曰、露草のうつしを、宮のすけのもとめければ、色わろきなんあるとの給へりけるを、とりに奉るとて。うすからん花をわびてぞ思ひつる猶こゝまでもちるをおしむな。返し。おしむべき程だにもなき花よりもまづ歸りぬる花の色にぞ有ける。狹衣曰、月草に聞奉りし御心のうしろめださなれど

【形狀】東關紀行曰、月草のあだなる色をかねてしらぬにしもあらざりしかど。源氏物語橫笛曰、かしらは露草してことさらに色どりたらむ心ちして。同あげまき曰、月草の色なる御心なりけり。塵添壒囊抄曰、縹(ハナダノ)事。花染ヲハナダト云ハ何ノ字ゾ。縹(シヤウノ)字ヲ用與。玉造鈔ニモ縹(ハナダ)ノ袖飄颻トヒルガヘルトヨメリ。袖中抄曰、月草ハ六月、七月などにこそさきはじむれ。榮花物語本のしづく曰、かしらははなをぬり云云〇大和本草曰、鴨跖草。葉ハ竹葉ニ似タリ。花ノ形ハ鳳仙花ニ似テ碧色ナリ

宇末佐久(ウマサク)

本草和名

【漢名】青葙 本草

【今名】ノケイトウ

本草綱目、時珍曰、青葙ハ生ニス田野間ニ、嫩苗似テ莧ニ可シ食、長レハ則高サ三四尺、苗葉花實與ニ雞冠花ニ一樣ニシテ無シレ別、但雞冠花穗、或有リ大而扁、或團者ハ、此レハ則梢間出ニ花穗ヲ、尖長四五寸、狀如シ兎尾ノ、水紅色亦有リ黃白色者、子在リ穗中ニ、與ニ雞冠子及ヒ莧子ニ一樣

【一名】阿末佐久　本草和名曰、青葙。和名宇末佐久、一名阿末佐久

宇麻久左　天文写本和名抄曰、青葙。和名宇麻久左、一云阿末久左

阿末久左　見上

阿萬佐久　倭名類聚鈔曰、青葙。和名宇末佐久、一云阿萬佐久

あひまくさ　藻塩草曰、青葙。うまくさ、又あひまくさ

【形狀】〇原野下濕ノ地ニ多シ。苗葉與ニ雞冠ニ相ヒ同シ。花ハ穗ヲナシ尖長淡紅色

濱木綿（ハマユフ）　萬葉集

【漢名】文殊蘭　廣東新語

【今名】ハマオモト

廣東新語曰、有ニ文殊蘭、葉ノ長サ四五尺、大サ二三寸而厚シ。花如ニ玉簪ニ如ノ百合ニ而長大、色白ク甚タ香シ、夏ノ間ニ始テ開ク

ハマユフ　枕草紙曰、草は、はまゆふ

【一名】はまゆふ　源氏物語

はまゆふ　源平盛衰記卷第九曰、其後康賴入道ハ、小竹ヲ切テクシトシ、浦ノハマユフヲ御幣ニ挾ミ、蒐草ト云草ヲ四手ニ垂。萬葉集第四曰、三能野之、浦乃濱木綿、百重成、心者雖念、直不相鴨

【集註】類聚雜要抄曰、母屋大饗。饗膳搔敷ハ、カシハノ上ニ、ハマユフヲシク。カシハヲ二分許見タリ。鳥足カシハハシテ裹テ、上ヲハマユフシテツヽム。カシハ

ヲ二三分許リ見也云云。窪坏三寸、有ニ濱木綿ニ搔聚。宇津保物語俊蔭曰、うらのはまゆふいくかさね。山家集曰、みくまのゝ濱ゆふ生る浦さびて人なみ〳〵に年ぞかさなる。源氏和秘抄曰、はまゆふとは、三熊野のうらにある草也。きてうのかたびらのへだてたる心なり。讃岐入道顯綱集曰、中宮のますかけはまゆふをとりにをこせんと契りてまつに、ひさしくをとせざりければ、よみてつかはしける。わすらるゝわがみくま野のはまゆふをなにしに人にとへといひけん。返し、みくま野のうらみどころもなきものをとへとちぎりしほどのすきねば。堀河院百首曰、みくまのゝ浦のはまゆふかさねつゝ。詞林采葉抄曰、濱木綿ハ紀伊國ノ御熊野ニアラズ、志摩國眞熊野ノ浦ヨリ、大臣ノ大饗ノ吃献ズルヿ舊例也。是ヲ以テ雉ノ別足ヲ包ムトゾ申。藻塩草曰、うらのはまゆふ云々又これにけさう文を書て、人の方へやるに、返事せねば、其人わろしと也。又云、これにこひしき人の名をかきて、枕の下にをきてぬれば、かならず夢みると也

形狀

榮花物語曰、女ばうのくるまおほからず、十五ばかりぞある、そでくらぎぬのかさなりたる、うらのはまゆふにやあらん、いくへとしりがたし。源氏物語乙女曰、はまゆふばかりのへだてさしかくしつゝ。仙覺萬葉集註釋卷第四曰、はまゆふをよめるみくま野のうらは、伊勢の國なり。濱ゆふは芭蕉に似てちゐさき草也。くきのいくえともなくかさなりたるなり。へぎてみればしろくて、紙などのやうにへだてのある也。大臣大饗などには鳥の別足つゝまんれうに、いせのみくまのゝうらよりめしのぼせらるゝといへり。詞林采葉抄曰、濱木綿ノ姿ハ芭蕉ノ如ニテ、莖ハヘケバイクツモナク重リタル物也。藻塩草曰、抑此はまゆふは、芭蕉に似たる草の、くきのかはのうすくおほくかさなれる也。もゝへとよめるも

同儀也。袖中抄曰、綺語抄云、はまゆふはばせをばににたる草の、はまにおふるなり。葉のもゝかさねあるなり。みくまのは紀伊國の、くまのゝうらを云也。童蒙抄云、はまゆふとは、みくまのゝはまにおふる也。くきのかはのうすくて、おほくかさなれる也。私云、はまゆふは、葉のかさなりたるなり。おほくかさなりたれば、八へともよみ、もゝへともよむ〇大和本草曰、濱木綿、ヲモトニ似タリ。俗名ニハマヲモト𪜈云。海邊ニ生ズ。七八月白花ヲヒラク。莖高クノビテ、只梢ニ數花アツマリヒラク、巻丹ノ花ノ形ニ似タリ、非好花。季秋花サキタルアトニ數顆ミノル、一顆ノ大如二胡桃一、內ニ無レ核有二白肉一。今按ニ、西土ニモアリ、ハマバセウト云。紀州熊野ノ濱ニ多シ。按、ハマユフハ、ヲモトニ似テ、長サ四五尺ナル葉太キ莖上ニ聚リ附ク、其實ノ肌ヱ馬錢子(マチン)ノ肌ノ如ク、茶褐色ノ短毛アリ

濱木綿

花白色

香氣アリ



阿佐美（アザミ） 本草和名 【漢名】 **薊** 本草小薊也 【今名】 **アザミ**

更級日記曰、あざみ、わらひあざけるものどももあり。又曰、あざみたることかぎりなし。宇津保物語俊蔭曰、一天下の人皆いひあざみて。宇治拾遺物語曰、見るものあざまずといふことなし。又曰、人々これをきゝて見あざみけり。撰集抄曰、時の人あざみあへるわざなのめにもすぎたり。又曰、後世者と思ひたればそやらん人にもしられて入べき人のありといふ事よとてあざみあへり。宇鏡曰、佞、諂也。奸也。阿佐牟。又曰、薊ノ花初メ將ニ開ント、保々牟、又乎ニ阿佐美 薊。字典曰、集韻與レ葜同。又葜字註曰、爾雅、葜薊、註似レ葦而小實中ト即萩ニシテヲギ也。奸。字典曰、僞也。本草綱目、時珍曰、薊猶レ髻也。其花如レ髻也（）證類本草曰、小薊今處處有レ之、俗ニ名ニ青刺薊ト、苗高尺餘、葉多レ刺、心中出レ花ヲ、頭如ニ紅藍花ニ而青紫色、北人呼テ爲ス千針草ト。當ニ二月ニ苗初生、二三寸時幷レ根作レ茹食レ之甚美

【一名】 **阿佐彌** 新撰字鏡曰、薊。阿佐弥。葎。阿佐弥。倭名類聚鈔曰、薊。和名阿佐美。

安佐美 本草類編 本草和名曰、大小薊根。和名阿佐美○葎字典ニ曰、類篇ニ吳俗以ニ草木ノ葉ヲ糞スルヲレ田ニ曰レ葎ト。即シタキ作リ也（）薊。字典曰、玉篇ニ同レ薊

阿邪美 古事記曰、娶ニ云々阿邪美能伊理毘賣命ニ生ニ御子ニ云々次阿邪美都比賣命。又曰、次阿邪美都比賣命。日本書紀曰、薊瓊入媛

乎ニ阿佐美 新撰字鏡曰、薊。乎ニ阿佐美（）字典曰、葜。說文作薊ヲギ也

【集註】 延喜式卷第三十九曰、內膳司。供奉雜菜。薊（アサミ）六把。准ニ六升ニ、自ニ二月ニ迄ニ九月ニ。漬年料雜菜。薊二石四斗。料塩七升二合。本草類編曰、大小薊根。和安佐美乃祢。五月採苗。九月

百ノ下京本貞享本廿字アリ

採根。常陸國風土記曰、行方郡其野出薊

【種殖】 延喜式卷第三十九曰、內膳司。耕種園圃。營薊一段。種子三石五斗。惣單功四十四人。耕地二遍把犂一人。馭牛一人。牛一頭。料理平和二人。糞百擔、運功二十人。殖功二人。芸二遍、第一遍三人。二月第二遍三人。七月刈功四人。擇功八人。三年一度還殖

夜萬阿佐美（ヤマアザミ） 倭名類聚鈔 【漢名】 大薊 本草 【今名】 ヤマアザミ

【一名】 耶麻阿佐美 天文寫本和名抄○倭名鈔曰、大薊。蘇敬本草注云、大薊。生山谷間者也。和名夜萬阿佐美 【集註】 出雲國風土記曰、飯石郡所在草木、大薊

【形狀】 ○大薊ハ薊ニ似テ至テ大也、高サ四五尺ニ及ブ、葉薊ヨリ大ニシテ白斑文アリ、秋梢ニ淡紫花ヲ開、薊ニ同シテ小也

布保々天久佐（フホホテグサ） 本草和名 【漢名】 飛廉 本草 【今名】 ヤハズアザミ

證類本草曰、飛廉。陶隱居云、處處ニ有リ之、極テ似テ苦芺ニ惟葉下附テ莖ニ有リ皮起似テ箭羽ニ葉又タ缺ク。花紫色 【一名】 曾々岐 本草和名曰、飛廉。和名曾々岐、一名布保々天久佐

曾曾木 天文写本和名抄○倭名類聚鈔曰、飛廉草。和名曾曾岐、一云布保保天久佐 之於天 本草類編 曾曾支 同上 宇波良 藻塩草曰、飛

蕀。宇波夏、又布保々天久佐

【集註】本草類編曰、飛蕀。和之於天、又曾曾支。正月採根、七八月採花陰干

【形狀】〇本草辨疑曰、飛蕀。此草和ニ間有之、草花屋ニ、オニマユハギト云、アザミノ類ニシテ、花葉皆アザミノゴトシ、刺多ク、茎ノ四方ニ羽有

加末奈（カマナ）本草和名　【漢名】苦芺 本草　【今名】ヒメアザミ　【一名】加美於古之奈 本草

本草綱目曰、苦芺。集解、保昇曰、所在下濕地有レ之、茎圓而無レ刺、可シ生食ニ。時珍曰、大サ如シ拇指ノ、中空茎頭ニ有レ臺似リ薊、初生可シ食

和名曰、苦芺。和名加末奈、一名加美於古之奈

加萬奈

倭名類聚鈔曰、苦芺。和名加萬奈、一云加美於古之奈

加末奈久佐 本草類編

【集註】本草類編曰、苦芺。和加末奈久佐、五月五日採暴干

【形狀】〇本草辨疑曰、苦芺。是ハアザミノ刺ナキ者、山野ニ多ク生ズ

比由（ヒユ）本草和名　【漢名】莧 本草　【今名】ヒユ

群芳譜曰、諸莧皆ナ二三月ニ種、葉如シ藍、茎葉皆高ク大ニシテ易シ見、故名ク莧ト、開キ細花ヲ成ス穗ヲ、穗中細子扁而尖ッ、與ニ青葙子鷄冠子ニ無シ別差、老レバ則茎甚高シ、六月以後不レ堪レ食

【一名】ヒユ

塵添壒嚢抄曰、莧(カン)草名ヒユ。本草和名曰、莧實。和名比由。倭名類聚鈔曰、莧。和名比由○新撰字鏡曰、赤莧。比由○赤莧アカヒユ也

集註 延喜式卷第三十九曰、内膳司。供奉雜菜。莧(ヒユ)四升。五六七八月。本草類編曰、莧實。和比由。十一月採之、五月五日採之。律曰、莧菜不得和鼈肉之類、有所犯者典膳徒三年

阿(ア)加(カ)比(ビ)由(ユ) 倭名類聚鈔

漢名 赤莧 本草

今名 アカビユ

證類本草曰、圖經曰、赤莧。亦謂二之ヲ花莧一ト、莖葉深赤○倭名鈔曰、赤莧。和名阿加比由

形状 ○大和本草曰、赤莧ハ色紅紫ナリ、莖葉至レ秋大ナリ、其莖方五六寸ナル者有レ之

保(ホ)々都(ツ)岐(キ) 本草和名

漢名 酸漿 本草

今名 〔○刊本ホヽヅキとあり元本は缺〕

本草綱目 酸漿。集解、禹錫曰、苦耽ハ生二ス故墟垣塹間一ニ、高サ二三尺、子作レシ角ヲ如三シ撮口袋ノ中ニ有二レ子如レ珠、熟則赤色。宗奭曰、酸漿即苦耽也。苗如二天茄子一ニ、開二キ小白花一ヲ結ノ青殻一ヲ熟スレハ則深紅、殻中子大サ如レ櫻ノ、亦紅色、櫻中ニ復有二細子一、如二落蘇(ナスビ)之子一ノ、食レ之有二リ青草氣一也

一名 赤加賀智 古事記曰、彼目如二赤加賀智(ホヽツキ)一云云 此謂赤加賀智者今ノ酸醬者也

阿箇箇鵜知

日本書紀曰、赤酸醬。此云阿箇箇鵜知

奴加都岐

本草和名曰、酸漿。和名保々都岐、一名奴加都岐。枕草紙曰、夕がほは云々にくきみのありさまこそ、いとロおしけれ、などてさはたお

天治本ニヨルニ加我弥吾ノ下「佐」ヲ脱ス

豆ノ下天治本「支」アリ是ニヨルベシ

ひ出けん。ぬかつきなどいふものゝやうにだにあれかし。殿村常久ガ考ニハ、ヌカヅキヲ苦蘵（ハタケホウヅキ）トス非也。枕草紙ニハ實ノ大小紅白ヲ云ルニメ、ヌカヅキハ常ノホウヅキ也

保保豆木 倭名　類聚鈔曰、酸漿。和名保保豆木

保宇川支 本草類編

加我彌吾 新撰字鏡曰、酸醬。加我弥吾、又奴加豆支

奴加豆支 見上

奴可豆 新撰字鏡曰 蘵 奴可豆〇蘵。字典曰、玉篇同レ蘵。又蘵字註、爾雅註、蘵葉似ニ酸漿ニ花小而白中忠黃、ハタケホウヅキ也

牟可豆支 新撰字鏡曰、蔹。牟可豆支、字典曰、蔹。爾雅、蘵ニ黃蔹、ハタケホウヅキ也

蓢（ホ）漿（ツキ） 壒添壒囊抄。正字通曰、蓢草名、菝葀、按唐本草薄荷名菝葀

ほうつき 仙傳抄、藻塩草曰、酢醬。ほゝづき。枕草紙曰、おほきにてよき物

ほうづき

【集註】本草類編曰 酸漿。和保宇川支、五月採陰干

【形狀】釋日本紀曰、赤酸醬（アカカヾチ）。私紀曰、其色ノ如ニ赤血ニ也。其目羅艷「猶ヲ如ニ赤血ニ也。欲レ言ニント赤血ト便チ假ニ云ニ赤酸醬ト也。是今ノ保々都岐ト云者也。其ノ色亦艷然タリ、故假爲之。榮花物語はつはな曰、御いろしろくうるはしう、はゝづきなどを、ふきふくらめて、すへたらんやうにぞみえさせ給。源氏物語野分曰、げにあやしくもうち思ふまゝに聞えてけるかなとおぼして、みづからもうちゑみ給へる、いとおかしき色あひつらつきなり。ほうづきとかいふめるやうに、ふくらかにて、かみのかゝれるひまゝゝ、うつくしくおぼゆ同とこなつ曰、まみらうたげにて、つらつきあかめるも、おやの御めには、いとうつくしくのみみゆ。同みをつくし曰、女君かほはいとあかく匂ひて、こぼるばかりの御あいぎやうにて

【附方】**霜腫** 頓医抄曰、小児ノ霜腫ヲ治ス、ホウヅキノ葉ヲツキシボリテ付ベシ。實モ根モヨキ也。

如法ジム。
ル物ナリ。

之布岐（シフキ） 本草和名 ［漢名］ 蕺 本草 ［今名］ ジウヤク

證類本草曰、蕺菜、圖經曰、山谷陰處濕地有ㇾ之、作ㇾ蔓生、莖葉如ㇱ蕎麥ㇴ而肥。本草綱目、時珍曰、其葉腥氣リ、故ニ俗呼爲ニ魚腥草。案スルニ趙叔文醫方云、魚鯹草、即紫蕺、葉似ㇾ荇ニ其狀三角、一邊紅、一邊青

［一名］ 之布木 倭名類聚鈔曰 蕺。唐韻云、蕺菜名也。養生秘要云、之布木。本草和名曰、蕺。和名之布岐 以波加支留 本草類編 安支 同上

［集註］ 俊頼髄脳抄曰、あゆ（香魚）はたゞはたゝかちしてまいらせよよりいゑしふきよしとてまたなしふきそゐやうゐん法師是は、よりいゑが許にて、人〻遊びけるに、あゆはたゝと申いをゝ、さかなにしてはべりけるに、ゐやうゐんと申法師の有けるに、しぶきといふものを肴にてありけるが、まことにあしく覺えければ、是あしともいはで見ゐたりけるに、あゆはたゞのいとよげなるを、人〻くゐのゝしりて、かく申たりければ、きゝもあへず悦びながら、つけたりけるとかや。蜻蛉日記曰、しりへのかたなるいけに、しぶきといふ物おひたるといへば、とりてもてことといへば、もてきたりたる、げにあへしらひて、ゆをしきりてうちかざしたるていとおかしうおぼへたる

［形狀］ 本草類編曰、蕺。和以波加支留 又云安支、蕎柴。赤色葉蕎麥
○大和本草曰 蕺菜、ドクタミ、又十藥トモ云、甚臭アシ、

扁比伊知己（ヘビイチゴ）本草類編　［漢名］蛇苺 本草　［今名］クチナハイチゴ　［一名］くちなは

本草綱目、蛇苺。集解、宗奭曰、田野道旁處處有ㇾ之、附ㇾ地生、葉如ニ覆盆子一。但光潔而小、微有ニ皺紋一、花黃比ニ蒺藜花一差ヽ大。春末夏初結ニ紅子一、如ニ荔枝色一

いちこ　枕草紙○藻塩草曰、虵苺。くちなはいちこ、

土イチゴ　按、頓醫抄曰、蓬藟、土イチゴノツル子、觀ㇾ此則土イチゴハ蛇苺ニメ、蔓ヲナセル根ヲ藥ニ用ルヿ明也。蓬藟ハ、クサイチゴニメ蔓ナシ

［集註］枕草紙曰、名おそろしき物、くちなはいちご

［形狀］本草類編曰、蛇苺。和扁比伊知己。春末夏始結紅子如荔枝色〇原野ニ多シ、蔓地ニ蔕延テ、所々苗アリ。葉翻白草（フクリンウサ）ニ似テ、葉薄ク皺アリ。夏二寸許ノ莖出、五瓣黃花ヲ開、後實ヲ結テ赤色揚梅子ニ似タリ

宇川末女久佐（ウツマメグサ）本草類編　［漢名］蛇含 本草　［今名］ヲヘビイチゴ

本草綱目、頌曰、蛇含。出ニ興州一、今近處亦有生ニ土石上或下濕地一、一莖五葉、或七葉有ニ兩種一

［一名］都末女　本草和名曰、虵全、陶景注云、是虵含、蘇敬注云、全是含字誤也、宜改爲含。一名女靑、和名都末女

［集註］本草類編曰、虵含和宇川末女久佐、八月採陰干。延喜式卷第三十七曰、典藥寮。元日御藥。虵銜一兩。臘月御藥。虵銜七兩。中宮臘月御藥。虵銜一兩。

ハ宇都末女ノ誤脱カ

雜給料。虵銜十二兩。諸司年料雜藥。齋宮寮。虵銜九兩一分。左右近衛府。云云虵含各三兩。左右兵衛府。虵銜云云各二兩。遣ニ諸蕃使一。唐使。虵銜云云各二斤。渤使。虵銜云云各一斤。諸國進年料雜藥。尾張國、虵銜云云各五斤。武藏國、虵銜三斤十兩。安房國、虵銜云云各一斤。上總國、虵銜一斤。常陸國、虵銜五斤。近江國、虵銜八斤五兩。美濃國、虵銜九斤。備前國、虵銜云云各三斤。備中國、虵銜八斤。讃岐國、虵銜二斤。安房國風土記曰、平群郡貢蛇銜

【形狀】〇蛇含ハ原野ニ多シ、春苗ヲ生ズ。葉蛇苺クチナハイチゴニ似テ五七一葉ヲナス。夏高サ尺許、梢枝ヲ分五瓣黃花ヲ開

伊岐久佐（イキクサ） 本草和名

【漢名】景天 本草

【今名】ベンケイサウ

證類本草曰、景天。春生、苗葉似ニ馬齒一而大、作レ層而上莖極脆弱、夏中開紅紫花

【一名】伊支久佐 本草類編〇本草和名曰、景天。和名伊岐久佐。倭名類聚鈔曰、景天。和名伊岐久佐。新撰字鏡曰、景天。伊支久佐

いきくさ 藻塩草曰、景天。いきくさ

如意草 藻塩草曰、如意草。いきくさ（）居易錄曰、西山廣泉寺ニ有ニ老僧一、不レ求レ食ヲ于人ニ、不レ出レ山ヲ者數十年矣。日ニ唯タ采ニ如意草ヲ食レ之、不レ知レ所ヲ從來一ル、唯タ此ノ僧種レ之ヲ、其ノ葉光澤ニシテ而味甘美ナリ。物理小識ニ曰、如意艸與ニ小檗葉一照成紋者寂滑可レ合ニ食松柏葉一。或ノ云ク、如意艸可レ吞ニ細磁一

一夜草 詞林采葉抄曰、夜一夜草ヲ和名ニ司ル陰氣一草ト見タルヲヤ、加之此夜一夜草ハ本草ニ曰、景天草矣。此名天ノ景也。又日ノ陰也。爭有餘義理悉令符合、一夜草ヲ夕陰草ト申一義也

【集註】本草類編曰、景天。和伊支久佐、四月四日、七月七日採陰干【形狀】〇山中自生アリ、春苗ヲ出シ、高サ一二尺、葉層ヲナシ對生スルモ、互生スルモアリ。形狀如二匙頭一鋸齒アリ夏秋花ヲ開、ミセバヤノ花ニ似タリ【附方】頓医抄曰、婦人玉門冷乾ヲ治ス。イキ草ヲ陰乾ニシ酒ニ入テ可レ服、コク煎テモ服也

波末世利(ハマゼリ) 本草和名　【漢名】**蛇牀** 本草　【今名】**ハマニンジン**

證類本草曰 圖經曰、蛇牀子、生二臨淄川谷及田野一、今處處有レ之、三月生レ苗ヲ、高サ二三尺、葉青碎作レ叢ヲ似二蒿枝一、每二枝上一有レ花、頭百餘結ヒテ同ク一窠ニ、似二馬芹類一、四五月開二白花一、又似二散水子一、黄褐色如二黍米一

【一名】**比留无之呂** 本草和名曰、虵床子。和名比留无之呂、一名波末世利　**比留牟之呂** 倭名類聚鈔曰、蛇床子。和名比流牟之呂　**比呂牟之呂** 天文写本和名抄　**比留牟志呂** 新撰字鏡曰、虵床。比留牟志呂。塵添壒囊抄曰、虵床子

【正誤】本草啓蒙ニ、和名鈔ニヒルムシロト訓ズルニ因テ、古ハ藥舖ニ誤リテ水草ノヒルムシロノ實ヲ蛇床子ト稱シ貨ト云フハ不ニ深攷一ノ說也。本草和名ニ、蛇床子、比留无之呂、一名波末世利トミエタリ。本草類編ニ、蛇床子、比留无之呂、又波末世利、五月ニ採實陰干ストミユレバ比留无之呂ハ卽蛇床タルコト古ヨリ甚明白ニシテ、水藻ノヒルモニ非ルコト可レ知也

【集註】延喜式卷第三十七曰、典藥寮。遣諸蕃使。唐使。虵床子云云各四斤。渤使。云云虵床子

一斤八二升ノ誤

各一斤〻諸國進年料雜藥。尾張國、蛇床子一升。相摸國、蛇床子一升。武藏國、蛇床子一斗。常陸國、蛇床子二斗七升。近江國、蛇床子二升二合。美濃國、蛇床子九升。長門國、蛇床子五升〻阿波國、云〻蛇床子各二升。讃岐國、蛇床子云〻各一斗六升。伊豫國、蛇床子五合

[今案] 脩治纂要ニ、蛇床子、田野路辺ニアリ、葉ハ芹ノ如クニシテ高サ二三尺、五月白キ花サキ、茴香ニ似ル實也。又大明人久ク薩州ニアリシ、或時逢テ是ヲ問ニ、和ニヤブセリト云草ノ實也。本草辨疑曰、山野陰所ニ間多コレアリ、胡蘿蔔ニ似タリ、故ニ一名ノニンジントモイフ。此説皆竊衣也。蛇床子ハ海邊濕地ニ多シ、世ニハマゼリ、又ハマニンジント云、葉川芎ノ葉ニ似テ細小、厚クカタシ、面深綠光澤アリ、背色淺シ。夏高サ尺餘、莖ニ葉互生ス、梢ニ水芹ノ如キ白花ヲ開、實ヲ結テ黍米ノ如シ

乎木(ヲギ) 倭名類聚鈔　[漢名] 荻 通雅　[今名] ヲギ

通雅曰、今ノ人特ニ謂ニ之ヲ荻ト、莖短小ニシテ而實其ノ末曲ノ如シ鉤ノ類ス馬鞭節ニ、其ノ葉脛長而色白、重ノ子蘆ニ有リモ白脊ニ、其花先ノ紫脆ク後チ白如シ散絲ノ、今ノ人以テ爲ス蒹葭ト。淮南子曰、荻苗類スレハ蘆ニ是也

[一名]

乎疑 萬葉集巻第十四曰、伊毛奈呂我、都可布河泊豆乃、佐左良乎疑、安志等比登其等、加多里與良斯毛

乎支 新撰字鏡曰、蘿。乎支。蕙。乎支。荻 蘆同。從歴反、蒹荻也。乎支

乎岐 天文写本和名抄○倭名抄曰、荻字亦作蘸〻和名乎木。藻塩草曰、荻。野などによむ、水邊にもあるべしと云〻

文見草 藻塩草曰、荻。文見草。異名也。藏玉にあり

か

屋ハ木活本岩ニ作ル此字形ハ岩ニ用ヰタリ従類本ノ活版本藏玉集岩ニ作ル　すぐれハすぐるノ誤但シ木活本モ誤ル

せきゝ草 同上

•露屋草 同上。おる袖のおらではすぎし露や草かりそめのまの花の袖かも。これ荻か、藏玉に

風もち草 同上。をちこちにふきすぐ•れをとはきこゆれど風もちくさぞをともたゆまず。藏玉

ね覺草 同上、秋といへばいかなる夜はもね覺草風や夢路のせきとなるらん。藏玉

とはれ草 同上。をとづれのうき物ながらとはれ草袖には露をさそふ也けり。二条院さぬき歌也。とはれ草とよむ事、いそやといふ物に、おぎをとはれ草と詠ぜし順德院哥侍注也。藏玉にあり。假名文字遣曰、おぎのは、荻葉

集註 和泉國風土記曰、大島郡玉横野郷、出萩荻萱菅。日根郡所在草木、荻萩。本朝無題詩曰、野荻洲蘆盡城傍。榮花物語うら〳〵のわかれ曰、おぎふくかぜのをとも、とをきほどのけはひのそよめきにおぼしよそへられけり。同とりべの曰、おぎのうはかぜ、はぎのしたづゆもいとゞ御みゝにとまりてすぐさせ給ふにも。同もとのしづく曰、八九月になりぬれば、木ゝのこのはもえだにとまらず、むしのこゑ〳〵ものおもひしりがほに、おぎふくかぜのをともそゞろさむく。今物語曰、庭の荻原まねけども、風より外はとふ人もなく。河越記曰、秋まちそよぐ荻の葉は、いかなる風も吹つくすべくもみえず。平家物語曰、さるほどにおぎのうは風もやう〳〵身にしみ。狹衣曰、おぎのうは風のあらゝかに吹こしたるに。又曰、さりとて又おぎのうへの露ばかりにては。又曰、またいとくらければみすをすこしまきあげ給へるに、御まへちかきすいがいのつらなるおぎの葉の、露のいたくみだれて、おれかへりたるを、吹こすこがらしに、はら〳〵とみだれおつるつゆのしらたま、げにそでにはたまらぬとおぼされて。歌林四季物語曰、おぎの葉のをとづ

れもやゝたえにたり。俊頼髓腦抄曰、おぎのはのそよとこたふるにつけても、あはれをもよほし。仙傳抄曰、人をまつ花のごと、日おもてへ松のこずゑをなびかせ、おぎの葉を下草にたて、風のふくふかずの躰に見する。後撰集曰、秋大輔がうづまさのかたはらなる家に侍けるに、をぎの葉に文をさしてつかはしける。左大臣。山ざとの物さびしさは荻の葉のなびくことにぞ思ひやらるゝ。撰集抄卷第四曰、荻の下露袂(たもと)に落る色は紅なり。同卷第九曰、荻(おぎ)の葉にそよめきわたる秋風。藻塩草曰、そよぐ、荻あし竹などのそよぐ也。よのくさのはにも云べし。すぎのはそよぐなどは云べからず。又曰そよさらに、是も荻あし計の義也。更級日記曰、武藏の國に成ぬ、ことにおかしき所も見えず、はまもすなごしろくなどもなく、こひぢのやうにて、むらさき生ふときく野も、あし荻のみたかくおひて、馬にのりて、ゆみもたるすゑ見えぬまでたかく生ひしげりて、中をわけ行に云々野山あしをぎのなかをわくるよりほかの事なくて、武藏と相摸との中にゐて、あすた川といふ云々。又曰、軒ちかき荻のいみじう風にふかれてくだけまどふるいと哀にて。曾我物語卷第十一曰、のきばのおぎをふく風に、古鄕思ひしられつゝ。すみよし物語曰、秋のよのつれ〴〵ながきねざめに、かなしく物あはれなり。さよ中にねやちかきおぎのはに、そよめきわたる風の音も、夜ごとにかよふ心ちして云々

形狀

本朝無題詩曰、荻花期雪埋斜岸○荻ハ下濕ノ地ニ多シ、葉苗トモニ蘆ニ甚相似タリ。秋ニ至リ六七尺ニ及ビ、梢ニ穗ヲナス。芒(スヽキ)ノ穗ニ似テ大也。初出ル時ハ紅紫ヲ帶、老テ白色ノ絮トナル。其莖節起リテ高ク內實シ、至テ堅ク少シク空虛也。冬ニ至テ苗枯

○濱荻(ハマヲギ) 萬葉集

○萬葉集ニ詠ル濱荻(イマハマヲギ)ハ海濱ニ生ズル荻ヲ云○今濱荻ト呼モノハ海濱ニ生ズ、

荻ニ同ノ葉長大、甘蔗ノ如シ。莖鐔ニ毛アリ、高サハ荻ヨリ低ク、莖至テ堅ク、荻ノ如ク節短シ、花ハ芒ノ如ク荻花ニ同〇藻塩草曰、万葉歌に、いせのはま荻とよめるは、荻にはあらず、芦を彼國には濱荻といひならはせり。袖中抄曰、又濱荻とは、あしをば彼國の風俗にて申とぞ承る。只はまにおひたる荻をいふかとも思ひ侍べきに、後拾遺の作者小侍従命婦は輔親卿が猶子なる故、濱荻侍従と申せり〇大和本草曰、伊勢ノ濱荻ハ、三津村ノ南ノ後ロニアリ。片葉ノ蘆ニシテ、常ノ蘆ニハカハレリ。按、潮風常ニ荒ク吹海濱ニ産スル蘆、皆片葉トナル。勢陽雜記曰、濱荻、三津村南の入江に有、五十鈴川の末、昔鷺か森を中嶋になしたる入江に濱荻有しと也。近來鷺が森兩方より堤を築、其中を田地とし、三津村より耕作しけり。其田の中に纔半段計荻を殘し侍ること、名高き致景もかく淺ましく成侍る。此後は跡形もなく、風の音さへなくならむと、心あらん人いかでか悲しまざらんや。爰成芦は異様にて、左卷にはを見せて有と也

集註　萬葉集卷第四曰、神風之、伊勢乃濱荻、折伏、客宿也將爲、荒濱邊爾。山家集曰、塩風にいせの濱荻ふせば先ほずゑに波のあらたむる哉。太神宮參詣記曰、霜にかれたつ濱荻の風にそよめくをと。題季家集曰、さきのもくのかみ俊頼の君、いせにくだりて後、久しくをともせざりしに、かくなんいひをこせたりし云々たゞはまおぎのおりふしとには云々

はまふて　叢集 類抄

漢名　蒒草 本草

今名　ハマムギ

博物志曰、東海洲上有草、名曰篩、有實食之如大麥、七月熟、民斂穫、至冬乃訖、呼為自然谷、亦曰禹餘糧。

集註

薫集類抄曰、香附子。たゞのからふしは、はまふでといふ物のやうにてちいさし

形狀 ○ハマムギハ海濱沙地ニ多ク生ズ、葉香附子ニ似テ麁大、根亦香附子ノ如ク大也。夏莖ヲ抽、尺許穗ナス、麥穗ニ似テ小也。內ニ黑皮白肉ノ米アリ

波末比之（ハマビシ） 本草類編

漢名 蒺藜 本草

本草綱目、宗奭曰、蒺藜有二等、杜蒺藜ハ即今之道旁布地而生者、開小黃花結芒刺。

今名 ハマビシ

一名 波萬比之 倭名類聚鈔曰、蒺藜。和名波萬比之。本草和名曰、蒺藜。和名波末比之

波麻比志 新撰字鏡曰、蒺藜子。波麻比志

シロヒシ 本草類編。本草蒙筌曰、蒺藜子種分黑白、黑ハ成顆粒、較ハ馬藻子略殊ナリ、此種多出沙苑。白ハ多刺芒、比ハ鐵蒺藜無異ナル、此ノ種亦生近地。本草類編ノシロヒシ即此也。綱目時珍ノ說ハ、沙苑蒺藜ヲ白蒺藜トス。證類本草、圖經曰、又一種白蒺藜今生同州沙苑、牧馬草地最多、而近道亦有之、綠葉細蔓綿布沙上、七月開花黃紫色、如豌豆花而小、九月結實作莢子、便可採其實、味甘而微腥褐綠色、與蠶種子相類、者差大。又與馬藻子酷相類、但馬藻子微大不堪入藥。正字通曰、結莢長寸許、子大如脂麻狀似羊腎帶綠色者名白蒺藜。沙苑蒺藜未詳。大和本草ニ、クサネブニ充ル說非也○倭名鈔鞍馬具曰、蒺藜銜。宇波頁具都和。字彙曰、蒺藜曰茨、蔓生細葉子有三角刺人。搜古奇編曰、據於蒺藜

坎ヲ爲レ險兌ヲ爲レ澤又之生ニ物而險者蒺藜也、故ニ退而乘ニ九二之剛ニ、據于蒺藜之象ニ。通雅曰、子雲賦ニ虎落三㚇即三叉、蒺藜、蓋シ草木細枝初メテ生スルヲ曰レ㚇、山尖ヲ曰㚇、故知是三叉也。證類本草曰、今軍家乃鑄鐵作レ之以布敵路亦呼蒺藜ト易云、據于蒺藜言フ其凶ニ

【集註】本草類編曰、蒺梨子。和波末比之。又云シロヒシ。七八月採實暴干。延喜式卷第三十七曰、典藥寮。諸國進年料雜藥。出雲國、云云蒺藜子各二升。播磨國、蒺藜子云云各三升。備後國 蒺藜子三升。阿波國 蒺藜子一升

【藥製】頓医抄曰、蒺藜。角ヲウスニテツキノゾケ

【形狀】○海濱砂地ニ生ズ、宿子春苗ヲ生、地ニ蔓延スルコト二三尺、葉互生ジ、合歡ノ葉ニ似テ小クシテ柔カ也。夏葉間五瓣黄花ヲ開、後實ヲ結テ、刺アリテ觸ガタシ、秋後苗枯

ちしはり草 藻塩草

【漢名】翠雲草 花鏡

【今名】アヲヒガラクサ

花鏡曰、翠雲草。無ニ直梗ニ宜ニ倒ニ懸ク、及ニ平鋪在ニ地ニ因テ其葉青綠蒼翠重重碎蹙儼トシテ若シ翠鈿雲翹ノ故ニ名ク。但有レ色而無ニ花香ニ非レ芸ニ也。其根遇ヘレ土ニ即生ス、見レハ日ヲ則萎ム、性最喜ブ陰濕ヲ、栽ア於背陰石罅或ハ虎茨芭蕉秋海棠ノ下ニ、極テ有ニ雅趣ニ種ル法用テ舊草鞋ヲ浸ニ糞坑ニ一日夜、取リ起シ晒シ乾シ、再ヒ浸シ再ヒ晒ヘ、凡數次、將テレ石ヲ壓平シ安ニ放翠雲草ノ之側ニ待ニ其蔓自上テ生スルヲレ根移ニ栽別地ニ、無シレ有ニ不ル レ活ヒ者ニ

【一名】

庭草 藻塩草曰、庭草。これは、つちあふひなり。ちしばり草の事也

土葵 言塵集曰、庭草とは、土葵也。地しばり草の事也。庭草に春雨ふりてとよみたるは土葵也

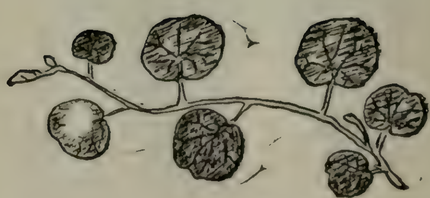
地し

はり草 言塵集　つちあふひ 藻塩草

積雪草ノ小ナルガ如シ

翠雲草　アヲヒガラクサ

形状 ○翠雲草ハ濕地ニ生ズ、葉大サ指頭ノ如シ、面綠色背ウスシ、其莖至テ細ク、石胡荽ノ如ク、地ニ蔓ス。



古名錄草部卷第十五　終

古名錄草部卷第十六目錄

山草類

夜麻多知波奈　平地木
伊太止里　虎杖
万可古　薇
須須岐　芒〇尾花〇ほやのすゝき〇ますほのすゝき〇すくろのすゝき〇はたすゝき〇しの薄
いこすゝき
加夜　菅茅
都波　槖吾
惠美久佐　萎蕤
伊波与牟支　菴䕡
佐岐久佐奈　沙參

宇家良　朮
和良比　蕨〇保志和良比
師太
高宗薄
かるかや
夜末須介　麥門多
阿也女多牟　地楡
女止　蓍
加良須阿布岐　射干

美奈之古久佐　白微
乃加加牟　白前

比女加ゝ美　徐長卿
獨活　○羌活

宇多奈　前胡
於之久佐　玄參

久呂久佐　漏蘆
知ゝ乃波久佐　紫參

遠志

通計三十六種

古名錄草部卷第十六

紀藩　源　伴存撰

山草類

夜麻多知波奈 萬葉集　〔漢名〕平地木 秘傳花鏡　〔今名〕ヤブカウジ

花鏡曰、平地木。高不盈尺、葉似桂深綠色、夏初開粉紅細花、結實似南天竹子、至冬大紅、子下綴、可觀、其托根多在甌蘭之傍虎茨之下及巖壑幽深處

〔一名〕やまたち花 源氏物語　山橘子 延喜式　やふ柑子 言塵集曰、山橘とは、世俗にやぶ柑子と云物也。かみそきの時、山菅にそへたる草之。又曰、山橘のみのならんとよめるは、人のかみそぎに山菅にそへたる草をも山橘と云之。明月記曰、建暦三年四月十四日、云云兼康布衣襖、髮ソギの具山菅、山橘等付之　山橘 萬葉集卷第四曰、足引之、山橘乃、色丹出而、語言繼而、相事毛將有。同卷第十一曰、足引乃、山橘之、色出而、吾戀南雄、八目難爲名。同卷第二十曰、氣能己里能、由伎爾安倍弖流、阿之比奇之、夜麻多知波奈乎、都刀爾通彌許奈　〔集註〕

> 康刊本康ニ作ル
> 而元曆校本

与ニ作ル

夜麻多知波奈ヲ山橘ノ例中ニ混入セルハ誤カ

延喜式卷第四十曰、造酒司。踐祚大嘗祭供神料。山橘子云云各二擔。已上九種畿内所進。 源氏物語うきふね曰、またふりにやまたち花つくりて、つらぬきそへたるえだに。まだふりぬ物にはあれどきみがためふかき心にまつとしらなむ

形狀 萬葉集卷第十九曰、此雪之、消遺時爾、去來歸奈、山橘之、實ノ光毛將見。 藻塩草曰、山橘。是非木、石の間などに生る草の様なる物也。まことの橘にあらずと云ゝ。又曰、山橘の色にいでぬべし。山たち花紅にてうつくしき色なれば云り○平地木ハ山中ニ多シ、高サ四五寸、莖頭ニ葉聚リ附、形狀橘葉ニ似テ鋸齒アリ、夏五瓣白花ヲ開實ヲ結ブ、大サ南天燭子ノ如ク冬至テ紅色也

草花譜ニ所レノ載ル

平地木圖



宇家良 萬葉集　【漢名】朮 本草　【今名】ヲケラ

本草、宗奭曰、古方及本經、止言レ朮不レ分ニ蒼白二種一。時珍曰、古方二朮通用、後人始有ニ蒼白之分一。（塵添壒囊鈔曰、一點ニ依テ替ル字多シ、木ニ點ヲウテハ朮、ヲケラ也。假名文字遣曰、をけら。朮。白朮、蒼朮

【一名】乎介良　倭名類聚鈔曰、朮。和名乎介良。新撰字鏡曰、白朮。乎介良。本草和名ニ曰、乎介良。證類本草曰、今白朮生ニ杭越舒宣州高山崗上ニ、葉葉相對ノ上ニ有リ毛、方莖、莖端生レ花ヲ、淡紫碧紅數色、根作レ椏ヲ生ス。按、葉々相對ト云ハ左右排生スルヲ云、方莖者本邦ニ不產

乎計良　天文写本和名抄、八雲御抄曰、うけらが花、さきてひらけぬ物也。是おけらといふ藥也

飫ヲ憩木ケノ　古語拾遺曰、以ニ竹葉、飫憩ノ木葉ニ爲ニ手草ニ云、云阿那佐夜憩飫憩。註木名也。振ニ其葉ニ之調シラヘ也。南嶺遺稿曰、神社方にある湯立といふ事、上代は笹の葉と蒼朮ヲケとをもつて湯をあみる也。ヲケといふは蒼朮の事也

さき草　藻塩草曰、白朮、さき草、ひの木を云と云儀あれど、をけら也。古今に、三葉四葉とよめるも、朮三葉四葉ある也。とのづくりには、檜と云說はよきやうにきこゆれども、たゞをけらなり。古哥のならひ、三葉四葉といはんれうに、さき草を引出也

【集註】本草類編曰、朮。和乎計良。二三八九月採根暴乾、本朝信濃州之朮以爲本。日本書紀卷第二十九曰、天武天皇白鳳十四年冬十月庚辰、遣ニ百濟僧法藏、優婆塞益田金鐘於美濃ニ、令レ煎ニ白朮一。因以賜ニ絁綿布一。十一月丙寅、法藏法師、金鐘、獻ニ白朮煎一。延喜式卷第三十七曰、典藥寮。元日御藥。白朮二兩三分。中宮臘月御藥。白朮

卅、京本貞享本卅ニ作ル　廿六斤ノ下九兩ヲ脫ス　一斤ノ下四兩脫ス　二斤元本二升ナルヲ刊本訂セリ今式ヲ撿スル

十一兩。東宮所ㇾ須、白朮十兩三分。雜給料。白朮四斤九兩。諸司年料雜藥。齋宮寮。白朮七斤十兩二分。內匠寮。云云白朮各一斤二兩。木工寮。白朮十二斤。左右近衛府。白朮三斤。左右衛門府。白朮十二兩二分。左右兵衛府。白朮十兩二分。遣諸蕃使。唐使。白朮云云各八斤。渤使。白朮云云各二斤。新羅使。白朮云云各五斤。諸國進年料雜藥。山城國、白朮廿五斤。大和國、白朮卅斤。攝津國、白朮廿三斤。尾張國、白朮三十斤。參河國、白朮卅斤。駿河國、白朮十兩。安房國、白朮六斤十兩。下總國、白朮三斤五兩。常陸國、白朮廿斤四兩。近江國、白朮卅六斤。美濃國、白朮卅八斤。飛彈國、白朮卅斤。信濃國、白朮廿六斤。越前國、白朮五斤三兩。越中國、白朮云云各十一斤。丹波國、白朮十二斤三兩二分。丹後國、白朮四斤十一兩。但馬國、白朮云云各二斤十兩。因幡國、云云白朮云云各十斤。伯耆國、白朮十斤。出雲國、白朮五斤。石見國、云云白朮各二斤。播磨國、白朮九十二斤八兩。美作國、白朮十斤。備前國、白朮四十斤。備中國、白朮卅六斤。備後國、白朮卅四斤六兩。安藝國、云云白朮云云各六斤。周防國、白朮一斤。長門國、白朮二斤。紀伊國、白朮一斤。讚岐國、白朮云云各十二斤。伊豫國、云云白朮各六斤。出雲國風土記曰、意宇郡、凡諸山野所在草木、白朮。嶋根郡久宇嶋、有椿榧白朮小竹。須二比埼、有白朮。秋鹿郡、凡諸山野所在草木白朮。楯縫郡、凡諸山野所在草木、白朮。飯石郡、凡諸山野所在草木、白朮。駿河國風土記曰、富士郡早田山、貢云云白朮云云恰越夷域貢。安房國風土記曰、平群郡、貢白朮、石井貢白朮。四季物語曰、ついなの夜は、をけらのもちゐ、つぐみの鳥など燒たてまつり、御かれいゐの御まはりにたてまつれば、是ものゝけ、ゑやみやらひぬべき本文侍るとなん。世諺問答曰、問テ曰、節分ニ、オケラヲタクハ、何ノユヘゾヤ。答、白朮ハ風

ニ流布本ハ升ナルヲ出雲本ニ斤ニ意改セリ

氣ヲサル藥ニテ侍ルウヘ、餘薰アシキユヘニ、疫病ノ神ノ夜行スル夜ナレバ、コレヲタキテ、ヲソレシメンガタメニテ侍ルニヤ。雍州府志曰、五條天神。在二五條松原通西洞院西一、所レ祭二大己貴命一也。命與二少彥名命一經二營天下一、復爲二蒼生及畜產一、定二其療病之方一、又爲レ攘二鳥獸昆蟲之災異一、定二其禁厭之法一、百姓咸蒙二恩賴一、每年節分諸人詣二斯社一、買二來白朮(ケラ)並白餠一、用レ之則除二疾病一云、蓋神代之遺風乎、相傳賣二朮餠一人、自レ古所司之家隷勤レ之、近世不レ然、社家自賣レ之。粤西偶記曰、天氣炎蒸、地氣卑濕、結爲瘴癘、爲害不小、惟謹多焚蒼朮雄黃、庶幾可免

形狀

仙覺萬葉集註釋卷第十四曰、うけらがはなとは、心よくもひらけずしてはつるものなれば、いろにづなゆめとよそふるなり。堀河院百首長歌曰、俊頼 うけらが花の、咲ながら、ひらけぬ事の、いふせさに、四方の山べに、あくがれて。河越記曰、うけらが花は咲ながら、ひらけぬも又時なくみえ。散木集曰、うけらがはなの咲ながら、ひらけぬことのいふせさに 言塵集曰、うけらが花は、おけらの花也。咲ながらひらけぬとよめり。つぼみたる如くに、花のつゝまれたる物也。袖中抄曰、うけらが花とはおけら也。朮と書り。童蒙抄云、とこなつに花あり。つぼみたる樣にてさく也。私云、或人のもとにうへて侍しは、花はひらけながら、そのすがたつぼめるに似たり。八雲御抄曰、うけらがはなは、たゞひらけぬはなゝれば、色にいでぬためしにいはんゆへにいへる也。うけらがはな、をけらと云物也。萬葉集第十四曰、古非思家波、素氏毛布頁武乎、牟射志野乃、宇家頁我波奈乃、伊呂爾豆奈由米

藥製

頓医抄曰、蒼朮。シロミヅニヒタシテ、一夜シテ皮ヲケヅリステ、、キリテ葱白子ニマゼテ、イリテカウイロニシテ、ヒトモジヲバステヨ。又曰、蒼朮 米ノ白水ニヒタシテ、一宿上ノクロ皮ヲケヅリステ、キザミテアブレ、カワカセ。福

田方曰、ワカ子ノ年ヘザルヲバ白朮ト云、フル子ノ節ガチニ年久クヲイタルヲバ蒼朮ト云、此ハ猶性ガツヨキ者之。但本經ニハ蒼白ノ名ナシ、只朮ノ一字ノミ有、後人蒼白ヲ分タリト云ヘリ。又曰、白朮米泔ニ浸シ、毎日水ヲ易ヘ、七日メ切テ、アブルコトモアリ、又浸サネドモクルシカラズ、黒皮アラバケヅリ去ベシ○脩治纂要曰、白朮剉テ又淸水ニ入レバ油出ル也、キラノ盡ルホド洗テ剉焙ル。又甚シク香ノフカキアリ、ソレヲバ米泔水ニテ一沸メアブル。又近世大明ヨリ來ル白朮ハ、日本ニ使ツケタト別也。白ハワカキ也、蒼ハフルキ也 クロクアヲキ也、蒼ハツヨシ、白ハヨハシ、本草辨疑曰、藥家、醫家共ニ古ヨリ蒼朮・白朮取違ヘテ用ユ誤ナリ。和白朮ハ嫩根 蒼朮ハ舊根ナリ、柔ニメ色白ク、芋ヲ截樣ノ者ハ白朮ナリ、骨アリテ強ク、色蒼キハ蒼朮也。然ヲ藥家誤リテ、舊根ヲ白朮トシ、新根ヲ蒼朮トス。又蒼朮ノ中ニ白モアリ、白ノ中ニ蒼朮モアリ、不レ可レ不レ擇、唐ヨリ來ル者、白朮ハ芋ノ形ニテ柔カ也。蒼朮ハ干姜ノ形ニ似テ中ニ骨アリ、和ノ產ト形ハ異ナレドモ、氣味ハ一同也。土地ノ肥瘠ニ依ナルベシ。或人曰、朝鮮國ヨリ江府ヘ獻上シタル蒼白ハ、和ノ產ト異ナルヿナシト、頃又川白朮ト云者ヲ渡ス、形大ニメ切片テ乾タル者ナリ、和ノ朮ハ苗ノ高サ一二尺、葉三葉ヲ一朶トス、葉ノ末鋸齒ニメ毛アリ、莖強ク四五月ニ花サク、色靑クメ葉ト同ジ、中間ニ子アリ、小豆ノ大ナリ、蒼朮、白朮共ニ一草ニメ、只根ノ新舊ヲ分ツ耳、唐ハ葉抱レ莖ニ生ズルト、又脚下ト梢ノ間トノ葉異ナルヿ和草ト別ナリ、根ノ形ト香氣トハ一樣ナリ、土地ニ依ル歟 又和ヲ皆蒼朮トシ、白朮ハ唐ヲ用ル人モアリ。按ニ根ノ新舊ニ據テ、蒼白ノ二朮ヲ別ツハ非也。蒼朮、白朮舊ヨリ自ラ別種也。蒼白朮ノ花ハ秋也。本草綱曰、時珍曰、蒼朮ハ山薊也。處處山中ニ有レ之 苗高二三尺 其葉抱レ莖而生ニ梢間ノ葉似タリ棠

梨葉、其脚下葉有三五叉、皆有鋸齒小刺、根如老薑之狀、蒼黑色肉白有油膏、白朮、抱薊也、吳越有之、人多取根栽蒔一年即稠、嫩苗可茹、葉稍大而有毛、根如指大、狀如鼓槌、亦有大如拳者、彼人剖開暴乾、謂之削朮、亦曰片朮。本草從新曰、野白朮產於潛者最佳也、今甚難得、卽浙江諸山出者俱可用、俗稱爲天生朮、有鶴頸甚長、內有硃砂點、上有鬚者尤佳也、其次出宣歙者、多狗頭朮、種白朮、種朮、俗稱爲糞朮、乃糞力澆灌而大者、並無鶴頸與鬚、反肥大也、於野朮有台朮、雲朮二種、台朮較甚。江西白朮其形甚小、與浙江野朮相似、雖有鶴頸而甚短、其體堅實、其味苦劣、蒼朮出茅山小有硃砂點者良、古本草不分蒼白、陶隱居分兩種、始各施用〇按天台山志曰、朮有蒼白兩種、台山皆有之、總以野朮爲佳、又有紅朮、觀此則從新限茅山朮爲蒼朮之說非確論也

伊太止里（イタドリ） 倭名類聚鈔

漢名 虎杖 本草

今名 イタドリ

證類本草曰、圖經曰、虎杖。今處處有之、三月生苗、莖如竹筍狀、上有赤斑點

一名 多遲 日本書紀　多治比 三代實錄　再枝 新撰姓氏錄

多治 同上　多遲比 古事記曰、到于多遲比野而寤云云天皇歌曰、多遲比怒迩、泥牟登斯理勢婆云云　伊太度利 天文写本和名抄〇倭名鈔曰、虎杖。和名伊

吉記廬ルカ
檜入ペ
古隈タキ

太止里。墮添墻（イトリ）

襲抄曰、虎杖

以多止利

本草和名曰、虎杖根。和名以多止利。藻塩草曰、虎杖根。いたとりのね

丹墀

文德實錄○柳河東集曰、得ニタリ死ヲ于墀下ニ、注墀ハ塗地也、丹漆ノ地、故ニ稱ス丹墀ト

丹比

延喜式

太知比

倭名鈔國郡部曰、備中國英（アケノ）賀郡丹部、多知倍（タチベ）。河內國丹比　太知（タヂ）比（ヒ）。日本紀私記曰、河內多比郡○倭名鈔國郡部曰、安藝國高宮郡丹比、多無比

伊太止利

本草類編。字鏡曰、茶。伊太止利○正字通曰、茶。尼葉切。音聶、疲貌。字典曰、茶一日忘也

伊太登利

新撰字鏡曰、虎杖根。伊太登利

いたとり

仙傳抄

【集註】日本書紀曰反正天皇　天皇初生ニ于淡路宮ニ、生而齒如ニ一骨ノ、容姿美麗。於レ是有レ井、曰ニ瑞井ト、則汲而洗ニ太子ニ、時多遲華落在ニ于井中ニ、因爲ニ太子名ト也。多遲華者今虎杖華也。故稱謂ニ多遲比瑞齒別天皇ト。三代實錄卷第十二曰、淸和天皇貞觀八年二月廿一日丁卯、左中弁正五位下丹墀眞人貞岑等賜ニ姓多治眞人ヲ、先レ是、貞岑等上レ表曰云云私撿吉野宮御宇宣和天皇々子、加美惠波皇子生ニ十市王ヲ、十市王生ニ多治比古ヲ、王此王生産之夕、忽多治比花、飛ニ浮湯沐釜ニ、以ニ斯冥感ヲ、名ニ多治比古王ト。新撰姓氏錄曰、丹比宿禰云云大鷦鷯天皇御世、御子瑞齒別尊誕ニ生淡路宮ニ之時、淡路瑞井ノ水奉レ灌（ソヽキ）ニ御湯ニ、于時虎杖花飛ニ入御湯瓮（ミユノホトギ）ニ、中ニ色鳴（シコメノ）宿禰稱ニ天神壽詞（ホヤコト）ヲ、奉レ号曰ニ多治比瑞齒別命ト、乃定ニ多治部ヲ諸國（クニグニ）ニ、爲ニ皇子湯沐（ユアミ）邑ト、即以ニ色鳴ヲ爲レ宰（ツカサ）、令レ領ニ丹比部戶ヲ、因号ニ丹比連ト、遂爲ニ氏姓ト云云。延喜式卷第三十九曰、內膳司。漬年料雜菜。虎杖三斗、料塩一升二合。右漬ニ春菜ニ料。和泉國風土記曰、日根郡貢虎杖。武家調味故實曰、くわい人の間いませ給べき物。いたどり、ひる、はす

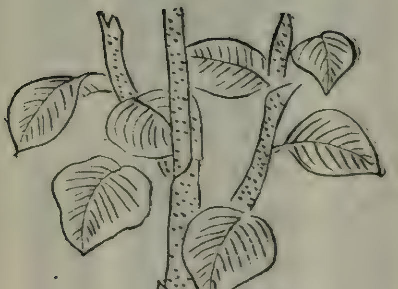
【形狀】枕草

紙曰、いたどりはまして、とらのつえとかきたるとか、つえなくともありぬべきかほつきを。本草類編曰、虎杖。和伊太止利。茎狀斑赤色、二八月採根日干。藻塩草曰、二葉の紅葉春也。但是はいたどりと云草と云と

宋板證類本草圖

越州虎杖

金澤文庫印本
證類本草圖與
此相と同シ



和良比 倭名類聚鈔　【漢名】 **蕨** 本草

物理小識曰、沈仕、林下淸錄云、猿啼之地多蕨 毎一聲遶生萬莖　【一名】 **佐和良妣** 萬葉集卷第八曰、石激、垂見上乃、左和良妣乃、毛要出ル春爾、成爾來鴨。新撰字鏡曰、蕨。古月反 和良比。本草類編曰 蕨。和和良比。本草和名曰、蕨菜。和名和良比。扶桑略記曰、殿角蕨形懸ニ金幡ー

早蕨 駿河國風土記曰、富士郡阿波山、貢早蕨。假名文字遣曰、さわらび。早蕨。山家集曰、さはらび。なをざりに燒捨しのゝさはらびは折人なくてほどろとやなる。廣東新語曰、蕨。一食其芽者名龍頭菜。漁隱叢話曰、山中之人飢貧ニシテ無食、雖老猶自採蕨充飢

蘩火 八雲御抄曰、蕨を蘩火とかくしたるなどは、聲こそかはりたれども同物名也。これなどはかくしたるといふべきに非ず

ワラ 海人藻介曰、蕨ハ、ワラ、如此異名ヲ被付。伊勢守貞陸記曰、わらび、わら

山ね草 藻塩草曰、蕨。山ね草、やまねぐさおりて山ぢの歸るさや家づとおほきかざしなるらん。異名也。藏玉にあり

岩代 言塵集曰、わらび、かけ野とわらび、岩代とはわらびの一名也〇源平盛衰記曰、御寢所と覺えて、蕨のほどろを折敷て、鹿の臥セ猪床を諍へり。西行物語曰、夜ふす所とおぼえて、東によりてわらびのほどろを折しき。堀河院百首曰、春くれど折人もなきさ蕨はいつかほどろにならむとすらむ。野べみればまだやかなくに早蕨のほどろが下にもえ出る哉。萬葉集卷第四曰、夜之穗杼呂、吾ガ出來レ者、吾妹子之、念有四九四、面影ニ三湯。夜之穗杼呂、出都追來良久、遍多數、成者吾胷、截燒ガ如 〇

朗詠集曰、紫塵嫩蕨人拳手。堀河院百首曰、紫の塵うちはらひ春の野にあさる蕨は物うげにして。精進魚類物語曰、青陽の春くれば、ゆう〳〵たる遠山に、霞の衣たちかさね、紫塵嫩蕨こゝやかしこにおひ出る。品字箋曰、蕨山菜初生紫色似鼈脚長如小兒拳連莖可食掘根擣汁取粉凶年以禦飢〇太平御覽曰、古詩曰、山桃發紅萼、野蕨漸紫苞

集註

出雲國風土記曰、意宇郡羽鳩有蕨。秋鹿郡所在草木、薇蕨薺頭蒿藤。神門郡所在草木、薇蕨藤李。大和國風土記曰、平群郡膽駒鄉、貢薇蕨。駿河國風土記曰、益頭郡、貢葛蕨　羽食渓貢葛蕨。和泉國風土記曰、日根郡、所在草木、薇蕨。賀美鄉、貢蕨。伊賀國風土記曰、山田郡雪下山、多葛蕨亦民家所用也。名張郡箕曲山、出蕨。狹田鄉、出蕨。武藏國風土記曰、荏原郡御田鄉、貢松竹蕨等。延喜式卷第三十九曰、內膳司。漬年料雜菜。蕨二石、料塩一斗。江家次第卷第十四曰、或云、在五中將爲レ嫁ニ件ノ后ニ出家ノ相構フ、其ノ後爲ニ生ノ髮ノ到ニ陸奧國ニ、向ニ八十嶋ニ求ニ小野小町ガ尸ヲ、夜宿ニ件ノ嶋ニ、終夜有レ聲曰、秋風之吹仁付天毛、阿那目阿那目。後朝求レ之、髑髏目中有ニ野ノ蕨ニ、在五中將涕泣曰、小野止波不成、薄生計里。即斂葬。妄妄錄曰、草作ニス鬼聲ヲ、元和邢在ニリ沛ニ增袁竹亭象山官署ニ、夏ノ夜於ニテ後圃野ニ放忽トノ聞ク鬼聲ヲ、細ニ聽ハレ之ヲ近ク在ニツ左右ニ、擧ニレ燈ヲ審ニ視ハレ、但タ見ニ叢草中ニ有ニヲ一枝ニ、特ニ長サ尺許リ、聲出ツレ草ニ、即チ俯偃良久シ、豎起シテ復作レ聲ヲ偃下ス、明日掘ルニ其ノ地ヲ見ニ白骨一具朽ニ腐於土ニ、大約鬼附ニ於草ニ、如ク倩女墓樹連理昭君ノ塚草獨リ青キカ也。管見記曰、嘉吉三年三月十二日、出ニテ衣笠岡ニ探レ蕨ヲ云云。枕草紙曰、此下わらびは、てづからつみつる、などいへば、いかで、女官などのやうに、つきなみてはあらんなどいへば、とりおろして、れいのはひぶしにならはせ給へるおまへたちなればとて、とりおろしまかなひさはぐほどに云云二日ばかりありて、その日の事などいひ出るに、宰相のきみ、いかにぞ、手づからおりたるといひし下わらびは、との給ふをきかせ給ふて、おもひ出ることのさまよ、とわらはせ給

こ山ノ誤カ

炎炎ハ炎上カ

て云云。源氏物語しゐがもと曰、さはのせり、わらびなどたてまつりたり云云。同さわらび曰、わらび、つくゞし、おかしきこにいれて、これはわらはべのくやうし侍るはつをなりとて奉れり。古今著聞集卷第十二曰、花山院の粟田口殿の山のわらびを、あまりに人のぬすみければ、こもり緣淨法師よみ侍ける。山守のひましなければかきわらびぬす人にこそいまはまかすれ。同卷第十八曰、別當入道北しら川にすみ侍ける比、山のわらびをおりて、相國の許へつかはせり云云。俊頼髓腦抄曰、草のもえいづるにつけても、さはらびをうたがひ。源平盛衰記卷第十一曰、野邊ノ蕨ヲ折テ、サビシサヲ慰シモ叶ハヌ樣ニ成果テ。同卷第四十八曰、一人ノ尼ハ妻木ニ蕨折副テ、臂ニ抱テ前ニアリ云云爪木ニ蕨折具メ、臂ニ抱タル尼ハ云云。平家物語曰、つま木にわらびおりそへてもちたるは、鳥がひの中納言これさねがむすめ云云。弘安舞御覽記曰、野がみのかた蕨取などの御あそび侍しを。兼好家集曰、堀河のおほひまうち君を、いはくらの山庄におさめたてまつりしに、又の春そのあたりのわらびをとりて、雨ふる日申つかはし侍し。さわらびのもゆる山べをきてみればきえし煙の跡ぞ戀しき。返し。延政門院一条。みるまゝになみだの雨ぞふりまさるきえし煙のあとのさわらび。宣胤卿記曰、長享三年四月二日、賀茂社務送蕨。祇園會御成記曰、獻立御汁たい、わらび。扶桑略記廿四曰、延長六年五月廿九日未時、雷迅、會昌門樓巽角簷中火、其中煙炎炎ニ樓屋ニ飛彈工等云、火勢未レ盛以レ水汲滅、修理職匠預阿多千春採ニ入省中枯蕨ニ塞ニ震破處ニ炎因レ之暫止、相次以レ水汲滅。曾根好忠家集曰、蕨生るやたの廣野にうちむれて折くらしつゝかへる里人。伊勢紀行曰、野を分侍るに、すみれわらびなど生まじりて、いと興あり。錄外書曰、身延嶺云云峯ニ上テ、ワカメヤオヒタルト見候ヘバ、サル

ニテハナクシテ、ワラビノミ立ナラビタリ

【形状】撰集抄卷第四曰、二月の比、嵯峨野のわたりを詠れば、多の草どもの、春雨にうるをされて、おしなべてみどりにみゆる中に、人手をにぎると詠ぜし紫塵の蕨もえ出て、ゆう〳〵と見ゆる程に、漸く日を經て立のびくろみ渡りて、事の外にかはりて見ゆ。同卷第七曰、わらびむらさき色なればかゞめり、かゞめればものゝきににたり、是又手をにぎるかと見えたり

○保志和良比（ホシワラビ） 新撰字鏡　【一名】くろごり　伊勢守貞陸記曰、ほしわらび、くろとり　ほしわらひ　見上

【集註】尺素往來曰、當日早晨之粥、汁は干蕨大薇（マ）

万可古（マカゴ） 新撰字鏡　【漢名】薇 爾雅　【今名】ゼンマイ

新撰字鏡曰、薇。无斐反、菜垂水也。白薇万可古。䔢。亘之反、平菜似蕨又豆莖也。豆加良（マメ） ○字彙曰、薇菜、名似蕨而差大有芒、而味苦。爾雅曰、薇ハ垂水、註ニ生ス於水邊ニ、疏草生ス於水濱ニ、而枝葉垂ル於水ニ者曰レ薇ト

【集註】駿河國風土記曰、止駄郡岩田、貢薇蕨、大野貢芹菜梅竹松櫻薇蕨葛根

【形状】○大和本草曰、ゼンマヒニ花アリ、又其サキマガレリ、多ク繁生ス、ワラビニ似テ味苦ク、初生ノ時可レ食

又曰トアルハ誤ナリコレハ四季物語ニ見ユ。（歌林四季物語ニアラズ）とる本刊

師太（シダ）出雲國風土記

［一名］ した 四季物語 齒朶（シタ）下學集曰、齒朶正月用レ之〇塵添壒囊抄卷第九曰、齒朶（シダノ）事。正月ニ用ルシダ、ユヅリ葉ナンド云文字如何。是モ慥ナル本說ハ不レ見侍ラ共、齒朶（シタ）ト書、ヨハイノエダト書ル祝心歟。源平盛衰記卷第十三曰、源三位入道ハ、薄黑ノ長絹直垂（チヤウケンヒタヽレ）ニ、品革威（シノカハヲドシ）ノ鎧ヲ着、紫革威（シナカハヲドシ）トハ藍皮ニ、文（モン）ニシダヲゾ付タリケル。慶長元秘傳抄曰、兼延中心（ナカゴ）帶ト、表齒朶（シダ）鑢（ヤスリ）、裏ハ逆齒朶（サカシダ）也。又曰、包永大銘ハ齒朶（シダ）鑢（ヤスリ）アラシ 蒐（しだ）慶長十六秘談抄曰、大和物云云或は蒐（しこ）鑢逆した鑢。又曰、心形像鑢之事云々齒朶逆蒐（しだ）〇正字通曰、蒐。疏鉤切、茅蒐茜草別名即アカ子也

［漢名］ 未詳

［今名］ ウラジロ

［集註］ 出雲國風土記曰、意宇郡砥神嶋、有椎松都波師太等草木也。歌林四季物語曰、ゆづり葉しだなどかざりくはへ。又曰、また明日のためとて、松竹にしりくめのなはとりそへ、ゆづりは、しだなど家をふき侍る。又曰それが中にも、ゆづり葉、しだ、ほながぜりなどいふ艸は、御いきふれさせ給ふ御はがためのもちゐにもかずまへられぬ。中にもぜりは、御かいもちゐの中までもつかうまつりぬ。しだ、ゆづりばといへとも、さゝしめかどのうをこゝろふとの御まはりのしたにしかれて、うへはさらにて、しもうつかた、あやしき民の戸にも此ことぶき草をうふること、神〲しき春なるべし。人の國にはかゝるためしはなきにや。世諺問答曰、マタ、シダ、ユヅリ葉ハ深山ニアリテ、雪霜ニモシホレヌ物ナレバ、シメナハニカギリテ同クヒキ侍ルニヤ

［形狀］ 歌林四季物語曰、ゆづりば、しだも、みやまにありて、世の雪霜にもいたまず、

しかも葉青めきたるものにて、春の色をかれば、これになずらへてをの〳〵が身をいはひ侍る事なるべし

須須岐 天文寫本 和名鈔

【漢名】芒 本草　【今名】スヽキ

本草綱目、時珍曰、芒有二種、皆叢生、葉皆如茅而大、長四五尺、甚快利、傷人如鋒刃、七月抽長莖、開白花、成穗如蘆葦花者芒也。五月抽短莖、開花如芒者石芒也

【一名】

爲酢寸 萬葉集卷第七曰、妹所等、我通路、細竹爲酢寸、我通、靡細竹原。同卷第十曰、我門爾、禁田乎見者、沙穗内之、秋芽子爲酢寸、所念鴨。左小牡鹿之、入野乃爲酢寸、初尾花、何時加妹之、將手枕。吾妹兒爾、相坂山之、皮爲酢寸、穗庭開不出、戀渡鴨。皮爲酢寸、穗庭開不出、戀乎吾爲、玉蜻、直一目耳、視之人故爾

須爲寸 萬葉集卷第一曰、阿騎乃大野爾、旗須爲寸、四能乎押靡云云。同卷第八曰、日頻布君之家有、波奈須爲寸、穗出秋乃、過良久惜母

須珠寸 萬葉集卷第八曰、波太須珠寸、尾花逆葺、黑木用、造有室者、迄萬代

須酒伎 萬葉集卷第十四曰、爾比牟路能、許騰伎爾伊多禮婆、波太須酒伎、穗爾氐之伎美我、見延奴己能許呂。可能古呂等、宿受屋奈里奈牟、波太須酒伎、宇良野乃夜麻爾、都久可多與留母

須須伎 萬葉集卷第十五曰、可敝里伎弖、見牟等於毛比之、和我夜等能、安伎波疑須須伎、知里爾家武可聞。古事記曰、比登母登須須伎 ○字典曰、幹。唐韻古案切。又草木莖曰幹。漁隱叢話曰、山谷云、蘭蕙叢生、初不殊、至其發華

一幹一華ニシテ而香有レ餘者蘭、一幹五七華ニシテ而香不レ足ラ者、蕙。本草綱目、蘭草。正誤、時珍曰、黃山谷所レ謂一幹一花ヲ爲レ蘭ト、一幹數花爲レ蕙者、蓋因レ不レ識ニ蘭草、蕙草ヲ遂ニ以ニ蘭花ヲ強テ生ニスル分別ヲ也。卽一本芒スキハ此ノ一幹也

爲爲寸　萬葉集卷第十六曰、渚田爲爲寸、穗庭莫出、思而有、情者所知、我藻將依

須々吉　萬葉集卷第十七曰、須々吉於之奈倍、布流由伎爾

須酒吉　萬葉集卷第十七曰、婆太須酒吉、穗ニ出ル秋乃云云

須須木　倭名類聚鈔曰、新撰萬葉集和歌云、花薄。波奈須須木。今案、卽厚薄之薄字也。見玉篇。辨色立成云、芊。和名上同。今案芊音千草盛也。見唐韻。明月記曰、寛喜二年八月廿一日、芊穗盛出、萩未落。群芳譜曰、樹木分散スルヲ曰ニ離披ト、草繁盛スルヲ爲ニ芊蔚葱蘢ト、草弱ク隨フヲ風ニ曰ニ靃靡ト。正字通曰、芊。倉先切、音千。芊芊艸盛也。又艸木相雜貌。品字箋曰、芳草不但言其氣且美其色也靑靑而芊芊者皆芳之謂也

露曾草　藻塩草曰、薄。露曾草。異名也。わがやどの庭になれなみ露そ草かたよるばかりかぜやふくらん。藏玉

次波草　藻塩草曰、水かなし風よりはたて波はたゝしつき波草に露そこほるゝ。藏玉ゝ

みたれ草　藻塩草曰、これも異名

薄　和泉國風土記曰、日根郡、所在草木荻萩薄。明月記曰、寛喜二年八月二日、薄穗多出。倭名鈔曰、薄。新撰萬葉集和歌云、花薄。波奈須須木。今案、卽厚薄之薄字也。見玉篇。正字通、薄字註曰、又林薄、木ヲ曰レ林ト、艸ヲ曰レ薄ト、故ニ曰ニ叢薄ト、按易繫辭夫茅之爲物薄而用可重也。蓋スヽキニ薄ヲ用ルハ從レ此出。品字箋薄字註曰、林薄木叢曰、林草藪曰、薄薄者不厚之謂、故凡物之不厚者曰薄也

美草　萬葉集卷第一曰、金野乃美草苅葺、屋杼禮里之、兎道乃宮子能、借五百磯

所念。延喜式卷第七曰、踐祚大嘗祭。云云黒酒以下黒木ヲ爲レ輿飾ニ以ニ美草ヲ一

三草　詞林采葉抄曰、三草トハスヽキ也。シナノ、トハ、薄ク白クカレタル野ヲ云也

見くさ　仙覺萬葉集註釋卷第一曰、見くさとは、すゝきなり。此哥點にも或はおばなかりふきとも、或はみくさかりふきとも點レ之。此哥には、みくさと點ぜる殊宜也。みくさといふは、もろ〳〵の草の中に、たかくおゝしき草なるがゆへに、眞草の義にて、見くさと云べし。難云、たかくおゝしきによらば、荻葦等又これあり、何ぞかれを見くさと不レ云乎。荅云、たとひ其義もありぬべくとも、古賢者殊殊のはなすゝきを賞せり。故柿本朝臣人麿歌云、人みなははぎを秋といふいなわれはおばなが末を秋とはいはむ云云又諸草おほしといへども、此集のうたの義讀卷中に草花とかきて、おばなとよむ、これすゝきまことのくさなる故也。同卷第一下曰、見くさと云はすゝき也といへども、神祇をいはひかざりたてまつるに、柳をみさかきといひ、すゝきをみくさと云べし、みくさと云は、すなはち見ぬさといふ詞也云云依之信濃諏方明神のみさやまのかりに花すゝきをとりて、見ぬさたてまつると云これなり。同卷第十曰、みくさとは第一第二の卷にも釈するがごとし、すゝき也。おばなをみくさのはなとよめり

集註　狹衣曰、をぐらの山のしの薄もほのかに見えて。枕草紙曰、ねたきもの、おもしろき萩、すゝきなどをうへて見るほどに、ながびつもたる物、すきなどひきさげて、たゞほりにほりていぬるこそ、わびしうねたかりけれ。河越記曰、穗にいづる薄はたが植しむかしともしらず。俊頼髄腦抄曰、花すゝき風にしたがふ心なれば、つまぎこりにゆく山かつのいやしきをまねき。又曰、夏は時鳥の音にあらはれ、秋は花すゝきのほにいづるによそへ。高倉院升遐記曰、

しのすゝき、しげきなげきをもかくとほのめかし云〻。實方朝臣集曰、淸涼殿の御前のすゝきをむすびたるを、たがしたるならんといひて云〻。大和物語曰、まへに荻すゝきいとおほかる所になん有ける。源平盛衰記卷第十一曰、萩女郎花花薄枝指カハス離ノ内、朝ハ露ニ亂ツヽ、夕ハ風ニヤソヨグラン云〻木々ノ梢モ禿ニテ燒野ノ薄霜枯ヌ。撰集抄卷第三曰、木葉がくれに行嵐のかれ野の薄によはりてそよめき渡り。宇津保物語俊蔭曰、人も見えずたゞ薄のみいとおもしろくまねく。蜻蛉日記曰、かれたるすゝきばかりぞ見えつる。又曰、ふところより、みちのくにがみにてひきむすびたるふみの、かれたるすゝきにさしたるを

【形狀】源氏物語藤のうら葉曰、一むらすゝきも心にまかせてみだれたりける。同かしは木曰、ひとむらすゝきもたのもしげにひろごりて、むしのねそはん秋、思ひやらるゝより、いと物あはれに露けくて。枕草紙曰、これにすゝきをいれぬ、いとあやし、と人いふめり。秋の野のをしなべたるおかしさは、すゝきにこそあれ。ほさきのすはうにいとこきが、朝ぎりにぬれてうちなびきたるは、さばかりの物やはある。秋のはてぞ、いと見どころなき。色々にみだれ咲たりし花の、かたもなくちりたるのち、冬のすゑまで、かしらいとしろく、おほどれたるをもしらで、むかしおもひ出がほになびきて、かひろぎたてる、人にこそ、いみじうにためれ。よそふる事ありて、それをしもこそ、あはれともおもふべけれ。歌林四季物語曰、さらにもすゝきゝほさき、すはうにさきたる、いろ〳〵にみだれて。赤染衞門集曰、又すゝきのみおほかるのにて、いたうまねきしに云〻あきよりわづらひて、十月ついたち比によろしくなりてみれば、にはくさもしもがれて、すゝきのはなどもさはやかになりにけるを、しらぬもあはれにて　○乎婆

卷廿ノ二例ハ乎婆奈ナリ

刊本ノ國史卷卅一

奈萬葉集

〔一名〕**尾華** 吾妻鏡曰、文治五年九月四日云云、今日二品令レ陣ニ于陣ヵ岡蜂ノ社一給、而ニ北陸道ノ追討使能員、實政等、靡ニ出羽ノ國狼戻一ヲ、參加ル之間、軍士廿八万四千騎也、面々打ニ立白旗一ヲ、各倚ニ置黄間一ニ、秋ノ尾華混レ色ヲ、晩頭ノ月添フ勢ヲ

乎花 萬葉集卷第八曰、山上憶良詠秋野花二首云云、同卷第十曰、道邊之、乎花我下之、思草云云。同卷第十五曰、安伎波疑能、知良敞流野邊乃、波都乎花、可里保爾布伎弖云云。同卷第二十曰、多可麻刀能、乎婆奈布伎故酒、秋風爾云云。波都乎婆奈、波名爾見牟登之、安麻乃可波云云

尾花 萬葉集卷第八曰、公之家有、尾花之所念。秋付者、尾花我上爾、置露乃。云云波太須珠寸、尾花逆葺云云。同卷第十曰、春日野之、尾花之上乃云云。秋ノ野、尾花ヵ末、生ヒ靡ク、心ハ妹ニ、依ニケル鴨

おはな 大和物語曰、故式部卿のみやの、いでは〻ごに、まゝちゝの少將すみけるを、はなれてのち、女すゝきに文をつけてやりたりければ、少將。秋風になびくおばなはむかしみしたもとににてぞこひしかりける。いではのごかへし。たもとゝもしのばざらまし秋かぜをなびくおばなのをどろかさずば。袖中抄曰、おばなとは、つねには薄の穗をよめる

お花 源氏物語

麻花 萬葉集卷第十曰、吾屋戶之、麻花押靡ベ、置露爾云云

つはな 藻塩草曰、つばな、を花同事也

袖波草 藻塩草曰、是は尾花也

乎波奈 類聚國史卷第九十九曰、平城天皇大同三年九月戊戌、幸ニ神泉苑ニ有レ勅、令ニ從五位下平群朝臣賀是麿作ニ和歌一曰、伊賀爾布久、賀是爾阿禮波可、於保志万乃、乎波奈能須惠乎、布岐牟須悲太留

〔集註〕源氏物語寄生曰、かれ〴〵なるぜんざいの中に、お花の物

よりことに、てをさしいでゝまねくがおかしくみゆるに、まだほにいでさしたるも、露をつらぬきとむる玉のを、はかなげにうちなびきたるなど、れいのことなれど、夕かぜ猶哀なる比なりかし。ほにいでぬもの思ふらしじのすゝきまねくたもとの露しげくして。云云 秋はつる野べのけしきもしのすゝきほのめく風につけてこそしれ。狭衣曰、あるにもあらぬ中にも、おばなのもとの思ひぐさは、なをよすがとおほさるゝを。又曰、お花の袖もしろみわたりつゝ、心ぼそげにうちまねきたるに。實方朝臣集曰、うちわたりの女に、尾花につけて云ゝ。赤染衛門集曰、とのゝうへやはたよりかへらせ給ふとて、かどのまへすぎさせ給ふに、風いたう吹しに、庭のおばないたくまねきしをおりて、をひてまいらせし。宇津保物語俊蔭曰、この家の垣ほより、いとめでたく色きよらなる尾花、おれかへりまねく。太平記卷第七曰、旌旗ノ風ニ翻テ靡ク氣色ハ、秋ノ野ノ尾花ガ末ヨリモ繁ク

○ほやのすゝき　袖中抄

［集註］撰集抄卷第一曰、佐野の野原の、ほやのすゝきそよめきて。同卷第七曰、信濃野のほやの薄に雪ちりて下葉は色の野邊ゝおも。藻塩草曰、ほやの薄、ほやのと云所、しなのにあり。その所にあるすゝきと云ゝ。又ある物には、御射山のまつりには、すゝきにてかみどのをつくる、其外人の屋をも、まつりの程は皆薄のほにてつくる也と云ゝ。袖中抄曰、しなのなるほやのすゝきも風ふけばそよ〳〵さゝそいはまほしけれ。顯昭云、ほやのといふ所、しなのゝ國に有、その所にあるすゝき也。或書には、ちゐさやかなるすゝきなりとかきたれど、それはいかゞとおぼゆ

○ますほのすゝき　無名抄　つか〳〵

［集註］無名抄曰、あめのふりける日、ある人の

もとに、おもふどちさしあつまりて、ふるき事などかたりいでたりけるついでに、ますほのすゝきといふはいかなるすゝきぞなどいひしろふほどに、ある老人のいはく、わたのべといふ所にぞ、この事しりたるひじりはありときゝ侍しか、とほの〴〵いひいでたりけり。登蓮法師その中にありて、この事をきゝて、詞すくなになりて、又とふ事もなく、あるじに、みのかさしばしかしたまへといひければ、あやしと思ながら、とりていでたりけり。ものがたりをもきゝさして、みのうちき、わらぐつさしはきて、いそぎいでけるを、人〳〵あやしがりて、其ゆへをとふ。わたのべにまかる也、としごろいぶかしく思給へしことをしれる人ありときゝて、いかでたづねにまからざらむといふ。おどろきながら、さるにても、雨やめていでたまへといさめけれど、いではかなき事をものたまふかな、いのちは我も人も、あめのはれまなどまつ物かは、なに事もしづかにとばかりいひすてゝいにけり。いみじかりけるすき物之かし。さてほいのごとくたづねあひて、とひきゝて、いみじう秘藏しけり。このこと第三代の弟子にて、つたへならひて侍なり。此薄(すゝき)おなじさまにてあまた侍也。ますほの薄、まそをの薄、まそうの薄とて、みくさ侍なり。ますほのすゝきといふは、ほながくて、一尺ばかりあるをいふ。かのますかゞみをば万葉集には、十寸のかゞみとかけるにて心うべし。まそをのすゝきといふは、眞麻(まを)の心之。これは俊頼朝臣の哥にぞよみて侍る。まそをのいとをくりかけてと侍るとよ。いとなどのみだれたるやうなるなり。まそうのすゝきとは、まことにすわうなりといふ心之。ますわうのすゝきといふべきを、ことばを畧したるなり。色ふかきすゝきの、ながくなへしだれたるなり。古集などに、たしかにみえたる事はなけれど、和哥のならひ、かやうのふることをもちひるも、ま

今寫本袖中抄案ニ作ル

たよのつねの事之。人あまねくしらず。みだりにとくべからず。つれ〴〵にも此前文を引て、ゆゝしく有がたうおぼゆれと云

○すくろのすゝき 袖中抄

集註 袖中抄曰、あはづ野のすぐろのすゝきつのくめばふゆたちなづむ駒ぞいばゆる、顯昭云、すぐろのすゝきとは、春いやけのゝすゝきの、すゑのくろき也。すくろはすこし末くろき草といふべきなめり。或人云、すぐろは、すゝきのふるきくきをばすと云、そのふるきくきの、やけてくろければ、すぐろといふ。言塵集曰、すぐろの薄とは、燒野に生たる薄なり。さきのゝすぐろとよめり○寄園寄所寄曰、管子注、獵而行レ火曰レ燒、本義野火也。戰國策所謂楚王獵ニ於雲夢ニ野火之起若雲霓是也。又列子趙襄狩ニ於中山ニ藉レ芿焚レ林芿舊艸未レ芟新草又生也。今南方之民力耕火種亦成ニ野燒一

○はたすゝき 袖中抄

一名 旗須爲寸 萬葉集 皮爲酢寸 同上 波太須珠寸 同上 者田爲爲寸 同上 婆太須酒吉 同上

集註 袖中抄曰、或万葉裏書云、はたすゝきとは、穗の出て旗(はた)をさゝげたる樣なるすゝきを云とぞ能因申けると云々。日本紀云、幡荻(はたすゝき)穗出吉也云々。日本紀にけ幡と書、幡は佛前のはたなり。旗は儀式戰(いくさ)の陣等のはた也。童蒙抄云、はた薄とは皮しの薄を云也。綺語抄云、伊勢の宮に軒に薄のしべのかぎりをぬきて、とゝのへて軒にふける也。はた薄(すゝき)のはた文字、平聲のにごりたるによめり。しべのかぎりぬきたる膚すゝきと云也。しべを俗にはすべと云也。古今に云、膚(はだ)すゝきといへば、はだへとかはとは同事也。又かはにつゝまれたれば、かはすゝきとも云、穗にいでねばしの薄とい

はんも同事也

○しの薄 言塵集 【集註】 言塵集曰、しの薄は、多野の白薄の名

いとすゝき 仙傳抄 【漢名】 石芒 本草 【今名】 イトスヽキ 【集註】 撰集抄卷第三曰、大原の奥のいとずゝ

本草綱目、時珍曰、五月ニ抽テ短莖ヲ開レ花ヲ如キレ芒ノ者石芒也。證類本草曰、石芒生ニ高山ニ、如テレ芒ノ節短シ、江西人呼テ爲ニ折草ト、六月七月生スレ穗如レ狄也

き、露のよすがの、秋くれば、さもこそ玉の緒をよはみ、末葉にすがりかたぶくらめと おぼえ侍り。千首和歌曰、吹むすぶ風の色よりちる露のよそに乱れぬ糸すゝき哉 【形狀】 地錦抄曰、糸

すゝき、葉隨分ほそく、穗もあいらしく見事之。糸スヽキハ芒ニ同メ、葉至テ細シ。五月ニ花ヲ開モノト、秋開モノトアリ。穗ハスヽキニ同メ小也

高宗薄タカムネスヽキ 明月記 【今名】 ヒトモトスヽキ

【形狀】 明月記曰、寛喜元年九月八日、心舜房送草樹等、令栽之云云。高宗薄、不似例薄云云、穗不出不見分 【今案】 明月記ニ所レ說以テ考レバ、高宗薄ハ今世ニ云ヒトモトスヽキ也。地錦抄

曰、一本すゝき、たゞふ立大ク、そてつのごとく、すゝきのごとく成葉を出す、葉多く付て冬も有。大和本草曰、一本芒モトスヽキ、一窠ヨリ多ク叢生ス

舜 刊本寂ニ作ル 可カ従

萱和刊本萱名抄ルニ作、。萱萱原本混同セリ康熙字典ニ萱字ニ按

加夜（カヤ）萬葉集　【漢名】菅茅 本草　【今名】カヤ

本草綱目、時珍曰、菅茅只生ニスニ山上一ニ、似ニ白茅一ニ而長シ、入レテ秋ニ抽レキ莖ヲ開レキ花成レス穗ヲ如ニシ荻花一ノ、結レテ實ヲ尖黑長サ分許、粘レシ衣ニ刺レス人ヲ、其ノ根短硬如ニク細竹根一ノ無レノ節而微甘

【一名】我夜 萬葉

集卷第十四曰、可波加美能、禰自路多可我夜、安也爾阿夜爾、左宿左寐氏許曾、己登爾氏爾與可（　）乎加爾與世、和我可流加夜能、佐禰加夜能、麻許等奈其夜波、禰呂等敝奈香母

萱 日向國風土記曰、宮崎郡、出菅萱柴等。吾妻鏡卷第四十曰、萱津駅。同卷第六曰、萱津宿。和泉國風土記曰、大鳥郡横野鄉、出萱。玉横野鄉、出ニ荻萱菅一。百練抄卷第八曰、承安三年四月十二日、上皇御所法住寺北殿、号ニ萱御所一、燒亡。同卷第十曰、建久二年六月十日未刻、六条萱御所燒亡。明月記曰、治承五年九月廿七日、入道殿如例引卒令參萱御所齋院給、有御彈箏事云云。寛喜二年九月廿七日、讃岐前司今日被書送云云吉富庄之旅人往反大道之邊、令立萱葺小堂、奉安千躰地藏。倭名類聚鈔曰、萱。廣益玉篇云、萱（カヤ）。魚凱反、與宜同。和名加夜、草名也。按ニカヤハ菅茅ヲ指ト、衆草ヲ指ト、同名ニナル。神代紀草（カヤ）野姫證トスベシ。萓。字典曰、韻會、忘憂草。按、萓字、詩作諼、即萓草ト出ルハワスレグサ也

加也 倭名鈔國郡部曰、上野國勢多郡桂萱、加以加也

【集註】日本書紀仁德天皇曰、茅茨之蓋弗ニ割（ヒリ）齊一也。又曰、四年云云茅茨壞以不葺。

一本四季物語曰、此山ざとのかやふきの戸ざしにも、さすがに行通ひし大内のさまは、かりねの夢にもわすられず。仙覺萬葉集註釋卷第三曰、まのゝかやはらは戀のしげきにたとふ。同卷第十一曰、あたらしきか

書字詩作シ設ト云ヘリ

出ノ上生字アル本アリ

やふきの屋をば、ふきがやのしどろなるところをおもひあはせんとて、うへをふみしづむるなり。同巻第十四下曰、かはかみのねしろたかゞや云云川かみにおひたるかやは、水に洗はれて、根のしろければ、根しろたかゞやとよめり。又曰、むろがやとは、かやをたかくかりしきたる心なり。河越記曰、かやが末葉にほのめく月は、みるにさはりなく。西行物語曰、庵のうへをば、うすかる萱(かや)にてふき。又曰、なかんづく御殿のかやぶきなる事

【形狀】百練抄巻第十三曰、貞應二年九月廿一日、軒廊御卜也。宇佐宮假殿葺萱上笋八本出事

かるかや 源氏物語

【漢名】未詳

【一名】苅萱 太平記　刈萱 藻塩草曰、かるかや、只かや共よめり。按ニカルカヤハ菅茅ヲ苅タルト、一種ノカルカヤト同名異物也

【集註】源氏物語野分曰、風さはぎむら雲まよふゆふべにもわするゝまなくわすられぬきみ。吹みだりたるかるかやにつけ給へれば。古今集曰、まめなれどなにぞはよけくかるかやのみだれてあれどあしけくもなし。拾遺集曰、物名ーかるかや、忠峯。しら露のかゝるかやがてきえざらば草葉ぞ玉のくしげならまし。太平記巻第二十八曰、薄(すゝき)苅萱(かるかや)篠竹ナンドヲ切テ、鎧ノサ子頭冑ノ鉢付ノ板ニヒシト差テ、探竿影草ニ身ヲ隱メ、鼓ガ崎ノ切岸ノ下、岩尾ノ陰ニゾ臥タリケル。桐火桶曰、をみなべし、われもかう、かるかや樣の草〳〵みだれあひたるに、露のゆふかぜ心ぐるしきに、野の宮の㛗のけしきを見ん心ちし侍り。大神宮參詣記曰、すゝき、かるかやの

絕まに、かりばねおほきはりみちあり。尺素往來曰、秋花者蘭(フヂバカマ)萩荻薄刈萱。撰集抄卷第五曰、すゝき、かるかや、はぎ、女郎花を手折て、庵むすんで居たる僧あり云々。又かるかやの戶には、山陰の暮ぬとおもへばかるかやのした置露もまたきいろかな。筑紫道記曰、爰かしこの陰に、一村薄かるかやなどの有は、哀なれど。散木集曰、かるかや。わがこまをしばしとかるか山しろのこはたの里に有とこたへよ。山家集曰、古籬刈萱。笆あれて薄ならねどかるかやもしげきのべとは成ける物を。つれ〴〵艸、秋の草は荻薄、ききかう、はぎ、をみなべし、ふぢばかま、しをに、われもかう、かるかや、りんだう、きく、黃菊も、つた、くず、朝がほ、いづれもいとたかからず、さゝやかなるかきに、しげからぬよし

形狀

〇地錦抄曰、刈萱、すゝきのるひ也。秋中の比穗出ル。按ニ、地錦抄ニ戴ルカルカヤ、ワレモカウ、今ノ說ト相反ス。今カルカヤト云モノハ、山野ニ多シ。葉芒(スヽキ)ニ似テ、手ヲ切ラズ、秋二三尺ニ及ビ穗ヲナス、燕麥(チャヒキグサ)ノ穗ニ似テ直立ス

都(ツ)波(ハ)　出雲國風土記

漢名　槖吾　急就草

今名　ツハ

正字通曰、欵冬。注一種黃白花者別名槖吾。急就草曰、半夏皁莢艾槖吾款東貝母薑狼牙、師古注云、槖吾、似款冬而腹有絲生陸地、華黃色、一名獸須款東卽款冬、爾雅作顆凍、一名菟奚郭註款凍也、紫赤華生水中、據此說與槖吾分爲二。本草綱目、合槖吾、顆凍爲一誤

集註

出雲國風土記曰、意宇郡砥神嶋有都波。嶋根郡美佐嶋有都波薺蒿。結嶋有松薺頭蒿都波。久宇嶋有都波芋。粟嶋有松芋茅都波。小嶋

有都波。嶋嶋有都波。附嶋有都波

今案 出雲國風土記曰、嶋根郡和多ニ嶋有齊頭蒿蕗都波猪鹿トミユレバ 欵冬、橐吾自ラ二種ニ分ナリ

形狀 橐吾ハ山中ニ多シ、葉欵冬ニ似テ厚ク、面深綠色、背淡綠色、四時不レ凋、其芽及莖ニ茶色ノ絮アリ、後莖ヲ抽、秋高サ二三尺、梢菊花ニ似タル花アリ、黃色單瓣蔓大也

夜末須介 倭名類聚鈔

漢名 麥門冬 本草

今名 ヤブラン

○按ニ、山スゲ同名アリ、山菅モ山スゲト云、即サ、ミ也。麥門冬ト同名異物。群芳譜曰、麥門冬、一名忍冬、一名禹韭、一名不死草、所在有レ之、大小三四種、功用相似タリ、其葉靑ク大ナル者ハ如シ鹿葱ノ、小ナル者ハ如シ韭ノ、浙中ノ者良多ニ縱紋ニ且堅韌、長サ及ニ尺餘ニ四季不レ凋、根黃白色有レ鬚、在ニ根如ニ連珠ニ、四月ニ開ク淡紅花ヲ如ニ紅蓼ニ、實圓碧ニシテ如レ珠ノ

一名 也末須介 本草和名曰、麥門冬。和名也末須介。倭名鈔曰、麥門冬、和名夜末須介

夜萬須介 天文写本和名抄　山須介 新撰字鏡　山菅 字鏡曰、麥門冬、山菅。萬葉集卷第四曰、山菅乃實不成事乎、吾ニ爾所依。按ニ、麥門冬ハ實ノ附クコト少キヲ云。萬葉集卷第七曰、妹爲、菅實採、行吾、山路惑ヒテ、此ノ日暮ツトミエタリ。本草弘景曰、冬月ニ作レ實ヲ如ニ青珠ニ、即此也。萬葉集卷第十一曰、足引、名負山菅押伏、公結、不相有哉。藻塩草曰、山すげ占、山すげの葉をむすびあはせて、そのすゑをかんたぎにむすばするとかやと云と

同卷第十二曰、足檜木之、山菅根之、懃云云。又曰、山菅乃、思ヒ亂而。又曰、三笠乃山乃、山菅之　夜麻須氣 萬葉

采葉抄第八

多ノ下煎字脫カ

集卷第十四曰、可奈思伊毛乎、伊都知由可米等、

夜麻須我

萬葉集卷第二十曰、佐久波奈波、宇都呂布等伎安里、安之比奇乃、夜麻須我乃祢之、夜麻須氣乃、曾我比爾宿思久、伊麻之久夜思母奈我久波安利家里。右一首、大伴ノ宿禰家持悲ニ怜物色變化ヲ作レ之也○按、麥門冬ハ四時靑翠也。萬葉集第三ニ奧山之、菅葉凌、零雪乃。同第八ニ、高山之、菅葉シヌ努藝、零雪之ト云リ○萬葉集卷第三曰、奧山之、磐本菅乎、根深目手、結ビ之情、忘不得裳。同卷第四曰、奧山之、磐影爾生流、菅根乃、懃吾毛、不相念有哉。足引乃、山爾生有、菅根乃、懃見卷ク、欲ニ君可聞。同卷第十一曰、奧山之、石本菅乃、根深毛、所思ル鴨、吾ガ念妻者。同卷第二十曰、高山乃、伊波保爾於布流、須我乃根乃、爾母許呂其呂爾、布里於久白雪。又曰、佐久波奈波。後額髓腦抄曰、云と是は山すげのねを申なめり。これがねは、もの丶ほどよりもながき也

也末須計

本草類編

タツノヒケ

異本本草類編曰、私案、一說タツノヒゲ、ゼウガヒゲ

ゼウガヒゲ

見上

袁等賣草

延喜式卷第四十曰、造酒司。踐祚大嘗祭供神料。云云袁等賣草各二擔。已上九種襁○明月記曰、布虫襖、髮ソギの具、山菅山橘等付之。言塵集曰、山橘。かみそぎの時、山菅にそへたる草之。據此則袁等賣草ハ卽麥門多也。此葉四時靑翠ニメ不ニ相變一ヲ祝ル也

山スゲ

詞林采葉抄曰、山スゲ占ト云ハ、山菅ノ葉ヲ結ビ合テ、其末ヲ巫ニムスバスルトカヤ

集註

本草類編曰、麥門多。和也末須計。二三八月十月採陰乾。延喜式卷第十五曰、內藏寮。諸國年料供進。麥門多煎一斗。同卷第二十三曰、民部下。大宰府、麥門多ニ斛二斗。同卷第三十七曰、典藥寮。每年十二月晦日供ニ植藥ノ樣一ヲ云云麥門多

云云各四兩。請諸蕃使唐使。麥門冬云云各四斤。渤使。麥門冬云云各二斤。新羅使。麥門冬七斤。諸國進年料雜藥。伊賀國、麥門冬四升。尾張國、麥門冬四升。參河國、麥門冬五升。遠江國、麥門冬六升九合。駿河國、麥門冬云云各五升。相摸國麥門冬一升。安房國、麥門冬云云各一升。上總國、麥門冬一斗四升。下總國、麥門冬云云各四升。近江國、麥門冬一斗五升五合。美濃國、麥門冬二斗七升。上野國、麥門冬八升。若狹國、麥門冬云云各二斗。丹波國、麥門冬一斗。丹後國、麥門冬大一斗三升五合。但馬國、麥門冬八升。出雲國、麥門冬五升。美作國、麥門冬二斗四升。備前國、麥門冬云云各二升。備中國、麥門冬云云各一斗。備後國、麥門冬三斗六升。安藝國、麥門冬一升七合。周防國、麥門冬七升。阿波國、麥門冬云云各二升。讃岐國、麥門冬云云各一斗。伊豫國、麥門冬云云各三升。常陸國風土記曰、行方郡香澄里、麥門冬往々多。出雲國風土記曰、意宇郡、諸山野所在草木麥門冬。嶋根郡所在草木麥門冬。楯縫郡所在草木麥門冬。神門郡所在草木麥門冬。大原郡所在草木麥門冬。參河國風土記曰、寶飯郡、貢麥門冬。榮花物語曰、子の日にやますげをてまさぐりにして、ごんのすけかねふさ。おぼつかなけふはねの日をやますげのひきたがへてもいのりつるかな。といへば、出羽弁。いまよりはまつをもおきてやますげのながきためしにひきやくらべん。などいひかはすほどもおかし

形狀

福田方曰、麥門冬。カタクヒタルヲバナマヌル湯ニ浸メ、和ラギタル吮、心ヲヌキ去テ、焙干テ使ヘ、ホトハカシ過ツレバヌキニクシ、若今ホリテ生ッ(ク)バ、少シナマボシニメヌケバ安キナリ、五斤モ十斤モ一度ニコシラヘテ、乾カタメテ、風ヒカセズメ置ベシ〇脩治纂要曰、麥門冬。安末須介、勢宇加比介。本草辨疑曰、和草二種アリ、大葉小葉ナリ、藥舗ノ渚ハ皆

小葉ニシテ、大葉ヲ用ルコト人不レ知レ之、根大ニシテ味モ甚甘シ、白實ナルヲ上トシ、赤ク皺アリ、或黑黴膩ナル ハ下ナリ、四國ヨリ出、大葉ノ物所レ在甚多

村ノ下今一ツ村アルベキカ

惠美久佐 本草和名

【漢名】萎蕤 本草

【今名】アマドコロ

萬葉集卷第十八曰、左由利能波奈能、花咲爾、々布夫爾惠美天、阿波之多流。又曰、乎登女良我、惠末比能爾保比云云安沙余比爾、惠美々惠末須毛。續日本紀卷第廿一曰、廢帝天平寶字二年八月甲子、以二紫微内相藤原ノ朝臣仲麻呂ヲ任二ス大保一ニ、勅曰云云因レ此ニ論レハ之ヲ、准レ古無レ匹、汎惠之美、莫レ美ニ於斯一ヨリ、自今以後、宜三姓ノ中ニ加二フ惠美ノ二字一ヲ。同卷第廿五曰、天平寶字八年九月壬子、軍士石村主石楯、斬二ル押勝一ヲ傳二フ首ヲ京都一ニ云云寶字二年拜二ス大保一ニ、優勅加二フ姓中惠美ノ二字一ヲ。蜻蛉日記曰、いとよくゑみてまかりゐたる。源氏物語ニ、ゑみ、ほゝゑみ、うちゑみ、うちゑまれ、ゑみひろごりてト云。字鏡曰、嗎。笑皃。和良不、又惠牟。字典曰、嗎。廣韻許延切、音仚。玉篇、嗎喜也。廣韻笑貌ナリ。證類本草曰、圖經曰、萎蕤。生二ス太山山谷丘陵一ニ、今滁州、舒州及ビ漢中皆有レ之、葉狹而長、表白裏青、亦類二ス黃精一ニ、莖幹強直似二タリ竹箭幹一ニ有レ節、根黃ニ多レ鬚、大如レ指、長一二尺、三月開二キ青花一ヲ結二フ圓實一ヲ。

【一名】阿末尔 本草和名曰、女萎、萎蕤。和名惠美久佐、一名阿末尔

安麻奈 倭名類聚鈔曰、女葳蕤。葳音威。蕤音汝誰反、和名惠美久佐、一云安麻奈

惠比爾久佐 本草類編

【集註】本草類編曰、女萎。和惠比爾久佐、又安末尔。立春後採根陰乾、正二月採之。延喜式卷第二十七曰、典藥寮 諸國進

年料雜藥。備中國、女萎四斤。阿波國、云云女萎各二斤。讃岐國、云云女萎各五斤。出雲國風土記曰、秋鹿郡、所在草木女萎。出雲郡、所在草木女委。飯石郡、所在草木女委。大原郡、所在草木女委

形狀

○本草辨疑曰、萎蕤。今ノ世ニ黃精ト云モノ皆此萎蕤ナリ。藥家ニ賣モノモ黃精ニアラズ。京近邊所々山中甚多シ。唯黃精ハ希ナリ。花葉根共ニ能ク似テ、只根ノ大ニ節高ク黃ナル者黃精ニシテ、平直ニ節ヒキク、長ク黃白ナル者ハ萎蕤ナリ。和ノ通用ノ者ハ眞ニ非ズ、皆萎蕤ナリ、不可用。黃精、萎蕤又遠キ者ニアラズ、一類草也

正誤

或說ニ似兒草ヲ以テ惡美久差トス、非也。萬葉集ニ似兒草、爾故余漢、我共咲爲而ト云ニ據テ誤レル也。字鏡曰、紛。撫云又、平乱也。哆也。放縱也。盛也。告也。尓已也加尓。字典曰、紛。廣韻府文切、音芬。釋文紛紫也。蕃也。一云盛也。萬葉集第十一ノ似兒草ハ卽和草ニシテ、若草ヲ云テ、笑ヲ云ニ非ズ。字鏡曰、婉。尓已也介志。字典曰、婉。集韻烏管切、音宛、美也ト卽此也。萬葉集ニ所射鹿乎、認河邊之、和草、身若可倍頭、日本書紀ニ伊喩之之乎、都那遲何播杯能、倭柯矩娑能、倭柯倶阿利岐騰トミユ。和草ハ卽若草ナル證也。尙雜草部ニ詳ナリ

阿也女多牟 本草和名

漢名 地楡 本草

今名 ワレモカウ

證類本草曰、圖經曰、地楡。今處處有之、宿根三月內生苗、初生布地、莖直高三四尺、對分生葉、葉似楡少狹細作鋸齒狀青色、七月開花、如椹子紫黑色、根外黑裏紅似柳根

一名

我毛加宇

明月記曰、寬喜三年八月十九日、還御。雖非人數度々參、儲深草木綿山、薄我毛加宇穗色盛而如畫書云云 過般若路、芋、我毛加宇、苅萱、蘭、女郎花色々開敷、情感非一

我毛香（ワレモカウ）尺素往來　衣比須禰　本草和名曰、地楡。和名阿也女多年、一名衣比須祢　曾比久ゝ佐　新撰字鏡曰、地楡。曾比久ゝ佐　阿夜女太無　倭名類聚鈔曰、地楡。和名阿夜女太無、一云衣比須祢　阿夜米太毛　天文写本和名抄　衣比須久佐　醫心方曰、地楡。衣比須久佐　安也女太於　本草類編　也末不之　同上　のつち　藻塩草曰、地楡。のつち、又しひもの枕　しひもの枕　見上

【集註】本草類編曰、地楡。和安也女太於、也末不之。二八月採根暴干。延喜式卷第三十七曰、典藥寮。中宮臘月御藥。地楡二兩。毎年十二月晦日供殖藥樣、云云地楡云云各四兩。雜給料。地楡六兩。諸司年料雜藥。齋宮寮。地楡四兩一分。内匠寮。地楡云云各三兩。遣諸蕃使、唐使。地楡云云各八斤。渤使。地楡云云各一斤。新羅使。云云地楡各三斤。諸國進年料雜藥。山城國、地楡云云各十斤。大和國、地楡十六斤。攝津國、地楡云云各二斤。伊勢國、地楡十五斤十兩。尾張國、地楡云云各十斤。參河國、地楡云云各一斤。安房國、地楡二斤。上總國、云云地楡各四斤。下總國、地楡十四兩。近江國地楡四斤二兩。美濃國、地楡云云各廿斤。丹波國、云云地楡各九斤。播磨國、地楡九斤。美作國、云云地楡各六斤。備前國、地楡云云各三斤。備中國、云云地楡各一斤。安藝國、地楡云云各二斤。紀伊國、云云地楡各三斤。讃岐國、地楡十斤。出雲國風土記曰、仁多郡、所在草木地楡。源氏物語にほふ宮曰、烑はよの人のめづるをみなべし、さをしかのつまにすめる萩の露にも、をさ〱御心うつし給はず。老をわするゝきくに、おとろへゆくふぢばかま、

物げなきわれもかうなどは、いとすさまじき霜がれのころをひまで、おぼしすてずなど、わざとめきて、香にめづる思をなんたてゝ、このましうおはしける。中務内侍日記曰、こうあん六年七月十八日、野上の御かう行けいなる云とひろき野にわれもかうを、まじる物なくうへわたしたるに、わかき女房たち、山ざはまでわけ入て見れど、道なくてかへりぬ云と大夫どのゝ御哥あり。わすれずよ野上にしげるわれもかうかゝ袂の露もまだひず。桐火桶曰、をみなへし、われもかう、かるかや様の草ぐくみだれあひたるに、露のゆふかぜ心ぐるしき野の宮の妹のけしきを見ん心ちし侍り。狭衣曰、むさし野の霜がれに見しわれもかう秋しもをとるにほひなりけり。北國紀行曰、かれたる萩、われもかうなどをひきむすびて

【形状】○脩治纂要曰、地楡。也末布之、乃古波利久左　野ニ生ズ。葉似レ鋸ノコギリ實赤シ、根ヲ用。按、地楡ハ山野ニ多シ、苗高サ尺許、葉左右排生メ楡葉ニ似テ厚ク窄シ、後莖ヲ抽キ夏秋高サ二三尺、莖ニ葉互生ジ、梢ニ枝ヲ分花アリ、桑椹ノ如シ、多クハ紫黑色也

伊波与牟支イハヨモギ　新撰字鏡　【漢名】菴蕳　本草　【今名】イヌヨモギ

本草綱目、時珍曰、菴蕳葉不レ似ニ艾ニ、似ニ菊葉ニ而薄多ニ細丫ニ、面背皆青、高者四五尺、其莖白色如ニ艾莖ノ而粗シ。八九月開ニ細花ヲ、淡黃色結ニ細實ヲ、如ニ艾實ノ、中ニ有ニ細子ニ極メテ易ニ繁衍シ

【一名】加良牟毛支

新撰字鏡曰、蕳、呂居反、平、蓬類也。蕳也。伊波与牟支、又加良牟毛支

【形状】菴蕳ハ山中自生アリ、宿根春苗ヲ生ズ葉藍菊ゴトウギク葉ニ似テ、形様艾ニ似テ毛ナシ、葉

頭アラキ鋸齒アリ、後莖ヲ起シ高サ一二尺ニ及ブ、莖圓ク艾ニ類メ葉互ニ附、梢ニ穗ヲ成、秋月花ヲ開、艾花ニ似テ花實共ニ大也

女止（メド） 新撰字鏡　［漢名］蓍 本草　［今名］ハゴロモ

證類本草曰、圖經曰、蓍實。其ノ生如ク蒿作レス叢ヲ、高サ五六尺、一本一二十莖、至テ多キ者ハ三五十莖生ノ、梗條直シ所ニ以ナリ異於衆蒿ニ也。秋後有レ花出ニ於枝端ニ、紅紫色形如レ菊、八月九月採ニ其實ヲ

［一名］

女止久佐 本草類編ニ新撰字鏡曰、蓍。式脂反、信也。蒿也。女止。倭名類聚鈔曰、蓍。和名女止

安之久佐 本草類編

女度 藻塩草曰、蓍實、女度。奥儀抄曰、めどは草の名也。蓍也

［集註］本草類編曰、蓍實。和安之久佐、又女止久佐、八九月採實日乾

［形狀］○野山草曰、のこぎり草、一名かんぎ草、又はごろもともいふ。一本に二三十莖生たつ、高さ二尺ばかり、葉せまく長（なが）してふちに鴈（かり）齒有、夏秋の間はなをひらく、細小の菊花に似たり、いろ紅白二いろあり

佐岐久佐奈（サキクサナ） 本草和名　［漢名］沙參 本草　［今名］ツリガネ人參

本草綱目、時珍曰、沙參。處處山原有リ之、二月生レス苗ヲ、葉如ニシテ初生ノ小葵葉ノ而團扁不レ尖、八九月抽レ莖、高一二尺、莖上之葉則尖長如ニシテ枸杞葉ノ而小ク、有ニ細齒、秋月葉間開ニク小紫花ヲ、長二三分、狀如ク鈴鐸ノ、五出白蕋ノ、

薺 刊本薺ニ作ル、原稱ハ薺ナリ 出雲風土記刊本ハ薺ナリ 延喜式ハ薺ノ字ナリ

亦有ニ白花者一、並結レ實ヲ大サ如ニ冬青實一、中ニ有リ細子一、霜後苗枯ル、其ノ根生ニ沙地ニ者、長サ尺餘大サ一虎口、黄土地ノ者則短而小、根莖皆有ニ白汁一

一名 美乃波 本草和名曰、薺苨。和名佐岐久佐奈、一名美乃波。按ニ古書皆沙參ヲ以テ薺苨トス、薺苨ハソバナ也。今信州諏訪ニテ沙參苗ヲ採テ食ス、方言ミチバト云、即美乃波ノ古言ノ殘レルナリ。本草辨疑曰、沙參。和ニ薺苨ト名ル者ヲ可レ用ト云、此即古ヨリ沙參ヲ以テ薺苨トシ用ヒ來レルノ誤也

左岐久左奈 倭名類聚鈔曰、薺苨。和名佐木久佐奈、一云美乃波。按歌ニ秋ニ詠ルサギクサ此也

佐木久佐奈 天文写本和名抄

佐支久佐 本草類編

美乃波久佐 同上

ぬえくさ 藻塩草曰、薺苨。ぬえくさ

•薺苨 出雲國風土記曰、仁多郡、所在草木薺苨

集註 延喜式卷第三十七曰、典藥寮。遣諸蕃使。渤使、薺苨云云各二斤。新羅使、薺苨云云各三斤。諸國進年料雜藥。山城國、薺苨云云各六斤。大和國、薺苨云云各五斤。參河國、云云薺苨各二斤。下總國、薺苨云云各五斤。近江國、薺苨二斤四兩。美濃國、薺苨云云各五斤。伯耆國、薺苨二斤。美作國 薺苨八兩。備前國、薺苨云云各二斤。備後國、薺苨廿三斤。阿波國、薺苨云云各三斤

形狀 本草類編曰、薺苨。和佐支久佐、美乃波久佐、二八月採根暴干、似人參形○沙參ハ原野ニ多シ、冬春ノ葉ハ圓ニシテ積雪草ニ似テ葉莖長厚ク深綠色也。春夏莖ヲ抽、高サ二三尺、葉莖ニ對生ス。多クハ三葉也。亦四五葉相對スルモアリ、形狀桔梗葉ニ似タリ、秋梢ニ穗ヲナシ、細枝ヲ分チ花下垂ス、風鈴ノ樣ヲナシ花瓣桔梗花ニ似テ尖、大サ四五分碧色也。亦白花アリ、種類至テ多シ○本草辨疑曰、沙參。今唐

ヨリ來ル者アリ、細長根ヲ束ネテ長ク圓ヲ渡ス、色黃ナリ。大和本草曰、沙參カラヨリ來ル、沙參二種アリ、一種ハ桔梗ニ似タリ、一種ハ絲ヲツガネタル如ク細長シ、味ハヨケレドモイブカシ、何物ナルヿヲシラズ。本草啓蒙曰、藥舖ニ販ク者、舶來ニ古今數品アリ、ソノ一ハ形肥大ニメ輕虛全ク和產ニ異ナラズ、一ハ拳沙參ト呼ブ、皆細ク竪ニ劈キテ乾シ、卷束シテ拳ノ形ノ如シ。又卷沙參ト名ク、黃白色、ソノ一ハ全根ヲ中破シテ兩片トナス、コレヲワリ沙參、或ハカウノモノ手ノ沙參ト呼ブ。以上ノ三品ハ古渡ニメ今甚ダ稀ナリ。ソノ一ハ竪ニ細ク劈キ、卷沙參ノ如クシテ卷束セズ、コレヲミダレ沙參ト稱ス、形細長ク五七寸許、白色ニメ防風ノ如シ。此ハ全根ヲ乾シタルナリ。此品今多ク渡ル、先年渡リタルハ根ニ潤アリテ白實ナレバ北沙參トモ云ベキナリ。今渡ルモノ皆乾脆ニメ折ヤスシ、恐ハ眞ニ非ズ

【今案】本草類編曰、沙參、二八月採根暴干。日本美濃州採之、七月開花如紫、并葉大香。本草辨疑曰、沙參。和ニ蔓生ノ草ヲ、ト、キ人參、ツル人參ト名テ沙參ニ用ユ。卽羊乳也。本草滅器曰、羊乳根苗作レ蔓折レ之有ニ白汁一、ツル人參ハ苗葉ニ香氣アリ、然則本草啓蒙羊乳ノ注ニ、古ハ人參ニ僞ト云ル說杜選也

加良須阿布岐（カラスアフギ）　本草和名　【漢名】射干　本草　【今名】ヒアフギ

證類本草曰、圖經曰、射干。今在處有レ之、人家庭砌間亦多ク種植ス、春生レス苗ヲ、高サ二三尺、葉似ニ蠻薑一而狹長ニシテ橫張如ッ翅狀ノ、故ニ一名烏翣、其葉中抽レ莖似ニ萱草一而彊硬、六月開レ花黃紅花瓣上有ニ細文一、秋結ビ實ヲ

房、中子黒色、根多鬚皮黄肉黄赤

一名

鳳尾花　尺素往來曰、夏花志云云鳳尾花

カラス扇　頓醫抄、古語拾遺曰、以烏扇扇之、證類本草曰、射晋干、一夜名烏扇

烏　萬葉集巻第二曰、烏玉能、暮爾至者云云。烏玉之、夜渡月之云云。同巻第十日、烏玉之、夜霧隱云云。烏珠之、夜者闇爾作云云。同巻第十一日烏玉。開閑作云云。烏玉、黒髪山、山草云云。烏玉之。毎夜云云。同巻第十二日、烏玉、彼夢見繼哉云云。烏玉乃。夢爾所見云云。同巻第九日、烏玉乃髪者亂而。同巻第三日、烏珠之、其夜之梅乎云云。同巻第七日、烏玉之、吾黒髪爾云云。同巻第十三日烏玉乃。宵毛深去來云云。烏玉之夜渚酢辛二云云。烏玉之黒馬爾乘而。烏玉之黒髪敷而。本草類編曰奴波乃美。詞林采葉抄曰、烏羽玉。カラス扇ノミハ黒玉ノ様ナレバ也。言塵集曰、ぬば玉云と烏扇と云草寶黒き玉に似たるを云。烏羽の玉とも云り。只黒キ玉歟。藻塩草曰、むば玉の夜、なば玉といふ同事也。又ぬば玉共いふ、是も同也。喜撰式云、ゆめはぬる玉、夜はぬは玉、かみはむは玉と云と書やうあまたあり。或は野干とも書たり。これは、狐は百歳をへぬればうばの姿に成ゆへにかくとなり。順が和名に、烏羽に射干モ書り、此謬をもつて野干とはかける也

黒　萬葉集巻第十一曰、黒玉之、我玄髪乎云云。黒玉夢不見云云。同巻第十二日、黒玉之、宿而之晩乃云云。同巻第九日、黒玉ノ、夜霧立云云。同巻第十日、黒玉ノ、宵霧隱、遠鞆。同巻第七日、黒玉之、夜去來濟云云。黒玉之玄髪山乎。同巻第十三日、黒玉之夜毛深去來云云。袖中抄曰、烏珠。黒玉 烏玉とかけり。烏といふ字をばくろしとよめば、くろき玉といふ歟

夜干　萬葉集巻第十一日、夜干玉之、妹之黒髪云云。夜干玉之、吾黒髪

乎云云。夜干玉之、黑髮色天、長キ夜叫。同卷第十二曰、夜干玉之、夜乎長鴨云云。夜干玉之、夜爾至ラ者云云。同卷第四曰 夜干玉之、黑馬之來 夜者云云。夜干玉乃、夜者須我良爾云云。夜干玉之、其夜乃月ヶ夜云云。同卷第七曰、夜干玉之、夜渡月乎。同卷第八曰、夜干玉乃、今夜之雪爾云云。延喜式卷第三十七曰、典藥寮。諸司年料雜藥。木工寮。夜干云云各十兩。出雲國風土記曰、出雲郡所在草木、夜干商陸獨活葛根薇蘼李〇證類本草曰、射干音夜干。陶隱居云、療毒腫方多作夜干、今射亦作夜音

烏野干 萬葉集卷第三曰、烏野干玉乃、夜渡ル月爾云云

奴波 萬葉集卷第十五曰 奴波多麻能、欲波安氣奴良之云云。奴波多麻能、欲和多流月者云云。奴波多麻能、伊毛我保須倍久云云。同卷第十七曰、奴波多麻能、黑髮之吉底、伊都之加登。同卷第十八曰、奴波多麻能、欲和多流都奇乎。同卷第五曰、奴波多麻能、用流能伊昧仁越云云。同卷第二曰、奴波珠乃、吾黑髮爾

野干 萬葉集卷第四曰、野干玉之、黑髮變云云。野干玉之、夜ル晝ル跡不言云云。野干玉能、昨夜者令還云云。同卷第十曰、野干玉之、夜度雁者。同卷第十二曰、野干玉ノ、夜渡月之云云。同卷第十三曰、野干玉之、彼夜者吾毛、宿毛寢金手寸。云云野干玉之、夜者須柄爾云云。野干玉ノ、黑髮布キ而云云。野干玉之、夜者袒去奴。夜干玉之、黑馬之來ル夜者。袖中抄曰、野干玉とかき、野玉とかき、夜干玉とかき、干玉とかきても、うば玉とよめり。考順和名ニ云、烏扇をば射干ともかけり、からす扇のみは、まろくてくろき物なれば、うば玉と云を、野干に文字譬かよひたれば、野干玉とかき、又夜干玉と云歟

奴婆 萬葉集卷第十五曰、奴婆多麻乃、欲和多流月爾云云。奴婆多麻能、欲安可之母布禰波云云。奴婆多麻乃、欲流波須我良爾云云。奴婆多麻能。比等欲毛意知受云云。奴婆多

鴉乃、欲流見之君乎云云。同卷第十七曰、奴婆多麻能、欲流乃比毛太爾云云。奴婆多麻之、欲波布氣奴良之、多末久之氣云云。奴婆多麻乃、伊米爾波母等奈云云。奴婆多麻能、都奇爾牟加比底云云。同卷第十八曰、奴婆玉乃、夜床加多古里。同卷第二十曰、奴婆玉乃、己與比能都久欲。古事記曰、奴婆多麻能云云。又曰、奴婆多麻能、久路岐美祁斯(衣)

烏播

日本書紀曰、烏播艶摩能云云。釋日本紀曰、私記曰、師說、烏扇之寶也 其色黑人除之。或說鴉羽也。或說夜之異名也。言只欲讀黑之發語也。奧義抄曰、かみをばむばたまといひ、よるをばぬばたまといへども、又みなむばたまとよめり。たゞくろき物を、むばたまといへば、よるもくろきゆへにていふ之。夕ぐれをすみぞめと云

加良須安布木

倭名類聚鈔曰、射干。射音夜、和名加良須安布木。本草和名曰、射干。和名加良須阿布岐

加良須阿不岐 天文写本和名抄　加良須安布支 本草類編　山阿不支 新撰字鏡　からすあふき

集註　本草類編曰、射干。和加良須安布支、三月三日採根陰干。延喜式卷第三十七曰、典藥寮。諸藩使、唐使夜干云云。各六斤。渤使、夜干云云各二斤。新羅使。夜干云云各五斤。諸國進年料雜藥。山城國、云云夜干各十五斤。攝津國、夜干五斤。伊賀國、云云夜干各十斤。伊勢國、夜干卅五斤。尾張國、夜干廿四斤。駿河國、射干云云各十斤。越前國、夜干廿斤。越中國、云云夜干各十斤。丹波國、云云夜干各十斤。出雲國、夜干二斤。石見國、射干一斤。備後國、夜干廿一斤。安藝國、云云夜干各三斤。周防國 夜干

藻塩草曰、射干からすあふぎ。山家集曰、蓬生のさることとなれや庭の面にからす扇のなぞしけるらん

卅斤八兩。紀伊國、夜干一斤九兩。讃岐國、夜干十五斤　【藥製】頓醫抄曰、射干。米ヲ洗タル白水ニヒタシ、一度アリテアブレ　【附方】頓医抄曰、クワット云テ、カスハキノ喉ニカタマリテ、ハカレスシテ可死ヲ治スル方、我カゲヲサ、セズシテ、カラス扇ノ根ヲ擣テ、ヨク洗テカスハキタラズシテサワヤキ、又死ベキモ生、又コレヲ、ツキシボリテ可レ食、物食ヌ病也。ツキシボリテ水ニ入テ、二三盃サラシテ呑也。暫アリテカスハキヲ吐、若其カナワズバ、女ノケガレノ物ヲス、ギテ呑也。其ヤマヌハ女ノ開ノ毛ヲ燒テ水ニ立テ呑也。中指ノヒシトウシロザマニモ、前ザマニモユヒ合テ、二爪ノイタヾキヲ一火燒也

美奈之古久佐（ミナシコグサ） 本草和名

【漢名】白薇 本草　【今名】フナハラ

證類本草曰、圖經曰、白薇。莖葉俱靑頗類ニ柳葉ニ、六七月開ニ紅花ヲ、八月結レ實。根黃白色類ニ牛膝ニ而短小

【一名】久呂女久佐 本草和名曰、白薇。和名美奈之古久佐、一名久呂女久佐、一名阿末奈　阿末奈 見上　美那之古久佐 倭名類聚鈔曰、白薇。和名美那之古久佐、一云久呂久佐、一云阿末奈　久呂久佐 見上　夜恵彌 新撰字鏡曰、白薇。夜恵弥、一云久留奈　久留奈 見上　美奈之己久佐 本草類編　みなしこ草 言塵集曰、

みなしこ草とは、白薇と書り。又曰、みなしこ草とは、みなし子によそへ譲り

集註

本草類編曰、白薇。和久呂久佐、又美奈之己久佐、三月三日採根暴干。延喜式巻第三十七曰、典薬寮。臘月御薬、白薇二両二分、中宮臘月御薬。白薇二両二分。諸國進年料雑薬。伊勢國、白薇一斤四両。伊豆國、白薇七斤。下總國云云白薇各二斤。近江國、白薇一斤十三両。若狭國、云云白薇各一斤。播磨國、云云白薇各二斤

形状

〇白薇ハ山中ニ多シ、宿根春苗ヲ生ズ、高サ一二尺、莖圓ク葉節ニ兩對ス、形狀柹葉ニ似テ小也 微毛アリ、夏梢葉ノ間花ヲ開三分許五出紫黒色、花後莢ヲ生ジテ蘿藦ノ實ニ似テ小ク内ニ絮アリ、秋冬苗枯ル、

一種柳葉ノ如キモノアリ

乃加々牟（ノカガム） 本草和名

漢名 白前 本草

今名 スヽメノヲゴケ

一名 乃加々毛 醫心方　能加加美 倭名　乃加加美 天文写本和名抄　加々美久佐祢 本草類編

證類本草曰、白前。唐本注云、葉似柳、或似芫花、苗高尺許、生洲渚沙磧之上、根白長於細辛、味甘

類聚鈔曰、白前。和名能加加美

集註

本草類編曰、白前。和加々美久佐祢、三月八月採根暴干

形状

〇白前ハ山中極テ多シ、一根叢生ス、高サ尺餘、葉柹葉ニ似テ小クカタク兩對ス毛ナシ、夏梢ノ葉間小枝出、五瓣白花ヲ開・大サ二三分、花後實ヲ結ブ、蘿藦子ニ似テ小

山、益軒本、若水本トモニ川ニ作ル

ク、內ニ絮アリ

比女加〻美（ヒメカヾミ） 本草和名　漢名 徐長卿 本草　今名 スヾサイコ

本草綱目、徐長卿。集解、恭曰、所在山●澤有レ之、葉似レ柳兩葉相當、有ニ光澤一、根如ニ細辛一微粗長黃色而有ニ臊氣一

一名 波奈和良 本草類編。倭名類聚鈔曰、徐長卿。和名比女加加美。本草和名曰、徐長卿、和名比女加〻美

加々毛 異本本草類編　フナワラ草 頓醫抄

集註 本草類編曰、徐長卿。和波奈和良、又比女加加美、三月採之

形狀 〇本草辨疑曰、フナハラハ葉柳ニ似テ、根細辛ニ似タル者ナリ。按、徐長卿ハ山野ニ生ズ、莖細クシテ高サ一二尺、葉節ニ兩對シテ柳葉ノ如ク、細小ニシテ鋸齒ナク、厚クシテ瞿麥葉ニ似タリ。夏梢ニ細枝出テ末ニ四五花ヲ開、大サ一二三分、五出黃紫色花莖弱シ、花後蘿藦ノ如キ細小莢アリ、內ニ絮アリ

獨活 本草　今名 シヽウド 證類

本草曰、獨活。圖經曰、春生レ苗ヲ、葉如ニ青麻一、六月開レ花、或黃或紫

形狀 大和本草曰、或曰、又シカ菜ニ似テ壯大ニ、莖根トモニ紫ニ、莖有レ毛無ニ香氣一者アリ。普救類方曰、しゝうとさいきさけみつから方苗を出す、草の高さ一二三尺 形うどによく似て、葉廣くやわらかなり、三年になりて莖高くのびて花を生ず。胡蘿蔔の花に似たり〇按、獨活ハ山中ニ多シ、苗葉土當歸（ウド）ニ似テ葉岐ヲナシ毛茸アリ、後莖ヲ

抽、秋高サ四五尺、梢ニ傘ヲ成小白花ヲ開、其根皮黒色、肉白色 氣味土當歸ト別也

正誤 按、上古ニ用ル獨活羗活ハ眞物ナルベシ。本草和名、倭名鈔、字鏡等皆獨活ヲ以テ宇止ニ充非也。後世ノ書、脩治纂要曰、獨活、都知多羅・宇登・莖ノ色黄ヲ蟠處ヲ獨活ト云、紫色テ根ノ末ノ細長キ處ヲ羗活云、土氣洗黒クサリタル處ヲ切捨テ剉焙ルト觀ユ。古ヨリ其誤ヲ傳エタルコ久シ。大和本草曰、ウド、日本ニ昔ヨリウドノ根ノ母ヲ獨活トシ、其根長キヲ羗活トス、今藥肆ニウルモノ是ナリ。本草辨疑曰、羗獨活和ト漢トハ微似テ大ニ別ナリ、又漢ニモ二品アリ、節アリテ鞭ノ如クナル者ト、節無ヌ黒皮ノ者ト也。節アル者眞ナルベシ、即羗活也 今渡ル中ニ竹節ノ者アリ、按古ェ和產ニ出ルモノ皆ウドノ根ニメ、眞ノ獨活ニ非ズ。本草啓蒙ニ、正保年中ヨリウドノ宿根ヲ獨活トシ、或ハウドノ全根ヲ獨活トスト云杜選也。本草類編曰、獨活、和川地太良、又宇止。二八月採レ根暴乾トミユレバ、古ヨリウドヲ以テ獨活ニ誤レル徵也。正保年中始ニ非ズ

○羗活 本草 ○和漢通名 **今名** ウドモドキ

本草綱目、時珍曰、易簡方云、羗活須ㇾ用下紫色ニメ有二蠶頭鞭節一者上ヲ **集註** 安房國風土記曰、平群郡石井、貢二獨活羗活一 **形狀** ○本草啓蒙曰、ウドモドキノ根暴乾スレバ紫色鞭節ニメ香氣アリ、本手ノ羗活ニ相似リ、氣味ハ少シ異ナレドモ代用テ可ナルベシ、苗葉花實ハ、ウドニ異ナラズ、惟莖葉ノ節深紫色、切レバ香氣アリ

宇多奈 本草和名 **漢名** 前胡 本草 **今名** ヤマゼリ

三月八日八三月八月カ二升一合雲州本二斤一分

證類本草曰、圖經曰、春生苗青白色、似斜蒿初出時有白芽長三四寸味甚香美、又似雲蒿七月內開白花與葱花相類、八月結實根細青紫色

【一名】乃世利　本草和名曰、前胡。和名宇多奈　一名乃世利

宇太奈　本草類編

うたな　瀬塩草曰、前胡。うたな、又のぜり

【集註】本草類編曰、前胡。和宇太奈、乃世利、三月八日採根暴干。延喜式卷第三十七曰、典藥寮。臘月御藥。前胡二兩。中宮臘月御藥。前胡十三兩二分。雜給料。前胡二斤八兩二分。諸司年料。齋宮寮。前胡二升一合。木工寮。前胡八兩。左右近衛府。前胡云云各十四兩。左右衛門府。前胡十一兩二分。左右兵衛府。前胡云云各一兩二分。遣諸蕃使、唐使。前胡云云各六斤。渤使。前胡云云各一斤。諸國進年料雜藥。大和國、前胡十二斤。伊賀國、前胡八斤。伊勢國、前胡一斤四兩。尾張國、前胡廿斤。相摸國云云前胡各一斤。下總國、前胡云云各二斤。常陸國、前胡四斤。近江國、前胡十斤五兩。丹波國、前胡云云各五斤。但馬國、前胡云云各一斤十兩。因幡國、前胡云云各二斤。出雲國、前胡云云各二斤。石見國、前胡一斤四兩。播磨國、前胡云云各四斤。美作國、前胡云云各二斤。備中國、前胡云云各二斤。安藝國、前胡云云各六斤。出雲國風土記曰、意宇郡　諸山野所在草木、前胡。飯石郡、所在草木、前胡。大原郡、所在草木、前胡。駿河國風土記曰、伊穗原郡岩淵、出前胡

【形狀】(一)倚治纂要曰、前胡。美豆波久佐、前胡ハ山中ニ多シ、苗高サ一尺許、葉獨活(シゝウド)ノ葉ニ似テ小ク毛ナシ、秋莖高サ五六尺ニ至、葉互生シ梢ニ白花傘ヲナシ羽

一兩ノ下三分ヲ脱ス

玄 京本貞享本ハ紫ニ作ル

於之久佐（オシクサ） 本草和名　**漢名** 玄參 本草　**今名** ゴマクサ

證類本草曰、圖經曰、玄參。二月生苗ヲ、葉似ニメ脂麻ニ、又如シ槐柳ノ、細莖靑紫色、七月開レ花靑碧色、八月ニ結レ子、黑色。其根尖長靑白乾卽紫黑。物理小識曰、淮玄參色黑、川玄參色白

一名 於之久佐 天文写本和名抄（）本草和名曰、玄參。和名於之久佐。倭名類聚鈔曰、玄參。和名於之久佐。新撰字鏡曰、玄參。於之久佐

押草 古語拾遺曰、以テ天ノ押草ニ押レ之

於之 本草類編曰、玄參、和於之

おしくさ 藻塩草曰、玄參。おしくさ

集註 延喜式卷第三十七曰、典藥寮。中宮臘月御藥。玄參一兩。雜給料。玄參五兩一分。諸司年料、齋宮寮、玄參三兩三分。内匠寮、云云玄參各三兩。遣諸蕃使、唐使。玄參云云各二斤。諸國進年料雜藥。攝津國、玄參云云各三斤。伊賀國、玄參云云各八斤。尾張國、云云玄參各十二斤。近江國、玄參十三斤。若狹國、玄參一斤二兩。丹波國、玄參四斤。出雲國 玄參一斤十兩。播磨國、玄參一斤十四兩。安藝國、玄參云云各三斤。紀伊國、玄參云云各一斤。讚岐國、玄參云云各六斤。出雲國風土記曰、意宇郡、所在草木、玄參。仁多郡、所在草木、玄參

形狀 ○玄參ハ山中ニ生ズ、春苗ヲ生ズ、莖高サ四五尺、莖方ニメ、莖葉共ニ胡麻ニ似テ、葉ニ毛ナク厚シ、亦ウツボ草ノ葉ニ似、厚ク對生シ、細鋸齒アリ、又トラノヲ（兎兒尾）ノ葉ニ似タリ、秋梢ニ穗ヲナシ、胡麻花ニ似テ短ク厚キ花ヲ開、靑黃色、紫花ヲ開クモノハ葉ニ毛アリ、根ハ天門冬ノ如シ

廣、盧混ゼリ益軒本ハ凡テ盧ニ作ル

久呂久佐（クロクサ）本草和名　漢名 漏盧 本草　今名 ヒキヨモギ

本草綱目、漏蘆。集解、保昇曰、葉似ニ角蒿一、六月七月采レ莖日乾、黒ニ於衆草一ヨリ

一名 阿利久佐 本草和名曰、漏蘆。和名久呂久佐、一名阿利久佐　久魯久佐 倭名類聚鈔曰、漏蘆。和名久魯久佐、一云安里久佐　安里久佐 見上　安里久佐 天文写本和名抄　奈ゝ美久佐 新撰字鏡曰、漏蘆。奈ゝ美久佐　ありくさ 藻塩草曰、漏蘆。ありくさ

集註 本草類編曰、漏蘆。和久呂久佐、又云安利久佐、八月採根陰干。延喜式卷第三十七曰、典藥寮。臘月御藥。漏蘆四兩。雜給料、漏蘆六兩。遣諸蕃使、唐使。漏蘆云云各二斤。渤使、漏蘆云云各一斤。諸國進年料雜藥。山城國、漏蘆云云各八斤。攝津國、云云漏蘆各五斤。近江國、漏蘆九斤。若狹國、漏蘆云云各二斤。丹波國、漏蘆十三斤。美作國、漏蘆云云各六斤。備前國、漏蘆七斤。伊豫國、漏蘆云云各三斤

形狀 ○ヒキヨモギハ艾ニ似テ葉薄ク黄ヲ帶柔カ也。苗高二尺許、夏梢ニ豆花ノ如キ黄色ナル花ヲ開キ、花蕚細キ莢ヲ結ヒ、縱ニ稜アリ。大サモミノ如シ

知ゝ乃波佐久（チヽノヘグサ）本草和名　漢名 紫參 本草　今名 ハルトラノヲ

証類本草曰、唐本注云、紫參。葉似二羊蹄一紫花青穗、皮黑肉紅白肉淺皮深所在有レ之〇倭名類聚鈔曰、紫參。和名知知乃波久佐

形状 本草類編曰、紫參。和知々乃波久佐、三月採レ根火炙使紫色

〇紫參、深山ニ生ズ、葉伊吹トラノヲニ似テ短ク叢生ス、早春葉未レ出先ニ、中心ヨリ三四寸ノ莖出、葉互生シ、梢蓼ノ如キ穗ヲナシ粉紅花ヲ開、其根連珠ヲナシ、皮褐黑色ニシテ肉紅紫色也

遠志

今名 スヾメハギ

一名 鎌倉遠志 福田方

集註 本草彙言曰、遠志。有二大葉小葉二種一、倶ニ三月開レク花ヲ、大ナル者ハ葉大ニシテ花紅シ、小ナル者葉小ニシテ花白シ莖似タリ二大青一

美濃國風土記曰、渥美郡森郷出遠志

薬製 頓医抄曰、遠志、カフ并ニ中コヲ捨テ、ハシカミヲツキシボリタル汁ニヒタシテ、イリカハカスベシ

形状 福田方曰、遠志。味辛ク痹（ヒリメク）者好シ、此物ハ僞者アリト云ヘリ。唐物ハ大（フトク）長ク肉厚シ、日本物ハヲトレリ。但鎌倉遠志ト云者上品之。水ニ浸テ、ヤハラゲテ、槌ニテヤハリツ、敲ヒシキテ、心ヲ去テ炙テ使ヘ〇脩治纂要曰、遠志、コクサ日本ニアリ、コクサト云葉コマカ也。ウス紫ノ花サク、三月ニ根ヲ採ルト〇遠志ハ山中ニ多シ、陽地ニ生ズルハ苗葉倶ニ小ク、陰地ニ生ズルハ大也。高三五寸、葉互生シテ胡枝子（ハギ）ノ葉ヲ一葉附タルガ如シ、小ニシテ三四分、春穗ヲナシ、花ヲ開、紅紫色、胡枝子（ハギ）ノ花ノ如、形状雀ノ飛ニ似タリ

古名錄草部卷第十六　終

古名録草部巻第十七目録

陰草類

加乃仁介久佐（カノニゲグサ） 人參
加久末久佐（カクマグサ） 黄連
於保恵美（オホヱミ） 黄精
乎止乎止之（ヲトヲトシ） 天麻
也末止利久佐（ヤマドリグサ） 淫羊藿
止利之阿之久佐（トリノアシクサ） 升麻
於介和良比（オミワラビ） 貫衆
吉祥草

通計八種

古名錄草部卷第十七

紀藩　源　伴存撰

陰草類

加(カ)乃(ノ)仁(ニ)介(ゲ)久(ク)佐(サ) 倭名類聚鈔 【漢名】人參 本草 ○今通名

群芳譜曰、大抵人參春生ズ苗ヲ、多シ於深山背陰椴漆樹下潤溼處ニ、初生小者三四寸許一椏五葉、四五年後兩椏五葉、未ダ有ニ花莖一、十年後生ニ三椏ヲ、年深者生ニ四椏ヲ、各五葉中心生ニ一莖ヲ、俗ニ名ヅク百尺杵ト、三四月有レ花、細小如レシ粟ノ、蕊如レシ絲ノ、紫白色、秋後結ブレ子ヲ七八枚、如ニ大豆ノ一、生ハ青熟シテ紅

【一名】加乃爾介久佐 本草和名曰、人參。和名加乃尓介久佐、一名尓已太、一名久末乃以 爾己太 上見 久末乃以 上見 久万乃伊 新撰字鏡 爾古多 上同 久末乃伊 倭名鈔曰、人參。和名加乃仁介久佐、一名久末乃伊○按ニ久末乃伊ハ其味熊膽ニ似タルヲ云 加乃爾計久佐 本草類編 久萬乃伊 一本和名抄 鹿(カノ)䶣(ニケ)草(クサ) 塵添壒囊抄卷

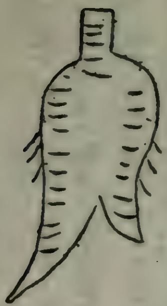
二斤　京本貞　享本三　斤下丹　波國同　ジ　四十　京本貞　享本卅

第九日、人參ヲ鹿蹄草(カノニゲクサ)ト云ハ、鹿ノニゲテ行跡、路コトニ好喰(コノミクラフ)草也。故ニ鹿蹄草ト云也。誤ニテト云ベキヲ、人誤テニレト云也

かのにけくさ

藻塩草曰、人參。かのにけくさ

集註 續日本紀卷第十三曰、聖武天皇天平十一年十二月戊辰、渤海使已珍蒙等拜朝ヲ、上其王啓并方物ヲ、其詞曰云云并附ニ人參三十斤云云ヲ。延喜式卷第三十七曰、典藥寮。諸國進年料雜藥。伊勢國、人參二斤八兩。甲斐國、人參四斤。陸奥國、人參四十五斤。丹波國、人參二斤。美作國、云云人參各二斤。伊豫國、人參九斤。太宰府、云云人參各廿斤。出雲國風土記曰、秋鹿郡凡諸山野所在草木云云人參云云。駿河國風土記曰、伊穗原郡古國府、出云云人參黃芪等。主藥寮富士郡出云云人參云云。職人尽歌合曰、くすりうり、御藥なにか御用候。にんじん、かんざう、けいしん候。ちんも候。塵添壒嚢抄曰、人參一分粉ニスベシ



形狀 頓医抄曰、人參堅重濕ヘルヲ可取、カブヲ捨ヨ、キザミアブレ。福田方曰、人參芦頭ヲ去、ヨロヅヲハカブトヨム、此フトミヨリ上ノ、ホソキヲイムソノ所也、食之ハ反吐ノ病ヲ生スル也。故ニ去之方云、堅ク實入テ塊大ニ紫暈トテ切目ニムラサキ色ニ輪ノマハリタルヲ上品トス。虚泡者ハ下之。又和人參淡ク心無クメ下品ノ者也。物ハソレナレドモ、土地ノ地味下品ニメ如此也。或云、心無ヲバ齊苨(サイデ)トスト雖モ、其ハ花ガ人參ニカハル也。鎌倉人參云物スコシ良シ、洛陽邊ノ者ハ虚泡ニメ不好、齊苨ノ類カ

〇本草辨疑曰、人參上中下數種アリ、潤アリテ色飴糖ノ如ク重ク

太キヲ極品トシ、細キ者次レ之、輕虛ナルヲ爲レ下、細小ナル者ニ聚テ形チ大人參トナスアリ、是又堅實ナルヲ良トシ、輕虛ヲ次トス、最下ハ重キヲ貴ブユヘニ鉛ヲ中ニ孕セテ重クナシ、或ハ一煎メ其汁ヲ取用ヒ跡ノ煎シ査ヲ乾メ渡ス、本綱ニ湯參ト云、和俗ウツカトモ、又フクトモ云ナリ〇折ルト云者アリ、元ハ大人參梢ノヲレタル者、又ハ細クメ大人參ト云難キ者ヲ、折レ人參ト名テ渡ス。今ハ皆束ネテ大人參ニ作ル、故ニ本折希ナリ。今アル者ハ鬚ノ中ニテ少シ太キヲ折ト云〇鬚人參ト云者アリ、極細ニメ毛ノ如キ者ナリ、性能メ大人參ノウツカヨリモ遙ニ優レリ、小人參トモ云〇藥鋪ニ大人參上品ノ者ヲ土佐ムキト云、皆一本物ニテ希ナル者也。此名アルコハ、長澤道壽土佐ノ侍醫タリ、諸藥上品ニアラザレバ病ヲ治スルコ不レ能ハト知テ、極品ノ者ヲ撰テ藥草ニ精審也。故ニ沈痾ヲ愈メ世ニ名アリ、其餘薫今ニ殘テ、土佐ヘハ上品ニアラザレバ下ラズ。故ニ上參ヲ土佐ムキト云フ〇別ニ唐人參ト云者アリ、唐人船ニ持來ル、形大ニメ皆一本物也、性重ク色朝鮮ヨリウスクウルム、味朝鮮ニ不レ及、口中ニ香氣ナシ

【正誤】篤信大和本草ニ、延喜式ニ所載ノ人參ハ沙參ナルベシト云非也。人參ハ上古既ニ日本ニ產ス。駿河國風土記曰、富士郡早田山貢人參、白朮、香附子、恰越夷域貢。新撰字鏡曰、莨ハ七失反、生山ニ、其ノ味ヒ甚ク苦シ、人能ク食ツ尓古多、東人ノ云加乃尓介、味苦ハ竹節參ノ味也〇爾雅曰、苨菧苨、註菧音底、疏、郭云、薺苨也。本草薺苨、陶註云、根莖苨、即薺苨ニ都似レ人參ニ而葉小異根味甜。字典曰、菧、集韻典禮切、音邸、又集韻、軫視切、音旨、廣韻作シテソバナ也　字鏡又曰、人參。久万乃伊、有人云、加乃尓介久佐。本草和名曰、人參。和名加乃尓介久佐、一名尓己太、一名久末乃以。即人參ノ古ニ本邦ニ產スルノ明證也。本草類編曰、人參。味甘微寒溫無毒、和加乃尓計久佐。又尓己太、又久末乃以、二月四月八月上旬採根、以竹刀削暴乾、無令見風〇蘭山ノ說ニ、人

參ハ松岡ノ時ヨリ知レタリト云非也。天和元年ノ印本本草辨疑ニ曰、小人參コニンジン、薩摩人參ト云。元モト薩摩ヨリ出タル故也。今ハ諸方ヨリ出之。莖葉花實ノ形・本人參ト一同ニシテ三椏五葉也。根ノ形異ニシテ味甚苦シ。橡トチノ木橡ハドングリ也トチハ七葉樹也ノアル下ニハ必生ズト云フ。古ヨリ人參ノ代ニ用之。又人參注曰、莖土ヨリ一寸尺誤程延テ三椏生ジ、長サ四五寸、椏ノサキニ五葉アリ、小楓楓和產ナシ、此ニ楓ト云ハモミチ也ニ似タリ。中ニ一莖直ニ上テ、長五六寸、白花アリ、紫花アリ、結實生ハ青ク、熟紅ナリ。此草道伯ノ藥園ニアリ、葉嚙カンデミレバ朝鮮人參上品ノ者ト味毫厘モ異ナラズ、眞ノ草ナルベシ、此種紀州熊野ヨリ得タリ熊野トチ人參也。卽竹節參 觀此則松岡ヨリ已前、人參ノ世ニ出タルヿ甚鮮明也

加久末久佐（カクマクサ） 本草和名 　漢名 黃連 本草 　今通名

物理小識曰、黃連葉似テ小芹ニ而冬不レ凋、但其味更苦耳

一名 加伊末久佐 本草類編 　かくまくさ かくまくさ 藻塩草 　かくも草 童蒙抄

集註 倭名類聚鈔曰、黃連。和名加久末久佐

藻塩草曰、黃連。

本草類編曰、黃連。和加久末久佐、又云、加伊末久佐、二月八月採之。賦役令曰、其調副物正丁一人云云黃連二斤。令集解曰、穴云、此進ニ黃連ヲ染草ノ料也。延喜式卷第三十七曰、臘月御藥。黃連十兩。中宮臘月御藥。黃連一兩。雜給料。黃連五斤八兩。諸司年料雜藥。齋宮寮、黃連一兩二銖。木工寮、黃連云云

黃連ノ下斤兩ノ目脫セルカ

各二斤。左右近衞府、黃連云云各十四兩。左右衞門府、黃連云云各二分。渤諸蕃使。唐使、黃連云云各六斤。渤使黃連云云各二斤。新羅使。黃連云云各一斗。諸國進年料雜藥。近江國、黃連二斤十四兩。信濃國、黃連十斤。越前國、黃連五十七斤。加賀國、黃連七斤。能登國、黃連三斤。丹後國、黃連卅八斤十四兩二分。但馬國、黃連十八斤三兩。美作國、黃連十斤五兩。備中國、黃連卅二斤。安藝國、黃連四斤十兩

形狀　童蒙抄曰、うかりけるみぎはがくれのかくも草葉末も見えずゆきかくれなん○黃連ハ深山樹下ニ生ズ、葉芹葉ニ似タルアリ、又菊葉ニ似タルアリ、又全テ細ニメ芹葉ノ細キガ如ナルアリ、何レモ葉厚ク深綠色、冬不凋、正月叢中ヨリ二三寸ノ莖ヲ抽、五瓣白花ヲ開

藥製　福田方曰、黃連ヒゲヲケヅリ去テ、切テソロヒテ使ベシ。又洗テヒゲヲ去テ、切リ炙テモ使ベシ。目ノ藥ニ入ニハスグナルヲ、アラ皮ヲケヅリ去テ、細ニエリ取テ、剉テスリテ、三重ノ帛（フクサモノ）ニテフルウテ、ヌスルコト至極メ、又フルウコト度々セヨ

於保惠美（オホヱミ）　倭名類聚鈔

漢名　黃精　本草

今名　ナルコユリ

義經記曰、大ゑみにゑみたるつらを見れば、あまりにうとましくぞありける○證類本草曰、黃精。陶隱居云、今處處有ㇾ之、二月ニ始生ヘ、一枝多葉　葉狀似ㇾ竹而短、黃精根如二鬼臼黃連一大節ニメ而不ㇾ平、陳藏器曰、其葉偏生ㇾ不ㇾ對者爲ニ偏精一

一名　大蘵（オホミ）　按ニ日本書紀卷第二十九云、天武天皇白鳳二年二月丁巳朔癸未、天皇命ニ有司一、設ニ壇場一、即ニ帝位於飛鳥淨御原宮一、立ニ正妃一爲ニ皇后一、云云次夫

人蘇我赤兄大臣女大蕤娘生二一男二女一云云。續日本紀卷第九云、元正天皇神龜元年秋七月庚午、夫人正二位石川朝臣大蕤比賣薨。三代實錄卷第二十云、淸和天皇貞觀十三年閏八月廿九日壬申、隱岐國正六位上水若酢神、無位日乃賣神、並從五位下。延喜式卷第三云、名神祭二百八十五座。云云水若酢命神社一座云云已上隱岐國。同神名記云、隱岐國穩地郡、水若酢命神社名神大。日本書紀云、水派、此云美麻多。延喜式卷第三曰、名神祭、水尾神社二座、或水作三、已上近江國。倭名抄、居宅具曰、水門。日本紀私記云、水門、美止。同國郡部曰、信濃國、美乃知。釋日本紀云、師說、蕤或爲姓姓讀美、蕤汝誰反、說文草木華垂貌也。トミユレバ大蕤ハ於保惠美ノ惠ヲ省シテ明白也。新撰字鏡曰、嗎。許延反、笑貌、和良不、又惠牟

阿末奈 本草和名曰、黃精。和名阿末奈、一名也末惠美 也末惠美 見上 夜末惠見 倭名鈔曰、黃精。和名於保惠美、一云夜末惠見 夜萬惠美 一本和名抄 安末奈久佐 本草類編 也末惠美 同上

於保惠比 同上 安万奈 新撰字鏡曰、黃精。安万奈、又云惠弥[illegible] 惠彌 見上 おほゑみ 藻塩草曰、黃精。おほゑみ

集註

本草類編曰、黃精。和名安末奈久佐、又也末惠美、又於保惠比。二月採根陰乾。出雲國風土記曰、意宇郡、凡諸山野所在草木云云黃精。仁多郡、凡諸山野所在草木云云黃精。飯石郡、凡諸山野所在草木云云黃精。延喜式卷第三十七曰、典藥寮。諸國進年料雜藥。下總國云云黃精云云各二斤。越前國、黃精十二兩。出雲國、黃精二斤。美作國、黃精三斤十兩。備中國云云黃精各五斤。殿中申次記曰、三月黃精一籠、例年進上之、仍

甚群ニ
本其
作ル

御太刀被下之八瀬童子

形狀 ○黄精ハ深山樹陰ニ生ズ、苗高サ二尺許 葉竹葉ニ似テ軟也。春夏ノ間、葉間細莖ヲ抽、花下垂ス。形狀萎蕤花ニ同メ青白色、其根薑ノ如シ。和産皆偏精也

乎止乎止之（ヲトヲトシ） 本草和名　**漢名** 天麻 本草　**今名** ヌスビトノアシ　**一名** 加美

證類本草曰、圖經曰、赤箭其ノ苗獨莖如ニ箭簳ニ、葉生ニ其端ニ、四月ニ開ク花ヲ、簳葉俱ニ赤シ、實似ニ枯苦楝子核ニ作ニス五六稜ヲ、中ニ有レ肉如レ麪ノ、其ノ根大サ類ニ天門冬ニ惟タ無ニ心脉ニ耳

乃夜加良 倭名類聚鈔曰、赤箭。和名乎止乎止之、一云加美乃夜加良、今昔物語曰、箭柄をぬきて鏃を穴にふかく打入ければ

箭柄 駿河國風土記曰 廬河（スルカ）郡箭柄墳、白鳳年中有ニ一樵翁ニ、食レ之絶レ粒、恰如ニ仙客ニ、歸歷ニ九旬ニ、其步行一日期ニ二百里ニ、隣國自在也。白鳳十二年癸未十月朔、至ニ一原之巖窟ニ、忽不レ見ニ其跡ニ、行人咸ニ甚奇異ニ所レ殘所レ携右手之箭柄而已、故國造堅レ之埋ニ其箭柄ニ、日ニ箭柄墳ニ。樵翁不レ委ニ其姓氏ニ。伊勢貞丈雜記、弓矢之部曰、蟇目からからとは篦の事之。又曰、大的から笠懸からかりまたからなどゝ云事、からとは矢からの事之。すなはち篦の事之。矢にする竹を云之

加美乃也 本草和名曰、赤箭。一名鬼督郵、一名鬼箭。和名乎止乎止之、一名加美乃也

止知之禰 本草類編　**川地止知** 同上　**曾止之比** 同上

集註 本草類編曰、天麻。和止知之祢、又川知止知。五月採根暴干。出雲國風土記曰、飯石郡、凡諸山野所在草木云云赤箭。延喜式卷第三十七曰、典藥寮。諸國進年料雜

薬。大和國、鬼箭二升。丹波國、鬼箭一斗三升三合。出雲國、赤箭一合。播磨國、云云鬼箭各四斤。類聚雑要抄曰、五薬。赤箭、人參、伏苓、石菖、牛黄

形状 本草類編曰、鬼督郵。和曾止之比、又乎止乎止之。形如午膝取之陰干○本草辨疑曰、天麻。唐アリ和アリ、根ノ形チ一様ナリ、奥州ヨリ多コレヲ出ス。莖青ク赤ク、長一二尺、大サ指ノ如ク、花ハ葱ヒトモジノ花ニ似テ一莖一花アリ、枝葉ナシ。根扁ニシテ長短不レ定、根色ウス赤ク、乾ケバ黒シ、根下ニ小子アリ、方言ニヌスビトノアシト云。按、花ハハマウツボノ穂ニ似リ

也末止利久佐（ヤマドリグサ） 本草和名 **漢名** 淫羊藿 本草 **今名** イカリサウ

本草綱目、淫羊藿、集解、頌曰、葉青似ニ杏葉一、上ニ有レ刺、四月開ク白花一、亦有ニ紫花者一、關中ニ呼ニ爲三三枝九葉草一。時珍曰、一根數莖、莖粗ニシテ如レ線、高一二尺、一莖三椏、一椏三葉、葉ノ長サ二三寸、如ニ杏葉及ビ豆藿ノ一、面光背淡シ、甚ダ薄ノ而細齒有ニ微刺一

一名 夜末止里久佐 倭名類聚鈔曰、仙靈毗草。夜末止里久佐。本草和名曰、淫羊藿。也末止利久佐

夜末度利久佐 天文寫本和名抄　萬良太介利久左 同上　末良多介里久佐 倭名鈔曰、漢語抄云、仙靈毗草。末良多介里久佐

久波奈 新撰字鏡曰、淫羊藿。久波奈　佐木久佐 倭名類聚鈔曰、文字集略云、蒚。和名佐木久佐。日本紀私記云、福草、草枝枝相値葉葉相當也。按ニ佐木久佐ハ淫羊藿也。此草三枝

アリ、令義解卷第一云、三枝祭謂ル率川ノ社ノ祭也、以テ三枝ノ華ヲ飾テ酒罇ヲ祭ル、故ニ曰フ三枝ト也。延喜式卷第一云、三月祭三枝ノ祭三座率川社 三月淫羊藿ノ花ヲ以テ飾ニ酒罇ヲレル也 イカリサウ 三月開花。新撰姓氏錄云、三枝部連云云顯宗天皇御世、諸氏ニ賜ノ饗醼ヲ于時宮庭有リ三莖草、獻之ヲ因賜フ姓ヲ三枝部ノ造ト、按三莖草卽淫羊藿也

佐岐久佐 天文寫本 和名抄

佐伊久佐 倭名類聚鈔、國郡

部曰、加賀國江沼郡、三枝。佐伊久佐

三枝

萬葉集卷第五曰、父母毛、表者奈佐我利、三枝之、中爾乎禰牟登、愛久。同卷第十曰、萅去レハ、先三枝ノ、幸命在、後ニモ相ハ、莫戀吾妹。古事記曰、三枝之別。

延喜式卷第八曰、祝詞。萅日祭云云、福閇奉利。又曰、伊賀志御世ニ幸閇奉氏。○按佐岐久佐ハ扁柏沙參淫羊藿倶ニ同名也

佐以久佐 倭名抄國郡部曰、飛彈國大野郡、佐以久佐

形狀

○大和本草曰、淫羊藿。碇草ト云、畿內處々ニ多シ。地錦抄曰、淫羊藿。初春にはなさく、むらさき色と、白色と二種あり。草花には、くもきりさうとも、いかりさう共いふ○淫羊藿ハ山陰ノ地ニ生ズ、莖細クメウラジロノ莖ニ似タリ、高サ尺餘 三枝ヲ分チ、三枝ノ末ニ三葉附、杏葉ニ似テ剛シ、面ニ光澤アリ、三月莖中ヨリ細莖ヲ抽花ヲ開、イカリ鉄苗兒ニ似テ大サ錢ノ如ク、細瓣四ツニ分レリ、紅紫色ト白色トアリ、又無品モアリ

止利乃阿之久佐 本草和名

漢名 升麻 本草

今名 ミヅフデ

證類本草曰、圖經曰、升麻。萅生苗ヲ高サ三尺以來葉似麻ニ靑色

一名 宇多加久佐 本草和名曰、升麻。和名止利乃阿之久佐、一名宇多加久佐 止利乃

卅京本貞享本ニ作　四十貞享本卅

禰久佐 醫心方曰、升麻。止利乃祢久佐、又於之久佐 於之久佐 見上 鳥足草 新撰字鏡曰、升麻、鳥足草 止里乃阿之久佐 倭名類聚鈔曰、升麻。和名止里乃阿之久佐、一云宇太加久佐 宇太加久佐 見上 止利乃安之久佐 本草類編 うたかた草 言塵集曰、うたかた草とは和名云、升麻の事也 度利のあし久佐 蒲塩草曰、升麻。和名度利のあし久佐、うたかた草

集註 本草類編曰、升麻。和止利乃阿之久佐、二八月採根日乾用之。延喜式卷第三十七曰、典藥寮。元日御藥。升麻一兩。臘月御藥。升麻十兩二分。中宮臘月御藥。升麻一兩二分。雜給料。升麻十三兩二分。諸司年料雜藥。齋宮寮、升麻十一兩二銖。木工寮、升麻云云各三斤。左右近衛府、升麻云云各一斤。遣諸蕃使。唐使、升麻云云各六斤。渤使、升麻云云各二斤。新羅使、升麻云云各五斤。諸國進年料雜藥。大和國、云云升麻各八斤。攝津國、云云升麻各三斤。伊賀國、云云升麻各八斤。伊勢國升麻卅九斤二兩。尾張國、云云升麻各十斤。甲斐國升麻十斤。上總國、升麻三斤。美濃國、云云升麻各十斤。上野國、升麻三斤二兩。越前國、升麻六斤。丹波國、升麻云云各十斤。丹後國、升麻二斤八兩。但馬國、升麻六斤十兩。伯耆國、升麻卅斤。播磨國、升麻四十斤。美作國、升麻十斤。備前國、升麻三斤。備後國、升麻一斤。周防國、云云升麻各五斤。紀伊國、升麻十兩。阿波國、升麻十兩。讃岐國、云云升麻各廿斤。土佐國、云云升麻各四斤。出雲國風土記曰、楯縫郡、所在草木升麻䔲藶白朮藤李。神門郡、所在草木、升麻。仁多郡、所在草木、升麻。飯石郡、所在草木升麻

形狀

○升厤ハ山陰ノ地ニ生ズ、宿根春苗ヲ生ズ、高サ一二尺、莖細シ。三枝ヲ分チ末ニ三葉附、切レナキ地錦ノ葉ニ似テ堅ク、深綠色、夏一莖出、葉上ニ登リ枝ヲ分、九月淡紅白色ノ花ヲ開、白蘂ヲ吐シ短絲ノ如シ、冬苗枯ル、一種鳥足升厤アリ、下品ニシテ用ニ堪ヘ、此草ハ山中陽地ニ多シ、葉加條ニ似タル故ニムクノ葉升厤ト云

於爾和良比（オニワラビ） 本草和名　［漢名］ 貫衆 本草　［今名］ ホソバノキジノヲ

證類本草曰、圖經曰、貫衆。春生レ苗、赤莖大如レ蕨ノ、莖幹三稜、葉綠色似ニ小鷄翎ニ、又名ニ鳳尾草ト、根紫黑色形如シ大瓜ノ、有リ黑鬚毛ニ、又似タリ老鴟ニ

［一名］ 於迩和良非 倭名類聚鈔曰、貫衆。和名於迩和良非。本草和名曰、貫衆。和名於尓和良比　和良比 本草類編　於仁和良比 同上　くまわらひ 藻塩草曰、貫衆、くまわらび、又於尓和良比

［集註］ 本草類編曰、貫衆。和和良比 又云於仁和良比、二月八月採根陰干。延喜式卷第三十七曰、典藥寮 諸國進年料雜藥。播磨國云云貫衆各五斤。出雲國風土記曰、意宇郡 所在草木、貫衆。仁多郡、所在草木、貫衆

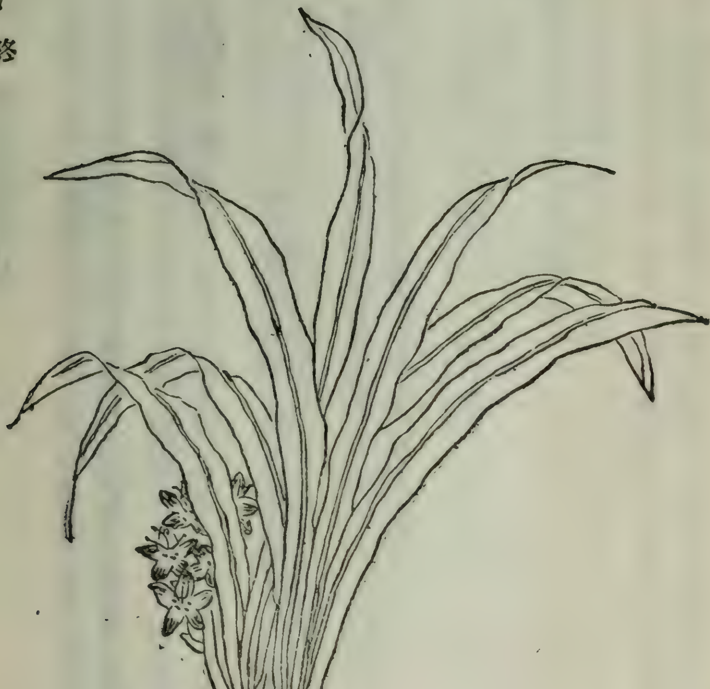
［形狀］ 深山溪澗陰地ニ生ズ、一根數十葉ヲ生ズ、ムカデグサノ葉ニ似テ、大ニシテ厚ク、尖長細鋸齒ナリ、根ハ黑褐色、長塊ヲナシ多ク細莖ヲ聚テ、ムカデグサノ根ノ如ニシテ大也

吉祥草 尺素往來 和漢通名也

花鏡曰、吉祥草。叢生シ畏レ日ヲ、葉似レ蘭而柔短、四時青綠ニシテ不レ凋マ、夏開ニ小花ヲ、內白ク外紫ニシテ成レ穗ヲ、結ニ小紅子ヲ。草花譜曰、吉祥少易生不レ拘ニ水土中石上ニ俱可レ種惟得レテ水ヲ爲レ佳。吉祥草ハ陰地ニ生ズ、葉短キ蘭ニ似テ柔軟、夏月小莖ヲ抽、穗ヲナシ五瓣ノ花ヲ開、紅子ヲ結ブコト花鏡如レシ所レノ說

草花譜圖

吉祥草花



古名錄草部卷第十七　終

古名錄草部卷第十八目錄

香草類

於保世里　當歸
美良乃爾久佐　細辛
あふひ　雙葉細辛
都知多良　土當歸
於无奈加都良久佐　芎藭
佐久　香附子
乃良衣　紫蘇　〇紫蘇子
衣　荏　〇於保衣乃美荏子　〇荏油
太宇安良良支　薄荷
都保久佐　積雪草
久佐乃香　芸香
布多末加美　杜衡
都岐爾久佐　及巳
乃世利　柴胡
與呂比久佐　白芷
久礼乃波之加美　山薑
以沼衣　香薷
曾々惠　荊芥
佐波阿良々岐　地瓜兒苗
零陵香　〇衣香附

加波美止利（カヘミドリ）　五節冠

通計二十四種

古名錄草部卷第十八

紀藩　源　伴存撰

香草類

漢名　當歸 本草　○今通名

於保世利 倭名類聚鈔

證類本草曰、唐本注云、當歸苗ニ有リ二種、於レ內一種ハ似ノ大葉芎藭ニ、一種似ニ細葉芎藭ニ、細葉ノ者ヲ名ニ蠶頭當歸ト、大葉者ヲ名ク馬尾當歸ト

一名　夜末世里 倭名鈔曰、當歸。和名夜末世里、一云於保世利、又云宇萬世里　宇萬世里 見上　也末世利 本草和名曰、當歸。和名也末世利、一名宇末世利、一名加波佐久　宇末世利 見上　加波佐久 同上　夜萬世利 天文写本和名抄　宇萬世利 同上　山世利 新撰字鏡曰、當歸、山世利　大芹 催馬樂

集註　本草類編曰、當歸。和於保世利、二月八月採根陰干。延喜式卷第三十七曰、典藥寮。元日御藥。當歸一兩。臘月御藥。當歸七兩。中宮臘月御藥、當歸五兩。雜給料。當歸三斤十五

兩。諸司年料雜藥。齋宮寮、當歸四兩二分。內匠寮、當皈云云各四兩。木工寮、當歸二斤八兩。左右近衞府、當歸二斤八兩。左右衞門府、當歸八兩二分。左右兵衞府、當歸八兩。遣諸蕃使。渤使、當歸云云各二斤。新羅使、當歸云云各五斤。諸國進年料雜藥。大和國、云云當歸各四斤。伊賀國、當歸十一斤。伊勢國、當歸四斤八兩。甲斐國、云云當歸各十斤。武藏國、當歸十四斤。常陸國當歸二斤十兩。飛驒國、當歸十斤。上野國、云云當歸各廿斤。但馬國當歸十斤。因幡國、云云當歸各十斤。出雲國、當歸一斤六兩。石見國、云云當歸各十五斤。播磨國、云云當歸各十斤。美作國當歸廿一斤。備中國、云云當歸各六斤。備後國、當歸六斤。安藝國、當歸云云各十斤。薰集類抄曰、薰衣香云云當歸云云已上各一兩。伊勢國風土記曰、安濃郡、出云云當皈。村主鄉、產當皈。山背國風土記曰、久世郡、貢當歸。出雲國風土記曰、神門郡、所在草木當歸。飯石郡、所在草木、當歸。和泉國風土記曰、大鳥郡、三箇原出當歸。日根郡賀美鄉、貢當歸。參河國風土記曰、彩原郡、貢當歸。加賀國風土記曰、加賀郡、貢當歸。駿河國風土記曰、鳥渡郡貢壁、產當歸。池田產當歸。供典藥之調。伊穗原郡古國府、出當歸。富士郡、出當歸。催馬樂曰、大芹。おほぜりぱ、くにのさたもの、こぜりこそゆでゝもむまし云云

形狀

頓醫抄曰、當歸、川當歸トテ香イツクシキ馬ノ尾ノヤウニワラ〳〵ト細キヲ可用、薄切テアブリテ粉ニスベシ。福田方曰、當皈麁（フトク）肥テ小根ハ馬尾ノ如ナル者上之。和ニハ常陸當歸ト云者上品也。同キ所ニ又馬尾當歸アリ。國ノ地味ニ依テ上下アル也。他所ノ者ハ皆虛軟（ウツケヤワラカ）ニ〆不及之、凡ソ淨洗好酒ニ一宿浸切テ炙テ使ヘ。又山當皈トテ極テ臭大（フトキ）者アリ、不足用也。本草辨疑曰、當歸、今藥家ノ者ハ山城大和ニ多作レ之出ス、又山ニ自然ト生スル者アリ。按ニ山城大和ニテ作

ルモノハ馬尾當歸也。川生者ハ鑱頭當歸也。二種倶ニ莖ハ相似タリ。莖紫黑色ナルハ馬尾當歸也、川生者莖綠色ニ〆紫色ヲ帶、葉ハ川芎葉ニ類〆長ク、南天燭葉ニ似テ細長ニ〆柔カ也。秋莖高サ二三尺、梢傘形ヲナシ花アリ、卽福田方ニ山當歸ト云此也

久佐乃香 倭名類聚鈔

漢名 芸香 本草

今名 ヘンルウダ

本草綱目曰、按沉括筆談云、古人藏レ書辟レ蠹用ニ芸香一謂ニ之ヲ芸草一ト、葉類ニ豌豆一作ニス小叢ヲ一、生ニテ蹙ニ嗅之ニ極テ芬香 秋間葉上微白如ニシ粉汚一ルカ。類豌豆ト云ハ、野豌豆、大巣菜ニ〆ノヱンドウ也

一名

くさのかう 榮花物語。倭名鈔曰、芸香、禮記注云、芸ハ香草也 和名久佐乃香○芸ハヘンルウダ也

草香 言塵集曰、草香とは芸と書り、世俗に大芹と云物也。又曰、大芹は草香と云草なり小大芹據レハ此ニ則草の香は當歸也。伊勢家集ニ、式部卿宮のぜんざい合に、草のかういろかはりぬるしらつゆは心おきてもおもふべきかな。トミユルハ全ク當歸ヲ云、當歸ハ秋ニ至テ黄ミ枯ル、芸香ハ四時不レ枯、秋ニ至テ色變ルモノニ非ズ、然レドモ和歌物語に草の香トあるハ皆大芹ニ〆、當歸ヲ云ル者也

草の香 藻塩草曰、草の香、芸とかけり、世俗には大芹と云物歟

集註

古今著聞集巻第十九曰、天祿三年八月廿八日規子内親王野ゝ宮にて御前の面に薄 蘭 紫苑 草香 女郎花 萩 などをうへさせ給て。榮花物語をんがく曰、きちかう、をみなべし、はぎ、くちば、くさのかうなどのをりも

の云云。同殿上の花見曰、八月卅日に中ぐう行啓あり、薫芳のこくうすき、にほひなどに、くさのかうの御ぞなどたてまつる、いとおかしうなまめかしく、めでたき御ありさまなり。袖中抄曰、野宮哥合には、此外に草香紫菀、瞿麥をそへてよめり

形狀

〇大和本草曰、ヘンルウダ、紅夷人ハ是ヲ用ニ食品ニ加ヘ、其香氣ヲ助ケ、他食ノ惡臭ヲ去コト、日本人山椒ノ葉ヲ用ルガ如シ。葉ハ細ニ〆、莖ノ本木ノ如シ、三四月ニ黄花ヲ開ク、四出ニ〆一片ノ間各一蕋ヲ出ス、花ノ心ニ實アリ、岩梨ノ實ニ似タリ。ヘンルウダハ四時不レ凋、苗高サ一二尺、多ク小枝ヲ分ツ、葉〆カドウサウニ似テ厚ク、秋ニ至テ葉上白粉ヲヌレルガ如シ、夏秋間梢ニ叢リ黄花ヲ開、五瓣大サ三四分、瓣内緣ヲ帶、瓣ノ末切リ裂タルガ如シ、中心ニ綠色ノ實ヲ結ブ外ニ砂アリ

芸香

ヘンルウダ



美良乃禰久佐 本草和名　[漢名] **細辛** 本草今通名

[一名] **比岐乃比太比久佐**

本草綱目。時珍曰、葉似ニテ小葵ニ柔、莖細根直ニシテ而色紫、味極テ辛キ者細辛也。通雅曰、細辛極細ニシテ而直深紫色、嚼レ之辛キコト甚シ於椒ヨリモ

本草和名曰、細辛。和名美良乃祢久佐、一名比岐乃比太比久佐 ○按ニ美良乃祢ハ即生根鬚韮根ノ如キヲ云 本草和名曰、韮。和名古美良。日本書紀ニ介瀰羅、古事記ニ賀美良 萬葉集ニ久君美良ト云此也 其根ノ味香アリテ辛キニヨリ美良乃祢久佐ト云 本草曰、韮。氣味辛微温濇、時珍曰、生辛温熟甘酸 ○比岐乃比太比ハ其葉形狀蟾蜍ノ類ニ似テ、根味亦蟾蜍ノ味ノ如ヲ云 倭名鈔云、蟾蜍。和名比木。本草蟾蜍。註ニ宗奭曰、眉間白汁謂ニ之ヲ蟾酥ト

彌良乃禰草 新撰字鏡曰、細辛。弥良乃祢草、汉似ニタリ地曰ニ ○按地曰ハ即杜衡ニシテ、福田方ニ石臼草ト云此也。地曰ト云ハ花ノ形臼ニ似テ地ニ附テサクヲ云

比木乃比太比久佐 倭名類聚鈔曰、細辛。和名美良乃祢久佐、一云比木乃比太比久佐

比支乃比太比 本草類編　**美也末奴奈波** 同上　**美也万奴奈者** 藻塩草曰、細辛。美也万奴奈者

[集註] 本草類編曰、細辛。和比支乃比太比、又美也末奴奈波。二八月採根干。延喜式卷第三十七曰、典藥寮。諸國進年料雜藥。伊勢國、細辛十一斤。武藏國、細辛廿斤。近江國、細辛廿六斤八兩。美濃國、云云細辛云云各卅斤。信濃國、細辛卅五斤。上野國、細辛六十四斤。越前國、細辛五斤。越後國、細辛云云各十斤。丹後國、細辛十五斤。但馬國、云云細辛各一斤十兩。出雲國、細辛一斤八兩。石見國、細辛云云各十

五斤。播磨國細辛五十五斤。美作國、細辛云云各十斤。備後國、細辛卅斤。安藝國、細辛十五斤。周防國、細辛一斤八兩。長門國、細辛七斤。阿波國細辛九斤。讚岐國、云云細辛云云各十斤。伊豫國、細辛云云各二斤。土佐國、云云細辛各二斤。出雲國風土記曰、意宇郡、凡諸山野所在草木、細辛。秋鹿郡、凡諸山野所在草木、細辛。楯縫郡凡諸山野所在草木細辛。神門郡、凡諸山野所在草木、細辛。飯石郡、凡諸山野所在草木、細辛。大原郡、凡諸山野所在草木、細辛

今案 本草啓蒙ニ延喜式ニ載ルハ、當時何ノ草ヲ以テ細辛ト爲シタルヤ詳ナラズ、眞ノ細辛ハ近來出タリト云。然レドモ大同類聚方ニ美良々祢、一名比支乃比多比、味辛久大ニ香之、三月開ク紫色ノ花ヲ、九月採根乎乾之用レ之トミエ（此書大同ヨリ後世ノ書ナレド采ニ其要ヲ）又延喜式中ニ、杜衡ヲ出シ、細辛ハ別條タレバ、式ニ出ルハ眞ノ細辛ニテ、杜衡ヲ混ゼル物トミユ。延喜式卷第三十七、典藥寮曰、凡應レ讀ニ醫經ヲ者、新修本草三百十日。續日本紀卷第三十九曰、桓武天皇延暦六年五月戊戌、典藥寮言ス、蘇敬ノ注、新修本草、與ニ陶隱居ガ集注本草ト相ヒ撿ルニ、增スコト一百餘條ヲ、亦今マ採リ用ルニ草藥ヲ、既ニ合ヘリ敬ガ說ニ、請フ行ヒ用ヒンコトヲ之、許シタマフ焉。延喜式、典藥寮、臘月御藥。細辛三兩。中宮臘月御藥。細辛五兩二分。東宮所レ須 細辛三兩三分ト覯ユ。諸國進ニ年料ニ雜藥中ノ細辛、何ノ草カ不レ知モノヲ以テ天子ノ御藥ニ供スベキヲヤ、從ニ古來ニ日本和氣、丹波ノ兩醫家アリ、天子ニ疑シキ物ハ奉ルベカラズ。續日本紀卷第二十曰、天平寶字元年十一月癸未、勅シテ曰、如聞、頃年諸國博士醫師、多非ニ其才ニ、託請得レ選、非ニ唯損スルノミニ政ヲ、亦无シレ益レ民ニ、自今已後、不レ得ニ更ニ然ルコトヲ、醫生者大素、甲乙、脉經、本草。同卷第二十四曰、天平寶字七年五月戊申、大和上鑒眞物化ス。和上者揚州龍興寺之大德也。又以ニ諸藥物ヲ令レ名ケ眞僞ヲ、和上一一以レ鼻ヲ別ツ之ヲ、

一無ニ錯失ー。古エハ唐宋ノ人、日本ニ來リ、日本ヨリ唐宋エ往事不レ絶。然則藥ノ眞僞モ自ラ明白ナルベシ。

福田方曰、細辛、細ク絲髮ノ如ク折ルニ裏白キ者好也。又石臼草ト云物コレニ似テ不辛也。先是ヲ嘗テ使ヘ

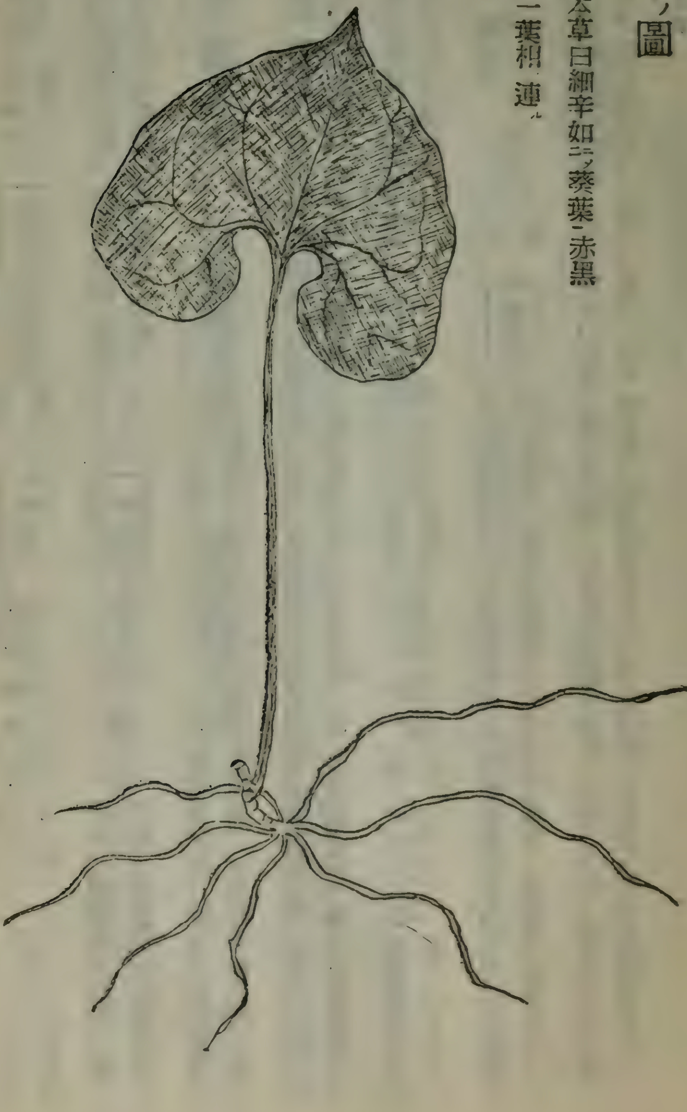
福田方ハ
天文四年
未六月日
長閒筆

【藥製】頓医抄曰、細辛。苗ヲステ、キザメ

【形狀】○本草啓蒙曰、眞ノ細辛ハ山上ノ麓赤瀧村ニアリ。按ニ赤瀧村ハ山上嶽ノ西北大天井ノ西也。眞物ヲ和州洞川燈籠窟ノ山林西ノノゾキヨリ出ル溪間極テ多ク、樹陰叢ヲナス。葉ハ加茂葵ニ似テ微長ク、一根一莖又二莖出ルアリ。其葉冬ニ至テ黃落ス。春夏根上花アリ、內紫ニシテ外靑ヲ帶、加茂葵ノ花ニ似テ微小、其根細白色、之ヲ嚼バ始不レ辛　暫ニアリテ甚辛辣ニシテ舌ヲ麻ス

細辛ノ圖

證類本草曰細辛如ニ葵葉ニ赤黑一根一葉相連ル



布多末加美（フタマガミ）本草和名　**漢名**　杜蘅 本草　**今名**　カンアフヒ

證類本草曰、圖經曰、杜衡。苗葉都似細辛、惟香氣小異、而根亦麄黃白色、葉似馬蹄

一名　布太末賀三 倭名類聚鈔曰、杜衡。和名布太末賀三、一云豆不祢久佐

豆不禰久佐 見上　豆布禰久左 一本和名鈔　都布禰久佐 本草和名曰、杜衡。和名布多末加美、一名都布祢久佐、字鏡曰、趺跗同、方俱反、足上也。脚踝也。又甫于反、本也。豆夫不志、又豆夫奈支、又阿奈比良。字典曰、趺。廣韻甫無切、集韻風無切、竝音膚、集韻與跗同、劉禹錫奚陟碑、鰝首黿趺○跗。廣韻甫無切、集韻、韻會風無切、竝音膚、足趾也。玉篇足上也。莊子秋水篇、蹶泥則沒足滅跗

川不禰久佐 本草類編　末多加介 同上　ほくさ 藻塩草曰、杜衡。ほくさ

石臼草 福田方 說見上　地臼 字鏡

集註　本草類編曰、杜衡。和川不祢久佐、又末多加介、三月三日採根熟洗暴干。延喜式卷第三十七曰、典藥寮。飛彈國、杜衡十斤

形狀　○杜衡ハ山中樹陰ノ地ニ多シ、四時ニ葉アリ、高サ二寸許、葉圓ク馬蹄ニ似テ小也。春根モトニ指頭ノ如キ花アリ、三瓣ニ〆壺ノ如シ、緣紫色、種類極テ多シ、葉ニ白斑アルアリ、花ニモ諸色アリ、其根細辛ヨリ太ク、味不レ辛

あふひ 源氏物語　漢名　雙葉 雷公炮製　今名　カモアフヒ

雷公炮製曰 細辛凡使二一棟ニ雙葉ノ服レハ之青レ人ヲ　一名　あふひ 枕草紙　もろかつら 源氏物語若菜曰、もろかづらおちばをなにゝひろひけん名はむつまじきかざしなれ共。按ニ大鏡ニさいの齋院より大宮にきこえさせ給へる。ひかり出るあふひのかげを見てしよりとしつみけるもうれしかりけり。御返し、榮花物語とのゝ御まへ、もろかづら二葉ながらに君にかくあふ日や神のしるしなるらむ。こをことうるはしう松のえだにつけさせ給へり。トミユレバもろかつらハアフヒナル明證也。新古今和哥集新鈔曰、もろかづらハあふひの事也。狭衣曰、ちいさきあふひを、御ぐしにつけさせたまへる云々よそにやはおもひなるべきもろかづら同じかざしはかげもはなれず。かつらにつけさせ給へり。藻塩草曰、葵もろかづら、言塵集曰、もろかづらとハ葵と桂と也。此二を賀茂の祭にかざしにさすを云　ひかげ草 仙覺萬葉集註釋巻第十九曰、ひかげとはあふひ也。葵は日の影のさせるかたにしたがひてなびきかたぶく故に、ひかげ草といふ。かつらげるとは、かつらにかけたる也。ひかげのかつらといふ是なり。藻塩草曰、葵、ひかげ草、是も異名とふるき物にあり。言塵集曰、日影草、葵の一名也　あふひ草 藻塩草曰、あふひ草、又たゞあふひとばかりも　二葉草 藻塩草曰、葵、云　もろ葉艸 一本四季物語曰、葵はもろ葉艸とて、こゝになん二葉のあふひありて、よ所のさとにはなきと也。藻塩草曰、葵、もろは草

おもひけり　續群本　おぼひたり
かへて　續群本　かくて

二葉草、神山によめり

かさし草

藻塩草曰、葵、かざし草、かざしの草とのもじありても

【集註】榮花物語根合曰、その四月まつりの日、あふひにつけておりさせ給へる。枕草紙曰、すぎにしかたこひしきもの。かれたるあふひ。又曰、見るものは云云雲林院、ちそくゐんなどのもとにたてる車ども、葵かつらもうちなべて見ゆ云云あふひよりはじめて、青くちばどものいとおかしく見ゆるに云云。源氏物語若菜曰、わらはべのもたるあふひを見給て云云。同まぼろし曰、あふひをかたはらにをきたり。歌林四季物語曰、廿七日といふになん、卯月のためとて、當社には宮ゐしつらひこしらへ、ことしのあふひ、いつにをとらめやは、齋院のみこぎも、ことしはいかゞなどものするも、かう〴〵しきかぎりなるべし。又曰、中の酉の日を御形の祭とものして、かみしもの御やしろいかめしくしつらひ云云つかさ〴〵のゑぼうしかうぶり淨衣のこし、まこもろはの草かつらの枝に、もろかづらにかけて、神わざつかうまつる。あふひをかくるは賀茂山しつはらよりたてまつれる事、御夢のつげなり云云さて祭過ぬれば、その御神がきにかけものせしを、主上よりはじめたてまつり、院宮、攝政、關白、大臣の御家にも、御身づからをはじめ、御かうぶり、御けし、みす、御調度にまでもかけ給ふ。さあれば一とせの御わざはひをやらひやらせたまひ、なるかみ、ないふるうわざはひをやむる御事なり。葵かづらはかれゆくまでも久しくかけをかれて、かう〴〵しく見えたり。よつて古六帖のうたに、玉だれにのちのあふひはとまりけりかれてものこれ人のおもかげ。とよみしも、あはれふかくおもひけり。又曰、とのもかもんのつかさ人、みすにきくかけなどし、五月のくす玉、あふひなどのかれのこりたるをとりかへて、すゝにしみたるをもとり

ふてゝ、菊にかゆるもおかしく、かう〲しくおぼひたり。加茂皇太神宮記曰、すべて賀茂祭には、葵桂を冠にかけ給ふ。そのかみ神のゆめの御つげ侍しゆへに、社家より兼日に奉るとか申。則冠にかざし給て詣給ふ也。主人乘車、琴持、菅笠、深沓をめし貝す。上達部軒をつらぬ。社頭にて奉幣神拜あり。葵桂を祢宜もちて奉れば、これを冠にかけ給ふ。東遊、求子、するが舞などある也、狹衣曰、あふひのかざりをさへめづらしうと心をつくし給ふさまども云云ちいささあふひを御ぐしにつけさせたまへる云云。徒然草曰、なにとなく葵かけわたして、なまめかしきに云云祭過ぬれば、後の葵ふようなりとて、ある人の見ずたるを、みなとらせられ侍しが、色もなく覺え侍しを云云。清輔家集曰、見あれの日、友だちのもとより、あふひをゝくりて云云。赤染衛門集曰、おなじ人のもとにあふひをやりたりしを云云まつりの日あるきんだちの、あふひにたちばなをならしていひたりし。公事根元曰、昔夢の告侍りしより、けふ人〻葵桂の蘰をかくるなり。野府記曰、寛仁元年十一月廿三日丁巳、可レ奉ニ賀茂之上下御社ニ、各〻有可レ被レ寄ニ一郡ヲ之御願書上云云。又云、但神田寺田勅旨田神山并採レ葵山之外云云。明月記曰、建永二年四月十七日賀茂祭云云上﨟三人令持葵、黄衣神人持之、諸大夫出幔門相逢上﨟神主、取葵授之杖に夾葵也。取之持參使座方、又諸大夫二人出各取之第二第三土高器葵桂也。年中定例記曰、四月朔日、賀茂の祭の前の日、賀茂衆葵桂進上、祭日御簾に葵の二またの葉をかけ、つぎ〲して、ながくして、かつらの枝にさしてかけらるゝ也。女中衆も男もかみにかけけり。私ざまにも同前。公任卿集曰、齋院にてもの申ける人、内わたりにまいれるよしきゝて、あふひにかきて付てつかはしける 年ふれどかはらぬものはそのかみに祈りかけてし葵成けり。高倉院升遐記曰、あ

ふひをとりちらしたるを見るも云々。實方朝臣集曰、はやう物いひし人に、かれたるあふひにつけて云々。中右記曰、嘉保二年四月十五日云云今日下社司等奉葵、仍万人挿冠社司申云、四月之中雖祭後必所獻葵之、近者則上皇御時永保四年四月十日卯日行幸獻葵、仍付件例獻之上社司等申云、御禊之日被葵供神之後獻所候也。其前全不可奉者、依不獻上下社司所申尤可然、是社習者。殿中申次記曰、三月廿一日葵桂、一合、御師、師久。同、同、森泰久

【形狀】 枕草紙曰、あふひいとおかし、祭のおり神代よりしてさるかざしとなりけん、いみじふめでたし。ものゝさまもいとおかし。又曰、あふひのちいさきもいとうつくし。弁内侍日記曰、加茂よりあふひどもまいりしを、大ばむ所にて、人々さうしにをさんとて、こあふひえりてゆよし云々。更級日記曰、曉より足柄をこゆ、まいて山のなかのおそろしげなる事いはむかたなし、雲はあしの下にふまる、山のなからばかりの木の下のわづかなるに、あふひのたゞみすぢばかりあるを、世はなれて、かゝる山中にしもおひけんよ、と人々あはれがる

都岐禰久佐（ツキネグサ） 本草和名

【漢名】 及巳 本草　【今名】 フタリシヅカ

本草綱目曰、恭曰、及巳生山谷陰處軟地、其草一莖莖頭四葉隙着白花、根似細辛而黒

【一名】 於宇 本草和名曰、及巳。和名都岐祢久佐、一名於宇　豆木禰久佐 倭名類聚鈔曰、及巳。和名豆木祢久佐　豆岐禰久佐 天文寫本和名抄　川々禰久佐 本草類編　つきくさ 藻塩草曰、及

木活本ハ芎己ニ作ル

巳つき くさ 【形状】本草類編曰、及巳和川々祢久佐、又云川立祢久佐、二月採之、狀似細辛（）及巳ハ山陰ノ地ニ多シ、春苗ヲ生ズ、圓莖節アリ、高サ一尺許、末ニ四葉互ニ生ス、茶ノ葉ニ似テ薄ク、柔ニシテ鋸齒アリ、即葉間ニ一二寸ノ穗ヲナシ黍粒ノ大サナル白色ノ花ヲ着ケ、後實ヲ結テ綠色穗下垂ス、秋冬苗枯ル、其根細辛ニ似テ辛味少シ

都知多良 本草和名　【漢名】土當歸 本草　【今名】ウド

救荒本草曰、杜當歸、生密縣山野中、其莖圓而有線楞、葉似山芹菜葉而硬、邊有細鋸齒、又似蒼朮葉而大、毎三葉攢生一處、開黃花、根似前胡根、又似野胡蘿蔔根、其葉味甜。本草綱目曰、近時江淮山中出一種土當歸、長近尺許、白肉黑皮、氣亦芬香、如白芷氣、人亦謂之水白芷、用充獨活、解散亦或用之、不可不辨。

【一名】宇止 本草和名曰、獨活。和名宇止。一名都知多良。美濃國風土記曰、独活（）古書ニ凡テ獨活ヲ宇止トス非也。獨活ハシ、ウド也。本草纂全云、土當歸稱獨活、質問本草ニモ獨活ヲウドトス、唐ニテモ誤リ用ルトミユ

豆知多良 倭名類聚鈔曰、獨活。和名宇止、一云豆知多良

豆知太良 天文寫本和名抄

川地太良 本草類編

宇度 新撰字鏡曰、獨活。宇度、又云乃太良

乃太良 見上

【集註】本草類編曰、獨活。和川地大良 又宇止、二八月採根暴乾。延喜式卷第三十七曰、典藥寮。元日御藥、獨活一兩。臘月御藥。獨活一兩。中宮臘月御藥。獨活一兩。雜

給料。獨活三兩。諸司年料雜藥。木工寮、獨活云云各五斤。左右近衛府、云云獨活各一斤四兩。左右衛門府、云云獨活各二兩。左右兵衛府、獨活云云各二兩。遣諸蕃使。唐使、獨活云云各六斤。渤使、獨活云云各二斤。諸國進年料雜藥。山城國、獨活十斤。大和國、獨活廿五斤。攝津國、獨活云云各五斤。伊賀國、獨活云云各廿斤。伊勢國、獨活卅五斤。尾張國、獨活十六斤。參河國 獨活云云各二斤。安房國、獨活四斤。下總國 獨活云云各五斤。常陸國、獨活二斤。美濃國、獨活十斤。越前國、獨活四斤。丹波國、獨活卅四斤。但馬國、獨活云云各五斤。因幡國、獨活云云各十斤。伯耆國、獨活十二斤。出雲國、獨活云云各十一斤。石見國、獨活云云各六斗。播磨國 獨活卅六斤。美作國 獨活九斤。備前國、獨活五斤。安藝國、獨活云云各十八斤。周防國、獨活八斤。紀伊國、獨活云云各十斤。讃岐國、獨活云云各廿斤。伊豫國、獨活十七斤。土佐國、獨活云云各二斤。美濃國風土記曰、其產物有独活。渥美郡佐原鄉出独活。義婦山出独活。山背國風土記曰、久世郡旦掠鄉貢云云獨活等。出雲國風土記曰、意宇郡諸山野所在草木獨活。神門郡所在草木濁活。飯石郡所在草木獨活。大原郡所在草木獨活。和泉國風土記曰、日根郡山野所在草木獨活。伊賀國風土記曰、伊賀郡嶋田山出獨活。阿拜郡柘植山出獨活。安房國風土記曰、平群郡貢獨活。駿河國風土記曰 鳥渡郡鯤沢貢独活。鷹河郡貢独活。

益頭郡羽食溪貢独活

乃世利（ゼリ）本草和名　漢名　**茈胡** 本草　今名　**鎌倉茈胡**

證類本草曰、圖經曰、柴胡、二月生苗甚香、莖青紫、葉似竹葉稍緊、七月開黃花、根赤色似前胡而強蘆頭有赤毛如鼠尾獨窠、長者好

一名 波末阿加奈 本草

和名曰、茈胡。和名乃世利。一名波末阿加奈

乃世里 倭名類聚鈔曰、茈胡。和名乃世里、一云阿末安加奈

阿末安加奈 見上

乃世理 天文写本和名抄

のくさ 漢塩草曰、茈胡。の世利、又のくさ

集註 本草類編曰、柴胡。和乃世利、又波末安加奈、二八月採根暴乾。延喜式卷第三十七曰、典藥寮。臘月御藥。茈胡八兩。中宮臘月御藥。茈胡二兩。東宮所須。茈胡一兩二分。雜給料。茈胡一斤十三兩三分。諸司年料雜藥。齋宮寮、茈胡五兩。內匠寮、茈胡云云各三兩。木工寮、云云茈胡各一斤。左右近衛府、茈胡云云各一斤八兩。左右衛門府、茈胡六兩。左右兵衛府、茈胡二兩二分。遣諸蕃使。唐使、茈胡云云各六斤。渤使、茈胡云云各一斤。諸國進年料雜藥。尾張國、茈胡云云各十二斤。美濃國、茈胡云云各十斤。丹波國、茈胡十二斤。播磨國、茈胡云云各十斤。備前國、茈胡十斤。安藝國、茈胡云云各六斤。阿波國、茈胡云云各一斤。伊勢國風土記曰、員辨郡雲宇途鄉貢柴胡云云等。安濃郡出柴胡。村主鄉產柴胡。美濃國風土記曰、其產物者柴胡云云。渥美郡森鄉出柴胡。佐原鄉、出柴胡。山城國風土記曰、久世郡宇治野出柴胡。山背國風土記曰、久世郡貢柴胡。出雲國風土記曰、嶋根郡、所在草木柴胡。和泉國風土記曰、日根郡信田鄉出柴胡。賀美鄉貢柴胡。伊賀國風土記曰、山田郡木代山、出柴胡。名張郡箕曲山出柴胡。賀羅坤土鄉出柴胡。參河國風土記曰。寶飯郡貢柴胡。駿河國形原郡貢柴胡。武藏國風土記曰、荏原郡貢柴胡。加賀國風土記曰、加賀郡貢柴胡。小濱鄉貢柴胡。

風土記曰、鳥渡郡產柴胡、玖乃出柴胡。伊福原郡岩淵出柴胡。美髮產柴胡。安弁郡產柴胡。鷹河郡貢柴胡。柏原貢柴胡。手越貢柴胡。益頭郡島田驛貢柴胡。朝夷田貢柴胡

【形狀】

○脩治纂要曰、意庵ノ唐デ見ラレタハ鎌倉柴胡ノ類也、大唐モ廣キ程ニ、國ニ依テ違ハンゾ。日本ニ昔ヨリ河原柴胡ヲ使付タハ誤也。本草辨疑曰、頃(コノゴロ)ロ銀柴胡ト云者ヲ渡ス、時珍曰、又一種似桔梗沙參ニ白色而大市人僞充ニ銀柴胡ニ殊無ニ氣味ニ此者ナルベシ、形白ク大ニシテ嚙ンデ見ルニ氣味ナキ者也○柴胡ハ山中陽地ニ多シ、宿根春苗ヲ生ス、韮葉ノ短ガ如シ、後莖ヲ抽綠楞アリ、秋高サ一二尺、莖ニ葉ヲ生ス、竹葉ニ似テ厚ク、柔ニシテ細ク、タテスジ多シ、梢ニ枝ヲ分黃花ヲ開ク、敗醬花ニ似痩細シ、冬月苗枯ル

於无奈加豆良久佐(オムナカヅラグサ)　本草和名

【漢名】　芎藭　本草

【今名】　ウシクサ

正字通曰、芎藭。藥名、出關中者名京芎。亦曰、西芎出蜀中名川芎、出天台名台芎、出江南名撫芎、皆因地而名以其根節似馬銜俗又以馬銜呼之、白實如雀腦狀者勝。本草時珍曰、以ニ胡戎者ニ爲レ佳、故曰ニ胡藭ト、古人因ニ其根節狀如ニ馬銜ニ謂ニ之馬銜芎藭ト、後世因ニ其狀如ニ雀腦ニ謂ニ之雀腦芎ト。頌曰、四五月生葉似水芹胡荽蛇牀輩作叢而莖細其葉倍香七八月開ニ碎白花ニ如ニ蛇牀子花ト、根堅痩黃黑色、關中出者形塊重實、作ニ雀腦狀ニ者、爲ニ雀腦芎ト最有レ力

【一名】　於奈加川良　本草類編○本草和名曰、芎藭。和名於无奈加豆良久佐。伊勢國風土記曰、員辨郡阿波野、此野出名草其名難知、土人者稱川芎

也、治産婦有験

川弓

和泉國風土記曰、日根郡青川弓

於牟なかつら

藻塩草曰、芎藭。於牟なかつら

集註　本草類編曰、芎藭。和於奈加川良三四月採根暴干。延喜式巻第三十七曰、典薬寮。臘月御薬、芎藭一兩。中宮臘月御薬、芎藭七兩三分。每年十二月晦日供殖薬様云云芎藭云云各四兩　雑給料、芎藭二斤十兩三分。諸司年料雑薬。齋宮寮、芎藭七兩三分。内匠寮云云芎藭各四兩。木工寮芎藭一斤八兩。左右近衛府、芎藭一斤五兩。左右衛門府、芎藭一斤二兩二分。左右兵衛府、芎藭六兩一分。遣諸蕃使。渤使、芎藭云云各二斤。諸國進年料雑薬。尾張國、芎藭廿二斤。遠江國、芎藭二斤。相摸國、芎藭廿斤。武藏國、芎藭五斤。下總國、芎藭八斤。常陸國、芎藭云云各七斤。近江國、芎藭云云各十五斤。美濃國、云云芎藭各十四斤。下野國、芎藭十五斤。加賀國、芎藭卅斤。丹波國、芎藭云云各十斤。播磨國、芎藭云云各二斤。伊勢國風土記曰、員辨郡雲宇途鄉貢云云川芎等。山背國風土記曰、久世郡貢川芎。伊賀國風土記曰、山田郡大木山出川芎民所用也。武藏國風土記曰、荏原郡貢芎藭。加賀國風土記曰、加賀郡貢川芎。小濱鄉貢川芎。駿河國風土記曰、烏渡郡産川芎。伊速原郡美髪産川芎。安弁郡産川芎。富士郡出川芎。鷹河郡貢川芎。柏原貢川芎

形状　○脩治集要曰、芎藭。江州棋本ニアリ、ウシ草ト云。本草辨疑曰、和ニ三産アリ、丹後ハ上品、山城大和次ㇰ之、豐後肥後ハ下草ニ二種アリ丹後根形如雀脳葉細シ、大和山城ハ大葉ナリ、今丹後ノ産希也、豐後肥後ハ雖アリテ小ニ〆輕虚ナリ、和名ウシクサト云、牛ノ諸病ニ最上ナリ、故ニ名ヲ牛草ト云、牛ノ多キ國ニハ必自ラ生ズル者ナリト、故ニ丹後ニ自ラ生ズトナリ○川芎ハ葉水芹ノ葉ニ似テ濶ク黄色ヲ帯、花ヲ開クコ又水芹ニ似タリ

二升一合雲州本一斤一分ニ改ム

藥製 福田方曰、川芎。肉白ノ油無ク、味辛甘者好シ、此者ハ大スカタフチコフノ如ニタアル之。方ニ芎藭トアルハ、只川芎ヲ使ベシ。川州ノ芎藭ナル故川芎ト云ナリ。和ニ芎藭ト名テ、小根ノ小ヲウル、人又本艸ヲ不知、是ヲ買テ使フ、尤誤レリ。下品ノ物之。頓醫抄曰、川芎大ナル吉細ニスリテキザミテ抹セヨ、若土氣アラバ洗ステ

與呂比久佐（ヨロヒグサ） 倭名類聚鈔

漢名 白芷 本草 ○今通名

證類本草曰、圖經曰、白芷。根長尺餘、白色麁細不レ等、枝幹去レ地五寸已上、夷生、葉相對婆娑、紫色、濶三指許、花白微黃、入レ伏後結レ子、立秋後苗枯

一名 加佐毛知 倭名鈔曰、白芷。和名加佐毛知、一云與呂比久佐

佐波會良之 醫心方曰、白芷。和名佐波會良之

佐波宇止 本草和名曰、白芷。和名加佐毛知、一名佐波宇止、一名与呂比久佐

集註 本草類編曰、白芷。和加佐毛知、又与呂比久佐、二月八月採根暴干。延喜式卷第三十七、典藥寮。元日御藥、白芷一兩。中宮臘月御藥、白芷十三兩二分。雜給料、白芷五斤一兩。諸司年料雜藥。齋宮寮、白芷二升一合。內匠寮、白芷六兩。木工寮、白芷云云各一斤。左右近衛府、白芷云云各一斤八兩。左右衛門府、白芷十四兩。左右兵衛府、云云白芷各一兩二分。遣諸蕃使。渤使、白芷云云各二斤。諸國進年料雜藥。大和國、白芷十八斤。伊勢國、白芷卅四斤。尾張國、白芷十斤。下總國、白芷云云各二斤。常陸國、白芷五斤。近江國、白芷九斤。美濃國、白芷廿斤。越中國、云云白芷各十一斤。丹波

國、白芷云〻各九斤。丹後國、白芷十斤。但馬國、白芷三斤五兩。出雲國、白芷云〻各三斤。播磨國、白芷十一斤。美作國、白芷十四斤。備前國、白芷四斤。備中國、白芷五斤。紀伊國、白芷一斤四兩。讃岐國、白芷云〻各六斤。薰集類抄曰、香粉方云〻白芷。出雲國風土記曰、神門郡、所在草木白芷。大原郡、所在草木白芷

【形狀】福田方曰、白芷。白色ニメ香キ者之。切テ焙テ使ヘ。或ハ火ヲ忌ト云所モアリ。極テ虫ニナリ安キ者之。細ニ破テ虫ヲヨク〱擇去テ使ヘ。又日本白芷ト云テウル者アリ、山當皈ヲ切リ、ニセテ石灰ヲ白クヌリテ狂惑ス、不可使之○本草辨疑曰、白芷近年和アリ、新タニ掘タル年ハ唐ニ形少モ不レ異、年ヲ經レバ輕虚ニナリテ木ノ様ナリ、莖ノ高サ五六尺、葉莖ノ形川芎ニ類メ甚大也。花實亦川芎ニ似テ大房ヲナス。葉ノ色芎ヨリウスシ、葉ニ香氣ナシ○白芷ハ葉大葉川芎ニ似テ長大也。夏莖高サ五六尺ニ及テ梢ニ傘ヲナシ、白花ヲ開

佐久（サク）本草和名　【今名】香附子 本草　○今通名

證類本草云、唐本注云、此草根名ニ香附子ト、所在有レ之、莖葉都似ニ三稜ー根若ニ附子ー

【一名】美久利 本草和名曰、莎草、根名香附子。和名美久利、一名佐久〔美久利ハ與三稜同名也

加宇不之 本草類編　ハマスケ 異本本草類編　かうふし 薰集類抄　シバクサ 福田方曰、香附子、和名ニハラクサトモ云、シハラクサ原稿ハラ

クサクとあれどクは衍たらん、今除

ハラクサ　バクサトモ云　見上

【集註】本草類編曰、莎草。和加宇不之、二月八月採根乾。薫集類抄曰、薫衣香云云香附子一兩。化度寺百和香云云香附子三兩。駿河國風土記曰、富士郡早田山、貢云云香附子、恰越夷域貢。類聚雜要曰、手筥一合、納霍香　香附子

【形状】薫集類抄曰、印香法、香附子一兩、去黑皮棟紅色者香附子、たゞのかうぶしは、はまふでといふ物のやうにてちいさし。福田方曰、香附子、莎草根ナリ、毛アラバ燒ステ後ニ一升許モ臼ニ打入テ、ヤハリツヽ舂テ、上ノクロ皮ヲ舂ムキテ、白クムケタラバ瓶ニ入テ、ヒソロフテ捨テ、白ミヲ取テ、少許又臼ニ入テ、今度ハツヨク舂ハタキテ、麁ニモ細ニモ羅ベシ、鐵器ヲ忌ベシ。頓醫抄曰、香附子、毛ヲ燒ステ、、少イリコガシ、細末スベシ○本草辨疑曰、香附子、藥舖ニ二種アリ、播州大坂ニテ搗碎出スハ色赤ク惡シ、京西陣ニテ搗碎出スハ色白ク良シ、安居院香附子トイフ、大坂ノ色赤ハ草ノ違タルニハ非ズ、乾ヤウノ惡キ也、掘出ク能日ニ乾トキハ中白ク、少乾トキハ内クミテ赤クナルナリ

久禮乃波之加美　本草和名

【漢名】山薑　本草

【今名】伊豆縮砂　ヤマシヤウガ

本草綱曰、山薑。集解、頌曰、嶺表錄異云、莖葉皆薑也。但根不レ堪レ食、亦與二豆蔻花一相似而微小爾。花生二葉閒一、作レ穗如二麥粒一、嫩紅色

【一名】加波禰久佐　與二女青一同

名也。本草和名曰、高凉薑、和名加波禰久佐、一名久礼乃波之加美乃宇止

加宇禮牟加宇　本草和名曰、豆蔻。和名加宇礼牟加宇乃宇止。按ニ加宇礼牟加宇ハ卽高凉薑之音也。古ヘ山

薑ヲ以テ高良薑トス。本草綱目頭痛ノ用藥ニ高凉薑此他ニモ出ト出、時珍モ高良當ニレ作ニ高凉ニ也ト云リ○豆蔻、本草ニ宗奭カ曰、豆蔻草豆蔻也。與ニ高良薑ニ全別物也。本草綱目曰、高良薑。子名ニ紅豆蔻ニ。通雅曰、南人亦謂ニ山姜花ニ、又曰ニ豆蔻花ニト、觀レ此則山姜亦草豆蔻ト同名トナル、然ノ高良薑和產無レ之、草豆蔻亦相同

久比波之加美 異本本草類編曰、高良姜、久比波之加美乃宇止 加

宇禮爾加宇 本草類編　高梁薑 延喜式　藁梁香 同上　[集註] 本草類編曰、高良薑。和久礼乃波之加美、三月三日採暴干。豆蔻、和加宇礼尓加宇乃美、似山姜杜若狀如檳榔也、採暴干。日本伊勢、武州出之。延喜式卷第三十七曰、典藥寮。諸國進年料雜藥。伊勢國、高梁薑十一斤。武藏國、豆蔻子三升。近江國、藁梁香五斤十兩。因幡國、藁梁香云云各一斤。出雲國、藁梁香十兩。出雲國風土記曰、意宇郡、凡諸山野所在草木云云高良薑

[今案] 古書ニ高良薑、日本諸國ヨリ出スモノハ皆山薑ニシテ不レ有ニ眞ノ高良薑ニ也、榮西ハ喫茶養生記ニ曰、服ニ高良薑ニ法。此藥ハ出ニ於大宋國高良郡ニヨリ、唐土契丹高麗同貴ニ重ス之ヲ、觀此則高良薑日本ニ不レ產甚明矣

[形狀] ○山姜ハ山中竹木林中ニ生ズ、形狀薑ニ似テ、葉濶大微毛アリ、其根亦薑ニ似テ細カタシ、夏葉間ニ穗ヲナシ花アリ、蕾ハ小キ豆ノ如ク、本淡紅末紅花開テ花蘭ノ小ナル如〃瓣全テ短シ、花後實ヲ結テ桃葉珊瑚子ノ如シ、綠色熟テ紅也、葉ハ冬不レ凋、香氣姜ニ似タリ

乃良衣 本草和名　[漢名] 紫蘇 本草　○今通名

萬葉集卷第十一曰、紅之淺葉乃野良爾○群芳譜曰、紫蘇。一名赤蘇。證類本草曰、蘇。陶隱居云、葉下紫色而似荏者、今俗呼爲紫蘇

一名

以奴衣 本草和名曰、蘇。和名以奴衣、一名乃良衣。通雅曰、蘇亦辛艸之總名

奴加衣 倭名類聚鈔曰、蘇。新抄本草云、和名乃良衣、一云奴加衣

沼加江 天文寫本和名抄

乃良惠 本草類編

荏 厨事類記曰、正月七日若菜荏茹實加進之、即今モヤシノ紫蘇芽也荏苗ハ不堪食。延喜式卷第三十三曰、大膳下。正月最勝王經齋會供養料、僧別云云荏裹各一顆。仁王經齋會供養料、茄子六顆半云云荏裹料一顆　造雜物法荏裹四百七十六顆。續古事談曰、閑院太政大臣公季云云此人ハヲサナクテツ子ニ村上ノミカドノ御前ニサブラハレケリ、御前ニテ物クヒテ、エヅ、ミタバムトイハレケレバ、ミカドワレハサルモノクハズトヲホセラレケル。エヅ、ミクロキモノニテアルニヤ。類聚雜要抄曰、五節殿上大饗雜器物二種、海月、荏裹。令集解曰、古記云、荏而抗反、方言蘇亦荏也、關之東西或謂之蘇、或謂之荏、野王按、蘇ハ細而香シ、其ノ實色黑シ、荏ハ大而有毛、其ノ實色赤シ一作紫。二物雖是一類、其狀不同也。觀此則古エ衣ハ紫蘇荏通シテ呼ルコト明也。其荏裹ト云モノ、紫蘇ノ葉ヲ用　荏ノ葉ハ毛アリテ味不美、香亦アシクシテ食用トスベカラズ。證類本草ニモ蘇ニ有數種、有水蘇白蘇魚蘇山魚蘇、皆是荏類ト云リ○延喜式、大膳下、仁王經齋會供養料、荏子七勺、菓餅料トミユルハ荏子也

集註

本草類編曰、蘇。和乃良惠、紫蘇也、夏採葉、秋採實

○紫蘇子 和漢通名

集註

延喜式卷第三十七曰、典藥寮。諸國進年料雜藥。伊勢國、蘇子一升。尾張國、云云紫蘇子各五升。讃岐

國、紫蘇子云云各五升

以奴衣（イヌエ） 本草和名 【漢名】香薷 本草 【今名】バリクサ

本草綱目、宗奭曰、香薷、花茸紫連ㇾ邊ニ成ㇾ穗ヲ、時珍曰、方莖尖葉有ㇾ刻缺、頗似ニ黄荊葉ニ而小、九月開キ紫花ヲ成ㇾ穗

【一名】以奴阿良ミ岐 本草和名曰、香薷。和名以奴衣、一名以奴阿良ミ岐

以沼衣 倭名類聚鈔曰、香薷。和名以沼衣

以奴江 天文寫本和名抄

伊好惠 本草類編

伊奴阿良ミ支 同上

犬衣 新撰字鏡曰、蒡。犬衣

【集註】本草類編曰、香薷、和伊奴惠、又伊奴阿良ミ支。十月中採干之。延喜式卷第三十七曰、典藥寮。諸國進年料雜藥。山城國、香薷云云各十五斤。大和國、香薷云云各十五斤。攝津國 香薷七斤。近江國、云云香薷各十五斤。播磨國、香薷云云各十六斤。美作國、香薷云云各五斤。和泉國風土記曰、日根郡貢香薷独活。駿河國風土記曰、烏渡郡產香薷。伊穗原郡產香薷葛根。美髮產香薷。盆頭郡島田驛貢香薷

【形狀】按ニ本草類編ニ伊奴惠、十月中採之ト云ヘハ、伊奴衣ハ眞ノ香薷タル可證也。香薷ハ山野ニモ自生アリ、宿子春苗ヲ生ズ、高サ二三尺莖方也、葉蘇葉ニ類シ尖長、桃葉ノ短カ如シ、鋸齒アリ、斷ハ溺汁ノ香アリ、故ニバリクサト云、冬ノ初梢如ニ穗ナス、二三寸、花一方ニ附テ淡紫花ヲ開、後實ヲ結テ苗枯ル

大系本河ハ參河國ノ荏子ヲ黍子ノ誤トス

衣 倭名類聚鈔　[漢名] **荏** 本草　[今名] **エ**

證類本草曰、陶隱居云、荏狀如レ蘇高大、白色不二甚香一。其子研レ之雜レ米作レ糜甚肥美、下レ氣補益、東人呼爲レ蕉、音魚以三其似二蘇字一、但除二禾邊一故也、笮二其子一作レ油用煎レ之、即今油帛及和漆所レ用者、服食斷レ穀亦用レ之、名爲二重油一

[一名] **於保衣** 本草和名曰、荏子。和名於保衣乃美。倭名鈔曰、荏。和名衣　**江** 倭名類聚鈔、國郡部曰、備中國後月郡荏原、江波良。武藏國荏原、江波良。武藏國荏原郡荏原、江波良。吾妻鏡卷第三十六曰、七箇日參詣荏柄社壇

○**於保衣乃美** 本草和名　[漢名] **荏子** 本草　[今名] **エノゴマ**

[一名] **古豆** 新撰字鏡曰、荏荏同、而甚反、上桼木也、古豆　**ノマメ** 延喜式傍訓　[集註] 延喜式卷第二十三日、民部下。交易雜物。山城國、荏子、四石。尾張國、荏子四石。。參河國、荏子廿石。美濃國、荏子十二石。同卷第三十三日、大膳下、仁王經齋會供養料。荏子七勺、菓餅料云云干荏各三勺、海菜料。按、干荏、紫蘇葉也。同卷第三十七日、典藥寮。諸國進年料雜藥、攝津國、荏子二升五合、相摸國荏子二斗、下總國、荏子二斗。同卷第三十九日、內膳司。新嘗祭供御料。荏子三升、右解齋料。荏子三升、右豐樂料。正月三節、荏子九升。五月五日節。云云荏子各四升。供御月料。云云荏子各一斗一升二合五勺。同卷第四十三日、主膳監。月料、荏子四升九合五勺

○**荏油** 延喜式亦通名也　[漢名]

重油本草 【今名】エノアブラ 【集註】延喜式卷第十七曰、内匠寮。下案一脚料、荏油四合。同卷第二十四曰、主計上。凡中男一人輸作物・荏云云油各五合。美濃國、中男作物・荏油。越前國・中男作物 荏油。加賀國、中男作物、荏油。出雲國・中男作物・荏油。筑前國、中男作物・荏油。筑後國 中男作物 荏油。肥前國、中男作物・荏油。肥後國、中男作物、荏油。豐前國・中男作物 荏油。豐後國・中男作物、荏油。同卷第二十八曰、隼人司、凡毎年造 進油絹六十疋、其料云云但荏油一斛三斗八升、疋別充二二升三合一。同卷第三十六曰、主殿寮。凡量收諸國 進中男作物雜油ヲ、中男一人云云荏油五合

曾々惠(ソ、エ)本草類編 【漢名】荊芥本草 ○今通名

本草綱曰、時珍曰、二月布レ子ヲ生レス苗ヲ、方莖細葉似テ二獨帚葉ニ一而狹小、淡黃綠色、八月開ニ小花ヲ作レ穗ヲ成レ房ヲ如シ二紫蘇房ノ一、内有ニ細子一如ニ葶藶子ノ一狀ノ、黃赤色

【一名】**乃々衣** 本草和名曰、假蘇。和名乃々衣、一名以奴衣

以奴衣 見上

伊奴惠 本草類編曰、假蘇。和名伊奴惠、又云曾々惠

【集註】尺素往來曰、山藥牛膝牽牛子 香附子 紫蘇荊芥乾姜云々等之和藥者、御所持之間不レ及レ獻レ之

【藥製】頓医抄曰、荊芥穗日ニカラ〈〜トホシテスレ、ナヲヌレタラバ火ニ少シアブリテスレ

【形狀】○荊芥ハ高サ一二尺ニ及ブ、

葉ハ地膚ノ葉ニ似テ岐ヲナシ、五尖一葉也、薄ク柔カ也、葉ノ味薄荷ニ似タリ、秋穗ヲ成粉紫花ヲ開實ヲ結テ苗枯ル

太宇安良良支 本草類編

【漢名】薄荷 本草

【今名】メクサ

本草綱目、時珍曰、薄荷ハ人多ク栽蒔、二月宿根生レ苗ヲ、方莖赤色、其葉對生、初時形長而頭圓ナリ、及ニ長スルニ則尖曰、苛ハ集韻許箇切、呵去聲。類編菜名、或作苛。按品字箋作ニ蔢苛一

【一名】波加

【集註】本草類編曰、薄荷。和太宇安良良支、八月九月取之食也

倭名類聚鈔曰、薄荷。和名波加。今案荷字所出未詳○字典

【今案】頓醫抄曰、雞蘇、薄荷葉也。保命歌括曰、雞蘇散、鷄蘇即薄荷葉也○頓醫抄曰、竜腦、薄荷葉、薄荷香キ了竜腦ニ似タルユヘニ云也。銀海精微曰、龍腦即蘇州菭荷、其葉四指大ヒ。本草原始曰、蔢荷又名ニ雞蘇一、姑蘇龍腦者第一龍腦在ニ蘇州府學ノ前一、此處種ル者氣甚香竄因而得レ名、古方有ニ龍腦雞蘇丸一、即此是也。通雅曰、薄荷蘇州ノ者佳ナリ、可ニ作ノ茶ト飲一、俗呼ニ新羅薄荷ト、天寶單方所レ云連錢草是也。別錄積雪草其曰ニ龍腦薄荷ト者、乃チ水蘇也。本草綱目、時珍曰、水蘇。此草似レ蘇而好生ニ水旁一、故ニ名ニ水蘇一、其葉辛香可ニ以煮ニ鷄、故ニ有ニ龍腦、香蘇、鷄蘇諸名一。救荒本草ニ言、薄荷即鷄蘇、以テ生ニ東平龍腦岡一者ヲ爲レ良、故ニ名ク。本草蒙筌以下薄荷種ニ蘇州府學ノ地一名ニ龍腦一者ニ得レ名、倶ニ不レ同カラ何ソ哉

○水蘇、和産未詳

末原稿本ハ未、未不明ナリ。活版本ハ凡テ未トスレドモ本草和名、和名抄共ニ末ニ作ルニヨリ今總テ末トス

佐波阿良々岐 本草和名

漢名 地瓜兒苗 救荒本草

今名 シロネ

救荒本草曰、地瓜兒苗ハ生ニ田野中ニ、苗高サ二尺餘、莖方ニシテ四楞、葉似ニ薄荷ニ微長大、又似ニ澤蘭葉ニ、抪レ莖ヲ生レ根ヲ、名ニ地瓜ニ形類ニ甘露兒ニ更長、味甘

一名 阿加末•久佐

本草和名曰、澤蘭。和名佐波阿良々岐、一名阿加末久佐

佐波安良々文 本草類編

佐波阿良々木 倭名類聚鈔曰、澤蘭。和名佐波阿良々木、一云阿加末•久佐

白根 類聚雜要鈔曰、宇治平等院御幸御膳云々生物五杯云々白根云々。頓医抄曰、澤蘭。葉シロ子トテ水邊ニヲフル物ナリ。按ニ、本草綱目、澤蘭ノ釋名ニ根名ニ地筍ト云ハ、シロ子也。時珍ノ說ニ、蘭草澤蘭、一類二種云々。莖微方、節短而葉有毛者爲澤蘭ト云モノハ、サハヒヨドリバナ也

集註 本草類編曰、澤蘭。和佐波安良々支、三月三日採陰干。延喜式卷第三十七曰、典藥寮。諸國進年料雜藥。大和國、云々澤蘭各十五斤。萬葉集卷第十九曰、天皇太后共、幸ニ於大納言藤原家ニ之日黄葉ル澤蘭一株ヲ抜キ取テ、令レ持ニ内侍佐佐貴ノ山ノ君ニ、遣ニ賜大納言藤原卿幷陪從ノ大夫等ニ御歌一首。命婦誦曰。此里者、繼而霜哉置、夏野爾、吾見之草波、毛美知多里家利。薫集類抄曰、浴湯香云々或本加澤蘭一兩

形狀 ○地瓜兒ハ水濕ノ地ニ生ズ、其根草石蠶ノ如クニシテ連珠ヲナサズ、白色香氣アリ。春ニ至テ苗ヲ生ジ、直上シ高サ四五尺ニ至ル、莖方ニシテ節赤ク、葉兩對ス。桃葉ニ似テ短ク濶ク鋸齒アリ。秋葉間ニ小白花聚リ開

都保久佐（ツボクサ） 本草和名 〔漢名〕積雪草 本草 〔今名〕カキドヲシ

本草綱目、積雪草。集解、時珍曰 葉圓似ㇾ錢、引ㇾ蔓搏ㇾ地、香如ニ細辛一 倭名類聚鈔曰、積雪草。和名豆保久佐。本草和名曰、積雪草。和名都保久佐

〔一名〕豆保久佐

川保久佐 本草類編 つほくさ 藻塩草曰、積雪草、つほくさ

〔集註〕本草類編曰、積雪草。和川保久佐、八月採苗陰干 〔形狀〕○大

和本草曰、積雪草（ツボクサ）、溼地ニ生ズ、葉ハツボ草ニ似テ、圓ニシテ如ㇾ錢、莖方ナリ。花紫也。按ニ、古ヘハ都保久佐ト云テ、カキドホシト、ツボクサヲ分ザル也。今ツボクサト云モノハ、積雪草（カキドホシ）ニ似テ香氣ナク、蔓ヲ不ㇾ引也

蕶陵香 延喜式 〔漢名〕零陵香 本草 今所產未詳

證類本草曰、圖經曰、零陵香。多ク生ス下濕地ニ、葉如ニシテ麻ノ兩兩相對、莖方氣如ニ蘼蕪ノ、常以ニ七月中旬ニ開ㇾ花至テ香シ、古所謂薰草是也

〔集註〕延喜式卷第十五曰、內藏寮。諸國年料供進。蕶陵香大二十四斤三十把。淡路國三十把、阿波國二十四斤

〔今案〕古ヘハ蕶陵香、淡路、阿波ノ國ニ產セシ也。故ニ延喜式ニ兩國ヨリ年料ニ供進ス。本草類編ニ零陵香和三月採陰干、七月中旬開花至香ト云、七月中旬開花至香ト云ハ蘇頌ノ說也。此說ニ合ズトミユ。日本紀畧ニモ延曆十一年正月己巳、藥物往往出ツ、公卿詣テ闕ニ上表ス云云ト出。續日本紀ニ延曆六年五月戊戌、典藥寮言ス、蘇敬ノ注新修本草、與ニ陶隱居集

己巳八十四日

註本草ニ相撿ニ、增ス一百餘條ハ亦今採用スルニ草藥ヲ既ニ合、敬說ハ請フ行用レ之、許玉フ焉。トミエタリ。延喜式卷第十八、式部上曰、凡醫生ハ皆讀シメヨ蘇敬新修本草ヲ。西宮記曰、或抄云、天平二年始テ置ニ施藥院ハ、令ム諸國ニ以テ國郡ノ封并大臣家ノ封物ヲ宛ニ價ニ取ニ草藥ヲ年年進セシム之、施藥院東条藤氏申シテ納ル諸國藥種ヲ、養フ病人ヲ、所ニ有ル使以テ弁及ビ外記ヲ爲ス別當ト。延喜式卷第三十七曰、典藥寮。諸國進年料雜藥。右依ニ前件ニ附ニ貢調使ニ送ル寮ニ。撿收シ訖、即ノ與ニ返抄ヲ、其太宰ハ便ニ附ニヨ別貢使ニ

形狀 ○草零陵香ハ宿根 春苗ヲ生シ、葉互生シテ胡枝子（ハギ）ノ葉ニ似テ柔軟綠色、短キ鋸齒アリ、夏高サ二三尺ニ及、梢ニ穗葉間ニ出淡紫花ヲ開、小キ胡枝（ハギ）子ノ花ノ如シ、後毬ヲナシ、內ニ黍粒ノ如キ子アリ、葉ヲ斷ハ香氣アリ、夏苗枯ル。救荒本草曰、岬零陵香又名ニ芫荽ハ人家園圃中多種レ之、葉似テ苜蓿葉ニ而長大、微尖莖葉間開ニキ小淡粉紫花ハ作ニ小短穗ヲ、其子如ニ粟粒ニ、今人遇ニ零陵香缺ノルニ多ク以テ此ノ物ヲ代用

附錄 衣香 阿弥陀院宝物目錄曰、薰香四袋、一衣香、一藿香、一甘松香（○香乘曰、熏佩之香、衣香、零陵香一斤、甘松、檀香各十兩、丁香皮五兩 辛夷二兩、茴香二錢炒右搗末入龍腦少許貯囊佩レ之

加波美止利（カハミドリ） 本草類編 漢名 五節冠 質問本草 今名 カハミドリ

一名 かはみどり 藻塩草曰、蘇合。かはみどり、蘇合ト云非也。蘇合、和產ナシ。本草類編曰、蘇合香。和加波美止利

集註 駿河國風土記曰、鳥渡郡產

藒香。伊穗原郡美髮產藒香

形狀

○本草辨疑曰、和ニ藒香ト云草アリ、人多ハ用レ之、莖ノ高サ四五尺、節節ヨリ葉ヲ生ズ。木芙蓉ノ葉ニ類ス。小ニメ長シ、花色紫ニメ形夏枯草ニ似タリ。香ハ荏ノ氣アリ。和草ヲ用テ、病人吐ヲナシタルヿ多シトイフ人モアリ○カハミドリハ葉兩對シテ續斷ノ葉ニ似テ臭氣アリ、藒香ノ類ニ非ズ。質問本草ノ五節冠也。質問本草曰、五節冠、春生シ苗ヲ夏開ク花ヲ咨甲辰歲道光戳昌蘭敝地無ニ此花、江浙兩處名喚フ五節冠ト、人家盆內多種テ之ヲ爲ス玩ト

正誤

本草啓蒙ニ、排草香、カハミドリ、唐ヨリ古ハ葉ノミヲ渡ス、ソノ後根ノミヲ渡ス。三十年モ中絕シテ、明和庚寅ノ年ニ又根ヲ多ク渡ス、細鬚根長サ一二尺、灰白色ニメ微シ香氣アリ、コレヲ髭樣ト呼ブ、此內ニ葉ト灰土トヲ多ク雜ユ、ソノ葉カハミドリニ異ナラズ。又近年浪華ニテ舶來埋藒香中ノ土ヲ棄テシ處ニ、カハミドリヿ生スルトキハ、埋藒香ト稱スルモノハ排草ニシテ、カハミドリナルヿ明ナリト云ハ甚タ強說也。埋藒香ハカハミドリニテ僞ルナルベケレモ、カハミドリハ排草ニ非ズ、カハミドリハ惡臭アリテ、佩香トスベカラス。廣東新語ニ曰、其可レ佩者ヲ曰フ排草ト、狀チ如シ白茅ノ、對レ節生葉、葉兩兩相ヒ連ツ、長サ五六寸、而幹中ニ穿ツ、以テ細嫩者ヲ爲レ貴ト、番禺人種エ之ヲ、蒔スレハ至ル數畝ニ、以テ其葉ヲ售ル于海外ノ諸番ニ、諸番歲コトニ有レハ瘡痏、煎ジ其葉ヲ爲ス湯ト浣レ之ヲ即チ愈ユ。其ノ根莖以テ合セ諸香ニ爲ス囊ト、能ク使ム衆味ヲシテ久シク而不ラ滅セ、予カ有リ贊云ク、有リ美芳艸、其ノ香在リ根ニ、衆香得テ之ヲ長ク存ス其魂ヲ、穿ツ故ニ靈、靈故ニ返ス、生香之ヲ丹藥奇トシ、莫シ能ク名ヅクル、故ニ一名留香艸、亦曰フ養香ト、一種夏開ク粉紫花ヲ、如シ蒔蘿ノ、乾シテ之ヲ香シ亦名ク排草ト。觀レハ此則排草ハ、其葉兩々相對シ連ル、其ノ中心ヲ穿テ莖出ルヿ明シ。物理小識ニモ穿心排草對シテ節ニ生ス葉ヲ、兩葉相ヒ連ル、長サ五六寸、而韓穿ツ其中ヲ、土人呼ンテ爲ス排

質問本草

五節冠圖



草、亦呼穿心艸、又有夏開細粉紫花如蒔蘿乾之香亦名排草ト出タリ、カハミドリハ葉莖アリ
テ不穿心、諸書ニ所說ノ排草ト大ニ異也。又一種排草花如蒔蘿ト云、本草、蒔蘿・集解、蘇頌曰、花實
大類蛇牀、而簇生。時珍曰、其子簇生狀如蛇牀子。觀此則カハミドリノ花ノ穗ヲナシテ蛇牀ノ
如ク傘ヲナサザルニ異ナリ、排草ハ極テ香氣ノスグレタル艸トミユ。廣東新語曰、予沙亭鄉江畔有沙地
二三十畝、其種宜排草、農人以重價佃之、春以播秧、至六月始種排艸、十月收之、其根長五六尺、
賣以合香　葉以泥漬使乾賣、與番人爲藥、得地一畝以半種蕃芋、以半種排草必相
易也、農人喜種排草其利甚厚、惜宜種之地不能多、有沙亭之外如潭山大嶺間亦有數十畝
焉。由此攷本經逢原所謂以排草葉僞藿香、乃排草葉ヲ以テ埋藿香トスルヿ明白ニシテ、廣東新語、排
草葉以泥使乾　據此則カハミドリヲ以テ排草ト爲ノ誤亦自ラ明也。排草葉相連穿莖心ト云カハミド
賣云ニ合ス　リハ紫蘇葉ノ如クニメ不穿心
排ニ排　桂海志ニ、排草香狀如白茅香、芬烈如麝ト云エバ、カハミドリノ惡臭ト大ニ異レリ
草

古名錄草部卷第十八　終

古名録草部巻第十九目録

薬草類上

通計十二種

臘ノ下月脫カ

古名錄草部卷第十九

紀藩　源　伴存撰

藥草類

續日本紀卷第十曰、天平二年夏四月辛未、始テ置テ皇后職施藥院ヲ、令メ下諸國ヲ以二職封并大臣家ノ封戸庸物ヲ價ヲ、價ニ取リ草藥ヲ每年進セ之。西宮記曰、天長二年置ク判官主典醫師各ミ一員ヲ、又曰、藥園典藥別所。令曰、藥園師二人、掌ル知リ藥性ノ色目ヲ種ニ採藥園ノ諸草ヲ及ヒ教ルヲ藥園生ニ。續日本紀卷第十七曰、天平二十年十二月乙卯於テ南ノ藥園ノ新宮ニ大甞　百寮訓要抄曰、典藥寮。又御井あり、もろ〳〵の藥を藥園にうへて、御井にてえらひ調ずる也。大內には皆かやうにありし事也。いと興有事也。延喜式卷第十八曰、式部上。凡ッ藥園師乳師等ハ歷二六年ヲ爲テ限ト、遷替之日ニ、責メヨ二其解由ヲ。同卷第三十一曰、宮內省。凡ッ十二月晦日ノ平旦ニ、輔以上率ヰテ典藥ノ寮ヲ奏ニ進年料ノ御藥并ニ人給ノ白散、及ヒ殖藥ノ様ヲ、色目見ニ本司ノ式ニ　其詞曰、宮內省申ク典藥寮能供奉禮元日御藥、臘御藥、人給ノ白散、又殖タル藥様進登申。同卷第三十七曰、典藥寮。每年十二月晦日云云　同日供ニ殖藥ノ様廿五種。麻黃、丹參、地黃、黃芩、奄閭、萱草、麥門冬、天門冬、瞿麥、黃菊、枸杞、蜀椒、地楡、紫苑、薤白、赤小豆、百合（ユリ）、芎藭、大黃、商陸、大蒜、山茱萸、呉茱萸、烏梅、桃仁、各四兩。其調度同レ上、並省輔已下寮ノ頭已下共執入進、訖退出、輔留奏レ之。又曰、凡ッ味原ノ牧ハ爲リ寮ノ牛ノ

牧ハ其生益ノ牡牛ハ、便チ充テ耕ニ作ス藥園ヲ。勸學田十八町。云云五町、大和國。右以ニ其地子ヲ充ツ藥生等ノ食ニ○又延喜式二十三、民部下ニ、凡太宰府云云其香椎宮守戸一烟ハ藥園駈使廿人。主船一百九十七人、厨戸三百九十六烟ト見ユレバ、日本諸國ニ藥園アリテ、藥物ヲ殖シメ、藥園使ヲシテ采シメタマヒシ證也。陸奥ヨリ甘草ヲ貢セシモ、陸奥藥園ニテ作リシヿ明也。民部下、年料別貢雜物。右別貢ノ雜物ハ竝ニ依ル前件ニ、自餘ノ雜藥ハ見ニタリ典藥式ニ、其ノ運送ノ傜夫ニハ、各給フ路粮ヲトミエタリ。康富記曰、嘉吉三年五月二日入レ夜ニ伴ニ鴨ノ權ノ禰宜祐顯ヲ向ニ施藥院使丹波盛長朝臣宿所ニ、諸藥商買之千駄櫃ト申ス間ノ事爲ニ談合ノ也。藥賣者施藥院所ニ相計フ也。仍下知狀可レ出之由領ヨ掌スルヿ之ハ無ニ子細ノ者也。如ニ令條ノ者諸國貢進之藥種被レ收納施藥院典藥寮ノ者也。藥生同ク爲ニ院使ノ所ニ成敗ノ也。盛長朝臣語テ云ク、近來ハ絕了、我父祖之時、諸藥商賣之輩下知狀書与レ之者先例也。云云予案レ之令第二典藥之下種採藥園諸草藥及教藥園生云云判　盛長朝臣加神判也　下ス諸國商買千駄櫃等中ハ、右諸藥商買爲ニ本道物怪物等ノ如ニク先例ノ可レ致ニ其ノ沙汰ヲ、敢テ不レ可レ有ニ違犯輩ノ之由、施藥院使下知所レ候也。仍テ執達如レ件。嘉吉三年四月廿九日、長久奉任料五百疋致ニ其ノ沙汰ニ了。又祐顯初行向之間、別携百疋、此後此商買之輩祐顯等來茅屋致ニ其礼ハ、不ニ思ヒ寄フ沙汰也。予權祢宜令ニ引合ハ、施藥院之礼也

云云

黃耆 本草　漢名　○今通名

夜波良久佐(ヤハラグサ) 倭名類聚鈔

源氏物語寄生曰、すべて女はゝやはらかに心うつくしきなむよきことゝ、やはらぐさこそ中納言もさだむめりし○本草綱目、時珍曰 黃耆、葉似槐葉而微尖小、又似蒺藜葉而微濶大、靑白色開黃紫花ヲ、大サ如槐花ノ、結フ小尖角ヲ、長サ寸許、根ノ長サ二三尺、以テ堅實如箭幹者ヲ爲レ良

一名　加波良佐々介 本草和名曰、黃耆、和名也波良久佐、一名加波良佐々介　弱久佐 新撰字鏡曰、黃耆、弱久佐　也波良久佐 本草類編　かはらさゝ見 藻塩草曰 黃耆、かはらさゝ見

集註　本草類編曰、黃耆、也波良久佐、二月十月採陰干。延喜式卷第三十七曰、典藥寮。諸國進年料雜藥、山城國、云云黃耆十斤。伊勢國 黃耆十一斤。尾張國 黃耆云云各四斤、參河國、云云黃耆各一斤。甲斐國、黃耆十斤。相摸國、黃耆云云各一斤。常陸國 黃耆四斤。上野國、云云黃耆各十斤。越中國、黃耆二斤。播磨國、黃耆二斤四兩。備前國、黃耆九斤。備中國、黃耆八斤五兩。伊勢國風土記曰、安濃郡村主鄉產黃芪。山背國風土記曰、久世郡貢黃耆。駿河國風土記曰、伊穗原郡古國府云云黃芪等主藥寮

形狀　福田方曰 黃耆。身ニ皺紋(コマノカアル)シハアテ柔軟(ヤハラカニ)メ肥(フトク)長メ白虵無キ者ヲ好トス。箭幹(ヤノ)如クホソク圓(マロ)ク長カ好之。劈開(サキワリ)テ蜜ヲヌリテ、赤色ニ炙テ使ヘ。又曰本黃芪ト云物ヲウル不用之。犬アヲイノ根ヲ作レル也。頓醫抄曰、黃耆綿ノヤウナル節アリテ、堅長キフタマタナラヌヲエリテ、細ニキリテ塩湯ヲワカシ浸シテ、一時バカリヲキテ

取出アブリヌレ○脩治纂要曰、黄耆。味甘キヲ用ベシ、味イ苦キヲ用レバ瘦ル也。イカニモ太ク軟ニ色ノ少シ黄ナルガ吉シ。綿ノ如クナルヲ綿黄蓍ト云。本草辨疑曰、綿ノ如ク柔ニシテ色黄白味甘ヲ可レ用ユ。太キヲ上トシ、細キヲ爲レ次ト、今和ニ富士黄耆ト云者アリ、新ニ採タル年ハ能似テ、年ヲ經レバ堅ク脆モロク、輕虚ニシテ甘キ味ナク、木ノ如シ、不レ可レ用ユ卽木黄蓍也○按頓醫抄、福田方ニ說クモノ、皆綿黄耆也。證類本草曰、圖經曰、黄耆。其ノ皮折レ之如レ綿、謂ニ之ヲ綿黄耆、然トモ有ニ數種、有ニ白水耆、有ニ赤水耆、有ニ木耆、功用並同○今諸國ニ產スルハ大抵木黄耆 其根皮黄白色、肉白箭簳ノ如ク、緊クシテ味微苦、其草ハ莖弱クシテ蔓ノ如シ、線楞アリテ大巢菜カラスノエンドウニ似テ、高サ三四尺、鬚蔓ナシ、葉莖ニ互生ス、苦參ノ葉ノ如ク、形質亦大巢菜ノ如ク柔カ也。夏月梢ノ葉間ニ、寸許ノ小穗ヲナシ、豆花ノ如キ花ヲ開、淡黄色、花後莢ヲ結テ、亦大巢菜ノ莢ニ似テ長シ○藝州廣嶋ノ產ハ形狀苦參ノ如クニシテ蔓ヲナサズ、高三四尺許、葉互生シ、苦參ノ葉ノ如ニシテ短毛アリ、夏梢ニ短穗ヲナシ、豆ノ如キ花ヲ開ク、黄白色、花後莢ヲ結、其根柔軟ニシテ味甘餘味アリ、肉白色ニシテ心淡黄ヲ帶

阿萬木アマキ 倭名類聚鈔 【漢名】 甘草 本草 ○今通名

詩經類考ニ曰、筆談ニ云ク、甘草枝葉悉ク如レ槐、高サ五六尺、但葉端微尖ニシテ而糙澁似タリ有ルニ白毛一、子如シ小扁豆ノ齒齧メ不レ破。證類本草曰、圖經曰、甘草。春生ス青苗ヲ、高サ一二尺、葉如シ槐葉ノ、七月開ク紫花ヲ似レ柰ノ、冬結レ實ヲ作ス角子ヲ、如シ畢豆ノ、根長キ者三四尺、麁細不レ定、皮赤上ニ有ニ橫梁、梁下皆細根也

【一名】 阿末岐 天文写本和名鈔。倭名鈔曰、甘草。和名阿萬木。天䟽識餘曰、五行ニ有レ木而無

レ草、則草亦可ヽ謂フ之ヲ木ト。吾妻鏡卷第四十三曰、建長五年十月十一日、被レ定ニ利賣ノ直法ヲ、薪三十束、三把別百文。莅木一駄。八束、代五十文蒔塩草曰、甘草。しらふち○塵添壒囊抄曰、日本ニモ馬醫師ヲ伯樂ト云也云云五臟藥分云云甘草一分煎ズベシ、甘草ノ代出柿沼キザミスル也

之呂不知 本草類編 しらふち

集註

本草和名曰、甘草。和名阿末岐。出陸奧國。本草類編曰、甘草。味甘、平無毒、去黑皮用之。和之呂不知乃祢、日本內於奧州有之、二月八月除日採根暴乾。延喜式卷第三十七曰、典藥寮。諸國進年料雜藥。常陸國、甘草廿五斤十三兩。陸奧國、甘草十斤。駿河國風土記曰、富士郡、出甘草。山槐記曰、治承二年十一月十二日、定成朝臣獻御乳付具納手箱一合所儲置之、御藥雜物等甘草入湞進云云傳聞洞院局奉抱一以綿纏指去、御口中拚御舌上血血多入御口中不速泣給云云又以他綿纏治甘草湯奉含之。類聚雜要抄曰、手筥一合納甘草大黃

形狀

○脩治纂要曰、甘草。麁皮ヲ去テ剉ム、炙ル事モアリ。生ニテ用ル事モアリ。炙レバ少シ溫ニナルゾ、夏ハ節々日ニ干スベシ、不レ然虫ガクラフゾ。本草辨疑曰、藥舖ニ上ヲ竪鞭ト云、次ヲ中鞭ト云、又次ヲ切込ト云、又各上中下アリ、最下ヲ良香手ト云、良香ニ似テ細小ナリ、細キ者ヲ稾甘草ト云、太ク皮薄ク色黃ニ堅實ナルヲ爲レ上細クメ堅實ナルヲ中トシ、大小ニヨラズ輕虛ニメ色ウルミ、或蛀ヒ、又ハ朽テ黑色アリ、皮厚メ脫タル、皆下ナリ。駿州富士山ニ此草アリト云フ。按駿河國風土記ニ符合ス本草啓蒙曰、福州ハ甚ダ大ニシテ堅實ナラズ、南京ハ皆細クメ潤アリ、南京ノ中コシボト名ケテ、外皮縱ニ小皺紋アリ、堅實アルヲ揀ヒ用ユベシ○甘草ハ土地ニヨツテ種テ繁ルアリ、瘦枯ルアリ、其根ハ乾シタル者ヨリ甘シ、春苗ヲ生ズ、高サ二三尺ニ至ル、凡テコフヂニ似タリ、莖圓

ク葉互生シ亦小フヂノ葉ニ似タリ、秋葉間ニ簇リ淡紫花ヲ開ク、豆花ノ如シ、後莢ヲ結ブ、其子扁小也。其根横ニ延テ處々ニ直下スル根アリ、即甘草也。横根ハ證類本草ニ根有横梁、梁下皆細根也ト云者也、即本草類編ニ之呂不知乃祢ト云ハ、此横根アリテ地上ニ蔓延シ、紫藤ノ根ノ如ヲ云、紫藤白花ヲ云ニ非ズ。シロフヂハ甘草ノ古名也

附方 頓医抄曰、凡湯ヲ服スルニモ一切ノ湯水食物ツタモタズシテツキ返スニハ 甘草二兩、水三カハラケ入テ一カハラケニ煎メ、ナマヌルニテ可服、二三度吐逆シテシヅマル時コソ藥湯等ヲ進ヨ、又甘草少ノ煎物バカリニテ、ヤガテ吐シテ留モアリ

馬藥 壒嚢抄曰、亦灌頂ノ返藥ノ事、馬能成テ半時有テ、甘草一寸ヲキザミテ、藥袋ニ入テ、葱白根七筋、水天目一餘リ入テ、一盃ニ煎ジテ可飼也

波末須加奈 本草和名

漢名 防風 本草 ○今通名

證類本草曰、圖經曰、防風根土黄色、與蜀葵根相類、莖葉俱青緑色、莖深而葉淡、似青蒿而短小、初時嫩紫、作菜茹極爽口、五月開細白花、中心攢聚作大房、似蒔蘿花、實似胡荽而大

一名 波末尓加奈 本草和名曰、防風。和名波末須加奈 一名波末尓加奈

波萬須加奈 倭名類聚鈔曰、防風、和名波萬須加奈、一云波萬仁加奈

波萬仁加奈 見上

波万多かな 藻塩草曰、防風。波万多かな

集註 延喜式卷第三十七曰、典藥寮。元日御藥、防風三分。臘月御藥、防風六兩、東宮所須 防

風三兩。諸司年料雜藥、齋宮寮、防風一兩二分四銖。木工寮、防風十四兩。左右近衛府、防風云云各十四兩。左右衛門府、云云防風各一兩二分。遣ニ諸蕃使ー。唐使、防風云云各六斤。渤使、防風云云各一斤。諸國進年料雜藥　駿河國　防風云云各十斤。伊豆國、防風十五斤。相撲國、防風三斤。上野國、防風六十斤。按古ハ眞防風ヲ諸國藥園ニ作ラシメシ也

形狀

福田方曰、防風。和ト唐ト、ツクシト共ニアリ、天皇子防風ハ、ハマオホ子トテ、ハマノスナハラニ在ト云ヘリ。ツクシ防風ハ、カシラホ、ケタル、此者芦頭ト叉頭ト、叉尾ヲ去テアブテ使ベシ、叉頭ヲ使ヘバ物ニクルウ、叉尾ヲ使ヘバ痼疾ヲ發ス。頓醫抄曰、防風芦ヲ捨テ、アブリ粉ニセヨ〇本草辨疑曰　防風和ハ唐ヨリ來ル者ト各別ナリ、一種濱防風ト云者アリ、唐ニ微似タリ、故ニ濱ヲ用ル人モアリ、是近キ時用ル者ナリ、古來ノ者ニ非ズ、唐ハ筆防風トテ、筆ニ似テ芦頭ニ毛ノアル者也、和ニ古來用ル者トハ遙ニ別ナリ、輕虛ナル者也。脩治纂要曰、防風。波末於保惠。按ニ福田方ニ防風和ト云モノハ、眞防風ヲ種殖シテ、世ニ出セシ也。ツクシト云ハ斜蒿ノ細葉ノ者ニメ、今和產防風皆此也。此草山中ニ多シ。葉胡蘿蔔葉ニ似テ瘦セ小也。夏莖ヲ抽、高サ二三尺、葉互生ス、梢ニ花アリ、水芹ノ花ノ如シ、其根指ノ如ク長ク、尾尖リ、皮黃色ニメ蘆頭ニ黑褐ノ短毛微ニ殘ル、福田方ニ、ツクシ防風ハカシラホ、ケタルト云此也。本草啓蒙曰、今藥舖ニテ眞ノ筆防風ト云アリ、一名山人參、根細長ク六七寸ニメ堅實ナリ、是卽邪蒿ノ一種細葉ナルモノニメ、防風ノ類ニ非ス〇福田方ニ、天王寺防風ハ、ハマオホ子トテ、ハマノスナハラニ在ト云、本草辨疑ニ一種濱防風ト云者アリト云ハ、今菜店ニ其葉ヲ出シ販グヤヲヤ防風ニメ、防風ノ類ニ非ズ、海邊沙地ニ生ズ、葉水芹ニ似テ潤大ニメ厚ク、鹹葉草ノ如ク面深綠光澤アリ、

背淺綠、切バ一種ノ芹ノ氣アリ、夏莖出一二尺、葉莖ニ互生シ、梢ニ水芹花ノ如キ白花ヲ開、後實ヲ結テ小キ無患子ノ如ク、綠色ニメ皮蓖麻子蔓多羅花ノ子ノ皮ニ似タリ、其根長クメ一二尺、淡黃ニメ脆ク折ヤスシ、類ル眞ノ防風根ニ相似タリ、故ニ本草辨疑ニ濱防風唐ニ徵似タリ、故ニ濱防風ヲ用ル人モアリト云非也、農業全書曰、海濱和らかなる白沙に生ず、其莖あかく、その葉も、其香も防風に似たる物なり、莖を取てわりて膾の具に用ひ、或酢にひたして食ふ、甚其香よく、味よし〇防風ノ眞物ハ、今和州ニテ種殖ス、早春苗ヲ出ス、初紫色ヲ帶、苗高サ一二尺、葉白頭翁ノ葉ニ似テ、葉數繁ク、面綠色ニメ白ヲ帶、厚ク柔ニメ光澤アリ、夏莖ヲ抽、高サ二三尺、莖線楞アリテ葉互生ス、梢ニ枝ヲ分、白花ヲ開、水芹ノ花ノ如シ、花後實ヲ結テ、胡荽子ノ如シ、其根黃色 指ノ如ク處々チヽミテ、長キモノ三尺餘、至テ脆ク折ヤスシ、生根ノ味甚タ美ニメ人參ノ氣味アリ、乾セバ不レ脆

須々久佐 本草和名

漢名 王不留行 本草

今名 ドウクワンサウ

本草綱目曰、王不留行。時珍曰、多ク生ス麥地中ニ、苗高一二尺、三四月開ニ小花ヲ、如ニ鐸鈴ノ、狀ハ紅白色、結ブ實ヲ如ニ燈籠草子ノ、殼有ニ五稜、殼內包ニ一實ヲ、大ナルハ如ニ豆實ノ、內ニ細子、大サ如ニ菘子ノ、生ハ白熟スレバ黑ク正圓ニシテ如ニ細珠ノ可レ愛

一名 加佐久佐 本草和名曰、王不留行。和名須々久佐、一名加佐久佐。倭名類聚鈔曰、王不留行。今案一本留作レ流、和名加佐久佐。新撰字鏡曰、王不留行。加佐久佐。

加

左久佐 天文寫本和名抄　**須加奈久佐** 本草類編曰、王不留行。和須加奈久佐　又云須加久佐、又云加佐久佐　**須加久佐** 見上　**すゝくさ** 藻塩草曰、王不留行、すゝくさ

【集註】延喜式卷第三十七曰、典藥寮。諸國進年料雜藥。山城國、王不留行十二斤。大和國、王不留行二斤。伊賀國王不留行云云各八斤。伊勢國、王不留行六斤。尾張國、王不留行云云各十斤。安尾國、王不留行云云各一斤。近江國、王不留行廿斤二兩。美濃國、王不留行云云各廿斤。丹波國、王不留行十九斤。出雲國、王不留行一斤七兩。播磨國、王不留行廿五斤。美作國、王不留行七斤。備前國王不留行云云各八斤。讃岐國、王不留行云云各六斤。出雲國風土記曰、仁多郡、所在草木王不留行。安房國風土記曰、平群郡、貢王不留行

【形狀】〇王不留行ハ秋子ヲ下シ生ズ、水苦蕒(カハチサ)ノ葉ニ似テ白ヲ帶、春ニ至テ莖ヲ抽、高サ二尺、葉兩兩ニ相對ス、瞿麥葉ノ濶キガ如シ、梢ニ枝ヲ分、五瓣紅花ヲ開、花萼酸漿(ツキ)ニ似テ小ニメ水ホウヅキノ子ノ如シ、內ニ油菜子ノ如キ子アリ、夏ニ入テ苗枯ル

夜萬之(ヤマシ) 倭名類聚鈔

【漢名】知母 本草　【今名】カラスノスゝキ

爾雅曰、蕁沈藩 疏、藥草知母也、生ズ山上ニ、葉似ノレ韭ニ

【一名】**也末止古呂** 本草和名曰、知母、和名也末止古呂。倭名抄曰、知母、和名夜萬之　**夜末之** 天文

知母雲州本葉莓ニ作ル

寫本和名抄 山止古呂 新撰字鏡曰、菿母、山止古呂 伊末止古呂 本草類編 也末止己呂 同上 也末志 醫心方

山し 言塵集曰、山しとは知母と云り古今說極一之 也万度古呂 藻塩草曰 知母。也万度古呂 しい 假名文字遣曰、しい、知母

集註

本草類編曰、知母。和也末止己呂、又伊末止古呂、二月八月採根、暴干。延喜式卷第三十七曰、諸國進年料雜藥。攝津國、知母云云各四斤、伊勢國、知母卅二斤。相摸國、知母云云各一斤。武藏國、知母一斤。近江國、知母六斤十兩。丹波國、知母五斤。播磨國、知母云云各六斤。備中國、知母八兩。武藏國風土記曰、荏原郡貢知母○按知母モトヨリ和產ナシ、古諸國ヨリ貢スル者皆諸國藥園ニ作レル者也。貝母其外藥草凡同之

形狀

○知母ハ宿根、春苗ヲ生ズ、形狀芒(スヽキ)ニ似テ不レ破レ手、葉ノ形狀香蒲(ガマ)ノ葉ニ類メ薄ク本濶末尖リ細シ、數葉叢生ス、夏一莖ヲ抽、二尺許梢ニ穗ヲナシ、花ヲ開ク。青白ニメ微紫ヲ帶、花不ニ滿開一、花後實ヲ結テ蕎麥ニ似扁ッ黑色也

波々久利(ハヽクリ) 本草和名

漢名

貝母 本草

○今通名

爾雅曰、𦬊貝母 註、根如ニ小貝一圓而白、葉似レ韭

一名

波波久里 倭名類聚鈔曰、貝母。和名波波久里。本草和名曰、貝母。和名波ゝ久利

貝子 延喜典藥

母貞享本子ニ作

式曰、諸國進年料雜藥。上總國、瞿麥、貝子各三斤。
本草和名曰、貝母。陶景注云、形似聚貝子、故以名之

於比　新撰字鏡曰、貝母。於比、一云波万久利

波万久利　見上

はゝくさ　藻塩草曰、貝母。はゝくさ

【集註】本草類編曰、貝母。和波波久利、十月採根暴干。延喜式卷第三十七曰、典藥寮。諸國進年料雜藥。安房國、貝母八兩。美濃國、貝母三斤。出雲國風土記曰、秋鹿郡、山野所在草木、白朮獨活女靑苦參貝母

【藥製】頓医抄曰、貝母。可炮香ハシクシカキニタリ

【形狀】○和產丹波ニアリ、早春諸草ニ先ダチ苗ヲ生ス。柔軟ニメ百合ニ似タリ、葉亦百合ニ似テ細ク、縱條ナク、柔ニメ綠色白ヲ帶、一二三葉對生ス、梢葉互生ナリ、二月高サ尺許、梢ニ白頭翁(ナキナグサ)ノ如キ花アリ、外淡靑白色、內紫黑色粟文アリ、花後實ヲ結テ、八稜草薢(トコロ)ノ實ニ似テ、長キ糸ノ如キ、長キ葉旁ニアリ、夏ニ入テ苗枯

衣比須久佐(エビスグサ)　本草和名

【漢名】**決明**　本草

○今通名

本草綱目、時珍曰、決明有ニリ二種一、一種馬蹄決明、莖高サ三四尺、葉大ニメ於苜蓿一ヨリ而本小末奓、晝開夜合、兩兩相帖、秋開ニ淡黃花一、五出結レ角、如ニン初生細豇豆(サヽゲ)一、長五六寸、角中子數十粒參差相連、狀如ニシ馬蹄一ノ、靑綠色、一種茳芒決明、苗莖似ニ馬蹄決明一、但葉之本小末尖、正似ニテ槐葉一ニ夜亦不レ合、秋開ニク深黃花一、五出結レ角、大サ如ニシ小指一、長二寸許、角中子成ニメ數列一ヲ、狀如ニメ黃葵子一ノ而扁　其色褐

【一名】**江比須**

久佐 本草類編○本草和名曰、決明。和名衣比須久佐。倭名類聚鈔曰、決明。和名衣比須久佐

ゑひす草 言塵集曰、ゑびす草、けちめい草之。藻塩草曰 決明。ゑひすくさ

集註 本草類編曰、決明子。和江比須久佐、十月十日採陰干百日。延喜式卷第三十七曰、典藥寮。諸國進年料雜藥。駿河國、云云決明子各五升。伊豆國 決明子二升。武藏國、決明子云云各三斗。安房國、決明子二升。近江國、決明子二升。下野國、決明子一斗。出雲國、決明子云云各二升。備中國、決明子一斗二升。讃岐國、云云決明子各一斗六升。土佐國、決明子二升。和泉國風土記曰、日根郡貢決明子

形狀 ○馬蹄決明ハ春子ヲ下シテ生ズ、夏秋高サ一二尺、葉互生シ、朝ニ開、暮ニ萎ム。形狀羇豆葉ノ如ク厚ク、綠色ニシテ葉ノ莖細ク瘦、末ノ葉大ニシテ、本ニ附ク葉小ク、六枚附一葉ヲナシ、止リ葉ナシ、秋葉間ニ出黃花ヲ開、小梅花ノ如シ、花後莢ヲ結デ六七寸四稜也、內ニ小キ小豆ノ如キ子アリ、上下切タル如ク尖リ、茶褐色ニシテ光リアリ

正誤 按ニ本草啓蒙ニ、茳芒一名エヲイタチサ、ゲンドウサトス非也。茳芒ハ卽ハブサウ也。本草、茳芒ノ註ニ葉之本小ニシテ末尖リ、正ニ似タリ槐葉ニト云、ハブサウノ葉全ク槐葉ニ不レ異ナラ。河間府志ニ曰、望江南紅黃葉如ニシテ槐ノ而厚シ。救荒本草曰、望江南莖微淡赤色、葉似槐葉ニ而肥大微尖、開ク五瓣金黃花ヲ、結レ角ヲ長三寸許。花曆百詠曰、決明樹高二三尺、亦名ク江南豆ト、花比ルニ梅而黃ナリ、葉類レ槐ニ而細ナリ、每レ花抽ニ雙莢ヲ、如ニ豇豆ニ長サ寸許 若ニ小釵股狀ノ、卽茳芒決明也。農圃六書ニ決明、苗ノ高四五尺、六七月開ク黃白花ヲ、秋深結レ角、初出 苗及嫩莢皆可レ食、俗ニ名ク望江南ト云、卽茳芒ハ望江南タル證也。ハブサウハ、苗高サ四五尺ニ及ビ、梢ニ穗ヲナシ、二寸許ノ莢ヲ結ビ、赤小豆ノ莢ノ如ク扁大 內ニ

廿京本貞享本州二作

扁子相重テ、形狀如二黃葵子一、本草ニ中子成數列、狀如二黃葵子一而扁、其色褐ト云ニ合ス。イタチサヽゲハ其子大巢菜子ノ如クニメ圓長、不レ似二黃葵子一、葉亦不レ似二槐葉一、蔓生ノ如クニメ不レ成レ樹ッ

於保之（オホシ） 本草和名

漢名 大黃 本草 ○今通名

證類本草曰、唐本注云、大黃、葉子莖並似二羊蹄一、但麁長而厚、其根細者亦似二宿羊蹄一、大者乃如レ椀長二二尺一()本草和名曰、大黃、和名於保之。倭名類聚鈔曰、大黃、和名於保之

集註 本草類編曰、大黃、和於保之。二八月採根火干。延喜式卷第三十七曰、典藥寮。元日御藥、大黃一兩二分。臘月御藥、大黃二斤十五兩二分。中宮臘月御藥、大黃十二兩二分。東宮所須、大黃五兩二分。雜給料、大黃七斤八兩。諸司年料雜藥。齋宮寮、大黃一斤四兩二分四銖。內匠寮、大黃七兩。木工寮、大黃二斤十兩。左右近衞府、大黃云云各二斤八兩。左右衞門府、大黃十五兩。左右兵衞府、大黃十三兩二分。諸國進年料雜藥。尾張國、云云大黃各五斤。武藏國、大黃二斤。美濃國、大黃云云各十斤。信濃國、大黃卅斤。陸奧國、大黃百廿斤。越前國、大黃廿六斤。越中國、云云大黃各五斤()按諸國藥園ニ眞大黃ヲ作ラシメ貢スル者也

形狀 福田方曰、大黃切目、錦ノ文ノ如ナルヲ良トス。虛老人ノ爲ニハ、紙ニ裹テヌラメ、熱灰ニムシテ使ヘ、壯人ハ不然○大黃ハ形質羊蹄ニ似テ大也。葉大ニメ白桐葉ノ如クマルク、厚キヿ羊蹄ニ似タリ。夏莖ヲ抽、高サ五六尺、梢ニ枝ヲ分チ、穗ヲナシ、花アリ。亦羊蹄花ニ似テ大也。多苗枯ル

藥製 頓医抄曰、大黃。煨又イ、ノ中ニ入テムシタル、コトニヨシ

附方 明月記曰、嘉祿

三年二月十五日、朱時請招ク寂房令見病者、是丹毒瘡也、尤重要歟。大略無療治術、付大黄可試由示之。安貞元年十月廿九日、脩明院御哺物 御頭、止藥歟、又令賜給、仍予今被付大黄

【今案】古エ遣唐使等往來アリテ、眞ノ大黄ノ種 日本ニモ傳エアリシ也、故ニ羊蹄ヲ之ト云、羊蹄ニ似テ大ナレバ於保之ト云リ、延喜典藥式ニ、每年十二月晦日供殖藥様廿五種云云大黄云云各四兩ト云、此天子ノ御藥園ニテモ大黄ヲ作リタマヒシ證也

比々良木 倭名類聚鈔

【漢名】 黄芩 本草

【今名】 コガネヤナギ

塵添壒囊抄卷第九曰、黄金事。黄金ト云ハ草ノ名歟、木ノ名歟。草木ニ通スル也。本草ニハ黄芩ト書タルヲ、和名ニハヒヽラギト讀リ。此等ハ草ヲ云也。漢語抄ニ杜谷樹ト書ハ是又ヒヽラギ也。是ハ木ノヒヽラギニ當ル。草ノヒヽラキニ乱レアヘル事アリ。巴戟天ト云ハ、ヤマヒヽラギノ名也云云ヒヽラギノ草ト木ト紛レタルノミナラズ、黄芩 黄草、茢安、巴戟天、皆一ニ紛通ヘリ○證類本草曰、圖經曰、黄芩。苗長尺餘、莖薢麄如レ筯、葉從レ地四面作レ叢ヲ生ス、類ニ紫草ニ高サ一尺許、亦有ニ獨莖ノ者、葉細長青色兩兩相對、六月開ク紫花、根黄如ニ知母ニ、麄細長四五寸

【一名】 比々良岐 本草和名曰、黄芩一名比々良岐、一名波比之波

波比之波 見上

比々良支 本草類編

黄金 塵添壒囊鈔

ひはら木 藻塩草曰、黄芩。よの中はかずならずともひは

ら木の色に出ては
いはじとぞおもふ

ひゝ良木

藻塩草曰、黄芩。ひゝ良木

集註 本草類編曰、黄芩。和比々良支、三月三日採根陰干。伊勢國風土記曰 安濃郡、出云云黄芩。村主郷、産黄芩。出雲國風土記曰、意宇郡、所在草木黄芩。參河國風土記曰、寶飯郡、貢黄芩。形原郡、貢黄芩。武藏國風土記曰、荏原郡、貢黄芩。駿河國風土記曰、伊穗原郡美髮産黄芩。安弁郡、産黄芩。富士郡互河輪、外貢黄芩。鷹河郡、貢黄芩。延喜式巻第三十七曰、典藥寮。元日御藥、黄芩黄芩音琴一兩。臘月御藥、黄芩一斤五兩。中宮臘月御藥、黄芩五兩二分。雜給料、黄芩三斤八兩。凡合藥所レ須、蒸二乾黄芩五十斤一料、糯米七斗、毎二年申レ省二請受。諸司年料雜藥。齋宮寮、黄芩十一兩二分二銖。木工寮、黄芩云云各三斤。左右近衛府、黄芩云云各十四兩。左右衛門府 黄芩四兩三分。左右兵衛府、黄芩云云各四兩。遣諸蕃使。唐使、黄芩云云各八斤。渤海使、黄芩云云各二斤。新羅使、黄芩云云各五斤。諸國進年料雜藥。尾張國、黄芩十四斤。遠江國、黄芩十斤。相摸國、黄芩十斤五兩。武藏國、黄芩卅五斤十兩。近江國、黄芩七斤十三兩。美濃國、黄芩云云各十四斤。上野國云云黄芩各十斤。讃岐國、黄芩七十三斤五兩。

今案 古エハ黄芩ヲ御藥園ニ植タマヒシ也。延喜典藥式曰、毎年十二月云云同日供二殖藥様廿五種一云云黄芩云云トミエタリ。内裏式曰、十二月進二御藥一式、晦日、中務省率二内藥司一、宮内省率二典藥寮一云云次宮内奏云、宮内省申サ久、典藥寮ノ仕奉禮人給白散、又殖レ藥ヲ様進良久申給久止申勅答云云。觀レハ之植藥事自レ古有レ之可證也

形状 壒添塩囊抄巻第九曰、黄芩、本草ニ明レトモ葉細長、兩葉相對ヘリトイヘルハ、眞草ニ違ヌニヤ。但シ花ムラサキ也ト云ルソ違事ナシ○本草辨疑曰、黄芩頃ロ朝鮮黄芩ト云者出テ、色モ淺ク味モ薄ク、

風兩刊本トモニ踶ニ作

丈京本作尺

小ナリ。形狀ハ同一ナリ。久ク不レ渡メ高直ナルトキ、南天燭根ヲ細テ充レ之、微ク似タリ○黃芩ハ其草三年ニメ根枯ル、春苗ヲ生ズ、高サ二三尺ニ至ル、一根ヨリ叢ヲナス、葉兩對シテ千屈菜（ミソハギ）ノ葉ニ似テ柔軟、毛茸微ニアリ、夏梢ニ枝ヲ分チ穗ヲナシ紫花ヲ開、續斷（オトリコサ）ノ花ニ似テ痩細シ、花後扁小子ヲ結ブ、蒔テ生ジヤスシ。冬苗枯ル

差保比兒（サホヒメ） 大同類聚方

漢名 地黃 本草 ○今通名

正字通曰、爾雅翼云、以水試之、浮者天黃、沈者地黃、半沈半浮者人黃。本草、大明曰、生者以水浸驗之、浮者名天黃、半浮半沈者名ニ人黃ト、沈者名ニ地黃ト、入レ藥ニ沈者爲レ佳、半沈者次レ之、浮者不レ堪（）本草綱目曰、地黃。時珍曰、其苗初生レ地、葉如ニ山白菜ノ而毛澁、葉面深青色、又似ニ小芥葉ニ而頗厚ク不ニ叉丫ナラ、葉中攛シテ莖ヲ上ニ有ニ細毛ニ、莖梢開ク小筒子花ヲ紅黃色、結レ實ヲ如ニ小麥粒ノ、根長四五寸、細如ニ手指ノ、皮赤黃色、如ニ羊蹄根及蘿蔔根ノ、風乾乃黑。生食ハ作ニ土氣ニ

一名 サヲヒメグサ 延喜式 傍訓

集註 延喜式卷第三十六日、主殿寮。諸司所請年料。典藥寮、胡麻油四升一合。煎ニ供御ノ地黃ヲ料。同卷第三十七日、典藥寮。元日御藥、生地黃（地黃一名地髓）五兩。臘月御藥、地黃五兩。中宮臘月御藥、生地黃五兩。每年十二月晦日供殖藥樣云云。地黃各四兩。雜給料、生地黃十五兩。地黃煎料、生地黃卅石。十石和泉、十石藥園、絹一疋二尺。漉ノ煎絁六尺、盛ノ帊絁六條。（別長一尺廣九寸。）搗一合、帊絁一條（長一尺、廣九寸）、釜口ノ帊、綿一屯半。絞ニ地黃ニ調布二端四丈。綿三屯、商布一段、由加ノ帊ノ調布三條、（別長四尺、二幅）轆轤

綱ノ熟麻廿斤。隨レ損ニ請受。調布潔襪五條。別六尺。禪五條。別六尺。手巾一條。長五尺。燈油一升。酢レ煎匏三柄。沫縄二
口。納ニ汁由加六合。盛レ煎陶壺十六合。受ニ大五升已上ニ。受ニ絞汁ヲ叩盆六口。盛ニ様煎ヲ陶椀一合。加レ盛麻笥三口。
杓三柄。紙十六張。覆ニ壺口ニ料。結ニ固壺口ヲ木綿大一斤、薪二千四百斤。炭廿石。官人二人。侍醫四人。已上官人臨時
增減。史生二人。潔衣各絁一疋。綿二屯。藥生十人。駕輿丁二人。各調布二丈七尺。衣二丈。袴七尺。右件ノ雜物、九
月一日ニ申レ省ニ請受。但地黃有ニ多少。所レ須料隨ノ亦增減。其造煎之間限ニ十六日ヲ給ニ酒食ヲ。遣ニ諸蕃使ニ。唐
使、干地黃云云各二斤。渤使、干地黃云云各二斤。○山城國地二町在ニ葛野ノ郡十三條水谷下里ニ、四至、東限ニ岑山ニ、
南限ニ堀越山谷口ニ、西限レ岑、北限ニ辛河合ニ。永ク爲ニ殖ニ供御地黃ヲ地上。諸國進年料雜藥、尾張國、干地黃六斗四升。相摸國、干地黃
三升。武藏國、干地黃五斗七升六合。常陸國、干地黃一斗三升。近江國、干地黃一斗二升。美濃國、干地黃
一斛。信濃國、干地黃一斗四升。上野國、干地黃云云各一斗。下野國、干地黃云云各二斗。加賀國、干地黃
四斤十一兩。按古諸國藥園アリテ地黃及藥草ヲ作レル可證也○本草類編曰、乾地黃、和唐同之、八月採根陰
乾、以竹刀刮而煎之。伊勢國風土記曰、安濃郡、出云云地黃云云。村主鄉、產地黃。山背國風土記曰、久世
郡、貢地黃。和泉國風土記曰、大鳥郡ニ篩原、出地黃。日根郡賀美鄉、貢地黃。駿河國風土記曰、烏渡郡池
田、產地黃供典藥云云之調。富士郡、出地黃。三代實錄卷第四曰、貞觀二年十二月廿九日甲戌、從五位下行
內藥正大神朝臣庸主卒云云庸主性好ニ戲謔ヲ、最爲ニ滑稽ニ、與レ人言談、必以對事ヲ、嘗出レ自ニ禁中ニ、向テ作ニ地黃
煎ニ之處ニ途逢ニ友人ニ。問云、向ニ何處ニ去。庸主答云、奉ニ天皇命ニ向ニ地黃處ニ、此其類也。侍中群要曰、地黃煎
氷魚使藏人所上薦瀧口。千金方曰、地黃煎 生地黃不レ拘ニ多少ニ三搗三厭取レ汁令レ盡以ニ瓦器ニ盛レ之、密蓋勿レ洩レ氣、湯上煮減ノ半絞去ノ滓再煎、如ニ餳 奇効。良方曰 地黃煎補ニ五勞七傷ヲ、長ニ肌肉ヲ

塡ニ骨髓ヲ、生地黃取レ汁一斗、生薑取ノ汁一升、酥一斤、蜜一斤、杏仁一升、湯ニ浸ノ去レ皮火研如レ膏用レ之、右先取ニ地黃汁ヲ、於ニ銀器中ニ煎如ニ稀餳ノ内ニ薑酥蜜杏等ヲ和シ更ニ煎ノ令レ稠、於ニ不津器中ニ盛、每服以ニ溫酒ニ一蜆殼服レ之、日三度服レ之、生地黃煎治ニ熱病、心胷煩熱ニ口乾皮肉黃宜レ服、生地黃汁、生瓜蔞汁、生麥門冬根汁、各五合蜜二合酥一兩生藕汁三合右ニ一處ニ相和於ニ鍋中ニ熬令ニ稠稠ニ每服不拘時抄半匙服

形狀 ○地黃ハ春宿根苗ヲ出ス、葉高苣(チサ)ノ葉ニ似テ厚ク皺ミ毛茸アリ、春莖ヲ抽、高サ七八寸、梢ニ白桐(キリ)ノ如キ花五六花開、黃紫色蕚莖共ニ毛茸アリ、根黃赤色ニメ長ク延テ末太ク甘藷(サツマイモ)ノ小ナル如クニナル

藥製 福田方曰、地黃熟乾地黃ト云ハ酒ヲソ、イデ蒸テ干タル者之。生乾地黃ト云ハ蒸サズメ只ホシタルヲ云之。熟乾ハ少冷ナリ。生乾ハ大寒之。病ニ隨テ使ベシ。若用ル叱ハ、洗テ土沙ヲ去テ、吉酒ニ一宿浸メ取出メ焙干セ。鐵器ヲ忌之。頓医抄曰、地黃、是ハ新シク堀テ、土ヲ能々洗テ、一度ニ三斗バカリヲ水ニ打入テ見ニ浮タルヲバ取テ別ニ舂、シボリテ捨ヨ。又底ニ沈タルヲバ取集テ、碪(コンキ)ニ入テフク〳〵ト蒸テ、彼ノ舂シボリタル汁ニ浸シテ、冷タクサメタル時、取出シテ日ニ爆ホスベシ。一日ホシテ又如レ前碪ニ入テ蒸テ、熱ナガラ又前ノ地黃ノ汁ニ可浸、サメバ又取出メ日爆ホスベシ。如此三度汁ニ浸シテ、ホシテ置 用ノ時酒ニ一夜浸メ取出シテアブリホシテ、木ノ臼ニテツキフルウベシ。万ノ地黃ト云ハ如レ此調也。水ニ入ニ、上ニ浮タルヲバ天黃ト号、中ニ浮タルヲバ人黃ト云、底ニ沈ミタルヲバ地黃ト云也。イツモ上ニ浮タルヲ舂シボリテ沈タルヲ取テ、其ノ汁ニ蒸テハ浸スベキ也

附方 **乳癰** 頓医抄曰、地黃ヲ搗絞テ可塗

安仁久佐（アニクサ） 本草類編　[漢名] 丹參 本草　○和產未詳　[一名] ニコ

證類本草曰、圖經曰、丹參。二月生レ苗ヲ、高サ一尺許、莖幹方稜靑色、葉生ニ相對シ如シ薄苛ニ而有レ毛、三月ニ開ノ花ヲ紅紫色似タリ蘇花ニ、根赤大ナル者如レ指ノ、長一尺餘一苗數根

タクサ 延喜式丹參ノ傍訓

[今案] 古エハ和漢往來アルニヨリ、自ラ丹參ノ種日本ニ傳エテ殖シ也。本草和名ニ、丹參。唐又殖美濃國ト云。延喜典藥式ニ、每年十二月晦日供殖藥樣云云丹參云云各四兩トミユ。此丹參ノ異邦ヨリ傳エ殖シ證也

[集註] 本草類編曰、丹參。和安仁久佐、五月採根暴干。日本美濃州採之。延喜式卷第三十七曰、典藥寮。諸司年料雜藥。木工寮、丹參云云各一斤。遣諸蕃使。唐使、云云丹參各二斤。渤使、丹參云云各一斤。諸國進年料雜藥。相摸國、丹參四斤。武藏國、丹參廿五斤。美濃國、丹參十四斤。武藏國風土記曰 荏原郡貢丹參○按古エ諸國藥園ニ丹參ヲ殖テ貢セル也

[形狀] ○本草啓蒙曰、丹參。今新渡多シ、根ニ數枝アリ、枝ゴトニ長サ一寸餘、或ハ二三寸、徑一二分許、兩頭細クシテ連珠ノ如シ、外皮赤色賁丹ヲ塗ルガ如シ、內ハ紫褐色ニシテ白キ筋アリ、苗ニ連タルモノ稀ニアリ、ソノ莖方ニシテ細ク、枝葉對生ス、皆細毛アリ、葉ハ小橢ニシテ鋸齒アリ

加都禰久佐（カツネグサ） 本草和名　[漢名] 麻黃 本草　○今通名

重訂本は似テの下至テあり

モの下實ノ著タルあり

證類本草曰、圖經曰、麻黃。苗春生、至二夏五月一則長サ及二一尺一已來稍上有二黃花一結レ實如二百合瓣一而小、又似二皂莢子一味甜、微有二麻氣一外紅、皮裏仁子黑、根紫赤色。本草綱目、時珍曰、其根皮色黃赤、長者近レ尺。

一名

阿末奈 本草和名曰、麻黃。和名加都祢久佐、一名阿末奈

加豆禰久佐 倭名類聚鈔曰、麻黃。和名加豆祢久佐、一云阿萬奈

阿萬奈 見上

加川禰久佐 本草類編

集註

延喜式卷第二十三曰、民部下。年料別貢雜物。武藏國、麻黃五斤。同卷第三十七曰、典藥寮。元日御藥所須、麻黃一兩一分。臘月御藥 麻黃六兩。東宮所須、麻黃一兩一分。諸司年料雜藥。齋宮寮、麻黃二兩二分四銖。左右近衛府、云云麻黃各一斤。左右衛門府、麻黃三兩。諸國進年料雜藥。相摸國 麻黃六斤八兩。武藏國、麻黃五斤。讚岐國、麻黃十六斤。本草類編曰、麻黃。和加川祢久佐 又阿末奈、立秋採莖陰干。醫心方曰、麻黃出讚岐國

藥製

福田方曰、麻黃。洗テ根節ヲ去テ、一寸バカリニ切テ、十沸バカリ煮テ、沫ヲ掠(ウキトリ)去テ、炙テ使ヘ。若去サレバ煩悶スル之。若急ニ用ニハ只根節バカリ去テ使ヘ、可ト云リ。頓医抄曰、麻黃ヲフシヲ切去テカヘリ湯ニ入テ一カヘカヘラカシテ、出メ、取テアブリキザメ。又曰、節ヲステヨ

形狀

〇本草啓蒙曰、麻黃。

今案

延喜典藥式ニ、毎年十二月晦日供殖藥樣廿五種云云麻黃云云各四兩トミユレバ、古ヘ眞ノ麻黃ノ種渡リテ、御藥園及諸國藥園ニ殖タルヿ明也

形木賊(トクサ)ニ似テ●細ク、中ノ孔甚小ニメ實スルカ如ニシテ黃色ナリ。葉ナク莖ノミニメ節アリ、節ゴトニ寸許下節ニ枝ヲワカツ、舶來ノ中ニ稀ニ花ノ着タル●モアリ。其實ノ形蘇頌ノ說ノ如シ、外ニ皮アリテコレヲ包

ム、故ニ如ニ百合瓣ノト云　濶サ一分許、長サ一分餘、ソノ内ニ子アリ、形蕎麥（ソバ）粒ノ如ニシテ小シ、三角ニシテ色モ同、其根徑寸許、長サ數尺、黃赤色ナリ

古名錄草部卷第十九　終

原稿本「類」ナシ刊本ニヨリテ補フ

古名錄草部卷第二十目錄

藥草類下

•毒草

於宇(オウ) 附子 ○烏頭 ○天雄○側子

於保保曾美(オホボソミ) 虎掌

波也比止久佐(ハヤビトグサ) 大戟

介波曾(ニハソ) 甘遂

己波川(ゴハツ) 續隨子

加良可之波(カラカシハ) 蓖麻

於保美留久佐(オホミルクサ) 莨菪

都多宇路之(ツタウロシ) 野葛

通計十九種

於々扁保曾(オヘホソ) 天南星

保曾久美(ホソクミ) 半夏

波衣草(ハエクサ) 澤漆

介比万久佐(ニヒマグサ) 蕳茹

夜末久佐(ヤマクサ) 狼毒

久留倍岐奈(クルベキナ) 曼陀羅花

之之乃久比乃岐(シシノクビノキ) 藜蘆 ○オモト萬年青

古名錄草部卷第二十

紀藩　源　伴存撰

藥草類下

毒草○黄氏日抄曰、夫毒太陽之熱氣也、鴆蛇冶葛巴豆皆生南方、熱氣所鍾也、太陽火氣常爲毒也

附子 本草　[漢名]　トリカブト [今名]

於宇（オウ） 本草和名

正字通曰、宋人楊天惠著附子記其略云品凡七本同末異初種者爲烏頭附烏頭而旁生者爲附子左右附而偶生者爲鬲子附而長者爲天雄附而尖者爲天錐附而上出者爲側子附而散生者爲漏藍子脈絡連貫如子附母附子以貴故專附名也附子之形以蹲坐正節角少者爲上有節多鼠乳者次之形不正而缺傷皮皺者爲下本草言附子八角者良其角爲側子甚謬天雄烏頭天錐以豐盈握者爲勝漏籃側子皆不足數也據此說舊註載廣雅一歲爲萴子二歲爲烏喙三歲爲附子四歲爲烏頭五歲爲天雄失考正云 云附烏頭散生者曰附子其旁連生小尖芽角者曰側子。本草綱目、附子。集解、時珍曰、春月生ㇾ苗ヲ、其ノ莖類シテ野艾ニ而澤シ、其ノ葉類シテ地麻ニ而厚シ、其ノ花紫瓣黄蕤長苞而圓シ、七月采者謂ニ之ヲ早水ト、拳縮シテ而小蓋未ㇾダ長成セ也、九月采者乃佳　○本草和名曰、烏頭、烏喙、天雄、附子、側子、已上五種和名於宇。本草類編曰、附子。和於宇

[集註] 延喜式卷第三十七日、典藥

寮。元日御藥、附子三兩二分。臘月御藥、附子一兩。中宮臘月御藥、附子一斤四兩二分。東宮所須附子二兩二分。雜給料、附子三斤八兩。諸司年料雜藥。齋宮寮、附子九斤十五兩。內匠寮、附子一斤。木工寮、附子十八斤。左右兵衞府、附子云云各四兩。遣諸蕃使。唐使、附子云云各六斤、渤使、附子云云各二斤。諸國進年料雜藥。駿河國、附子云云各二斗。相摸國、附子一斗八升。武藏國、附子八斗。上總國、附子八斗。下總國、附子大五升。常陸國、附子一斛。美濃國、附子大八升。信濃國、附子三斗。上野國、附子四斗。下野國、附子四斗。陸奧國、附子百廿斤。越中國、附子三斗。伊豫國、附子二斗。律曰、凡以毒藥藥人、及賣者絞、卽賣買而未用者近流、謂以鴆毒冶葛烏頭附子之類云云。藻塩草曰、あさましや千嶋のゑぞのつくるなるとくきのやこそひまはもるなれ。おくのゑびすは、鳥の羽のくきに、附子と云毒をぬりて、よろひのあきまをいるといへり。附子矢と云は此事也。ゑびすの嶋はおほかれば、千嶋のゑぞとは云也。袖中抄には、よろひのあきまをはかりているといへり。附子矢といふはこれ也トアリ。吾妻鏡卷第四十八曰、正嘉二年八月十六日、及乗燭之期、伊具四郎入道歸山內宅之處、於建長寺前被射殺訖。落馬之後知中矢之旨、塗毒於其鏃云云

出雲國風土記曰、仁多郡、所在草木附子

形狀

福田方曰、附子圓ク小芋ノ如クメ、トコロ〳〵ニイボアリ。上ハウツラ目ニメ、中ハ白シ。イボヲバ乳頭トカケリ。云乳頭少ク蹲坐周(ウスクマリイノメクリ)正(タンシク)毎ケ一兩ニ近キ者ヲ好トス、大ナル者ハ恐ハ眞ニ非ズト云ヘリ。頓医抄曰、附子堅シテウツケザルヲ用也。重サ七文バカリニカヽルヲ可用、六文已下ニカヽルヲバ側子天雄トテ極メテ毒アリ、不可用〇トリカブトハ春苗ヲ生ズ、葉ムメガエサウニ似テ、大ニメ岐深ク厚ク深緑色、又石龍芮ノ葉ニ似タリ。莖圓ク、葉互生ス。秋高サ二三尺、梢ニ穗ヲナシ、紫花ヲ開、鳳仙花ニ似テ、圓扁尖觜ナシ。亦白花モアリ、不正。白

一貞享本二ニ作

宮ノ下寮字ヲ脫セルナルベシ

淡碧綠ヲ帶、草ハ草本ニメ藤蔓ニ類スルアリ、ツルカブトト云、又花ツルト云、烏頭附子ハ人ノ種殖スルモノ也。山中自然生ヲ草烏頭ト云、諸國深山ニアリ。紀州高野極テ多シ

【藥製】延喜式卷第三十七日、典藥寮。每年十二月ニ造ニ元日ノ料ノ白散四百十五劑ヲ、云云漬ノ附子ニ料酢八斗二升一合。以ニ一合ニ漬ニ一兩ヲ。炮(アフル)附子ニ炭八斗二升六合。以ニ一合ニ炮ニ一兩ヲ。福田方曰、附子、熱灰ノ中ニ數々コロバカシメ、アカヾリノ如裂(ヒワレ)サケタル吃、取出メ皮臍トヲ削去テ切テ使ヘ。但此者虫クラヘルヲバ炮シコロス事難儀之。千金ノ說ノ如ク、先皮臍ヲ去テ破テ、虫ヲ去テ剉テ、炒焦メ使ベシ。烏頭、天雄等モ又如此。頓醫抄曰、大附子ノ七八文目、若ハ十文目ニカヽルヲ紙ニ包テ四五重シテ、水ニヌラシテ、アツ灰ニ埋テ、フク〳〵ト蒸テ、取出シテ、紙ヲ吐弃テ、アツ灰ノ少シヲキノマジリタルニ、アチコチマロバカセバ、アカヾレノ破タル時、取出シテサマシテ、上ノ黑皮ヲ削弃テ、臍ノ穴ノ黑ヲモクジリ弃ヨ。又イボノヤウナル所ヲモホリ弃テ、薄切ベキ溫湯ニ浸シテ、暫置バ黑汁出ル也。黑汁ノ毒ヲ出シテ後、取出シテ炒乾シテスリ振ベシ

○於(オウ)字　本草類編　【漢名】烏頭　本草

○藻塩草曰、烏頭、於宇

【集註】本草類編曰、烏頭、和於宇、二月採陰干、長一二三寸、形五等而隨病用之。延喜式卷第三十七日、典藥寮。元日御藥、烏頭一兩二分。臘月御藥、烏頭十兩。中宮臘月御藥、烏頭七兩一分。東宮所須、烏頭四兩。雜給料、烏頭一斤六兩一分。諸司年料雜藥。齋宮烏頭十四斤四兩。內匠寮、烏頭云云各二兩。左右近衞府、烏頭四斤。左右衞門府、烏頭二斤二兩二分。遣ニ諸蕃使ニ。唐使、烏頭

云々各六斤。渤使、烏頭云々各二斤。諸國進年料雜藥。武藏國、烏頭一斛二斗。近江國、烏頭云々各六升。下野國、云々烏頭各二斗。武藏國風土記曰、荏原郡貢烏頭

形狀 福田方曰、又日本ノ烏頭ト云物アリ、生キ吃ハ少モタガハズメ、乾ツレバ極テ紋シハアリテ乾ヌバリ炮ニ不及而大毒アリ。不可用之

藥製 頓医抄曰、川烏頭。皮ヲステ、、キザミテシロイモノニマゼテ、イリテ後ニ、シロイモノヲステ、、ハマグリノコモ八兩ヲマゼテイレ。又曰、紙ニツ、ミテ、水ニヌラシテ、アツ灰ニウヅミテ、ヨク〳〵ムシテ、取出メ、上ノ皮、ヘソ角ヲクジリ去テ、切テ、カヘリ湯ニ浸メ、一時ヲキテ、黑汁ヲ出メ、カラ〳〵トアブリスレ

○於宇(オウ) 本草類編 **漢名** 天雄 本草

本草綱目、時珍曰、天雄ハ乃種ニ附子ヲ而生出ス、或變出其形長而不レ生レ子ヲ、故ニ曰フ天雄ト

集註 本草類編曰、天雄。和於宇。五歳爲天雄、二月採根陰干。延喜式卷第三十七曰、典藥寮。遣ニ諸蕃使ニ唐使、天雄云々各六斤。渤使、天雄云々各二斤。諸國進年料雜藥。近江國、天雄云々各六升

○於宇(オウ) 本草類編 **漢名** 側子 本草

本草綱目、時珍曰、側子ハ乃附子ノ旁ニ粘シ連ル小ナル者爾、大者附子也。紫黑色如栗、八月採陰干

【一名】一比古　新撰字鏡曰、萴。頌刀反附子也。一比古

【形狀】本草類編曰、側子。和於宇、小者側子也。

於々扁保曾　本草類編

【漢名】天南星　本草　〇今通名

證類本草曰、圖經曰、天南星。今處處ニ有之、二月生苗、似荷梗、莖高一尺以來葉如蒟蒻ニ兩枝相抱、五月開花似蛇頭ニ黄色、七月結子作穗、似石榴子ニ紅色、根似芋而圓

【藥製】福田方曰、天南星煻灰ノ中ニコロバシテ炮シ裂メ焙干テ使ヘ。此ハ所ニ隨テコシラウル事モアリ。頓医抄曰、天南星、湯泡シキザミ姜汁ニシメシアブレ

【形狀】本草類編曰、天南星。和於々扁保曾、二月八月採之、似蒻葉ニ根ノ狀如芋ノ、五月開花、紫斑〇按ニ本草啓蒙ニ、其瓣綠色ト、紫黑色トノ粗キ間道アリト云ハ、天南星ノ眞物ニ非ズ。本草蘇頌ノ說ニ、似蛇頭ニ黄色ト云リ、黄花ノモノ和州吉野郡十二村庄、紀州高野山ニ多シ。葉ハ紫花モノニ似テ葉數少ク、五枚七枚一葉ヲナシ、鋸齒アルモ無モアリ、苗高サ四五尺ニ及ブ、莖白綠色ニメ白斑アリ、莖ノ梢ニ葉左右互生ス、中心ヨリ花ヲ出ス、連花一瓣ノ如ク內淡黄色、外青黄間道ヲナス、花裹テ全ク黄色也、蕊短ク花中ニアリ、花後實ヲ結ブ、紫花ノ實ニ同、秋紅熟ス、地錦抄ニ、南星又一種白なんせうと云、一花二蕊にまた出ル花形は少ちがひ有り、內外共ニ青シ、花しべハ丸く、白ト云

モノ亦黄花、南星ノ一種也

於保々曾美（オホツミ） 本草和名　[漢名] **虎掌** 本草　[今名] **ウラシマサウ** **ヘビノダイバチ**

證類本草曰、圖經曰、虎掌。初生根如シ豆大ノ、漸長メ大サ似ル半夏ニ而扁ク、累年ノ者其根圓及レフ寸ニ、大ナル者如シ鷄卵ノ、周匝生ス圓牙ヲ二三枚或五六枚、三四月生レ苗高サ尺餘、獨莖上有レ葉如レ瓜、五六出ノ分布、尖而圓、一窠生ス七八莖ヲ、時出ス一莖ヲ作レ穗直上如シ鼠尾ノ、中生ス一葉ヲ如レ匙、裹ミ莖作レ房、傍開キ一口ヲ、上下尖中有レ花微青褐色

[一名] **於保曾比** 本草類編　○倭名類聚鈔曰、虎掌。和名於保保曾美。本草和名曰、虎掌、和名於々曾美

蛇乃富曾久佐 新撰字鏡曰、虎掌。蛇枕、又蛇乃富曾久佐

蛇枕 見上

[集註] 本草類編曰、虎掌。和於保曾比、二八月採陰干、似半夏

[形狀] ○竹木林中ニ多ク生ズ、春苗ヲ出ス、莖太サ指ノ如シ、綠色紫細長斑アリ、高サ一二尺、梢ニ人手ヲ開タル如ク葉アリ、南天ノ葉ニ似テ柔軟也、根ノ旁ヨリ一莖出花ヲ開ク、半夏花ノ如シ、本筒ニメ末蓮花ノ一瓣ノ如ク末細ク尖ル、內紫黒色、外綠色紫色ト相雜レリ、花中ヨリ糸ノ如キ蕊出テ、長キモノ末下ニ垂レ地ニ至ル、日ニ隨テ廻リ向フ

[附方] 頓醫抄曰、小兒ノヨコ子、天南星ヲ生シクテ、白狗ノ頭灰ニ吉醋ヲ合テ付ヨ、カハカバヌリ〱セヨ。此藥何ノ草ニモヨシ

天南星散 頓医抄曰、天南星散、吹妳ヲ治ス、天南星ヲ細末メ、湯ニトキテ腫ノ

上ニ可レ塗

保曾久美（ホソグミ） 倭名類聚鈔　【漢名】半夏 本草　○今通名

證類本草曰、圖經曰、半夏。二月生レ苗、一莖莖端三葉、淺綠色、頗似二竹葉一而光

【一名】加太保曾比 本草類編○倭名鈔曰、半夏。和名保曾久美。本草和名曰、半夏。和名

保曾久美 ゑく 假名文字遣曰、ゑく。半夏

【集註】本草類編曰、半夏。和加太保曾比、五月八月採根暴干。延喜式卷第三十七曰、典藥寮。中宮臘月御藥、半夏三分。東宮所須、半夏一兩二分。雜給料、半夏九兩三分。諸司年料雜藥。齋宮寮、半夏二兩二分。內匠寮、半夏云云各三兩。左右兵衛府、半夏云云各五兩。左右衛門府、半夏五兩。左右兵衛府、半夏一兩。遣二諸蕃使一。唐使、半夏云云各四斤。渤使、半夏云云各一斤。新羅使、半夏云云各五升。諸國進年料雜藥。伊賀國、半夏二斗。伊勢國、半夏六升。尾張國、半夏大五升。美濃國、半夏二斗八升。讃岐國、半夏一斗三升。駿河國風土記曰、安弁郡產云云半夏等

【藥製】頓医抄曰、半夏。ユヲモツテ七反アライテキザミテ、ハシカミノシルニヒタシシテアブレ。福田方曰、半夏。沸湯ニ浸ノ洗テ、滑ヲ去テ、又浸シス、グコト七反セヨ。若シ人ノ喉舌ヲ戟（エゴラス）叓ヲ疑バ杵（ツキ）クダイテ、生薑ヲ等分ニ舂合テ、和滓（カスナカラ）ヲシ付テ、一宿ノ捏（ツクネ）テ、餅ニノ焙乾テ使ヘ。和說云、哀湯（ワヤル）ノ中ニ打入テ、一沸リ煮テ、スリコ鉢ニ井アケテヌルクナラバ、タワラヲ以テスリ、洗ヒスグ

ベシ。如此七反メ、然後ニ舂キ碎キ生薑ヲ擦メ、水フレセズ汁ヲ絞テ取テ、半夏ニヒタ〳〵ニ入テ、一夜ヲヘテ、アシタ取出テ、炙テ使ヘ。此ハコシラヘニクキ者ナル間、一度ニ五斤モ十斤モコシラヘテヲクベシ

形狀 ○脩治纂要曰、半夏。加羅須比志也久ハトヒスヒ草、五月ニ採バ根小ニメ輕キ也、八月ニ採バ根大ニメ重シ。然レモ田畠ニ生ズルニ由テ、五月ニトラザレバ地ヲ耕メ半夏散失ス。故ニ今五月ニトル。本草辨疑曰、半夏ニ擇アリ、大粒ニメ色白ク皮ナキヲ可レ用、其小粒ニメ皮アリ、或ハ色黑ク赤ハ不可用

○半夏。田野ニ多シ、春苗ヲ生メ三五寸、梢ニ葉ヲ生ズ、質芋葉ノ如クニメ形狀竹葉ノ如シ、根下ヨリ別ニ莖ヲ抽、青紫花ヲ開、虎掌花ニ似テ小ク、綠色糸蘂只一條長ク出ル、冬苗枯ル

附方 頓医抄曰、齒ノ虫食痛ニハ、半夏ヲキザミテ、蛤貝ニテ煎ジテ、痛方ノ耳ニ入ベシ。半時バカリニ立所ニ痛痠止ベシ。若ハ粉ニメモ、クダニテ耳ヘ吹入ベシ

半夏麴 頓医抄曰、半夏。麴粉ニスリ、振テハジカミノ汁ニコネテ、アツナルムロニ入テ、麴ノヤウニネサセテ、スコシ入ツカフナリ。本草綱目、半夏。修治、時珍曰、或研リ末以薑汁白礬湯ヲ和メ作レ餠ニ、楮葉ニ包置キ籃中ニ、待レ生ズルヲ黃衣ヲ日ニ乾シ用ユ謂フ之ヲ半夏麴ト

波也比止久佐 本草和名

漢名 大戟 本草　**今名** タカトウダイ　**一名** 波夜比止久佐 倭名類聚鈔曰、

本草綱目、時珍曰、大戟生スル平澤ニ甚多、直莖高一二三尺、中空折レ之有ニ白漿一、葉長狹如ニメ柳葉ノ而不レ團ナラ、其梢葉密攢ニメ而上ル

良　天治本夜ニ作ル

大戟。和名波夜比止久佐。本草和名曰、大戟。和名波也比止久佐

波夜比止久左 天文写本 和名抄 **念毘須** 新撰字鏡曰、大戟。念毘須、一云波●良草 **波●良草** 見上

［集註］ 延喜式卷第三十七曰、典藥寮。元日御藥、大戟二兩。臘月御藥、大戟二兩。中宮臘月御藥、大戟三兩二分。雜給料、大戟十兩二分。諸司年料雜藥。齋宮寮、大戟五兩一分。左右兵衞府、大戟十兩。左右衞門府、大戟云云各二兩。左右兵衞府、大戟云云各二兩。遣諸蕃使。唐使、大戟云云各四斤。渤使、大戟云云各一斤。諸國進年料雜藥、大和國、云云大戟各十斤。伊勢國、大戟五斤四兩。尾張國、大戟十一斤。下總國、云云大戟各五斤。常陸國、云云大戟各七斤。近江國、大戟十斤一兩。美作國、大戟二斤四兩。備前國、大戟云云各一斤。阿波國、大戟云云各二斤。讃岐國、大戟云云各五斤。伊豫國、云云大戟各二斤

［形狀］ 本草類編曰、大戟。味苦甘寒有毒、和波也比止久佐、十二月採根陰干。五月四月開黄紫花 似芫菀、根又似苦參、皮黄黑（、普救類方曰、大戟、ちゝくさ、二月比水澤の邊に生ず、莖直にのびて高さ二三尺、莖の中に空あり、折れば白き汁出ツ、葉柳葉に似たり、按柳葉ニ似テ缺刻ナク末マルシ

［藥製］ 福田方曰、大戟、延胡索、葶藶子、皆炒過テ使ヘ

波衣草（ハエクサ） 新撰字鏡　［漢名］ **澤漆** 本草

［一名］ **はやひとくさ** 藻塩草曰、澤漆。はやひとくさ

［今案］ 字鏡曰、澤漆。大戟苗生時波衣草。本草類編曰、澤漆。味苦辛微寒无毒、和波也比止久佐、

三月三日、七月七日採莖葉陰干、又大戟苗也〇本邦古所用澤漆皆大戟苗ニメ、本草類編ニ三月三日採莖ト云ハ、トウダイグサ也。トウダイグサハ五月苗枯、大戟ハ二月漸ク其芽出ニメ可采モノナシ、七月七日採莖ト云ハ卽大戟苗也

【集註】延喜式卷第三十七曰、典藥寮。諸國進年料雜藥。近江國、澤漆十五斤五兩

【形狀】〇トウダイグサハ野生多シ、秋ヨリ苗ヲ生ジ、春高サ尺許、甘遂ニ似テ莖綠色、葉互生ノ繁シ。形狀馬齒莧(スベリヒユ)ノ大葉ニ似テ薄ク、鋸齒アリ、梢ニ綠花ヲ開、四出花ノ形狀甘遂、大戟ニ類メ少シ異也。莖葉ヲ截バ白乳出、夏ニ入テ苗根トモニ枯ル。本草綱目ニ、時珍ノ所說ノモノハ、子コノメ也。野生多シ。葉圓ク石胡荽葉及積雪草葉ニ似テ微厚ク軟也。春莖出五七寸、莖ニ葉互生シ、梢ニ聚リ花ヲ開 綠色、花後實ヲ結テ一分許 樗(クロクサギ)實ノ形ニ似テ、一方裂テ內ニ茶褐ノ細子ミユ、夏ハ枯ル、此草ハ白乳ナシ

尓波曾(ニハソ) 本草和名

【漢名】甘遂 本草　【今名】ナツトウダイ

按ニ尓波曾ハ庭酥也、此草ヲ断(キレ)ハ白汁出酥ノ如シ、故ニ庭酥(ニハソ)ト云〇證類本草曰 圖經曰、甘遂。苗似ニ澤漆ニ莖短小而葉有レ汁、根皮赤肉白、作ニ連珠一。按ニハソハ赤皮甘遂ニ非ズ、草甘遂也

【一名】

尓比曾 本草和名曰、甘遂。和名尓波曾、一名尓比曾　邇波曾 倭名類聚鈔曰、甘遂。和名迩波曾、一云仁比曾　仁比曾 見上　仁波曾 本草類編

禰 天治本弥ニ作ル

仁波曾禰 同上

[集註] 本草類編曰、甘遂。和仁波曾、又云仁波曾祢、二月採根陰干。延喜式卷第三十七曰、典藥寮。諸司年料雜藥。左右近衛府、云云甘遂各一斤八兩。遣諸蕃使。唐使 甘遂云云各二斤。渤使、甘遂云云各一斤。諸國進年料雜藥。參河國、甘遂十斤。武藏國、甘遂一斤 按、古ハ赤皮甘遂ノ種渡リテ、諸國藥園ニ作リ貢セシ也

[形狀] ○草甘遂ハ早春苗ヲ生ズ、大戟苗ノ如ク紅紫色、後高サ六七寸ニ及、葉大戟葉ニ似末微尖綠色紫ヲ帶、春花ヲ開、黄紫色、大戟花ニ似タリ、根ハ經年枯レズ、葉莖根俱ニ断ハ白乳アリ

尓比万久佐（ニヒマグサ） 本草和名

[漢名] 䕡茹 本草　○今通名

證類本草曰、䕡茹。圖經曰 二月生苗、葉似大戟、而花黄色、根如蘿蔔、皮赤黄、肉白初斷時汁出、凝黑如漆、三月開淺紅花、亦淡黄色、不著子、又有一種草䕡茹色白

[一名] 蘆茹

延喜式卷第三十七曰、典藥寮。中宮臘月御藥、蘆茹二兩。雜給料。蘆茹六兩。諸司年料雜藥。齋宮寮、蘆茹四兩一分。左右近衛府、蘆茹云云各八兩

禰阿佐美 本草和名曰、䕡茹。和名禰阿佐美、一名尓比万久佐

仁比萬久佐 倭名類聚鈔曰 䕡茹。䕡如二音、和名祢阿佐美、一云仁比萬久佐

仁比末久佐 天文寫本和名抄

にひまくさ 藻塩草曰 䕡茹。にひまくさ

止良久禰 新撰字鏡曰、䕡茹。止良久祢

[集註] 延喜式卷第三十七曰、典藥寮。諸司年料雜藥。內匠寮、䕡茹云云各三兩。

遣諸蕃使。唐使、蔄茹云云各二斤。渤使、蔄茹云云各一斤。新羅使、蔄茹二斤。諸國進年料雜藥。信濃國、蔄茹卅七斤。美作國、云云蔄茹各一斤六兩○按、異邦ノ種ヲ諸國藥ニ殖テ貢シタル也

形狀

○本草啓蒙曰、漆頭蔄茹ハ生根享保年中ニ唐山ヨリ來ル、ソノ時ハ狼毒ト名ケテ渡ス、冬ノ末、春ノ初、宿根ヨリ芽ヲ叢生ス、其色紅紫觀ツベシ、二三月ニハ圓莖高サ一尺餘、葉互生シテ密ナリ、微シク毛アリ、莖葉ヲ切レバ白汁出ヅ、莖梢ニ一所ヨリ五枝ヲ對シ出、五方ニ分ル、ソノ葉及花實ノ形狀ハ皆ノウルシニ同ジ、四月ニ至テ紅葉シテ枯ル、其根ハ大ニメ短キ蘿蔔(タイコン)ノ形ノ如シ、黃赤色微黑ヲ帶ブ、コレヲ切レバ黃汁ヲ出ス、ノウルシノ根ノ細クシテ白汁ヲ出スニ異ナリ

物類品隲所ノレ載ル
漢種藺茹ノ圖



己波川(コハツ) 本草類編 【漢名】續隨子 本草 ○今通名

○按ニ己波川ハ此子巴豆ニ似テ小ナル故ニ名ク○本草綱目、續隨子、集解、頌曰、苗如シ大戟ノ、初生スニ一莖ヲ、莖端ニ生スレ葉ヲ、葉中復出レ葉、花亦類ス大戟ニ、自ニ葉中一抽レ幹而生スレ實ヲ、靑ク有レ殼。時珍曰、莖中亦有ニ白汁ー

【集註】本草類編曰、續隨子。和己波川。春秀夏實

【藥製】頓医抄曰、續隨子。皮ヲハイデクダケ

【形狀】秋子ヲ下ソ生ズ、莖圓ク赤ヲ帶、葉一處ニ叢リ、四方ニ出テ十字樣ヲ爲ス、綠色ニソ厚ク、羅漢松(イヌマキ)ノ葉ニ似テ質大戟ノ如シ、斷ハ白乳出、之ニ觸テ人ニヨリ小瘡ヲ發ス、夏高サ二四尺、枝ヲ分ツ、梢ニ大戟花ノ如キ花ヲ開、花後實ヲ結デ國土ノ菓子ノ實ノ如ク三稜アリ、生靑熟テ茶褐、內小キ豆ノ如キ子アリ

夜末久佐(ヤマクサ) 倭名類聚鈔 【漢名】狼毒 本草 ○今和產不詳

本草綱目、狼毒。集解、志曰、狼毒、葉似ニ商陸及ヒ大黃ー、莖葉上有レ毛、根皮黃、肉白、以ニ實重者ヲ爲レ良、輕者爲ニ力劣ー

【一名】夜萬久佐 天文寫本和名抄 也末久佐 本草類編 也末巳々 同上。倭名鈔曰、狼毒、和名夜末久佐

【集註】出雲國風土記曰、嶋根郡、諸山野所在草木白朮麥門冬藍漆五味子苦參獨活葛根卑解狼毒

杜仲芍藥柴胡苦辛百部根石斛藁本藤

形狀 本草類編曰、狼毒。和也末久佐、又云也末已々、二月八月採根陰干、四月開花、八月結實〇本草啓蒙曰、古ハ漢渡アリ、形商陸ノ如ク、皮黃白色、密ニ横紋アリテ本手ノ羌活ノ如ク、疣塔（イボ）多シ、肉ハ白色〇地錦抄曰、狼毒。宿根より春生じ、葉に毛多く出る。花は黃色、八九月に咲、俗にあわたちばなといふ

地錦抄

狼毒ノ圖



按ニ地錦抄ニ載ル狼毒眞僞未詳

内刊二本トモ中ニ作

加良可之波（カラカシハ） 倭名類聚鈔 〔漢名〕 蓖麻 本草 〔今名〕 タウゴマ

本草綱目、蓖麻。集解、時珍曰、其莖有レ赤有レ白、中空、其葉大如二瓠葉一、毎葉凡五尖、夏秋間椏裏抽二出花穗一、纍纍トシテ黃色、毎レ枝結レ實ヲ數十顆、上ニ有レ刺攢簇シテ、如二蝟毛一而軟、凡三四子合成ス一顆ヲ、枯時劈開、狀如二巴豆一、殼內有レ子、大サ如レ豆、殼有二斑點一、狀如二牛蜱一、再去二斑殼一、內ニ有レ仁、嬌白ニシテ如二續隨子仁一ノ。

〔一名〕 加良加之波 本草和名曰、蓖麻。和名加良加之波 加良衣 倭名鈔曰、蓖麻。和名加良可之波、一云加良衣 加良江 天文寫本和名抄 からかし 言塵集曰、からかしとは和名云蓖麻之 唐胡麻（タウゴマ） 類医抄曰、中國ノ秘藥。唐胡麻（タウゴマ）、イリテスヾシノ袋ニ縫ク、ミテ一アハ煎メ可服

〔集註〕 本草類編曰、蓖麻子。和名加良衣乃美、春夏三日、秋冬五日、水浸向東浸之、平旦時出取之

〔形狀〕 蓖麻ハ春子ヲ下メ生ズ、秋高サ丈許ニ至ル、莖圓ク紫色ヲ帶、葉互生ス、カライチゴノ葉ニ似タリ、又十二ヒトヘノ一種（カヘデ）ノ葉ニ似テ大也。秋月葉間ニ穗ヲナシ、黃白色ノ細花ヲ開、後實ヲ結デ小ナル無患子（ツブ）ノ如ク、綠色外皮ニ短刺アリテ、曼陀羅花子ニ似タリ、內ニ巴豆ニ似タル子三粒アリ、白黑ノ斑文ヲナス、多苗枯ル

久留倍岐奈（クルベキナ） 本草和名 〔漢名〕 曼陀羅花 本草 〔今名〕 テウセンアサガホ キチガヒナスビ

託　天治本「詑」ニ作ル是
伊不　天治本「伊乃留」ニ作ル是ナラム

學圃餘疏曰、蔓陀羅花ハ採食能ク令ニレ人ヲ發ニセ狂ヲ。本草綱目、時珍曰、曼陀羅ハ生ニ北土ニ、人家亦栽ニレ之ヲ、春生ス夏長ス、獨莖直上ノ高サ四五尺、生ノ不ニ旁引ニセ、綠莖碧葉、葉如ニシ茄葉ニ、八月ニ開ニ白花ヲ凡ノ六瓣、狀如ニシテ牽牛花ニ而大ナリ、攢花中折テ駢葉ニ外ニ包ム、而朝ニ開キ夜合ス、結レ實圓而有ニ丁拐ニ、中ニ有ニ小子ニ、八月採レ花、九月採レ實。花子、辛溫有レ毒。入ニ麻藥ニ〇本草和名曰、撲奈已上四種施シ用フ多驗アリ但所レ出未レ詳和名久留倍波奈。按卽曼陀羅花也。此花實ヲ食スレバ狂ス、故ニ久留倍伎奈ト云ノ。倭名類聚鈔曰、狂訓ス太布流ト、俗ニ云毛乃久流比。令義解曰、狂者、或ハ妄ツニ觸テ欲レ走、或ハ自ラ高賢也ト云テ稱ス聖神ト者也。撰集抄曰、くるめきまよゐつるが。新撰字鏡曰、詑。九誑反、伊不、又久留詑比毛乃伊不、又口波志留。詎。九王反、譸也。詿也。久知波志留、又太波己止、又久留比天毛乃云。詑ハ誑也。久留不、阿止戸〇誑。字典曰、誑。集韻、如林切、音壬念也。按ニ音義與レ誑同、誑信也、念也。觀此則誑ハ誑ノ誤也。誑。字典曰、誑。類篇、同誑省文也。誑ノ。說文、誑本字。誑。說文、欺也。子牙子論將篇ニ、信トメ而喜ビ信ルレ人ヲ者ハ可レキ誑ス也ノ。詿、惑也〇詑。字典曰、集韻 韻會 正韻竝丑亞切、音侘、誑也〇詎。字典曰、詎。廣韻、渠放切、集韻具放切、類篇、誑也。廣韻、謬言也〇詑。字典曰、詑。說文、引ニ方言ニ沇州謂レ欺曰レ詑〇倭名鈔國郡部曰、伊勢國朝明郡訓ニ額、久留倍。安藝國高宮郡訓ニ覓、久留倍木

集註　延喜式卷第三十七曰、典藥寮。遣ニ諸蕃使ニ、唐使、草藥、云云僕奈各四斤。渤使、草藥云云僕奈云云各一斤。諸國進年料雜藥。近江國、僕奈七斤。越前國、僕奈四斤。越後國、僕奈二斤十三兩。因幡國、云云僕奈各一斤

形狀　〇曼陀羅花ハ、春子ヲ下メ生ズ、莖葉茄ニ似テ綠色也。夏秋梢ニ花ヲ開、牽牛花ノ如ク、長クメ百合花ノ大サ也。白色ニメ五尖本筒ノ如シ。花謝テアトニ實アリ、大サ

梅子ノ如シ、圓クメ外ニ太ク短キ刺ノ如キモノアリテ、蹈[illegible]子ノ如シ。生青、熟テ茶褐色、内ニ子アリ、花實食エバ尤ヨク人ヲ狂ス。本草啓蒙ニ、若誤テ此花及葉ヲ食ヘバ狂亂ス、然レドモ其毒氣盡レバ自ラ愈ユ。或曰、誤食テ此毒ニ中レバ冷茶佳也ト云

於保美留久佐 本草和名

［漢名］ 莨菪 本草

［今名］ ハシリドコロ

證類本草曰、圖經曰、莨菪子、今處々ニ有レ之、苗莖高サ二三尺、葉似テ地黃王不留行紅藍等ニ而三指闊、四月開花紫色、苗有ニ白毛一、五月結レ實、有レ殼作ニ罌子狀一、如ニ小石榴一、房中子至細青白色如ニ米粒一、按和產白毛ナシ

［一名］ 於保美流久佐 倭名類聚鈔曰、茛菪子。和名於保美流久佐。本草和名曰、莨菪。和名於保美留久佐

於尒保美久佐 醫心方曰、莨菪。和名於尒保美久佐

於仁比留久佐 本草類編

ヲニシグサ 延喜式傍訓

莨菪 延喜式

［集註］ 延喜式・巻第三十七日、典藥寮。諸國進年料雜藥。伊豆國、莨菪子一斗。相摸國、莨菪子二升。安房國、云云莨菪子各一升。上總國、莨菪子一升。近江國、莨菪子一升。讃岐國、莨菪子二升

［今案］ 本草類編曰、莨菪子。和於仁比留久佐、五月採實、四月開花紫色、苗莖有白毛、有殼如石榴。觀レ此則古眞莨菪漢種本邦ニ渡リテ、諸國藥園ニ作テ其子ヲ貢上セシモノ也。和產莨菪ハ和州吉野郡天川舟川庄釋迦嶽、紀州高野山中

ニ多シ。多ク大樹ノ陰ニ生ズ、春紫芽ヲ出ス、商陸ニ類ス、苗長ゾ高サ二尺許、莖圓ク緑色ニゾ紫ヲ帶、葉互生ス。二葉一處ニ出ル、一葉大ゾ一葉ハ小也、形狀商陸ニ似テ薄ク、紋脉少シ、葉大ナルモノ一二處岐ヲナス、春梢ノ葉間ニ細莖下垂ゾ花アリ、形狀沙參花ノ如ク短ク大也、末五尖ニゾ本筒也、外紫色内ノ色アサシ、花後苞ヲ結テ緑色、王不留行ノ苞ニ似タリ、熟テ黄色、内ニ子アリ、茶褐色ニゾ蘿蔔子ノ如シ、其根大ニゾ桔梗根ノ如シ、蘆頭ハ萆薢ニ似タリ、誤食エバ忽チ狂ヲ發ス。本草一家言ニ曰、於迷幾草。產ス和州高取ノ鄉ニ、葉似蕃椒葉ニ而軟脆、又似テ商陸葉ニ而細小、梢頭ニ開ク五瓣蓋子花ヲ、色紫、根莖全ク與ニ商陸一般食ヘハ之有レ毒即此也

之ミ乃久比乃岐 本草和名　漢名 **藜蘆** 本草　今名 **日光ラン**

證類本草曰、圖經曰、藜蘆二月生レス苗ヲ、葉青、似タリ初出椶心ニ、又似タリ車前ニ、莖似テ葱白ニ、青紫色、高サ五六寸、上有ニ黑皮一裹ミ莖ヲ、似タリ椶皮ニ、其花肉紅色、根似テ馬腸根ニ、長サ四五寸許、黄白色、今マ用ル者ハ名ク葱白藜蘆ト、根鬚甚少、只是二三十莖、生スル高山ニ者ヲ爲ス佳ト。按、生高山者ト云ハ蒜藜蘆ニゾ、バイケイサウ也

一名 **也末宇波良** 本草和名曰、藜蘆ノ和名也末宇波良、一名之ミ乃久比乃岐。按之ミ乃久比乃岐ハ其蘆頭如ニ椶皮ニ毛アリテ野猪鬣ニ似タルヲ云、即日光蘭ノ蘆頭ヲ指也

之ミ乃久比久佐 醫心方曰、藜蘆。之ミ乃久比久佐

夜末宇

波良 倭名類聚鈔曰、藜蘆 和名夜末宇波良、一云之之乃久比乃木

之之乃久比乃木 見上

也末宇波良 本草類編

夜万宇波羅 藻塩草曰、藜蘆、夜万宇波羅

離留 出雲國風土記曰、仁多郡所在草木、附子狼牙離留石斛○按ニ倭名鈔王不留行註云、今案一本留作流、日本書紀云、礀掌此ヲ云陀毗盧箇須也、雄誥此ヲ云烏多鷄盧。觀此則離留ハ藜蘆ノ音ヲ借テ書ル者也

梨蘆 延喜式

集註

延喜式卷第三十七曰、典藥寮。遣諸蕃使。唐使、藜蘆云云各二斤。渤使、藜蘆云云各一斤。諸國進年料雜藥。伊勢國、藜蘆二斤四兩。飛驒國、藜蘆十斤

形狀

○本草原始曰、藜蘆生泰山山谷、莖似葱白、高四五寸、上ニ有黑皮裹レ莖ヲ、似棕皮、因形類ヘルニ物故ニ一名葱苒、一名葱葵、一名山葱。藜、黑色、蘆、虛也。莖中虛ニシテ如シ葱管、故ニ俗ニ呼テ葱管藜蘆ト、本經名ヅク葱白藜蘆ト、因下根下戳エ極テ似ルニ葱白ニ市スル者。本草綱目、時珍曰、黑色曰レ藜 其蘆有黑皮裹レ之、故ニ名ク、根際似レ葱俗ニ名ク葱管藜蘆ト。卽日光ラン一名シュロサウ也。深山樹下ニ多シ、春苗ヲ生ズ、白芨(シラン)葉ニ似タリ、夏一莖ヲ抽、一二尺、梢ニ穗ナシ、六瓣紫黑花ヲ開、白薇花ニ似タリ。香ヒ人糞ノ氣ノ如シ、故ニ蠅多ク花ニ聚ル。後綠色三稜ナル實ヲ結ブ。其根葱莖ノ如ク、黑毛アリテ包メリ、下ニ白色鬚根アリ、葱根ノ如シ○本草原始曰、又タ有リ如キ蒜ノ者ノ、每ニ呼テ爲ス蒜藜蘆ト。卽バイケイサウ也和州ノユリバ是也高山ノ頂上ニ多シ、春苗ヲ生ジ、一莖ヲ抽、高二尺餘、葉互生シテ車前葉ニ似テ鋸齒ナク、質ハ白芨葉ノ如ク縱道多シ、六月梢ニ穗ヲナス、白色五出ノ花多ク聚リ開ク、其根葱蒜ノ如シ

○於毛止久佐（オモトグサ） 本草和名 〔漢名〕萬年青 花鏡 〔今名〕ヲモト

農圃六書曰、千年藍、一名萬年青。葉濶叢生、深綠色、冬夏不レ枯、吳中家々植レ之 〔一名〕老母草 藻塩草曰、老母草。をもと。頓医抄曰、癩病消毒惣藥方老母草（ヲモト）ハヲル艸 頓医抄曰、馬腸草、薬戸トモナヅク、又ハヲル艸ト云也。馬腸草ハ馬腸根也。和產未レ詳 万年草 尺素往來曰、雜草木者、一夏草、万年草、金徽草、吉祥草〇按ニ尺素往來ノ万年草ハ高野ノ萬年草、日光ノ萬年草ノ類ニ非ズ、卽萬年青ノヲモトヲ云ル也 をもと 仙傳抄 〔集註〕仙傳抄曰、をもとの立樣、又もとに竹をさし、きんせん花のたけ也

〔今案〕上代ニ用ル藜蘆ハ眞物ナルベシ。本草類編曰、藜蘆。和也末宇波良、又云於毛止久佐。三月採根陰干。此頃藜蘆ニヲモトヲ用ヒタルトミエタリ。本草啓蒙曰、古ヨリ藜蘆ヲ誤リテヲモト、訓ズ、故ニ和方書ニ藜蘆ト云フハ皆ヲモトヲ指ス

都多宇路之（ツタウロシ） 大同類聚方 〔漢名〕野葛 本草 〔今名〕ツタウルシ

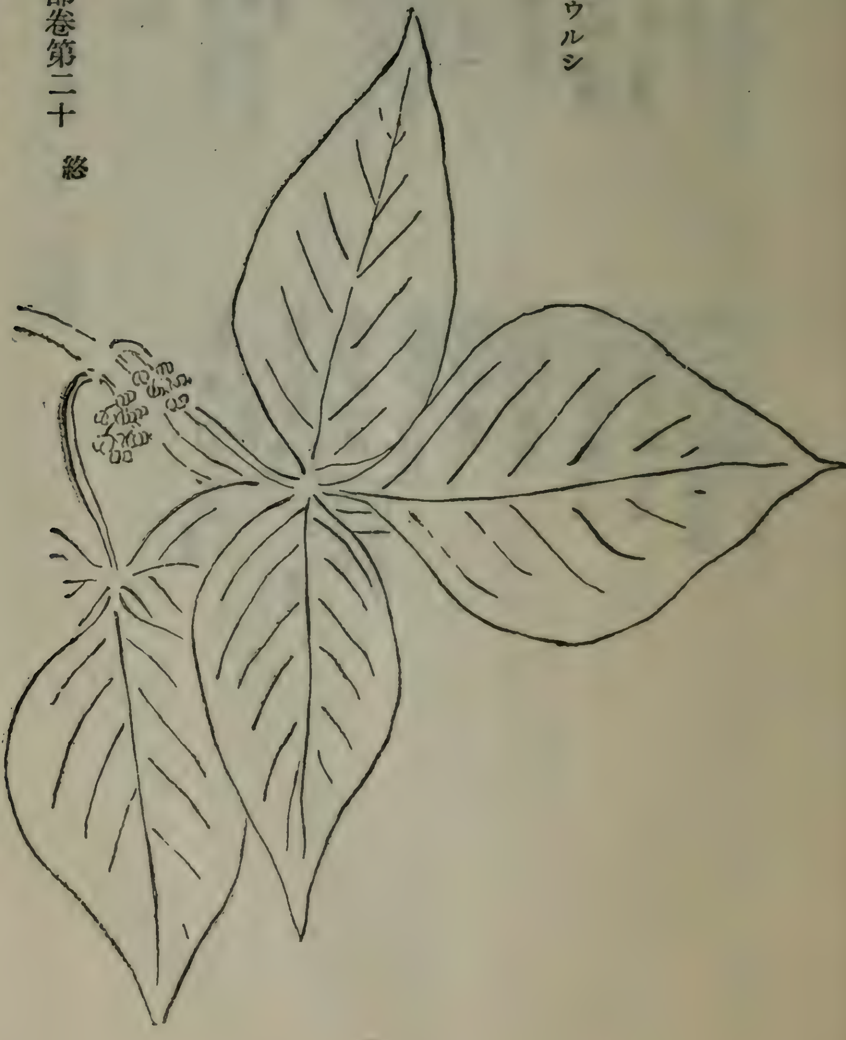
物理小識曰、斷腸草、一枝三葉、大ニナリ於ニ蘘ヨリモ、食レ之ヲ輒死。證類本草曰、唐本注云、野葛生ニ桂州以南ニ、村墟閭巷間皆有、彼ノ人通ジテ名ヅク鉤吻ト、蔓生葉如シ柿葉ニ、本草綱目、鉤吻註、時珍曰、廣人謂フ之ヲ胡蔓草ト、亦曰フ斷腸草ト 〔集註〕

律曰、凡以毒藥藥人、及賣ル者ハ絞云云謂以鴆毒冶葛烏頭附子之類

今案 享保年中ノ書普救類方ニ、ツタウルシノ毒ニアタリタルヲ治スル方ヲ載ス。此草深山ニ多シ、莖蔓ヲナシ地錦(ツタ)ノ如ク地ニ蔓延シ、大木ニ攀テ登ル、葉三枚附一葉ヲナスヿ地錦ノ如シ、初生ノ葉ニアラキ鋸齒アリ、年ヲ經タル莖ニ生ズル葉ハ漆(ウルシノ)葉ニ似テ大ナリ。莖赤ク切レバ白乳汁出、夏月葉間聚リ小花ヲ開、黄白色、後實ヲ結テ、大麻子ノ大サニシテ、國土ノ菓子及續隨子ニ似タリ、初緑色、熟テ黄白色、冬葉落ル〔吉野拾遺曰、おなじ比、先帝の御廟のうしろのかたに異木のおひ出けるを、誰もしらで過にし、その年三尺あまりにのびけるまゝに、人見つけにけるに、いかなる木ともしらず、木の皮はさくらにひとしくて、葉はかつらのやうにて、それよりはいと大き也。またのとしの春きさらぎの比に、花の咲けるをみれば、つばきのなりしてひらけたるが、五寸ばかりもあるらむ、色はちしほのくれなゐもおよびがたき程になん有ける。しぼみちりて、秋の半に實のなりけるが、いと大きなる柿のなりして、はじめより花の色のごとくにあかゝりけり。ふるき山人あまためし出されて、たづねさせけれども、しれるものなし。てんやくのかみも、ふるきふみにも見え侍らずと奏し奉れば、かくあやしきものはさて有なんとて、まはりをきびしくかこはせて、人をつけてまもらせ玉ひけるに、源康村が下づかへのわらは、よるひそかに此實をぬすみとりてくらひけるに、あぢはひのかうばしきことは、ものになぞらふべくもあらずといひけるが、かしらよりあしのさきまでたゞあかくなりぬることたとふべくもあらず、こゝちそこなひ二三日して死にけり。その木もしはすばかりの雪にあひてかれにけり。いとあやしき事にこそ有けれ。ト覩ユ。此木恐クハ鉤吻ノ類也。本草綱目、時珍ノ說ニ、

此草或ハ作ニス冶葛ハ入レハ人畜腹內ニ、卽粘ニ腸上ニ半日ニシテ則黑爛ス、滇人謂ニ之ヲ火把花ハ因ニ其ノ花紅ニシテ而性熱如ニレ火ノ也ト云リ○黃精葉木本、鉤吻ハ牛コロシ加州越前方言又牛コロシバト云上州人曰、或農人牛ヲ使フヿアシクシテ、其牛怒テ其角ニ觸ントス、逃テ傍ナル大樹ニ登リ、此木ノ枝ヲ以テ擊チ、牛卽斃ル、故ニ名クト云、東國北國通名也 一名黃楝樹地錦抄 此木北國ニ極テ多シ、關東ニモ自生ス、高サ七八尺ニ至ル、莖方ニシテ葉對生ス、形狀龍膽ノ葉ニ似テ大也。本濶末尖リ三縱道アリ、六月枝ノ末ニ穗ヲナシ、深紅色ノ花ヲ開ク、花後實ヲ結テ豌豆ノ大サ、三稜アリテ、續隨子ツタウルシノ子ニ似テ、深紅色深クシテ黑色ヲ帶甚美也、冬ニ至テ葉落ル、此木尤人ニ毒ス、東北國ノ人ハ其毒木ナルヿヲ知ル

野葛
ツタウルシ



古名錄草部卷第二十　終

古名錄草部卷第二十一目錄

蔓草類

布治（フチ）　紫藤〇不知乃美（フチノミ）〇藤ノ疣（コブ）〇白藤

阿加祢（アカネ）　茜草

都多（ツタ）　地錦〇阿末都良（アマツラ）千歳蘽

阿介比加都良（アケビカツラ）　木通

神衣比（カミエビ）　木防已

佐那葛（サナカヅラ）　南五味子

祢奈之久佐（ネナシグサ）　菟絲子

加良須宇利（カラスウリ）　栝樓

土古呂（トコロ）　萆薢〇於尒止古呂（オニトコロ）

久受（クズ）　葛〇くす花葛花〇葛粉

阿佐加保（アサガホ）　牽牛〇けにこし牽牛子

磨左棄逗羅（マサキツラ）　漢名未詳　充扶芳藤非

菟頭邏（ツヅラ）　漢防已

牟久良（ムグラ）　葎草

乃世宇（ノゼウ）　紫葳

須比加都良（スヒカヅラ）　忍冬

比佐己宇利（ヒサゴウリ）　王瓜

須末呂久佐（スマログサ）　天門多

佐留止利（サルトリ） 菝葜
佐宇毛久佐（サウモクサ） 土青木香
衣比加都良（エビカヅラ） 蘡薁
比佐古都良（ヒサコツラ） 烏蘞苺
屎葛（クソカヅラ） 女青
保呂之（ホロシ） 白英
也末加々美（ヤマカヾミ） 白斂
加々美（カヾミ） 蘿藦
布止都良（フトツラ） 百部
定家葛（テイカカヅラ） 絡石
宇波加川々曾（ウバガツヽソ） 何首烏
熊葛（クマカヅラ） 山藤

通計三十八種

古名錄草部卷第二十一

紀藩　源　伴存撰

蔓草類

〔漢名〕**紫藤** 本草　〔今名〕**フヂ**　〔一名〕**輔治** 續日本紀卷第廿九曰、**布治**(フヂ) 萬葉集

救荒本草曰、藤花菜科條叢生、葉似ニ皂角葉一而大、又似ニ嫩椿葉一而淺黃色、枝間開ニ淡紫花一、味甘。本草綱目曰、紫藤。藏器曰、四月ニ生ス紫花一可レ愛

高野天皇神護景雲三年五月乙未、吉備藤野和氣ノ眞人清麻呂等賜ニ姓ヲ輔治能眞人一、外從八位上吉備藤野宿禰子麻呂、從八位下吉備藤野宿祢牛養等十二人ニ輔治宿祢。同第卅、詔曰、從五位下因幡國員外介輔治能眞人清麻呂云云。又曰、從五位下輔治ノ眞人清麻呂爲ニ因幡員外介一

敷治 萬葉集卷第十八曰、數治奈美能、佐伎由久見禮婆。同卷第十九曰、數治奈美乃、志氣里波須疑奴云云。同卷第十四曰、波流敝左久、布治能宇良葉乃、宇良夜須(ヤスニ)爾。同卷第十七曰、布治奈美波、佐岐底知里爾伎。同卷第十八曰、敷勢能宇良末能、布治奈美爾

藤 萬葉集卷第三曰、藤浪之、花者盛爾、成來云云。同卷第八曰、戀之家婆(コヒシケヘ)、

形見爾將爲跡、吾屋戸爾、殖之藤浪、今開爾家里。同卷第十七曰、伊毛我伊敝爾、伊久里能母里乃藤花伊麻許牟春毛、都禰加久之見牟（○歴添墳雲鈔卷第九曰、藤木輿草輿ニ云事。草ヲ篇ニシタガヘテ、カヅラノ類ナレバ草ナルベシ。昔尾張國春部ノ郡ニ國ノ造川瀬連ト云ケル者、田ヲ作リタリケルニ、一夜ノ間ニ藤生タリケリ。怪ミ恐レテ切リ棄ル事ナカリケルニ、其藤大ニ成ニケリ。其故ハ此ノ田ヲバハギダト云ヘルトカヤ。此事ヲ菅淸公卿、尾州記ニ云ヘルニハ、其藤漸ク大ニシテ如レ樹ノ、遂ニ号ストハ藤木田ト云ヘリ。俗ニ藤ヲバ波木トモ云ニコソ。如レ樹ト云ヘル、打任テモトヨリ木ト云ベキニ非ズ、仁和寺ニモ藤ノ木ト云所有レ之。同心歟。和泉國風土記曰、日根郡、山野所在草木藤。出雲國風土記曰、意宇郡、所在草木藤（○按、更生齋詩卷曰、古藤歌。藤相ヒ傳フ爲ス宋蘇文忠公寓スル孫氏宅ニ時手カラ植ヱ、今宅歸ス湯方伯雄業ニ。三月十九日湯公子招ニ同人ヲ宴ニ集花ノ下、即席ニテ賦レ此云云香氣已ニ過グ橋欄ノ東、半空紫織盆ク奇絶ナリ、千朶萬朶飛ニ玲瓏ト云云君不レ見紫藤ノ花開ニ黑池漲ニ古色。帝京景物略曰、吏部古藤吳文定公手カラ所レ植。藤在ニ吏部右堂ニ、質本ト蔓生而出レ土便已挺直、其引レ蔓也無ニ彝委之意。縱ニ逡十尺ニ。折ニ旋一區ニ方レ夏ニ而花ハ、貫珠絡纓每ニ一簇ニ一串、下ニ垂ス碧葉陰中ニ、端々向レ人、莖則豆花、色則茄色紫光一庭中トミユ。和漢藤ハフヂナル證トスベシ（○字典曰、藤。說文、藟也。今總呼ニ草蔓莚如レ藟者ニ

布知 倭名類聚鈔曰、藤。和名布知。同國郡部曰、肥前國藤津布知豆。上野國勢多郡藤澤、布知左波

布遲葛 古事記曰、即其母取ニ布遲葛ニ而一夜之間織ニ縫衣褌及襪沓ニ云云悉成ニ藤花ニ云云尒伊豆志袁登賣思ヒ嘆ニ其花ニ

二季草 滿鹽草曰、藤。二季草異名也。ときはなる花ともみばやふたき草松にのみだにかゝる身なれば。藏玉にあり

むらさき草

藻塩草曰、松がえのみどりも見えずかゝりけるむらさき草の色のてこさよ。藏玉にあり

松見草

藻塩草曰、そよやけふおりあふ春もくれにけり松見草にもはなさきにけり。藏玉

布知かつら

藻塩草曰　黄環。布知かづら〔按黄環未詳

集註　源氏物語花宴曰、やよひの廿日あまり、右のおほ殿のゆみのけちに、上達部、みこたちおほくつどひ給て、やがて藤の花のえんし給。同こてふ曰、ふぢの花をかざして。同やどりぎ曰、あすとての日、藤つぼにうへわたらせ給て、藤のえんせさせ給、みなみのひさしのみすあげていしたてたり云とみなみの庭のふぢの花のもとに、すべらぎのかざしにおると藤の花をよばぬ枝に袖かけてけり。よろづ世をかけてにほはん花なればけふをもあかぬ色とこそみれ。きみがためおれるかざしはむらさきの雲におとらぬはなのけしきか。よのつねの色ともみえず雲井までたちのぼりける藤なみの花。古今著聞集曰、天暦三年四月十二日、飛香舎にて藤花の宴有けり。本朝無題詩曰、賦紫藤、藤原在良。云云紫藤花綻艶方深。又曰、紫藤晩艶與池巡。又曰、首夏即事、惟宗孝言。云云紫藤盃色夏來添。又曰、早夏言志、藤原敦光。云云粧期方歳紫藤繁。又曰、隔瀨紫藤花自倒。枕草紙曰、あてなるもの、藤の花。又曰、むかしおぼえてふようなる物、藤のかゝりたる松の木かれたる。宣胤卿記曰、文明十三年三月卅日、參二條殿烏丸西御新造、有一献於藤邊、又有御酒宴前殿御事思食　出賜御短册、御詠云、ともにみし春を忘れぬ藤浪はかへるになどかかへらざるらん。御返事、この庭に君をみるよりその君の面影もたつ池の藤浪。中御門宣胤。仙覺萬葉集註釋卷第一曰、藤のはなは、いたくこまやかにもあらぬものから、うつくしければ、あらたへのふぢといへり。ぬのゝ衣をよめるに、あらた

へのぬのゝきぬをだにきせがてにといへる、これにおなじきか。同卷第六曰、ふぢえのうら、播磨國にあり。むかし住吉大明神 藤のえだをきらせ給ひて、海上にうかべてちかひての給はく、この藤のよりたらんところを、我領とすべしとのたまひけり。しかるに、この藤、浪にゆられてよりたりければ、こゝを藤江浦と名づく。すみよしの御領也、 明月記曰、治承四年三月卅日、向法性寺、右武衛被渡、見藤花。文曆一年四月廿三日、申時許、密々乘輿行中院、見中嶋藤花。扶桑略記廿六曰、應和元年閏三月十一日、於釣殿有藤花宴。二水記曰、大永六年三月十七日、午後參內、女中御銚子事有之、御懸藤花迄年希有之盛也、及美醉了。百練抄卷第八曰、承安四年四月十九日、於勸學院有藤花宴。題云、藤爲佳會媒。世繼物語曰、藤花のいと面白を、是が盛をだに御覽ぜよなどいひて云々。貞治五年年中行事和歌曰、又ふぢつぼはせうやうしゃなり云々。又藤の花おもしろかりけるにや、中ごろはかへでの木にかゝりたる藤のよし、禁秘抄にもしるされたり。狹衣曰、やよひの廿日あまりにもなりぬ、御前の木だちなにとなくあをみわたりて、木くらきなかに、中嶋の藤は、松にとのみおもはずさきかゝりて、山ほとゝぎすまちがほなるに。高倉院升遐記曰、三まいだうへまいるみちにて、藤のさけるを見て。重之集曰、難波にて舟せうえうして、岸の藤のはなを折て、やかたにさして、くれにかへるとて。仙傳抄曰、藤をしんにたてべからず。その故は、木をたよりとしてそだつものなれば、ひつそへてたてべし。そのゆへは、ふぢのえだは、花おほくして、さしあひ出來ゆへに、しんにもちひず、下ぐさにたてべし。それも木と藤はなつのしたぐさに用ゆるなり。」藤に水をあぐるやう、花の木末をつゝみて、もとを一夜さけにつけてたてべし。」藤をしんにたつるは、木をたよりに立

べし。藤谷殿集曰、あづまにくだり侍けるに、淸見が關を過るに、岸のほとりに藤のさきたるを見て云〻。紫式部日記曰、つかひの君の、藤かざして、いとものく〵しくおとなひ給へるを。源平盛衰記卷第十一日、松ニ懸レル藤花　春ノ名殘モ惜顏ナリ。同卷第四十八日、若紫ノ藤花　墻根ノ松ニ懸レルモ、春ノ遺(ナゴリ)ヲ惜トヤ。撰集抄曰、藤の若葉の糸などにて骨をからげて。太上法皇御受戒記曰、鍮石水瓶一口。納ニ藤村濃結袋ニ。着ニ紫藤花枝ニ。袋草紙曰、俊重ノ君於ニ或宮原ニ談ニ女房ニ于時持ニ藤花ニ女云、ソレガウラバト云〻。俊重不レ知ニ其故ニ默而止了ス。後日其由ヲ語ニ嚴閣ニ。俊頼ノ云、後撰ニ、藤ノウラバノウラトケテト云歌不知歟、如何ト。答云　知給歟、藤ヲ持タルヲ見テ、ソレガウラバト云ハ非ニ件歌之意ニ哉、如ニレ此ノ事不レ能ハレ致ノ事云云。後醍醐天皇年中行事曰、前二日ばかりに試樂の事有云〻かざしの臺をとりおろして、一づゝ上達部に傳ふ。垣下の大臣先すゝみよりて、芴さし藤の花をとりて、使のかうぶりにさす

形狀

榮花物語曰、三月卅日がたに、いとしなびながく、はなおもしろきふぢを、たてまつらせ給て、たかづかさどのより、ふぢつぼのはなはことはりをとらじとみなもとさへもひらけたる哉。御かへし。みや、ふぢのはなかみさびにけるみなもとににほひをとれるするぞおりうき。からのかみに、いといまめかしくおかしくかゝせ給へりければ、とのゝうへいみじくめでたてまつらせ給けり云〻。三月つごもりがたに、ふぢつぼのふぢのはな、えもいはずおもしろく、へいにさきかゝりて、みかはみづをやりみづにほりわけて、ながさせ給へるに、さきかゝりたるいとおかし。源氏物語よもぎふ曰、おほきなる松に、藤のさきかゝりて、月影になよびたる、風につきて、さとにほふがなつかしく、そこはかとなきかほりなり。たち花にはかはりておか

しければ、さしいで給へるに。同こてふ曰、らうをめぐれるふぢの色もこまやかにひらけゆきにけり。同野分曰、かのみつるさま〴〵のさくら山ぶきといはゞ、これはふぢの花とやいふべからん、こだかき木よりさきかゝりて、風になびきたる匂ひはかくぞあるかしと思ひよそへらる。同藤のうら葉曰、四月のついたち比、おまへのふぢの花、いとおもしろうさきみだれて、よのつねのいろならず。たゞにみすぐさむ事おしきさかりなるに、あそびなどし給て、くれゆくほどのいと色まされるに、わが宿の藤のいろこきたそがれにたづねやはこぬ春の名殘を。云々たいのまへの藤、つねよりもおもしろうさきて侍なるを、云々春のはないづれとなく、みなひらけいづる色ごとに、めおどろかぬはなきを、心みじかくうちすてゝちりぬるが、うらめしうおぼゆるころほひ、この花のひとりたちをくれて、夏にさきかゝる程なん、あやしう心にくゝ、あはれにおぼえ侍る。いろもはた、なつかしきゆかりにしつべしとて、云々頭中將、はなの色こく、ことにふさながきをおりて、まらうどの御さかづきにくはふ。とりてもてなやむに、おとゞ、むらさきにかごとはかけんふぢの花まつよりすぎてうれたけれども云々いたうけしきばみよこたはれる松の、こだかきほどにはあらぬに、かゝれる花のさま、よのつねならず、おもしろし。同若菜曰、このふぢよ、いかにそめけん、色になをえならぬ心ちそふにほひにこそ云々よくさきこぼれたる、ふぢのはなの、夏にかゝりて、かたはらにならぶ花なきあさぼらけの心ちぞし給へる。同まぼろし曰、藤はをくれていろづきなどこそすめるを。同竹川曰、かの御かたの御まへちかくみやらるゝ、五葉に藤のいとおもしろくさきかゝりたるを。年中行事歌合曰、又藤の花おもしろかりける

にや、中ごろは、かへでの木にかゝりたる藤のよし、禁秘抄にもしるされたり。仙覺萬葉集註釋卷第十五曰、又藤もむらさきにはさきながら、しろみのおほくみゆれば、しろたへといへるにやあらん。平家物語卷第四曰、きしに色ふかき藤の、松の枝に咲かゝりけるを、上皇ゑいらん有て、あの花折につかはせと、おほせければ、大宮の大納言たかすゑの卿うけ給つて、左史生中原のやすさだがはしふねにのつて、折ふし御前をこぎとをりけるをめして、折につかはす。藤の花を松の枝につけながらおりて參せたりければ、心ばせ有などおほせられて、御かん有けり云々。同卷第六曰、松に藤なみさきかゝつて、まことにおもしろかりければ。同卷第十二曰、中じまの松にかゝれる藤なみの、うらむらさきにさける色。枕草紙曰 藤の花しなびながく、色よくさきたるいとめでたし。又曰、あてなるもの、藤の花。又曰、めでたきもの、いろあひよく、花ふさながくさきたる藤の、松にかゝりたる。又曰、むらさきのかみをつゝみてふんじて(封)、ふさながき藤につけたるもいとおかし。撰集抄卷第一曰、うらむらさきの藤の花、なにとて松にかゝりそめけるぞと。又曰、松にかゝればうらむらさきの藤の花。つれ〴〵曰、藤のおぼつかなきさましたる。伊勢物語曰、なさけある人にて、かめに花をさせり。其花の中に、あやしき藤の花有けり。花のしなび三尺六寸計なん有ける

○不知乃美（フヂノミ） 本草類編　【一名】布知乃美　本草和名曰、狼跋子。和名不知乃美。本草類編曰、狼跋子。和不知乃美 生花紫色 ふちの見　藻塩草曰、狼跋子。ふぢの見　【今案】夢溪補筆談曰、黃鐶即今之朱藤、葉如槐、其花穗懸紫色、園圃中作架種之、謂之紫藤花是也、實如皂莢、蜀都賦所謂青珠黃環者即此藤之根也、

古今皆種以爲庭檻之飾、和漢古ヨリ此説アルニ據トミエタリ。本草綱目黃環註、時珍曰、此物葉黃而圓、故名黃環、跋乃狼足、名、其莢似之、故曰狼跋子。狼跋子未詳

○藤ノ疣 沙石集

〔集註〕沙石集卷第二曰、或在家人、山寺ノ僧ヲシンジ、世間出世フカクタノミテ、病事モ有レバ、藥マデモ問ケリ。此ノ僧醫骨モナカリケレバ、ヨロヅノ病ニ藤ノ疣ヲ煎ジテメセトゾヲシヘケル。シンジテコレヲモチフルニ、ヨロヅノ病イヘズトイフコトナシ。或時馬ヲウシナヒテ、イカヾ仕ルベキトイヘバ、例ノ藤ノ疣ヲセンジテメセトイフ。心得ガタケレドモ、ヤウゾ有覽トシンジテ、アマリニ取盡シテ近々ニハ無カリケレバ、山ノ麓ヲ尋ケルホドニ、谷ノホトリニテウセタル馬ヲ見ツケテケリ。是モ信ノイタス所也

○白藤 言塵集 〔漢名〕白藤花 畫舫錄

楊州畫舫錄曰、城西錄秋雨庵院中綠萼梅一株白藤花一株緣木而生

〔形狀〕○地錦抄曰、白藤花しろし。按白フヂハ花紫花ノモノヨリ短クフトシ、穗亦紫花ヨリ短シ

久受 萬葉集 〔漢名〕葛 詩經 〔今名〕クズ

本草綱目、時珍曰、葛有野生、有家種、其蔓延長、其根外紫内白、長者七八尺、其葉有三尖、如楓葉而長、面青背淡、其花成穗、纍纍相綴、紅紫色、其莢如小黃豆莢、亦有毛、其子綠色扁扁如鹽梅

子孩ハ生ニ嘶ハ肥氣アリ○

按家生ノ葛和産未詳

一名 **田葛** 萬葉集卷第三曰 延葛乃、彌遠永。一云田葛根乃、彌遠長尒。同卷第十曰、我屋戸之、田葛葉日ニ殊、色付奴、不座君者、何ニ情曾毛。同卷第十二曰 水莖之、崗乃田葛葉緒、吹變、面知ル兒等之、不見比鴨。同卷第十六曰、延田葛乃

加豆 古事記曰、望ニ葛野ヲ歌曰、知婆能 加豆怒袁美禮婆云云

伽豆 日本書紀、應神天皇御歌曰、知婆能、伽豆怒塢彌例麼云云

加止 倭名鈔國郡部曰、山城國葛野、加止乃 下總國葛餝、加止志加

加度 倭名鈔國郡部曰、山城國葛野郡、葛野加度乃

眞田葛 萬葉集卷第七曰、姫押、生澤邊之、眞田葛原 何時鴨絡而、我衣將服。同卷第十曰、眞田葛延 夏野之繁云云、同卷第十二曰、眞田葛延、小野之淺茅乎云云

眞葛 萬葉集卷第十曰、眞葛原、名引秋風吹每 和泉國風土記曰、日根郡山野所レ在草木、眞葛

麻矩儒 日本書紀天智天皇紀、童謠曰云云麻矩儒播羅云云

くず 枕草紙曰、哥の題は、くず。萬葉集卷第十二曰、大埼之、有礒乃渡、延久受乃、徃方モ無ク哉、戀渡南。同卷第十四曰、久受葉我多。同卷第二十曰、波布久受能、多要受之努波牟云云

久須加豆良 倭名類聚鈔曰、葛。蘇敬本草注云、葛穀。一名鹿豆 和名久須加豆良乃美 葛實名也。葛脰 和名久須加豆良乃祢 葛根入地五六寸名也

久須加川良 本草類編曰、鹿藿、和久須加川良○ 按鹿藿ハ、ヘンカハニメ葛ト別物也

久須 本草和名曰、葛根。和名久須乃祢。倭名抄國郡部曰、河内國交野郡葛葉、久須波。類聚國史曰、延曆十一年閏十一月、庚寅、遊ニ獵シ玉フ于葛葉野ニ

蔦 源平盛衰記卷第七曰、嘉應元年冬ノ比、日代ニテ衛門

手本作藤ニ
干ル本作
群ニ後乎

尉政友ヲ當國ヘ被レ下ケルガ、美濃國杭瀨河ニテ宿ヲ取リ、山門領平野庄ノ神人蕭ヲ賣テ出來レリ、政友是ヲ買ントテ、高下ヲ論メ樣々ニナブル程ニ、蕭ニ墨ヲゾ付タリケル。同卷第卅三曰、兵衞佐ハ布衣ニ蕭袴ヲ著セリ。延喜式卷第二十八曰、兵部省。肥後國、驛馬云云蕭原。按蕭葛誤也○爾雅、蕭ハ山蒜ノビル也

集註 本草類編曰、葛根。和久須乃祢、五月採根暴乾。延喜式卷第三十七曰、典藥寮。諸司年料雜藥。木工寮、云云葛根各三斤。遣諸蕃使。渤使、云云葛根各二斤。諸國進年料雜藥。山城國、葛根卅二斤。伊勢國、葛根十斤。近江國、葛根廿二斤八兩。紀伊國、葛根十一斤。萬葉集卷第四曰、夏葛之、不絕使ど乃云云。同卷第七曰、葛引吾妹。出雲國風土記曰、意宇郡、所在草木葛根。嶋根郡、所在草木葛根。出雲郡、所在草木葛根。神門郡、所在草木葛根。飯石郡、所在草木葛根。大原郡、所在草木葛根。和泉國風土記曰、日根郡、所在草木葛根。伊賀國風土記曰、名張郡、出葛根。箕曲山 出葛根。狹田鄉、出葛。賀羅埋土鄉、出葛根。駿河國風土記曰、鷹河郡手越、貢葛根。羅細道、貢葛根山藥獨活等。益頭郡山西、貢葛蕨。飽波井、貢葛蕨。太神宮參詣記曰、神のいがきをこえしくずのはに。狹衣曰、くずはいか〻る松かげの氣色も、久しら見給はざりつる程に。太平記曰、岡邊ノ眞葛裏枯テ、物ガナシキ夕暮ニ。源氏物語若菜曰、神のいがきにはふくずもいろかはりて。同夕霧曰、山風にたへぬ木〻のすゑも、みねのくずばも心あはた〻しう、あらそひちるまぎれに。顯季家集曰、くずのうら葉風になびくも云云

藥製 頻医抄曰、乾葛白ヲ用皮ヲステ、キザメ

附方 頻医抄曰、腰イタハ生葛根ヲケヅリテ汁ヲノメ

形狀 源氏物語あげまき曰、みし人もなき山ざとの岩かきに心ながくもはへるくずかな。

枕草紙曰、くずの風にふきかへされて、うらのいとしろく見ゆる、おかし○葛ハ其葉白扁豆葉ニ似テ薄ク、背淡白、葉ノ横ニ凹ニメ莖ニ毛アリ、七月穗ヲナシ、七八寸豆ノ花ノ如キ紅紫花ヲ開ク、花後莢ヲ結テ、痩タル黄豆(マメ)莢ノ如ク毛アリ

○くず花 撰集抄 【漢名】葛花 本草 【今名】クズノハナ

【集註】延喜式卷第三十七曰、典藥寮。諸國進年料雜藥。上總國、葛花云云各一斤。若狹國、葛花三兩。紀伊國、云云葛花各一斤。萬葉集卷第八曰、葛花。撰集抄卷第四曰、お花くず花露しげく云云。又曰、お花くず花露ちりて云云。安房國風土記曰、平群郡、貢葛花。石井、貢葛花

○葛粉 本草 【今名】クズノコ

證類本草曰、圖經曰、葛根。今人多以作レ粉ト食フレ之ヲ、甚益スレ人ヲ、下品ニ有ニ葛粉ノ、卽謂レ此也

【集註】和泉國風土記曰、日根郡賀美鄉、貢栗葛粉。駿河國風土記曰、安弁郡大河內、產葛粉蕨。中河內、貢葛粉蕨。富士郡阿波山、貢葛粉。廬河郡、貢薯蕷葛粉

【附方】痢病治方 頓医抄曰、葛ノ粉ヲ堅ク練テ多可レ服

阿加禰（アカネ）　本草和名　【漢名】茜草　本草　【今名】アカネ

本草綱目、茜草。集解、保昇曰、葉似棗葉、頭尖下闊、莖葉俱濇、四五葉對生節間、蔓延草木上、根紫赤色。時珍曰、茜草。十二月生苗、蔓延數尺、方莖中空有筋、外有細刺、數寸一節、每節五葉、葉如烏藥葉而糙澀、面青背綠、七八月開花、結實如小椒大、中有細子。

【一名】安加禰　本草類編、本草和名曰、茜根。和名阿加祢。倭名類聚鈔曰、茜。和名阿加祢。新猿樂記曰、本朝物茜。萬葉集卷第一曰、茜草指、武良前野逝、標野行

赤根　萬葉集卷第二曰、赤根刺、日之盡、既白物云云。茜刺、日者雖照有。同卷第四曰、赤根指、照有、月夜爾。同卷第十二曰、赤根指、日之暮去者。同卷第十六曰、赤根佐須、君之情志。砂石集曰、又或僧內々濫行ニメ、愛染ノ法ニ付テ、敬愛ノ秘法ヲ習フ、彼相照物ヲ赤色ニ染ルニ、ツヤ〲赤根ノ色ツカズ、アタラシキ絹ノ白キニスベテツカザリケリ。類聚雜要抄曰、舞姬裝束云々丑日云云茜染打袙一領。茜染三重袴一腰云々。寅日茜染打袙一重。同三重袴一腰。五尺屛風云々番絹五尺三寸茜染　東宮御書始部類記曰、茜染衾一帖○アカ子染ヲ東西洋考ニ稱絳ト云

安可禰　萬葉集卷第十九曰、安可禰佐須、比流波毛能母比。同卷第二十曰、安可禰佐須　比流波多多婢豆

阿加奈　倭名鈔國郡部曰、尾張國中島郡茜部、阿加奈倍。延喜式神名記曰、美濃國厚見郡茜部神社○明月記曰、寬喜二年正月十五日云云蒙瓶所、以悤々唐物等造箇袋御騎棚等、以唐赤根爲蒙瓶面、絲衫爲裏

【集註】本草類編曰、茜根。和安加祢。

十斤八十六斤九兩ノ誤カ

四十雲州本作卅

十京本貞享本作千

二月二月採根暴干。賦役令曰、其調副物、正丁一人、茜二斤。三代實錄卷第四十曰、元慶六年冬十月十四日己丑、禁男女着茜紅花交染支子之色、不論淺深、無聽服用、以其色渉淺黃丹也。延喜式卷第一曰、鎭花祭云云茜十兩。狹井社、茜一斤。風神祭、茜十斤。同卷第六曰、齋院司。每年禊祭料。齋王料、茜大二十斤。人給料、茜大七斤十兩二分四銖。同卷第十四曰、縫殿寮。雜染用度、深緋綾一疋、茜大四十斤云云。帛一疋、茜大廿五斤云云。貲布一端、茜大十六斤云云。葛布一端、茜大七斤。淺緋綾一疋、茜大卅斤云云。帛一疋、茜大廿五斤云云。葛布一端、茜大十斤。同卷第十五曰、內藏寮。茜大十斤云云。造五月五日菖蒲珮所茜五十斤。御服料。云云用度茜三百十九斤十四兩四銖。中宮御服料。茜大百四斤十四兩。諸國年料供進。茜大二十斤。同卷第十七曰、內匠寮。染料茜大三百斤。同卷第二十三曰、民部下。交易雜物。太宰府、茜二千斤。同卷第二十四曰、主計上。凡中男一人輸作物、茜云云各二斤。伊賀國、中男作物、茜。伊勢國、中男作物、茜。武藏國、中男作物、茜。越前國、中男作物、茜。加賀國、中男作物、茜。越中國、中男作物、茜。美作國、中男作物、茜。備中國、中男作物、茜。安藝國、中男作物、茜。周防國、中男作物、茜。同卷第三十七曰、諸國進年料雜藥。攝津國、茜根一斤。安藝國、云云茜根各十斤。長門國、云云茜根各一斤。

落くぼ物語曰、よき帛糸綾茜草蘇枋紅藍などおほく奉り給へれば

俊頼髓腦抄曰、日のいるは紅にこそ似たりけれあかねさすともをもひけるかな○茜草ハ、秋彼岸ノ後ヨリ芽ヲ出ス、一根數莖、春ニ至リ蔓ヲ引テ延ブ、秋丈餘ニ至ル、莖四稜アリテ、糙澁短刺ノ如シ、葉節ニ五七葉對生ス、形狀棗葉ニ似テ軟ニメ鋸齒ナク、先尖リ縱道アリ。又烏藥葉ニ似タルモアリ、秋梢ノ葉間ニ小枝出、梢ニ聚リ小

形狀

花ヲ開、青黄色五瓣、花後實ヲ結ブ、黒色椒目ヨリ小也。
其根數條、土細辛ニ似テ香氣ナク、黄紅色鬚根多シ

阿佐加保 本草和名　［漢名］牽牛 本草　［今名］アサガホ

花卉百種ニ牽牛郎ト云。花鏡曰、牽牛三月ニ生ス苗ヲ、即作ル藤蔓ヲ、或ハ遶リ籬墻ニ、或ハ附ス木上ニ、長サ二三丈許、葉有リ三尖ニ如シ楓葉ノ、七月生シ花ヲ不作瓣ヲ、白者紫花黒者碧色花、結レ實ヲ有リ白皮ニ裹ミ作ス毬ヲ、毬内有リ子四五粒ニ○藻塩草曰、あさがほ。朝のかほ也。ねくたれの花の朝かほ秋霧におりかくしつゝ見えぬかな。草によせても、又たゞもいへり。わぎもこがあさがほとよめり

［一名］**安佐加保** 本草類編○本草和名曰、牽牛子。和名阿佐加保。倭名類聚鈔曰、牽牛子。和名阿佐加保

安佐我保 萬葉集巻第十四曰、和我目豆麻、比等波左久禮杼、安佐我保能、等思佐倍己其登、和波佐可流我倍

朝容貌 萬葉集巻第十曰、展轉、戀者死友、灼然、色庭不出、朝容貌之花

朝貌 萬葉集巻第八曰、秋野爾、咲有花乎、指折、可伎數者、七種花 芽之花 乎花 葛花、瞿麥之花、姫部志、又藤袴、朝貌之花。同巻第十曰、言出而、云忌染、朝貌乃、穗庭開不出、戀爲鴨○塵添壒囊抄巻第九曰、牽牛子事、槿ノ實ヲ牽牛子ト云ヲ、不尓ト云義アリ。如何。是常ノ義ナレ共、未ダ諳カノ本説ヲ不見、乍去古ヨリ普ク槿ノ實ヲ牽牛子ト云ゾ、仍順ガ和名抄ニモ、牽牛子ト書テ、アサガホトヨメリ。定テ由有歟。先ヅ朝顔ト云字數アリ、韻府ニ云、槿有ニ黄白者、一ニハ名ニ日及ト、毛詩ニハ槿ヲバ木ノ名

トメ、菫字ヲ用タリ、毛晃ニ曰、藁ハ草ノ名、亦ハ木ノ名、一ニハ名日及ト、一ニハ名舜華ト云云。尓雅ニ云、槿又ハ名舜其華朝生暮落ツ、一ニハ名日及ト、一ニハ名蕣華ト、蓋シ取一瞬ノ義、通テ作菫ト云リ。打思ウチニハ、草ノ名ナレバ、蕣ノ字ヲ正クスベキ歟ト覺ルニ、毛詩ニハ只无キ草冠舜ヲ用タリ、サレバ毛晃ニ曰、蕣ハ槿、詩ニ作ト舜ニ云云。韻會云、蕣ハ木槿、朝ニ華開、暮ニ落ツ、取瞬義ト云云、然バ槿、菫、蕣、舜共ニ朝顏アサガホ也。毛詩ニ云ク、有リ女ノ同スル車ヲ、顏如舜華ノト、蕣ハ朝ニ開、暮ニ落ツル花ナレバ、毛詩ノ和訓ニ、朝顏ト云事尤一瞬ノ義ニカナヘリ、然ニ牽牛子ノ華ノ本名ヲ、藤生花ト云、狀如シ扁ヘン豆ツノ、田野人ノ牽テ牛ヲ來テ、爲藥易ルカ之故ニ始テ此名ヲ得ト云リ。然レバ牽牛花ハ各別ノ事歟。サレバ宋人ノ詩ニ、槿花籬下ニ卜シム秋ノ事ヲ、早ク有リ牽牛上ル竹ニ來ルト云云。此詩ノ意モ、朝顏ト、牽牛トハ各別ト覺タリ、槿、蕣共ニ種々ノ註有レ共、未ダ牽牛ノ古事ヲ不見、然モ文書廣ケレバ何ナル本草ナンドニカ釋シ侍ルラン。既ニ順ガ和名ニ通メ讀メリ、定テ由侍ルニヤ

朝顏　**アサカウ**　下學集曰、牽牛花。倭訓ニ朝ノ顏也　文明寫本下學集曰、牽アサ牛ガウ花

あさかほ　枕草紙曰、哥の題はあさがほ。山家集曰、つゆもありかへすゞも思出てひとりぞみつる朝がほの花。袋草紙曰、なにおもふなにかなげくよ世の中はたゞあさかほのはなのうへのつゆ

しのゝめ草　藻塩草曰、異名也。藏玉にあり〇按ニ明月記曰、寛喜三年八月十日、萩花盛ニ開、每朝槿花養眼ヲ。天福元年七月十三日、曉小シ雨フル、槿籬之露頗ル有リ秋色。天福二年七月十四日、今朝槿花初開ク。同廿六日、陽景逐日ヲ熾ンニ盛ナリ、槿花辰時萎ム、草木有焦色。文曆二年潤六月廿二日、朝陽快ク晴レ、槿花開ク。觀此則古牽牛花ヲ誤テ槿花トナス、槿花ハ木槿ニメム

クゲ也、木槿ハ日出テ開テ、夕陽ニ萎メリ、牽牛花ノ辰時ニ萎ムニ異ナリ

集註 源氏物語夕がほ曰、さく花にうつるてふ名はつゝめどもおらですぎうき今朝のあさがほ。云々さしぬきのすそ露けげに、花のなかにまじりて、あさがほおりてまいるほどなど、ゑにかゝまほしげなり。同野分曰、あさがほのはひまじれるませに。平家物語曰、のきにはつたあさがほはひかゝり。高倉院升遐記曰、さしいでん日かげにあさがほのつねなきためしを思ひしりにしに云々。赤染衛門集曰、あさがほのはなをとくみんとて、つま戸をあけたれば、露いみじうをきたるを、朝がほのとくゆかしさにおきたればわれよりさきに露はゐにけり。

形狀 本草類編曰、牽牛子。和安佐加保、八月結實、七月生花有一種生之白黑色。源氏物語あさがほ曰、かれたる花どもの中に、あさがほのこれかれにはひまつはれて、あるかなきかにさきて、匂ひもことにかはれるを、おらせ給て奉れ給ふ。同やどりぎ曰、つねよりもやがてまどろまず、あかし給へるあしたに、きりのまがきより、花の色々おもしろくみえわたれるなかに、朝がほのはかなげにてまじりたるを、猶ことにめとまる心ちし給云々。あさがほをひきよせ給へる、露いたくこぼる。けさのまのいろにやめでむをく露のきえぬにかゝる花とみる〱。云々おり給へる花を、あふぎにうちをきてみゐ給へるに、やう〱あかみもてゆくも、なか〱色あはひおかしく見ゆれば、やをらさしいれて、よそへてもみるべかりけりしら露の契かをきし朝がほの花。曾我物語卷第三曰、さてもあだなるあさがほの、はなのうはづゆ、ときのまものこるためしはなきものを。同卷第十曰、さかり成あさがほの、日かげにしほるゝごとにくて云々。枕草紙曰、あさがほの露おちぬさきに文かゝんとて云々。仙覺萬葉集註釋卷第十曰、腰

轉、戀者死友。灼然、色匪不出、朝容貞之花。もろ〳〵の花おほくはさきて、二三日も四五日も、又それよりも久しくもありて、さかりすぎぬれば、風にしたがひてもちり、こゝろともちるならひなるに、あさがほはさきてほどなく、日かげにあたりてうちかへりまろぶなり。さてさき出たる時は、うつしの花の色ふかくみゆるが、なへふしぬれば、赤色にかへれば、われはふしまろびこひしぬとも、いちじろく色にはいでじとよそへよめるなり。撰集抄卷第一曰、そばなる垣に、あさがほの花のさけるに、露のをきて侍りけるが、おりふし風の吹て、露の落侍りけるをみて、打涙ぐみて、みるやいかにあだにもさける槿の花にさきだつ今朝の白露云々槿花をこそは、はかなきためしには申めるに、花にさきだつしら露、おちては更に跡もなく吹すぎぬる風、又とゞまる所も見えず、花又日かげに隨てしぼみ、日は虚山にかたぶきぬ。同卷第四曰、槿の日にあたるを見侍に、かはらぬは人の身なり、それ猶夕をまつ、我等はしらず、朝にやきえん、さかへる者たのしみはてず、かならずおとろふる時あり。同卷第五曰、見ずや、露をこそ、はかなき物とはいふめるに、今朝のまのあさがほの花におくれぬる事を

○けにこし 古今集　漢名 牽牛子 本草　今名 アサガホノミ

集註 延喜式卷第三十七曰、典藥寮。雜給料、牽牛子三斤十三兩。今昔物語九曰、かくあつき日、平張の下に三四時はさせて後、咽喉かはきてたえがたきときよび入て、空腹にしほからきもの李などを

肴にして、味損じて酸き酒のにごりたるに、牽牛子をすり入てのませば痢せずしてあらんや。尺素往來曰、山藥牛膝牽牛子香附子紫蘇荊芥乾姜厚朴苦辛茯苓橘皮白朮地黃鬼茸石灰硫黃並甘葛等之稱藥者 御所持之間不レ及レ獻レ之

【藥製】 福田方曰、牽牛子。胡蘆芭皆炒過テ使ヘ

【附方】 脚病 明月記曰、元仁二年二月十六日、心寂房來、病者吏不合、先可レ服ニ牽牛子ヲ由、剝ニ其ノ皮ヲ擂レ之ヲ以レ湯服セヨト示レ之 脚病ハ不レ瀉、當時不レ可レ加レ灸、灸治レハ必ス止レ痢云、又粥止痢

都多（ツタ） 駿河國風土記　【漢名】 地錦 本草　【今名】 ツタ

證類本草、絡石。註ニ曰、陳藏器云、地錦味甘溫無レ毒、主レ破ニ老血產後血結ヲ、婦人瘦損不レ能ニ飲食ヘルヲ、服中有レ塊淋瀝下盡赤白帶下天行心悶並煎レ服之ヲ、亦浸レ酒、生ニ淮南林下ニ、葉如ニ鴨掌ニ藤蔓著レ地ニ、有レ根亦緣ニ樹石ニ、冬月不レ死、山人產後用レ之、一名地噤、圖經ニ曰、地錦葉如ニ鴨掌ノ、蔓著ニ地上ニ隨レ節ニ有リレ根、亦緣ニ木石上ニ、又地錦草、註曰、絡石、注ニ有ニ地錦ニ是藤蔓ノ類、與レ此名同而其ノ類全ク別

【一名】

いはつな 仙覺萬葉集註釋卷第六曰、いはつなとは蔦（つたなり）也、つたなどの又わかがへりはへ出るごとくに、ならの都を又も見むかもと、つたによそへてよめる也

つたかつら 言塵集曰、つたかづら、何れもつるの有はかづら云

蔦 和泉國風土記曰、日根郡、山野所在草木薄蔦眞葛〇字典曰、蔦、寄生也。品字箋曰、蔦、寄生草也、亦作樢、即ヤシホ也。駿河國風土記曰、廬河郡

蘿細道、橘雅麿詠見須雅良都多布也

集註 萬葉集卷第二曰、延都多乃、別之來者。同卷第九曰、蔓都多乃、各向、向、天雲乃、別石往者云々。同卷第十七曰、布多我彌夜麻、波布都多能、由伎波和可禮受、安里我欲比。同卷第十九曰、古之地乎左之氐、波布都多能。榮花物語曰、きゞのもみぢもおりしりめでたきに、みどりのまつにつたのもみぢのめでたうかゝりたるに。平家物語卷第七曰、かきにつたしげれり。同卷第十曰、うづの山邊のつたの道、心ぼそくも打こえて。源氏物語東屋曰、はこのふたに、紅葉つたなどおりしきて、ゆへなからずとりまぜて。紫式部日記曰、御まへのありさまのおかしき、つたの色の心もとなきなど、くちぐ〵きこえさするに。覽富士記曰、道すがらともなひ侍る人の、もみぢしたるつたを、いかゞみるとてをくり侍りしに。東國紀行曰、藤枝とかいふ里過て、岡邊に着たり。うへの山口入て行に、蔦かへで霜がれて、いと心ぼそし。又曰、蔦のかれ葉ふみわけてけるに、まいりたれば。紹巴富士見記曰、宇津山にいたりぬ云々誠に蔦楓は茂り。善光寺紀行曰、うづの山は逢人もなし云々蔦のはを分侍るにも、きゝしにまさる心ちして云々うづの山より人をかへして、彼蔦の葉を送られしに。東關紀行曰、宇津の山をこゆれば、つたかえではしげりて、むかしのあとたえず。又曰、松にかゝれるつたの、心の色もほかにもことなる心地して。太平記卷第二曰、宇都の山邊を越行ば、蔦楓いと茂りて道もなし。同卷第二十六曰、在原中將の東の旅に露分し宇津の山邊のつた楓。仙傳抄曰、はしら花瓶は、けはしき所に生たる草木のごとし。藤、つた、いづれもつるなどのごとくなるがよし。眞はみじかく共、下へいかほどもさげべし。源平盛衰記卷第四十曰、垣根に蔦まとへり。撰集抄曰、秋の草門を閉て、ねやの蔦のしげりて。又曰、軒の苔垣

の蔦、風ぞ僅に拂侍る。曾我物語卷第十二曰、まことにかすかなるすまゐにて、かきにはつた、あさがほはひかゝり

形状 榮花物語鳥邊野曰、なかじまのまつにかゝれるつたのいろをみれば、くれなゐ、すわうのこきうすき、あをふきなるなど、さまぐ\のいろのきらめきたる、さいでなどを、つくりたるやうにみゆるぞよにめでたき。いけのうへに、おなじいろ\/\さまぐ\のもみぢのにしきうつりて、みづのけざやかにみえて、いみじうめでたきに。同つぼみはな曰、なかじまのまつのつたのもみぢなど、つねのとしはいとかうしもあらねど云々。源氏物語あげまき曰、そらをのみながめ給に、このふる宮のこずゑはいとことにおもしろう、ときはぎにはひかゝれるつたの、色なども物ふかげにみえて、とをめさへすごげなるを。枕草紙曰、神は、ゐがきにつたなどのおほくかゝりて、紅葉の色々ありし秋にはあへずと、貫之が哥思ひ出られて、つく\/\と久しうたゝれたりし、みこもりの神いとおかし」壓添壒囊抄卷第五曰、名寄歌ニ曰ク、守ル人ハマダツタナキニ河口ノ關ノ釘貫早朽ニケリ。ト侍リ。マタツタナキニトハ、拙キヲ蔦ニヨセタリ。蔦ハ未ダカ、ラヌニ、ハヤ朽ニケリト云ナルベシ

今案 本草綱目、木蓮附錄曰、地錦。藏器曰、生淮南林下、葉如鴨掌、蔓藤著地、節處有根、亦緣樹石、冬月不死、一名地噤。又石草類、地錦註曰 地朕、一名地錦、一名地噤、蔓延著地。葉光浮露下有光。保命歌括曰、枯痔膏。方里火又名鴨掌、用根。按此則唐ニテモ地錦紅葉スルコ和漢同例也。又葉如鴨掌ト云、例ハ廣事類賦曰、菜葉如鴨掌。格物論、葵有鴨脚之名。

○阿末都良（アマヅラ）　本草和名

〔漢名〕千歲藟　本草　○即地錦（ツタ）至冬葉落盡テ後莖ニ溜レル甘汁也

本草綱目、千歲藟。詿藏器曰、此藤冬只凋ス葉ヲ、大者盤薄ナリ、故ニ曰二千歲藟ト一。正字通曰、詩周南ニ南有二樛木一葛藟纍レ之、詿藟ハ葛ノ類、纍ハ猶レ繫也。本草綱目、時珍曰、古人謂レ藤ヲ爲レ藟ト。本草原始曰、生ニ秦山川谷ニ藤生蔓延ス木上ニ、似タルノ葛之草也、故ニ曰二葛藟ト、莖大サ如シレ椀、葉冬凋、莖不レ死、其藤盤纍ノ有下得ル二千歲ヲ一者上、故以二千歲藟一名之。按ニ地錦冬月葉脫ノ其跡小臼ヲナシ、蕣（ワサ）莢根ニ似テ高木ノ上ニ附着ク、其藤ハ葛ノ莖ノ太キニ似テ赭褐色、大ナル者如レ椀、毛ナシ、松樹ニ着ルモノ左右ニ根出テ蜈蚣ノ如シ、他木ハ不レ然、斷ハ甘汁自カラ下ル、絞リ取レバ其汁粘リテ甘汁ナシ。證類本草曰、千歲藟。汁味甘平無レ毒　主ル補ヒ五臟ヲ益シ氣ヲ續キ筋骨ヲ長シ肌肉ヲ去ル諸痺ヲ、唐本注云、此藤有レ得ル千歲ヲ者、莖ノ大サ如シレ椀、冬惟葉凋莖終不レ死セ、藤汁味ヒ甘ク、子ノ味ヒ甘酸、苗似ニ葡萄ニ。圖經曰、作レ藤ヲ生蔓延ス木上ニ、葉如ニ葡萄ニ而小シ、四月摘ニ其莖ヲ汁白ク而甘、五月開レ花、七月結レ實、八月採レ子、青黑微赤、冬惟凋レ葉、此即詩云、葛藟者也。按ニ地錦（ツタ）ハ初生莖糸ノ如ク細キ時節々根ヲ出シ、葉三尖ニメ岐深ク、三枚トナル。經年老藤ニ至テハ葉厚ク、大ニシテ岐三枚ニ不レ分、葡萄葉ノ如シ、苗蔓ト莖トニテ地錦、千歲藟ヲ分ツコ扶芳藤ト木蓮ノ如シ、苗蔓ハ扶芳藤實ハ木蓮也、其實豌豆ノ如ク青黑微赤色味甘酸

〔甘葛煎製法〕甘葛ハ延喜式ニ載テ、賜ル二大唐皇ニ一コ覲エタリ。尺素往來ニ云云甘葛（ツタ）等之和藥者、御所持之間不レ及レ獻レ之ト云、然レバ其頃迄ハ取レ甘葛汁ヲ法傳ハレルモノ也。地錦ハ其莖ヲ嚙ハ粘滑ニメ味淡ク甘汁ナシ、秋末葉落盡テ後、其莖中自然汁甚甘美也。搾（シボ）リ取

善卿甘
草煎詩
曝件存
件甘葛
云法久
煎。源
絶存遠
件其法
考煉以
煎。嘗
成賦之
之其再
慶。紀
造貢献
國處
製
亡。萬
存千歳
考其
方。釜
中去滓
煎淸
汁。箸
首點絲
似軟
糖。御
腌和成
湺餅
味。玉

レバ亦甘汁ナシ。蔓ヲ断テ、其流下スル汁ヲ取ルベシ。又竹瀝ヲ取ル如ク、火ヲ以テ攻テ取ルベシ、其汁ヲ煎煉スレバ甘葛煎トナル。物ニ粘シテ糸垂ル。叢集類抄ニ、はしにかくればいとたるほどに煎せよト云此也。煎煉スレバ泡起ル。類聚雑要抄ニ、煎ス之其間アハノ立ト云此也。甘葛煎トナリテ、至テ甘美、口ニ入テ雑味跡ニ残ラズ、甘味忽ニ消ユ。叢集類抄ニ、あまづらはかなくさからず、さかくさからずト云 此也。日ヲ経レバ砂出テ、白砂糖ノ如シ。味尤上品也。類聚雑要抄曰、紅雪其形以レ名可レ知レ之、譬ハ如ニ砂糖ニ有ニ如レ雪物ニ也。云ニ砂糖ト謂ハ能キ甘葛之経堅ルシルニ砂ノ様ナル物タマリタルヲ謂フ。即此説ニ合セリ、益ヽ可レ證ス也。頓医抄曰、漆湯(アメリタシ)ノ上ニ、別ノ器物ニ入、甘ヅラ煉ヤウニ半日バカリ煉香シカラシメ。済曜抄曰、あまづら今の世ハ糖砂糖のやうに、食物に和して用る物之。雑記に甘づらはあまちやと云草の葉也ト云非也

一名 甘葛 延喜式。按ニ春夏秋葉アルヲ地錦(ツタ)トシ、冬黄落シテ後甘葛ト云、あをつゞら漢防已は生ナルヲ云、乾テ黒葛ト云。乎知(今マヤ)[illegible]也ハ其茵ニメ、其茎ヲ久ゝ多知立茎ト云。此等皆地錦(ツタ)茎ヲ甘葛ト云ト同例也

止ゝ岐 本草和名曰、千歳虆汁。蘇敬注云、有下得ニ千歳一者上茎ノ大サ如レ椀。和名阿末豆良、一名止ゝ岐

安末川良 本草類編曰、千歳虆。味甘无毒、和安末川良

阿末豆良 倭名類聚鈔曰、千歳虆。和名阿末豆良、俗用甘葛

阿末加豆良 天文寫本和名鈔曰、千歳虆。和名阿末加豆良、此間云甘葛

甘豆良 新撰字鏡曰、藷藤類、甘豆良

あまかつら 言塵集

甘かつら 同上。藻塩草曰、千歳虆汁。あまづら

集註 延喜

壺煉就白砂少。何須夷土烹。甘蕪。思昔本朝與外唐。藤原善御印三

二十二民部上トアルハ二十三民部下ノ課

斤京本貞享本斗ニ作是ナラム

伴存云アマツラハ日本諸國ユ出シ

式卷第五曰、齋宮。云云甘葛煎一斗伊勢。同卷第二十二曰、民部上。年料別貢雜物。伊豆國、云云甘葛汁二
斗。越前國、甘葛汁一斤。同卷第三十曰、大藏省。賜ニ蕃客ニ例。大唐皇、甘葛汁六斗。同卷第三十一曰、宮
內省。諸國例貢御贄。遠江、甘葛煎。駿河、甘葛煎。伊豆、甘葛煎。越前、甘葛煎。能登、甘葛煎。越後、甘
葛煎。丹波、甘葛煎。丹後、甘葛煎。但馬、甘葛煎。因幡、甘葛煎。美作、甘葛煎。備前、甘葛煎。備中、甘
葛煎。阿波、甘葛煎。太宰、甘葛煎。同卷第三十三曰、大膳下。諸國貢進菓子。伊賀國、甘葛煎一斗。遠江
國、甘葛煎二斗。駿河國、甘葛煎二斗。伊豆國、甘葛煎二斗。出羽國、甘葛煎二斗。越前國、甘葛煎一斗。加
賀國 甘葛煎。能登國、甘葛煎。越中國、甘葛煎一斗。越後國、甘葛煎一斗。丹波國 甘葛煎六斗。丹後國、
甘葛煎一斗。但馬國 甘葛煎。因幡國 甘葛煎一斗。出雲國、甘葛煎二斗。美作國、甘葛煎。備前國、甘葛
煎。備中國 甘葛煎一斗。紀伊國 甘葛煎七升。阿波國 甘葛煎一斗五升。太宰府、甘葛煎六斗。云云但甘
葛煎直進ニ藏人所ニ。同卷第三十七曰 典藥寮。中宮臘月 御藥。所レ須甘葛煎小一斗一升一合。雜給料。所
レ須甘葛煎 小五斗一升一合。諸國進年料雜藥 越中國、甘葛煎三升。丹後國 甘葛煎三升。因幡國、甘葛煎
三升。同卷第三十九曰、內膳司。年料絹小篩九十五口、云云甘葛煎所三口。云云薄絁篩二十五口、云云甘葛
煎料二口、各長二尺五寸。世繼物語曰、いま一の物は、ところをたき物あまづらなどひちくりて、かきあは
せて、大きなるふでのつかに入て、それよりまりいださせたる也。江家次第曰、季御讀經事、天喜四年三ケ
日ノ間每ニ夕座ニ侍臣施ニ煎茶ヲ衆僧ニ相ヒ加甘葛煎ヲ。西宮記曰 御讀經弁史催行夏引茶仰內藏藥殿四位行水五位六
位引茶甘葛煎所茶藥云器之類。雲圖抄曰、季御讀經事云云次入持茶、近代朴持、甘葛煎以上入土瓶云云先甘

テ和州ノ産ナシ今世俗此草和州十津川ニアリト云可一笑

うすゆう藻塩艸ノ木活字本モカクアレドうすやうノ誤ナリ

葛煎、次茶、各飮之、五位盛之授僧。枕草紙曰、あてなるもの、うすいろにしらがさねのかざみ、かりのこ、けづりひのあまづらにいりて、あたらしきかなまりにいりたる、すいさうのずゞ。蓬來抄曰、二月、季御讀經事、第二日、五位一人、爲ニ甘葛煎陪膳ニ、但無ニ持物ニ、六位三人、一人入ニ甘葛煎於土器ニ持。北山抄曰、延喜十一年五月、給粽甘葛煎等、其儀同氷魚也。類聚雜要抄曰、平大饗目錄、五獻、小柑子、枝柿、甘栗。但隨レ時之。古今著聞集第十六曰、九條の前内大臣家に、壬生の二位參て、和歌のさた有けるに、二月の事なりけるに、雪にあまづらをかきて、二品にすゝめられけり。くひはてゝ、此雪猶ゆはば給て二条中納言定高のもとへつかはしゆはん、かの卿は雪くひにてゆゝと申ければ、すなはち硯のふたにもりて出されにけるを、つかはしたりければ、かの卿の返しに、「心ざしかみのすぢともおぼしけりかしらの雪かいまのこのゆき。藻塩草曰、つはいもち、椿の葉を合て、中にて飯のこに、甘葛を入て、色々のうすゆうをきりて、ゆひたる物之

甘葛煎

薫集類抄曰、煎甘葛。八條大將、以ニ甘葛ニ入ニ瓶子ニ、封レ口入レ湯、三日計煎レ之、如ニ蜂蜜ニ。隨時朝臣、和ニ合蜜ニ、与ニ千歳蔓汁ニ混合用レ之。山田尼、蜜はかうばしけれど、むしのいでくるときあり」あまづらはよし。かなくさからず、さかくさからずねる。蜜のごとくかたからむを、火よくうづみて、しろかねの器して煎ぜよ。火のきは三寸ばかりもちあげよ。かなわをたてゝ、きえぬものからにぶくてねるなり。いれものゝつらにつきたるをば、はしにかゝれば、いとたるほどに煎ぜよ。かたまらぬさきによくさまして、ものに、たみいれて、かひしてすこしづゝくみて、かづくまはして、かたきかたなるにつきもていけばよき。或說。あまづらを煎ずることは、ものしてかきあぐれば、やますげのやへだゝみのやうに、た

ゞなはりゐゐほどに煎ずべきなり。火をうづみて、かなわのうへにすへて煎ずべきなり。類聚雜要抄曰、甘葛煎、方器ニハ用ニ石鍋ヿ、亦銅ノ物是等ニ入テ、固炭ヲオコシテ灰ニ埋テ、口小ヲ開テ、火ヲユルマシテ、ハヤカラズ寒カラズ、品同程ニテ夜日七日計リ煎レ之、其間アハノ立ヲ隨レ出テ取スツル也。鍋蓋ニハ綿ヲ敷ラカニ張レ之ヲ、出ル毛ヲ出テ塵ヲイレシ料也。金輪用之

磨左棄逗邏 日本書紀

漢名 不詳 本草啓蒙爲扶栘藤非也

今名 ツルマサキ

一名 眞折 古事記曰、爲レ鬘ニ天之眞折ヿ　眞佐岐蘰 皇太神宮儀式帳曰、祢宜內人等ハ眞佐岐蘰爲レ下來　眞前葛 延喜式卷第四十日、造酒司。踐祚大嘗祭供神料。眞前葛日影山孫組各三擔　眞辟葛 古語拾遺曰、以ニ眞辟ノ葛ニ爲レ鬘　正木ノ葛 源平盛衰記卷第四十八日、正木ノ葛云云　眞埼木葛 出雲國風土記曰、意宇郡粟嶋、有眞埼木葛〇萬葉集卷第十九曰、流辟田の、河瀨爾云云。左伎多河云云

集註 十六夜日記曰、すのまたとかやいふ川には、舟をならべて、まさきのつなにやふらん、かけとゞめたるうきばしあり。いとあやうけれどわたる。歌林四季物語曰、まさきのかづらのながくはびこるべく

形狀 〇大和本草曰、正木ノカヅラ、其葉花實トモニマユミニ同ジ、只其カヅラ甚長シ、皮ノ中ニ絲アリ、マユミノ如シ、漢名シレズ。按ツルマサキハ大葉小葉アリ、大葉ハマユミ同名アリノ如シ、小葉ハ黄楊ノ葉ノ如ク柔カ也 蔓ハ長ク延ブ

阿介比加都良（アケビカヅラ） 本草和名

漢名 木通 本草

今名 アケビカヅラ

本草綱目、時珍曰、通草。有細細孔、兩頭皆通ス、故ニ名ヅク通草ト、即今ノ所謂木通也。今之通草乃古之通脱木也。物理小識曰、淮木通ハ能ク行ル氣、色似沉香、有車輻紋、川木通色白止ム通シ小便ヲ、僞者蒲萄藤也。藥類本草曰、唐本注云、此物大者徑三寸、毎ニ節有二三枝、枝頭ニ有五葉。

一名 安計比川留 本草類編。本草和名曰、通草。和名阿介比加都良

於女葛 新撰字鏡曰、通草。神葛、又於女葛

神葛 見上

あけびのかつら 漢塩草曰、通草。あけびのかづら

仙女草 漢塩草曰、仙女草。つふくさ

つふくさ 見上

集註 本草類編曰、通草。和安計比川留、正月採枝陰干。延喜式卷第三十七曰、典藥寮。諸國進年料雜藥。山城國、云云通草各五斤。大和國、通草云云各十斤。顯注密勘曰、木目漬ハ、あけびのつるの若葉を取て、つけて喰をいふ。鞍馬にありと

形狀 ○山野ニ多シ、蔓延ス、葉莖ニ互生シ、忍冬葉ニ似タル葉五枚一葉ヲナス、忍冬ヨリ葉薄シ、早春葉間房ヲナシ花ヲ開、小花聚リ、其中ヨリ三瓣ノ大花アリ、紫色ト淡白ト雜ル、芯紫色粘リアリ、其實ハ燕覆也

附方 頓醫抄曰、痢病ニハタテアケビノ皮ヲホシテ散ニシテ服ス。按燕覆皮也

菟頭邏（ツヅラ） 日本書紀

漢名 漢防己 本草

今名 アヲツヾラ

證類本草曰、按藥性論云、漢防已味苦、圖經曰、防已生漢中川谷、今黔中亦有之、但漢中者破之文作車輻解、黃實而香、莖梗甚嫩苗葉小類牽牛、折其莖一頭吹之氣從中貫如木通類

一名 阿乎迦都良　本草和名曰、防已。和名阿乎迦都良。延喜式卷第三十七曰、典藥寮。諸司年料雜藥。左右近衛府。云云防已各十兩。左右衛門府、防已云云各一兩二分。遣諸蕃使唐使、云云防已各四斤。渤使、防已云云各二斤。諸國進年料雜藥、駿河國、云云防已各十斤。周防國、防已六斤。言塵集曰、あをかづら、防已と書

あをつゞら　職人盡歌合曰、つゞらつくり。我戀はまださらされぬあをつゞらくるとはすれどさねしよぞなき。枕草紙曰、草はあをつゞら、哥の題はあをつゞら。堀河院次郎百首曰、雪きえぬあをばの山のあをつゞらはるのくれども猶さむき哉

青つゝら　宇津保物語俊蔭曰、青つゞらを大きなる籠にくみて

青累葛　源平盛衰記卷第四十八曰、青累葛。假名文字遣曰、あをつゞら青累葛

都豆良　萬葉集卷第十四曰、可美都家野、安蘇夜麻都豆良、野乎比呂美、波比爾思物能乎、安是加多延世武。日本書紀曰、菟頭邏佐波磨枳云云。古事記曰、都豆良佐波疏岐

こつゝら　早歌曰、みやまのこつゞら、くれ〳〵こつゞら

黑葛　續日本後紀〇續日本紀卷第三十三曰、寶龜五年秋七月己亥、復女孺無位足羽臣黑葛本位外從五位上。同卷第三十四曰、寶龜八年春正月癸亥、外從五位下足羽臣黑葛、並從五位下

黑藤　類聚雜要抄曰、黑藤。四朱二疋二升

烏葛　筑前國風土記曰、楊飼縣海中有兩小島、兩島俱生烏葛冬蘽、烏葛黑葛也、冬蘽迂菜也〇按廣雅曰、女青烏葛一

曝 流布本ハ膠、雲州本曝ニ改ム
黒ノ上曝字アリ
近江國ノ分ニモ曝字アリ

葛也、即ヘクソカヅラ也〇迂字典曰、迂、本ト作レ迃、通ジ作ル于ニ。又于字ノ註ニ曰、于羽俱切、音迂。爾雅ニ葍ハ蔓于。註、生、水中ニ一名軒于。即水藻ノ猶ニメ和産未レ詳〇一本ニ作レ葍。字典曰、詩傳、葍悪菜也。爾雅曰、葍ハ、蕢蔬、詩雅云、我行ニ其野ニ言ニ采ニ其葍ヲ陸機云、幽州人謂ニ之ヲ燕葍ト、其根正白可ニ著ニ熱灰中ニ温メテ啖フレ之。救荒本草曰、葍子根、一名燕葍根。觀レ此則葍ハ鼓子花也。鄭註ニハ即商陸ト云

安乎加川良 本草類編　川々良 同上　波末布支 同上　曝黒葛

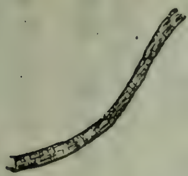
延喜式卷第十五曰、內藏寮。曝黒葛百斤。近江國三十斤、越前國三十斤、越中國二十斤、丹波國二十斤。同卷第二十三曰、民部下。交易雜物。越前國、曝黒葛卅斤。越中國曝黒葛廿斤。丹波國、曝黒葛廿斤

集註 本草類編曰、防已。和安乎加川良、又川々良、波末布支、二月採根干。延喜式卷第一曰、餝神殿料黒葛十斤。鎮花祭黒葛廿斤。狹井社云云黒葛廿斤。風神祭黒葛廿斤。同卷第五曰、齋宮。造備雜物、黒葛七兩云云已上請ニ內藏寮ニ。黒葛五斤云云已上申レ官請受。同卷第二十三曰、民部下。交易雜物。近江國、黒葛卅斤。同卷第二十四曰、主計上。凡中男一人輸作物云云黒葛各五斤。越前國、中男作物、黒葛。丹波國、中男作物、黒葛。丹後國、中男作物、黒葛。因幡國、中男作物、黒葛。播磨國、中男作物、黒葛。美作國、中男作物、黒葛。備後國、中男作物、黒葛。安藝國、中男作物、黒葛。豐後國、中男作物、黒葛。同卷第二十六曰、主稅上。造ニ胡簶一口ニ料。黒葛一斤。同卷第三十七曰、典藥寮。遣諸蕃使。唐使、黒葛四斤。渤海使、黒葛二斤。新羅使、黒葛二斤。同卷第四十曰、造酒司。園韓神祭料、黒葛三斤。平野神祭料、黒葛六斤。松尾神祭料、黒葛二斤。大原野神祭料、黒葛六斤。神鳳鈔曰、伊賀國、多良

牟六箇山云云御饌調備料箕藤黑葛、并三度御祭御贄等云云。賦役令曰、其副物正丁一人、黑葛六斤。仙覺萬葉集註釋卷第十四曰、ひろきのにつゞらのはひひろごれるがごとく。釋日本紀曰、播磨國風土記云、天日槍命之黑葛皆落二於但馬國一、故占二但馬國伊都志ノ地一。平家物語曰、まさきのかづら、あをつゞら、くるひとまれなるところなり

形狀 ○漢防已ハ深山ニ多シ、葉常ニ春藤ニ似テ大ニシテ五七尖柔軟ニシテ、面深綠色背淺シ、莖靑ク新蔓ニハ毛茸アリ、舊ハナシ、其葉互生ス、夏葉間小莖出、六出靑黃花ヲ開、其地ニ蔓延スルモノヲ取テブチト名テ販ク、其根大ニシテ處々ニ塊ヲナス、切ハ車輻解アリ、冬月葉脫

漢防已
阿乎迦都良圖







神衣比（カミエビ） 新撰字鏡　漢名 木防己 本草　今名 ツヾラフジ

證類本草曰、圖經曰、防己。宅處者青白虛軟、又有ニ腥氣一、皮皺ミ上ニ有ニ丁足子一名ヅ木防己ト

一名 佐奈葛 字鏡曰、木防己、佐奈葛、一云神衣比、佐奈葛與ニ南五味子一同名也

神海老 頓医抄曰、咳嗽藥方 神海老与椙（スト）ノ葉合テ舂テ、酢少シ入テ、其汁ニ雄黄、水金若無ハ水銀、輕粉合テ、ヨク〱ネヤシテ、紙ニ塗テ、其帋ヲ筆ノ軸ニクル〱ト卷テ、紙ノハシヲソクイニテツケテ、如竹筒 其ヲ口ニ含テ、其端ニ火ヲツケテ、カレカ煙ヲ喉へ引入ミミ薫也、咳セラレバ酢ヲ可吸ナリ

集註 延喜式卷第三十七曰、典藥寮。諸國進年料雜藥。伊豆國 木防己云云各十斤。安房國 木防己一斤。上總國、云云木防己各十斤

形狀 ○木防己ハ林中ニ多シ、蔓冬モ枯ズ、老蔓灰褐色、新蔓綠色微毛アリ、春新葉出互生ス、形狀薯蕷（ヤマノイモ）ノ葉ニ似テ縱道ナシ、夏秋葉間細黄花ヲ開

ク、後實ヲ結、椒目ノ如ク黑色、皮白粉ヲ粘スルガ如シ、冬ニ至テ葉落ル

牟久良（ムグラ）醫心方　[漢名] 葎草 本草　[今名] カナモグラ　[一名] やへむぐら

本草綱目 葎草。集解、時珍曰、二月生苗、莖有細刺、葉對節生、一葉五尖、微似蓖麻而有細齒、八九月開細紫花成簇、結子狀如黃麻子

ら　太平記卷第二十六曰 暦應五年云々同九月三日ハ故伏見院御忌日也しかば、彼御佛事殊更故院の御舊跡にて執行はせ給はん爲に、持明院上皇、伏見殿へ御行なる。此離宮はさしも紫檻紺殿を彩り、奇樹怪石を集て、見所有し栖堀なれ共、舊主去座て年久く成ぬれば、見しにも非ず荒はて、一村薄（すゝきの）野と成て、鶉の床も露滋く、八重葎のみ門を閉て、荻（をぎ）吹すさむ軒端の風云々種々の御追善端多して、秋の日無程昏はてぬ、可憐九月初三夜月、出る雲間に影消て、虚空に落る雁の聲、伏見の小田も物すごく。枕草紙曰、軒をあらそら八重むぐらも、げに人こそみえね秋のけしきはとくしられぬべかりけり。源氏物語桐壺曰、くさもたかくなり、野分にいとゞあれたる心ちして、月かげばかりぞやへむぐらにもさはらずさしいりたる。みなみおもてに。同野分曰、いとゞあれたる心ちして、月かげばかりぞやへむぐらにもさはらずさしいりたる。狹衣物語曰、軒をあらそふ八重むぐらも、げに人こそみえね、秋のけしきはとくしられぬべかりけり〇按ニ、八重ムグラハ軒ヲアラソフト云ヒ、尤秋繁茂シテ秋月ノサハルヿヲ云、則八重ムグラハ秋月盛ナル草也。

狹衣ノ例ハ前ニ出セ

ル社艸
子全
ク同ジ

然ルニ本草啓蒙ニ、古ヨリ葎ノ字ヲムグラト訓ズルハ非ナリ、ムグラハ小葉ニメ蔓地ニ多ク繁延ス、故ニヤエムグラト古歌ニヨメリ、是救荒野譜ノ豬殃々ナリト云ハ杜撰也。豬殃殃ハ多苗ヲ生ジ、春繁茂シ、五月苗枯レ、秋ハ絶テ無キ草也。源氏物語横笛曰、露しげきむぐらのやどにいにしへの秋にかはらぬ虫の聲かな。同手習曰、秋の野の露わけきたるかり衣むぐらしげれる屋どにかこつな。宇津保物語俊蔭曰、人なき所なれは蓬葎さへ生ひろごりて云々蓬葎の中より秋の花はづかに咲出てト見ユレバ、むぐらハ秋草ニメ、葎草タル明證也。知ズヤ百人一首ニモ、やえむぐらしげれる宿のさびしきに人こそ見えね秋はきにけりト出ルヲヤ。豬殃殃ハ尤小草ニメ高サ一二尺ニ過ズ、軒ヲアラソフベキモノナラズ

八重六倉 萬葉集卷第十一曰、念フ人、將來跡知者、八重六倉、覆庭爾、珠布益乎。玉敷有、家毛何將爲、八重六倉、覆小屋毛、妹與居者。堀河院百首曰、八重葎しげみが下に結ぶてふおぼろの淸水夏も知られず

毛久良 本草和名曰、葎草。和名毛久良。倭名類聚鈔曰、葎草。和名毛久良。新撰字鏡曰、葎。牟久良

牟具良 萬葉集卷第四曰、何時爾加妹乎、牟具良布能、穢屋戸爾、入將座。同卷第十九曰、牟具良波布、伊也之伎屋戸母、大皇之、座牟等知者、玉之可麻思乎

加奈无久良 本草類編 **大葎草** 瘍医抄曰、癩病、大葎草一荷、水二石ヲ入テ、二石ニ煎テ、瘡ヲ浸シテ度々可洗

集註 本草類編曰、葎草。和加奈无久良、四月五月採蒸暴干。源氏物語蓬生曰、さて世にありと人にしられず、さびしくあばれたらんむぐらのかどに。同須磨曰、げにむぐらよりほかのうしろみもなきさまにて。同よもぎふ曰、むぐらは西東のみかどをとぢこめ

たるに、頼もしけれど、くづれがちなるめぐりのかきほを。又曰、あさ日夕日をふせぐ、よもぎむぐらのかげに、ふかうつもりて云々。同しゐがもと曰、いとうづもれたるむぐらのしたより。同あづまや曰、さしとむるむぐらやしげきあづまやのあまりほどふるあまそゝぎかな。枕草紙曰、あはれなる物、あれたる家に、むぐらはひかゝり、よもぎなどたかくおひたる庭に、月のくまなくあかき、いとあらふはあらぬ風の吹たる。曾我物語卷第十二曰、すぎにし五月のすゑの事なれば、はなずゝき、むぐらおひしげり、そのあとだにもみえざりけれ共云云。河越記曰、西に一の社壇あり、むぐらが下にむもれけり。たぐさめ草曰、卯月に成ぬ、此所のさまさへも、後も田の面にて、はやしは軒ちかく、いさゝむら竹めぐれる民の家、ところどころかやがのき、あしのかきほさへ、さながら夏そのかげにかくされ、よもぎ葎に門をとぢたり云々。高倉院升遐記曰、むぐらも所を得て、まつのかどをさして。東山殿御香合曰、おりから五月雨のころは、なを庵のうちしめやかに、葎のたのもしげに門をとぢたるも、かゝる住ひには心にかなひたるなど云々。西行物語曰、庭もそともゝひとつにて、むぐらの門、草の戸ざしのみふかくして。山家集曰、嵯峨に住ける頃、となりの坊に申べきことありてまかりけるに、道もなく、葎のしげりければ、立よりて隣とふべき垣にそひて隙なくはへるやへ
葎かな

形狀　葎草ハ原野ニ多シ、春彼岸ノ後苗ヲ生ズ、蔓ヲ引テ登ル、葉兩對〆モミヂノ葉ニ似テ柔ニ〆、莖葉倶糙澁短刺ノ如キモノアリ　秋蔓延テ丈餘ニ及ビ、數枝ヲ分チ甚繁茂ス、秋月葉間小枝出、淡黃花アリ、冬ニ至テ苗根共ニ枯ル

生ノ上子字脱カ

佐那葛（サナカツラ） 古事記　［漢名］ **南五味子** 本草　［今名］ **ビナムカツラ**

本草綱目、時珍曰、五味今有ニ南北之分ニ、南産者色紅、北産者色黒

［一名］ **荎味子** 延喜式卷第三十七曰、典藥寮。諸國進年料雜藥。安藝國、荎味子三升○證類本草曰、唐本注云、五味。皮肉甘酸、核中辛苦、都ニ有ニ鹹味一、此則五味具也。本草原始曰、與衡曰、五味者五行之精、其、葉赤斑、花黄白、生青熟紫黒、亦具ニ有ニ五色一、且、能兼ニ養ニ五臟一也○按、正字通 本草綱目、作荎蕏、蕏綱目不從艸

狹名葛 萬葉集卷第二曰、玉匣、見圓山乃、狹名葛、佐不寐者遂爾、有勝麻之自。木綿疊、田上山之、狹名葛、在去之毛 不令有十方。藻塩草曰、さな葛、さねかづら同事也。ねとなと同音也。袖中抄曰、さねかづら、さなかづら、おなじ事也。狹衣曰、あふ坂山のさねかつらは、人しれぬ御心許にはおぼしおえす

佐奈葛 萬葉集卷第七曰、足引乃、山佐奈葛 黃變及、妹爾不相哉、吾戀將居。同卷第十二曰、木綿裳、白月山之、佐奈葛 後毛必 將相等曾念

佐禰加都良 本草和名曰、五味。和名佐祢加都良

作禰加豆良 倭名類聚鈔曰、五味。和名作禰加豆良

佐禰加川良 本草類編

左奈葛 新撰字鏡曰、蘇。左奈葛 按、緒蘇誤

核葛 萬葉集卷第十一曰、核葛 後ニ相ト、夢ニ耳、受ケ日度 、年經 乍。

［集註］ 本草類編曰、五味子。和佐祢加川良、八月採實也。日本惣國風土記曰、駿河伊穗原郡、産五味子。富士郡阿波山、貢五味子。延喜式卷第三十七曰、典藥寮。遣諸蕃使。唐使、五味子云 云各四斤。渤

使、五味子云云各二升。新羅使、云云五味子各五升。諸國進年料雜藥。美濃國、五味子三斗三升。出雲國風土記曰、意宇郡、所在草木五味子。嶋根郡、所在草木五味子

【形狀】 古事記曰、舂ニテ佐那葛（サナヅラ）ノ之根ヲ取其汁ノ滑ヲ、而塗ニ其船ノ中之簀椅（ハシニ）ニ設ケテ蹈應レ仆（クヲル）。仙覺萬葉集注釋卷第二曰、かづらははびこるとき、あひわかれども、えだくみなあちこちながくはひゆくほどに、のちにゆきあへば、さねかづらのちもあはんとよそふ○南五味子ハヒナムカヅラ也、山中ニ多シ、蔓赭黑色、四時葉莖共ニ不レ枯、葉互生シテ土三七（スイゼンノ）ノ葉ニ似テ小ク微硬ク、背紫色疎齒アリ、夏葉間寸許ノ莖出、花アリ、下垂シテ大サ小錢ノ如ク、黃色薄花ノ如シ、花後實ヲ結デ梅子ノ大サニシテ圓長下垂ス、外ニ豆ノ如キ小子簇、初綠色、熟テ紅色也、莖粘汁アリ○北五味子ハ、今朝鮮種アリ、其蔓丈餘ニ至ル、皮柔軟ニシテ褐色也、春旧蔓新葉ヲ出シ互生ス。葉ノ莖赤シ、葉ハ木天蓼（マタヽビ）葉ニ似テ微厚ク、毛ナク紋脈多シ、亦ツルウメモドキノ葉ニモ似タリ、鋸齒アリ、夏葉間寸許莖出、下垂シテ五瓣白花ヲ開、葩細長頭圓シ、花後ハシバミ（榛）ノ花ノ如キ實ヲ結ビ下垂ス、豆ノ如キ小子簇、秋ニ至テ熟シテ紅色、乾セバ褐黑色トナル、多ニ至テ葉脫落ス

【藥製】 福田方曰、五味子。枝梗ヲ去テ少炒レ

乃世宇（ノセウ） 本草和名　【漢名】 紫葳 本草　【今名】 ノウゼンカヅラ

本草綱目、紫葳。集解、時珍曰、凌霄ハ野生ス、蔓纏ニ數尺、得レ木ヲ而上ル、卽高サ數丈、年久キ者藤大サ如シ杯、春初生ス枝、一枝ニ數葉、尖長有レ齒深靑色、自レ夏至ニ秋ニ開ク花ヲ、一枝數十朵、大サ如ニシ牽牛花ノ而頭開テ五瓣ハ、赭黃

餘ニ作ル

馬字刊本ナシ

色有二細點一、秋深更ニ赤、八月結レ莢如二豆莢一、長三寸許、其子輕薄如二楡仁馬兜鈴仁一、其根長亦如二馬兜鈴根狀一

一名 末加也支 本草類編 久末川々良

同上 乃宇世宇 異本本草類編 乃宇セウカツラ 同上 乃宇世宇乃加ツ良 同上 巴加也支

同上 末加也岐 本草和名曰、紫葳。和名乃世宇、一名末加也岐 末加夜木 倭名類聚鈔曰、陵苕。本草云、紫葳。一名陵苕。和名末加也木、一云農世宇 農世宇 見上 乃宇世宇乃加奈良 医心方曰、紫葳。和名乃宇世宇乃加奈良、又也加也支（按奈都誤） 也加也支 見上

形狀 本草類編曰、紫葳。末加也支、其花黃色、医家採花多陰干、代可用瞿麥也○紫葳ハ蔓數丈ニ及ブ、蒸地錦ニ似タリ、葉對生ス、形狀紫藤（フヂ）ノ葉ニ似テ微ニ濶ク、軟ニメ麁キ鋸齒アリ、夏梢ノ葉間穗ヲナシ、牽牛（アサガホ）ノ如キ花ヲ數十開ク、黃赤色葩五ツニ分レ頭圓シ、冬葉黃脫

禰奈之久佐（ネナシグサ） 本草和名 漢名 菟絲子 本草 今名 ネナシカヅラ 一名 禰奈之加ツ良 異本

證類本草曰、圖經曰、菟絲子。夏生レ苗ヲ如シ絲綜ノ、蔓ニ延草木之上ニ、或云、無シテ根假テ氣ヲ而生ス、六七月ニ結テ實ヲ、極テ細ニメ如シ蠶子ノ土黃色】

本草類編〇本草和名曰、菟絲子。和名祢奈之久佐。藻塩草曰、ねなし草。みむろのきしのねなしぐさと云り、又曰、菟絲子。ねなしかづら

集註 本草類編曰、菟絲子。和名祢奈之久佐、九月採實暴乾。延喜式卷第三十七曰、與藥寮。遣諸蕃使。唐使、菟絲子、云云各四斤。渤使　菟絲子云云各二升。諸國進年料雜藥。攝津國、菟絲子二升。伊勢國、菟絲子五升。尾張國、菟絲子云云各五升。美濃國、菟絲子二斗一升。越前國、菟絲子四升。丹波國、菟絲子二升一合。紀伊國、菟絲子二升

藥製 頓医抄曰、菟絲子。酒ニヒタシテムシ、ツキヒサキテアブリ、コニシテカラ〳〵トアブリ、スリテ。福田方曰、菟絲子。酒ニ浸メ令レ肥(フクラメ)、紙ノ筋ヲ以テ纏(マトヒツクネ)揑テ、小餅子ト成メ、小干テ帶湿(スレナカラスレハ)碾碎ケヤスシ。和云、先淘洗(ユリ)浮タルトミモ無ヲ取テ去テ、酒ニ浸メ二三日メ、肥(フクレ)タルトキ、蒸熟(ムシウマシ)テ、スツキノナカラバカリヅ、臼ニ入テ、ツヨク搗テ焙干、末スレハ、極テ易シ、若急ニ使ニハ、吉酒ニテ肥(フクル)ホド炎乾テ舂ベシ

形狀 ○菟絲ハ四月頃地ニ苗ヲ出シ、草ニヨリテ長ス、白色糸ノ如シ、尺許延テ草木ニ粘着シ、後根ハ腐去リ、全ク草木皮ノ水氣ヲ假リ、丈許ニ延ブ、秋梢ニ寸餘ノ穗ヲナス、莖黃白メ紅細點アリ、花ハ一分許、五瓣白色也、花後黍粒ノ如キ子アリ、冬苗枯ル

須比加都良(スヒカツラ)　本草和名　**漢名** 忍冬 本草　○今通名

證類本草曰、陶隱居云、今處處ニ皆有ツ、以テ藤生ス、凌レ冬不レ凋、故名ニク忍冬ト。唐本注云、此ノ草藤生シ、繞ニ覆ス草木ノ上ニ、苗莖赤紫色、宿者有ニ薄白皮一膜レ之、其嫩莖有レ毛、葉似ニ胡豆ニ、亦上下有レ毛、花白ク蘂紫ナリ

【一名】須比可豆良 倭名類聚鈔曰、忍冬。和名須比可豆良。本草和名曰、忍冬。和名須比加都良 須比加豆良 天文写本和名抄 恵比加川良 本草類編 須比都良 異本本草類編 須比豆良 新撰字鏡曰、忍冬。須比豆良 すいかつら 藻塩草曰、忍冬。すいかつら

【集註】本草類編曰、忍冬。和惠比川良、又須比加都良、十二月採陰干。延喜式巻第十五曰、内藏寮。和大神祭、夏祭料、忍冬花（ハナカツラ）。盛ニ柳筥一合ニ、本草綱目、時珍曰、忍冬。三四月開花、長寸許、一蒂両花ニ瓣、一ハ大一ハ小、如シ半邊状ニ、長蘂花初開者蘂瓣倶ニ色白、經ルコト二三日ヲ則色變ジテ黄ニ

【形狀】○脩治纂要曰、忍冬。須比可豆羅、十二月葉ヲ採剉ミ用ユ。金銀花トハ、ナノ事ゾ○忍冬ハ、原野極テ多シ、多竹木雑草ニ纏フ、葉多モカレズ、莖ニ互生ス、形狀ムバシバノ葉ニ似テ、鋸齒ナク柔カ也。其蔓紫褐、新蔓綠色、短毛アリ、夏葉間ニ花ヲ開、一蒂二花、本ツヽニヌ紫茉莉（オシロイ）ノ花ノ如ク、頭二瓣、大ニヌ半邊蓮ノ如シ、亦サハギヽヤウ花ニ似タリ、初白色、日ヲ經テ黄色ニ變ス、中心同色ノ長蘂アリテ、花ノ外ニ吐ス、花後實ヲ結テ椒目ノ如ク、初綠、熟テ黒色也

加良須宇利（カラスウリ） 本草和名 【漢名】栝樓 本草 【今名】カラスノ西瓜

證類本草曰、圖經曰、栝樓ハ今所在有之、實ヲ名ク黄瓜ト、根亦名ク白藥ト、皮黄肉白三四月内生レ苗、引ニ藤蔓ヲ、葉如ニ甜瓜葉ノ作ス叉、有ニ細花ニ、七月開ク花、似ニ葫蘆花ニ淺黄色、實在ニ花下ニ大サ如レ拳ノ、生青、至ニ九月ニ熟ノ赤黄色

【一名】加良須宇里　倭名類聚鈔曰、栝樓。和名加良須宇里。本草和名曰、栝樓。和名加良須宇里

からすうり　蒻塩草曰、栝樓。からすうり。新撰字鏡曰、薽茵同、曾侯反、平加良須宇里

烏瓜　袖中抄曰、綺語抄云、むば玉とは、烏瓜の實（ミ）を云といへり。私云、烏瓜のみ、またくろき事なし

【集註】本草類編曰、栝樓古本作薽　和加良須宇里乃祢、二月八月採根曝乾三十日。延喜式卷第三十七日、典藥寮。臘月御藥。栝樓根一兩。遣諸蕃使。唐使、栝樓云云各六斤。渤使、栝樓云云各一斤。諸國進年料雜藥。伊賀國、栝樓五斤。伊勢國、栝樓十九斤。美濃國、栝樓云云各十斤。丹波國、栝樓云云各十斤。因幡國、栝樓七斤。石見國、栝樓云云各三斤。播磨國、栝樓云云各十斤。紀伊國、栝樓一斤十四兩。伊豫國、栝樓云云各二斤。土佐國栝樓七斤

【形狀】〇脩治纂要曰、仁二色アリ、玉章ノ如クナルトヒラキト也、平ラキヲ用、玉章ノ如クナルハ王瓜ナルベシ。本草辨疑曰、ヌメト云ハ扁ニシテ文ナシ、柹ノ核トイフハ、メグリニ緣アリテ、柹ノ核ニ似タリ、玉章ハ瓜樓ニアラズ、王瓜ナリ。本草啓蒙曰、ヌメデハ方柹核ノ如ク仁多シ、眞物トス、又リンノテ、一名ユンノテト呼ブ者ハ、子ノ形チ綵瓜（ヘチマ）子ノ如ニシテ低キフチアリ、仁少シ、劣物トス、此草ハ筑前ニテウシゴウリト云〇栝樓ハ蔓ヲ引テ木竹ニ登ル、葉王瓜ニ似テ缺刻多ク、深綠色、光澤アリ、毛ナク互生ス、夏梢ノ葉間ニ五出白鬚瓣ノ花ヲ開、本筒ニシテ紫茉莉（オシロイ）ノ花ノ如シ、花ノ跡ニ實アリ、綠色、秋冬大サ鴨（アヒル）卵ノ如ク黃赤色、內ニ柹核ニ似テ短キ子アリ

【今案】延喜典藥式、諸國進年料雜藥、近江國、土瓜六兩。栝樓九斤トミユレバ、栝樓王瓜古ヨリ自ラ別也

比佐己宇利(ヒサゴウリ) 本草和名　［漢名］王瓜 本草　［今名］タマヅサ　［一名］比

證類本草曰、王瓜。陶隱居云、今土瓜、生二籬院間一、亦有レ子、熟スル時赤如二彈丸ノ大一ノ。唐本注云、此物蔓生、葉似二栝樓一圓無二叉缺一。圖經曰、葉似二栝樓一圓ニメ無二叉缺一、有レ刺如レ毛ノ

佐久 大草和名曰、王瓜。一名土瓜、和名比佐久　［集註］延喜式卷第三十七曰、典藥寮。諸國進年料雜藥。武藏國、土瓜三斤十四兩。阿波國、土瓜云云各三斤。大宰府、土瓜云云各十斤

［形狀］本草類編曰、王瓜。和比佐己宇利乃袮、三月採根陰干、但花白色下結子如彈丸○王瓜ハ籬間竹林ニ纏ヒ登ル、葉栝樓ニ似テ缺ナク、五尖毛アリテ互生ス、花葉間ニ白花ヲ開、其實雞卵ノ如ク赤色、其核如二蟷螂頭一

土古呂(トコロ) 倭名類聚鈔　［漢名］萆薢 本草　［今名］トコロ　［一名］度古路 天文

按ニ本草從新ニ萆薢、有二黃白ノ二種一、黃長硬、白虛軟名二粉萆薢一、白者良ト云、白ク虛軟ナルモノハアマドコロ、江戸ドコロ也。黃長硬ト云ハ今ノトコロ也

写本和名抄　苲　延喜式卷第三十三曰、大膳下。正月最勝王經齋會供養料。云云苲各二合。倭名抄曰、薢。和名土古呂、俗用苲字。漢語抄用野老二字。今案所出並未詳　登許呂豆

根原稿本脫及刊本風土記ニヨル

良　古事記曰、伊邪賀良迹、波比母登富呂布、登許呂豆良

蘒　延喜式卷第三十三曰、大膳下。仁王經齋會供養料。蘒四葉。好物料

止己呂　新撰字鏡曰、萞。遲地反、山萞、上二字、止己呂

野老　武藏國風土記曰、荏原郡貢野老、荏原鄕貢野老。類聚雜要抄曰、五節殿上饗次菓子云云小柑子搔栗野老云云○證類本草曰、圖經曰、萆薢。根黃白色、多節三指許大サ、苗葉俱ニ靑作レ蔓ヲ生、葉作三二叉一似二山芋一、文似二菉豆葉一、花有二黃紅白數種一

[集註] 出雲國風土記曰、嶋根郡、所在草木萆解。出雲郡、所在草木萆解。飯石郡、所在草木萆解。大原郡、所在草木萆解。

宇津保物語曰、此後は山に入て、見せしらせし芋野老をほり、木のみ葛の根をほりてやしなふ、雪たかうふる日、いもところの有所もみえぬ時に、此子我身ふけうならば、此雪たかく降まされと云時に、いみじうたかくふる雪、たちまちにふりやみて、日いとうらゝに照て、有しわらは出來て例の芋野老やきてうじてとらせてうせぬ。言塵集曰、應神天皇の時始て吉野のくすを奉りけり。くすとは山菓、くさひら、栗、鮎などを國の貢に奉りける之。やがて葛城山のいも野老などをも備けるなり。藻塩草曰、野老。春の野にところもとむるといふなるはふたりぬばかりみてたつや君。はるのゝにほる〳〵みるとなかりけり世に所せき人のためには。太平記卷第十八曰、大和國賀名生ト云所ヘゾ落着セ給ケル、此所ノ有樣、里遠ク人煙幽ニ、山深メ鳥ノ聲モ稀也、柴ト云物ヲカコイテ家トシ、芋野老ヲ掘テ渡レ世計ナレバ

○**於尒**（オニ）**止古呂**（ドコロ）　本草和名按ニ倭名類聚鈔曰、貫衆。和名於尒和良比本草和名亦相同本草類編曰、貫衆。於尒和良比。觀レ此則古エ於尒止古呂ト云ハ、止古呂ニ似テ大ナルヲ云ルノ證トスベシ。今世鬼ユリト

鬼ウド皆其物ノ大ナルヲ云此也○證類本草曰、萆薢。唐本注云、此藥有二二種一、莖有レ刺者、根白、實無レ刺者根虛軟、內軟者爲レ勝、莖ニ有レ刺モノハ苗蔓長大、莖大キモノ筆管ノ如ク刺アリテ才餘ニ及ブ、葉モ大ニノ五七尖、其根太ク大ニノ蘿蔔(ダイコン)ノ如ク、凸凹疙瘩(イボ)多シ、皮黃色、肉白色、乾テ外黃色、肉白實ニノ至テ硬カラズ、古代ニ用ル於尒止古呂即萆薢此也。本草啓蒙ニ、オニドコロ、其根トコロニ似テ、小ク堅ク、味苦ク食ベカラズト云不ニ確論一、古エ藥用ニ諸國ヨリ獻シ奉ル萆薢トコロニ似テ小キモノヲ貢スベカラズ

一名 をにところ 枕草紙曰、名おそろしき物、をにどころ。本草和名曰、萆薢。和名於尒止古呂

於仁止己呂 本草類編

尒度古呂 藻塩草曰、萆薢。尒度古呂。或をにどころ

集註 本草類編曰、萆薢。和於仁止己呂、二月八月採根暴干。延喜式卷第三十七曰、典藥寮。諸國進年料雜藥。攝津國、萆薢云云各二斤。近江國、萆薢五斤一兩。丹波國、萆薢六斤。因幡國、萆薢十斤四兩。出雲國、萆薢云云各二斤。紀伊國、萆薢五兩。阿波國、萆薢云云各四斤

形狀 ○俗治纂要曰、乎尒登古呂、根黃ニノ白ク、節多ク、葉靑ク蔓アリ、葉ニ三ツカドアリ、則山芋ニ似タリ、花ノ色黃ナルト白キトアリ、又莖ニ刺アルハ根白ク堅シ、莖ニ刺ナキハ根ウツケテヤハラカ也、日本昔ヨリ鬼ドコロヲ用、本草啓蒙ニ、山萆薢、色赤而堅硬、ト是オニドコロナリト云、不ニ穩當一、トコロノ根ハ黃白ニ止テ、赤色ノモノナシ、山萆薢ハ一種ノモノナルベシ、別ニ考アリ、此ニ略ス

苗ナキ本アリ是カ

須末呂久佐（スマログサ） 本草和名

漢名 天門冬 本草 今名 クサスギカヅラ

證類本草曰、圖經曰、天門冬。春生レス苗藤蔓、大サ如ニシ釵股ニ、高至ニル丈餘ニ、葉如ニク茴香ノ、極尖細而疎滑、有ニ逆刺ニ、亦有ニ澁而無レ刺者ニ、其ノ葉如ニ絲杉ニ而細散、夏生ニ白花ヲ、亦有ニ黃色者ニ、其根白、或黃紫色、大如ニ手指ニ、長二三寸

一名 須万呂久佐 新撰字鏡曰、天門冬。須万呂久佐。又云、似扇。本草和名曰、天門冬。和名須末呂久佐。倭名類聚鈔曰、天門冬。和名須末呂久佐、今案、楊玄操音義、冬作レ東ニ也

すまろくさ 藻塩草曰、天門冬。すまろぐさ

集註 本草類編曰、天門冬。和須末呂久佐、二月三月七月八月採根暴乾。延喜式卷第三十七曰、典藥寮。每年十二月晦日、供殖藥樣云云。天門冬云云各四兩。諸國進年料雜藥。播磨國、天門冬三斤十兩。備前國、天門冬云云各一斤。安藝國、天門冬十二兩。紀伊國、天門冬八斤。阿波國、天門冬五升。讚岐國、天門冬十三斤。伊豫國、云云天門冬各七斤。類聚雜要抄曰、下藥ニ云今按牛黃息 中用ニ一種ノ歟、一ニ云用ニ天門冬ニ

形狀 〇天門冬ハ山中ニ生ズ、莖黃白色蔓延ス、莖ニ刺アリ、葉杉ノ葉ニ似テ細長柔カ也 夏葉間ニ細花ヲ開キ、椒目ノ大サナル實ヲ結ブ、初綠色、熟テ白シ、其根指ノ大サニメ數根聚リ、百部根ノ如シ、皮黃白色、冬ニ至テ苗枯

佐留止利（サルトリ） 本草和名

漢名 菝葜 本草 今名 サルトリイバラ

芭刊本苞に作りマ　マとす

隱刊本歸ニ作ル

菝ト拔トハ互ニ混用セリ

本草綱目、時珍曰、菝葜、山野ノ中甚多シ、其莖似レ蔓而堅強、植生ノ有レ刺、其葉團大狀如ニ馬蹄一、光澤似ニ柿葉一、秋開ニ黃花一、結ニ紅子一、其根甚硬有ニ硬鬚一、如レ刺

【一名】 佐留加支 新撰字鏡曰、拔葜。乃曾良自、一云佐留加支 乃曾良自 上見 於保宇波良 本草和名曰、拔葜。和名宇久比須乃佐留加岐、一名佐留止利、一名於保宇波良 宇久比須乃佐留加岐 上見 毛加支波良 本草類編 さるとりいはら 仙傳抄 左留加支 字鏡曰、蔛。左留加支 宇久ひ須の佐留 藻塩草曰、秡葜。宇久ひ須の佐留 猿取 順医抄。明月記曰、文暦二年十月廿八日、見物下人說、於宮東門、敎定馬弃出落馬之間、長朝馬退而不進、縣陰陽寮芭判欲ニ下馬一、无ニ侍抱下一之間ニ、猿取ノ枝懸ニ袖ヲ引キ破リ逃隱了

【集註】 本草類編曰、菝葜。和毛加支波良乃祢、二月八月採根曝干。延喜式卷第三十七曰、典藥寮。元日御藥、拔葜二分。東宮所須菝葜二分。諸司年料雜藥。齋宮寮、菝葜一兩一分。木工寮菝葜六兩。諸國進年料雜藥。大和國、拔葜四十斤。出雲國、拔葜云 云各三斤。出雲國風土記曰、仁多郡、所在草木拔葜。仙傳抄曰、平生はたつといへども、しらげんにいむものゝこと、さるとりいばら

【形狀】 ○本草辨疑曰、菝葜、和山歸來ト云者也。葉圓ク莖ニ刺アリ、圓子アリ、和名サルガキイバラト云者也。菝葜ハ山中ニ多シ、葉圓扁掌ノ如シ、莖ニ互生ス、莖箸ノ如ク、綠色刺多シ、蔓延テ丈餘ニ及ブ、秋梢ニ枝ヲ分チ、葉間聚リ、五瓣小黃花ヲ開ク、其實初綠色、熟テ赤色、櫻桃ノ大サノ如シ、冬葉脫、莖ハ枯レズ

りノ下、活版本類従ハてアリ

恭ハ刊本作志ニ記セル誤カ

香原

【今案】丹鉛總錄曰、蕭子雲雪賦ニ云、韜𦑶扆之飛棟、沒ニ屠蘇之高影一、始テ飄-舞於圓池一、終ニ停ム華ヲ於方井一。杜工部冷淘詩ニ云、願憑金腰褭。走置錦屠蘇。屠蘇、菴也。廣雅ニ云、屠蘇ハ平屋也。通俗文ニ云、屋平ヲ曰フ屠蘇一。魏略ニ云、李勝爲リ河南太守一。郡廳事前屠蘇壞唐孫思邈有ニ屠蘇酒方一、蓋シ取ニテ菴ノ名ヲ以テ名ク酒ヲ、後人遂ニ以ニ屠蘇ヲ爲ニ酒名ト矣○又按ニ、品字箋曰、酴酥酒名、元日飲之可以養。春宮年中行事曰、十二月つごもりの日、てんやくれうとぞびやくさん（屠蘇白散）をたてまつること。れうのくわんにん、もちて參り、くら人につげてたてまつりあぐ。ちやうにおほせて、ろくを給ふ。白散度嶂散屠蘇ノ事、延喜典藥式、元日御藥ニ載タリ

佐宇毛久佐（サウモグサ）　本草類編

【漢名】土青木香　本草獨行根　・　○今通名

本草綱目、馬兜鈴。集解、恭曰、山南名爲ニ土青木香一。頌曰、馬兜鈴ハ春生レ苗作レ蔓、繞レテ樹ニ而生ス、葉如ニメ山蕷葉ニ而厚大背白シ、六月開ニ黃紫花ヲ、頗ル類ス枸杞花ニ、七月結レ實如シ大棗ノ、狀似ニ鈴作ス四五瓣ヲ、其ノ根名ク雲南根ト、微似テ木香ニ大サ如ク小指ノ、赤黃色

【一名】象目　倭名類聚鈔曰、青木香、俗云象目

【集註】本草類編曰、木香。和佐宇毛久佐。本朝出於播磨州採之。本草和名曰、木香。一名青木香、出播磨國。延喜式卷第十三曰、中宮職。三月潔齋、云云青木香小一兩。同卷第十五曰、內藏寮。諸國年料供進。青木香二百七十斤。尾張國一百六十斤。相摸國八十斤、美濃國三十斤。同卷第三十七曰、典藥寮。臘月御藥、青木香三兩。已上自ニ寮庫一行フ之　中宮臘月御藥。青木香三兩。諸司年料雜藥。木工寮、青木香云云各一斤。左右近衛府、青木香云云各八兩。諸國進年料雜藥。尾張國、青木香十八斤。下總

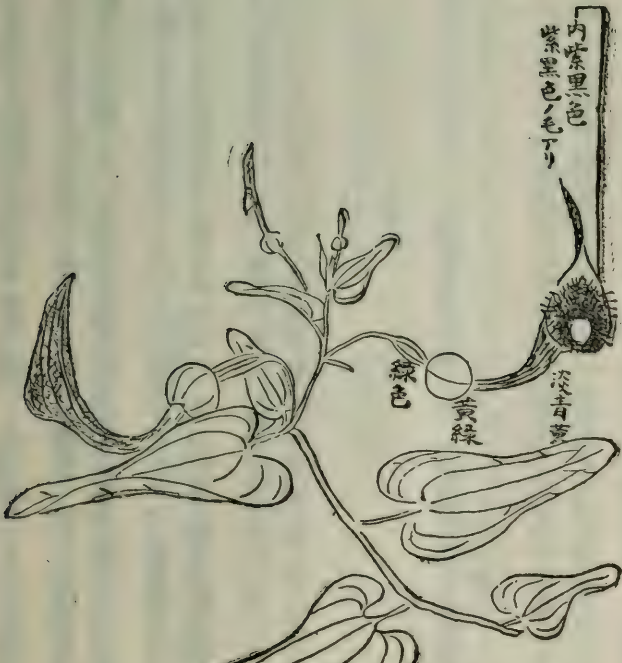
稿本ナシ。刊本ニアリ。按ニ雲州本意補セルニヨレルナラム

國、靑木香一斤八兩。常陸國、靑木香卅斤。近江國、靑木香十六斤。上野國、靑木香云云各十斤。下野國、靑木香廿斤。播磨國、靑木香云云各二斤

形狀 〇原野ニ多シ、春苗ヲ出シ蔓延ス、葉互生ス山藥ノ葉ニ似テ薄ク軟也。夏月梢ニ小枝ヲ分チ、葉間ニ花アリ、蒂細長綠色ニメ末ニ圓キ實ヲナシ、實ノ末ニ花アリ、本細キ筒ヲナシ、末ハ濶ク、但一瓣ニメ、天南星ノ花ニ似テ、頭尖長、外淡靑色、內紫黑色、紫黑ノ毛アリ、花後蕃形ノ實ヲ結ブ、內ニ扁子アリ、冬ニ至テ苗枯ル、其根指ノ太サニメ、皮褐色、內白包アリ。本草啓蒙曰、古方ニ靑木香ト云ハ南木香ナリ、後世ノ方ニ靑木香ト云ハ、多ハ此根ヲ指ス、卽土靑木香ノ畧ナリ、和名ニモ靑木香ト名ク、故ニ和方ニ靑木香ト云ハ此根ヲ用ベシ

土青木香ノ圖

本草啓蒙ニ本筒ニメ末兩瓣ニ分レリト云非也末只一瓣也



衣比加都良（エビカヅラ） 本草和名　［漢名］ **蘡薁** 本草　［今名］ **エビコカヅラ**

按ニ、衣比ハ葡萄ト同名也○本草綱目、時珍曰、蘡薁野ニ生ス林墅ノ間ニ、蔓葉花實與ニ葡萄ニ無レ異、其實小而圓、色不ニ甚。紫ニ也

［一名］ **衣比加豆良** 倭名類聚鈔曰、紫葛。和名衣比加豆良。本草和名曰、紫葛。和名衣比加都良。按紫葛ハガチブ也。衣比ハ蘡薁也　**鹽味葛** 出雲國風土記　**衣比加川良** 本草類編曰、紫葛。和衣比加川良。言塵集曰、ゑびかづらとは紫葛也

［集註］ 出雲國風土記曰、仁多郡鳥上山、有鹽味葛。宗原山有鹽味葛。遊記山有鹽味葛、御坂山有鹽味葛

［形狀］ ○山野ニ多シ、藤蔓葡萄ニ不レ異、新莖ニ白キ綿ノ如キモノアリ、葉モ葡萄ニ似テ岐淺ク、厚クメ背白色、夏梢葉間小穗ヲ爲シ、花ヲ開キ實ヲ結ブ、葡萄ノ實ニ似テ小也、皮初綠色、熟テ紫褐ニメ、微ニ白粉ヲ布タル如シ、肉ハ紫黑、味甘

比佐古都良（ヒサゴツラ） 本草和名　［漢名］ **烏蘞苺** 本草　［今名］ **ビンホヅル**

本草綱目、烏蘞苺。集解、時珍曰、其藤柔而有レ稜、一枝一鬚、凡五葉、葉長而光リ有ニ疎齒ニ、面青背淡、七八月結レ苞成レ簇、青白色、花大如レ粟黄色四出、結レ實大如ニ龍葵子ノ、生ハ青熟ハ紫、內有ニ細子ニ、其根白色、大者如レ指、長一二尺擣レ之多ニ涎滑ニ

［一名］ **比佐己川留** 本草類編○本草和名曰、烏蘞苺。和名比佐古都良

［形狀］ 本草類編曰、烏蘞苺。和比佐己川留、

花青白色、五葉也○烏蘞苺ハ春苗ヲ生ジ、紫褐色頭下垂ス、後長蔓ヲナス、鬚アリテ物ニ纏フ、莖綠楞アリテ葉互生ス、形狀絞股藍ニ似テ紫ヲ帶、秋梢葉間ニ細花アリ、冬ニ至テ苗枯ル

屎葛 萬葉集　【漢名】**女青** 本草　【今名】**ヘクソカヅラ**

證類本草曰、女靑。唐本注云、葉似ニ蘿藦ニ兩葉相對、子似ニ瓢形ー

【一名】**久曾加豆良** 倭名類聚鈔曰、細子草。和名久曾加豆良。萬葉集卷第十六曰、葛英爾、延於保登禮流・屎葛、絶事無、宮將爲

加波爾久佐 本草和名曰、女靑。和名加波祢久佐

爾久佐 本草類編

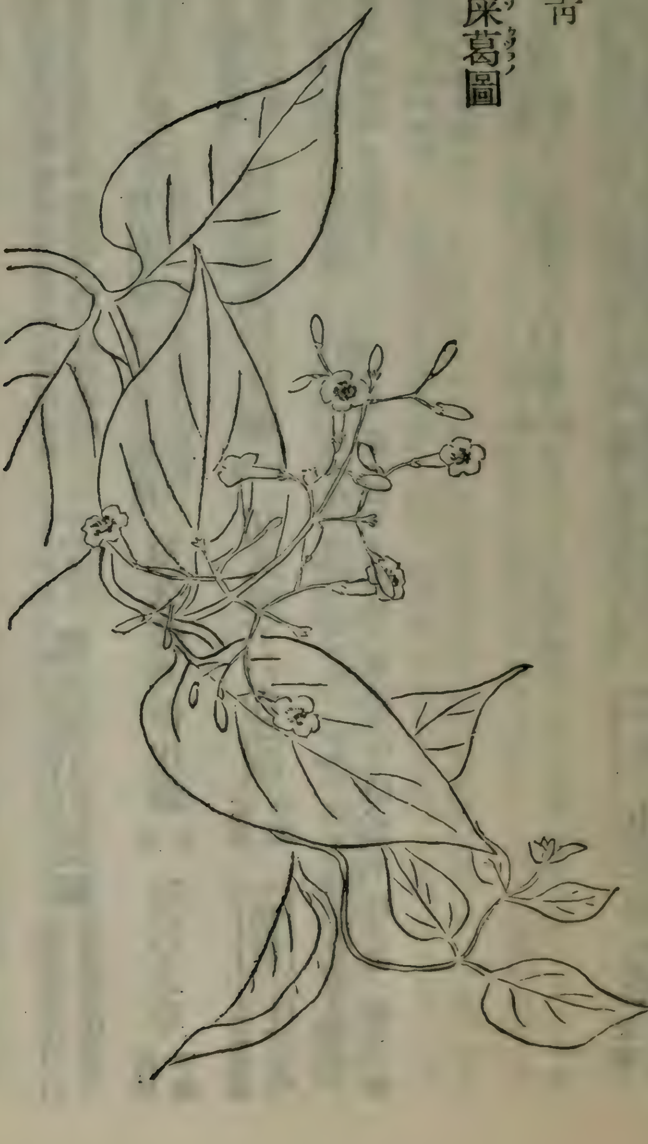
加和爾久佐 同上。按ニ加波祢久佐ハ、萬葉集ニ屎葛ト云ガ如ク、此草ノ臭氣糞臭ヲナス、故ニ加波祢草ト云也。倭名鈔居宅類曰、厠。唐韻云、圂、作溷、厠也。釋名云、厠或謂ニ之圂ニ、言ハ至穢處宜ニ常修治使ニ潔淸ナラ也。和名加波夜。トミエタリ。源氏物語須广曰、おさめ、みかはやうどまで。侍中群要ニモ、御厠人ト出。藻塩草曰、厠の長行幸の跡にまいる下女也

【集註】本草類編曰、女靑。和祢久佐、又云加波祢久佐、八月採陰干。延喜式卷第三十七曰、典藥寮。諸國進年料雜藥。信濃國、女靑六斤。出雲國風土記曰、秋鹿郡、所在草木女靑

【形狀】○女靑ハ山野雜草中ニ多シ、莖茶褐色ニメ蔓延ス、葉節々兩對メ、蘿藦ノ葉ニ似テ、薄ク微毛茸アリ、夏月葉間委蕤花ノ大ナル花ヲ開、下垂セズ、白色ニメ葩薄ク、心紫黑毛茸アリ、後實ヲ結テ南天子ヨリ小也、初綠、熟テ黃褐色、莖葉根共ニ臭氣アリ、冬苗枯ル

女青

屎(クソ)葛(カヅラノ)圖



保呂之(ホロシ) 本草和名　〔漢名〕 白英 本草　〔今名〕 ヒヨトリゼウゴ 圓葉

本草綱目、白英。集解、時珍曰、正月生レ苗、白色可レ食、秋開ク小白花ヲ、子如ニ龍葵子ノ、熟スル時紫赤色

〔一名〕 都久美乃以比禰 本草和名曰、白英。和名保呂之、一名都久美乃以比祢

保曾之 倭名類聚鈔曰、白英。和名保曾之、一云豆久美乃伊比祢

豆久美乃伊比禰 見上　保呂志草 新撰字鏡曰、白英。保呂志草、又豆具弥乃伊比祢

豆具彌乃伊比禰 見上　川久美乃以比禰 本草類編

〔集註〕 本草類編曰、白英。和保呂之、又川久美乃以比祢。春採葉、夏採莖、秋採花、冬採根干

〔形狀〕 山中及ビ水濕ノ地ニ多シ、春苗ヲ出ス、莖ニ葉互生ノ番椒(タウガラシ)ノ葉ニ似タリ、夏梢ニ聚リ紫花ヲ開、雪下紅(ヒヨトリジヤウゴ)ノ花ノ如シ、實ヲ結テ赤色、ヒヨドリジヤウゴノ如シ、冬苗枯ル

也末加々美(ヤマカヾミ) 本草和名　〔漢名〕 白蘞 本草　○今通名

證類本草曰、圖經曰、白斂。二月生レ苗、作レ蔓、赤莖、葉如ニ小桑ノ、五月ニ開レ花ヲ、七月結ヲ實ヲ、根如ニ雞鴨卵ノ、三五枚同レ窠、皮黑、肉白

〔一名〕 也末加々毛 本草類編

斂州本本リ改
本貞ニ前ム
雲京享ヨニ

白蘞 延喜式卷第三十七日、典藥寮。諸司年料雜藥。齋宮寮、白蘞十兩二分。內匠寮、白蘞云云各三兩。木工寮、白蘞云云各二斤。遣諸蕃使。渤使、白蘞云云各二斤 〔集註〕 本草類編

日、白歛。和也末加々毛、八月採根暴干。延喜式卷第三十七日、典藥寮。臘月御藥、白歛六兩二分。中宮臘月御藥、白歛四兩二分。雜給料、白歛十二兩。諸國進年料雜藥。山城國、白歛二斤二兩。尾張國、白歛十三斤。近江國、白歛一斤二兩。美濃國、白歛云云各廿斤。出雲國、白歛一斤。播磨國、白歛三斤十二兩。備中國、白歛七斤。讃岐國、云云白歛各十斤。出雲國風土記曰、秋鹿郡、所在草木白歛。楯縫郡、所在草木白歛。神門郡、所在草木白歛。大原郡、所在草木白歛

〔形狀〕 ○今漢種アリ、草蔓ノ形狀全ク蛇葡萄(ノブダウ)ノ如シ、莖蔓ハ灰白色、新蔓嫩倶ニ紅紫黑色、葉互生メ蛇葡萄ヨリ細ク、岐ヲナシテ雞桑(サグハ)ノ葉ノ如シ、夏葉間ニノブダウノ如キ花アリ、其實亦ノブダウニ同、根モノブダウニ相似タリ

加々美(カガミ) 本草和名 〔漢名〕 **蘿摩** 本草 〔今名〕 **ガヾイモ**

本草綱目、時珍曰、斫合子、即蘿藦子也。三月生レ苗、蔓ニ延ニ籬垣ニ、極テ易シ繁衍ス、其根白軟、其葉長而後大前尖、根與ニ莖葉ニ斷レハ之皆有ニ白乳ニ如シ構汁ノ、六七月開ニ小長花ヲ如ニ鈴狀ノ、紫白色、結レテ實長二三寸、大如ニ馬兜鈴ノ、一頭尖其殼青軟、中有ニ白絨ノ乃漿ノ、霜后枯裂則子飛

〔一名〕 **於宇禰** 本草類編 ○本草和名曰、蘿摩子、一名丸蘭。和名加々美。倭名類聚鈔曰、芄蘭。和名加加美○芄蘭詩疏ニ出

乃ナキ本アリ

加々牟 異本本草類編

［集註］ 古事記曰、乘ニテ天之蘿摩船ニ

［形狀］ ○原野及人家籬垣ニ多シ、蔓延ス、春苗ヲ出ス、葉何首烏ノ葉ニ似テ微厚ク、綠色、白粉ヲ帶、夏葉間ニ花ヲ開、五出白色、花後實アリ、白薇ノ實ニ似テ大也、内ニ白絮アリ

布止都良 本草和名　［漢名］ **百部** 本草　○今通名

證類本草曰、圖經曰、百部根。春生レ苗ヲ作ス藤蔓ヲ、葉大而尖長、頗ル似ニ竹葉ニ、面青色而光、根下作レ撮如ニ芋子ノ、一撮乃十五六枚、黃白色、二月八月採暴干、似ニタリ天門冬ニトミユレバ、布止都良ハ眞ノ百部ニシテ、土圞兒ノホドニ非ルコト明カ也。土圞兒根ハ味甘ク、亦天門冬根ニ似ズ

［今案］ 本草類編云、百部。味苦レ无レ毒。和保止川留、二

［一名］ **保止豆良** 倭名類聚鈔曰、百部。和名保止豆良　**保度豆良** 天文寫本和名抄　**保止川留** 本草類編　**富度** 新撰字鏡曰、百部根。富度　**ほとつら** 藻塩草曰、百部根。ほとつら

［集註］ 延喜式卷第三十七曰、典藥寮。諸國進年料雜藥。出雲國、百部根二斗。出雲國風土記曰、意宇郡、所在草木百部根。嶋根郡、所在草木百部根。秋鹿郡、所在草木百部根。出雲郡、所在草木百部根、女委。神門郡、所在草木百部根。仁多郡、所在草木百部根。和泉國風土記曰、日根郡、所在草木百部

［形狀］ ○百部ハ蔓生、草本ノ二種アリ、蔓生ノモノハ蔓丈許ニ延ブ、節アリ、葉節

ニ兩對ス、竹葉ニ似テ本濶ク、短クメ軟ニ厚ク、縱道アリ、夏葉ノ上ヨリ細莖出、五瓣青花ヲ開、內紫褐ヲ帶、花後郁李核(ニハムメノタネ)ノ如キ實ヲ結ブ、綠色、熟テ二ツニ裂、內ニ黑子アリ、其根天門冬ノ如ク、皮黃白色、味極テ苦シ、草本ノモノハ春葉出ルトキ、本ニ花ヲ開

定家葛(カヅラ) 應仁記

漢名 絡石 本草

今名 テイカヽヅラ

證類本草曰、圖經曰、絡石。今在處有レ之、宮寺及ヒ人家亭園山石ノ間種テ以テ爲レ飾、葉圓如ニ細橘ニ正青、多夏不レ凋、其莖蔓延ス、莖節著ク處卽生ニ根鬚ニ包ニ絡石上ニ以レ此得レ名、花白子黑

一名

都多 本草和名曰、落石。和名都多

川太 本草類編、應仁記曰、千本兩歡喜寺、此寺ニ定家葛(カヅラ)ノ墓アリ

集註 源平盛衰記卷第十日、唐垣破て絡石はへり。本草類編曰、絡石。和川太、正月中採之傅石是也

形狀 ○脩治纂要曰、絡石。天伊可賀豆羅、石ニマトウヲ用ユ。木ニマトウハ木ニ依テ藥性ガ異ナルゾ、故ニ不用、莖ト葉トヲ剉ミ焙ル、正月ニトル、又六七月ニ莖葉ヲトル、毛ヲ去○絡石ハ莖黑褐色、葉節ニ互生ス、形狀橘葉ニ似テ小也、夏葉間ニ花ヲ開、白色五出、梔子花ニ似テ小ク香氣アリ、後實ヲ結テ一蒂ニ二實、豇豆(サヽゲ)ノ如クニメ尺許、內ニ絮アリ、莖葉四時不レ凋

宇波加川々曾(ウバガツヽソ) 本草類編

漢名 何首烏 本草

○今通名

證類本草曰、何首烏。蔓紫花黄白、葉如薯蕷而不光、生メ必ス相對、根大サ如拳、有赤白ノ二種、圖經曰、子有稜似蕎麥而細小、纔ニ如粟大

一名　ウハカツラ

和名傳抄曰、何首烏。ウハカツラ

集註　本草類編曰、何首烏。和宇波加川々曾、春採根如山藥

形状　○脩治纂要曰、何首烏。宇波可豆豆曾、多加登宇、比岐於古之。本草辨疑曰、唐ハ瓜ニ似テ長ク、筋五ツアリ、連珠ノ如クイクラモツヾキ生ス、是眞也○原野雜草ニ纏ヒ樹ニ登ル、蔓藷褐色、葉互生メ薢蘼カヾモニ似テ薄ク、質虎杖葉ノ如シ、秋梢ノ葉間穗ヲナシ白花アリ、虎杖花ニ似タリ

熊葛(クマカツラ)　日本靈異記

漢名　山藤　盛京通志

今名　クロガネカヅラ

盛京通志曰、山藤木ノ類、枝幹柔靱如シ藤ノ、故ニ名ク、土人取テ爲ス鞭桿ト

一名　久万豆豆良　新撰字鏡曰、攝。時葉反、虎豆也　久万豆豆良○攝。爾雅曰、欇、虎櫐。註、今虎豆纏ニ蔓林樹ニ而生、莢有ニ毛刺。本草綱目、時珍曰、爾雅、虎櫐、卽貍豆也。貍豆野生山人亦有種之者、三月下種生蔓、其葉如豇豆葉、但文理偏斜ナリ、六七月開花成簇紫色、狀如シ扁豆花ノ、一枝ニ結莢ヲ十餘、長サ三四寸、大サ如拇指ノ、有白茸毛、老ハ則黑而露ハレス筋、宛ニ如乾熊指爪之狀、其子大サ如刀豆子ノ、淡紫黑色有斑點、如貍文ノ、卽ハ升マメ也。葉刀豆ニ似タリ、花モ亦相似テ紫色、豆ハイソマメノ如クニメ毛アルコ葛ノ莢ノ如シ

くま柳　家中竹馬記

熊柳　隨兵次第

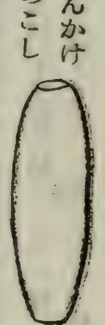
勝弦　豐後守高志覺書曰、鞭の拵やうの事、二尺八寸也。くま柳を可用。くま柳をば勝弦といふ之。それによりて、神

宮皇后異國退治の御時、勝弦を鞭に持てさゝるべしとて、諸神さゝれたり。其より今に用來事也。二尺八寸は廿八宿也、とつか六寸にとうをつかふなり。六寸の內、五分さきをのこして、あなをあけ緒をとをして鞭むすびにうでの入ほどにむすぶなり。緒の革は、黑革なり、二尺八寸は手にてとるべし

集註 日本靈異記曰、亦儲-備副納二熊葛ノ練鞭廿段一即二手持二投熊葛鞭一以一遍打之著肉亦取一鞭一遍打之鞭著肉十段鞭隨打皆著肉云云鞭ムチ。江家次第卷第十九曰、御二覽陸奧交易ノ御馬一ヲ事。右御馬乘十五人、渡二階下一向二日華門一。冠緌褐衣布帶白袷ノ藁履持二藤鞭一ヲ、左亦准レ之。臨時競馬ノ事。塗鞭。以二紙捻一代二藤卷。家中竹馬記曰、鞭はくま柳本式なり、黑くぬりてらう色を取、とつかをすべし。隨兵日記曰、次にくま柳の鞭をさしそへ付べし、とつかに藤をつかひ、同重藤を所々につかふべし。如此の鞭を、矢の上にすみ違にさすべし。隨兵次第曰、鞭は熊柳たるべし。らう色を取て、黑くぬるべし。取柄には、白とうをつかふなり。腕拔は紫革にても、黑革にてもくけてすべし。鞭の長さ二尺七寸五分也。大サ口五分計成べし。藤は所々につかふ。但しするまではつかはず

今案 伊勢貞丈雜記曰、鞭に作る木、熊柳也。一名礒柳とも云、紀伊國又土佐國などにあるまさきのかづらのごとし、長〱外の木にからみつく物なり、しなびて折る事なきゆへ、むちにするゝ。土佐にては一名くまふぢともいふ也。又かつつるとも云、勝蔓とぞ當用抄に見えたり。頭書云、カツヽルの名小がさはらの書にみえて、カツヽルト云故、ムチニ用之といへり。非之。ムチニ用る木なるゆへカツヽルト私にいふなるべし。又曰、くま野の鞭こしらへ樣、皮を削りたて（此内十八）本大サ也、末五厘程細クスベシ 是ほどの太サニ削、鮫の皮にて磨き扨とくさにて磨くなり。扨墨

にてぬり、せしめうるしにてぬりからして、其上にらういろうるしを一へんかけべし、とつかは相應なるふとさの竹筒を六寸切て、皮ヲさり、上下を削りのこし



如此の形にして、內に麥うるしを付て、むちの本にも、麥うるしを付て、竹の筒にさしこみてからし置べし、かれて後ぅでぬきのあなをあけべし、筒の上は黑皮にてぬひ包む也。頭書云、トッカノ皮ノわけめかくルの返りにすべし、ウデヌキの皮のタケヲハ內ノ高ニスヘシ○クロガ子カヅラハ山中ニ多シ、其蔓丈餘ニ及テ舊莖枝ヲ分ツ、大ナルモノ廻リ三四寸、小者馬鞭ノ如シ、綠色紫斑アリ、老テハ灰褐色トナル、春枝ニ新葉ヲ出シ互生ス、大サ棗葉ノ如ク大ニタ、左右葉脈分レ実也

古名錄草部卷第二十一　終

古名錄草部卷第二十二目錄

水草類上

世理(セリ) 水靳　　みつばぜり 漢名未詳

久々佐(クヽサ) 合萠　　阿夜女久佐(アヤメグサ) 泥菖蒲

以之阿也女(イシアヤメ) 石菖蒲　　爲(ヰ) 燈心草

於保井(オホヰ) 莞　　太都乃比介(クツノヒゲ) 石龍芻

知草(シリクサ) 薦草　　加蒲(ガマ) 蒲 ○加末乃波奈(ガマノハナ) 蒲黃

具々(クヾ) 鹹黃　　須計(スゲ) 薹

さゝめ 山莎　　美久里(ミクリ) 三稜

阿之(アシ) 蘆 ○あしの花 蓬蕽 ○阿之乃袮(アシノネ) 蘆根 ○阿之豆乃(アンツノ) 蘆筍

姫葦(ヒメアシ) 葇　　唐蘆 碧蘆 ○苗竹

古毛（コモ） 菰蔣○古毛都乃（コモツノ）菰筍○古毛乃祢（コモノネ）菰根

花勝見（ハナカツミ） 彫蓬

通計二十六種

紀藩　源　伴存撰

水草類上

世理(セリ) 萬葉集　**漢名** 水斳 本草　**今名** セリ

證類本草曰、水斳。蜀本圖經云、生二水中一、葉似二芎藭一、花白色ニシテ而無レ實、根亦白色

一名 世利 本草和名曰、水斳和名世利。新撰字鏡曰、芹。世利。日向國風土記曰、那珂ノ郡芹本ノ鄕、是レ昔シ火酣芹(ホノスソリ)ノ命坐地也。故ニ云フ芹本ト。大和國風土記曰、宇陀ノ郡門僕ノ神社所レ祭ル火闌芹也。倭名鈔國郡部曰、加賀國石川郡芹田、世利多

世里 倭名類聚鈔曰、芹。和名世里。國郡部曰、越前國今立郡芹川。世里加波

制利 日本書紀天智天皇童謠曰、制利能母騰(セリノモト)芹本。大和物語曰、せりつみしむかしの人もわがごとく心にもの丶かなはざりけん

せりな 寶治御百首曰、澤若菜、たれとなくしのぶむかしのかたみにもふるの丶さはにせりなをぞつむ

こせり 催馬樂曰、こぜりこそゆで丶もむまし。後鳥羽院御集曰、しづのめがあれ田のくろにこぜりつむあさの衣も

陘陛ノ誤。下同ジ

かくはし
ほれじ

小芹 堀河院百首曰、春日のゝ雪げの沢に袖ふれて君がためにと小芹をぞつむ。山家集曰、小ぜりつむ沢の氷のひまたへて春めき初るさくらゐの里

芹子 萬葉集巻第二十曰、天平元年班田之時使葛城ノ王従ニ山背國一贈ニ陘妙觀命婦等ニ所一歌一首。副ニ芹子ノ褁一。安可禰佐須、比流波多多婢豆、奴婆多麻乃、欲流乃伊刀末仁、都賣流芹子許禮。陘妙觀命婦報贈歌一首。麻須良乎等、於毛敝流母能乎、多知波吉氏、可爾波乃多爲爾、世理曾都美家流

根芹 源平盛衰記巻第十一曰、澤邊ノ根芹ヲツミ。曾根好忠家集曰、根芹つむ春の澤田におり立て衣のすそのぬれぬ日ぞなき。春ごとに沢べに生る芹の根をとしと共にて我はつみつる

ふか芹 藻塩草、八雲御抄曰、くきも葉もみな見どりなるふかぜりはあらふねのみやしろくみゆらん

根白草 藻塩草曰、せゞにたつ浪とて花よしろねぐさつむわが袖に雪はふりつゝ。せりの異名也。藏玉に有

野芹 藻塩草

野せり 言塵集曰、芹。枝ぜり、野ぜり、畠芹、ふかぜり

澤芹 駿河國風土記曰、盆頭郡島田駅、貢云云澤芹等。

世無 倭名鈔國郡部曰、信濃國水内郡芹田、世無多

ゑぐ 藻塩草曰、せりの異名也。塵添壒嚢抄曰、エグ或ハ芹ヲ云共云ヘリ。但芹ト女萎ト六帖ニハ別ニ載タルト云ヘリ○按ニ、女萎ハ萎蕤ト、ボタンヅルト二物同名也。萎蕤ハ三月苗ヲ生ジテ水濕ノ地ニ不レ生。陽地ニ産ス。雪消ノ水ノ頃ハ未ダ其芽ヲ不レ出也。ホタンヅル亦陽地ニ産ノ、水濕ノ地ニ産セズ、苗モ三月ニ出テ蔓草也。倶ニ回具ニ不レ充、エグニ女萎ノ字ヲ用ルハ非也

川加川比 本草類編

【集註】本草類編曰、水蘄。和川加川比、又云、世利。即芹菜

也。秋芹取根白色、赤芹取莖葉。延喜式巻第三十二日、大膳上。春日祭雜給料、芹三斗。釋奠祭料、芹云云各二升。同巻第三十九日、内膳司。供奉雜菜、芹四把。准二四升一、自二正月一迄二六月一。漬年料雜菜、芹十石、料塩八斗。田六段二百三十四步、種レ芹云云料、在二乙訓郡一。美濃國風土記曰、其產物者芹。駿河國風土記曰、鳥渡郡稻川生芹。益頭郡箭葛貢芹菜。止駄郡貢芹菜、大長貢芹菜。源氏物語椎がもと曰、聖のはうより、雪ぎえにつみて侍るなりとて、さはのせり、わらびなどたてまつりたり云々　雪ふかき汀のこぜりたがためにつみかはやさむ親なしにして。應永廿五なぐさめ草曰、とばかりありて、さとの子せりか、なにぞかたみにつみもちたる三四人云々。本朝文粹曰、池亭記、凡屋舍十ヵ之四ッ、池水九之三、菜園八之二、芹田七之一ナリ。平家物語巻第九曰、さはのねぜりをつみてこそ、露のいのちをばすごしけれ。狹衣曰、かく芹つみしよの人にもとはまほしき御こゝろのうち。又曰、びんなくて出させ給ふ、御心猶せりつみしよの人にもとはまほしくおぼされける。實方朝臣集曰云々　白河にせりあらふ女して「中川にあらふねぜりのねをほりてあらはれてこそあるべかりけれ。袖中抄曰、綺語抄云云々　いつきむすめの芹をくひてありけるを見て云々。無名抄云云々后のものめしけるに、せりとみゆる物をめしけるをみて云々。山家集曰、かつすゝぐ沢のこぜりのねを白み清げに物を思はする哉。錄外書曰、甲斐國波木ノ郷、身延ノ嶺云云谷ニ下テ、アマノリヤオヒタルト尋候ヘバ、誤テヤ見ルラン、セリノミシゲリフシタリ

種法　延喜式巻第三十九日、内膳司。耕種園圃。營芹一段、苗五石、惣單功四十四人、耕地二遍把犂一人、馭牛一人、牛一頭、料理平和一人、糞百二十擔、運單功二十人、殖功六人、二月操レ苗功十人、刈功五人。同巻第四十二日、左京職。凡京

中不レ聽レ營ニ水田一、但大小路邊及卑濕之地、聽レ殖ニ水葱芹蓮之類一

みつはせり 大草家料理書

［漢名］未詳

［集註］大草家料理書曰、肥生鳥の事、作りて薄酒を懸て、ふくさみそをこくして、かへらかして入れ也。但みつばぜりを湯にをしても吉

［形狀］○大和本草曰、ミツバゼリ、春宿根ヨリ生ズ、莖ハ芹ノ如クニシテ大ナリ、香味モ亦似タリ、ミツハゼリハ濕地ニ生ズ、葉三枚、一葉ツヽナス、夏莖出一尺許、細白花穗ヲナシ開、芹花ノ傘ヲナスニ異リ

久々佐 一本和名抄

［漢名］合萠 中經

［今名］クサネブ

［一名］久々散 倭名類聚鈔

［集註］延喜式卷第三十九曰、內膳司。漬年料雜菜。蔛萠草搗三斗、料鹽四升五合。右漬ニ秋菜一料。倭名鈔曰、鬼皂莢、久々散。辨色立成云、蔛萠草、今按本文未詳

［今案］本草和名曰、鬼皂莢、如皂莢、高一二尺、和名久々佐。據レ此則久々佐ハ中藏經ニ所謂水茸角、一名合萠ニシテ、即クサネム也。古ハ合萠ヲ菜トナセル也。蓋鬼皂莢ハ和產未詳。本草綱目皂莢ノ附錄ニ出、酉陽雜俎曰、鬼皂莢生ニ江南池澤一、如ニ皂莢一、高サ一二尺、沐レ之ヲ長レ髮ヲ、葉亦去ニ衣垢一。證類本草曰、陳藏器云、鬼皂莢作ニ浴湯一去ニ風瘡疥癬一、挼レ葉去レ垢、沐レ髮長レ頭、生ニ

江南澤畔ニ如ニ皂莢ニ高一二尺

形状 ○大和本草曰、クサテムノキ、其葉合歡木ノ葉ニ似テ莖赤シ、夜ハ子ブル。按ニクサ子ブハ、莖赤色ヲ帶ルト、綠色ナルトアリ、葉ハ何レモ皂莢ニ似テ、細ニシテ柔軟、又合歡ニ似テ亦柔カナリ、莖高サ二三尺ニ莖綠色ニシテ軟也、枝ヲ分葉互生ス、夏葉間ニ黄花ヲ開、豆ノ花ノ如シ、花後莢ヲ結テ、尾張決明ニ似テ柔ニシテ綠色、熟テ褐色トナリ、一分ツヽニ折レ断ツ、中ニ豆ノ如ク曲リタル子アリ、細長一分許、秋苗根倶ニ枯ル

阿夜女久佐 倭名類聚鈔

漢名 泥菖蒲 本草

今名 シヤウブ

本草綱目、菖蒲。集解、時珍曰、生ニシ於池澤ニ、蒲葉肥根高二三尺ナル者ハ泥菖蒲也、生シ於水石之間ニ、葉ニ有リ劍脊一、瘦根密節高尺餘者石菖蒲也

一名 阿也女久佐 本草和名曰、菖蒲。和名阿也女久佐。倭名鈔曰、菖蒲。和名阿夜女久佐

阿夜女久左 天文写本和名抄曰、菖蒲。和名阿夜女久左

安夜賣具佐 萬葉集卷第十八曰、安夜賣具佐、加豆良爾勢武日云云

安夜女具佐 萬葉集卷第十八曰、安夜女具佐、珠奴久麻泥爾云云。保登等藝須、伎奈久五月能、安夜女具佐云云。安夜女具佐、余母疑可豆良伎云云。同卷第三曰、鳴九月ニ者ハ、菖蒲云云。同卷第十曰、霍公鳥、厭フ時無シ、菖蒲、蘰將爲日、從此鳴度禮。同卷第十九曰、菖蒲、花橘乎云云。菖蒲、可都良久麻泥爾云云。菖蒲、玉貫麻泥爾。山家集曰、高野に中院と申所に、あやめ

ふきたる坊の侍けるに云々

さうふ

雅輔裝束抄曰、さうぶ云々。又曰、わかさうぶ。源氏物語乙女曰、五月の御あそび所にて、水のほとりにさうぶうへしげらせて。枕草紙曰、五月のせちの、あやめの藏人、さうぶのかづら、あかひもの色にはあらぬを。又曰、三条宮におはします比、五日のさうぶのこしなどもてまいり云々。俊頼髄腦抄曰、さうぶをあやめといふは、さうぶの名にはあらず、あやめといふは、一ツのくちなはの名なり、そのくちなはに似たれば、さうぶをば、あやめと申は、たゞあやめとよみて、くさといふよしよまず云々なをさうぶをよまば、あやめ草とつゞくべき也。榮花物語晩待星曰、五月最勝の御はかうに、うへの御つぼねにおはします、さうぶをみなうちて、やがてさうぶのからぎぬ、くすだまなどつけて云々。蜻蛉日記曰、五月になりぬ、さうぶのねながきなど、こゝなるわかきひとさはげば。山家集曰、五日さうぶを人のつかはしたりける返事に。世のうきにひかるゝ人はあやめ草心のねなき心地こそすれ。又曰、五月五日、山寺へ人のけふいる物なればとて、さうぶをつかはしたりける

しやうふ

枕草紙曰、卯月の晦日に、はせ寺にまうづとて、淀のわたりといふものをせしかば、舟に車をかきすへてゆくに、しやうぶ、こもなどの末みじかく見えしをとらせたれば、いとながゝりける云々三日といふに歸るに、雨のいみじう降しかば、さうぶかるとて、笠のいとちいさきをきて、はぎいと高きおのこわらはなどのあるも、屏風の絵にいとよくにたり。平家物語卷第十二曰、是よりにし、へんせうじのおく、大かくじと申山寺の北、しやうぶ谷と申所にこそ。又曰、次の日北条しやうぶだにをうちかこみ云云。蜻蛉日記曰、しやうぶふくなれば、みなひともおきて、かうしはなちなどすれば云々時日のくもかへすかぜう

女ノ下京太等草字アリ

ちふきたれば、あやめのかはやうかえていとおかし

さふ　散木集曰、菖蒲。きみがさふゝちはらならばかすが山いたねの松にかゝらざらめや

漢女　延喜式卷第十三曰、大舍人寮　凡五月五日、典藥寮進ニ菖蒲草一。舍人叩門、其詞曰、漢女進良牟止

奴美久佐　本草類編

蒲草　萬葉集卷第八曰、霍公鳥雖待不來喧、蒲草(アヤメクサ)玉爾貫日乎、未(イマダ)遠美香○按ニ蒲草ハ即菖蒲草ノ略也○字典曰、蒲。唐韻、水草可ニシ以爲ス席。釋名蒲草也。正字通曰、蒲山南ノ人謂フ之香蒲ト、卽ガマ也

昌蒲　吾妻鏡卷第三十二日、曆仁元年五月四日、及レ晩、自ニ將軍家一被レ調ニ進昌蒲御枕、鏤ニ金銀一幷御扇等於公家ニ云云。延喜式卷第十五曰、内藏寮。造ル五月五日昌蒲ノ珮(ヲモノ)ヲ所ニ云云折櫃二十合。十五合納ル諸寺ノ昌蒲佩ヲ料、五合ハ雜用云云。凡諸衛府所レ獻昌蒲幷ニ雜彩時ノ花ハ、寮官率テ史生藏部等ヲ撿收メ附ケヨ糸所ニ。凡典藥寮所レ獻昌蒲幷艾(ヨモギハ)、叅進之後、寮允已下參入シテ撤レ之。同卷第四十五曰、左近衛府。凡五月五日藥玉料、昌蒲艾(ヨモギ)、惣盛ニ一輿ニ、雜花十株。盛ノ瓫ニ居レ臺ニ三日平旦申ニ内侍司ニ列ニ設ヨ南殿前ニ

集註　續日本紀卷第十七曰、聖武天皇天平十九年五月庚辰、天皇御ス南苑ニ觀ル騎射走馬ヲ。是日、太上天皇詔シテ曰、昔者五日之節常ニ用テ菖蒲ヲ爲ス縵ト、比來已ニ停ム此ノ事ヲ、從今而後、非ンハ菖蒲縵スル者ニ勿レ入ルコト宮中ニ。三代實錄卷第四十三曰、陽成天皇元慶七年五月五日庚午、天皇御ス武德殿ニ、覽ス四府騎射、及五位已上貢馬ヲ、喚テ渤海ノ客徒ヲ觀レ之、賜フ親王公卿續命縷ヲ、伊勢守從五位上安倍朝臣興行引レ客ヲ、就レ座ニ供レ食ヲ、別ニ勅シテ賜フ大使已下錄事已上續命縷ヲ、品官已下菖蒲蘰ヲ。延喜式卷第十一曰、太政官。凡五月五日天皇觀ル騎射幷走馬ヲ、辨及史等撿校ス諸事ヲ、所司設ク御座ヲ於武德殿ニ、是ノ日内外群臣皆着ク菖蒲蘰(アヤメノカツラヲ)ヲ、諸司各供ス其職ヲ。同卷第二十一日、宮内省、

藥ノ下雲州本寮字ヲ補フ

凡ソ典藥寮五月五日進ニ菖蒲(アヤメクサヲ)一、省ノ輔已上與ニ本司一共ニ入、奏進ス、其詞ニ曰、宮內省申久典藥寮能進レル五月五日(ヤツキ)能菖蒲、又人給乃菖蒲進登申ス。同卷第三十七日、凡ソ五月五日ニ進ニ菖蒲生蒋(トヤニセ)一、寮家充レ之黑木案四脚、二脚供御、二脚人給、並寮儲レ之苧(カラムシ)ノ兩、黑葛四斤、中省輔已下寮頭已下共ニ、執入進、訖即退出、輔留奏レ之、詞見ニ省式一。中宮東宮黑木ノ案各二脚、一脚供御、一脚人給。同卷第四十三日、春宮坊。凡五月五日典藥寮進ニ菖蒲一、官人率ニ侍醫一人藥生等ヲ一、持ニ菖蒲案ヲ一候ニ西門ノ外一。皇太神宮儀式帳曰、五月例五日節、菖蒲蓬等供奉。催馬樂曰、見そなふのや、みそのふの、あやめのこほりの、大りやうの云々。雲圖抄曰、五月五日、書司供菖蒲事云云、書司供菖蒲二瓶居机。北山抄曰、五月三日、六衛府獻菖蒲幷花等事。扶桑略記廿九曰、永承六年五月端午日、殿上侍臣左右相分、有ニ菖蒲合事一。榮花物語さまぐ〵のよろこび曰、五月五日のことなればにや、あやめのねのかゝらぬ御たもとなし。同かゞやく藤つぼ曰、五月五日になりぬれば云云かみをみれば、みすのへりもいとあをやかなるに、のきのあやめもひまなくふかれて、こゝろことにめでたくおかしきに、御くすだましやうぶの御こしなどもてまいりたるもめづらしうて、わかき人ゝけうず。枕草紙曰、御せくまいり、わかき人ゝは、さうぶのさしぐしさし、ものいみつけなどして、さまぐ〵からぎぬ、かざみなど、ながきね、おかしきおりえだども、むらごのくみしてむすびつけなどしたる、めづらしういふべき事ならねど、いとおかし。云云あをきかみにさうぶの葉、ほそうまきてひきゆひ。又曰、めでたきもの、あたらしくもなくて、いたくふりてもなきひはだに、さうぶうるはしくふきわたしたる。狹衣曰、かくいふほどに、卯月もすぎて、五月四日にもなりにけり。夕つかた、中將君內よりまかで給ふ道すがら見給へば、あやめ引ぬるしづのおが、ひもてあつか

ふさまども、げにいかばかりふかゝりける十市の里のこひぢならん、とみゆるあしもとどもの、いみじけなるも、しらずがほに、いとおほくもちたるも、いかにくるしからむと、目とまり給て、うきしづみねのみなかるゝあやめぐさかゝるこひぢと人もしらぬに。とぞいはれ給ふ、たまのうてなの軒ばにかけて見給へば、おかしうのみこそおぼさるゝを、御車のさきに、かほなども見えぬまで打むれて、行やらぬを、おどろ〳〵しき御随身の、こゑ〳〵にとどめられて、身のならんやうもしらず、かゞまりゐるを見給ひて、さばかりくるしげなるものを、かくいふと、せいせさせ給へば、ならひにてさぶらへば、さばかりの物は、なじかはくるしと思ひさぶらはんと申すを、戀路をばわが御身にならひ給へれば、心うくもいふかなと聞給ふ、大なるも、ちいさきも、つまごとにふきさはぐを、くるまよりすこしのぞきつゝみすぎ給ふに、いひしらずちいさく、あやしき家どもにも、たゞ一すぢづゝをきわたすを、何の人まねすらむと、哀にみ給ひつゝ云云、池のあやめの心ちよげにしげりたるをながめやり給ひて云云。清輔袋草紙曰、皇代記曰、天平云云同十九年乙亥初五月、菖蒲冠昔止今興也。百練抄卷第十曰、後鳥羽院建久三年五月五日丙子、皇后閑院、舊院六条殿、葺二菖蒲一、依二嘉承例一也。同卷第十四曰、四條院文暦一年、五月四日、故女院舊院不レ被レ葺二菖蒲一、世俗之説、終焉御所不レ葺云云、但建久六条殿葺レ之、嘉承堀川院葺レ之、治承高倉舊院不レ葺云云。吾妻鏡卷第十曰、建久元年五月五日戊午、今日營中不レ被レ葺二菖蒲一。是御輕服之間、御悲歎之餘也云云。同卷第十四曰、建久五年五月五日、乙丑、御所中屋倉、葺二菖蒲一事、可レ爲二檜皮葺所役一之由被レ仰、分二年々政所下部等一、沙二汰之一云云。同卷第十九曰、建暦元年五月四日、乙卯、爲二民部丞康俊、伊賀次郎光宗等奉行一、新御所可レ被レ葺二菖蒲一否、被レ尋二陰陽

古ノ下ニ脫テおこむあん（今案）か
よノ下「く〈の」脫

濆等之處、雖新所、爲御移徙後者、尤可被菖、以前有其憚云云。水左記曰、承保四年五月四日、今日菖蒲之日也、而遭喪之家菖否之條晴以不覺、此由問申前大納言之御許之處、返荅云、喪家四十九日中不可菖云云、後一條院御時四十九日以後所菖也者、然者今日所菖菖蒲也。殿中申次記曰、五月四日、根菖蒲、恒例。年中定例記曰、五月四日の夜、昌蒲の御莚御枕參りて、しかせられて、御しづまりゆ。五日、昌蒲の御湯の御行水あり。勢州へ御成御風呂。但昌蒲御湯參る。催馬樂曰、大宮の、にしのこんちに、あやめこんたり、あやめこりたり云〻。愚案抄曰、あやめこんたりは、菖蒲かりたりと言之。俊頼髓腦抄曰、さつきになりぬれば、あやめ草にかゝりぬれば、人の心のうきにおほし、身のほどをしらぬにひかせ、ながきをたもとにかけ云〻。赤染衛門集曰、五月五日あやめ草をてまさぐりにして云〻。源平盛衰記卷第十一曰、沼ノ石垣水籠（コメ）テ、菖蒲（アヤメ）ミダル、五月雨ニ。つれ〴〵曰、五月あやめふく比。新撰萬葉集曰、薩（サツキ）賓矦、野邊之側之、菖蒲草、香緒不飽砥哉、鶴鳴音爲。善光寺紀行曰、軒にあやめをふきわたすこと、都にもかはらざりければ。北國紀行曰、枯たるあやめのね、霜を帶たるに、まじれる杜若のくきなどまで、むかしむつまじくおぼえて。春宮年中行事曰、五月三日、さうひやうゑふ（兵衛府）、しやうぶ（菖蒲）をたてまつる事。古あんに、ふるくは、この事みえず。しかるをかうわいご（康和）、このふ（府）これをたてまつる。だいりには六ゑふ（衛府）たてまつる。これになづらへて、さう（左右）ひやうゑに（二府）ふばかりにたてまつるにや。四日しんでんしよ（主殿署）しやうぶをふく事。このひしゆでんしよのくわんにん、ごてんをよび所〻にしやうぶをふく。おなじきくわんにん、しやうぶをたてまつる事。しやうぶ二をりびつたてまつる。くら人これをとりて、一をりびつは、日のござの御ちやう。［虫損］

カハノ女房ノ下ノ虫損へうへにふくヲ活販本入レタリ か販群活本ナシ

一をりびつは、あさがれいにもちてまいる。女房【虫損】二（うへにふく）てんやくれう、しやうぶをたてまつる事。れうのくわんにん、しやうぶのかあんにきやく（脚）をたてまつる

【形状】枕草紙曰、見るものは、五日のさうぶの、秋冬過るまであるが、いみじうしろみかれてあやしきを、ひきおりあげたるに、其折の香のこりて、かゝへみるもいみじうおかし。古今著聞集曰、永承六年五月五日、内裏に菖蒲の根合有けり云云、經家朝臣ながき根を取て、良基朝臣にさづけて、南のひさしにのべおかしむ、右又かくのごとし、其長みじかをあらそふ、左の根一丈一尺、右の根一丈二尺にて、右勝にけり

以之阿也女（イシアヤメ） 大同類聚方 【漢名】石菖蒲 本草 ○今通名

正字通曰、石菖、生ニ水石間ニ瘦根密節

【今案】古昔五月五日ニ用ユル菖蒲ハ泥菖蒲ニシテ、延喜典藥式、諸國進年料雜藥中ニ出ル菖蒲ハ、皆石菖蒲也。今下ニ出レ之○明月記曰、貞永二年三月十八日、金吾依ニ腹病難ニレ治、申ニス身ノ暇ヲ一、今日始メ服藥ス云云、蓀根難レ生ナリト、爲レ藥ト由（ヨシ）貞幸ノ說ト云云。按正字通曰、蓀、弘景曰、溪蓀根形氣色似ニ石菖蒲ニ、而葉無レ脊。鄭樵曰、菖蒲初穫乾則實、蓀乾則虛燥、然レバ則蓀ハ溪蓀ニメ、ハナアヤメ也

【集註】尺素往來曰、雜草木者、石菖蒲。本草類編曰、菖蒲。和名安也女久佐、又奴美久佐、五月十二月採根陰乾。延喜式卷第三十七曰、典藥寮。臘月御藥、昌蒲二兩。中宮臘月御藥、菖蒲三分。東宮所須、菖蒲一兩二分。雜給料、菖蒲九兩三分。諸司年料雜藥。齋宮寮、菖蒲二兩二分。左右近衛府、菖蒲云云各四兩。左右衛門府、菖蒲云云各二兩。左右兵衛府、云云菖蒲各三分。遣ニ諸蕃使一。

唐使、云云菖蒲各四斤。諸國進年料雜藥。山城國、菖蒲三斤。伊賀國、菖蒲云云各十斤。伊勢國、菖蒲一斤。近江國、菖蒲一斤一兩。越前國、菖蒲廿六斤。丹後國、菖蒲四斤。伯耆國、菖蒲云云各一斤。播磨國、菖蒲六斤。美作國、菖蒲二斤。備前國、菖蒲一斤。備後國、菖蒲四斤。安藝國、菖蒲云云各六斤。紀伊國、菖蒲六斤。土佐國、菖蒲云云各四斤。駿河國風土記曰、富士郡互河輪外貢石菖蒲。阿波山貢石菖蒲

藺井　倭名類聚鈔

漢名　燈心草　本草

今名　ヰ

一名　とうしみ　職人

本草綱目、燈心草。集解、時珍曰、此卽龍鬚之類、但龍鬚緊小ニシテ而瓤實ス、此草稍粗ニシテ而瓤虛白。吳人栽エテ蒔之。取テ瓤ヲ爲ニ燈炷ト、以テ草織リ席及ビ蓑ニ

職人盡歌合曰、とうしんうり。月に寢ぬとうしみうりの身のわざをたれきゝしらぬいびきとかいふ云々とうしみのちぎりやすきをためしにていざゝば人を先ひきてみん

井　新撰字鏡曰、萑。井〇字典曰、萑。玉篇、似ノ韮而黃、又同レ葦。正字通曰、萑萊名、似ニ烏韭ニ而黃、難此則萑ハ非ニ燈心草ニ也〇葦。爾雅曰、今俗ニ呼テ草木ノ華初テ生スル者ヲ爲レ葦

知比佐支井　新撰字鏡曰、藺。知比左支井〇藺。

字典曰、藺。玉篇似レ莞ニ細可レ爲レ席、一名馬藺。乃本草所載蠡實ニシテ、子チアヤメ也。古書皆誤テ藺ヲ井トス。萬葉集卷第十二曰、草陰之、荒藺乃崎乃、笠島乎。延喜式卷第十二曰、監物。年料、藺笠十枚。並ニ官人ノ料。同卷第十五曰、內藏寮。諸國年料供進。藺ノ帖笠百二十蓋。藺笠四十六枚、和泉國調。江談抄曰、藺ノ字近代ノ人詩ニ不レ作ニ件ノ字ニ叓。又云、藺字、近代ノ人詩ニ不レ作云云、明衡幷範綱作ニル此ノ字ヲ、件ノ人以後、强以テ

不レ作、云云、或秘抄ノ中ニ有レ之。倭名類聚鈔曰、藺、和名爲、卽爾雅註所謂、芏草生ニ海邊ニ似ニ莞藺ニ南越人采以爲レ席。由レ此誤邪

ゐくさ

假名文字遣曰、ゐくさ、藺

【集註】

延喜式卷第二十二曰、民部上。凡掃部寮殖レ藺田一町、量ニ環山城ノ國便近ノ之處ニ、其營料者、以ニ當國正稅ニ百束ヲ、每年充レ之、刈收者ハ卽用ニ本司ノ仕丁ニ。同卷第二十六曰、主稅上。凡營ニ掃部寮藺田一町ヲ料稻三百束、每年以テ山城國正稅ヲ充ニ彼ノ寮ニ。同卷第三十八曰、掃部寮。殖レ藺田一町、在ニ山城國ニ耕殖四十一人、以ニ當國正稅ヲ雇充。刈得藺三百八十圍、寮家仕丁刈蓮。云云。令義解曰、軍防令第十七、凡兵士每レ火藺帽一枚。仙覺萬葉集註釋卷第十四曰、伊りまちのおほやがはらのいはゐづらひかばぬる〳〵わになたえそね。伊りまちとは、入間なり。伊はゐづらとは藺なり。おほ藺といふは、あらゝかなる藺也。これはこまやかなる藺なれば、伊はゐといふ。いはとは、いへと云詞也。ひかばぬる〳〵わになたえそねとは、する〳〵とまとはるゝ詞也。藺は灯心などにひくにまとはれたまりて、きれぬものなれば、ひかばぬる〳〵わになたえそねとよそへよめるなり。職人盡歌合曰、ざうりつくり。とがむべき人もあらじなふけどはきくもゐの月をのぼりてやみん

【製席】

延喜式卷第三十八曰、掃部寮。張席一具、長二丈、廣七尺二寸。料長席二枚、曝布一端、生絲六兩一分二銖、麻一斤九兩。縫綴料十三兩、纈料十三兩。縫首人單六人。織席一枚、長九尺、廣五尺、料擇藺一圍、苧十五兩、長功十五人、五人織手人刈ノ藺手 五中功十二人、短功十四人。織席一枚、長九尺、廣四尺、料擇藺二尺八寸、苧十三兩、長功十人、中功十一人、短功十三人。織席一枚、長九尺、廣三尺六寸料擇藺二尺四寸、苧四兩、長功八人、中功十人 短功十二人。織席一枚、長九尺、廣三尺二寸料擇藺二尺四寸 麻十三兩、長功八人、中功十人、短功十二人。編ニ食薦一枚、長尺、廣二尺 料

からはらハはらからノ誤カ

擇䉶一尺五寸、生絲五銖、長功一人、中功一人半、短功一人大半。䉶圓座一枚、徑三尺、料䉶、以二一圍一作二八枚一、長功一人、中功一人半、短功二人

於保井（オホヰ）　倭名類聚鈔

［漢名］　莞　爾雅　［今名］　フトキ

爾雅曰、莞ハ苻蘺、疏、詩小雅ニ下ニシレ莞上ニレス簟。筵ニ有二莞筵、蒲筵一。按正字通曰、翠菅ハ生二ス水中一、似レ葱中空、名二水葱一。字典、莞註曰、前漢ノ東方朔カ傳、註ニ莞今謂二フ之ヲ葱蒲一ト。山東通志曰、水葱蓆ハ出二ツ萊州一ニ、登ニ亦有レ之、水葱草也、中虛ニシテ似二ナ食葱一ニ、長硬生二ス水濱一ニ。救荒本草曰、水葱生二ス水邊及淺水ノ中一、科苗彷彿トシテ類二家葱一、而極細長、梢頭ニ結二蓇葖一、彷佛類二葱蓇葖一、而小開二黲白花一、其根類ノ葱根一、皮色紫黑、根苗俱味甘微鹹、葱蒲、本草綱目烏芋（クログワイ）ノ集解ニ時珍曰、肥田栽ル者粗近二葱蒲一。據レハ此ニ則葱蒲ハ爲ルレ莞（フトヰ）明矣

［一名］　おほ藺（ゐ）　仙覺萬葉集註釋曰、おほ藺（ゐ）といふは、あらゝかなる藺（ゐ）也○和名抄曰、莞。音完、一音丸、漢語抄云、於保井

於保爲具左

萬葉集卷第十四曰、可美都氣奴、伊奈良能奴麻能、於保爲具左、與曾爾見之欲波、伊麻許曾麻左禮

牟志呂井

新撰字鏡曰、藺。牟志呂井。通雅曰、藺卽萑音丸細葦席也。又曰、藺與レ莞皆澤艸也

まろ菅　藻塩草

まろこ菅

同上。蜻蛉日記曰、かへりごとするを、おやからはらせいすときゝて、まろこすげにさして「うちそばみきみひとり見よまろこすげまろは人すげなしといふなり。枕草紙曰、まろこすげ。林葉和歌集曰、山陰の雫にぬるゝまろ小菅まろしもひとりしほれざりけり　［集註］

延喜式卷第三十八曰、掃部寮。莞五百圍、攝津國條夫刈運

形狀

○大和本草曰、莞。俗ニフトヰ、又唐ヰトモ、マルスゲ、又佛ノ杖トモ云。燈心草ニ似テ甚大ナリ、深綠色、高五六尺、一叢ヨリ叢生ス、池沼ニ生ズ、秋刈テホシ、臥席トシ、圓座トス。フトヰハ葱ニ似テ長大、硬クメ中空白瓤アリ、夏梢ニ花アリ、葱花ノ包ニ似テ小ク、茶褐色ノ皮アリ、大サ二分許、數花聚リ附、三稜ノ花ニ似タリ

太都乃比介（タツノヒゲ） 本草和名

漢名 石龍芻 本草

今名 コヒゲ

本草綱目曰、時珍曰、龍鬚叢生ス、狀如ニ粽心草及ヒ鳧茈苗ニ直上、夏月莖端開キ小穗花ヲ、結ブ細實ヲ、並ニ無シ枝葉、今吳人多栽蒔織ㇾ席也。本經明ニ言フ、龍芻一名龍鬚云云

一名 宇之乃比太比 本草和名曰、石龍芻。和名宇之乃比太比、一名太都乃比介

宇之乃比太非 倭名類聚鈔曰、石龍芻。和名宇之乃比太非

太豆乃比介 新撰字鏡曰、石龍莖。太豆乃比介、一云牛乃比太比

牛乃比太比 見上

龍鬚 延喜式卷第十五曰、內藏寮。龍鬚筵三十枚云云。右武藏國、交易所ㇾ進

龍鬚 延喜式卷第二十三曰、民部下。交易雜物。武藏國 龍鬚卅枚

太川乃比計 本草類編

竜鬚 明月記曰、建永二年四月十六日公卿座龍鬚敷之

集註

本草類編曰、石龍芻。和太川乃比計、五七月採莖暴乾。愚昧記曰、御帳中龍鬚五六寸許引廻敷之。建武元東寺塔供養記曰、其上加龍鬚地鋪二枚、龍鬚茵云云。東宮御書始部類記曰、龍鬚茵自鳥羽殿被渡之。經俊卿

記其上敷龍鬢。類聚雜要曰、庇ノ具目錄、龍鬢地鋪二枚。經信卿記曰、治承四年八月十四日、今日有大臣召事云云被居南庇龍鬢座上。江家次第曰、東宮御元服。云云其上ニ鋪ニ龍鬢ノ土敷各一枚ヲ。台記別記曰、知足院禪閤七十賀云云其上施ニ龍鬢地敷一

[形狀] ○本草啓蒙曰、水田中ニ種ユ、燈心草ノ類ナリ。燈心草ヨリ細クメ短シ、長サ二尺許リ、備後福山ヨリ席ニ織リ出ス、備後席ト名ク、其草纖細ナル故席至テ緻密ナリ、草短キ故、席中ニテ續ギ織ル、故ニ中ツギトモ云

知草(シリクサ) 萬葉集

[漢名] 藨草 本草　[今名] ミツカド　[一名] 鷺尻刺 倭名鈔曰、辨色立成云、鷺尻刺 左岐

正字通曰、藨又艸可レ爲レ席、宋制ニ貢ス藨席ヲ謂フ艸席ト也。本草穇子集解ニ八九月抽レ莖、有ニ三稜一、如シ水中藨草之莖一

乃志利佐之

天文寫本和名抄曰、辨色立成云、左岐乃志利佐之。按ニ萬葉集曰、潮葦、交在草ノ知リ草ノト覩ユレバ、鷺尻刺ハ潮ノ來ル河邊、蘆ニ交リ生ズルモノ也。燈心草ハ水產ニメ潮來ル地ニハ不レ生ゼ、仙覺ガ說ニ從ベシ。和名抄ニ燈心草ノ一名トス誤也

[集註] 萬葉集卷第十一曰、潮葦、交在草ノ、知草、人皆知、吾ガ裏念ど。仙覺註釋曰、しりくさとは鷺尻刺といふ草也。藺の一名也。似レ莞而細堅、宜レ爲レ席といへり

[形狀] ○藨草ハミツカドト云 潮ニ近キ水濕ノ地ニ生ジ叢ヲナス、根ニハカマ葉アリ 內ヨリ莖ヲ出ス、三稜ニメ綠色、三尺許、秋梢ニ穗ヲナシ花

アリ、三稜ノ花ニ似タリ

加萬（ガマ） 天文寫本 和名鈔

[漢名] 蒲 本草

[今名] ガマ

本草綱目、時珍曰、蒲叢ニ生ス水際ニ、似レ莞ニ而褊有レ脊而柔

[一名] 女加末 本草和名曰、香蒲。和名女加末

加末 和名類聚鈔曰、蒲。和名加末。國郡部曰、近江國蒲生、加萬不。武藏國在原郡蒲田、加萬太。肥前國神埼郡蒲田、加萬多

加万 新撰字鏡。源平盛衰記卷第三曰、入道ハ左ノ手ニ蓮ノ實ノ念珠ヲ持、右ノ手ニ蒲團扇ヲ仕給ナ

加無 倭名鈔國郡部曰、越後國蒲原、加無波良。駿河國廬原郡蒲原、加無波良

加牟 倭名鈔國郡部曰、越後國蒲原郡、加牟波良

[今案] 日本書紀天武天皇曰、白鳳十年八月丙戌、遣ニ多禰嶋ニ使人等貢ニ多禰國圖ニ云云莞子及種々海物等多。莞ハフトヰ也。日本書紀ニカマト訓ズルヲミレバ、上代誤テ莞ヲカマトセルモノ也

[集註] 本草類編曰、香蒲。和女加末。四月採之。延喜式卷第四曰、伊勢太神宮。云云蒲一圍。神鳳鈔曰、遠江國、蒲土鷹七枚。源平盛衰記曰、入だうは云々右の手に蒲うちはをつかひ給ひて

[形狀] 蒲ハ水邊ノ地ニ多シ、春苗ヲ生ズ、葉大蒜葉ニ似テ細ク梗ク、長サ三四尺 夏莖ヲ抽、四五尺、梢ニ七八寸ノ穗ヲナス、蠟形ニヲ茶褐色、解ハ皆短絮也、其上ニ小葉アリ、黄粉ヲ包メリ、即蒲黄此也

[附方] 乳癰 頓医抄曰、蒲黄草、右莖葉ヲ能

々搗テ、汁ヲバ內ニ服シ、滓ヲバ上ニ付、日ニ三度カヘヨ

○加末乃波奈 本草和名　[漢名] 蒲黃 本草　[今名] ガマノハナノコ

證類本草曰、圖經曰、蒲黃、生ス河東池澤ニ、香蒲ハ蒲黃苗也。至レ夏ニ抽テ梗ヲ於叢葉中ニ、花抱テ梗端ヲ、如シ武士棒杵ノ、故ニ俚俗謂フ蒲槌トモ亦謂フ之ヲ蒲蕚花ト、黃ハ即チ花中蘂屑也、細若ニ金粉ノ、當ニ其欲レ開時有リ便取ル之○本草和名曰 蒲黃。和名加末乃波奈

[集註] 延喜式卷第三十七曰、典藥寮。遣諸蕃使。唐使、蒲黃云云各四斤。渤使、蒲黃云云各一斤。諸國進年料雜藥。河內國、蒲黃一斤。上總國、蒲黃四斤、下總國、蒲黃二斤。出雲國、蒲黃十二兩。備中國、蒲黃一斤。古事記曰、取ニ其水門之蒲黃ヲ敷キ散シテ而云云

[形狀] 福田方曰、蒲黃。カマノ上ノ黃花之。又松黃アリ、誤テ不可用之

[藥製] 頓医抄曰、蒲黃。カミヲヘダテ、各等分アブレ。福田方曰、石ナベノソコニ紙ヲ鋪テ炒レ。又ハツヨク炙リ、黃バム血ヲ破トオモハヾ生デ用之、血ヲ止ト思ハヾ炒テ色ヲ變シメテ使ヘ

具々 倭名類聚鈔　[漢名] 鹹蕢 閩書　[今名] クヾ

閩書曰、蕢ハ生ソ有リ三稜ニ、爾雅謂ニ之ヲ望ト、江ニ生スル者ハ爲ス淡蕢ト、近者爲ス鹹蕢ト、土人採以捆レ屨織レ帶ヲ、亦可レ爲レ纜。爾雅曰、望ハ乘車、註、可ニ以爲ル索、長丈餘○按、蕢同名アリ。爾雅、蕢 赤莧。註、今莧菜之赤莖者

一名 **久々** 新撰字鏡曰 蒴、久々。爾雅曰、蒴藮、蔬、一名天蔓精、南人名爲二地菘一ト云ハ、ヤブタバコ也

形狀 ○大和本草曰、クヽ。海濱斥地ニ生ズ、水陸共ニ宜シ、葉ハ香附子ノ葉ニ似テ、背(ウラ)ニカド一條アリ、織テ短席トス、農人コレヲ以馬具トシ、又繩トス、クヽハ香附子葉ヨリ細ク、長サ二三尺

須計(スゲ)　倭名類聚鈔

漢名 **薹** 正字通

今名 **スゲ**

爾雅曰、薹。夫須。註、鄭箋詩云、薹ハ可三以爲二禦レ雨笠一。字典曰、薹。韻會通作レ臺。謝脁ガ詩ニ、連陰盛二農ノ節一。薹笠聚二東菑一

一名 **すが** 仙覺万葉集註釋巻第三曰 菅(すげ)をすがと云は男聲(なんせい)をよぶなり。をよそ、酒をさかといひ、竹をたかといひ、菅をすがといひ、風をかざと云がごときは、みな男聲(なんせい)をよぶ也。悉曇(しつたん)のならひ成べし。すげと云は、すぐなりと云也。もろ〳〵の草は、枝葉(えだは)ありて、いまだおさなきより、おひしげるもあるに、菅(すげ)はすぐにたてるもの也○倭名抄曰、菅。和名須計

マ菅(スゲ) 塵添壒囊抄曰 凡ソマ文字有物多シ、マ菅(スゲ)

須介 新撰字鏡曰、菨、須介。菨上字須介

須加 倭名鈔國郡部曰、河内國丹比郡菅生、須加不。加賀國江沼郡菅浪、須加奈美。能登國鳳至郡菅田、須加多。佐渡國羽茂郡菅生、須加布

須賀 古事記曰、須賀多多美、伊夜佐夜(彌冷)斯岐氏

須宜 古事記曰、夜多能(八田)比登母登須宜(菅)波、古母多受、多知迦阿禮那牟、阿多良須賀(菅)波良、許登袁許曾、須宜波良登伊波米云云。八田若郎女答歌曰、夜多能比登母登須宜波、比登理登理母

八月十六日

云云〇延喜式卷第十七曰、内匠寮。御輿一具、蓋料菅一圍、山城國進。野宮裝束。御輿中子菅、蓋一具、菅井骨ノ料材ハ從ニ攝津ノ國笠縫氏ニ參來作。菅圓坐一枚。徑三尺厚一寸 長功二枚、中功一枚四分之一、短功一枚。江家次第卷第二曰、大臣大饗。菅圓坐敷ニ親王座東間ニ。同卷第七曰、六月晦日云云東庭ニ敷ニ菅圓座ニ。明月記曰、承元二年八月、南階取ニ大麻ニ御禊了云云座菅圓座也。園太曆曰、御元服次第云云菅圓座一枚。台記別記曰、長承四年二月八日、大納言殿賴長令任右大將給御裝束、此間中宮少進顯憲取將軍菅圓座、出自東方敷次將座上頭。兵範記曰、嘉應元年二月十三日、皇大后宮日吉行啓也云云次令諸大夫敷菅圓座於透渡殿〇大和本草曰、本邦昔ヨリ菅ノ字ヲスゲトヨメリ。爾雅曰、白華、野菅、註、菅茅屬。正字通曰、或曰、菅葉大似ノ菱花白穗旖旎トメ如レ帚、莖圓ノ而直、其弱柔韌可レ爲レ履、即菅茅ニメカヤ也

集註

出雲國風土記曰、秋鹿郡恵曇池ノ邊生菅。和泉國風土記曰、大鳥郡玉橫野鄉出菅。延喜式卷第三十八曰、掃部寮。菅二百圍、並刈運夫ハ以ニ當國正稅ニ雇役。雅輔裝束抄曰、そのうへにすがゑんざ（菅圓）をしきたり。催馬樂曰、すがのねのすがなすがなきことをわれはきゝ我はきくかな。梁塵愚案抄曰、しつやのこすげかまもてからばをひんやこすげ

形狀

仙覺萬葉集註釋卷第三曰、又すがのねの、ねもころ〴〵にと云詞も、もろ〳〵の草は、本躰おひたる草ならにそひて、ひろくおひさかゆるつねのならひ也。しかるに菅（すげ）はもとの草むらのねのはるかにとをくはひて、ころ〴〵にむらがりしげるなり。さればこれによそへて、ねもころごろとよめるなり〇大和本草曰、スゲハ水草、葉ニカドアリテ香附子ノ葉ノ如ニメ長シ、笠ニヌフ。近江、伊勢多ク水田ニウヘテ利トス、他州ニモ多クウフ

さゝめ 山家集 〔漢名〕山莎 通雅 〔今名〕ヤマスゲ

通雅曰、褁文山莎名ヲ爲ス蓑衣艸ト、謂フ下垂ニ石上ニ如キヲ蓑ノ 〔一名〕小ゝ妻 藻塩草曰、小ゝ妻、山がつのむすびてかつぐさゝめこそ衣のせきと雨もとをさね。月清みあけの野ばらの白露にさゝめ分くる衣さぬれぬ。ますらおのみのにさゝむと澤に生るさゝめかるにも袖はぬれけり 〔集註〕山家集曰、あやひねるさゝめのこ蓑きぬにきん涙のあめを凌がてらに 〔形状〕

○大和本草曰、小ゝ妻、山野ニ生ズ、賤民ハサ、ミノト云蓑ニ結ブ草也。茅ノ類ナリ、長シ、又賤民編レ之爲レ筵

美久里 倭名類聚鈔 〔漢名〕三稜 本草 〔今名〕ヤカラ

證類本草曰、圖經曰、京三稜、春生レ苗ヲ高サ三四尺、似ニ茭蒲葉ニ皆三稜、五六月ニ開レ花、似ニテ沙草ニ黄紫色、霜降後採レ根ヲ、削リ去皮鬚ヲ、黄色微苦、似タリ如ニ小鯽魚ニ狀ニ、體重者佳

計乃彌 本草類編。倭名鈔曰、三稜草。和名美久里 彌久利 新撰字鏡曰、𦸣 弥久利 みくり 枕草紙曰 草はみくり、哥の題はみくり○藻塩草曰、筑摩江みくり 〔一名〕須

多波美豆良 萬葉集卷第十四曰、安波乎呂能、乎呂田爾於波流、多波美豆良、比可波奴流奴留 安乎許等奈多延。仙覺註釋曰、たはみつをとは三稜草をいふ 美久利

然レドらノ誤ナリ

本草和名曰、三稜草。和名美久利

集註 本草類編曰、京三稜。和須計乃祢、五六月開花似莎草、根似魚狀。異本本草類編曰、ミクリ、一說私按、一說川スゲノ子田ノ中ニアリ。太上法皇御受戒記曰、懸ニ三稜草御簾ー。有ニ橡括染帽額ー。源氏物語玉かづら曰、みしま江におふるみくりのすぢはたえしを、となむありける云々。かずならぬみくりやなにのすぢなればうきにしもかくねをとゞめけん。堀河院百首曰、みくりはふ沢邊しめたるかきつばたくる人毎にめでずやはあらぬ。枕草紙曰、池はさやまの池、みくりといふ草の、おかしくおぼゆるにやあらん

今案 枕草紙曰、ゐ中だち事そぎて、馬のかたかきたるさうじ、びやうぶ、みくりのすだれなど、ことさらにむかしの事をうつしいでたりトミユ。即三稜ノ莖ヲ以テ編ル簾タルヿ甚明。證類本草曰、荊三稜。註曰、葉似ニ莎草ー極長ク、莖三稜ニメ如シ削レルガ、大サ如ノ人指ー、高サ五六尺、莖端ニ開レク花、大體皆如ニクノ莎草ニ而大ナリ。篠波家禮曰、出納家ニミセ物ノクジ小物クジトテ云云又楮ノ公事、山芋ノクジ、三クリノ公事、ホウロンミソノ公事、皆出納家ヨリトリシ。據レハ此ニ則三クリハ食用ノ物ニメ、烏芋ヲ指ス、三稜ノ根ハ堅硬ニメ食用トスルニ堪ズ

形狀 散木集曰、なぞしもうきに、はひちれる、みくりのおかば、くり返し。福田方曰、京三稜、蓬朮ノ如クムシテ使ヘ。若シ同ジ藥ニ合ニハ、一ニ包テ同ク炮メ使ヘ。此者數種アリ、黑ク圓ク、輕ハ不好。鯽魚ナリニテ、ヒラク、重ヲ吉トス。池邊陂濕ノ地ニ多シ。葉香附子ノ葉ニ似テ、長大ニメ二三尺、香氣ナシ。又スゲノ葉ニ似テ硬シ。夏莖ヲ抽、高サ四五尺、三稜ニメ如ク削、莖ニ附ク葉ハ互生ス、後梢ニ三ノ小葉ヲ生ズ、中ヨリ細莖出、小枝ヲ分チ、香附花ニ似タル花アリ、其形蘭草花ノ如シ、其根ニ堅キ塊アリテ、鯽魚ノ狀ノ如シ

阿之 倭名類聚鈔 【漢名】蘆 本草 【今名】ヨシ 【一名】安志 萬葉集卷第十四曰、伊毛奈呂我、都可布河泊豆乃、佐左良乎疑、安志等比登其等、加多里與良斯毛。倭名鈔曰、蘆葦。和名阿之。萬葉集卷第十七曰、阿之賀毛云云。同卷第一曰、葦邊行。同卷第二曰、葦若末乃云云葦原乃云云。同卷第四曰、從蘆邊。同卷第六曰、葦邊乎指天云云。葦垣乃云云(餘略) 安之 萬葉集卷第十四曰 美奈刀能也、安之我奈可那流、多麻古須氣。同卷第十五曰、由布佐禮婆、安之敝爾佐和伎云云。之保美知久禮婆、安之辨爾渡云云。同卷第十七曰、安之可流等云云。同卷第二十曰、安之我知流、難波能美津爾。倭名鈔國郡部曰、伊勢國三重郡葦田、安之美多 よし 仙覺萬葉集註釈卷第四曰、伊勢國には蘆をはまをぎと云也。攝津國にはあしといひ、あづまにはよしといふといへり。俊頼髓腦抄曰、濱荻とよめるは、荻にはあらず、あしを彼の國には濱荻といひならはしたるなり

證類本草曰、圖經曰、蘆根、今在處ニ有レ之、生ニ下濕陂澤中一、其ノ形都テ似レ竹、而葉抱レ莖ヲ生ス、無レ枝、花白作レ穗、若シ茅花一、根亦若ニ竹根一而節疎

○萬葉集卷第六曰 葭部尓波、鶴鳴動。爾雅曰 葭蘆

氷室草 藻塩草曰、なにはにはあしといふなるひむろ草よよのためしにかゝるはもなし。藏玉 なには草 同上 さゝれ草 同上 阿斯 古事記曰、如ニ葦牙一因ニ萠騰一之物ニ而成神名宇摩志阿斯訶備比古遲神。又曰、阿斯波良能、志祁志岐袁夜邇。枕草紙曰 あし○倭名抄國郡部曰、肥後國葦北 阿之木多○倭名抄國郡部曰、參河國渥美郡高蘆、多加之

處々ハ刊本々處ニ作ル是ナラム

老年所佐刊

【集註】軍防令曰、凡火炬、乾タル葦ヲ作リ心ニ、葦ノ上ヲ用ニ乾草ニ節ニ縛シ處々ニ周迴、插ニ肥ツル松ヲ明ニ。出雲國風土記曰、秋鹿郡惠曇池、四邊生葦蔣菅。和泉國風土記曰、大鳥郡出竹葭、檳野鄉出葭萱等。駿河國風土記曰、益頭郡沢食貢葭葉。釋日本紀曰、凡肥美之地ニハ葦草多生ス。續日本後紀巻第十九曰、嘉祥二年三月庚辰、興福寺大法師等爲レ奉レ賀　天皇宝筭滿ニ于四十ニ云云、副ニ之長歌ニ奉献、其長歌詞曰、云云宿那毗古那加、葦菅遐、殖生志津。源氏物語須磨曰、かや屋ども、あしふけるらうめく屋などおかしうしつらひ。同とこなつ曰、あしがきのまぢかき程にはさぶらひながら。同梅枝曰、あしのおひざまなど、なにはのうらにかよひて、こなたかなたいきまじりて。同うきふね曰、あしがきしこめたる西おもてを、やをらすこしこぼちていりぬ。宇治拾遺曰、淵あをくおそろしげにて、そこもみえず蘆鷹などいふものおひしげりたりけるをみて云云。桐火桶曰、きよくすめる池に、あしところぐにしげりて云々。倭姫命世記曰、彼鶴佐々牟江宮前之葦原中還行鳴使到見葦原中云云。應永廿五なくさめ草曰、西は野澤たえぐにひとむら里につゞき芦茂り、ぬなわひろごれる池、北にめぐり。太神宮參詣記曰、あしのはの多がれたる浦かぜふきわたりて。催馬樂曰、あしがきまがきわけててふこすとおひこすとおひこすとはたれ。愚案抄曰、芦がきは蘆をあめる垣之。土左日記曰、いつしかといぶせかりつるなにはがたあしこぎそけてみふねきにけり。歌林四季物語曰、そのうなばらの中に、一つの物おひいで、かたちつのぐむあしのごとし。海道記曰、津嶋の渡と云所を舟にて下れば、芦の若葉あをみわたりて、つながぬ駒も立はなれず。明月記曰、寛喜二年十一月十四日、臨昏謁風流一送富小路中納言許、老年所佐同風情、栽枯蘆造小屋云云。太平記巻第二十六曰、西行法師ガ古枯葉ノ風

本先年所作ニ作ル

ヲ詠タリシ、難波ノ葦ノ一村。大和物語曰、車をたてゝながむるに、ともの人は日くれぬべしとて、御くるまうながしてんといふに、しばしといふほどに、あしになひたるおとこの、かたいのやうなるすがたなる、此くるまのまへよりいきけり。桐火桶曰、きよくすめる池に、あしところ〴〵にしげりて云々。高倉院升遐記曰、あしのすだれもなには江の、なにともしらせたまはず。身のかたみ曰、あしのほなみに風さえて。太上法皇御受戒記曰、草堂三間、用ニ蘆葦ニ爲ニ天井ニ、施ニ竹簀ニ爲ニ屏風ニ。東路のつと曰、武州成田下總守顯泰亭にして云々水郷之館のめぐり四方沼水幾重ともなく芦の霜がれ廿餘町四方へかけて。入蜀記曰、乾道六年九月一日、始テ入ㇾ沌ニ、實ニ江中小夾也、過ニ新潭ニ有ニ龍祠、兩岸皆葭葦彌望、謂ニ之ヲ百里荒ニ

○あしの花 枕草紙

【漢名】 蓬蕽 本草

證類本草曰、唐本注云、其花名ニ蓬蕽ニ、音農

【一名】 あしのおはな 假名文字遣　おはな 袖中抄曰、あしのほをもおばなといふ。按ニ白茅芒ノ穗、俱ニ同名也

はなかつみ 綺語抄曰、はなかつみとは、あしのはなをいふ。彫蓬ト同名

【集註】 昔語曰、多の夜のことさらさむきには、あしのほなみにかぜさえて

【形狀】 枕草紙曰、あしの花、さらに見どころなけれど、みてぐらなどいはれたる、心ばへあらんとおもふに、たゞならず、もえしもすゝきにはをとらねど、水のつらにて、おかしうこそあらめ

めと覺ゆ。仙覺萬葉集註釈卷第十三曰、みてぐらは、ならくとまどはるれば、ならといはんとて、みてぐらとをけり。春日社參記曰、わたくしのみてぐらなどさゝげて、宮めぐりし侍りし。和名抄曰、幣帛。和名美天久良　本朝無題詩曰、還咲蘆花千片白

○阿之乃禰　本草和名　漢名　蘆根　本草　今名　アシノネ

一名　安之乃禰　本草類編○本草和名曰、蘆根。和名阿之乃祢、萬葉集卷第七曰、葦根之、懃念而、結義之　蘆のしたね　藻塩草曰、玉之蘆のしたね

集註　狹衣曰、たゞよすれば、なびくあしのねとのみことくさになり給へるを　形狀　本草類編曰、蘆根。和安之乃祢、二三月根日干用之、无枝、花白作穗如竹長。清輔奧儀抄曰、あしのねは、とかくまがれるなり。又あしのねは、とかくわりなくさせるものなれば、あしのねの、わけてとよめるにやともきこゆ。仙覺萬葉集註釋卷第七曰、あしのねは、しばしゆきわかるゝ事あれども、そのむすぼゝれたる契り絕せずして、後つゐにはつねにゆきあふが云々

○阿之豆乃　倭名類聚鈔　漢名　蘆笋　本草　今名　ヨシノメ

證類本草曰、其笋味小苦、堪食、法如竹笋　一名　阿志乃豆乃　新撰字鏡○倭名鈔曰、玉篇云虇菼也、菼蘆之初生也、和名阿之豆乃。正字通曰、又平風謠衣如菼、註

炎ハ蘆之始生ッ也。本草綱目、時珍曰、短ニ小ニシテ於葦ヨリモ而中空ク皮厚色青蒼ナル者ハ菼也、亂也、荻也、萑也。夢溪補筆談曰、亂萑菼ハ荻也。即ヲギ此也

【集註】袖中抄曰、はる〳〵とあるあし原に、つのぐみわたりたるやうになん。伊勢紀行曰、みぎはにつのぐみたる芦なども見え侍り。撰集抄卷第七曰、碧玉の寒蘆のおひ出て侍れば、寶も錐の嚢を脱にたり

姫葦 尺素往來

【漢名】蒹 爾雅　【今名】スタレヨシ

【一名】いよす 枕草紙。中右記曰、白河院崩御、今夜新院着ニ御錫紵ヲ、是如ニ主上御錫紵ノ云云御裝束ノ色如シ凡人ノ重服ノ也、御所懸ニ伊与簾ヲ、又服御車被調御座縁色ノ縁云云殿上ノ簾同前。園太曆曰、御忌中条々。一御素服事、ふしかね染ヒキノリ、御帶同、御大帷若花色歟、又白歟、一是被ㇾ著所一二ケ間伊豫簀垂被ㇾ懸ㇾ之歟、此所疊端何樣候哉。明月記曰、建曆三年正月廿五日、云云懸ニ伊與簾ヲ以ㇾ紙上ㇾ之、以白革懸之。兵範記曰、久壽三年正月廿四日、院尊勝院陀羅尼供養也、北庇御前以白革懸伊與簾可被懸黑簾歟、伊与簾頗不審也。村上御記曰、天曆八年正月四日母公崩、今朝撤ニ蘇帶ヲ、御簾ヲ改ニ懸ク芦簾ヲ以ニ純色布ヲ爲ス端ト。二水記曰、蘆簾事。倚廬儀了還御本殿之後懸之、淸冷殿階間一間、朝餉二間、臺盤所妻戶間等以上四間懸之。但五間與御手洗間懸之云々 ヨシヲアム、ヘリアサギ色、糸同シ色也。アサ白也。神鳳抄曰、尾張國葦簾三枚、尾張國外宮葦簾三枚〇本草綱目、時珍曰、按毛萇詩疏云、葦之初生ヲ曰ㇾ葭ト、未ㇾ秀ヲ曰ㇾ蘆、長成ヘルヲ曰ㇾ葦、葦者偉大也。蘆者色盧黑也。葭者嘉美也

【集註】尺素往來曰、雜草木者蒹葭、木賊、姬葦

按ニ、蒹ハ即ヒメアシ也。本草綱目蘆ノ集解ニ、時珍曰、其最短小而中實者蒹也。簾也 枕草紙曰、にくきもの、いよすなどかけたるを、うちかづきて、さらくとならしたるも、いとにくし。台記別記曰、知足院禪閣七十賀云々伊豫簾。台記曰、久壽二年四月廿一日、隆長見物、其車上檜網代、檜寶左右縱緣內張青薄物・外空立捲、簾用伊與簾

形狀　枕草紙曰、いやしげなる物、いよすのすぢふとき

唐蘆　本朝無題詩　漢名　碧蘆　證類本草　今名　ウドノヨシ

證類本草曰、蘆。圖經曰、其ノ簳差ヤ大ニシテ深碧色者ヲ謂ニ碧蘆ト、亦難レシ用ヒ

集註　本朝無題詩卷第七曰、於ニ香椎ノ宮ニ賦スレ所ノ見之事ヲ。釋蓮禪。唐蘆岸古何春露。注古岸ニ有ニ蘆葦之叢ニ邑老語ニ云、古人殖ニ唐蘆之種ヲ、四時ニ不レ枯レ也

形狀　碧蘆ハ形狀蘆ノ如クニシテ大也、莖蘆ヨリ軟ニシテ綠色碧ヲ帶、葉亦蘆ヨリ微ニ厚シ、花ハ蘆ニ同。本草啓蒙曰、一種莖幹至テ粗大ナル者ヲ鵜殿ノヨシト云。攝州島上郡鵜殿邑ノ名產ナリ、莖ヲ用テ篳篥ノ簧シタニ作ル

○苗竹　本草綱目、時珍曰、苗竹一節尺餘、出ニ吳楚ニ　今名　タウヨシ　○廣東通志曰、海晏地名出ス蘆ヲ堪ヘリレ爲ニ拄杖ニ

集註　日本記略曰、弘仁六年冬十月庚子、安房國獻ニ蘆一枚ヲ、長各三丈、圍一尺

古毛コモ　倭名類聚鈔　漢名　菰蓬　爾雅　今名　マコモ

群芳譜曰、一種不レ結レ實、惟堪レ作レ薦、故爾雅云、齧雕蓬、薦黍蓬、即菰之不レ結レ實者

一名

許𦲷 日本書紀景行天皇御歌曰、異能知能、摩曾祁務比苦破、多多彌許𦲷。倭名鈔曰、唐韻云、薦席也。和名古毛

擧慕 日本書紀武烈天皇歌曰、伊須能箇彌、賦屢鳴須擬底、寫慕摩矩羅。釋日本書紀曰、私記云、師說、古以蔣爲レ枕。倭名鈔曰、陸詞切韻云、枕。承頭木也。和名萬久良。枕物之處去声。菰、一名蔣。和名古毛。辨色立成云、菰草、一云菰蔣草。日本書紀曰、伊勢蔣代野。爾雅曰、說文云、菰蔣也。證類本草、菰註曰、按蜀本圖經云、生二水中一、葉似二蔗荻一。倭名鈔國郡部曰、筑前國穗浪郡薦田、古毛多。萬葉集卷第十一曰、獨寢等、茭朽目八方、綾席〇仙覺萬葉集註釋卷第二曰、こもと云こと、苅てのちに、こもといふ。いまだからざるときをば、こもとはいはざるよし、書籍の中に見えたるところ也。薦字これをくさとよむ。みくさとはすゝき也云々。今哥に、水薦とかけるは假名なるべし

まこも 清輔袋草紙曰、さみだれはみづのみまきのまこもぐさかりほすひまもあらじとぞ思ふ。古今著聞集卷第二十曰、日くるればさそひし物をあかぬまのまこもがくれのひとりねぞうき

己毛 新撰字鏡曰、蔣。己毛

こも 枕草紙曰、哥の題は、こも

まこも 藻塩草曰、薦。まこも、まこも草とも

こま 藻塩草こもの事也

許母 萬葉集卷第十五曰、美夜故邊爾、由可牟船毛我、可里許母能、美太禮弖於毛布、許登都礙夜良牟。古事記曰、多多美許母

許毛 萬葉集卷第十五曰、可里許毛能、美太禮氏出見由、安麻能都里船

其母 萬葉集卷第十四曰、麻乎其母能云云。麻乎其母能、布能未知可久氏、安波奈敝波、於吉都麻可母能、奈氣伎曾安

十七日內匠寮トアルハ三十八日掃部寮ノ誤ナリ

程ノ上京本貞享本功字アリ

二尺雲州本一尺

我須流〇延喜式卷第十七日、內匠寮。䆃蔣食薦一枚。長六尺、廣三尺、料䆃蔣二尺、麻十三兩、長功半人、中功大半人、短功一人。頭書曰、玉篇䆃音除致反、尒雅稚也、方言䆃小也、說文幼木也、稚字也、或云、擇取蔣中子編作食薦云云。倭名鈔曰、漢語抄云、食單、須古毛。開封名勝志曰、鄭子產廟前有柏一株、陳根之上多生䆃葉、列秀青青、望之可愛。薦一枚。長三丈四尺、廣四尺、長功一人、中功一人少半、短功一人大半。薦一枚。長三尺、廣三尺、長功一人、中功一人少半、短功一人大半。草墊。高一尺三寸、徑一尺六寸、料蔣二圍、苧八兩、大長功一人大半、中功二人、短功二人半、草墊一枚。高八寸、徑一尺六寸、料蔣一圍大半、苧七兩、大長功一人少半、中功一人大半、短功二人、縫裏程臨時量定。倚子茵一枚。長二尺、廣一尺八寸、厚二寸、料小町席一條、長二尺四寸、廣二尺九寸、葉薦七尺、黃帛一條、長八尺、廣七寸五分、調布一條、長二尺一寸、廣一尺九寸、黃絲二銖、苧一兩、緋革一條、長四寸、廣二寸、細縄二丈、長功二枚、中功一枚大半、短功一枚小半。江家次第卷第十二日、齋王群行。齋王座南、御座小巽向鋪芻薦一枚。蔣圓座一枚。徑二尺五寸、厚五分、長功十五枚、中功十二枚半、短功十枚

集註 延喜式卷第二十三日、民部下。凡神祇官卜竹、及諸祭諸節等所須箸竹柏生蔣山藍等類、亦仰畿內令進。同卷第三十六日、主殿寮。供奉年料。云云御沐料蔣七十二圍。月別六圍。同卷第三十七日、典藥寮。凡五月五日進菖蒲生蔣、寮家充之黑木案四脚。同卷第三十八日、掃部寮。蔣沼一百九十町。在河內國茨田郡刈得蔣一千圍。同卷第三十九日、內膳司。粽料蔣六十束。右從三月十日迄五月三十日供料。五月五日節。青蔣十圍。出雲國風土記曰、嶋根郡蜛池生蔣。駿河國風土記曰、鷹河郡玉手池、出菰藺充國務。枕草紙曰、草はこも。公任卿集曰、玉つしまにまうでんとてあるに、みちおぼつかなしといふ

程に、かみひとだちたるもの、さきにつがうまつらんとていできたり、なりあひの松原よりゆけば、まこも草おひしげり、さはにこまのあるもおかし。小前張曰、こも枕やたかせのよどにやあひぞたがにえ人ぞしぎつきのぼる云々。愚案、高瀬のよどは河内國の名所也。まこものおほき所也。類聚雜要日、紸綱六帖内一帖帳 中敷云々 薦廿五枚、二帖同地敷薦各廿枚。高麗端疊三帖許、薦八枚

○古毛都乃（コモツノ） 本草和名 〔漢名〕 菰筍 本草

本草綱目、菰。集解、頌曰、春末生ニ白芽一ヲ如レシ筍ノ、卽菰菜也。又謂フ之ヲ茭白ト、生熟皆可レシ啖フ、甜美ナリ。其ノ中心如キ小兒臂ノ者ヲ名ク菰手ト、作ス菰首ト者非ナリ矣

倭名類聚鈔曰、菰首。和名古毛布豆呂、一云古毛豆乃。本草和名曰、菰首。和名古毛都乃

〔一名〕 古毛豆乃

古毛布豆呂 見上。伊勢國風土記曰、貞辨郡野間池、貢秤筍茭實等

こもの

こ 古今著聞集曰、左京大夫顯輔卿のもとに盃酌有けるに、たゝみめにこものこをさかなにしたりける云々。伊勢貞丈雜記曰、こものこは、まこもといふ草の芽と也。竹のことといふたぐいのことばなり。入蜀記曰、乾道六年九月十日、阻風雨遣ニ小舟ヲ横絕江ニ面リニ至テ對ス岸ニ、俄ニ有リ村翁一持テ菰葑一束ヲ來テ餉ス、不ニ肯テ受レ直ヲ

○古毛乃禰（コモノネ） 本草和名 〔漢名〕 菰根 本草 〔今名〕 コモノネ

いひなヲ刊本いへるなんニ作ル

東齋隨筆ハ群本トハ文ノ異同アリ

一名 己毛乃爾 本草類編○本草和名曰、菰根。和名古毛乃祢 集註 本草類編曰、菰根。和己毛乃祢、鷹生池中

漢名 雕蓬 爾雅　今名 ハナカツミ

栁河東集曰、香飯舂菰米、注菰艸名。廣雅云 蔣菰其米謂之雕胡、可炊以爲飯。群芳譜曰、雕胡米、一名茭米、一名雕蓬、生水中、葉如蒲葦有莖梗者謂之菰蔣、至秋結實、長寸許、霜後採、大如茅針、皮黑褐色、米白而滑膩、作飯香脆。證類本草曰、菰之有米者、長安人謂爲彫胡。

花勝見 萬葉集

一名 かつみ薦 藻鹽草曰、かつみ薦、奥州にかく云也と云々、又はかつみ草共いふ之。又曰、五月雨にあさ

澤沼の花かつみかつ見る
まゝにかくれぬるかな

かつみ 仙覺萬葉集註釋卷第十六曰、やらとは水つきて、かつみ芦やうの物など生しげりたるうき土也。俊頼髓腦抄曰、かつみといふはこもをいふなり。かやうの物も、所の名も、所に從てかわれば、みちの國にはこもを、かつみといひなめり。五月五日にも、人の家にあやめをばふかで、かつみふきとて、こもをふくなり。かの國には、むかしさうぶのなかりけるとぞうけ給はりしに、この比はあさかのぬまに、あやめをひかするはひがごとども申すべし。源氏物語かしは木曰、さやうにてみたてまつらんは、あはれ成なんかし、かつみつゝもことにふれて、心をかれ給はんが心ぐるしう云々

集註 東齋隨筆曰、寶方奥州にあるとき、奥州には菖蒲なきに水草はおなじ事とて、五月五日にかつみをふかせられけり。それより國のならひとなりて、かつみ

をふくといふ。東關紀行曰、しの原云々洲崎所々に入ちがひて、あし、かつみなどおひわたれる中に、をしかものうちむれてとびちがふさま、あしでをかけるやうなり。狹衣曰、花かつみかつ見るだにもあるものをあさかのぬまに水やたえなん。年ふともと思ふこゝろしふかければあさかのぬまに水は絶せじ。藻塩草曰、奧州に菖蒲をばふかず、こもをふく也。是をかつみふきと云也。昔はみちの國に菖蒲のなかりし故也。みちの國に、淺香のぬまにあり。又云、彼國信夫郡には、今年のこもをかりて、かりやを作りて、ふきはじめ、其後こもをかるとかや。袖中抄曰、能因が哥枕云、かつみとは、こもをいふ。こもはなを花かつみといふ。私云、故六條左京兆(ケイテウ)のまうされしは、橘為仲が任二肥後守一盛房が下向して、哥枕どものことまうしけるに、陸奧には菖蒲なし、五月五日には、かつみふきとて、こもをなむふくといひけるなり云々。童蒙抄云、あの國の風俗にて、かつみとは、こもをいふ也。むかし、あやめのなかりければ、五月五日には、かつみふきとて、こもをふく也。橘 為仲任にこもをふきければ、はらだちて、みをこなひてふかせける在廳のものおめしいだしてみれば、としおひかしらしろきものにてあり、いかでとしのみよりて、かゝることはせさするぞといましめければ、中將のみたちの御時、菖蒲やさぶらはざりけん、あさかのぬまのかつみをぞふくべきよしさぶらひければ、其後かく例になりて、つかまつるなり、といひければ、為仲はぢてひきいりにけり、とぞかたりつたへたる。されば實方の中將 時よりふくなるべし。私云、彼國にかつみふきと云事あなり、それは信夫(シノブ)郡に、今年のこもをかりて、みたちにかりやをつくりて、ふきはじむ。其後にこもかるとかや。五月五日の事にはあらず、それは菖蒲をぞふきはべるなる。是は宮内卿師綱朝臣の說也。陸奧司にて下向せ

る人也。饒ナル事歟、可シ信ズ之。このかつみふきを、ゝかしきさまにとりなして、盛房がかたりけるか。但かの中將は、みちのくのところ〴〵の哥枕みむために、中將にかへて任也。仍テ云ニ陸奥ノ中將ハ、さる心なれば、國中昌蒲なくば、あさかのぬまのかつみをふけ、ともまうされけん、任國のあひだ金吾(キンゴ)將軍か合戰出來て、國中散々云ゝ。又彼國にて逝去畢。綺語抄云、はなかつみとは、あしのはなをいふ。又こものはなをいふともいへり

今案　古今著聞集巻第十九曰、五月の比、圓位上人熊野へ參ける道の宿に、あやめをばふかで、かつみをふきたりけるを見てよみ侍りける。かつみふく熊野まうでのやどりをばこもくろめとぞいふべかりけるトミユレバ、かつみハマコモナル徵也。無名抄曰、五日かつみをふく事。ある人云、橘(たちばな)爲仲、みちのくにのかみにてくだりける時、五月五日いへごとにこもをふきければ、あやしくてこれをとふ、その時庄官云、この國には、むかしより今日さうぶふく事といふことをしらず、しかるを故中將の、みたちの御とき、けふはあやめふくものをたづねてふけと侍りければ、このくにゝは、しやうぶなきよしを申侍けり。その時、さらばあさかのぬまの、はながつみといふ物あらば、それをふけと侍しより、かくふきそめて侍なり、とぞいひける。中將のみたちといふは、さねかたのあそん之。ト此花勝見ハ、マコモナル明證也。弁内侍日記曰、五月五日あさかれゐに、かつみを參らせたるを、哥をそへて、とりてまいらせよ、と仰ごとありしに、あやめと思ひて侍れば、ひきたがへたるもおもしろくて、かつみおふるあさかの沼もまだしらで深くあやめと思ひける哉。都のつと曰、みちの國淺香の沼をすぐ、中將實方朝臣くだられけるに、此國には菖蒲のなかりければ、本文に水草をふくとあれば、いづれもおなじことゝ也とて、かつみにふ

きかへける、と申つたへ侍るに、寛治［堀河］七年郁芳門院の根合に、藤原孝善がうたに、［金］あやめぐさひくてもたゆくながきねのいかで淺香の沼におひけん。とよめるは、此國にもあやめのあるにやと、年月ふしんにおぼえしかば、此度人にたづねしに、當國にあやめのなきにはあらず、されどもかの中將の君くだり給ひし時、なにのあやめもしらぬしづが軒ばには、いかで都のおなじあやめをふくべきとて、かつみをふかせられけるより、これをふきつたへたる也」とかたり侍しかば、げにもさる一義も侍るにや

古名錄草部卷第二十二　終

古名錄草部卷第二十三目錄

水草類下

奈万井 澤瀉　久和井 慈姑
○於毛多加
久呂久和爲 烏芋　波知須 蓮○波那波知須荷花
○波泥孺
○白蓮　○蓮葉卽荷葉　○藕之浮葉藕荷
○波知須乃久木茄　○藕絲　○波知須乃祢藕
○波斐藕蔤　○波知須乃美蓮實　○一莖二花蓮雙頭蓮
○三莖蓮品字蓮　○あをきはちす靑蓮
奈木 雨久花　子水葱
比辭 菱　加波保祢 萍蓬草
片喰 蘋　奴那波 蓴
美都布々岐 芡　阿佐々 荇

ひるむしろ

通計二十七種

古名錄草部卷第二十三

紀藩　源　伴存撰

水草類　下

漢名　**澤瀉** 本草　今名　**サジオモダカ**

證類本草曰、圖經曰、澤瀉。生二汝南池澤一、春生レス苗ヲ、多ク在リ二淺水ノ中一ニ、葉似二牛舌一ニ、獨莖而長シ、秋時開キ二白花ヲ一作レス叢ヲ、似タリ二穀精草一

一名　**奈萬井** 倭名類聚鈔曰、澤寫。和名奈萬井

奈万井（ナマヰ） 新撰字鏡

奈末爲 本草和名曰、澤蕮。和名奈末爲

奈末伊 本草類編

集註　本草類編曰、澤瀉。和於毛大良、又奈末爲。五月六月採根陰乾。延喜式卷第三十七曰、典藥寮。遣二諸蕃使一。唐使、草藥五十九種。云云澤瀉各二斤。渤使、澤寫云云各一斤。諸國進年料雜藥。大和國、澤寫云云各四斤。近江國、澤瀉三斤。若狹國、澤寫六兩。出雲國、澤寫一斤二兩。美作國、澤寫一斤三兩。備前國澤寫十斤。備中國、澤寫一斤八兩。阿波國、澤寫云云各一斤。出雲國風土記曰、嶋根郡許意嶋、有松林茅澤瀉。駿河國風土記曰、烏渡郡鰕沢、貢沢瀉。益頭郡羽食溪、貢沢瀉。高柳貢沢瀉。鰕沢、貢沢瀉。

安弁郡曰沢、貢
沢瀉独活菱

【形状】頓医抄曰、澤瀉、極メテ小サキヲ好トス、大ナルハ悪也。又曰、澤瀉、イモノカシラヲアラハズシテ干タルニ似タリ○本草辨疑曰、澤瀉。唐アリ、和ニ二種アリ、越後ヨリ出ルハ輕虚ナリ。唐ト形ハ異ナレドモ輕虚ハ一同也。近年丹波ヨリ多ク作リテ出レ之、色白堅實ニシテ所見ヨシ、澤瀉ハ宿根春苗ヲ生ジテ、オモダカニ似テ莖圓扁、葉圓長ニシテ慈菰葉ニ似細長、縦道少シアリ、夏ニ至テ莖出ニ三尺、梢ニ白花ヲ開、三瓣ニシテオモダカノ花ニ似テ小也

【薬製】福田方曰、澤瀉。酒ニ浸シテ炙テ使ヘ。但ヒタサ子トモ使之。本方ニヨルベシ

久和井（クワヰ） 倭名類聚鈔

【漢名】慈姑 本草

【今名】クワキ

本草綱目、時珍曰、慈姑。一根歳ニ生ス十二子ヲ、如シ慈姑之乳スルカ諸子ニ、故ニ以名レ之。生ス淺水中ニ、人亦種レ之、三月生レ苗、青莖中空シ、其外有レ稜、葉如ニ燕尾ノ前尖リ後岐アリ、霜後葉枯根乃練結、冬及春初掘以爲レ果

【一名】久伊 本草類編○倭名鈔曰、烏芋。蘇敬本草注云、烏芋。生ス水中ニ、澤寫之類也。和名久和井。按ニ和漢古ハ慈姑ト烏芋トヲ混雑セリ。本草綱目 烏芋。正誤曰、別錄曰、烏芋、一名藉姑、二月生レ葉ヲ如レ芋。弘景曰、藉姑生ス水田中ニ、葉ニ有レ椏、狀チ如シ澤瀉ノ、不ニ正似レ芋、其根黃似ニ芋子ニ、而小。疑レ有ニ其、烏者ニ、根極相似テ、細ニシテ而美。恭曰、烏芋、一名槎了、一名茨菰。時珍曰、烏芋、慈姑原ト是レ二物、慈姑有レ葉其根散生、烏芋有レ莖無レ葉、其根下生ス、別錄誤テ以ニ藉姑ヲ爲ニ烏芋ニ、謂ニ其葉如レ芋、陶蘇二氏因テ鳧茨、慈姑字音相近キニ、遂ニ致ニ混註ヲ、而諸家說者因テレ之ニ不レ明ナラ、今正ニス其誤ヲ。觀レ此則和名鈔蘇恭ノ說ニ據テ誤リ、烏芋

ト慈姑ヲ混ズルモノ也。謠曲卒都婆小町ニ臂に懸たる籠には白黒の烏芋有ト云、慈姑ハ即白久和井也

［形狀］○慈姑ハ形狀オモダカニ似テ肥大、葉潤ク肥大也。大和本草曰、其子ハ根蔓ノ末ヨリ生ズ、舊本ハカレテ、母子ハノコリテ又來春生ス

○於毛多加　本草和名　○即慈姑ノ一種也　［今名］オモダカ

［一名］於毛太加　本草類編　於毛大良　本草類編曰、澤瀉、和於毛大良。源平盛衰記卷第卅七曰、越前三位通盛ハ紫地錦直垂ニ萠黄ニ澤瀉威タル鎧ニ。按古書誤テ澤瀉ヲ於毛多加トス、オモダカハ慈姑ノ一種瘦小キ者也　河なくさ　和歌深秘抄曰、河なぐさの事。たゞ河藻といへる人有、又おもだかと云草のよしいへり

［集註］枕草紙曰、おもだかも名のおかしき也。心あがりしけんとおもふに。平家物語卷第九曰、子息小次郎なを家は、おもだかを一しほすつたるひたゝれに

［形狀］○大和本草曰、ヲモダカ、葉ハヨク慈姑ニ似テ異リ、葉莖慈姑ヨリ小ナリ。葉セバク長ク、葉ノキレコミ長シ、五六月單白花ヲ開ク、三片アリ、根小ナリ。慈姑ノ如ナラズ。舊根ヨリ生ズ

久呂久和爲　本草和名　［漢名］烏芋　本草　［今名］クロクワヰ

本草綱目、烏芋。集解、時珍曰、生淺水田中、其苗三四月出土、一莖直上、無枝葉、狀如龍鬚、肥田ニ栽者粗近葱蒲、高二三尺、其根白蒻、秋後結顆大如山査子、而臍有聚毛、累累下生入泥底、野生者黑而小食之多滓、種出者紫而大、食之多毛、吳人以沃田種之、三月下種、霜后苗枯、冬春掘收爲果、生食煮食皆良

一名 そろゐ 藻塩草曰、そろゐ、むしろにするゐ歟。そろいかりほし、むしろうちといへり

○本草和名曰、烏芋。久呂久和爲

そろひ 堀河院百首曰、そろひ生る野沢のあれたうち返しいそける代はむろの種かも

くわい 藻塩草曰、烏芋。くわい

田烏子 假名文字遣曰、くはゐ、田烏子

今案 藤波家禮ニ、三クリノ公事ニ云皆川納家ヨリトリシト云。本草綱目曰、烏芋。釋名、黑三稜博濟方 地栗鄭樵通志 時珍曰、三稜地栗皆形似也。觀此則ミクリハ、黑三稜ニメ即烏芋(クロクワヰ)也

集註 武家調味故實曰、くわい人の間にいませ給べき物。くろくはゐ

形狀 ○大和本草曰、烏芋(クワイ)。今按、其莖オホヰニ似テ小也。燈心草ニ似テ大也。莖ノ內空シ。攝州河州ニ多シ。根ハ慈姑(クハイ)ニ似テ黑シ。果トシテ生ニテモ、煮テモ食ス。三四月苗生ズ、舊根カレズ、慈姑ノ如シ。花ナシ。按ニ花ノシト云ハ非也。夏秋莖ノ梢ニ花アリ、ツクシノ如ク細長也。本草啓蒙曰、烏芋。夏ニ至リ葉上ニ穗ヲ出ス、長サ一寸許 黑色ニメ白藥アリ、蘂(スゲノ)穗ニ似タリ、是花ナリ

波知須(ハチス) 倭名鈔

漢名 蓮 本草

今名 ハス

俊頼髓腦抄曰、はすを、はちすといふも、唯いふにあらず。はすのみの、はちといふむしのすににたれば、はちすといふ之。されば是は、はちすといはずとも、たゞはすとよみても有ぬべし。藻塩草曰、はちす、はちのすに似たるゆへと云、一說之と云々○本草綱目、蓮藕。集解、當之曰、荷高五六尺、葉圓ニ青大サ如レ扇、其ノ花紅

一名 波加知須 本草和名 婆知須

古事記曰、久佐迦延能(クサカヘノ)、伊理延能波知須(イリヒノハチス)、波那婆知須(ハナハチス)、微能(ミノ)佐加理用登(サカリヒト)、登母志岐呂加母(トモシキロカモ)。塵添壒囊鈔曰、荷。ハチス

つまなし草 藻塩草曰、つまなし草。池はちすの異名也

見草 藻塩草曰、かげうつす花やくもらんいけ見ぐさ波にかゝりて青葉見えつゝ。藏玉

露堪草 藻塩草曰、なびきつゝ花やさくらん露堪草青葉そうかぶさかぬさきには。藏玉

水堪草 藻塩草曰、花さかば波とや見えん水堪草庭もさみゝにみゆる此比。藏玉

集註 日本書紀舒明天皇曰、蓮。續日本紀卷第六曰、元明天皇和銅六年十一月丙子大倭國獻ニ嘉蓮ヲ。出雲國風土記曰 秋鹿郡惠曇池、自養老元年以往荷蕖自然叢生。天平二年以降自然至失都無莖。野府記曰 治安三年七月、西ノ池蓮生出タリ、逐レ日ヲ葉多ク出ヅ、從ニ北面ニ、其後東ノ池亦生出、少目西ノ池ニ不ニ生出一、且奇且ツ貴フ、西山小堂ノ西并ニ北方ニ有レ池、依テ可レ有ニ驗德一有ルニ此瑞應一歟 可キ隨喜ス事也。枕草紙曰、心ちよげなる物、池のはちすの村雨にあひたる。又曰、六月十よ日にてあつき事世にしらぬほどなり、いけのはちすを見やるのみぞすこしすゞしき心ちする

○波那婆知須 古事記　漢名　荷花 羣芳譜　今名　ハスノハナ

詩經類考曰、爾文云、未開曰菡萏、已發曰芙蓉、芙蓉花之號也、通謂之芙渠。羣芳譜、荷花註曰 花生池澤中最秀、凡物先華而後實、獨此華實齊生、百節疎通、萬竅玲瓏亭亭物表、出淤泥而不染、花中之君子也。漁隱叢話曰、許彥周詩話云、世間花卉無踰蓮花者、蓋諸花皆藉薫風暖日、獨蓮花得意於水月、其香清涼、雖荷葉無花時亦自香也。本草綱目、時珍曰、節生二莖、一為藕荷、其葉貼水、其下旁行生藕也。一為芰荷、其葉出水、其旁莖生花也。其葉清明後生、六七月開花、花有紅白粉紅三色、其花白者香、紅者艷。○薫集類抄曰 荷葉、擬荷香也。夏月殊施芬芳。山田尼。はちすの花のかとぞいふなる、沈八兩四分。甘松二朱。甲香三分二朱。白檀二朱。丁子二分四朱。麝香四朱　一名　藕花 尺素往來　れん　○通名也

くゐ　宇津保物語俊陰曰、れんぐゐの花その、をのが親の通ひ給所よりは、日の本の子とみれと花そのと聞は、佛の通ひ給んよりもたうとく云々　云蓮花の花そのよりと云人の有つれば云々日本の人蓮花の花そのより とて來れば

集註　萬葉集卷第十六曰、勝間田之、池者我知、蓮無、然言君之、鬚無如之。右或有人聞之。曰 新田部親王出遊于堵裡、御見勝間田之池、感緒御心中之還自彼池不忍憐愛、於時語婦人曰、今日遊行、見勝間田池、水影濤濤、蓮花灼灼、可憐斷腸不可得言、爾乃婦人作此戲歌專輒吟詠也。二水記曰、大永二年六月廿八日、親王御方北山鹿苑寺

有二御見物一池之蓮盛ナリ也。源氏物語すゞむし曰、夏ころはちすの花のさかりに。同まぼろし曰、いとあつき比 涼しきかたにてながめ給に、池のはちすのさかりなるを見給ふが。同かげろふ曰、はちすの花のさかりに、御八講せらる。雲圖抄曰、七月七日乞巧奠事云云、火舍蓮花茄棚大豆干鯛梨大角豆。春宮年中行事曰、七月七日きつかうてんの事云云奠物等蓮花トウダイニマウク已上チャウ　つれ〴〵曰 池には蓮。東大寺別當次第曰、長和三年六月十三日、巳剋大仏殿前庭蓮三莖生云云

【形狀】本朝無題詩曰、滿地蓮莊花新綻。又曰、環水芙蓉寂寞紅。應永廿五なぐさめ草曰、蓮の花みだれ咲てこのごろおもしろし。仙傳抄曰、れんげをたて候ときは、三世をたてべし。過去のかたちは、ちりはてたるはちすばかりたて、其わきよりやぶれたる葉をたてそへべし。現在のやうは、花ざかりにひらきたるをたて、葉のやぶれざるをたつべし。みらいの心は、はないまだひらかざるに、まき葉をたてそへべし。いづれも〳〵たかくひきくの心得有べし。又云、れんげは、きらざるさきに、かみえりにてゆひて、切くきに、ひの木のくぎをさすなり。源氏物語わかな曰、いけはいとすゞしげにて、はちすの花さきわたれるに、葉はいとあをやかにて、露きら〳〵と玉のやうにみえわたるを。四季物語曰、かきねにさける夏草の花よりも、なをもさゝやかなる、池といへど、にごりにしまぬはちすの花いけたるばかりこゝろも涓まぬ事はあらじかし

○波泥孺（ハネズ）日本書紀　【一名】蘘酢（ハチス）萬葉集　波禰受（ヘネズ）同上

【今案】日本書紀曰、朱蕐此ヲ云ニ波泥孺ト。事物異名錄、花卉部ニ、荷朱華。曹植詩朱蕐冐綠池。楊州畫舫錄ニ、湖田百頃遍植芙蕖朱華碧葉水天相映ト云。堀河院百首曰、紅にふかくも匂ふ蓮かな池の心やきよくすむらむ

獣木版本モカ、レド點ノ誤ナリ古寫本點トアリ

袖中抄曰、はねず色、顯昭云、はねずと云花の有にこそ、はす色と獸して蓮花かゝ申人侍れど、是をもはねず色と讀べき也。はねず色のうつろひやすきと讀る故也。はちすをばみな蓮とのみ書たる故也。言塵集曰、はす色うす紅梅色之。（天工開物曰、蓮紅、桃紅色。銀紅色、水紅色以上質亦紅花餅、一味淺深ノ分兩加減シテ而成。八雲御抄曰、はすいろはうつろひやすしといへり）萬葉集卷第八曰、大伴家持唐棣花歌一首。夏儲而、開有波禰受、久方乃、雨打零者、移香。高倉院升遐記曰、いけのはちすのなつひらけ。獸雲藁曰、池塘臨レ水ニ藕花香シ、盛夏披レ襟ヲ忘ル日長ヲ。花曆百詠ニ曰、水芙蓉映シレ日ニ夏蕤サク。物理小識ニ曰　藕夏前ニ花サク。致富全書曰、藕花開爲ニ水花魁ト、開クハ在レ夏前ニ、主ル水ヲト覩ユ。夏儲而、開有波禰受ト云此也。羣芳譜曰、芙蓉有ニ二種、出ヅル於水ニ者謂フ之ヲ草芙蓉ト、出ヅル於陸ニ者謂フ之ヲ木芙蓉ト、又名木蓮。樂天詩曰、水蓮開キ盡テ木蓮開クトハ謂レ此ヲ。唐棣ハ爾雅ニ曰、唐棣、移。疏、詩ノ召南ニ云ニ唐棣之華ハ、陸機ガ云、奧李也。一名雀梅、亦曰フ車下李ト所在山中ニ皆有リ。其華或ハ白或ハ赤シ、六月中ニ熟ス。（本草綱目、時珍曰　按爾雅唐棣常杕移唐倶郁李棣棣）移也。崔豹曰、移　江東ニ呼テ爲ス夫移ト、陸機以テ唐棣ヲ爲ル郁李ト者ハ誤レリ矣、郁李乃テ常棣非ル唐棣也　又郁李一名曰、棠棣　爾雅即叱テ或以テ唐棣ヲ誤レリ矣、唐棣乃杕移、即シデザクラ也ニ二月日岸ノ後ニ開レ花、四月ニ至テ花ナシ。袖中抄ニモ、今案庭櫻は春さく物也、夏まちてとよむは夏の初などにさく物にやト云リ。然則夏儲而開ト云ニ不レ合。蕤ハ子ズニ唐棣ノ字ヲ用ルハ誤也。日本書紀曰、天武天皇十四年六月淨位ヨリ已上並ニ著ス朱華ヲ。山堂肆考ニ曰、神仙服食經、漢武帝間ニ居ス未央殿ニ、有テ人乘ジ白雲車ニ駕シ白鹿ニ冠ス芙蓉冠ヲ。饒州名勝志曰　樂平縣東六十里、芙蓉山形如シ菡萏ノ、上合下開。正字通ニ曰、荷已ニ開ヲ曰　芙渠ハ得テ日光ヲ乃開敷ハ別ニ名ク芙蓉ト、離騷ニ製シテ芰荷ヲ以テ爲レ衣ノ兮、芙蓉以テ爲ス裳、反騷ニ衿ニ芰茄之綠衣ハ破ニル芙蓉之朱裳ヲ。萬葉集卷第十一日、山振之　爾保敝流妹之、翼酢色之、赤裳之爲形、夢所見管。

袖中抄曰、赤き色によれり。又波泥攝ノ泥ヲ知ト云ルハ、日本書紀註ニ、泥土此ヲ云ニ于毗尼ト。觀レ此則泥ヲ知ト讀可レ證()杪椤ハ山中ニ多シ、樹櫻ニ似タリ、葉モ櫻ニ似テ微細ク、背ニ微白茸毛アリ、二月葉間ニ花ヲ開、櫻花ノ大サニメ瓣細長ニメ外ニ翻ル白色也　冠位通考曰、持統紀淨位已上並着朱華、服色に朱紫などいふ、朱は紅花染の事なれば此波泥攝といふも紅花にて、火色といふものなるべし　○詞林采葉ニ木芙蓉ヲ、ハチズトス非也。フヨウハ秋咲、汝南圃史ニ水蓮花爲木蓮開白樂天詩ト云水蓮ハ夏ニ開證タリ

○白蓮　本朝無題詩　○和漢通名

集註　本朝無題詩曰、文池上白蓮開數　花史左編曰、白蓮花、白者香メ而結レ藕、紅者艶メ而結レ蓮

○蓮葉　類聚國史　○通名也

漢名　荷葉　本草綱目曰　花鏡、荷花註曰　葉圓ニメ如レ蓋而色青シ

今名　ハスノハ

一名　蓮荷　萬葉集卷第十三曰、劒池之、蓮葉爾、渟有水之、往方無云云

はすの立葉　堀河院百首曰、雨ふればはすの立葉にゐる玉のたえずこぼるゝ我涙かな。朗詠集曰　荷出ニ池心ヨリ小蓋疎ナリ

集註　延喜式卷第三十三曰、大膳下。七寺盂蘭盆供養料、荷葉二百枚。東宮荷葉二十枚。右青瓣荷葉、大和河內攝津等國所レ進。同卷第三十五曰、大炊寮。宴會ノ雜給ニ　其飯器參議已上並ニ朱漆ノ椀、五位以上葉椀、命婦三位以下蘭笥、加レ筥、五位以上命婦並陶椀、加レ盤、大歌立歌國栖笛工並ニ葉椀、五月五日青柏、七月廿五

日荷葉、餘節干柤。同卷第二十九日、內膳司。荷葉。稚葉七十五枚云云、並起五月中旬盡六月中旬。壯葉七十五枚、起六月下旬盡七月下旬。黃葉七十五枚、起八月上旬盡九月下旬。續日本紀卷第三十二曰、光仁天皇寶龜六年八月癸酉、始設蓮葉之宴。萬葉集卷第十六曰、詠荷葉歌。蓮葉者、如此許曾有物、意吉麻呂之家在物者、宇毛之葉爾有之。久堅之、雨毛落奴可、蓮荷爾、渟在水乃、玉爾似將有見。右歌一首傳云、有右兵衛多能歌作之藝也。于時府家備設酒食饗宴府官人等、於是饌食盛之皆用荷葉。諸人酒酣、歌舞駱驛。乃誘兵衛云、開其荷葉而作此歌者、登時應聲作斯歌。類聚國史曰、延曆十二年八月癸丑、翫蓮葉宴飲、奏樂賜祿。駿河國風土記曰、烏濱郡弁志田池、調葛根、荷葉云云。葛根、荷葉附典藥寮。鰐沢貢菱沢瀉独活荷葉、皿藥寮之料也。安弁郡白沢、貢荷葉。江家次第卷第八曰、七月十四日御盆事。次殿上侍臣以下取御盆物居之於長櫃上云云。以紙裹盆置西、以蓮葉裹盆置東、先白一具、次青、其後皆如此。御散飯調進次第曰、七月十四日はすの葉十まい。扶桑略記廿五曰、道賢上人冥途記云云、又有數十天童子、種々飲食盛大蓮葉。新撰萬葉集曰、夏之夜之露那駐會、藕葉之、誠之玉砥、成芝果祢者。夜露一種染萬藕

附方

產后ニ身腫治方 頓医抄曰、蓮葉ヲ煮テ可服

臂腫 水左記曰、承保四年閏十二月一日、從去廿七日左方臂腫、心神非例、仍爲加療治、不滿七箇日所歸向之。即令見雅忠朝臣之處、雖無殊畏可歷日者之由所示之。又云、煎冷柳蓮葉常可洗之

○藕之浮葉（ハスノウキバ）　萬葉集　【漢名】藕荷　本草　【今名】ハスノウキバ

本草綱目曰、荷葉嫩者荷錢象レ形貼レ水ニ者ハ、藕荷生レ藕ヲ者出レ水ヲ者ハ、芰荷生レ花ヲ者　【一名】蓮浮葉　本朝鬪諍集曰、置ニ蓮浮葉ニ露陵ニ紺青色ニ　【集註】紫式部集曰、人のもとより、蓮のうき葉に露をきて、蟬のしにたるをいれてをこせて。何事のうきぞうき葉にうつせみの泪を露と置てきえける。赤染葉ニモ出ル　新撰萬葉集曰　夏來者、藕之浮葉、老沼禮砥、後拆花緒、見裳過栖鉇。赤染衛門集曰、人のもとより、はすのうきばに露をきて。遠嶋百首曰、五月雨に池のみぎはやまさるらんはすのうきばをこゆる白浪　【形狀】枕草紙曰、はすのうき葉のらうたげにて、のどかにすめる池のをもてに、おほきなると、ちいさきと、ひろごりたゞよびてありくいとおかし、とりあげて、物をしつけなどしてみるも、よにいみじうおかし、又曰、うつくしきもの、はちすのうき葉の、いとちいさきを、池よりとりあげて見る。堀河院百首曰、水はしるはちすの浮葉のしづまぬは浦山しくもおひのぼる哉

○波知須乃久木（ハチスノクキ）　倭名類聚鈔　【漢名】茄　爾雅　【今名】ハスノクキ　【一名】波

爾雅曰、荷芙蕖。其莖ハ茄、其葉ハ蕸、其本ハ蔤、其華ハ菡萏、其實ハ蓮、其根ハ藕、其中ハ的、的中ハ薏○薏ハ蓮ノ實中心ニアリ、靑茅也〻本草綱目、時珍曰、薏ハ猶レ意ノ也。含レ苦ヲ在ル內也

知須乃久岐 天文寫本和名抄　荷乃久支 新撰字鏡

【集註】古今著聞集巻第二曰、近國の内に蓮（はす）のくきをもよほしめぐらすに、わづかに一兩日の程に、九十余駄出來にけり

○藕絲 太神宮袈裟記　○通名也

○太神宮袈裟記曰、藕絲袈裟作取之○倭名鈔曰、袈裟。東宮切韻ニ釋氏曰、袈裟ハ天竺語也、此ニ云フ無垢衣ト、又名ニ功德衣ト、孫愐カ曰、傳法衣卽沙門之服也。俗云介佐。涌幢小品曰、袈裟。秋林伐山云、袈裟名ク水田衣ト、又名ニ稻畦帔ト、王維詩乞飯從ニ香積ニ、裁衣學ニ水田ニ。王少伯詩手巾花氎淨香帔稻畦成ニ袈裟ト內典作ニ毠毟ニ、蓋シ西域以レ毛ヲ爲レ之、又名ニ消遙服ト、又名ニ無塵衣ト、然未レ及ニ袈裟之原ニ也。陳叢語ク象教皮編云、迦羅沙曳、僧衣也、省ニ羅曳ノ字ヲ止ノ稱ス迦沙ト、葛洪撰ス字苑ヲ添ニ衣ヲ作ニ袈裟ト或ハ從レ毛ニ作ニ毠毟ニ一名無垢衣、一名忍辱鎧、一名銷瘦衣、一名離塵衣、一名蓮花服、一名福田衣、一名水田衣、一名稻畦衣、一名消遙服、一名無塵衣、一名去穢衣、一名離染服、乃知ル袈裟之原始ル於迦羅沙曳ニ、至ニ葛洪ニ始テ加フル衣字ヲ也

【集註】榮花物語玉の臺曰、又はちすのいとをむらごのくみにして、九躰の御てよりとをして、中たいの御てにとぢめて、この御ねんじゆのところに、ひんがしざまにひかゝ給へり

○波知須乃禰 活板和名鈔　【漢名】藕 爾雅　【今名】ハスノネ

本草綱目、時珍曰、冬月ヨリ至レテ春ニ掘リ藕食レ之、藕白有レ孔有レ絲、大ナル者如ニ肱臂一長六七尺、凡五六節、大抵野生、及紅花者蓮多藕劣　種植及白花者蓮少藕佳也。詩經類考曰、廣雅、芙蓉、其根曰藕、陸機云、凡芙蓉行根如竹行鞭節、生一葉一花　花葉常偶生、又善耕泥引長、故謂之藕、藕生應月月生一節、遇閏則益一節。正字通曰、藕ハ常ニ偶生ス色白中有ニリ七竅一

〔一名〕蓮ノ若根　殿中申次記曰、七月九日蓮ノ若根一折云ト爲御生見玉參

荷根　肥前國風土記○通名也、活板和名鈔曰、藕。爾雅云、其根藕、音偶、和名波知須乃禰

〔集註〕駿河國風土記曰、烏渉郡絲沢出蓮根。常陸國風土記曰、香島郡郡家北、沼尾池、古老曰　神世自レ天流來水沼、所レ生蓮根、味氣大異、甘美絕ニ他所一之、有レ病者食ニ此沼蓮一早差驗之。延喜式卷第二十三曰、大膳下。正月最勝王經齋會供養料。荷藕ハスノネ半節。諸國貢進菓子。河內國、蓮根五百六十節。同卷第三十九曰、內膳司。稚藕十五條。起ニ六月下旬一盡ニ七月下旬一。稚藕十五條。起ニ八月上旬一盡ニ九月下旬一。右河內國所進、各隨ニ月限一隔ニ一日一供レ之。肥前國風土記曰、高來郡、土齒池、荷菱多生、秋七八月荷根甚甘、季秋九月　香味共變、不レ中レ用也。類聚雜要抄曰　宇治平等院御幸、御膳干物五坏云ト蓮根ハスノネ。文祿四年御成記曰、藕

○波斐ハヒ　延喜式　〔漢名〕藕○　本草綱目　〔今名〕ハヒネ

本草綱目、時珍ガ曰、蕅ハ乃チ嫩蒻如ニキ竹之行鞭一ノ者、節ニ生ニズ二莖ヲ一、一ハ爲レ葉ヲ、一ハ爲レ花ヲ、盡ル處ロ乃チ生スレ藕ヲ、爲ニ花葉根實之本一、顯シレ仁ヲ藏ハレ用ヲ、功成　不レ居　可レ謂　退藏ルト一于密ニ矣、故ニ謂ニ之ヲ蕅一ト

〔一名〕

天治本荷本也荷白莖トアリ

葯註疏本ハ的ニ作ル

波知須乃波伊 天文写本倭名鈔曰、蕸。爾雅ニ云、其ノ本ヲ曰レフ蕸ト。郭璞曰、莖下白蒻在泥中ニ者也。和名波知須乃波伊

波知須乃波比 倭名類聚鈔。

延喜式巻第三十九曰、内膳司。波斐四把半、並ニ起テ五月中旬ニ盡ルニ六月中旬ニ。

本草綱目曰 藕蔤。五六月嫩時采テ爲スニ蔬茹ト、老レハ則爲レ藕、稍味不レ堪矣

はすのはゐ 假名文字遣曰、はすのはひ、はゐ共、蔤

荷木乃白久支 新撰字鏡曰、蔤。荷本乃白久支。正字通曰、荷。一説ニ莖下白蒻在ルニ泥中ニ者曰蔤

集註 奧儀抄曰、蓮(はちす)には、はひと云ものあり、人のくふものなり

○波(ハ)知(チ)須(ス)乃(ノ)美(ミ) 本草類編

漢名 蓮實 本草綱目

今名 ハスノミ

廣群芳譜曰、爾雅、荷、芙蕖、其實蓮。註、謂房也。其中菂、註蓮中子也

一名 波加知須乃美 本草和名曰、藕實。和名波加知須乃美○倭名類聚鈔曰、蓮子、和名波知須乃美。證類本草曰、藕實、一名蓮、陶隱居云、此卽今蓮子

蓮乃實 新撰字鏡曰、菂、蓮乃實。正字通曰、子爲レ菂ト、本草綱目、時珍曰、菂者的也、子在テ房中ニ、點點トシテ如レ的ノ也。群芳譜曰、蓮房成レ菂、菂在レ房如レ蜂ノ子在レ窠

はすのみ 榮花物語衣の珠曰、はすのみをながくつらぬきたるさまにてもたせ給へり

集註 本草類編曰、藕實。和波知須乃美、八月採之

著聞集ノヿ下ニモ引ケルガ君もヲ君のトセリ°一本ハ若もトアリド

幷華共。延喜式卷第五日、齋宮。供新嘗料、蓮子云云各一升。同卷第三十三日、大膳下。七月二十五日節料。蓮子、參議已上五房、五位已上二房。同卷第三十九日、內膳司。新嘗祭供御料。云云蓮子各二升。供御月料。蓮子一斗五升七合五勺。云云蓮子二十房、起六月下旬盡七月下旬。蓮子二十房、起八月上旬盡九月下旬。右河內國所進。各隨月限隔一日供之。江家次第卷第八日、七月七日乞巧奠事。居朱彩華盤一口、在東、盛蓮房十房、五房歟。蜻蛉日記曰、女院はまだくらゐにおはしましおりは酒おこなはせ給ける、さしげものにはちすのすゝまいらせ給とて。慈惠遺告曰、念珠蓮子。著聞集曰、坊城殿の池の蓮の實を所望して送侍し返事に、老の身にねがふ蓮の花の實を君も千年の後や生れん　壬生二位。源平盛衰記曰、入だうは左の手に蓮の實のねんじゆをもち。源氏物語手習曰、君にもはすのみなどやうのものいだしたれば。古今著聞集十八日、同二品不食の所勞の比、はすのみばかりをしよくするよし聞て、坊城殿の池の蓮のみを所望してをくり侍し返事に、老の身にねがふはちすの花のみに君のちとせのちやむまれん。權中納言定賴卿集曰、尼上のはすのずゞを鼠のくひたるを見て、よめ

のこの蓮の玉をくひけるはつみうしなはんとやおもふらん

○一莖二花蓮 日本書紀

漢名　雙頭蓮

今案　花史左編曰、有雙頭ノ者、世人指以爲ス瑞ト。○雙頭蓮ニ二種アリ、眞珠船ニ、雙頭蓮、即合觀蓮、一名嘉蓮、一名同心蓮、自是一種、不足爲瑞ト云者天然其種也、今池中蓮ニ雙頭花開クバ、此變花スル者也。柳河東集爲玉京兆賀嘉蓮表曰云云出西內神龍寺前水渠內合歡蓮花圖一軸示百寮者

云云是使雙華擢秀蓮帶垂芳云云

【集註】日本書紀曰、舒明天皇七年秋七月乙未朔辛丑、饗百濟客於朝、是月、瑞蓮生於劍池、一莖二花。皇極天皇三年六月戊申、於劍池蓮中有一莖二萼者。續日本紀卷第三十四曰、光仁天皇寶龜八年六月戊戌、楊梅宮南池生蓮一莖二花。三代實錄卷第十八曰、清和天皇貞觀十二年秋七月九日己未、從四位下行伊勢守多治眞人占峯獻蓮一莖二花。中右記曰、大治四年七月七日、白河院崩御恠異、鳥羽殿池蓮一莖二花出來。山槐記曰、治承四年七月十六日、今日於法勝寺被行如說仁王會、去月廿一日同御寺池蓮一莖有二花。百練抄卷第四曰、長保元年七月十一日、太宰府言上一莖二花蓮開之由。同卷第六曰、大治四年七月三日、鳥羽殿池一莖二花蓮生。保延四年六月廿四日、勝光明院池有一莖二花嘉蓮。同卷第七曰、天養一年七月一日、法勝寺池一莖二花蓮、仁平三年八月二日、證金剛院池一莖二花蓮。同卷第八曰、治承四年六月廿一日法勝寺池一莖二花蓮生、寺家言上之、有御卜。同卷第九曰、養和元年六月廿六日、今日、法勝寺池一莖二花蓮開、有御祈事。帝王編年記曰、治承三年七月之比、法勝寺池一莖二蕊蓮花開敷、洛外洛中見者如堵、天下災殃前表何事如之哉、被召諸道勘文之処、毎事勘申不快之由云云可恐云云

○三莖蓮 東大寺別當次第

【漢名】品字蓮 花史左編

【集註】東大寺別當次第曰、長和三年六月十二日巳尅、大仏殿前庭蓮三莖生。陰陽寮占申云、刀兵火事若已未年

花史左編曰、三蓮者名品字蓮、花鏡曰、品字蓮、一蒂三花、開如品字、不結實

有病患
云云

○あをきはちす 榮花物語　漢名 青蓮 花史左編

花史左編曰、復有二青蓮一、以二蓮子一磨二去ッ頂上些少一、浸二靛缺中一、明年淸明取出種レ之、花開青色。南安名勝志曰、水西之管界都有二玉池坊一、池ニ産二青蓮一、其ノ蕋差小不レ結レ房、色如二碧玉一與二凡蓮一逈ニ異　集註　榮花物語曰、水におひたるはなは、あをきはちすのよにすぐれて、かにほひたるはなは、ならびなきがごとし。撰集抄曰、かたくちいさき蓮の實なりと云云さるほどに七日をへて云云此蓮の實二つにわれて、中よりちいさき有がたき青蓮花おひ出たり

奈木ナギ 倭名類聚鈔　漢名 雨久花 花鏡　今名 ミヅアフヒ

花鏡曰、雨久花。苗生二ス水中一、葉似二テ芘菰一、夏月開レ花、似二テ牽牛一而色深藍、亦水藻之不レ可カラレ少者　一名 水葱 延喜式 倭名抄曰、漢語抄云、水葱。奈木。萬葉集卷第十一曰、今曾水葱ナギ

少ス熱 奈支 新撰字鏡曰、荳𧄍二字、奈支　宇支奈支 新撰字鏡曰、荅。都合反、小豆。宇支奈支。廣群芳譜曰、赤小アヅキ豆。按、廣雅云、小豆荅也。統而名レ之也。然則荅赤小豆也

田奈支 本草類編 たなき 催馬楽曰、たなかのゐどに、ひかれるたなぎつめ、あこめたらりと云云。愚案抄曰、たなぎは、田にあるなぎと云菜なり

なき菜 言塵集曰、水草の中に、なぎ菜と云を事なし草と云と

奈疑 日本書紀天智天皇紀童謠曰、奈疑能母騰。新猿樂記曰、精進物者腐水葱

秋葱 日本書紀顯宗天皇紀曰、秋葱之轉雙納可思惟矣。釋日本紀曰、私記曰、師說、秋時ノ之葱不太古毛利尓生

奈岐 本草和名曰、蘇菜。和名奈岐○蘇菜ハコナギ也。太草綱目曰 蘇草。釋名蘇菜

なき草 言塵集曰 事無草水草になぎといふ藻之。なぎ草、なぎの木にはあらず○なぎの木は竹葉柏也

事無草 言塵集曰、事無草はなぎ草と云水草之ものしりたる老尼の申說之。按ニ瓦韋ト同名也

集註

延喜式卷第二十三曰、大膳下。七寺盂蘭盆供養料。云云水葱二圍。仁王經齋會供養料。云云水葱。漬菜料、以二一圍ヲ充二三十口ニ。云云干水葱貫云云各三勺。已上海菜料。同卷第三十九曰、內膳司、供奉雜菜。水葱四把、准二四升ニ、五六七八月。漬年料雜菜。水葱十石、料塩七升。右漬二秋菜一料。田六段二百三十四步、種二芹水葱一料、在二乙訓郡一。同卷第四十二曰、左京職。凡京中不レ聽レ營二水田ヲ。但大小路邊及卑濕之地聽レ殖二水葱芹蓮之類ヲ、不レ得下因レ此ニ廣ク溝迫ルコレ路ヲ上。萬葉集卷第十六曰、詠二酢醬蒜鯛水葱一歌。醬酢爾、蒜都伎合而、鯛願、吾ニ爾勿所見、水葱之羹物。宇治拾遺第二曰、京へ出る道に、西京になぎいとおほくおひたる所あり。此聖こうじて物いとほしかりければ、道すがら折て食ほどに、ぬしの男出きてみれば、いとたうとげなる聖の、かくすゞろに折くへば、あさましと思て、いかにかくはめすぞといふ。聖こうじてくるしきまゝにくふ

也と云時に、さらばまいりぬべくは、いますこしもめさまほしからんほどめせといへば、三十すぢばかりむずくと折くふ。このなぎは三町ばかりぞうへたりけるに、かくくへば、いとあさましくくはんやうも見まほしくて、めしつべくはいくらもめせといへば、あなたうとゝて、うちいざりくおりつゝ三町をさながらくひつ云々

【形狀】本草類編曰、蔛草。和奈支(ナギ)、似ㇾ澤瀉ニ花青白。按ニ蔛草ハ下ニ出ルコナギ也。雨久花(ナギ)ハ河邊濕地ニ多ク生ズ、春苗ヲ生ズ、長ゾ高サ一二尺、葉玉簪(ギボウシ)ニ似テ短ク厚ク、文理ナク、深綠、秋莖高サ三四尺、葉互ニ附、梢ニ穗ヲナシ六瓣深藍色ノ花ヲ開、大サ小錢ノ如シ、花後實ヲ結テ苗根枯ル

【種殖】延喜式、內膳司曰、耕種園圃。營水葱一段、苗二十圍、惣單功五十三人、耕地二遍把犁一人、馭牛一人、牛一頭、料理平和一人、糞百二十擔、運單功廿人、殖功十五人、五月播殖三度十五人、度別五人、採功十五人三度（延喜式三十九卷）

【附方】白クサノ治方　頓医抄曰、ナギノハヲツキテ、ウヘニヲシツケヨ

花深藍色

雨久(ナギ)花也



野茄菇花

或說ニ此ヲ蘚草(コナギ)トス非也コナギハ花葉莖ノ本ニ三五花着テ花莖如ク圖ノ不ニ延立也

子水葱（コナギ）萬葉集　［漢名］**蘈草** 本草　［今名］**コナギ**

證類本草曰、蘈草。味甘寒無毒、一名蘈菜生水傍。唐本注云、葉圓似澤瀉而小、花青白亦堪啖、所在有之。今按、別本注云、江南人用蒸魚食之甚甘美、五月六月採莖葉暴乾。按、雨久花ハ蘈草ハ一種ニメ草ニ大小アルノミ也。蘈草ヲナギトスル事古ク、本草類編ニ見エタリ○小ナギト云ハ雨久花ノ小ナルモノナレド、延喜式ニ小水葱ヲ雜菜ニ供スルヲ以テ觀レバ、コナギハ蘈草ナル事明也。雨久花ハ即水葱トテ雜菜ニ供ス、尤可徵也

［一名］**小水葱** 延喜式卷第三十九曰、內膳司。漬年料雜菜。糟漬小水葱一石、料塩一斗二升、汁糟五斗

古奈宜 萬葉集卷第十四曰、可美都氣努、伊可保乃奴麻爾、宇惠古奈宜、可久古非牟等夜、多爾物得米家武。

古奈伎 萬葉集卷第十四曰、奈波之呂乃、古奈伎我波奈乎、伎奴爾須里、奈流留麻爾末仁、安是可加奈思家。

こなき 堀河院百首曰、こなぎつむ沢田のしろはかきてけりいそぎて植よ室の早はせ。言塵集曰、こなぎ、田のつらの畔の上こなぎなどゝ讀り

［集註］萬葉集卷第三曰、春霞、春日里爾、殖子水葱、苗有跡云師、柄者指爾家牟。仙覺萬葉集注釋卷第三曰、殖子水葱と云は、その心ことなき也云々えはさしにけんとは、こなぎのなえなりしか共、今はほどへぬれば、枝さしぬらんとよそへよめるなり

比辭（ヒシ）日本書紀　［漢名］**蔆** 本草　［今名］**ヒシ**

而刊本ナシ

本草綱目、時珍曰、芰菱、有二湖濼一處則有レ之、有二野菱家菱一、皆三月生レ蔓延引ス、葉浮二水上一、一莖一葉、兩兩相差、而如二蝶翅狀一、五六月開二小白花一、背レ日而生、晝合シ宵炕ス、隨レ月轉移ス、其實有二數種一、或三角四角、或兩角無角、野菱自生二湖中一、葉實俱小、其角硬直刺レ人、其色嫩青老黑、嫩キ時剝食、甘美ナリ、老レハ則蒸煮二食レ之

一名

比之 倭名類聚鈔曰、菱子。和名比之。日本書紀應神天皇 大鷦鷯尊御歌曰云云、委愚比菟區、伽破摩多曳能、比辭餓羅能、佐辭羅區辭羅珥。本草和名曰、芰實。和名比之。倭名鈔國郡部曰、陸奧國亘理郡菱沼、比之奴萬

比志 新撰字鏡曰、芰、比志。蔆、比志。蔆蔆二作、青道反、水菜。蔆、比志。菱、比支

比支 字鏡曰、菱。比支

ひし 枕草紙曰、おそろしきもの、ひし

比比斯 古事記曰、比比斯那須

集註

延喜式卷第五曰、齋宮。供新嘗料。云云菱子各五升。同卷第三十三曰、大膳下。九月九日節料。菱子、參議已上八合、五位已上六合。同節文人料 菱六合。諸國貢進菓子。丹波國、菱子二捧。同卷第三十九曰、內膳司。六月神今食料、十二月准レ此。云云菱子各二升。十二月以二橘子一代二菱子一。新嘗祭供御料。云云菱子各四升。右夜料。菱子蓮子各二升。右解齋料。云云菱子二升云云。正月三節 菱子三升。供御月料。云云菱子各二斗二升五合。萬葉集卷第七曰、君爲メ、浮沼(ウキヌ)池、菱(ヒシ)採、我染シ袖、沾在哉(ヌレニケルカナ)。伊勢國風土記曰、員辨郡野間池貢云云菱等。駿河國風土記曰、烏渡郡蝦沢貢菱。伊穗原郡鬫沢出独活荷葉菱實芹菜。谷頭郡沢食貢菱豆等。海道記曰、菱 浮葉に浪はかくれども、難面かはづはさはぐけもなし。藤谷殿集曰、植物百首に、菱、ふなばたをたゝくもさびし雲の間に菱とる船や江に歸るらん。類聚雜要抄曰、平大饗目錄。菓子。梨子、棗 栗、菱。人車記曰、保元二

年八月在任大臣事、次折敷菓子四種　梨子栗菱淡柿

【形狀】本草類編曰、芰實。和比之。葉浮水上、花黄白色、有二種、一種四角、一種兩角。釋日本紀曰、比辞餓羅能、菱柄也。佐辞雞區、謂莠也。私記曰、菱有角天人平左須、如江菱之指人乎〇本草啓蒙曰、其莖フクレテ蝦蟇ノ股ノ如シ、夏花ヲ開キ實ヲ結ブ、淩葉ハ蝶翅ニ似テ大小相雜リ、綠色頭ニ齒アリ

加波保禰　倭名類聚鈔

【漢名】骨蓬　本草　【今名】カウホネ

本草綱目、萍蓬草。集解、藏器曰、萍蓬草、生南方池澤、葉大如荇、花亦黄、未開時狀如算袋、其根如藕、飢年可以當穀。時珍曰、萍蓬草、卽今水栗也。水栗三月出水、莖大如指、葉似荇葉而大徑四五寸、初生如荷葉、六七月開黄花、結實、狀如角黍、長二寸許、內有細子一包、如罌粟

【一名】莉根　延喜式卷第三十三日、大膳下。正月最勝王經齋會供養料。莉根一節〇本草和名曰、骨蓬。和名加波保

河骨　頓醫抄　川骨　類聚雜要抄曰、宇治平等院御幸御膳、干物五坏云云、川骨〇證類本草曰、萍蓬草根味甘無毒、主補虛益氣力、久食不飢、厚腸胃、根如藕飢年當穀也

【集註】延喜式卷第三十三日、大膳下。仁王經齋會供養料。莉根一節、節長二尺、好物料。仙傳抄曰、からほねは、人をてうぶくする時のはな也。祝言におほきにいむなり。台記別記曰、久安三年知足院禪閤七十賀用途、一机、盛累物四坏。沉一坏爲河骨代、桂心一坏、爲引干代、丁子一坏、爲土筆代、鬱金一坏、爲筝代

【形狀】〇大和本草曰、萍蓬、草葉ハ芋ニ似

テ厚ク光アリ、莖ツヨク水上ニタチノボル、葉モ花モ水面ニウカバズ、根大ナリ。夏月黄花ヲ開キ、秋ノ末マデアリ。一莖開ニ一花ヲ、萍蓬草(カウホネ)ノ花ハ毛茛花(キンポウゲ)ニ似テ、大ニメ厚ク光アリ、根ハ肱ノ如ク白色ニメ臼アリテ凸凹太キ鬚根アリ

片喰(カタバミ) 類聚雜要抄

漢名 蘋 本草

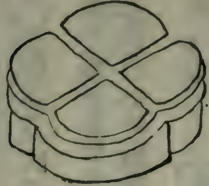
今名 ヨツバウキクサ

田字(デンジ)草(サウ) 和漢通名

本草綱目、時珍曰、蘋。其ノ草四葉相合シ、中ニ折シテ十字ヲ、故ニ俗ニ呼テ爲ニ四葉菜、田字草、破銅錢ト、皆ナ象ル形ニ也。又曰、蘋ハ乃チ四葉菜也、葉浮ニ水面ニ根連ル水底ニ、其莖細シテ於蓴莕ヨリ、其ノ葉大サ如シ指頂ノ、面靑ク背紫ニメ有ニ細紋ハ、頗ル似リ馬蹄決明之葉ニ、四葉合成中ニ折シテ十字ヲ夏秋開シテ小白花ヲ

一名 かたはみ 枕草紙

集註 枕草紙曰、かたばみ、あやのもんにても、こともの よりはおかし



類聚雜要抄片喰圖

今案 類聚雜要抄曰、唐櫛笥ノ上莒納。二合、一合面志莒云。一合口脂莒云。銀中四兩。打料各十疋。堺料各十疋。長二寸、弘一寸五分、深七分。長呂ナル片喰形也、銀也トミユレバ、枕草紙ニ出ルかたばみハ蘋ナルコ明也。今四条家ノ紋ニ藻ニカツミト云ハ即かたばみヲ誤リ云ル也。又世俗花アヤメノ一種、花瓣テ六瓣ナルヲハナカツミト云ハ後人ノ杜撰不レ足レ取也。ハナカツミハコモノ實ヲ結ブモノニメ雕蓬也。上ニ證アリ

形状 〇本草啓蒙曰、蘋ヨツ

絲ノ下尊ノ字脫カ

バカタバミモ池澤田中ニ生ズ、根ハ蔓ノ如ク、泥中ニ長ク延ブ、春葉ヲ生ズ、大サ一寸許、小葉四片、一莖ニ合成ス、酢漿(カタバミ)草葉ノ如ク、田ノ字ノ形ニ似タリ、ソノ質銀杏(イチヤウ)葉ノ如シ、夏花ヲ開ク、四瓣ナリ、蘋ハ水蓬ノモノ、莖長ク、根ハ水底ニアリ、葉ハ水面ニ浮ビ、類聚雜要抄片喰ノ如シ、陸生ノモノハ莖高サ二三寸

奴(ヌ)那(ナ)波(ハ) 日本書紀 ［漢名］ 蓴 本草 蓴菜也

本草綱目、時珍曰、蓴生ニス南方湖澤中ニ、惟タ吳越人善ク食レ之、葉如ニノ荇菜ニ而差圓、形似ニ馬蹄ニ、其ノ莖紫色、大サ如レ筯ノ、柔滑可レ羹、夏月開ニ黃花ニ結レ實靑紫色、大如ニシ棠梨ノ、中ニ有ニ細子ニ、春夏嫩莖未レ葉者名ニ稚蓴ニ、稚者小也、葉稍舒長者名ニ絲蓴ニ、其莖如レ絲也、至レ秋老、則名ニク葵蓴ニ

［一名］ 怒那波 古事記曰、怒那波久理　沼奈波 倭名類聚鈔曰、蓴。和名沼奈波。日本書紀神應天皇大鷦鷯尊御報歌曰、瀰豆多摩蘆、豫佐瀰能伊戒珥、奴那波區利

奴奈波 本草類編曰、蓴。和奴奈波、三四月至七月八月、通名絲、霜降已後至十二月名瑰蓴。新撰字鏡曰、蓴。奴奈波

奈女奴奈波 新撰字鏡曰、莚。奈女奴奈波　浮蓴 萬葉集卷第七曰、吾情(ワガコヽロ)湯谷絕(ユツニワヘ)谷、浮蓴(ウキヌナハ)、邊毛奧毛(ヘニモオキニモ)、依勝益士(ヨリカテマシヲ)　宇支奴奈波 新撰字鏡〇言塵集曰、根ぬなは、うきぬなは同物也。蓴の字之。假名文字遣曰、ぬなは、蓴、うき草之

根蓴 延喜式卷第三十三曰、大膳下。正月最勝王經齋會供養料。根蓴二把。仁王經齋會供養料。根蓴一把、漬

菜料。藻塩草曰、ね蓴、根蓴也。又曰、ぬまのねぬなはふみしだき狹衣曰、われも又ますだの池のうきぬなはひとすぢにやはくるしかりける。堀河院百首曰、紫の色にぞまさる杜若池のぬなはのはひかゝりつゝ

集註　蕙集類抄曰、造沉香法云云蓴汁二升五合、蓴汁搗絞取之。應永廿五なぐさめ草曰、ぬなわひろごれる池、北にめぐり。

形狀　言塵集曰、詩に作りたるは水草のつるの事之。葉丸くて、蓮の葉のちいさきごとく也。花しろくさきてくき長きなり。じゆんさいと云もの歟。又曰、ぬなはは池沼等に有、是も如繩之。又曰、ぬなは蓴此一字也。うき草也。三月より七八月まであり。藻塩草曰、蓴、自三月至十月まである草之。釋日本紀曰、奴那波、蓴也。有レ池之草也。區利破陪鷄區、縿絙也。私記曰、師說蓴ハ自二水下一波比保止己留ナリ。如二池蓴一之絙一懸二于井杭一〇多田義俊ガ奴奈波草紙曰、おもてを賣る蓴菜(ヌナハ)よばせて見しに、多く竹の棹にかけて錢五ッ六ッにはおびたゞしくかへたり。京あたりにはまれにして、淀伏見にたづね求る事なるに、今尾張に住てぞかく澤山(たくさん)なるものとは初て知れり。大和本草曰、蓴、倭名ヌナハ、沼ノ中ニ生ジ莖長クメ繩ニ似タリ、故沼繩(ヌナハ)ト云意ナルベシ、嵯峩ノ大澤池、伏見宇治ノ池沼又諸州ノ池中ニ多シ、今ノ俗ハ蓴ヲ稱シテ蓴菜(シュンサイ)ト云、是亦菜ナリ、可レ食。葉ハ荇菜(アサヽ)睡蓮(ヒツヂグサ)ニ似テ少長ク不レ缺ケ、是ヲ以爲レ異ト、葉ハ水上ニ浮ベリ、莖ノメグリニ冰ノ如ナル物アリ、是ヲ賞トス。煮テ羹トシ、或酢味噌ニテ食フ、三月ヨリ八月ニ至テ冰多シ、軟カニメ甜シ、九月ヨリ十二月ニ至テ硬クメ味苦シ

美都布々岐(ミツフブキ)　本草和名

漢名　茨　本草

今名　オニバス

盬刊本欄ニ作ル

證類本草曰、雞頭實、一名芡。按、蜀本圖經云、此生ス水中ニ、葉大サ如レ荷、皺而有レ刺、花子若ニ拳大ノ、形似ニ雞頭ニ、實若シ石榴ノ、皮青黑、肉白、如ニ菱米ニ也。本草綱目、時珍曰、芡莖三月生、葉貼レ水、大ナリ于荷葉ニリ、皺文如レ縠、蹙衄如レ沸、面青背紫ナリ、莖葉皆有レ刺、其莖長至ニル丈餘ニ、中亦有レ孔有レ絲 嫩者剝テレ皮可レ食、五六月生ス紫花ヲ、花開向レ日結レ苞外有ニ青刺ニ、如ニ蝟刺及栗毬之形ニ、花在ニ苞頂ニ、亦如ニ雞喙及蝟喙ニ、剝開内有ニ斑駁軟肉ニ、裹レ子累累トシテ如ニ珠璣ノ、殻内白米狀如ニ魚目ノ、深秋老時澤農廣收、●盬ニ取ニ芡子ニ云云

【一名】三豆布々木 倭名類聚鈔曰、芡、和名三豆布々木

美豆布々岐 天文写本和名抄〇本草和名曰、鷄頭實。和名美都布々岐乃美

美川不支 本草類編

水不々支 新撰字鏡曰、芡。水不々支

水ぶき 枕草紙曰、おそろしきもの、水ぶき。見るにことなき物の、もじにかきて、ことごとしきもの、水ぶき

みつふき 藻塩草曰、鷄頭實。みつぶき

【集註】延喜式卷第五日、齋宮。芡桒十闐尾張。同卷第三十七日、典藥寮。諸國進年料雜藥。阿波國、鷄頭子五升。同卷第三十九日、内膳司。漬年料雜菜。芡一石五斗、料塩一斗五升、米七升五合

【形狀】本草類編曰、鷄頭實。和美川不支、八月採之、有刺、花下結實〇大和本草曰、芡實ヲニバス、葉ハ蓮ニ似テ大ニシテ、葉水上ニウカブ、皺シハアリ、ハリアリ、實ハ莖上ニアリ、苞ノ形鷄頭ノ如シ、苞アリテツ、メリ、マルシ、芡花ハ刺苞ノ上ニ鴨嘴アヒルノ形ヲナシ濃紫、花六七月ニ盛也、日中ニ開夕ニ萎ム、四瓣内紫色ニシテ外深綠色

阿佐々 倭名類聚鈔 【漢名】莕菜 本草 【今名】アサヽ

證類本草曰、圖經曰、鳧葵莕菜也、生ニ水中ニ、今處處池澤皆ナ有レ之、葉似テ蓴ニ莖澁ル、根甚長、花黃色、水中極繁盛、謹按、爾雅莕謂ニ之ヲ接余ニ、其葉謂ニ之ヲ苻ニ、郭璞以爲叢生ニ水中ニ、葉圓在ニ莖端ニ、長短隨フ水ノ深淺ニ、江東人食レ之、詩周南所謂參差荇菜是也、陸機云、白莖、葉紫赤色、正圓徑寸餘 浮テ在ニ水上ニ、根在ニ水底ニ、大サ如ニ釵股ニ、上靑下白、鬻ニ其白莖ヲ、以ニテ苦酒ヲ浸、肥美ニシテ可レ按レ酒、今人不レ食。函史編曰、荇ハ接余葉初メ卷漸ク開隨ニ高低ニ浮ツ水上ニ、花六出ツ水黃色ニ

【一名】安佐ゝ 本草類編 淺沙 藻塩草曰、淺沙。見れば又あさゞおふてふ澤水はそこの心のねをぞあらはぬ。おもふ事そこにかゝらぬうきねより心あさゞのさてぞおひける。池水におふてふ草のあさゞのみうきはならひとぬるゝ袖かな。水まさるぬまのあさゞのうきてのみ有はある共なきわが身かな。君といへばあさゞのぬまの池水にうき〳〵とのみなる心かな。倭名抄曰、荇。和名阿佐々〇日本書紀曰、頃者於止屋淵ニ多ク生レ萎。正字通曰、萎。即渉切、音接。爾雅、莕接余、註、莕荇同、即荇別名。說文作接餘、王安石作萎餘、舊註莕萎水艸不知、接余與莕一物二名也

【集註】本草類編曰、鳧葵。和安佐々、不拘時節

【形狀】〇大和本草曰、アサヽ池沼ノ中ニ生ズ、葉モ花モ萍蓬カハホネ草ニ似テ別ナリ、アサヽハ莖カウホネヨリ長ク、水中ニ橫タハリテヨハク、葉ハ水面ニウカビ、水上ニ不レ上、花ノ形色ハカウホネニ似タリ、五六月水面ニ黃花ヲヒラク。本草啓蒙曰、莕菜池澤中ニ生ズ、葉ハ水面ニ浮ビ、根ハ水底ニアリ、故ニ莖長短ハ水ノ淺深ニ從フ、

莖ハ細シ、葉ハ楕（タ）ニシテ蓴菜（シユンサイ）ノ如ニシテ小ク、一方缺アリ、面ハ綠色、背ハ紫色、周邊ニ雲頭齒アリ、夏月花ヲ水上ニ開ク、太サ錢ノ如シ、五瓣黃色ナリ、按ニ花ハ小蓮ノ如ク黃色葩末尖ル、葉蓴菜ノ如ニシテ小シト云ハ非也。本草時珍ノ說ニモ、莕與レ蓴一類二物也。其葉似ニ馬蹄ニ而圓者蓴也。葉似レ蓴而微シ尖リ長キ者莕也ト云リ、圓ト云ハ葉ニ切レ無キヲ云者也

ひるむしろ　枕草紙　［漢名］　［今名］　ヒルモ

按ニ與蛇床子同名異物也。蛇床ハ濕草本條ハ水產也。俱ニヒルムシロノ名アルヲ以テ混ゼリ。本草和名ニ蛇床子、和名比留牟之呂（ヒルムシロ）。一名波末世利（ハマセリ）ト云、卽波末世利（ハマセリ）ニ比留牟之呂（ヒルムシロ）ノ名アル可レ證矣（蛇床）

［一名］　繼子草　藻塩草曰、繼子草、ひるむしろ　ヒル席（ムシロ）　頓医抄

［今案］　大和本草曰、眼子菜（ヒルムシロ）。倭名ヒルムシロト云、水中ニ生ズ、莖長ク水中ニ蔓延ス、水上ニノボラズ、葉ノウラ紫色也。水面ニ葉ウカブ、葉ニ筋アリ、光アリ、俗說ニ陰干ニシテ爲レ末服ス、治ニ傷食霍亂ニ甚有効、煎服スルモ亦可ナリト云、本草啓蒙曰、ヒルムシロハ救荒野譜ニ載ルトコロノ眼子菜ノ一種ナリ

農政全書所レ載

救荒野譜

眼子菜圖

眼子菜如ニ張目一云云
生ニ水澤中一青葉背
紫色莖柔滑而細長
可ニ數尺一



古名錄草部卷第二十三　終

日本古典全集之内
古名錄 二
編纂者 正宗敦夫
發行者 東京市豐島區長崎東町三丁目一六一
合資會社 日本古典全集刊行會
代表社員 長嶋東一
印刷者 東京市豐島區長崎東町三丁目一五八
不二製版印刷所 高瀨淸吉
發行所 東京市豐島區長崎東町三丁目一六一
合資會社 日本古典全集刊行會
振替東京七三〇三二
昭和九年十月八日印刷
昭和九年十月十五日發行
【非賣品】